

－嘉瀬川ダム建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 6 －

東畠瀬遺跡 3

東畠瀬遺跡 6 G・7・9 区



平成 23 (2011) 年 3 月

佐賀県教育委員会

—嘉瀬川ダム建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 6 —

東畠瀬遺跡 3

東畠瀬遺跡 6 G・7・9 区

平成 23 (2011) 年 3 月

佐賀県教育委員会

序

本書は、国土交通省九州地方整備局による嘉瀬川ダム建設事業に伴い、佐賀県教育委員会が実施している埋蔵文化財発掘調査の記録をまとめたものです。

今回の報告は東畠瀬遺跡に関するもので、近世の寺院跡と墓地、集落跡等を調査しました。このうち、戦国武将神代勝利の菩提寺である宗源院跡とそれに付随する墓地では、宗源院の創建に関する遺跡や多くの近世人骨が出土しており、この地域の江戸時代の様相を知る上で貴重な調査例となりました。

本書が学術文化の向上に幾分なりとも寄与し、併せて地域の歴史を学ぶ資料のひとつとして生涯教育や学校教育の場で活用されるものになれば幸いに存じます。

発刊にあたり、埋蔵文化財の保護に深い御理解と多大な御協力を賜った国土交通省嘉瀬川ダム工事事務所並びに関係各位に対し衷心より厚くお礼申し上げ、御挨拶いたします。

平成 23 年 3 月

佐賀県教育委員会
教育長 川崎俊広

例　言

- 1 本書は、嘉瀬川ダム建設事業に伴い佐賀県教育委員会が平成 16・17・20・21 年度に実施した佐賀市富士町所在の東烟瀬遺跡 6G・7・9 区の発掘調査報告書で、嘉瀬川ダム建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書の第 6 冊である。
- 2 発掘調査は、佐賀県教育委員会が主体となり、国土交通省九州地方整備局嘉瀬川ダム工事事務所の委託を受けて実施した。
- 3 発掘調査にあたっては、国土交通省九州地方整備局嘉瀬川ダム工事事務所、佐賀県土木部ダム対策課・河川砂防課ダム対策室（現・佐賀県土づくり本部水資源対策課）、富士町教育委員会（現・佐賀市教育委員会）、富士町ダム対策課（現・佐賀市富士支所嘉瀬川ダム対策課）、並びに地元各位の協力を得た。
- 4 本書の表紙と写真図版の一部に用いた平成 4 年撮影の航空写真は、嘉瀬川ダム工事事務所から提供を受けた。
- 5 本書での遺跡名については発掘調査当時のものを使用したが、平成 22 年 3 月作成の佐賀県遺跡地図では、東烟瀬遺跡 6G・9 区が宗源院跡となっている。
- 6 東烟瀬遺跡 6G・7・9 区の現地調査から報告書作成までの作業に従事したものは下記のとおりである。

発掘作業：姉川妙子	内田英子	姫野サツキ	岡本和子	岡本君子	小川千代恵
貝野啓子	嘉村ヒトミ	嘉村未人	坂口伸己	坂口久江	佐保マリ子
重田正子	下津浦理恵	庄島信子	園田公子	時松紗喜子	中島鶴美
中田政信	中原春己	納富弘子	東川福代	藤田一雄	豆田正秀
丸山民江	無津呂明子	森ミカノ	吉原俊輔	吉原文代	吉原松美
吉原美智子	吉原幹夫	糸山禎一	岩熊素子	内川さつき	姫野みづ代
遠藤啓輔	大谷節子	川崎恵美子	川崎はづえ	川原トシ子	北島裕司
坂井和子	坂井義人	實松政秀	澤田健吉	杉原茂子	重松敏行
進藤睦美	高木俊治	千綿一夫	千綿伸義	野田恵美子	真崎政嗣
丸内隆康	三角憲一郎	光武宣子	藤井千枝子	古川 繁	杠 義臣
横尾和夫	新井英雄	荒木聖剛	井手口 昇	江口敏郎	江崎 章
柿本由紀子	古賀芳子	幸山 巖	末次貞亮	副島正義	下川利信
下村静雄	竹下政征	長 清一	鶴丸仁之	長倉眞美子	中山隼人
野口節子	野中賢之	野中静枝	松藤孝幸	諸角敏子	山口道雄
山口裕二	山口榮次	吉岡泰士	吉成哲夫		
遺構実測：市田佳奈子	内田真一郎	姫野サツキ	姫野みづ代	柿本由紀子	渋谷 格
白木原 宜	田中良輔	時松紗喜子	長倉眞美子	野田美恵子	吉田大輔
(株)埋蔵文化財サポートシステム					

遺構写真撮影：市田佳奈子　今泉好孝　内田真一郎　加藤昌郎　渋谷 格

白木原 宜　田中良輔　吉田大輔

遺跡空中写真撮影：(有)空中写真企画

遺物整理：植木玲子　坂本明子　佐保敦子　重田正子　柴村悦子　谷澤裕美
堀田香澄　松尾三枝子

遺物実測：江副朋子　大串早苗　境 靖紀　指山美江子　渋谷 格　白木原 宜
辻 静子　鶴田啓子　徳永智恵子　兵動美紀　平山とし　村里育子

山浦美香

整図（デジタルトレース）：白木原 宜 西野元勝 藤井菜穂子 江副朋子 村里育子
(株) とっぺん (株) 埋蔵文化財サポートシステム
遺物写真撮影：今泉好孝 小森義尚 境 靖紀 渡部芳久 白木原 宜
西野元勝 吉田大輔 渡部芳久
写真整理・編集：市田佳奈子 今泉好孝 江副朋子 奥 知恵子 梶山裕史
西野元勝 藤井菜穂子 村里育子
調査記録整理：東畠瀬遺跡 6G 区）遺構：市田佳奈子・渋谷 格
遺物：市田佳奈子・渋谷 格・徳永貞紹
東畠瀬遺跡 7 区）遺構：内田真一郎・白木原 宜・田中良輔・西野元勝
遺物：市田佳奈子・渋谷 格・西野元勝・吉田大輔
東畠瀬遺跡 9 区）遺構：白木原 宜・吉田大輔
遺物：市田佳奈子・白木原 宜・西野元勝・吉田大輔

7 本書の編集は藤井菜穂子の協力を得て渋谷 格が行った。執筆分担は下記のとおりである。

第1章、第2章：徳永貞紹・渋谷 格
第3章：渋谷 格
第4章：白木原 宜・吉田大輔
第5章：渋谷 格
第6章：白木原 宜・吉田大輔
第6章（補遺）：西野元勝
第7章1：川久保善智・澤田純明・大野憲五・竹下直美・隅康二・埴原恒彦
第7章2：米田 稔・内藤裕一・覚張隆史
第7章3：新免歳靖

8 東畠瀬遺跡 6G・7・9 区の整理・報告にあたって、下記の方々から御教示・御協力をいただいた。

家田淳一 石井千絵里 大橋康二 金原正明 全国神代ゆかりの会
宗源院総代会 田上勇一郎 徳永貞紹 鳥越俊行 (有)濱崎石材
東中川忠美 古川末由 三代俊幸 水本和美 宮武正登
村木二郎 (五十音順)

本書の記載方法

- 1 嘉瀬川ダム建設に伴う埋蔵文化財発掘調査の対象遺跡には英大文字3文字の略号を与え、実測図・写真等の記録類や出土遺物の注記等に使用している。本書で報告する東烟瀬遺跡はHHTの略号で示される。
- 2 個々の遺構名は、遺構の種別を表す英大文字2文字の分類記号（下記参照）と4桁の遺構番号の組み合わせで示す。遺構番号の千の位には、各遺跡の地区名を示す数字を付けている。
なお、小穴・柱穴は遺物の出土したものに限り、Pの略号を用いて他の遺構とは別個の遺構番号を与えている。このうち掘立柱建物や柵列などの遺構を構成するものについては英大文字を用いてPA、PB、…の要領で示し、それ以外の柱穴・小穴については算用数字4桁の一連番号を付け、千の位で地区名を示す。

S A : 柵列・堀・土塁・石塁	S B : 掘立柱建物・礎石建物	S C : 石棺墓・石蓋土坑墓
S D : 堀・溝・流路	S E : 井戸	S F : 道路
S H : 穴穴住居・穴穴建物	S J : 買棺墓・土器棺墓	S K : 土坑
S P : 土坑墓・木棺墓	S T : 古墳・その他の墳墓	S X : その他・不明遺構

- 3 出土遺物の○○形土器は、○○とのみ表現する。例) 豊形土器→豊
- 4 実測した出土遺物には4桁の遺物登録番号を1点ずつ付し、挿図中には各章ごとの通し番号を付した。
- 5 表で示した出土遺物の計測値は、復元値に*、残存値に+を付けて表現する。
- 6 平成14年4月に改正測量法が施行されたが、調査時の記録類は全て日本測地系による旧国土地標であることから、混乱を回避するため、嘉瀬川ダム建設事業に伴う文化財発掘調査では今のところ世界測地系による座標を使用していない。
本書で示す方位は旧国土地標第II系の座標北で、磁北はこれより西偏約6°30'である。
- 7 出土遺物に関して、本文・表中で記述の煩雑さを避けるため下記の分類・編年を使用・参照したものがある。
また、近世陶磁に関して佐賀県立九州陶磁文化館の大橋康二氏、家田淳一氏より多くのご教示を賜った。
 - ・中世前期の中国陶磁：
太宰府市教育委員会（2000）『大宰府条坊跡XV—陶磁器分類編—』太宰府市の文化財第49集
 - ・中世後期の中国陶磁：
森田 勉（1982）「14～16世紀の白磁の型式分類と編年」『貿易陶磁研究』No.2 日本貿易陶磁研究会
上田秀夫（1982）「14～16世紀の青磁碗の分類」『貿易陶磁研究』No.2 日本貿易陶磁研究会
小野正敏（1982）「15、16世紀の染付碗、皿の分類とその年代」『貿易陶磁研究』No.2 日本貿易陶磁研究会
 - ・中世の土器鍋：
徳永貞紹（1990）『肥前における中世後期の在地土器』『中近世土器の基礎研究VI』 日本中世土器研究会

目次

本文目次

第1章 調査の経過.....	1
1 調査の経緯.....	1
2 調査組織.....	1
3 発掘調査の経過.....	2
第2章 位置と環境.....	5
1 地理的環境.....	5
2 歴史的環境.....	5
第3章 東畠瀬遺跡の概要.....	11
第4章 東畠瀬遺跡 7 区.....	15
1 東畠瀬遺跡 7 区の概要.....	15
2 7 区の遺構と遺物.....	15
1) 7 A 区の遺構と遺物.....	15
2) 7 B 区の遺構と遺物	21
3) 7 C 区の遺構と遺物	29
4) 7 I 区の遺構と遺物	36
5) 7 J 区の遺構と遺物	40
6) 7 K 区の遺構と遺物	43
7) 7 L 区の遺構と遺物	43
8) 7 M 区の遺構と遺物	43
3まとめ.....	44
第5章 東畠瀬遺跡 6G 区	67
1 東畠瀬遺跡 6G 区の概要	67
2 第1面の遺構と遺物	70
3 第2面の遺構と遺物	77
4 2-3面の遺物	89
5 第3面の遺構と遺物	108
6 第4面の遺構と遺物	119

7　まとめ	129
第6章 東畠瀬遺跡9区	133
1 東畠瀬遺跡9区の概要	133
2 9区の遺構と遺物	133
1) 外表施設	133
2) 下部遺構と遺物	159
3 まとめ	170
(補遺) 6区の集石および宝篋印塔について	214
第7章 自然科学分析	217
1 東畠瀬遺跡9区から出土した人骨について	218
1) はじめに	218
2) 各人骨について	218
3) 神代家人骨の頭蓋形態	230
4) 東畠瀬遺跡9区人骨のエナメル質減形成について	231
2 神代家墓所から出土した人骨資料の炭素・窒素同位体比と鉛濃度の分析	250
1) はじめに	250
2) 資料と方法	250
3) 分析結果と考察	250
3 東畠瀬遺跡9区(宗源院墓地)から出土したガラス玉の自然科学分析	256
1) はじめに	256
2) 分析資料	256
3) 分析方法	256
4) 結果および考察	257
5) おわりに	261

挿図目次

図 1-1	嘉瀬川ダム水没地区周辺と埋蔵文化財調査地区 (1/25,000)	3
図 2-1	東畠瀬遺跡の位置 (1/600,000)	7
図 2-2	嘉瀬川ダム建設予定地周辺の遺跡 (1/100,000)	8
図 3-1	東畠瀬遺跡周辺の地形 (1/5,000)	12
図 3-2	東畠瀬遺跡 6G・7・9 区の位置 (1/2,000)	13
図 4-1	7A 区遺構配置図 (1/250)	16
図 4-2	7A 区掘立柱建物跡配置図 (1/100)	17
図 4-3	7A 区 SB7028 (1/80)	18
図 4-4	7A 区 SB7029 (1/80)	19
図 4-5	7A 区 SB7030 (1/80)	20
図 4-6	7B 区遺構配置図 (1/200)	22
図 4-7	7B 区掘立柱建物跡配置図 (1/125)	24
図 4-8	7B 区 SB7032・SB7033 (1/100)	25
図 4-9	7B 区 SB7034 (1/80)	26
図 4-10	7B 区 SB7035・SB7036 (1/80)	27
図 4-11	7B 区 SB7037・SA7031 (1/80)	28
図 4-12	7C 区遺構配置図 (1/200)	30
図 4-13	7C 区掘立柱建物跡配置図 (1/100)	31
図 4-14	7C 区 SB7038・SB7039 (1/80)	32
図 4-15	7C 区 SB7040 (1/80)	33
図 4-16	7I 区遺構配置図 (1/150)	34
図 4-17	7I 区トレンチ土層図 (1/60)	35
図 4-18	7I 区 SK7018・SK7019・SK7020 (1/40)	36
図 4-19	7I 区 SK7022・SK7023 (1/40)	37
図 4-20	7J 区遺構配置図 (1/150)	38
図 4-21	7J 区土層図 (1/40・1/60)	39
図 4-22	7K 区遺構配置図 (1/150)	41
図 4-23	7K 区土層図 (1/60・1/80)	42
図 4-24	7L 区トレンチ配置図 (1/150)	45
図 4-25	7L 区トレンチ土層図 (1/60)	46
図 4-26	7M 区トレンチ配置図 (1/300)	47
図 4-27	7M 区トレンチ土層図 (1/80)	48
図 4-28	7 区出土遺物 1 (1/3・1/4)	49
図 4-29	7 区出土遺物 2 (1/3)	50
図 4-30	7 区出土遺物 3 (1/3)	51
図 4-31	7 区出土遺物 4 (1/3)	52
図 4-32	7 区出土遺物 5 (1/3)	53
図 4-33	7 区出土遺物 6 (1/3)	54

図4-34 7区出土遺物7 (1/3)	55
図4-35 7区出土遺物8 (1/2・1/3)	56
図4-36 7区出土遺物9 (1/3)	57
図4-37 7区出土遺物10 (1/2・1/3)	58
図5-1 東畠瀬遺跡6G区周辺の地形 (1/1,000)	68
図5-2 6G区の土層 (1/60)	69
図5-3 第1面の遺構分布 (1/200)	71
図5-4 第1面の遺構分布詳細 (1/125)	72
図5-5 第1面・1-2面の出土遺物 (3は1/2、他は1/3)	73
図5-6 1-2面の出土遺物・表採の遺物 (1/3)	74
図5-7 第2面の遺構分布 (1/250)	78
図5-8 第2面の建物区画 (1/100)、SX6062 (1/40)	79
図5-9 第2面北東部の遺構分布詳細 (1/100)	80
図5-10 第2面の庭園遺構 (1/100)・土層 (1/40)、SX6057 (1/20)	81
図5-11 SX6079 (1/40)	82
図5-12 第2面の出土遺物1 (64は1/4、他は1/3)	84
図5-13 第2面の出土遺物2 (139は1/2、他は1/3)	85
図5-14 2-3面の出土遺物1 (1/3)	90
図5-15 2-3面の出土遺物2 (1/3)	91
図5-16 2-3面の出土遺物3 (1/3)	92
図5-17 2-3面の出土遺物4 (1/3)	93
図5-18 2-3面の出土遺物5 (218は1/5、他は1/4)	95
図5-19 2-3面の出土遺物6 (1/3)	96
図5-20 2-3面の出土遺物7 (1/3)	97
図5-21 2-3面の出土遺物8 (1/3)	98
図5-22 2-3面の出土遺物9 (1/3)	99
図5-23 2-3面の出土遺物10 (1/3)	100
図5-24 第3面の遺構分布 (1/250)	109
図5-25 SX6058 (1/20)	110
図5-26 SX6100 (1/30)	111
図5-27 第3面・3-4面の出土遺物1 (369は1/2、他は1/3)	113
図5-28 3-4面の出土遺物2 (1/3)	114
図5-29 3-4面の出土遺物3 (1/3)	115
図5-30 第4面の遺構分布 (1/250)	119
図5-31 第4面の遺構分布詳細1 (1/100)	120
図5-32 第4面の遺構分布詳細2 (1/100)	121
図5-33 第4面の出土遺物1 (1/3)	123
図5-34 第4面の出土遺物2 (489・490は1/4、他は1/3)	124
図5-35 第4面・4面下の出土遺物 (501は2/3、他は1/3)	125
図6-1 周辺地形図 (1/250)	134

図 6-2 外表施設位置図 (1/150)	135
図 6-3 外表施設 1 (1/60)	144
図 6-4 外表施設 2 (1/60)	145
図 6-5 外表施設 3 (1/60)	146
図 6-6 外表施設 4 (1/60)	147
図 6-7 外表施設 5 (1/60)	148
図 6-8 外表施設 6 (1/60)	149
図 6-9 外表施設 7 (1/60)	150
図 6-10 外表施設 8 (1/60)	151
図 6-11 外表施設 9 (1/60)	152
図 6-12 外表施設拓本 1 (縮尺不同)	153
図 6-13 外表施設拓本 2 (縮尺不同)	154
図 6-14 外表施設拓本 3 (縮尺不同)	155
図 6-15 下部遺構及びトレンチ配置図 (1/150)	174
図 6-16 外表施設及び下部遺構位置図 (1/150)	175
図 6-17 下部遺構 1 (1/20・1/30)	176
図 6-18 下部遺構 2 (1/30)	177
図 6-19 下部遺構 3 (1/30)	178
図 6-20 下部遺構 4 (1/20・1/30)	179
図 6-21 下部遺構 5 (1/30)	180
図 6-22 下部遺構 6 (1/10・1/30)	181
図 6-23 下部遺構 7 (1/30)	182
図 6-24 下部遺構 8 (1/40)	183
図 6-25 下部遺構 9 (1/20・1/40)	184
図 6-26 下部遺構 10・SX9149 遺物理納状況 (1/5・1/20)	185
図 6-27 土層断面図 (1/40)	188
図 6-28 石垣東面 立面・断面図 (1/80)	189
図 6-29 石垣北面及び西面 立面・断面図 (1/150)	190
図 6-30 9区出土遺物 1 (1/2・1/3・1/4・1/6)	191
図 6-31 9区出土遺物 2 (1/2・1/3・1/4)	192
図 6-32 9区出土遺物 3 (1/2・1/6)	193
図 6-33 9区出土遺物 4 (1/2)	194
図 6-34 9区出土遺物 5 (1/2・1/3・1/6)	195
図 6-35 9区出土遺物 6 (1/2・1/3)	196
図 6-36 9区出土遺物 7 (1/2・1/3)	197
図 6-37 9区出土遺物 8 (1/2・1/3)	198
図 6-38 9区出土遺物 9 (1/2・1/3)	199
図 6-39 9区出土遺物 10 (1/3・1/6)	200
図 6-40 9区出土遺物 11 (1/2)	201
図 6-41 6区集石および宝鏡印塔出土遺物 (1/2)	214

図6-42 6区集石および宝鏡印塔（1/20）	215
図7-1 頭蓋最大長と最大幅（頭蓋長幅指数）	237
図7-2 頸骨弓幅と上顎高（コルマン上顎示数）	237
図7-3 鼻幅と鼻高（鼻示数）	238
図7-4 眼窩幅と眼窓高（眼窓指数）	238
図7-5 神代家墓所出土人骨と代表的な食料資源の炭素・窒素同位体比	254
図7-6 神代家墓所出土人骨と他の近世集団における炭素・窒素同位体比の比較	255
図7-7 ST9122-02(水晶製)の螢光X線スペクトル	259
図7-8 ST9138-21(カリ鉛ガラス製)の螢光X線スペクトル	259
図7-9 ST9143-01(カリ鉛ガラス製)の螢光X線スペクトル	259
図7-10 比重値とPbOの分布図	260

表目次

表1-1 嘉瀬川ダム建設事業に伴う埋蔵文化財発掘調査	2
表4-1 7区出土遺物一覧	59
表5-1 6G区第1面・1-2面の出土遺物	75
表5-2 6G区第2面の出土遺物	86
表5-3 6G区第2-3面の出土遺物	101
表5-4 6G区第3面・3-4面の出土遺物	116
表5-5 6G区第4面・4面下の出土遺物	126
表6-1 9区外表施設一覧	156
表6-2 9区下部遺構一覧	186
表6-3 9区出土遺物一覧	202
表7-1 比較資料	231
表7-2 エナメル質減形成の個体別出現状況	232
表7-3 東畠瀬遺跡9区と江戸一橋遺跡の減形成出現率および出現率の差の検定結果	232
表7-4 頭蓋計測値 (mm)	234
表7-5 頭蓋形態小変異	235
表7-6 四肢骨計測値 (mm)	236
表7-7 分析資料	252
表7-8 炭素・窒素同位体比	252
表7-9 骨中鉛濃度の測量結果	253
表7-10 比重および螢光X線分析による定性分析結果	258
表7-11 螢光X線分析による定量分析結果 (%)	260

写真目次

写真1 ST9106	239
写真2 ST9108	239
写真3 ST9109	240
写真4 ST9112	240
写真5 ST9114	241
写真6 ST9115	241
写真7 ST9117	242
写真8 ST9122	242
写真9 ST9124	243
写真10 ST9127	243
写真11 ST9130	244
写真12 ST9131	244
写真13 ST9136	245
写真14 ST9138	245
写真15 上段:ST9105 下段:1.ST9107 2.ST9143 3.ST9144	246
写真16 病変1	247
写真17 病変2	248
写真18 病変3	249

写真図版目次

写真図版 1-1 嘉瀬川ダム予定地周辺（南東から）	265
写真図版 3-1 調査地区周辺（真面撮合成）	266 東畠瀬道路全景（南から）
写真図版 4-1 7A区・7B区・7C区（南東から）	267 7C区 全景（東から）
写真図版 4-2 7I区 調査区全景（北東から） 7I区 SK7020（西から） 7I区 調査区全景（西から） 7I区 トレンチ土層（西から）	268 7I区 SK7018（西から） 7I区 トレンチ土層（西から） 7I区 SK7019（西から） 7I区 調査状況
写真図版 4-3 7J区 調査区全景（西南から） 7J区 1トレンチ上層（東から） 7J区 SK7022（西から） 7J区 2トレンチ土層（北から）	269 7J区 SK7023（西から） 7J区 2トレンチ・南壁土層（北から） 7J区 1トレンチ土層（北東から） 7J区 調査状況
写真図版 4-4 7K区 調査区全景（北東から） 7K区 1トレンチ（北から） 7K区 調査区全景（北東から） 7K区 2トレンチ（西南から）	270 7K区 調査区全景（北西から） 7K区 2トレンチ（北から） 7K区 1トレンチ（東から） 7K区 調査状況
写真図版 4-5 7L区 調査区全景（北西から） 7L区 2トレンチ（北から） 7L区・7J区（写真集） 調査区全景（北西から） 7L区 2トレンチ土層（北東から）	271 7L区 1トレンチ（北東から） 7L区 3トレンチ（東から） 7L区 1トレンチ土層（北東から） 7L区 3トレンチ土層（東から）
写真図版 4-6 7M区 調査区全景（南東から） 7M区 2トレンチ土層 c～d 南側（東から） 7M区 調査区全景（北西から） 7M区 2トレンチ土層 e～h 南側（南から）	272 7M区 1トレンチ（南東から） 7M区 3トレンチ（北から） 7M区 2トレンチ（東から） 7M区 調査状況
写真図版 4-7 7区出土遺物 1	273
写真図版 4-8 7区出土遺物 2	274
写真図版 4-9 7区出土遺物 3	275
写真図版 4-10 7区出土遺物 4	276
写真図版 4-11 7区出土遺物 5	277
写真図版 4-12 7区出土遺物 6	278
写真図版 4-13 7区出土遺物 7	279
写真図版 5-1 6G区 遺物（北東から）	280 6G区 第1面全景（東から）
写真図版 5-2 6G区第1面 SB6012（上方西）	281 6G区第1面 SB6013（上方西）
写真図版 5-3 6G区 第1面の出土遺物	282

写真図版 5－4	283
6G 区 第2面全景（南から）	6G 区 第2面全景（上から）
写真図版 5－5	284
6G 区第2面 底圓遺構（上から）	6G 区第2面 SX6079（北西から）
6G 区第2面 SG6060（上が南）	
写真図版 5－6	285
6G 区第2面 烧土檢出状況（北から）	6G 区第2面 SG6061（南西から）
6G 区第2面 SX6065・6066・6067（東から）	6G 区第2面 遺物出土状況
6G 区第2面 SX6016（南から）	6G 区第2面 SX6057（東から）
6G 区第2面 SX6062（南西から）	6G 区第2面 SX6092（南東から）
写真図版 5－7	286
写真図版 5－8	287
写真図版 5－9	288
写真図版 5－10	289
写真図版 5－11	290
写真図版 5－12	291
6G 区 第3面全景（東から）	6G 区第3面 SX6058 周辺（上が南）
写真図版 5－13	292
6G 区第3面 SX6058（東から）	6G 区第3面 SX6063（南から）
6G 区第3面 SX6064（北から）	6G 区第3面 SX6101 種子出土状況（南から）
6G 区第3面 SX6058 土層（西から）	6G 区第3面 SX6063 扩大（南から）
6G 区第3面 SX6078（北西から）	6G 区第3面 SX6102 土層（西から）
写真図版 5－14	293
6G 区第3面 SX6100 植出状況（北から）	6G 区第3面 SX6100 土層（西から）
6G 区第3面 SX6101・6102（南から）	6G 区第3面 SX6101・6102（南から）
写真図版 5－15	294
写真図版 5－16	295
写真図版 5－17	296
6G 区 第4面全景（上が西）	6G 区 第4面試大（上が西）
写真図版 5－18	297
6G 区第4面 完備状況（北から）	6G 区第4面 SX6087（北から）
6G 区第4面 SX6082 土層（東から）	6G 区第4面 SX6095・6096（東から）
6G 区第4面 SD6099（南から）	6G 区第4面 SX6088（東から）
6G 区第4面 SX6098（北東から）	6G 区第4面 SX6096 遺物出土状況（東から）
写真図版 5－19	298
写真図版 5－20	299
写真図版 6－1	300
9区 全景（北西から）	9区 全景（北東から）
写真図版 6－2	301
SX9001 正面（西から）	SX9001 右側面（南から）
SX9001 宝鏡印塔正面（西から）	SX9001 左側面（北から）
SX9001 右側面・後面（南東から）	SX9001 宝鏡印塔右側面（南から）
写真図版 6－3	302
SX9002（北から）	SX9004（北から）
SX9006（北から）	SX9008（北から）
SX9003（北から）	SX9005（北から）
SX9007（北から）	

写真図版 6-4	303	
SX9010・SX9011・SX9012 (北から) SX9016 (北西から) SX9013 (北から) SX9002 ~ SX9016 (北西から)	SX9014 (北から) SX9002 ~ SX9016 (南西から) SX9015 (北東から) SX9002 ~ SX9016 (北東から)	
写真図版 6-5	304	
SX9002 ~ SX9016 (南東から) SX9019 右側面 (西から) SX9017 (北から) SX9020 正面 (北西から)	SX9018 (北東から) SX9020 右側面 (西から) SX9019 正面 (北から) SX9021 正面 (東から)	
写真図版 6-6	305	
SX9021 右側面 (北から) SX9025 正面 (北東から) SX9022 (東から) SX9025 後面 (西から)	SX9023 (南東から) SX9025 左側面 (東から) SX9024 (南東から) SX9026 (北から)	
写真図版 6-7	306	
SX9027 正面 (北から) SX9029・SX9030 (東から) SX9027 右側面 (西から) SX9031 (北から)	SX9028 正面 (東から) SX9032 (北から) SX9028 後面 (北西から) SX9032 ~ SX9038 (北東から)	
写真図版 6-8	307	
SX9039 (北から) SX9040 ~ SX9042 (南西から) SX9040 (南西から) SX9043 (南から)	SX9041 (南西から) SX9044 (南から) SX9042 (南西から) SX9045 (南から)	
写真図版 6-9	308	
SX9046 (南から) SX9050 (西から) SX9047 (南から) SX9051 (西から)	SX9048 (南から) SX9052 (西から) SX9049 (南西から) SX9053 (西から)	
写真図版 6-10	309	
SX9054 (西から) SX9058 (移転後) SX9055 (西から) SX9059・SX9060 (西から)	SX9056 (西から) SX9051 ~ SX9058 (南西から) SX9057 (移転後) SX9053 ~ SX9055・SX9059・SX9060 (北西から)	
写真図版 6-11	310	
石垣東面 (南東から) 石垣北面 (北から) 石垣東面 (東から) 石垣北面 (北西から)	石垣東面 (北から) 石垣西面 (北西から) 石垣北面 (東から) 石垣西面周辺 (西から)	
写真図版 6-12	311	
調査区全景 (西から)	調査区南西部 (北から)	調査区東部 (北西から)
写真図版 6-13	312	
SX9001 基壇3段目遺物出土状況 (図6-30-2・10) (西から) SX9001 基壇3段目遺物出土状況 (図6-30-1) (南東から) SX9001 基壇3段目下部~4段目上部 (北から) SX9001 基壇4段目遺物出土状況 (図6-30-12) (南から) SX9001 基壇基底面遺物出土状況 (図6-30-3) (北から)	SX9001 基壇4段目 (南から) SX9001 基壇4段目遺物出土状況 (図6-30-13) (南から) SX9001 基壇4段目遺物出土状況 (図6-30-11) (東から)	

写真図版 6-14	313
SX9001 基底面（南から） ST9102 貨内部（南東から） ST9101 貨出土状況（北から） ST9103 貨出土状況（南から）	ST9101 践出土状況（東から） ST9103 貨内部（東から） ST9102 棘出土状況（南東から） ST9103 藏骨器内部（東から）
写真図版 6-15	314
ST9104（東から） ST9106 完撿状況（西から） ST9105（東から） ST9107（北から）	ST9106（東から） ST9107 遺物・人骨出土状況（北東から） ST9106 遺物・人骨出土状況（北西から） ST9108（南から）
写真図版 6-16	315
ST9108 遺物・人骨出土状況（西から） ST9110（北から） ST9108 完撿状況（南から） ST9110 藏骨器内部	ST9109（北から） ST9111（南から） ST9109 遺物・人骨出土状況（北から） ST9112（南から）
写真図版 6-17	316
ST9112 貨出土状況（南から） ST9114 人骨出土状況（西から） ST9112 人骨出土状況（南から） ST9115（北から）	ST9114（西から） ST9115 石蓋除去後（北から） ST9114 石蓋除去後（西から） ST9115 人骨出土状況（北から）
写真図版 6-18	317
ST9115 完撿状況（北から） ST9118（東から） ST9117（北から） ST9118 人骨出土状況（東から）	ST9117 遺物・人骨出土状況（北から） ST9118 践出土状況（東から） ST9117 践出土状況（北から） ST9119（北から）
写真図版 6-19	318
ST9119 貨及び遺物出土状況（北から） ST9122（南から） ST9121（北東から） ST9123（北から）	ST9121 人骨出土状況（東から） ST9123 人骨出土状況（北から） ST9122（北から） ST9124（北から）
写真図版 6-20	319
ST9124 遺物・人骨出土状況（北から） ST9130 人骨出土状況（北西から） ST9124 践出土状況（東から） ST9131 遺物・人骨出土状況（西から）	ST9127 人骨出土状況（北から） ST9132（北から） ST9130・ST9131（東から） ST9134（南から）
写真図版 6-21	320
ST9135（東から） ST9138（東から） ST9136 遺物・人骨出土状況（北西から） ST9138 人骨出土状況（東から）	ST9137（北から） ST9141（西から） ST9137（北から） ST9141 貨内部
写真図版 6-22	321
ST9143（北から） ST9145・ST9146 出土状況（北から） ST9143 遺物・人骨出土状況（西から） ST9146 貨内部（ST9147）（東から）	ST9144（東から） ST9146 貨内部（ST9147 取上後） ST9144 人骨出土状況（北から） ST9147 貨内部
写真図版 6-23	322
SX9128（西から） SX9149 出土遺物 SX9149 棘出土状況（北東から） SX9149 出土遺物	SX9149（北から） SX9149 出土遺物 SX9149 貨内部 SX9149 出土遺物 X線 CT スキャナによる断層像

写真図版 6-24	323	
1~5 レンチ設定状況(南東から)	3~7 レンチ設定状況(南東から)	調査状況
写真図版 6-25 9区遺物写真 1	324	
写真図版 6-26 9区遺物写真 2	325	
写真図版 6-27 9区遺物写真 3	326	
写真図版 6-28 9区遺物写真 4	327	
写真図版 6-29 9区遺物写真 5	328	
写真図版 6-30 9区遺物写真 6	329	
写真図版 6-31 9区遺物写真 7	330	
写真図版 6-32 9区遺物写真 8	331	
写真図版 6-33	332	
6区 石塔調査前	6区 石塔調査後	

第1章 調査の経過

1 調査の経緯

嘉瀬川ダムは、嘉瀬川水系嘉瀬川の総合開発の一環として佐賀県佐賀市富士町（平成 17 年 10 月 1 日に佐賀市、佐賀郡富士町、同郡大和町、同郡諸富町、神埼郡三瀬村が合併した）で建設が進められており、洪水調節をはじめ、流水の正常な機能の維持、灌漑用水及び都市用水の補給、及び水力発電に供される多目的ダムである。

嘉瀬川ダム建設事業とこれに伴う文化財調査の詳しい経緯については既刊の『東畠瀬遺跡 1・大野遺跡 1』に記しているので参照されたい。平成 22 年度は、垣ノ内遺跡 4 区、地蔵平遺跡 3 区、音無瓦窯跡の発掘調査を実施して、本書を含め 2 冊の調査報告書を作成した。

本書は、嘉瀬川ダム建設事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書の第 6 冊目となるもので、東畠瀬遺跡 6G・7・9 区について収録した。

2 調査組織

調査主体 佐賀県教育委員会

調査協力 国土交通省九州地方整備局嘉瀬川ダム工事事務所

富士町教育委員会（現・佐賀市教育委員会）

佐賀県土木部ダム対策課・河川砂防課ダム対策室（現・佐賀県土木部本部水資源対策課）

富士町ダム対策課（現・佐賀市富士支所嘉瀬川ダム対策課）

地元各位

調査組織（平成 22 年度）

総括	佐賀県教育委員会教育長	川崎俊広
	佐賀県教育庁社会教育・文化財課長	江島秋人
	佐賀県教育庁社会教育・文化財課参事	七田忠昭
	佐賀県教育庁社会教育・文化財課副課長	森田孝志
調査総括	佐賀県教育庁社会教育・文化財課主幹	樋口秀信
調査員	佐賀県教育庁社会教育・文化財課主査	白木原 宜
	佐賀県教育庁社会教育・文化財課主査	梶山裕史
	佐賀県教育庁社会教育・文化財課主査	今泉好孝
	佐賀県教育庁社会教育・文化財課主査	渋谷 格
	佐賀県教育庁社会教育・文化財課嘱託	市田佳奈子
	佐賀県教育庁社会教育・文化財課嘱託	渡部芳久
	佐賀県教育庁社会教育・文化財課嘱託	吉田大輔
	佐賀県教育庁社会教育・文化財課嘱託	西野元勝
	佐賀県教育庁社会教育・文化財課嘱託	藤井菜穂子

調査の経過

事務局	佐賀県教育庁社会教育・文化財課副課長 佐賀県教育庁社会教育・文化財課主査 佐賀県教育庁社会教育・文化財課主査 佐賀県教育庁社会教育・文化財課主事	古川英生 宮本宏之 井手弘幸 黒田康裕
-----	---	------------------------------

調査指導・助言 文化庁記念物課 佐賀県文化財保護審議会 金原正明

3 発掘調査の経過

嘉瀬川ダム建設事業に伴う埋蔵文化財発掘調査は、関連工事に伴って富士町教育委員会（当時）により平成7～9年度に断続的に行われたが、平成11～12年度の水没地区内確認調査の結果を踏まえ、平成12年度以降は佐賀県教育委員会が継続して実施している。水没地区内及び付替国道・付替市道など嘉瀬川ダム工事事務所所管工事に伴つて発掘調査が必要な遺跡は、13遺跡にのぼり（図1-1、表1-1）、平成22年度前半までに東烟瀬遺跡1～9区、西烟瀬城跡、西烟瀬遺跡1～9区、垣ノ内遺跡、小ヶ倉遺跡、入道遺跡1区、音無瓦窯跡、地蔵平遺跡1～3区、九郎遺跡1～3区、大串遺跡1区、平畠遺跡、フルタ遺跡、大野遺跡1～8区のすべての本調査対象地区で発掘作業を終了しており、調査報告書を4集刊行している。

東烟瀬遺跡 6G・7・9区の調査は、平成16～21年度にかけて断続的に実施した。

表1-1 嘉瀬川ダム建設事業に伴う埋蔵文化財発掘調査

番号	遺跡名	略号	対象面積 (a)	遺跡の時代	遺跡の種類
①	東烟瀬遺跡	HHT	121.300	縄文～近世	集落・城郭 神社・墓地
②	垣瀬跡	HTJ	12.800	中世～近世	城郭・墓地
③	西烟瀬遺跡	NHT	58.800	縄文～近世	集落
④	垣ノ内遺跡	KNU	21.000	弥生～古墳	集落
⑤	九郎遺跡	KRO	17.950	旧石器～近世	集落
⑥	大串遺跡	OKK	3.000	中世	集落
⑦	大野遺跡	OON	35.200	縄文～近世	集落・官衙

番号	遺跡名	略号	対象面積 (a)	遺跡の時代	遺跡の種類
⑧	フルタ遺跡	FRT	26.600	縄文～近世	集落
⑨	小ヶ倉遺跡	KKA	47.000	旧石器～近世	集落
⑩	地蔵平遺跡	JZD	20.000	旧石器～縄文	集落
⑪	平畠遺跡	HBT	13.000	縄文～近世	集落
⑫	音無瓦窯跡	OTN	1.500	近世	生産遺跡
⑬	入道遺跡	NYD	400	旧石器～縄文	集落

東烟瀬遺跡 6G 区

略号：HHT 6 G

所在地：佐賀県佐賀市富士町大字閑屋字鶴

調査対象面積：2,000m²

調査担当：加藤吾郎・市田佳奈子（平成16・17年度）、渋谷格（平成17年度）

東烟瀬遺跡 7 区

略号：HHT 7

所在地：佐賀県佐賀市富士町大字閑屋字鶴・辻

調査対象面積：17,300m²

調査担当：樋口秀信・田中良輔（平成16年度）

白木原宜・今泉好孝・内田真一郎・西野元勝・吉田大輔・渡部芳久（平成20・21年度）

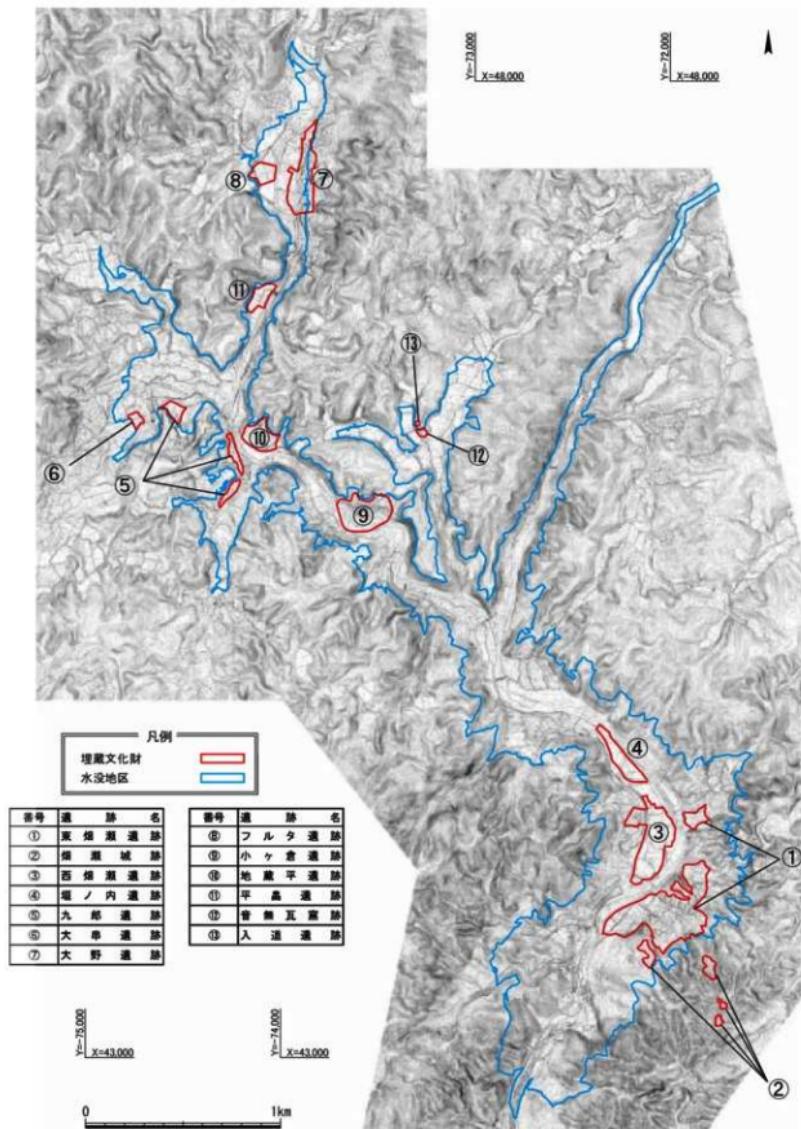


図1-1 嘉瀬川ダム水没地区周辺と埋蔵文化財調査地区 (1/25,000)

調査の経過

東烟瀬遺跡 9 区

略号：HHT 9

所在地：佐賀県佐賀市富士町大字関屋字鶴⁶⁸⁹₇₃₅

調査対象面積：300m²

調査担当：白木原宣・今泉好孝・吉田大輔（平成 20 年度）

調査記録や出土遺物の整理は発掘作業と並行して順次進めたが、本格的な報告書作成作業は平成 20 年度から着手し、平成 22 年度に本書を作成刊行した。

なお、9 区から出土した古人骨については、形質人類学および古病理学的調査を埴原恒彦氏・川久保善智氏に、エナメル質減形成についての調査を澤田純明氏に、炭素・窒素同位体比と鉛濃度の分析を米田穰氏にそれぞれお願ひし玉稿を賜った。また、出土した数珠玉については、材質分析および产地同定を新免哉精氏にお願いし玉稿を賜った。

このほか、遺物の分析・保存処理等を、6G 区出土銅製品については福岡市埋蔵文化財センター、9 区 SX9149 出土遺物については九州国立博物館の協力をそれぞれ得た。

第 1 章 参考・引用文献

嘉瀬川ダム環境検討委員会・国土交通省嘉瀬川ダム工事事務所（2003）「嘉瀬川ダム事業における環境保全への取り組み」国土交通省嘉瀬川ダム工事事務所

嘉瀬川ダム建設に伴う学術調査委員会（2000）「嘉瀬川ダム建設に伴う学術調査報告書」富士町教育委員会

富士町史編さん委員会（2000）「富士町史」上・下巻 富士町

第2章 位置と環境

1 地理的環境

嘉瀬川は、佐賀県と福岡県の分水嶺をなす脊振山地の金山に源を発し、山間部を流下して神水川、天河川、名屋川などの支流を合わせ、肥前国府や肥前國一宮河上神社のある山地を抜け、佐賀平野のほぼ中央を貫流して有明海に注ぐ。幹線流域延長 57km、流域面積 368km²の一級河川である。上流部には灌漑用水を主な目的とする北山ダムが昭和 32(1957)年に完成しているが、すぐ下流にあたる佐賀市富士町の中央部に多目的ダムとして建設中なのが、嘉瀬川ダムである。ダム予定地の下流には古湯温泉と熊の川温泉があり、県内外から多くの人が訪れている。

佐賀市富士町（旧佐賀郡富士町）は、佐賀県の北端部に位置し、北は県境の分水嶺を境に福岡県前原市・福岡市早良区と、東は佐賀市三瀬村（旧神埼郡三瀬村）・佐賀市大和町（旧佐賀郡大和町）と、西は唐津市七山・厳木町（旧東松浦郡七山村・嚴木町）と、南は天山山地の尾根筋で小城市小城町・多久市とそれぞれ接している。旧富士町役場、現在の佐賀市役所富士支所の位置で言うと、東經 130° 12' 03"、北緯 33° 22' 58" に位置し、東西 10 km、南北 17 km、面積 143.25 km²である。気候は、温暖潤湿な佐賀県の中でも平均気温が低く、降水量が多い。山間部特有の日照時間の短さもあいまって冬季の寒さが厳しい地域である。

地勢は、福岡県との県境をなす脊振山地の東西脊梁のうち羽金山・雷山・井原山・金山の峰々を北に仰ぎ、南に脊振山地の一部でもある天山山地がそびえ、両山地の間は高原状の丘陵地・山地とその間を流れる河川により開拓された谷底平野・河岸段丘などからなる。西側には羽金山から龜岳を経て天山に連なる南北方向の分水界峰があり、これより東側が有明海に注ぐ嘉瀬川水系、西側が玄界灘に注ぐ玉島川・松浦川水系となっている。佐賀市富士町地域は、東側の佐賀市三瀬村や更に東側の神埼郡脊振町（旧神埼郡脊振村）と大小の谷や峠を介して連続しており、このような一體的な地勢の特徴が、「山内」という独自の地域圏を育んできた。

表層地質は中世白亜紀に生成した花崗岩類を主体とし、雷山や天山周辺に局地的に三郡変成岩の塩基性深成岩類及び蛇紋岩と結晶片岩類が分布する。土壤は、南北の大起伏山地は礫質・粗砂質であるが、中央部の小起伏山地・丘陵地では風化が進んでやや粘土質の土壤に覆われている。山麓部や斜面には礫質・中粗粒の黄色土壤、河川沿いの谷底平野に中粗粒の黄色土壤や礫質・中粗粒・細粒の灰色低地土壤などが分布する。また、嘉瀬川上流域の北山ダム（北山湖）を中心とする一帯には北山層と名付けられた泥炭層を挟む湖成層が分布していて、第四期更新世末期頃に存在した「古北山湖」の湖底に堆積したものと考えられている。

旧富士町域の 8 割以上が森林で、更にその 8 割以上がスギ・ヒノキの人工林である。人工林以外の植生は、ほとんど常緑広葉樹林帯に属するが、標高 900 m 級の南北山地の山頂部近くには夏緑広葉樹林帯が僅かに認められる。動物相は、大型哺乳類ではイノシシ、キツネ、ニホンザル、タヌキ、アナグマ、イタチ、ノウサギ、テンなどが生息し、ニホンザルやキツネは減少傾向にあるが、イノシシは近年急増しており、発掘調査中にも遭遇することがある。鳥類では主な留鳥として大小のサギ類、キジ、コジュケイ、キジバト、カワセミ、ヤマセミなどが見られ、国指定天然記念物のカササギ（カチガラス）は古湯地区より上流部には生息しておらず、嘉瀬川ダム地区内では確認されない。

2 歴史的環境

本地域の歴史的環境全般については、『富士町史』などを参照していただくとして、ここでは近年の遺跡調査により急速に充実してきた考古学的な所見を中心に概述する。

旧石器時代の遺跡は、地城平遺跡（10）、小ヶ倉遺跡（9）、九郎遺跡（5）などでナイフ形石器などの示準石器

が出土している。このうち、平成18～22年度に発掘調査を行った地蔵平遺跡では、部分的に始良Tnテフラ（AT）の堆積層が良好な状態で検出され、その堆積層の上下から多様な石器が出土しており、今後の調査や分析により多くの成果が期待される。

縄文時代の遺跡として知られる箇所は非常に多く、近年の発掘調査で縄文時代各時期の遺物が堅穴住居や炉跡などの遺構と共に検出され、遺跡の内容が明らかになりつつある。嘉瀬川ダム建設に伴う調査に限っても、早期前葉の資料として、小ヶ倉遺跡で円筒形刺突文土器や石槍が出土しているほか、入道遺跡（13）で集石炉と刺突文土器を検出している。早期中葉では、九郎遺跡・平畠遺跡（1）、垣ノ内遺跡（4）などで稻荷山式～田村式期の遺物が出土している。早期後葉では、九郎遺跡や西畠瀬遺跡（3）で塞ノ神A式・B式・轟A式系土器などが出土しており、西畠瀬遺跡では地床炉と思われる焼土遺構と焼集積遺構が検出されている。前期では九郎遺跡や西畠瀬遺跡で轟B式・西唐津式・曾畠式土器があり、西畠瀬遺跡では鬼界アホヤテフラー（K-Ah）を含む層が部分的ではあるが広がっていて、下層から塞ノ神B式・轟A式期・上層から轟B式・曾畠式期の遺構・遺物が確認されている。中期の資料はやや少ないが、九郎遺跡・西畠瀬遺跡で船元式・春日式・阿高式系土器が出土している。後期初頭では東畠瀬遺跡（1）で坂の下式土器、少量ではあるが西畠瀬遺跡から中津式系土器が出土している。後期中葉～後葉では、西畠瀬遺跡で鐘崎式期頃の遺物集中部から石製垂飾が出土し、大野遺跡（7）では三万田式期の集落で堅穴住居などの遺構を検出している。晚期では、東畠瀬遺跡で縄文時代後期末～弥生時代前中期まで集落が断続的に営まれている。

縄文時代と比べると、当地域における弥生時代から平安時代までの様相を知る手がかりは非常に少ない。標高が高く寒冷地であるこの地域では水稻耕作を基盤とする生活が成り立ちにくかったようで、この時期の遺跡数は極端に減少している。近年の埋蔵文化財調査の進展によって、西畠瀬遺跡や東畠瀬遺跡、垣ノ内遺跡などで断片的に遺構・遺物が確認され、ようやく山間部の弥生時代～古代の様相が少しずつ知られるようになってきた。

弥生時代では、東畠瀬遺跡で弥生時代前期の堅穴住居らしき遺構が検出されているが、弥生時代特有の大陸系磨製石器は検出されておらず、縄文時代的な生活が続いているようである。西畠瀬遺跡では中期の土器埋納遺構や後期の小児喪棺墓が検出されており、1点ずつではあるが石包丁（磨製錐摘具）・磨製石斧も見つかっている。

古墳時代では、古墳はもちろん堅穴住居などを伴う集落の広がりも確認されていないが、同時代の土器は発掘調査や採集資料で散見される。西畠瀬遺跡では完形の土師器甕と土師器高杯の杯部2点を埋納した何らかの祭祀に関わる小穴が発見され、垣ノ内遺跡でも土師器甕などが出土しており、大野遺跡では土坑が確認されている。

律令制下の当地域は肥前国佐嘉郡の範囲であったと思われ、嘉瀬川治いの脊振山間部と佐賀平野部との結節点に肥前国府が置かれていることを考えると、嘉瀬川流域も律令国家の関心外であったとは思えないが、具体的な様相を知る史料はなく、遺跡にもして平安遺跡で平安時代前期頃の土師器・西畠瀬遺跡で越州窯系青磁碗や須恵器等の平安時代前半期に遡る遺物が数点出土している程度である。

古代末以降においても、富士町域の各所がどの莊園公領に含まれていたかを示すことが難しいが、少なくとも肥前安富荘領があったことは史料上で確認できる。南北朝初期の暦応2（1339）年4月25日石志定阿譲状案（石志氏家文書）は中世前期の富士町域を知る貴重な史料で、松浦党一族の石志氏が恩賞として配分された所領を子孫に伝えたものであるが、その中に「安富庄内畠瀬村、同村内火桶」と「安富庄畠瀬村内上於副河」が記されている。肥前安富庄に関する記述は宮武（1991）に詳しいが、佐賀郡一帯に散在的に散らばる莊領のうち、富士町畠瀬・上小川村、佐賀市大和町東山田・佐保・久留間、佐賀市久保田町北部で確認される遺称地については嘉瀬川流域に分布している点が注目される。古代末～中世前期の遺跡としては、東畠瀬遺跡・西畠瀬遺跡・九郎遺跡・大野遺跡・中原遺跡で屋敷地などの遺構が見つかっていて、特に東畠瀬・西畠瀬遺跡の屋敷地は安富荘畠瀬村との関連で重要である。また、中原遺跡では土師器皿・皿を40点ほど集積した遺構が検出されている。

安富畠瀬の名は、近世初期まで鍋島直茂所領目録（杜家文書）の「安富畠瀬山」や東畠瀬宗源院半鐘銘の「佐賀郡安富庄畠瀬山」などで確認できるが、中世後期には畠瀬、栗並、藤瀬、菖蒲、等々の山内の各地を名字とする在地

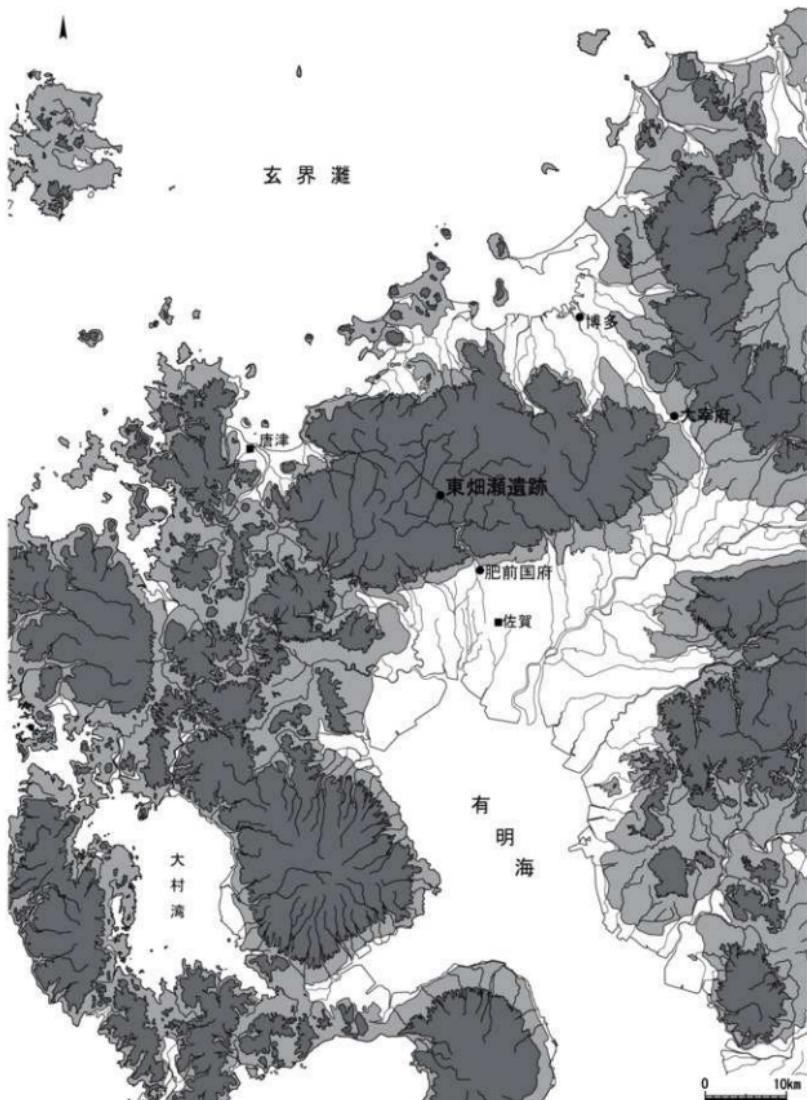


図2-1 東堀瀬遺跡の位置 (1/600,000)



図2-2 嘉瀬川ダム建設予定地周辺の遺跡 (1/100,000)

国土地理院の数値地図 50,000 (地図画像)『佐賀・長崎』を使用

勢力の台頭によって、荘園としては実態の伴わないものへ変化していったものと思われる。大串遺跡（6）では14～15世紀代の在地有力者層に関わると考えられる遺構群が見つかっており、平畠遺跡でも中世後期の屋敷地が検出されている。

戦国期に至ると、^{くまもとあかねたし}神代勝利が各地に割拠した小領主をまとめあげて山内を統一し、佐賀市三瀬村三瀬城を本城として佐賀の龍造信と朝を競った。勝利は富士町域にも谷田城、熊川城などを構え、永禄7（1564）年に隠居所として畠瀬城を築いたとされる。戦国期の城館については近年の中近世城館跡分布調査によって、山内では三瀬城の規模が際立って大きく、それ以外の在地領主のものと考えられる山城は規模・構造とも簡素なものが多いこと、個々の集落単位で領主居館跡、城郭、領主の墓址、菩提寺、氏神がセットで残っている例が数多く確認できることなど、この地域の独自性が徐々に明らかになりつつある。東畠瀬地区では、勝利が築いた畠瀬城に比定される城郭遺構について、山頂部の一部の調査（富士町教委2005）を含め、隠居所と推定される山麓部の土塁を作った居館跡、それに付随する山城などの調査によって、総体としての畠瀬城の実態が明確に捉えられるようになってきている。

^{ながれし}勝利の嫡子長良は龍造寺氏と和睦し、龍造寺氏の重臣で鍋島藩祖となる鍋島直茂の甥を養子に迎えた。神代氏は小城芦刈、更に佐賀川久保へと転封されたが、川久保邑主として1万石の大身を保持した。山内は鍋島氏の所管となつたが、元和3（1617）年的小城鍋島家（小城支藩）創設にあたって畠瀬川以西の地域が分け与えられた。これ以後、明治維新を迎えるまで、それぞれ佐賀山内、小城山内として郷村支配が続いた。佐賀山内郷では松瀬三反田に、小城山内郷では大野に代官所が設置された。このうち大野地区に現存する大野代官所の遺構は江戸時代後期のものであるが、その設置時期や詳しい経緯についてはよく判っていない。城郭を思わせる本格的な石垣造りの遺構であり、單に一支藩が山間部の経営のために設けた代官所としては破格の規模であり、隣藩との国境に近い軍事上の重要地であることが、その背景として想定される。隣接する大野遺跡では近世初期の役所的施設とみられる建物群が検出されており、大野代官所の前身のような施設であった可能性がある。東畠瀬遺跡では、神代勝利の菩提寺である宗源院跡で近世から現代までの寺院跡が4面重複して確認され、付属する宗源院墓地では多数の近世墓が調査されている（本書）。また、東畠瀬遺跡を始めとして畠瀬川ダム建設事業に伴う各遺跡の調査によって山内における近世の開発の様相が徐々に明らかになりつつある。

明治維新の後、伊万里県の設置や長崎県への統合などの余余曲折を経て、明治16（1883）年に現在の佐賀県が成立した。これに先立つ明治11（1878）年の郡区町村編成法により、富士町域にあたる範囲では、佐賀郡小瀬川村、^{おさえのかわ}閑屋村の2ヶ村、小城郡鎌原村、^{かまのはら}草木村、市川村、杉山村、大串村、栗並村、^{くりなみ}大野村、中原村、麻那古村、上無津呂村、^{かみむつろう}下無津呂村、上合瀬村、^{じょあせ}下合瀬村、古場村、^{こば}滝瀬村、^{たき}古湯村、^{ふるゆ}上熊川村、内野村、下熊川村の20ヶ村が行政単位となっていたが、明治22（1889）年の市制町村制により上記の各村は佐賀郡小閑村と小城郡北山村・南山村の3村に統合され、旧村名は大字として残すことになった。

昭和31（1956）年には佐賀郡小閑村と小城郡北山村・南山村の3村が対等合併して富士村となり、昭和41（1966）年10月1日の町制施行により佐賀郡富士町となった。その39年後にあたる平成17（2005）年10月1日に、佐賀市・佐賀郡大和町・同郡諸富町・神埼郡三瀬村と対等合併して佐賀市富士町となった。なお、佐賀市は平成19年10月1日に、佐賀郡川副町・東久賀町・久保田町を編入合併している。

第2章 参考・引用文献

- 畠瀬川ダム建設に伴う学術調査委員会（2000）「畠瀬川ダム建設に伴う学術調査報告書」 富士町教育委員会
- 佐賀県企画室（1979）「土地分類基本調査」 沿岸
- 佐賀県教育委員会（1997）「佐賀県の地質鑑定」 佐賀県文化財調査報告書第134集
- 佐賀県教育委員会（1964）「佐賀県の遺跡」 佐賀県文化財調査報告書第13集
- 佐賀県教育委員会（2007）「東畠瀬遺跡1・大野遺跡」 佐賀県文化財調査報告書第170集
- 佐賀県教育委員会（2008）「西畠瀬遺跡1」 佐賀県文化財調査報告書第176集

位置と環境

- 佐賀県教育委員会（2009）「西烟瀬遺跡2・大野遺跡」佐賀県文化財調査報告書第180集
- 佐賀県教育委員会（2010）「東烟瀬遺跡2・鍋動城跡」佐賀県文化財調査報告書第185集
- 佐賀県教育庁文化財課（1997）「九郎遺跡1区」『佐賀県文化財年報2』
- 佐賀県教育庁文化財課（1998）「大野遺跡（1区）」『佐賀県文化財年報3』
- 佐賀県教育庁文化課（2003）「大野遺跡（1区）」『佐賀県文化財年報8』
- 佐賀県教育庁文化課（2005a）「西烟瀬遺跡（4区）」『佐賀県文化財年報10』
- 佐賀県教育庁文化課（2005b）「西烟瀬遺跡（5・6・7区）」『佐賀県文化財年報11』
- 佐賀県教育庁文化課（2006a）「東烟瀬遺跡（5・6・7区）」『佐賀県文化財年報11』
- 佐賀県教育庁文化課（2006b）「西烟瀬遺跡（5区）」『佐賀県文化財年報11』
- 佐賀県教育庁文化課（2007a）「西烟瀬遺跡（6・7区）」『佐賀県文化財年報12』
- 佐賀県教育庁文化課（2007b）「東烟瀬遺跡（8区）」『佐賀県文化財年報12』
- 佐賀県教育庁文化課（2007c）「鍋動城跡（2区）」『佐賀県文化財年報12』
- 佐賀県教育庁文化課（2007d）「大野遺跡（4区）」『佐賀県文化財年報13』
- 佐賀県教育庁文化課（2008a）「地藏平遺跡（1区）」『佐賀県文化財年報13』
- 佐賀県教育庁文化課（2008b）「小ヶ倉遺跡」『佐賀県文化財年報13』
- 佐賀県立図書館（1986）「佐賀縣史料集成 古文書編」第27巻
- 佐賀市教育委員会（2007a）「大串遺跡」佐賀市埋蔵文化財調査報告書第16集
- 佐賀市教育委員会（2007b）「中原遺跡2・3区の調査」佐賀市埋蔵文化財調査報告書第19集
- 全国神代ゆかりの会（1980）「神代家伝記」「神代家とその一族」1号
- 富士町教育委員会（2003a）「富士町内遺跡発掘調査報告書 平成7年度～13年度」富士町文化財調査報告書第2集
- 富士町教育委員会（2003b）「中原遺跡1区」富士町文化財調査報告書第3集
- 富士町教育委員会（2005）「鍋瀬城跡」富士町文化財調査報告書第4集
- 富士町誌編さん委員会（1968）「富士町誌」 富士町教育委員会
- 富士町史編さん委員会（2000）「富士町史」上巻・下巻 富士町
- 三瀬村誌編纂委員会（1977）「三瀬村誌」 三瀬村
- 宮武正登（1991）「本村遺跡をめぐる中世世界—安富荘内村落としての位置付け—」『本村遺跡』佐賀県文化財調査報告書第102集 佐賀県教育委員会

第3章 東畠瀬遺跡の概要

東畠瀬遺跡は、佐賀県佐賀市富士町大字閑屋字鶴込・辻・田野々・平・川向に所在する（図3-1）。今回報告する調査区は、6G・7A～7L・9区が字鶴、7M区が字辻である。

東畠瀬地区は、嘉瀬川中流域の左岸に位置し、ダム建設に伴い全戸移転するまで北西向きの山麓部斜面一帯に集落が展開していた。「畠瀬」は暦応2（1339）年4月25日石志定阿諱状案（石志氏家文書）に「安富庄内畠瀬村、同村内火桶」とあるのが史料上の初見である。当地には山内を代表する戦国武将である神代勝利が隠居所とした畠瀬城があつたとされ、勝利の墓や菩提寺である宗源院がある。嘉瀬川を挟んだ対岸には西畠瀬地区があり、東西の畠瀬地区は、藩政期には東畠瀬が佐賀本藩領、西畠瀬が小城鍋島家（小城支藩）領に属し、昭和31（1956）年に旧富士村として合併するまで佐賀郡小閑村と小城郡南山村に分かれていた。現在は国道323号線が嘉瀬川に沿って古湯地区から西畠瀬に向かっているが、近世以前の基幹道は小副川地区で一旦嘉瀬川沿いから外れ、上小副川まで北上した後、西に向かい峰を越えて東畠瀬に入り、嘉瀬川を渡って西畠瀬に至るという経路であったことが、『正保四年肥前一国絵図』などからも読み取れる。これは、小副川地区から畠瀬地区にかけて数箇所みられる平坦地のほとんど深い渓谷をなしている部分を避けるためと推測される。したがって、6区と7区の間の東西の道は、中世から近世にかけては主要な街道であったことになる。

東畠瀬遺跡では、嘉瀬川ダム建設事業に伴い1～9区の発掘調査を実施した。現地調査は平成21年度で終了しており、縄文時代～弥生時代の集落跡・遺物包含層、中世の集落跡・城館跡、近世の寺院跡・神社跡・集落跡などを調査している。

これまでの調査成果から時代を追って概観すると、旧石器時代に遡る確実な遺構・遺物は確認されていないことから、縄文時代から東畠瀬地区の歴史が始まるものと思われる。縄文時代の遺跡は、遺跡西部の嘉瀬川に面した標高約235mの河岸段丘上（1区）を中心に展開している。1区では晩期を中心とした時期の遺構・遺物が多数出土しているが、早期の燃え文土器や押型文土器があり、3区では前期の曾畠式土器なども出土している。また、来年度報告予定の6T区下層では、後期初頭の坂の下式期の遺物包含層が確認されている。ただ、嘉瀬川対岸の西畠瀬遺跡で、早期中葉から晩明末までの各時期の遺構・遺物が連続し確認されているのと比較すると、時期は限定されている。

弥生時代になると、1区で引き続き前期前半まで遺構・遺物が確認されているが、狩猟具に偏った石器組成は縄文時代と変わらないもので、水稻耕作が行われていたとは思われない。この時期以降では、中世にいたるまでの間遺物もほとんど確認されていない。西畠瀬遺跡やその北側の垣ノ内遺跡では、量は多くないとはいえ、弥生・古墳時代の遺構・遺物が確認されていることは対照的である。その中で7K区出土の弥生土器（第4章）は、この地区的歴史を知る上では貴重な資料といえる。後の主要な街道沿いに位置していることは、弥生時代から佐賀平野と玄界灘沿岸地域を結ぶ道が存在したこと示唆しているのかもしれない。

この地に再び開発の手が及ぶのは、平安時代末期の中世になってからである。中世前期の中心もやはり1区であり、鎌倉時代を中心とする屋敷地が確認されている。この屋敷地では、平安時代末～鎌倉時代前期には東西棟であった建物群が、鎌倉時代後期～南北朝時代初期には南北棟の建物群に変遷しており、主体者の交替が推定されている。鎌倉時代前後の畠瀬地区は肥前安富荘の領域に含まれていたとみられ、石志定阿諱状案によれば石志氏が「恩賞之地」として獲得していることから、東畠瀬遺跡の屋敷地と松浦党一族との関わりが指摘されている。

中世後期になると、莊園の実態は変容し、山内の小盆地単位で在地勢力が台頭してきたと考えられる。畠瀬地区でも「畠瀬氏」の存在が認められるが、史料的にも考古学的にもその実態は不明な点が多い。畠瀬地区的発掘調査からみると、中世後期の遺物については東畠瀬遺跡6・7区を中心に散見されるので、畠瀬氏の館や詰城などは東畠瀬側

東畠瀬遺跡の概要

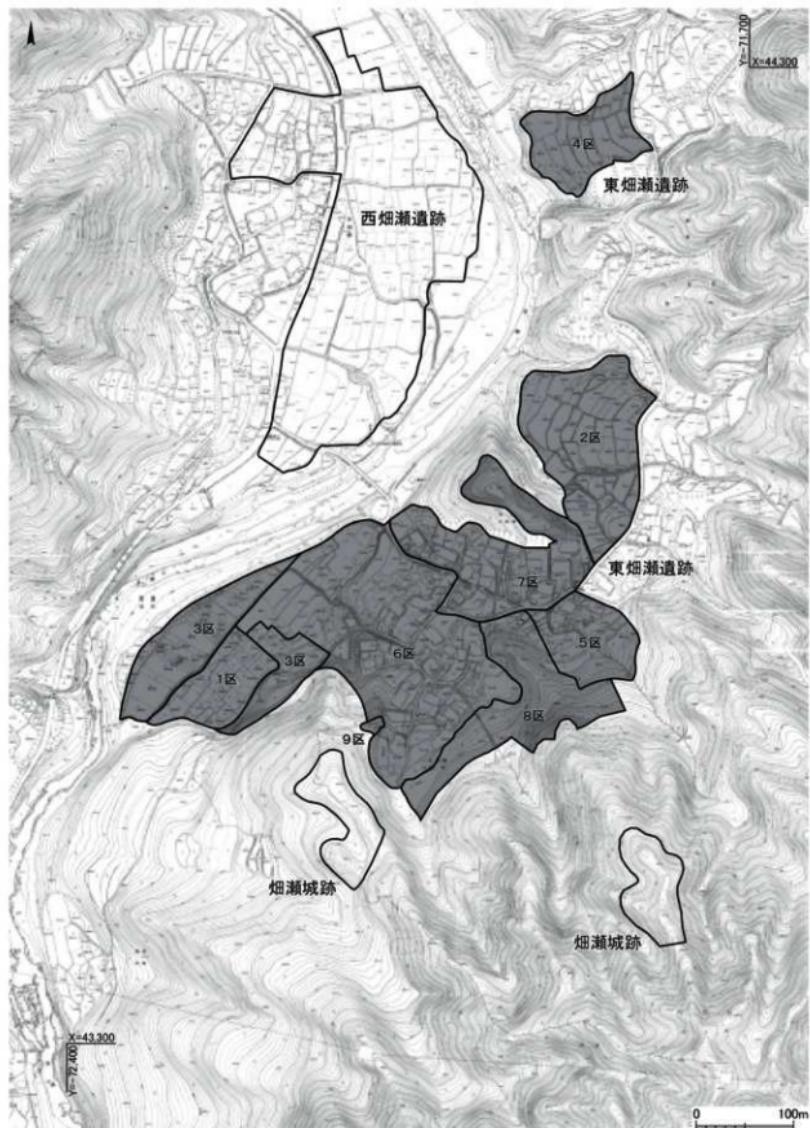


図3-1 東畠瀬遺跡周辺の地形 (1/5,000)

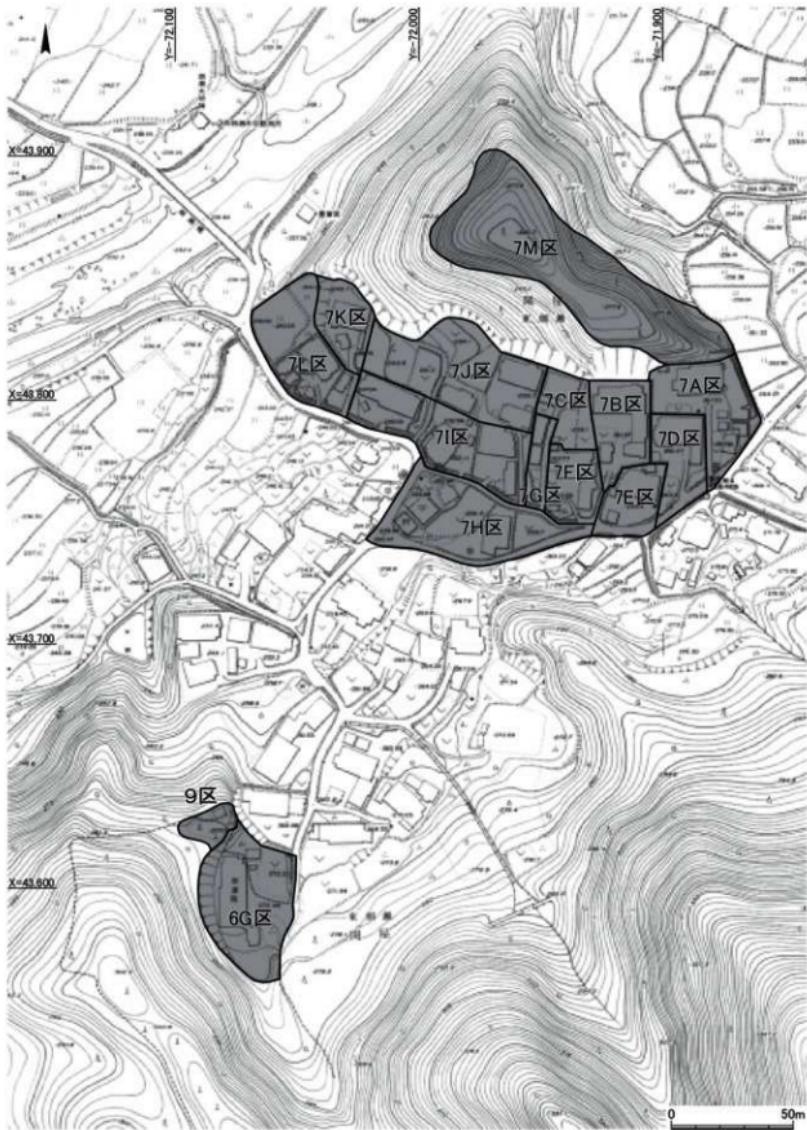


図3-2 東塙瀬遺跡6G・7・9区の位置 (1/2,000)

にあったことが推測される。

戦国時代になると、神代勝利が山内の総大将となり、佐賀の龍造寺隆信と朝を競い合うが、永禄7（1564）年に勝利は隠居所として煙瀬に城を築いたとされる。その煙瀬城の居館跡とみられる部分が東烟瀬遺跡 6F 区で確認されている。居館跡は北西に向って開く谷部に立地しており、谷を横断するように構築された土塁や堀によって館内部を防御している。館部分では、主殿・門と思われる掘立柱建物や、館内部を区画する堀と推定される布掘り状の遺構などが検出されており、館の構造の概略が判明する。6F 区北側の尾根上（8A 区）には、小規模な山城跡が確認されており、煙瀬城跡 3 区の山城跡、6F 区背後の山頂部の山城跡と合わせて、勝利の煙瀬城の実態が明らかになりつつある。

神代勝利は永禄8（1565）年に煙瀬城で亡くなったとされるが、その菩提寺が宗源院である。宗源院は勝利の生前に開基されたと伝えられており、大ム建設に伴い移築されるまで東烟瀬地区の南部に存続していた。移築後の発掘調査（6G 区）によって、整地により整備された寺院跡の遺構面が4面重複して確認された（第5章）。このうち、初めて本格的に整備されたとみられる第4面は16世紀末～17世紀初頭の時期で、伝承とは異なる調査結果となっている。また、確認された宗源院の整備・改修は、50年ごとに行われた勝利の年忌に関係する可能性がある。

宗源院には神代勝利の墓、小城鎮島家に仕えた神代一族や宗源院歴代住職の墓がある墓地（9区）が付随しており、墓地の移築後に発掘調査が行われた（第6章）。調査の結果、近世・近代墓37基、埋納遺構2基などを確認し、上部の外表施設と明確に対応する墓もある。ただ、神代勝利の墓の下層からは下部遺構は検出されず、宝塚印塔も17世紀代の作とみられるところから、戦国時代からこの場所に勝利に関する施設があったとは考えにくい。また、出土した人骨については人類学的な分析が行われ、類例が少ない近世人骨の特徴が判明する貴重な例となった（第7章）。なお、東煙瀬遺跡内で工事中に発見された宝塚印塔について報告している。

このほか東煙瀬遺跡では、近世の集落跡（5～7区）や八龍社の跡と伝えられる神社跡（3区）が調査されている。集落跡の調査では、屋敷地の詳細が分かる例はなかったが、7区では近世の掘立柱建物が確認され（第4章）、出土遺物の傾向などからある程度近世における開発の状況が判明しつつある。江戸時代を通じて遺物が出土している7区、18世紀代を中心とする遺物が出土する5区、18世紀後半から本格的な開発が始まると考えられる6区と、それぞれの地区で出土遺物に特徴がある。恐らく、主要な街道沿いの7区では、中世から現代にいたるまで集落が存続しているのに対して、やや街道から外れた地区では開発が遅れるといった様相を示しているものと推測される。また、3区では神社と推定される掘立柱建物が確認されており、出土遺物の特徴から中世から神仏に関わる場として使われたものと考えられている。

以上のように、東煙瀬遺跡の発掘調査によって、この地区の歴史の一端を知ることができるようになった。今後の研究によって、さらに東煙瀬地区の縄文時代以降の様相が詳細になっていくものと思われる。

第3章 参考・引用文献

- 滋賀県山形山城跡に伴う学術調査委員会（2000）「滋賀山城跡に伴う学術調査報告書」 富士町教育委員会
- 佐賀県教育委員会（2007）「東煙瀬遺跡1・大野遺跡」 佐賀県文化財調査報告書第170集
- 佐賀県教育委員会（2008）「西煙瀬遺跡1」 佐賀県文化財調査報告書第176集
- 佐賀県教育委員会（2009）「西煙瀬遺跡2・大井遺跡」 佐賀県文化財調査報告書第180集
- 佐賀県教育委員会（2010）「東煙瀬遺跡2・頬瀬城跡」 佐賀県文化財調査報告書第185集
- 佐賀県立図書館（1986）「佐賀縣史料集成 古文書編」 第27巻
- 全国神代ゆかりの会（1980）「神代家伝記」「神代家とその一族」 1号
- 富士町教育委員会（2005）「頬瀬城跡」 富士町文化財調査報告書第4集
- 富士町誌編さん委員会（1968）「富士町誌」 富士町教育委員会
- 富士町史編さん委員会（2000）「富士町史」 上巻・下巻 富士町

第4章 東畠瀬遺跡7区

1 東畠瀬遺跡7区の概要

東畠瀬遺跡7区は、佐賀市富士町大字閑屋字鶴・辻に所在する。ここで報告する7区は、屋敷地や田畠として利用されていた斜面地（標高240～270m）と、その北側の尾根筋（標高275～280m）に大別される（図3-2）。斜面地においては、工事工程との都合や、土地の形態に合わせるなどし、調査区を7A区～7L区の13区に細分した。また、北側の尾根筋については、すべてを7M区として調査を行った。

7A区、7B区、7C区については、調査区のほぼ全域について表土を除去したが、7D区～7H区については擾乱が激しかったため、7E区にトレンチを設定し得たにとどまった。また、7I区および7J区については、調査区東部の擾乱が激しかったため、調査区のそれぞれ西端近くについて調査を実施した。7K区についても、調査区北西部の平坦面は開削されていたため、南東部について調査を実施した。

7A区～7C区においては、近世期のものと考えられる掘立柱建物跡が、7I区～7K区においては、同じく近世期のものと考えられる土坑、小穴等が出土した。7L区では、遺構は確認されなかったが、花崗岩風化土からなる旧地形の様子をとらえることができた。また、7M区は、墓地改葬時の擾乱のため旧地形、遺構面が完全に失われていたが、出土遺物から墓地改葬が近世期にまで遡るだろうことが確認された。

ここでは、7A区・7B区・7C区・7I区～7M区について概要を報告する。なお、7A区～7H区については平成16年度、7I区～7M区については平成20・21年度に調査を行った。

2 7区の遺構と遺物

1) 7A区の遺構と遺物

7A区では、調査区の中央部で掘立柱建物跡3棟が検出された（図4-1・2）。SB7028は南北棟で、SB7029とSB7030は東西棟である。SB7029とSB7030は、西側が削平されており、全容は不明である。

SB7028（図4-3）

調査区の北西部に位置している。梁行2間(4.80m)×桁行3間(5.72m)で、主軸はN 35°W、柱間は、梁行2.40m、桁行1.91m、床面積は27.46m²である。他の2棟に比べると小規模である。

SB7029（図4-4）

調査区の中央やや西寄りに、SB7030と重複して位置する。主軸はN 45°E、梁行は3間(5.66m)で、柱間は1.89mである。西側が削平されているが、桁行は3間(6.20m)まで確認できる。

SB7029出土遺物（図4-28）

2は肥前産の陶器皿で、灰釉を施しており、胴下部から底部は露胎である。内面見込みは蛇の目釉剥ぎしている。
3は肥前産の染付磁器皿である。4は染付磁器皿で、内面の菊花文様はコンニャク印判によるものである。

SB7030（図4-5）

調査区の中央やや西寄りに、SB7029と重複して位置する。主軸はN 64°E、梁行は2間(5.40m)で、柱間は2.70mである。西側が削平されているが、桁行は4間(8.60m)まで確認できる。

東烟瀬道路 7 区



図 4-1 7A 区遺構配置図 (1/250)

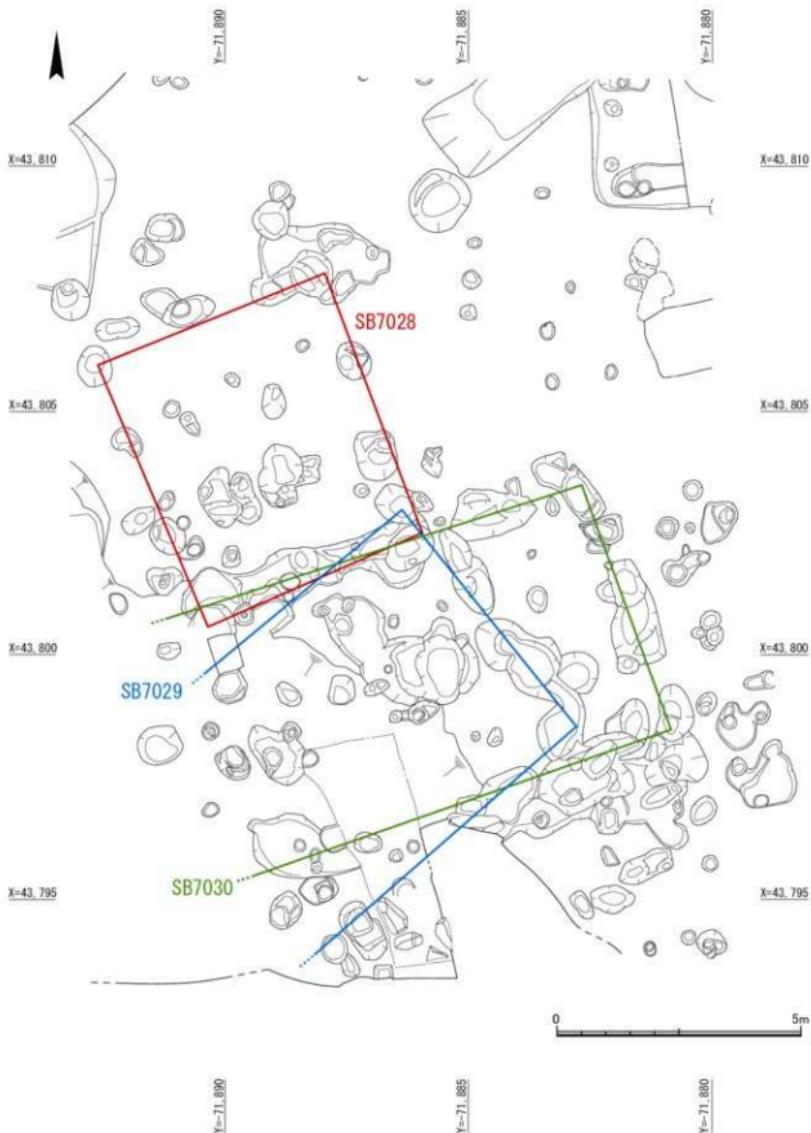
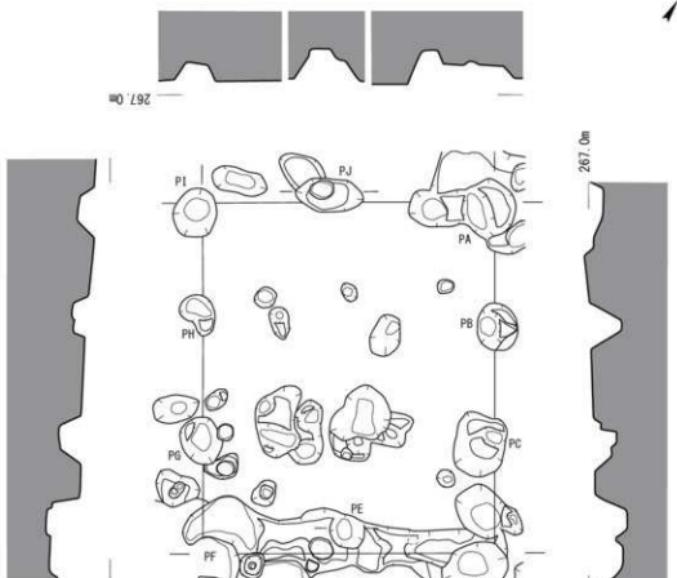


图4-2 7A区据立柱建物跡配置図（1/100）



SB7028

0 2m

図4-3 7A区 SB7028 (1/80)

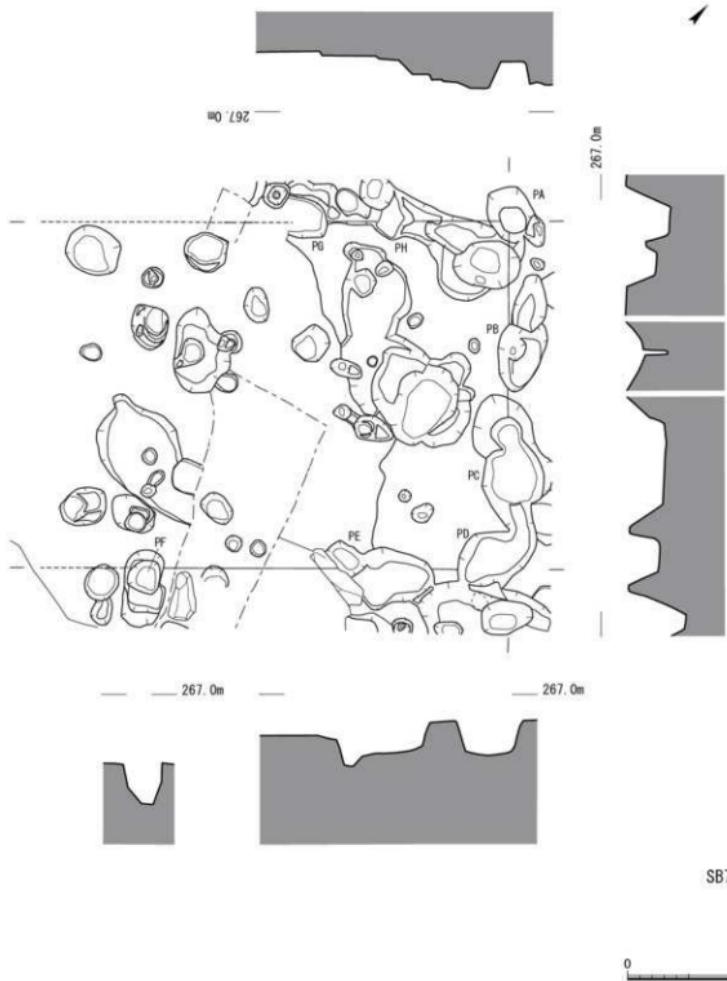


图 4-4 7A 区 SB7029 (1/80)

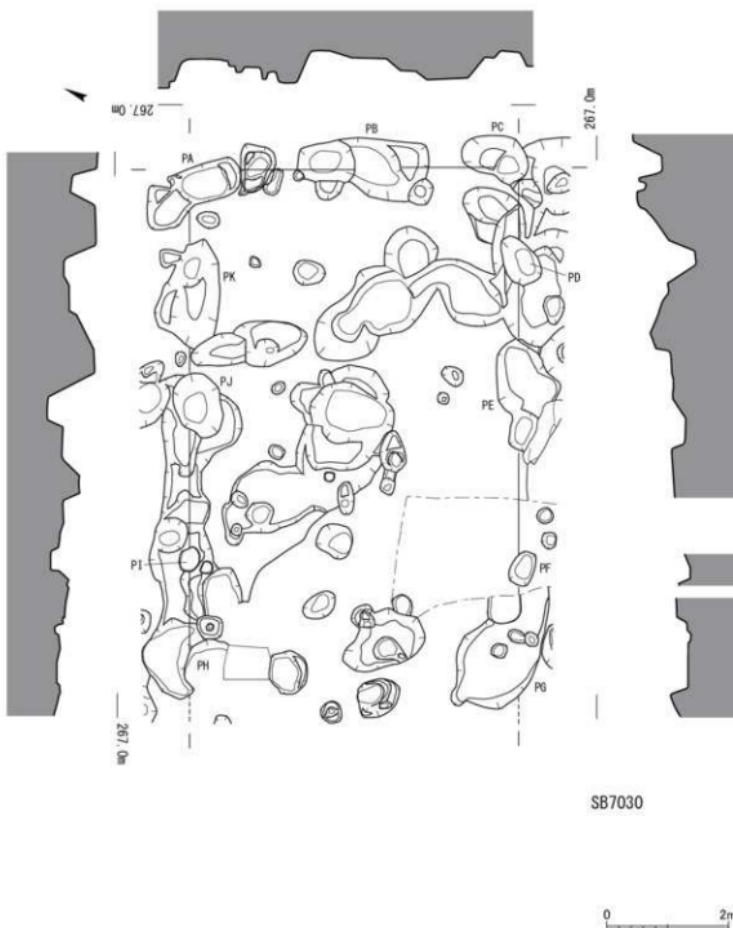


図 4-5 7A 区 SB7030 (1/80)

その他の出土遺物（図4－28・29）

1・5～31は調査区内の小穴、32～38は遺物包含層から出土した。

1は肥前産の陶器火入で、外面に銅線釉を施していたようである。5は福岡系と考えられる陶器鉢で、全体に灰釉を施し、口縁部には藁灰釉を流し掛けている。6は肥前産の白磁紅皿で、型押成形している。7は肥前産と考えられる白磁碗で、内面を見込み釉剥ぎしている。8は肥前産の染付磁器丸形碗である。9は底部糸切の土師器小皿である。10は肥前産の陶器灯火具で、内面に鉄釉を施し、受け部口縁には白土を掛けている。11は肥前産の陶器瓶で、鉄釉を施しており、武雄黒牟田周辺で生産された可能性がある。

12は土師器小皿で、底部糸切である。13・14はともに肥前産の陶器皿である。15～21は、底部糸切の土師器小皿で、17・18の口縁部には油煤が付着する。22・23は染付磁器丸形碗で、22は肥前産、23は波佐見系で内面見込みを蛇の目釉剥ぎする。24は肥前産の染付磁器皿で、内面に墨弾きで菱形渦文を描いている。

25は瓦質土器の茶釜で、外面に煤が付着している。26は底部糸切の土師器杯で、底部に板状压痕が残る。27は土師器鍋で、外面に煤が付着している。28・29は肥前産の陶器擂鉢で、28は平底、29には高台が付き、全面に施釉するタイプである。30は肥前産と考えられる陶器皿で、銅線釉を施している。31は肥前有田産の白磁瓢箪形皿で、糸切り細工成形である。

32は瀬戸・美濃産の陶器皿で、鉄釉を施している。33～35は肥前産の陶器皿で、いずれも灰釉を施し、33の口縁部には鉄釉を塗り、34の内面に胎土目痕が残り、35の内面には4箇所の砂目痕が残る。36は在地系の土師器三足付香炉で、口縁部には煤が付着する。37は波佐見系の染付磁器皿で、内面見込みには五弁花文のコンニャク印判を施している。38は肥前産の陶器甕で、外面に灰釉を施す。

2) 7B区の遺構と遺物

7B区では、近現代の造成土（約0.50m）の下から厚さ0.10mほどの江戸期のものと考えられる遺物包含層がみられた。また、遺構としては、調査区の中央で、柵列1条、掘立柱建物跡6棟が検出された（図4－6・7）。掘立柱建物のうち5棟は、同じ箇所で軸を揃えて建て替えられており、同じ機能をもった建物であった可能性がある。

SA7031（図4－11）

調査区の東端近くに位置する柵列で、主軸はN 84°Wである。主軸方位は、掘立柱建物群とほぼ同じで、関連する施設であったことがうかがえる。調査では4間分が確認されたが、東側は調査区外であることから、本来はさらに長い柵列だった可能性もある。

SB7032（図4－8）

調査区のほぼ中央に位置している。梁行2間(3.60 m)×桁行4間(8.00 m)で、主軸はN 83°Wである。柱間は、梁行2.00 m、桁行1.80 mで、床面積は28.80m²である。

SB7032出土遺物（図4－29）

40は底部糸切の土師器小皿である。44は景德鎮窯系の青花碗で、高台費付を釉剥ぎしている。

SB7033（図4－8）

調査区のほぼ中央に位置している。梁行3間(5.38 m)×桁行4間(7.62 m)で、主軸はN 85°WでSB7034とほぼ同じである。柱間は、梁行1.79 m、桁行1.91 mで、床面積は50.00m²である。

東烟瀬道路 7 区

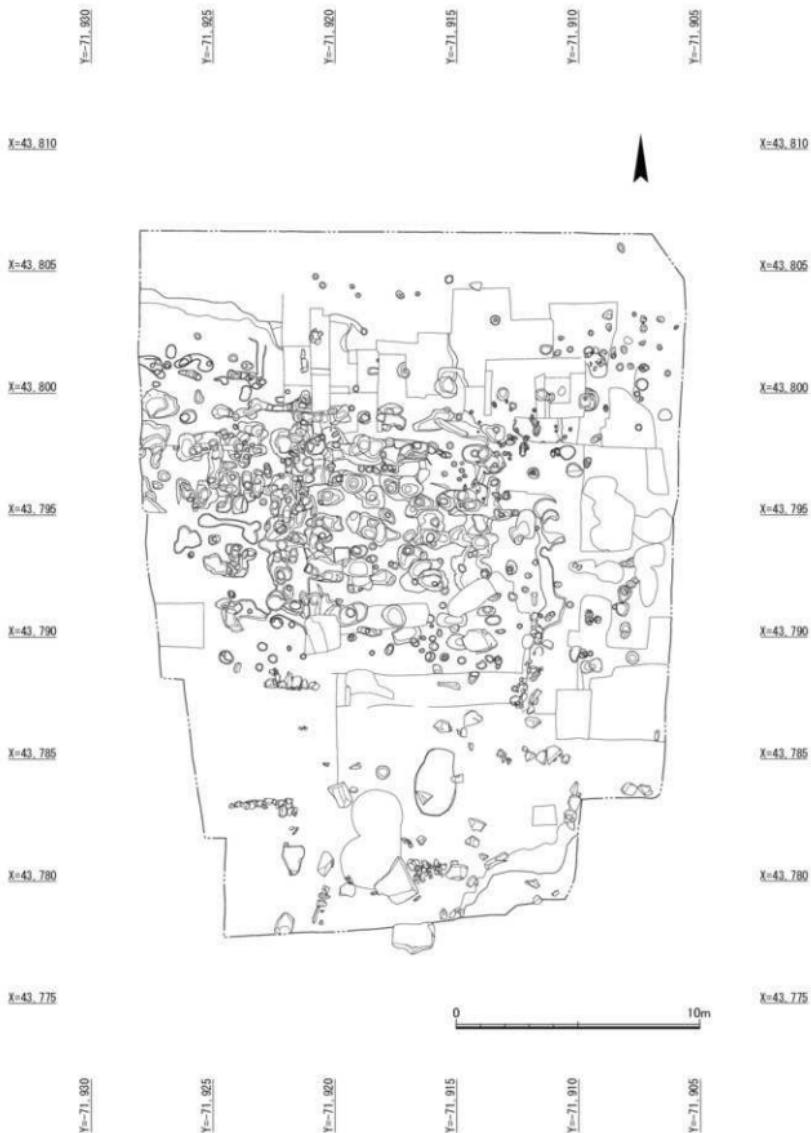


図 4-6 7B 区造構配置図 (1/200)

SB7034（図4-9）

調査区のほぼ中央に位置している。梁行2間（4.24 m）×桁行4間（7.74 m）で、主軸はN 86°W、床面積は32.82m²である。主軸方位は、SB7033とほぼ同じである。柱間は、西側の2間はおおむね1.50 m前後であるが、東側の2間は2.00 m強と差がある。

SB7034出土遺物（図4-29）

39・41は、とともに底部糸切の土師器小皿である。42は森田E群の白磁皿である。43は瓦質土器鍋で、外面に煤が付着している。45は肥前産の陶器皿で、灰釉を施している。

SB7035（図4-10）

調査区中央やや西寄りに位置している。SB7032、SB7033、SB7034の3棟と重複しているものの、やや北西にずれた位置にある。梁行2間（3.14 m）×桁行4間（7.04 m）で、主軸方位はN 84°Wである。柱間は梁行1.57 m、桁行1.76 m、床面積は22.11m²である。

SB7035出土遺物（図4-29）

47は土師器焙烙で、内外面に煤が付着する。

SB7036（図4-10）

調査区中央やや西寄りに位置している。SB7032、SB7033、SB7034の3棟と重複しているものの、SB7035とともにやや北西にずれた位置にある。梁行2間（2.70 m）×桁行3間（5.88 m）の建物で、主軸はN 83°WとSB7035とほぼ同じである。柱間は、梁行1.35 m、桁行1.96 m、床面積は15.88m²である。

SB7036出土遺物（図4-29）

46は瓦質土器茶釜で、外面に印刻文を施している。

SB7037（図4-11）

調査区の西端に位置している。検出された建物跡の中で、唯一の南北棟である。また、唯一、重複せずに位置する建物でもある。梁行2間（3.52 m）×桁行3間（5.52 m）で、主軸はN 84°Wである。柱間のうち南北両端の2間が2.00 m前後で、真中の1間が1.50 m前後と差がある。

その他の出土遺物（図4-29～32）

48～54は調査区内の小穴から出土した。48は底部糸切の土師器小皿である。49・58・59は、肥前内野山の陶器皿で、すべて内面見込みを蛇の目釉剥ぎしており、49は内面に銅緑釉を流し掛けている。50は瓦質土器の火鉢で、外面に印刻文を施している。51・52は薩摩産の陶器土瓶で、外面に煤が付着する。出土状況から胞衣埋納の可能性がある。53は瓦質土器の茶釜で、肩部に印刻文を施している。54は肥前有田産の染付磁器皿で、高台内に目痕が残る。

55～82・85～88・90・92は調査区内から出土した。55は肥前産の白磁紅皿で、型押成形である。56は竈泉窯系の青磁皿である。57は波佐見系の染付磁器皿で、内面を蛇の目釉剥ぎしており、重ね積みの跡が残る。60は肥前産の陶器天目形碗である。61・62は肥前有田の染付磁器丸形碗である。

63・67は肥前産の陶器碗で、63は腰折形碗、67は薺灰釉の上に銅緑釉を流し掛けている。64は底部糸切の土師器杯で、底部に板状圧痕が残る。65は肥前有田の染付磁器皿で、高台内にハリ支えの痕跡が残る。66は肥前産の陶器皿である。内面の3箇所に方形の釉剥ぎを施しており、肥前川久保皿山窯跡に類例がみられる。

68・75はともに景德鎮窯系の青花碗で、68は小野挽C群、75は高台置付を釉剥ぎしている。69は肥前武雄

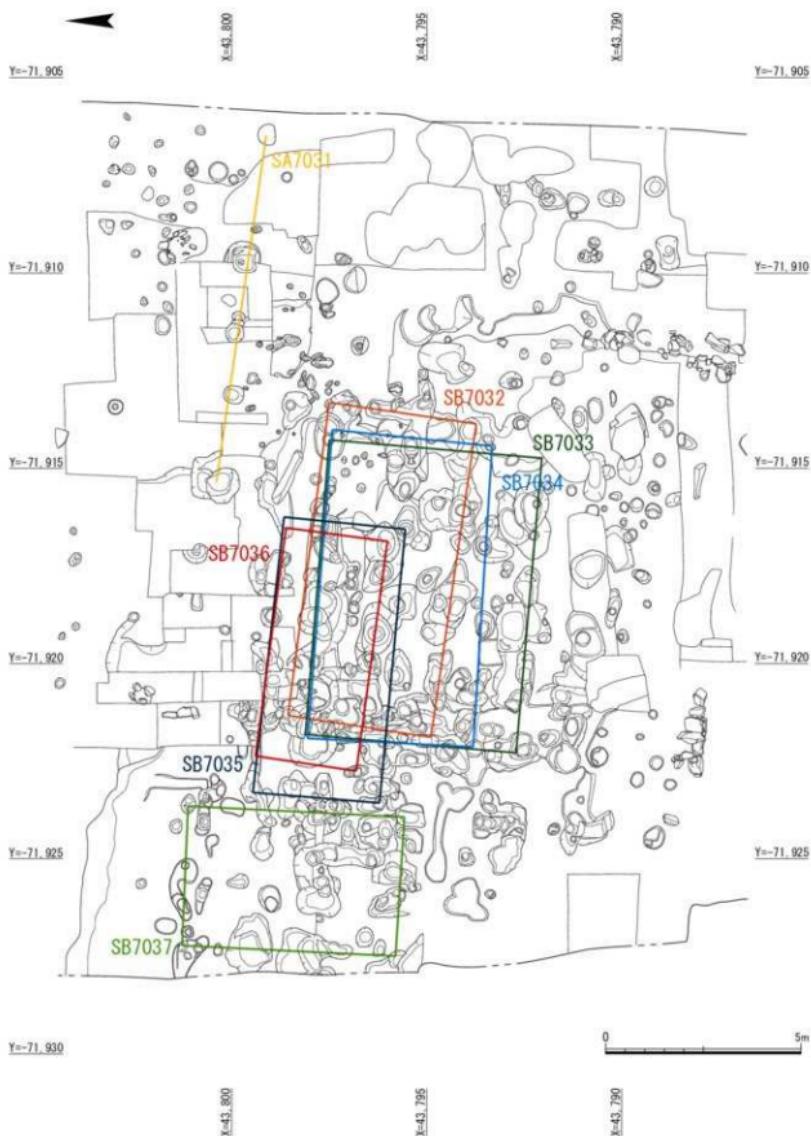


図 4-7 7B 区据立柱建物跡配置図 (1/125)

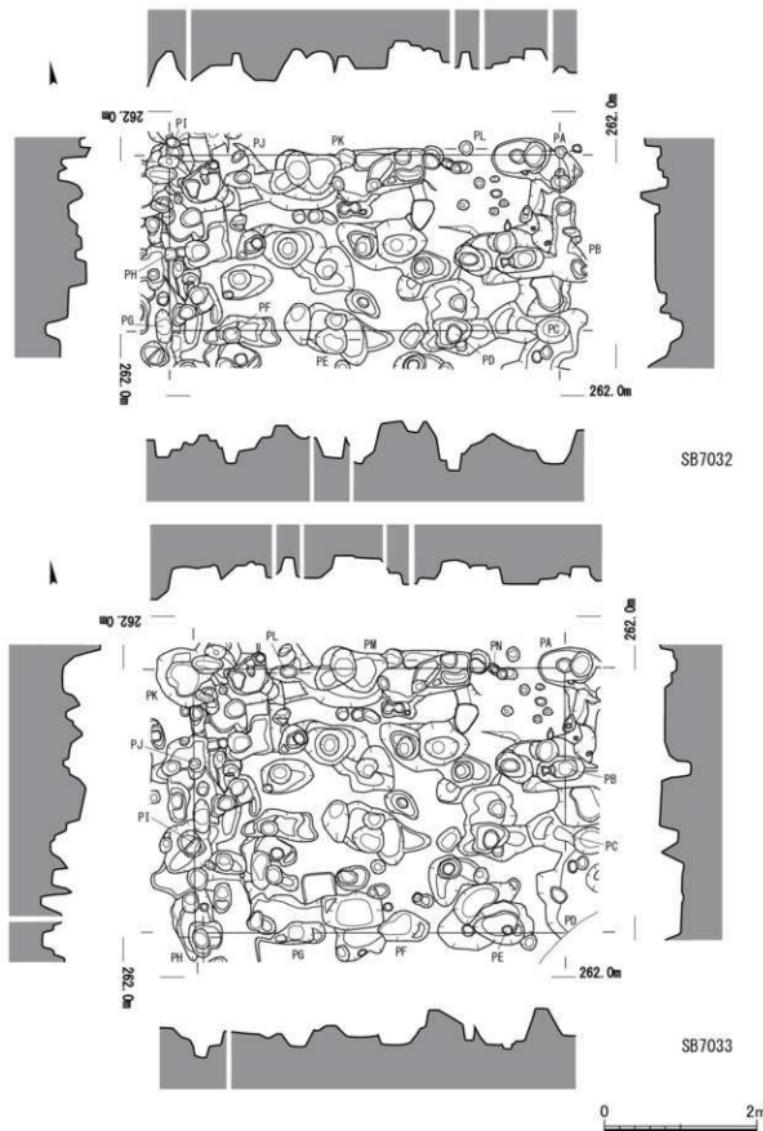
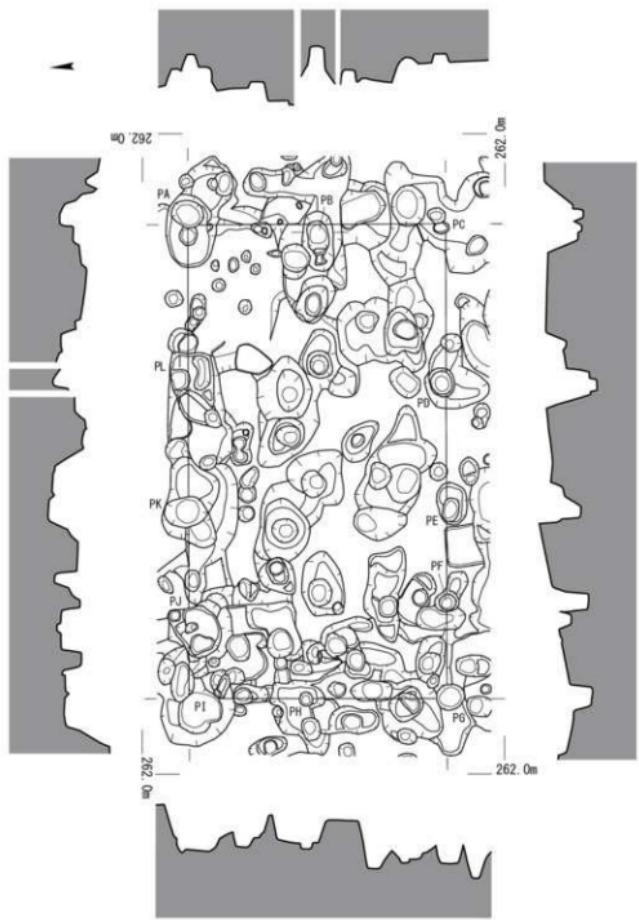


図4-8 7B区 SB7032・SB7033 (1/100)



SB7034

0 2m

図 4-9 7B 区 SB7034 (1/80)

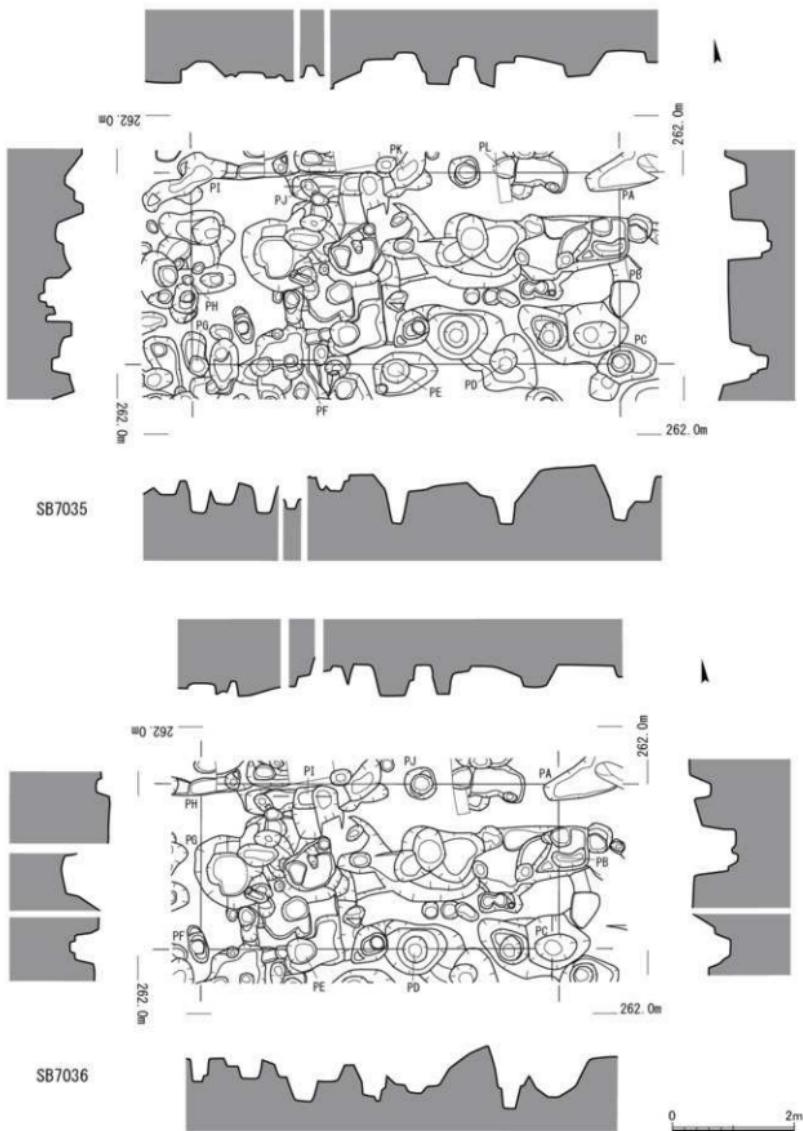


図4-10 7B区 SB7035・SB7036 (1/80)

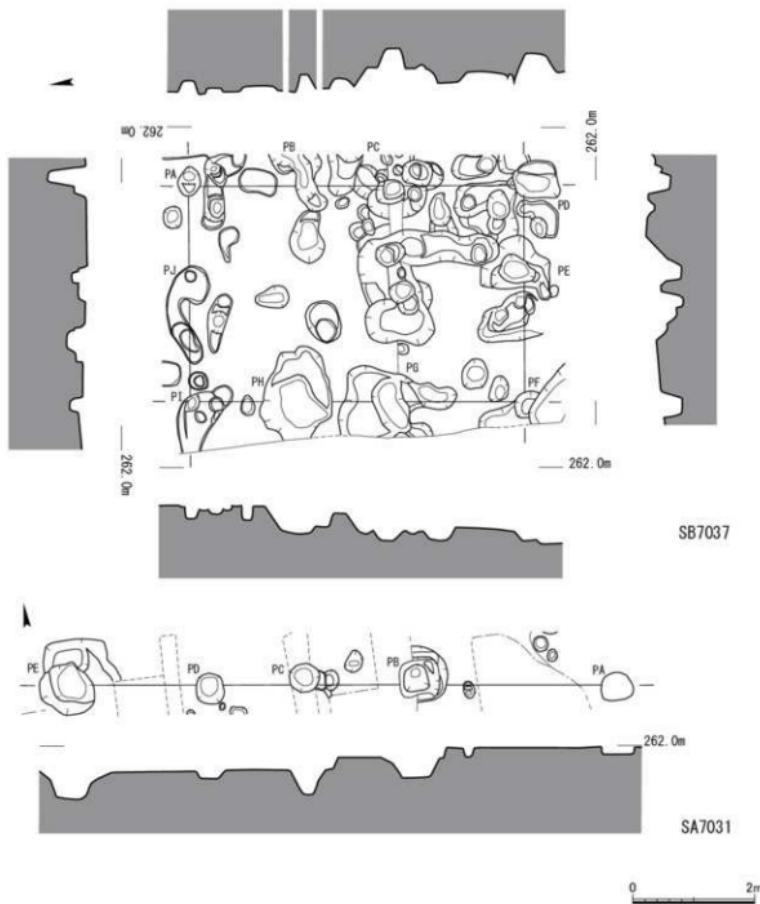


図 4-11 7B 区 SB7037・SA7031 (1/80)

周辺で製作されたと考えられる三島手の陶器鉢で、内面は象嵌花文で装飾しており、内面から口縁部までを灰釉、胴部下半から高台外面と高台内には鉄釉を施し、内面見込みには砂目痕が残る。70は肥前産の陶器鉢で、口縁部には褐釉、胴部から底部にかけては鉄釉を掛け分けており、内面に砂目痕が残る。

71は肥前産の染付磁器皿である。72は波佐見系の染付磁器碗で湯呑と考えられる。73は波佐見系の色絵染付磁器丸形碗で、染付碗に赤絵具で上絵付を施している。74は肥前産の陶器火入で、頸部の鉄釉を描いて柳描波状文を施す。76・78は肥前内野山の陶器碗で、76は高台置付に3箇所の脂土目痕が残り、78は内外面に銅緑釉を施している。77は肥前産の陶器天目形碗である。79は瓦質土器擂鉢で、外面に煤が付着している。80は瓦質土器鍋で、外面に煤が付着している。81は備前産の陶器擂鉢である。82は肥前産の陶器擂鉢で、口縁部のみに施釉するタイプである。

85は肥前武雄黒牟田産の陶器碗で、鉛釉の上に長石釉でそうめん掛けを施している。胴部下半から底部は露胎である。86は肥前産の京焼風陶器碗である。高台内に印闕と「清口」(□は不明)の刻印を施している。87・88はともに肥前内野山産の陶器皿で、87の内面見込みには砂目痕が残り、88は高台置付に3箇所の目痕が残る。90は肥前産の染付磁器輪花皿である。92は肥前内野山の陶器皿で、外面の胴部上半には灰釉、内面は銅緑釉を施し、見込みを蛇の目釉剥ぎする。

83・84・89・91は検出面の出土遺物である。83・84・89は竈泉窯系青磁で、83は稜花皿、84は口縁部が外反する碗、89は皿で内面見込みを蛇の目状に釉剥ぎし、底部は露胎である。91は朝鮮半島の雜釉陶器皿と考えられ、内面見込みに目痕が残る。

93～99は表土の出土遺物である。93は肥前内野山の陶器皿で、内面見込みに4箇所の砂目痕が残る。94は景德鎮窯系の青花碗で、小野碗C群である。99は肥前産の染付磁器輪花皿で、内面見込みに足付きハマの目痕が残り、蛇の目凹形高台である。95は肥前産の染付磁器端反形碗である。96は肥前産の陶器皿で、灰釉を施している。97は波佐見系の染付磁器丸形碗である。98は肥前産の染付磁器丸形碗で、内面見込みを蛇の目釉剥ぎしている。

3) 7 C 区の遺構と遺物

7 C 区からは、掘立柱建物跡が3棟検出された(図4-12・13)。3棟の主軸方位は一致しないが、ほぼ同じ箇所に建てられていることから、同じ性格の建物が建替えられたと解される。

SB7038(図4-14)

調査区の中央やや北寄りに位置している。梁行2間(4.04m)×桁行3間(5.62m)の建物で、主軸はN 49° E、柱間は、梁行2.02m、桁行1.87mである。床面積は22.70m²である。

SB7039(図4-14)

調査区の中央やや北寄りに位置している。梁行2間(4.72m)×桁行3間(5.80m)の建物で、主軸はN 70° Wである。柱間は、梁行2.36m、桁行1.93m、床面積は27.38m²である。

SB7040(図4-15)

調査区の中央やや北寄りに位置している。梁行2間(3.74m)×桁行3間(5.90m)の建物で、主軸はN 58° Wである。柱間は、梁行1.87m、桁行1.97m、床面積は22.01m²である。

その他の出土遺物(図4-32・33・34)

100～105は調査区内出土の遺物である。100は肥前産の染付磁器小碗である。101は肥前産の京焼風陶器皿

東烟瀬道路 7 区



図 4-12 7C 区道構配図 (1/200)

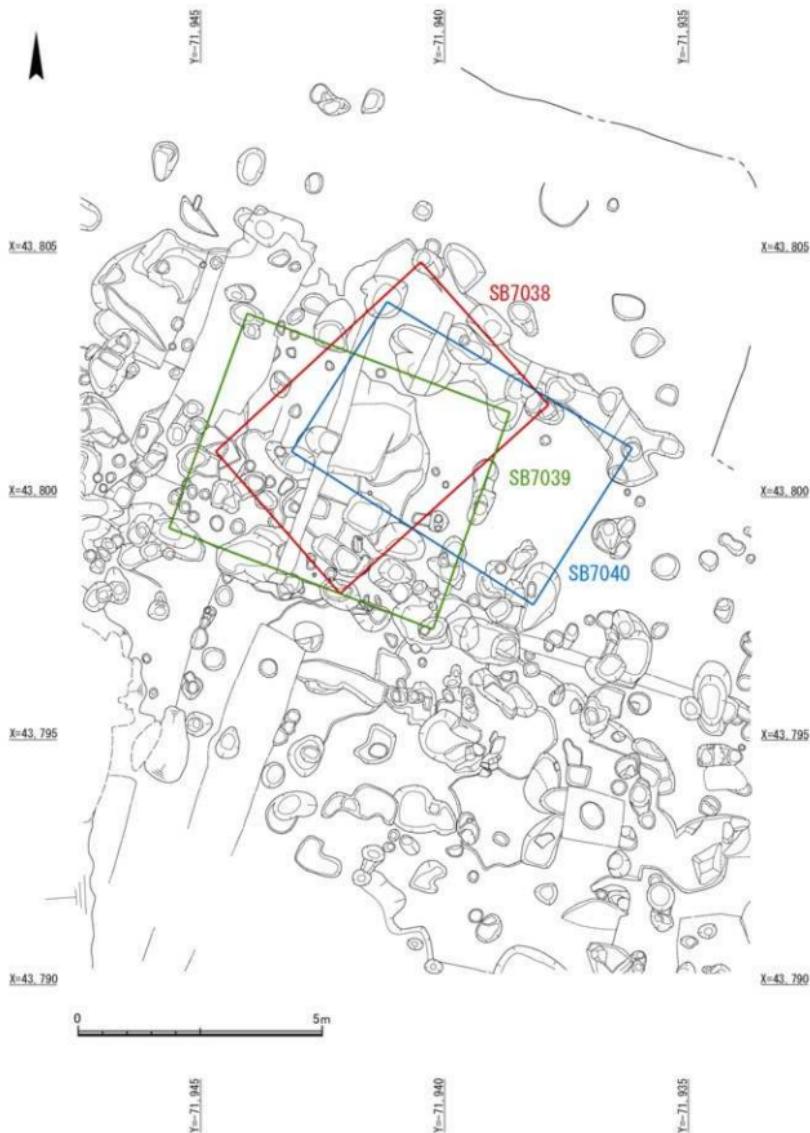


图 4-13 7C 区据立柱建物跡配置図 (1/100)

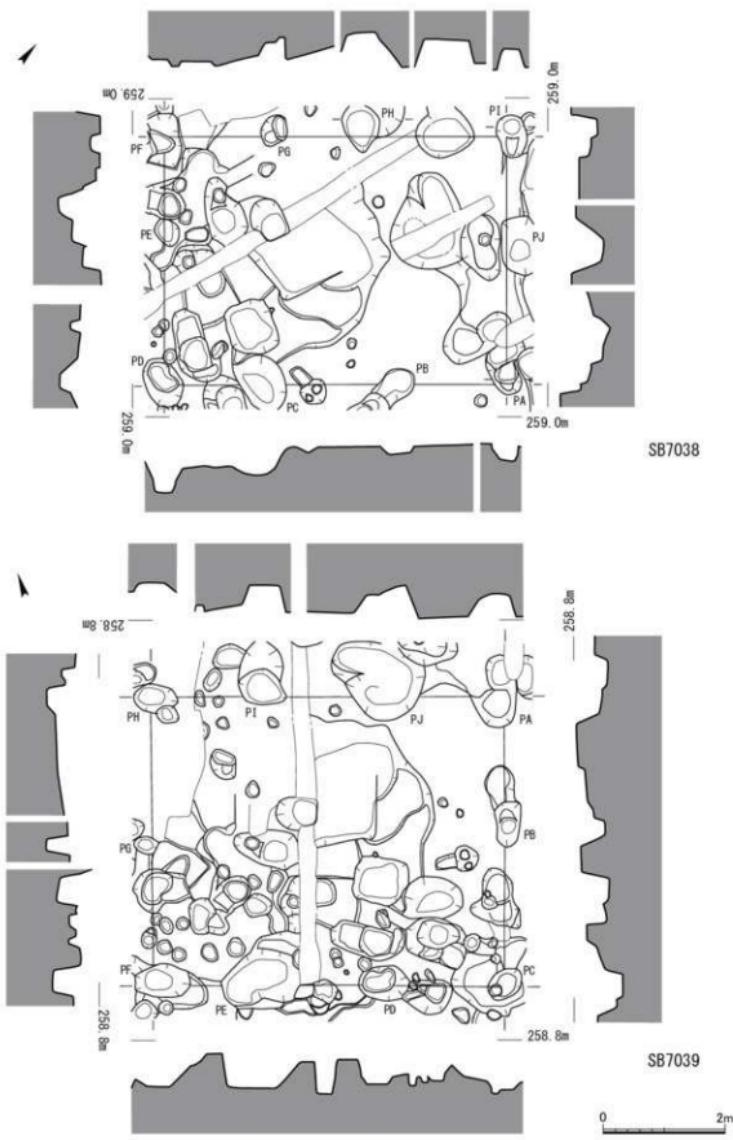


図 4 - 14 7C 区 SB7038 + SB7039 (1/80)

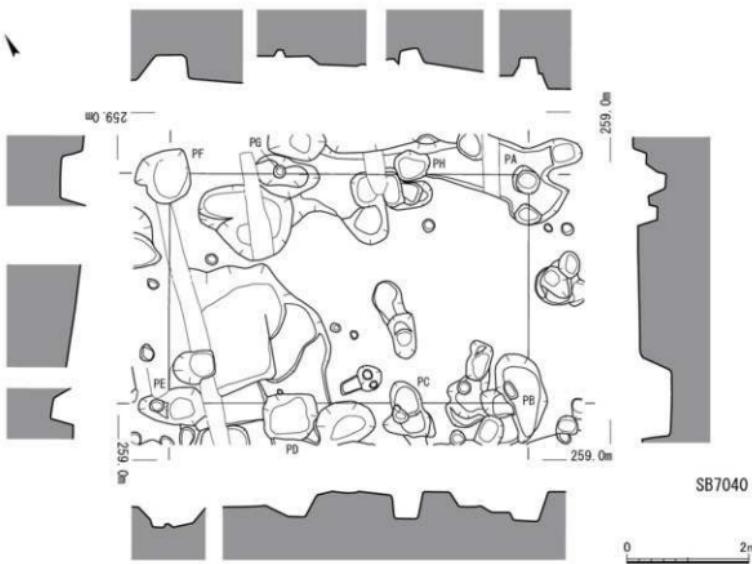


図4-15 7C区SB7040 (1/80)

である。102・104はともに白磁碗で、102は蛇の目凹形高台、104は肥前産である。103は肥前産の染付磁器碗で、内面見込みを蛇の目釉剥ぎする。105は底部糸切の土師器小皿である。

106～111・114～148は検出面の出土遺物である。106・109・110は、中国産の青花で、106は景德鎮窯系の小野皿B群で、費付から高台内に露胎、109は福建系の小野皿C群で、胴下半から底部は露胎、110は、福建系の碗で、内面見込みと費付から高台内は露胎である。107・108・111は白磁皿で、107・111は森田D群、108は森田E群と考えられる。107は胴部下半から高台を釉剥ぎし、108は高台内露胎、111の内面と高台費付には目痕が残る。114～116は竜泉窯系の青磁碗で、114は費付から高台内を釉剥ぎし、115は鶴蓮弁文の碗II b c類である。116は費付から高台内が露胎である。

117は肥前産の染付磁器瓶である。118～120は肥前産の染付磁器皿で、118は有田、119は嬉野で製作されたと考えられる。118は内面見込みに五弁花文のコンニャク印判を施す。119は上絵付を施しており、高台見込みにハリ支えの痕跡が残る。121は肥前産の青磁火入である。122・123は波佐見系の染付磁器碗で、122は簡丸形碗、123は丸形碗である。124～127は肥前産の染付磁器碗で、124・126・127は丸形碗、125は端反形碗である。

128は関西系の色絵陶器碗である。129・130は肥前産の陶器碗で、129は内外面に刷毛目、口縁部には鉄釉を施し、130は玉子手の碗である。131は肥前産の二彩手陶器火入で、胴部上半に刷毛目を施し、その上に銅緑釉を流し掛けている。132・133は肥前産の陶器皿で、132は鉄釉で文様を描く「絵唐津」で、内面に目痕が残り、133は内面見込みに3箇所の目痕が残る。

134・135は底部糸切の土師器小皿で、ともに口縁部には油煤が付着し、135は底部を穿孔している。136は肥前内野山の陶器小杯である。137～139は底部糸切の土師器杯で、139には板状圧痕が残る。

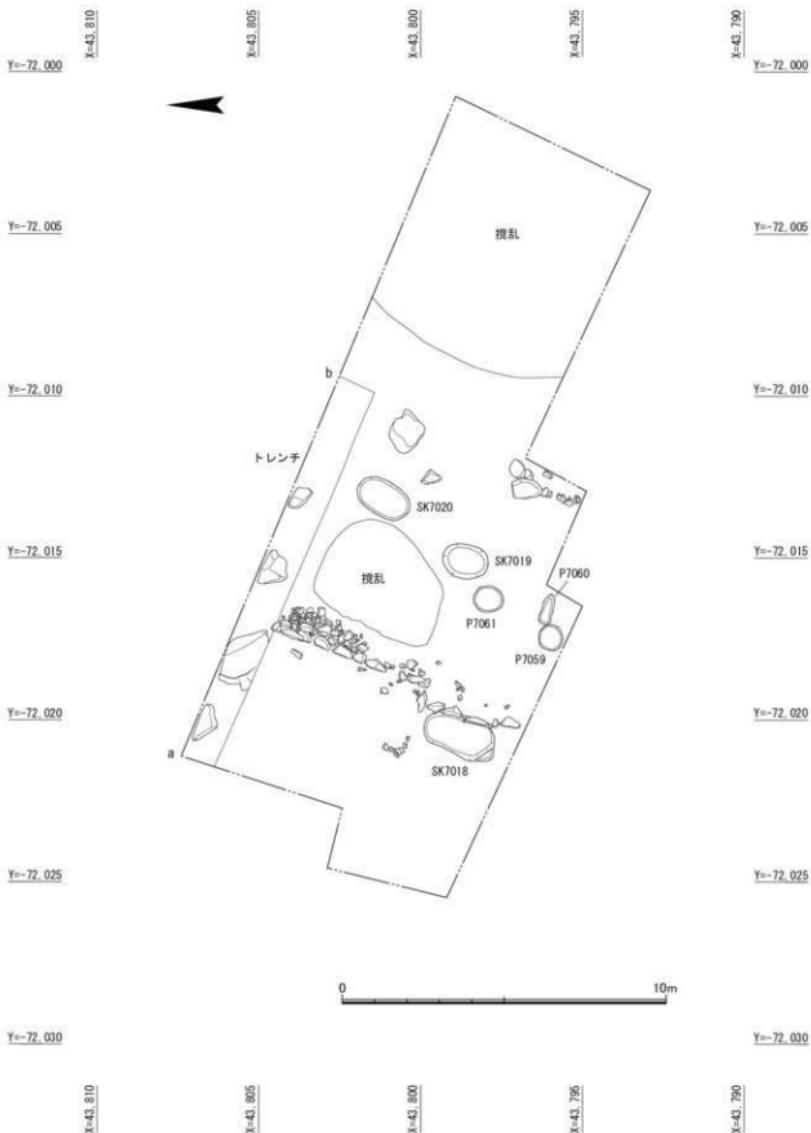


図 4-16 71 区造構配置図 (1/150)

トレンチ (1/60)

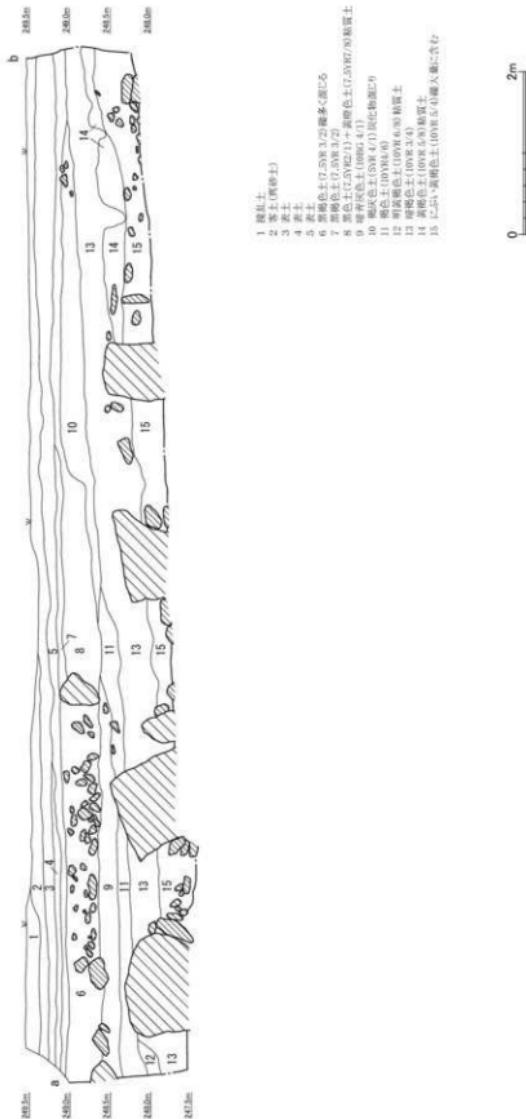


図4-17 71区トレンチ土層図 (1/60)

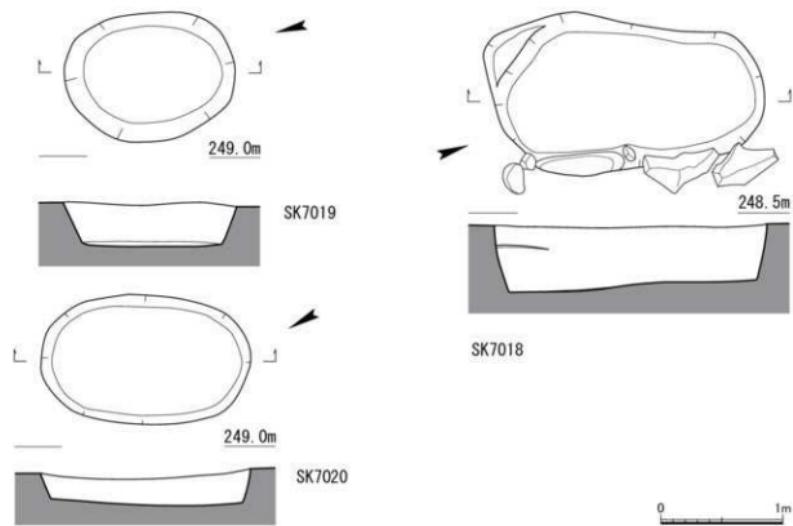


図4-18 7区 SK7018・SK7019・SK7020 (1/40)

140・141・143・144は瓦質土器鍋で、140・143の外面には煤が付着している。142は瓦質土器の茶釜で、外面には煤が付着している。145・147は肥前産の陶器擂鉢で、145は全面に施釉するタイプ、147は口縁部のみに施釉するタイプと考えられる。146は肥前産の二彩手陶器皿で、灰釉の上に白土で刷毛目を施し、鉄釉を流し掛けている。内面見込みに砂目痕が残る。148は閑西系の軟質施釉陶器鍋で、外面に緑釉と白土を流し掛け装飾している。外面底部に「無害」の刻印があり、煤が付着している。

112・113・149～153は表土出土の遺物である。112は口縁部が外反する上田D類、113は口縁部外面に雷文帯をもつ上田C類、149は肥前産の陶器碗である。150は肥前産の陶器灯火具で、口縁部に油煤が付着している。151は肥前産の染付磁器広東形碗である。152・153は染付磁器皿で、152は波佐見系で内面を蛇の目釉剥ぎし、153は肥前産で内面見込みに五弁花文のコンニャク印判を施している。

4) 7 1 区の遺構と遺物

7 1 区では、地表から約 0.3 m の地点で石列が検出されたため、この面を遺構検出面とした(図4-16)。この石列は、調査区の西部で南北方向に並べられており、途中でクランク状に折れ曲がる。調査区北端に設定したトレチの土層断面をみると、石列を挟んだ東西で土質が異なっており(西側=6層、東側=7層・8層)、さらに東側の層が造成土であることから、石列が段の役割を果たしていたものと考えられる(図4-17)。段が機能していた時期は、出土遺物から、近世期と考えるのが妥当であろう。また、調査区からは、上記の石列の他、若干数の土坑、小穴が検出された。これらは、いずれも近世期のものと考えられる。なお、トレチおよび各遺構からは、近世期のものに混じり中世期の遺物も出土しており、中世期から集落が形成されていたことがうかがえる。

ちなみに、トレチの最下層(15層)は、大きさに統一性を欠く礫が大量に混ざっており、しかもこれらの礫は、面的に堆積しておらず土砂と混在していることから、土石流の跡である可能性がある。同様の層は、他に 7 J 区 1

トレンチの5層、7K区1トレンチの4層、同区2トレンチの3層・5層にみられる。

SK7018（図4-18）

SK7018は調査区西側に位置し、南北方向に長軸をとる楕円形の土坑である。長さ約2.20m、幅約1.20mで、検出面からの深さは約0.50mである。前述した石列の西側に堆積した6層を切り込んでいる。遺構の時期は近世期以降と考えられる。埋土からは、肥前産の染付磁器碗・染付磁器皿・染付磁器猪口、同じく肥前産の陶器碗・鉢、瓦質土器鍋等が出土した。

SK7018出土遺物（図4-34）

154は肥前産の染付磁器猪口である。155は肥前産の陶器碗で、内外面に黄釉、外面の胴下部と高台には錫釉を施している。

156は肥前産の京焼風陶器碗で、内面見込みに鉄釉で文様を描いている。

SK7019（図4-18）

SK7019は、調査区のほぼ中央に位置する楕円形の土坑である。長さ約1.40m、幅約1.10mである。検出面からの深さは、約0.40mである。埋土からは、肥前産の染付磁器碗、肥前産の陶器鉢、瓦質土器鍋等が出土した。

SK7019出土遺物（図4-34）

158・159は瓦質土器鍋で、158の外面には煤が付着している。

SK7020（図4-18）

SK7020は、調査区中央やや北寄りに位置する土坑で、長さ約1.7m、幅約1.0mである。検出面からの深さは、約0.2mである。埋土からは、肥前産の染付磁器碗、肥前産の陶器碗・甕、陶器壺、肥前産の白磁唐人形灯芯押、土師器皿、瓦質土器鍋等が出土した。

SK7020出土遺物（図4-34）

160は肥前産の白磁唐人形灯芯押である。161は肥前産の京焼風陶器碗で、内面見込みに鉄釉で文様が描かれている。162は陶器火入で、外面胴部上半に鉄釉を施している。

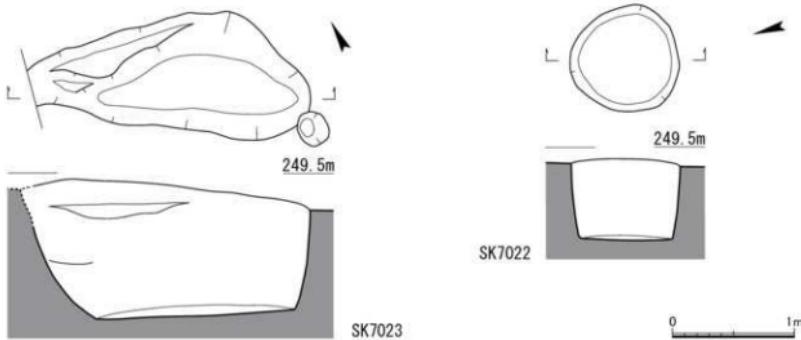


図4-19 7J区 SK7022・SK7023 (1/40)

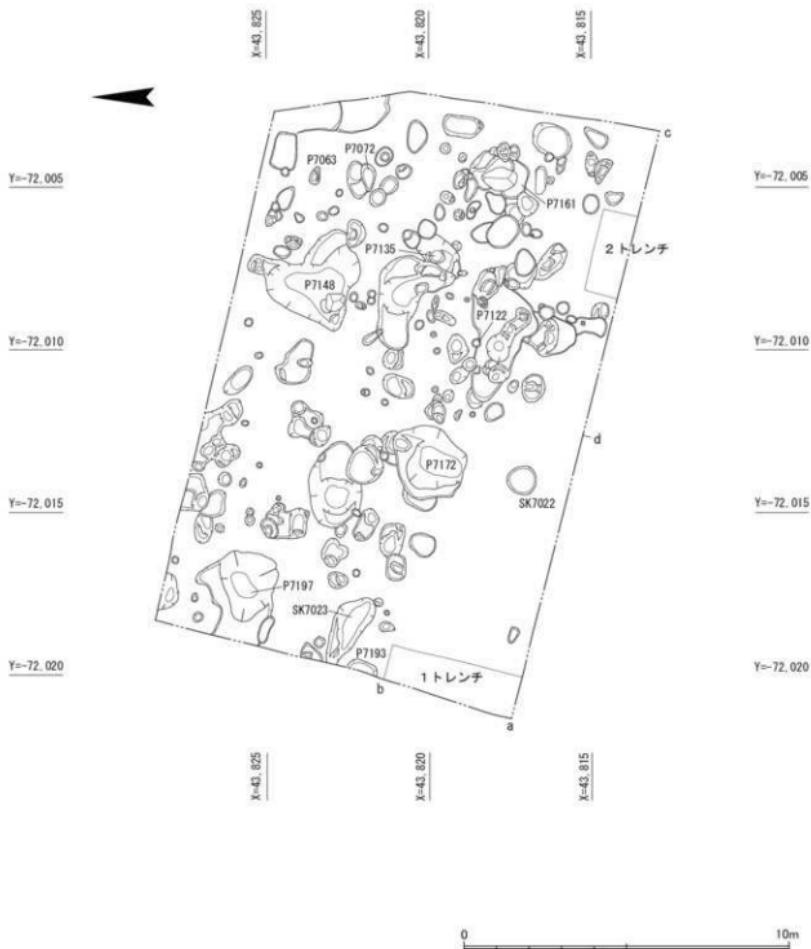


図 4-20 7J 区遺構配置図 (1/150)

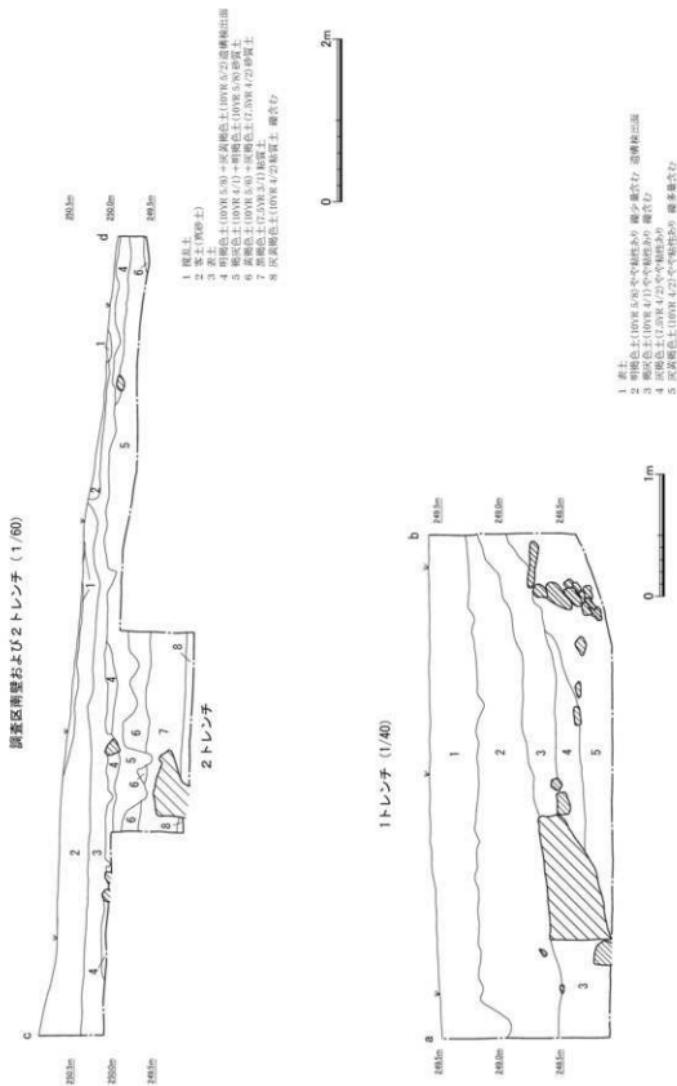


図4-21 7J区土層図 (1/40・1/60)

トレンチ出土遺物（図4－35）

163～165は1トレンチ11層から出土した。163は銅銭の寛永通寶で、新寛永である。164は肥前産の染付磁器鉢としたが、香炉や火入の可能性もある。165は肥前産の染付磁器丸形碗で、内面見込みを蛇の目軸剥ぎしている。166は1トレンチ12層から出土した、底部糸切の土師器小皿である。167・168・170は1トレンチ13層の出土遺物である。167・168は底部糸切の土師器小皿である。170は瓦質土器擂鉢で、内面に煤が付着している。171・172は1トレンチ8層の出土遺物である。171は肥前産の陶器皿で、灰釉を施し、内面見込みに鉄軸で文様を描いている。172は肥前産の染付磁器皿である。173は1トレンチ9層の出土遺物である。173は瓦質土器鍋で、外間に煤が付着する。175は1トレンチ3層の出土遺物である。竜泉窯系の青磁碗である。174は1トレンチ13層の出土遺物で、底部糸切の土師器小皿である。

5) 7J区の遺構と遺物

7J区では、約0.50mの表土の下に遺構面があり、多数の小穴・土坑が検出された（図4－19・20）。遺構はすべて近世期のものであるが、瓦質土器、中国・朝鮮半島産の陶磁器等、中世期の遺物も出土した。なお、小穴、土坑はすべて性格が不明で、建物の柱穴は検出されなかった。

SK7022（図4－19）

SK7022は、調査区南部に位置する径約0.9mの円形の土坑である。検出面からの深さは、約0.6mである。埋土から、肥前産の陶器皿、肥前産の染付磁器碗、土師器皿、瓦質土器火入・鍋等が出土した。

SK7022出土遺物（図4－35）

176は底部糸切の土師器皿である。177は肥前産の陶器碗で、灰釉を施している。

SK7023（図4－19）

SK7023は、調査区西端に位置する不整形の土坑である。西端が調査区の外になるため全容は不明だが、長さ2.50m前後、最大幅1.00mの略三角形である。埋土から、土師器皿や瓦質土器擂鉢・鍋等が出土した。

SK7023出土遺物（図4－35）

178～182は土師器皿である。178～180・182・は底部糸切で、181は底部に板状圧痕が残り、182の内底には螺旋状の調整痕がみられる。183は瓦質土器擂鉢である。

小穴出土遺物（図4－35・36）

185はP7063出土の瓦質土器鉢である。184はP7072出土の瓦質土器鉢と考えられ、口縁部外面に印刻文を施す。186はP7135出土の竜泉窯系の青磁碗で、外間に鍋連弁文を施している。

188～190はP7148から出土した。188は肥前産の陶器腰折碗で、内面と外面胴下部から灰釉を施しており、高台は露胎である。189は肥前産の陶器皿で、灰釉を施しており、内面見込みに3箇所の胎土目痕が残る。190は瓦質土器火鉢である。187はP7161出土の土師器鍋である。

191～192はP7172から出土した。191は肥前産の染付磁器丸形碗である。192は瓦質土器火鉢で、外面に印刻文を施している。193はP7193出土の底部糸切の土師器皿で、底部には板状圧痕が残る。

194～197はP7197から出土した。194は瓦質土器火鉢で、外面に印刻文を施している。195は波佐見系の染付磁器広東形碗である。196は肥前産の染付磁器猪口で、内面見込みには五弁花文のコンニヤク印判を施し、蛇の目凹形高台である。197は肥前産の染付磁器仏壇器である。

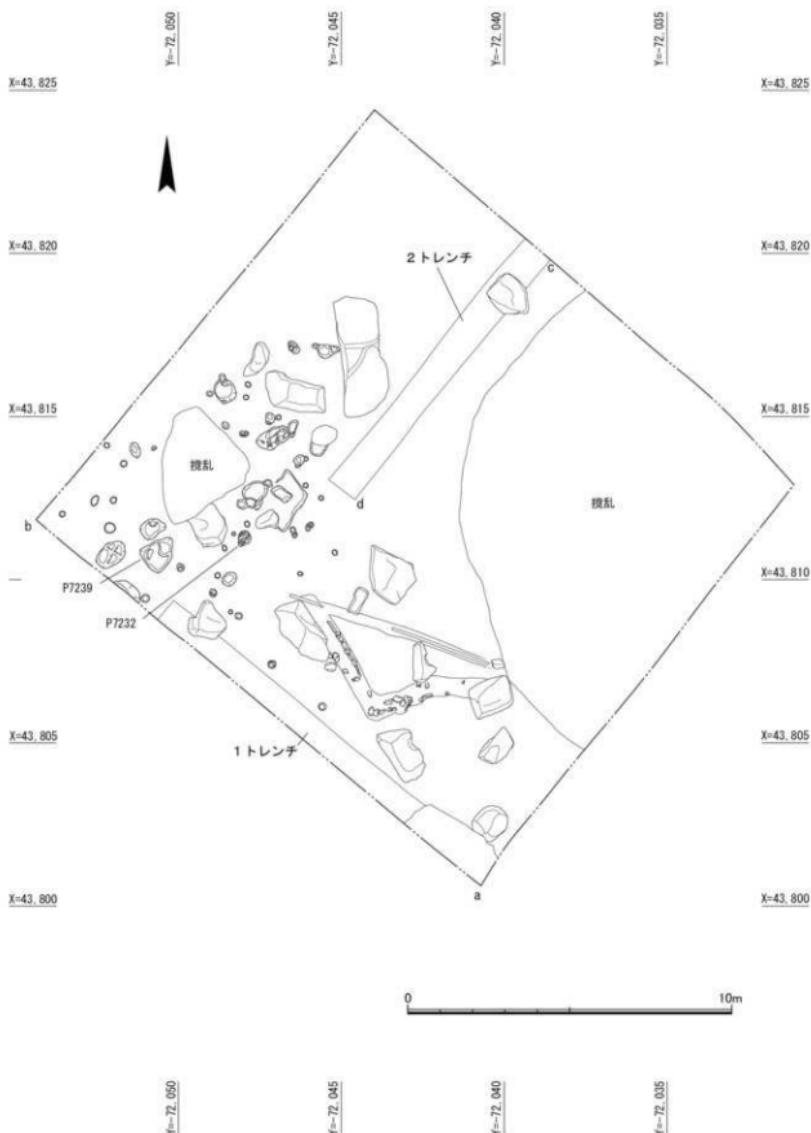


図4-22 7K区遺構配置図 (1/150)

調査区南西壁及び 1 トレンチ(1/80)

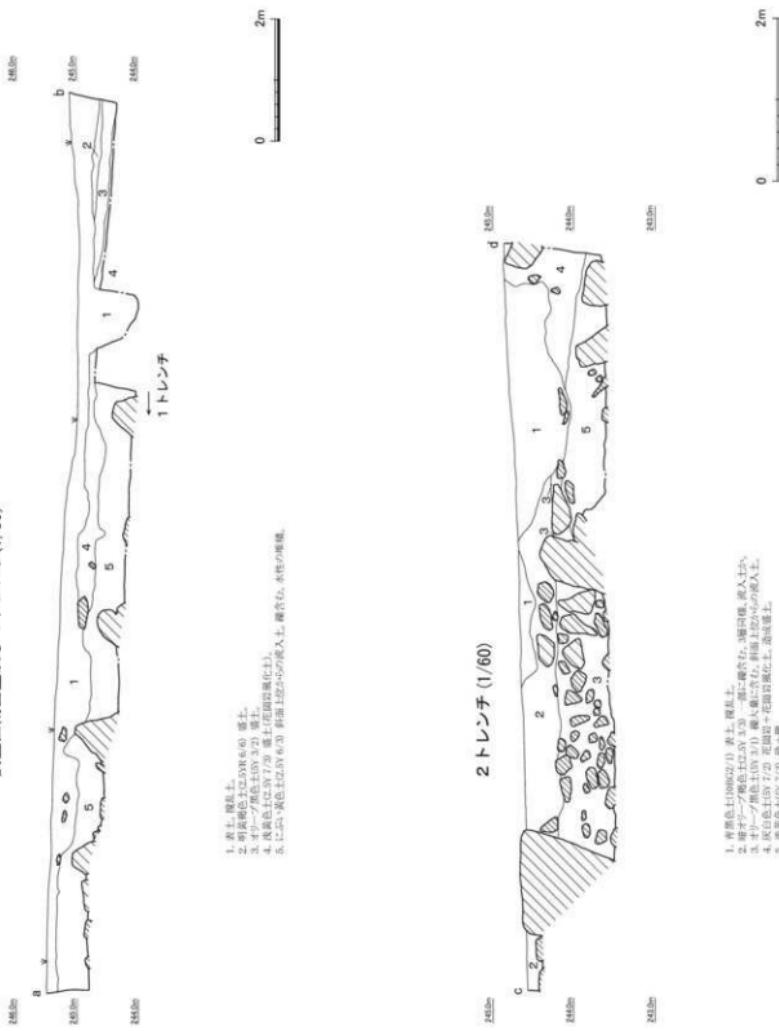


図 4-23 7K 区土層図 (1/60・1/80)

6) 7 K区の遺構と遺物

7 K区は、調査区の大部分が攪乱を受けていたが、調査区南西部において若干数の小穴が検出された（図4-22）。いずれの小穴も、性格は不明である。遺構検出面より下位については、部分的に造成盛土が確認されたが（2トレンチ4層）、他はすべて自然堆積である（図4-23）。この造成盛土からは、中世期の土師器鍋が出土したが、造成自体は近世期のものである可能性が高い。

小穴出土遺物（図4-36）

198はP7232から出土した肥前産の陶器灯明皿で、内面から口縁部外面まで鉄軸を施している。199・200はP7239から出土した底部糸切の土師器小皿で、200には板状压痕が残る。

その他の出土遺物（図4-36）

201は攪乱出土の弥生土器甕で、口縁部と底部が出土し、2つは同一個体と考えられる。なお、弥生土器は嘉瀬川ダム区域内においても、西畠瀬遺跡や垣ノ内遺跡等で数は少ないながらも出土している。

7) 7 L区の遺構と遺物

7 L区では、調査区の北側において、表土直下から花崗岩風化土の地山が検出されたため遺構検出面とした（図4-24）。この地山面から遺構は確認されなかったが、調査区の南～西側については、現地形に沿うように堆積土が分布していたため、旧地形および現地形の形成時期等を把握するため3本のトレンチを設定し調査を行った。

いずれのトレンチからも、花崗岩風化土の地山が傾斜していく様子がうかがえ、さらに、地山の上には、複数の層が地山の傾斜に沿うように堆積している状況が把握できた（図4-25）。これらの層は、自然堆積が主であるが、人工的な造成土も含まれており、地形を変更したことが判る。変更時期については、近世期であると考えられるが、中世期に遡る遺物も若干数、出土した。

トレンチ出土遺物（図4-36）

204・206は1トレンチから出土した。204は瓦質土器鍋で、外面に煤が付着している。206は瓦質土器茶釜の羽落部分で、煤が付着している。202・203・205は2トレンチから出土した。202は輝緑凝灰岩製の硯で、裏面に「赤間□」（□は欠損のため不明）の線刻を施している。203は底部糸切の土師器皿である。205は肥前産の染付磁器碗である。207は、2トレンチ4層出土の土師器鍋で、外面に煤が付着している。208は3トレンチ2層出土の竜泉窯系の青磁碗で、線描蓮弁文を施す上田碗B IV類である。

8) 7 M区の遺構と遺物

7 M区は、中世山城として利用されていた可能性があるため、尾根筋並びに地形変換点を中心にトレンチを設定した（図4-26）。トレンチ各所からは、複数の掘り込みが確認されたが、いずれも近世期の墓地と考えられる（図4-27）。また、調査区内は、近年の墓地改葬によるものであろうか、いたる所で掘削されており、遺構は確認されなかった。トレンチからは、近世期の陶磁器や土器類、古錢などが出土した。

トレンチ出土遺物（図4-37）

209はトレンチ1層出土の肥前産の染付磁器丸形碗である。210～215・217は2トレンチから出土した。210・211は肥前産の白磁小碗である。212～215は底部糸切の土師器小皿である。217は寛永通寶で、古寛永である。

218・219は、2トレンチ1層から出土した。218は寛永通寶で古寛永、219は近代の1銭玉である。220～227は、2トレンチ4・5層から出土した。220～226は寛永通寶で、220～225は新寛永、226は古寛永である。227は寛永通寶と鉄錢が錯着し、寛永通寶2枚の間に鉄錢1枚が挟まれており、上から3枚目の寛永通寶は元字銭である。

228は3トレンチから出土した寛永通寶で、古寛永である。216は4トレンチ1層から出土した底部糸切の土師器小皿である。

3まとめ

今回の調査では、7A～7C区で近世期のものと考えられる掘立柱建物が12棟、柵列1条が確認された。これらのうち、7B区で確認された5棟、7C区で確認された3棟の建物については、それぞれが同じ場所で建て替えられており、同様の性格をもつ建物であったと推測される。出土遺物は概ね17世紀～18世紀代の陶磁器や土師器が中心であるが、13世紀に遡る中国産青磁や14世紀～15世紀代の在地系土器や中国産の陶磁器、16世紀代を主体とする中国産の白磁・青花等の遺物も、若干数出土している。

7I区～7K区では、遺構とした土坑・小穴はすべて近世期のもので、建物跡等は検出できなかった。その他にも土坑や小穴が多数検出されたが、性格は不明で時期も限定し得ないが、調査区内の出土遺物から推測すれば、ほとんどが近世期の所産であると考えて大過ない。ちなみに、調査区からは、14世紀～16世紀代の在地系の土師器・瓦質土器や中国産の陶磁器も出土している。

また、7J区に設定したトレンチの最下層(15層)は、大きさに統一性を欠く礫が大量に混ざっており、しかもこれらの礫は、面的に堆積しておらず土砂と混在していることから、土石流の跡である可能性がある。同様の層は、7J区1トレンチの5層、7K区1トレンチの4層、同区2トレンチの3層・5層にみられる。土石流の起こった時期は明確ではないが、土砂や礫に混じり、中世期の土師器鍋等や近世期の遺物が出土していることから、近世初期である可能性もある。

7区の調査では、擾乱が激しかったため、近世の屋敷地の内容が判明した例はなかったが、近世集落の様相を知る上での資料が得られた。また、近世期の遺物に混じって16世紀代の遺物が出土するが、この時期は同じ東烟瀬地区に烟瀬城や神代氏館等が機能していた時期であり、7区で確認された建物や遺物は、山城や居館と一緒に集落が存在したこと示唆するものであると考えられる。

第4章 参考・引用文献

- 小野正敏(1982)「15・16世紀の染付碗、皿の分類とその年代」『貿易陶磁研究』No.2 日本貿易陶磁研究会
- 上田秀夫(1982)「14～16世紀の青磁碗の分類」『貿易陶磁研究』No.2 日本貿易陶磁研究会
- 九州近世陶磁学会(2000)「九州陶磁の編年」
- 佐賀県教育委員会(2007)「東烟瀬道路1・大野道路1」佐賀県文化財調査報告書第170集
- 佐賀県教育委員会(2008)「西烟瀬道路1」佐賀県文化財調査報告書第176集
- 太宰府市教育委員会(2000)「太宰府塙跡XV・陶磁器分類編」太宰府市の文化財第49集
- 森川 勉(1982)「14～16世紀の白磁の型及び分類と編年」『貿易陶磁研究』No.2 日本貿易陶磁研究会

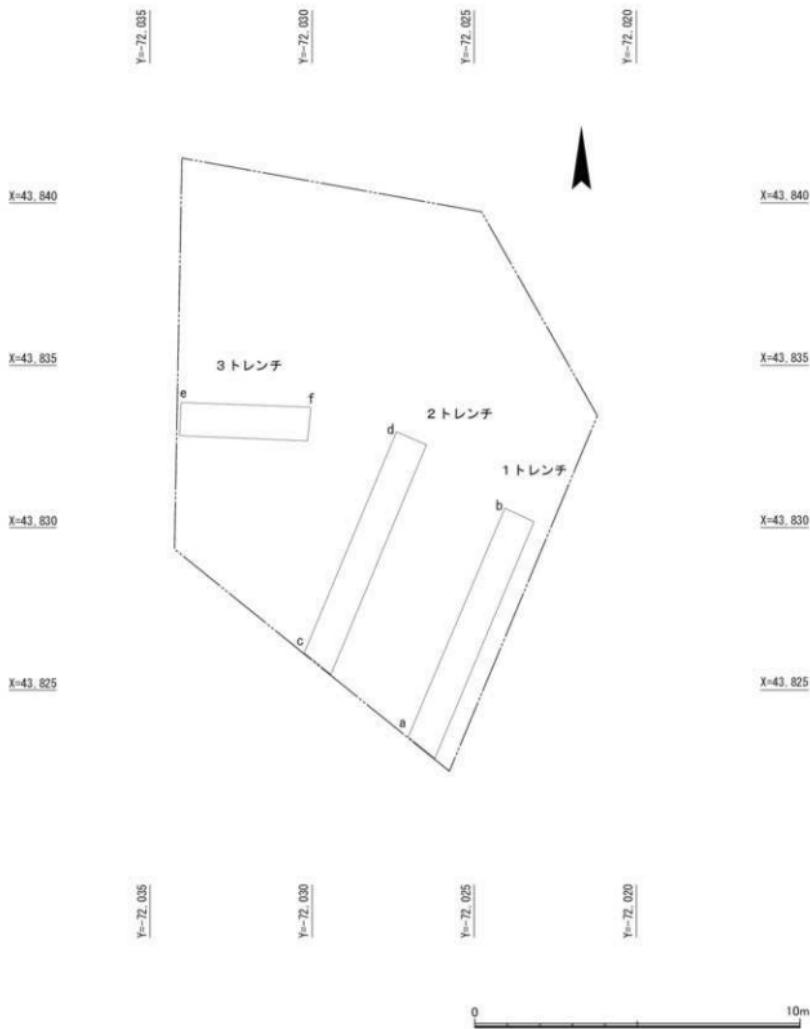
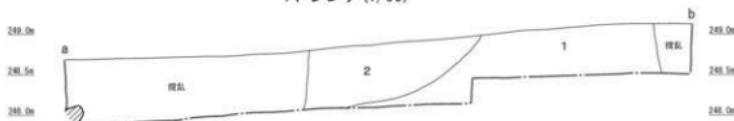
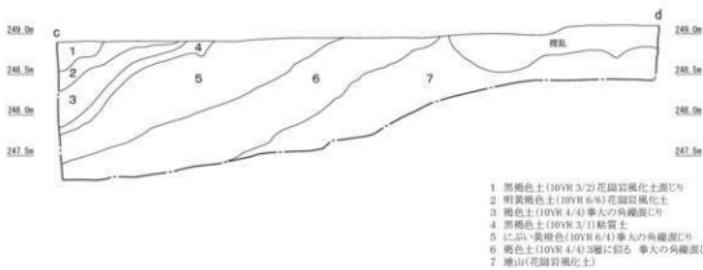


図4-24 7L区トレーンチ配置図（1/150）

1 トレンチ (1/60)



2 トレンチ (1/60)



3 トレンチ (1/60)

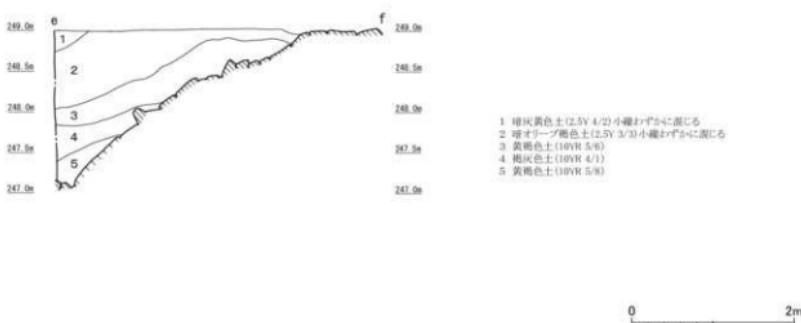


図4-25 7L区トレンチ土層図 (1/60)

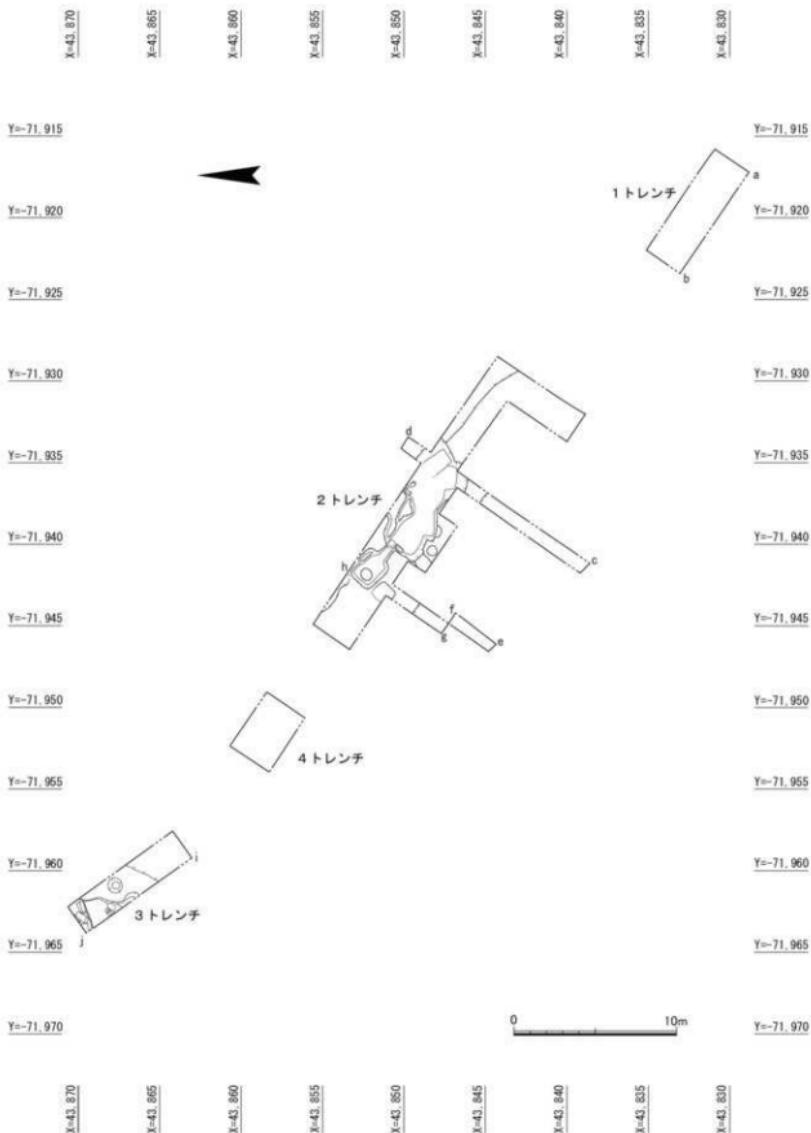


図4-26 7M区トレンチ配置図(1/300)

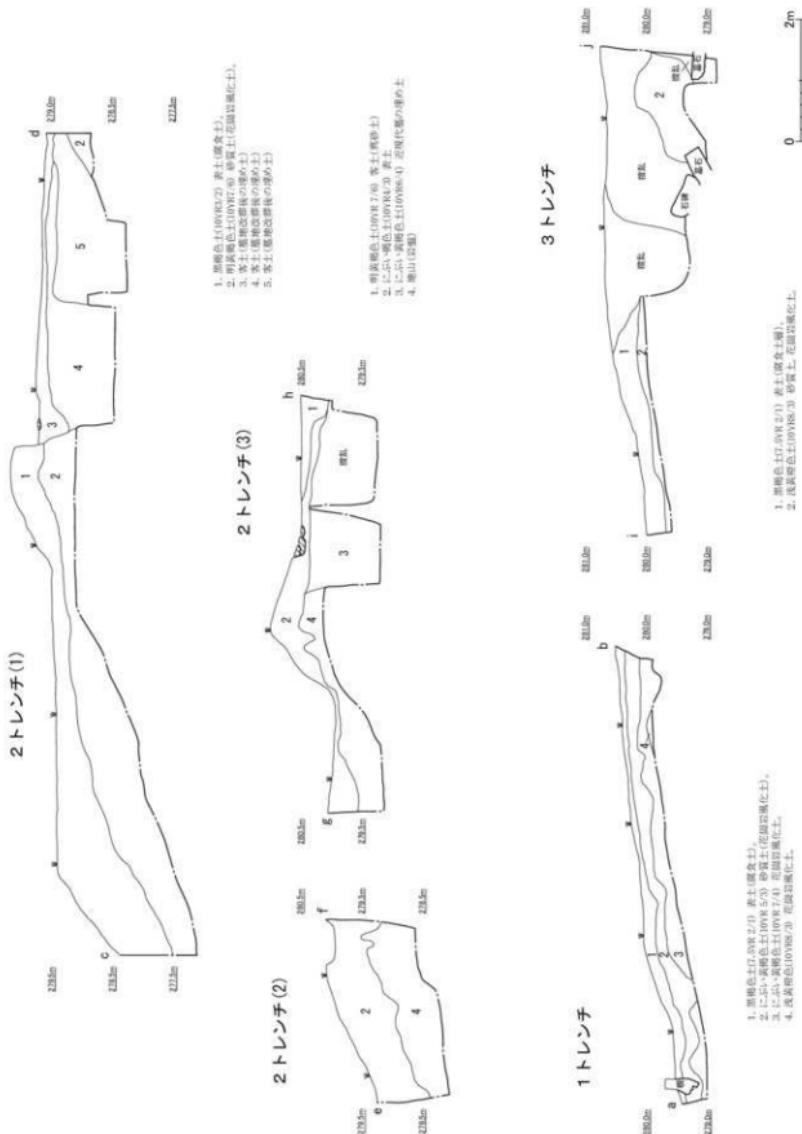


図 4-27 7M 区トレンチ土層図 (1/80)

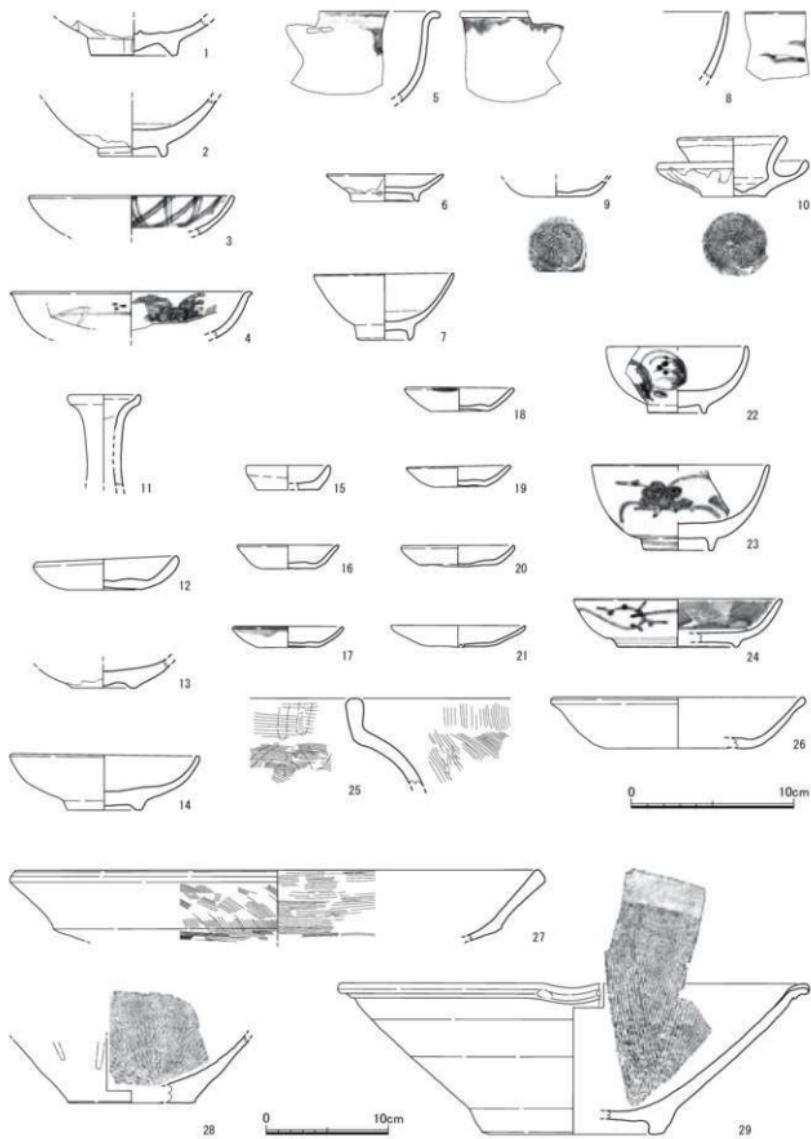


図4-28 7区出土遺物1 (1/3・1/4)

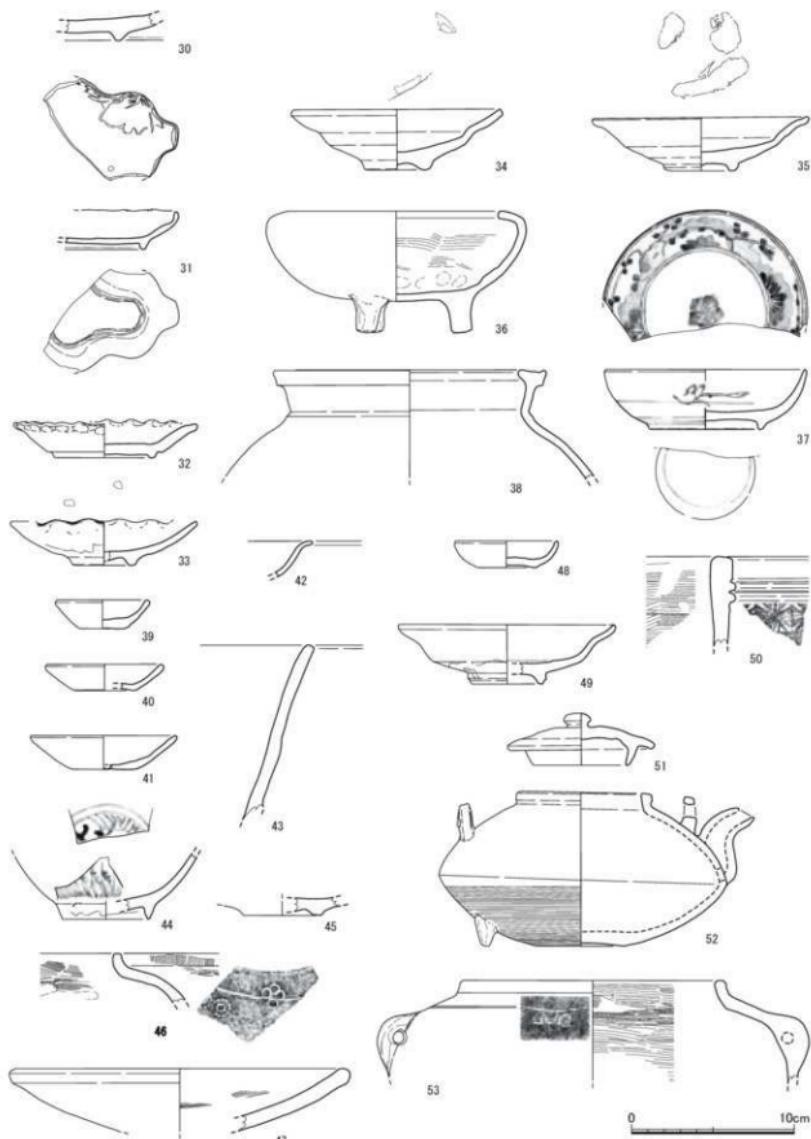


図4-29 7区出土遺物2 (1/3)

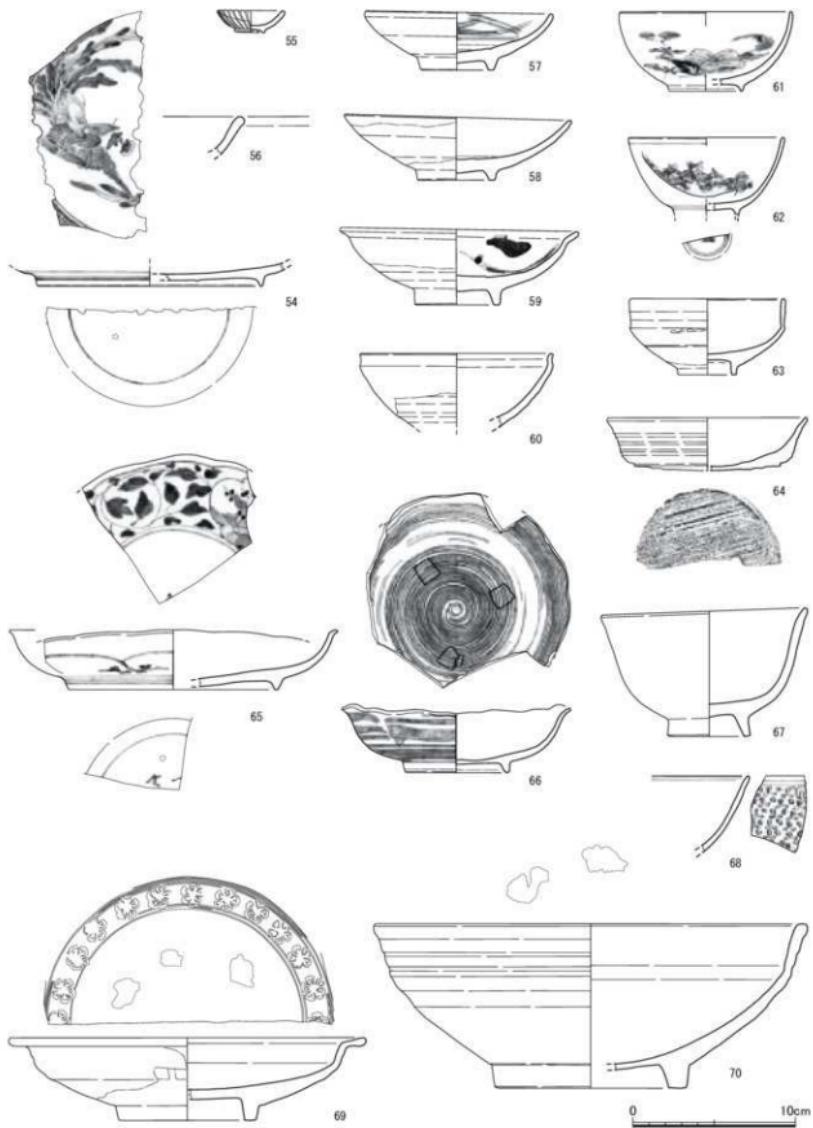


図4-30 7区出土遺物3 (1/3)

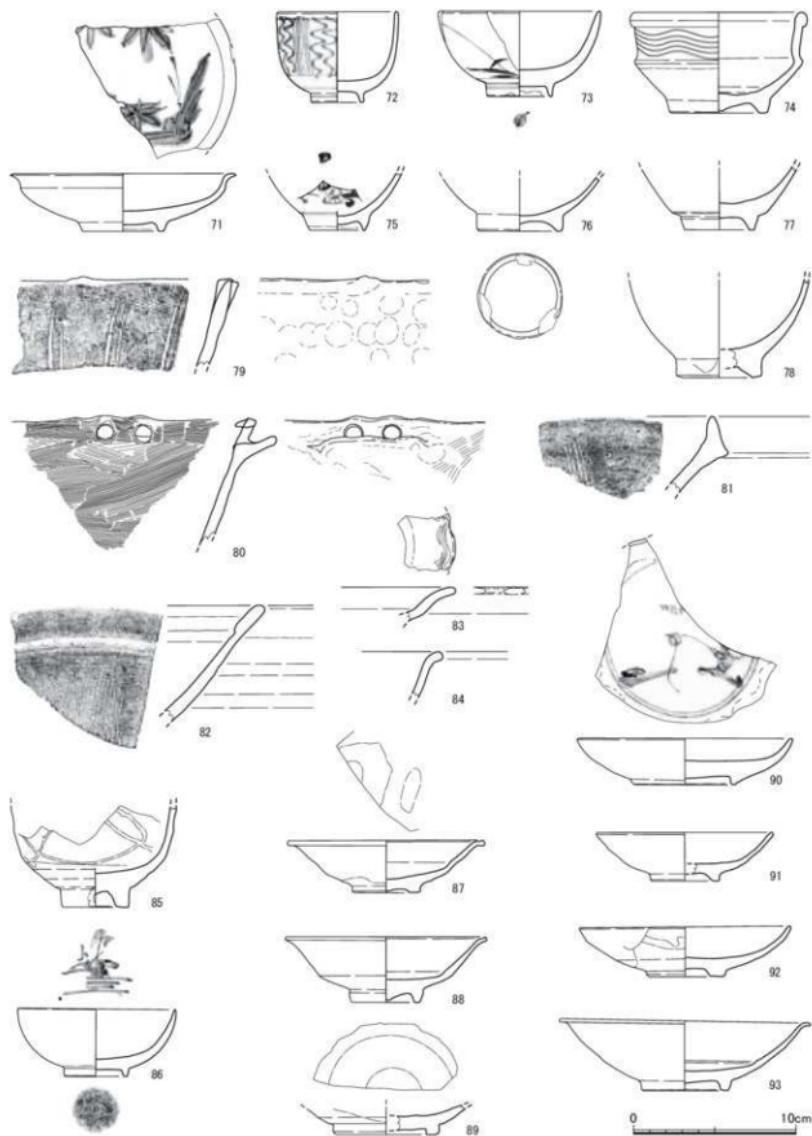


図4-31 7区出土遺物4 (1/3)

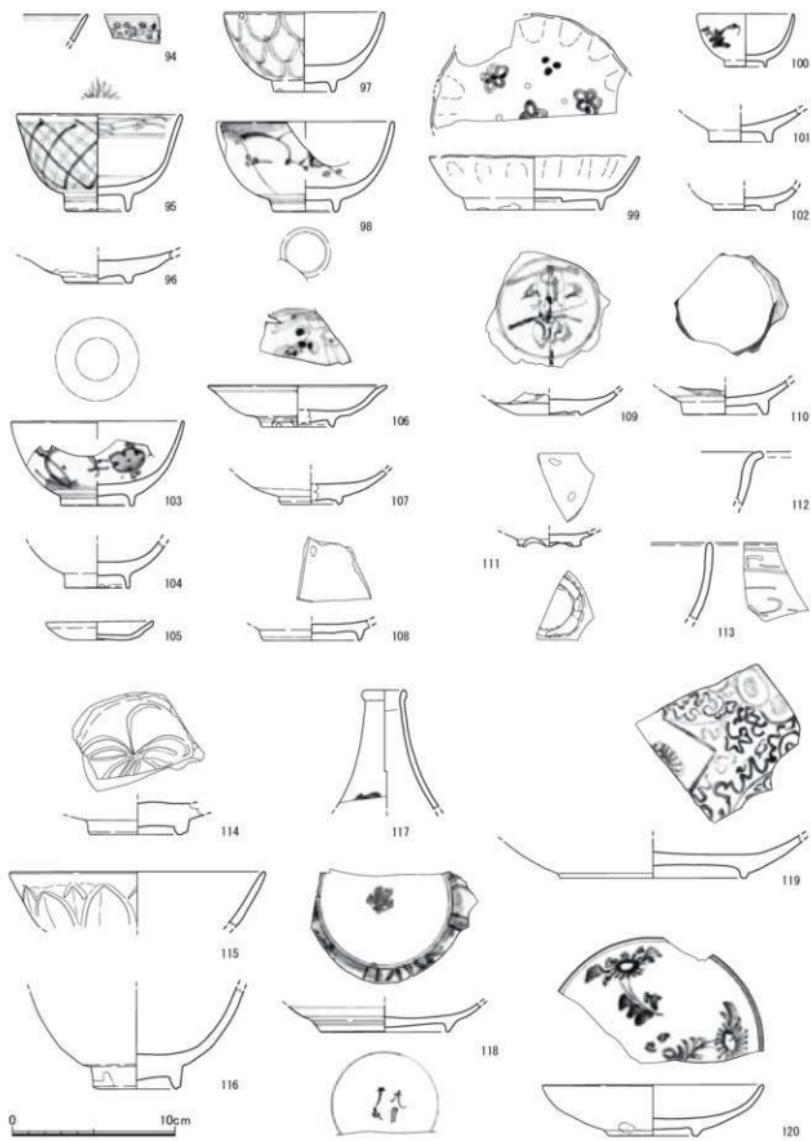


図4-32 7区出土遺物5 (1/3)

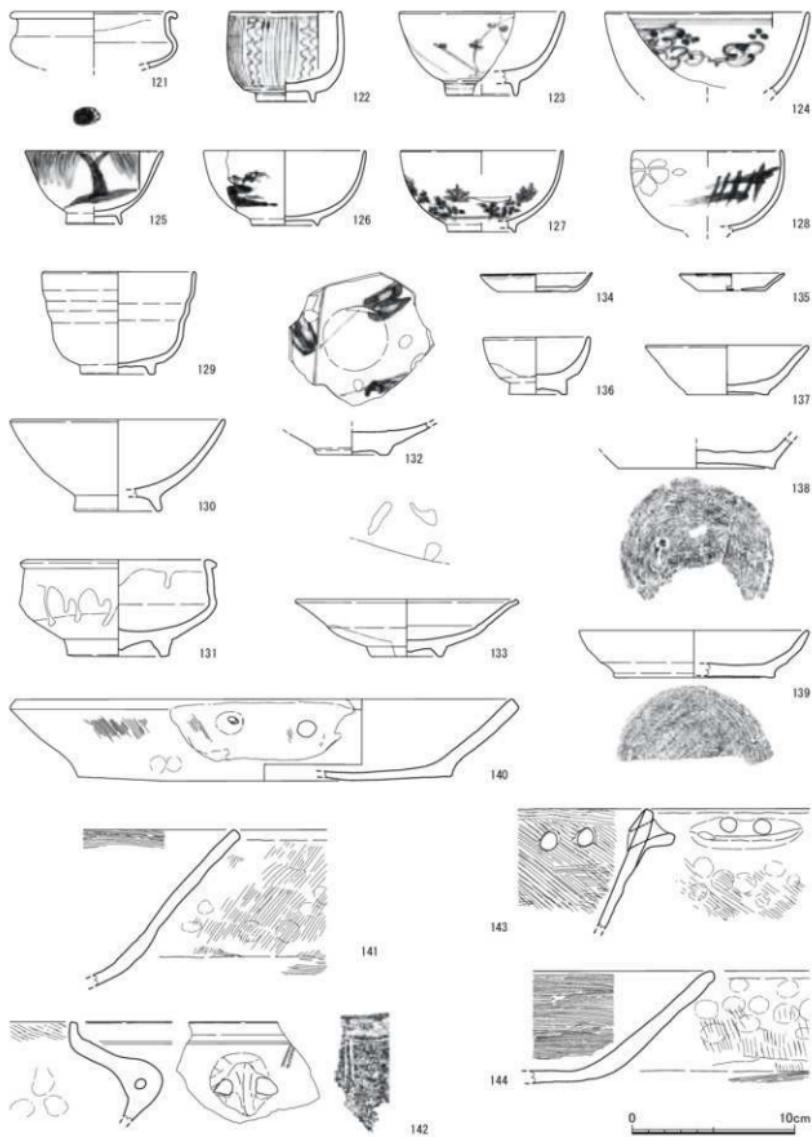


図 4-33 7 区出土遺物 6 (1 / 3)

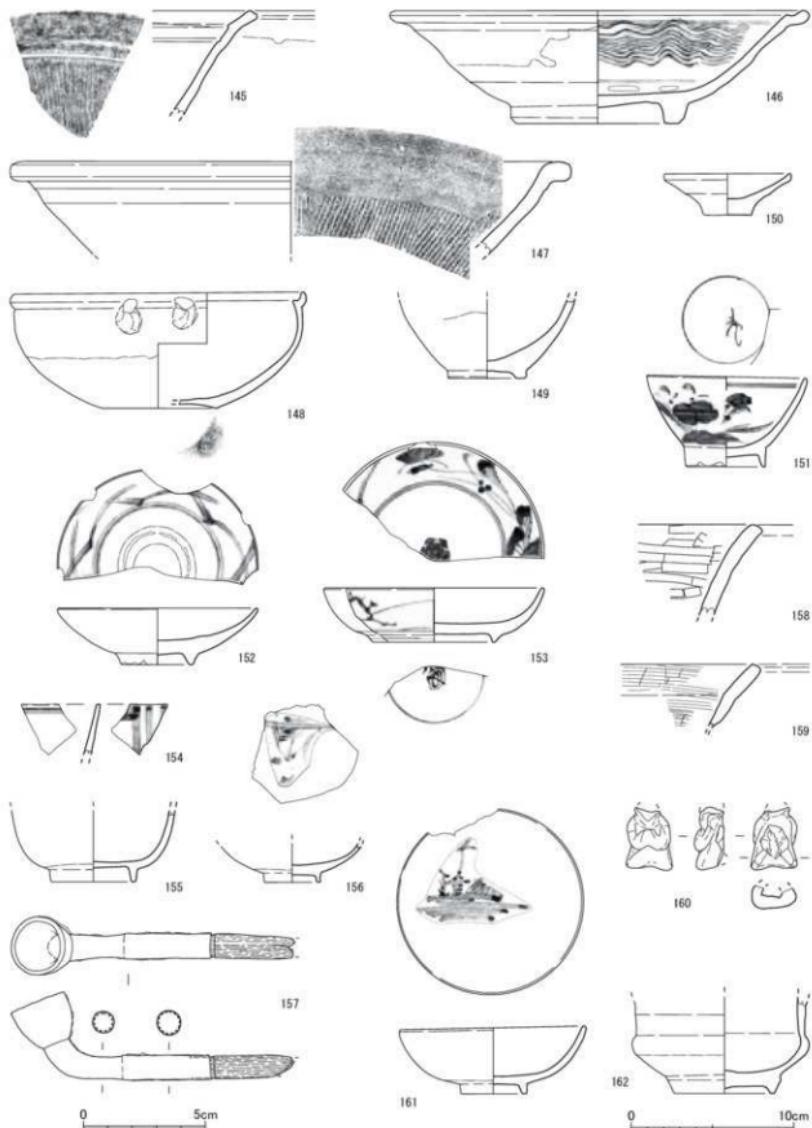


图4-34 7区出土遗物7 (1/3)

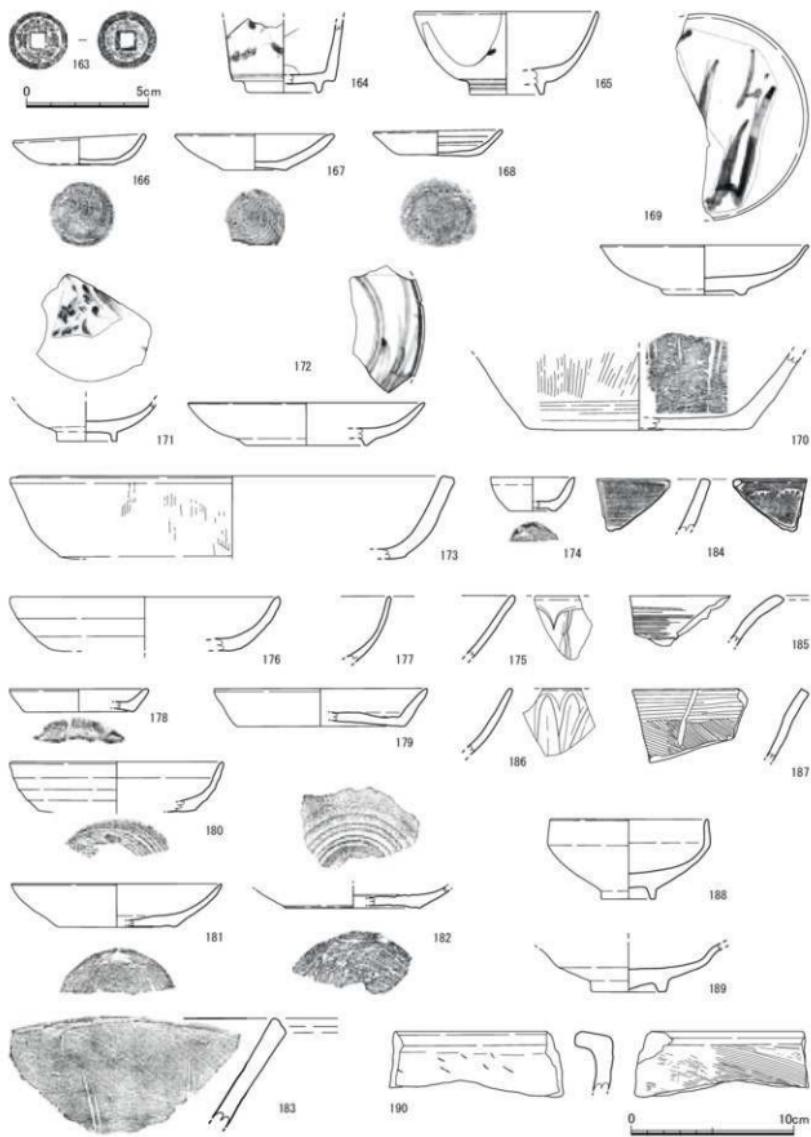


図4-35 7区出土遺物8 (1/2・1/3)

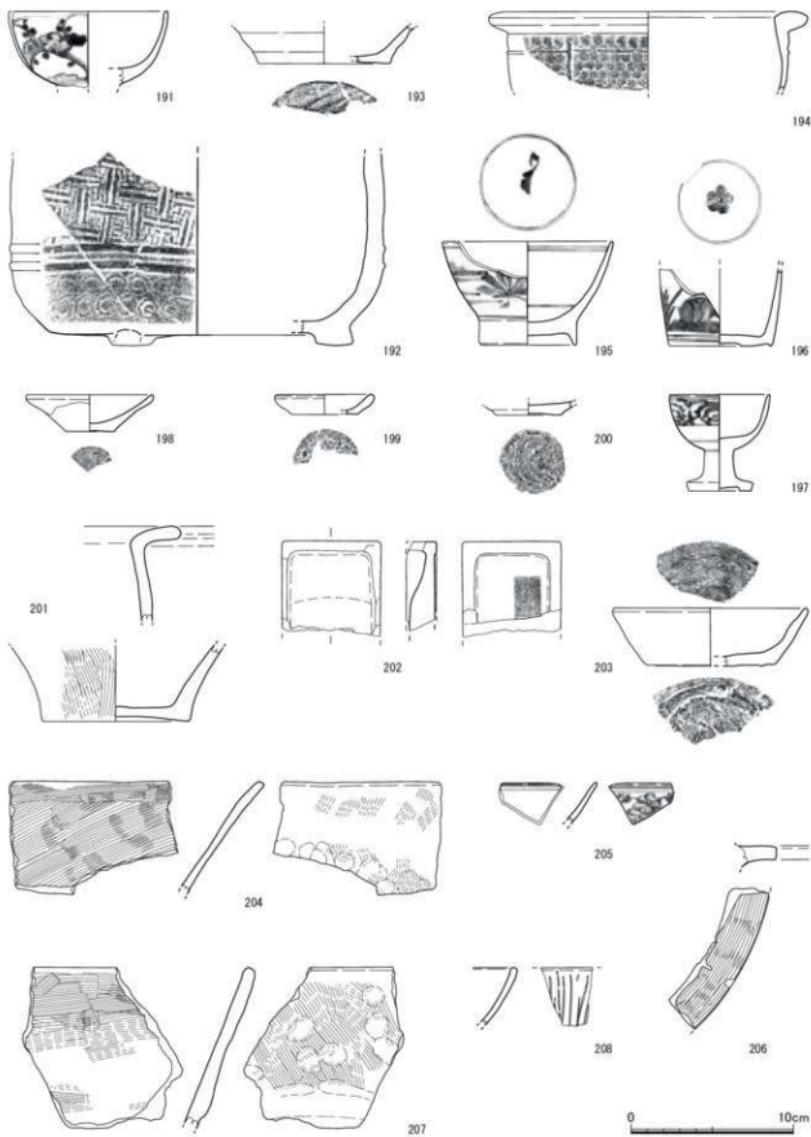


図4-36 7区出土遺物9 (1/3)

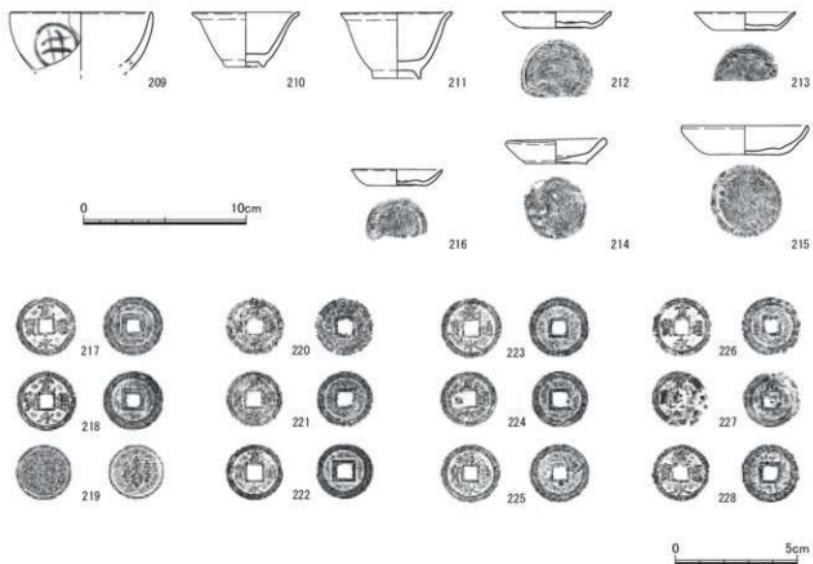


図4-37 7区出土遺物 10 (1 / 2 • 1 / 3)

表4-1 7区出土遺物一覧

横固・番号 登録番号	出土位置	種別 器種	寸法(cm)			色調	備考	写真図版 写真登録番号
			口径	底径	器高			
岡4-28-1 10002530	7A区	陶器 火入	-	5.4	-	胎土:明赤褐	肥前 19c 前半	写真図版 4-7-4 20110392
岡4-28-2 10002614	7A区 SB7029 PD	陶器 碗	-	4.2*	-	胎土:淡黄	肥前 内青山 17c 末~18c 前半 内面蛇の目軸剥ぎ	写真図版 4-7-1 20110393
岡4-28-3 10002613	7A区 SB7029 PD	染付磁器 皿	12.7*	-	-	胎土:灰白	肥前 18c 前半	写真図版 4-7-2 20110394
岡4-28-4 10002580	7A区 SB7029 PD	染付磁器 皿	14.9*	-	-	胎土:灰白	17c 末~18c 初	写真図版 4-7-3 20110395~396
岡4-28-5 10002537	7A区	陶器 鉢	-	-	-	胎土:灰白	福岡か 17c 後半~18c 代	写真図版 4-7-5 20110397
岡4-28-6 10002615	7A区	白磁 紅皿	7.2*	4.2	1.7*	胎土:灰白	肥前 18c 前半 型押成形	写真図版 4-7-6 20110398
岡4-28-7 10002538	7A区	白磁 皿	8.6*	3.5	4.1	胎土:灰白	18c 後半~19c 初 内面記込み軸剥ぎ	写真図版 4-7-11 20110399
岡4-28-8 10002535	7A区	染付磁器 皿	-	-	-	胎土:灰白	肥前 19c 代	写真図版 4-7-8 20110400
岡4-28-9 10002534	7A区	土師器 小皿	-	4.0*	-	に赤い黄緑	底部系切 外面煤付着	写真図版 4-7-9 20110401~402
岡4-28-10 10002533	7A区	陶器 灯明皿	6.8*	4.0	3.7	胎土:赤褐色	軸調:暗赤褐・灰白	写真図版 4-7-7 20110403
岡4-28-11 10002611	7A区	陶器 盤	4.5	-	-	胎土:褐灰	肥前 武蔵里牛田か 17c 前半	写真図版 4-7-13 20110404
岡4-28-12 10002607	7A区	土師器 小皿	8.9	5.0	2.1	に赤い黄緑	底部系切	写真図版 4-7-12 20110405
岡4-28-13 10002608	7A区	陶器 皿	-	3.9	-	胎土:灰白	肥前 16c 末~17c 初	写真図版 4-7-14 20110406
岡4-28-14 10002600	7A区	陶器 皿	11.7*	4.6	3.4	胎土:灰白	肥前 16c 末~17c 初	写真図版 4-7-10 20110407
岡4-28-15 10002590	7A区	土師器 小皿	5.2	3.9	1.5	に赤い黄緑	底部系切	写真図版 4-7-15 20110408
岡4-28-16 10002589	7A区	土師器 小皿	6.3*	3.3*	1.5	に赤い黄緑	底部系切	写真図版 4-7-16 20110409
岡4-28-17 10002588	7A区	土師器 小皿	6.9*	3.9*	1.3	に赤い黄緑	底部系切 口縁部油煤付着	写真図版 4-7-17 20110410
岡4-28-18 10002587	7A区	土師器 小皿	6.8*	3.8	1.5	に赤い黄緑	底部系切 口縁部油煤付着	写真図版 4-7-18 20110411
岡4-28-19 10002586	7A区	土師器 小皿	6.5	3.4	1.4	に赤い黄緑	底部系切	写真図版 4-7-19 20110412
岡4-28-20 10002585	7A区	土師器 小皿	7.0*	4.8*	1.3	に赤い黄緑	底部系切	写真図版 4-7-20 20110413
岡4-28-21 10002584	7A区	土師器 小皿	8.3*	3.7*	1.3	に赤い黄緑	底部系切	写真図版 4-7-21 20110414
岡4-28-22 10002592	7A区	染付磁器 皿	8.7*	3.6	4.1	胎土:灰白	肥前 18c 末~19c 前半	写真図版 4-7-22 20110415
岡4-28-23 10002591	7A区	染付磁器 皿	11.0*	4.3	5.3	胎土:灰白	肥前 波佐見 18c 中頃 見込み蛇の目軸剥ぎ	写真図版 4-7-24 20110416
岡4-28-24 10002593	7A区	染付磁器 皿	12.4*	7.4*	3.0	胎土:灰白	肥前 有田 17c 末~18c 前半 墨剥き	写真図版 4-7-23 20110417
岡4-28-25 10002582	7A区	瓦質土器 茶釜	-	-	-	外:に赤い黄 内:黄灰	外面煤付着	写真図版 4-7-25 20110418
岡4-28-26 10002583	7A区	土師器 杯	15.7*	9.0*	3.2	に赤い黄緑	底部系切 板状圧痕	写真図版 4-7-26 20110419
岡4-28-27 10002581	7A区	土師器 鍋	43.9*	-	-	に赤い黄緑	外面煤付着	写真図版 4-7-28 20110420
岡4-28-28 10002594	7A区	陶器 搖籃	-	10.5*	-	胎土:黄灰 軸調:褐	肥前 17c 後半	写真図版 4-7-29 20110421~422
岡4-28-29 10002595	7A区	佑器 搖籃	38.5*	14.9*	12.4	胎土:に赤い黄 軸調:黒褐	肥前 18c 後半~19c 前半	写真図版 4-7-30 20110423
岡4-29-30 10002612	7A区	陶器 皿	-	-	-	胎土:灰白	肥前か 17c 後半	写真図版 4-7-27 20110424~425
岡4-29-31 10002610	7A区	白磁 皿	-	-	2.5	胎土:灰白	肥前 有田 1650~60年代か	写真図版 4-7-31 20110426
岡4-29-32 10002528	7A区 北包含層	陶器 皿	11.3	6.2	2.4	胎土:灰黄 軸調:に赤い、赤褐・褐灰	湘川・美濃 16c 末	写真図版 4-7-32 20110427

表4-1 7区出土遺物一覧

査定・番号 登録番号	出土位置	種別 器種	寸法(cm)			色調	備考	写真図版 写真登録番号
			口径	底径	器高			
図4-29-33 10002526	7A区 北台含層	陶器 皿	11.5*	3.9*	2.9	胎土：灰褐色 釉調：灰オーリープ・黒	肥前 1590～1600年代 内面胎土削痕	写真図版 4-7-33 20110428・429
図4-29-34 10002527	7A区 北台含層	陶器 皿	13.0*	4.0	3.8	胎土：にふい黄褐色 釉調：灰オーリープ	肥前 16c末～17c初 内面胎土削痕	写真図版 4-7-34 20110430
図4-29-35 10002528	7A区 北台含層	陶器 皿	13.4*	4.3	3.3	胎土：灰白色 釉調：灰オーリープ	肥前 1610～30年代 内面砂目窓	写真図版 4-7-35 20110431
図4-29-36 10002532	7A区 北台含層	土師器 香炉	12.6*	16.0*	7.5	にふい黄褐色・にふい橙	口縁部煤付着	写真図版 4-7-38 20110432
図4-29-37 10002530	7A区 北台含層	染付磁器 皿	12.5*	6.7	3.7	胎土：灰白色	肥前 戸佐見 18c前半	写真図版 4-7-36 20110433
図4-29-38 10002531	7A区 南台含層	陶器 甕	16.8*	-	-	胎土：灰褐色	肥前 16c末～17c初	写真図版 4-7-37 20110434
図4-29-39 10002524	7B区 土師器 小皿	土師器 小皿	5.8*	1.4*	1.8	外：にふい黄褐色 内：浅黄褐色	底部系切	写真図版 4-8-39 20110435
図4-29-40 10002520	7B区 SB7032 PI	土師器 小皿	7.3*	3.9*	1.6	橙	底部系切	写真図版 4-8-42 20110436
図4-29-41 10002523	7B区 SB7034 PK	土師器 小皿	9.0*	4.1*	2.1	橙	底部系切	写真図版 4-8-41 20110437
図4-29-42 10002521	7B区 SB7034 PI	白磁 皿	-	-	-	胎土：灰白色	森田E群	写真図版 4-8-40 20110438
図4-29-43 10002525	7B区 瓦質土器 鍋	瓦質土器 鍋	-	-	-	内：暗灰黃	外面煤付着	写真図版 4-8-43 20110439
図4-29-44 10002578	7B区 青花 碗	-	5.4	-	-	胎土：灰白色	景德镇窯系 16c代(後半まで)	写真図版 4-8-45 20110440・441
図4-29-45 10002622	7B区 SB7034 PK	陶器 皿	4.75*	-	-	胎土：にふい橙	肥前	写真図版 4-8-44 20110442・443
図4-29-46 10002627	7B区 SB7036 PD 茶釜	瓦質土器 茶釜	-	-	-	外：褐灰・灰黃褐色 内：灰黃褐色	写真図版 4-8-46 20110444	
図4-29-47 10002626	7B区 SB7035 PE	土師器 焰壺	21.0*	-	-	にふい橙	煤付着	写真図版 4-8-49 20110445
図4-29-48 10002618	7B区 土師器 小皿	土師器 小皿	6.4*	3.7*	1.7	橙	底部系切	写真図版 4-8-48 20110446
図4-29-49 10002616	7B区 陶器 皿	陶器 皿	13.3*	4.4*	3.7	胎土：灰白色	肥前 内野山 17c末～18c前半 内面胎の日輪剥ぎ	写真図版 4-8-47 20110447
図4-29-50 10002619	7B区 瓦質土器 火鉢	-	-	-	-	黄灰	写真図版 4-8-50 20110448	
図4-29-51 10002566	7B区 陶器 土瓶 盖	陶器 土瓶 盖	5.9 最大径 9.1	3.2	-	外：淡橙 内：黒褐色	薩摩 19c前半～幕末 煤付着 胎衣理納か 10002567とセット	写真図版 4-8-51 20110449
図4-29-52 10002567	7B区 陶器 土瓶 身	陶器 土瓶 身	8.3	5.4	9.5	外：にふい赤褐色 内：黒褐色	薩摩 19c前半～幕末 煤付着 胎衣理納か 10002566とセット	写真図版 4-8-52 20110450
図4-29-53 10002617	7B区 瓦質土器 茶釜	瓦質土器 茶釜	16.1*	-	-	外：黄褐色 内：黄灰	写真図版 4-8-53 20110451	
図4-30-54 10002579	7B区 染付磁器 皿	-	13.9*	-	-	胎土：灰白色	肥前 有田 1690～1710年代	写真図版 4-8-54 20110452・453
図4-30-55 10002597	7B区 白磁 紅皿	白磁 紅皿	4.2	1.9	1.4	胎土：灰白色	肥前 18c後半～19c初	写真図版 4-8-55 20110454
図4-30-56 10002557	7B区 青磁 皿	-	-	-	-	胎土：灰白色	竜泉窯系	写真図版 4-8-56 20110455
図4-30-57 10002542	7B区 染付磁器 皿	染付磁器 皿	11.6	4.5	3.6	胎土：灰白色	肥前 波佐見 1750～1810年代 内面胎の日輪剥ぎ	写真図版 4-8-57 20110456
図4-30-58 10002598	7B区 陶器 皿	陶器 皿	14.0*	4.8	4.1	胎土：灰白色	肥前 内野山 17c後半 内面見込み盤の日輪剥ぎ	写真図版 4-8-58 20110457
図4-30-59 10002600	7B区 陶器 皿	陶器 皿	14.7	5.1	4.8	胎土：浅黄褐色	肥前 内野山 17c中頃～後半 内面見込み盤の日輪剥ぎ	写真図版 4-8-59 20110458
図4-30-60 10002572	7B区 陶器 皿	-	11.9*	-	-	胎土：にふい黄褐色	肥前 17c初	写真図版 4-8-60 20110459
図4-30-61 10002548	7B区 染付磁器 皿	染付磁器 皿	10.7*	4.5*	4.9	胎土：灰白色	肥前 有田 18c前半	写真図版 4-8-61 20110460
図4-30-62 10002549	7B区 染付磁器 皿	-	9.7	-	-	胎土：灰白色	有田 17c後半	写真図版 4-8-62 20110461
図4-30-63 10002568	7B区 陶器 皿	陶器 皿	9.6*	3.6	4.7	胎土：灰黃	肥前 18c前半	写真図版 4-8-64 20110462
図4-30-64 10002563	7B区 土師器 杯	土師器 杯	12.3*	9.0*	3.3	外：にふい橙 内：にふい黄褐色	底部系切 板状圧痕	写真図版 4-8-63 20110463

表4-1 7区出土遺物一覧

撰別・番号 登録番号	出土位置	種別 器種	寸法(cm)			色調	備考	写真図版 写真登録番号
			口径	底径	高さ			
図4-30-65 10002539	7B区	染付磁器 皿	20.2*	12.8*	3.7	胎土：灰白	肥前 17c末～18c初頭 窯内に日食	写真図版 4-8-65 20110464・465
図4-30-66 10002603	7B区	陶器 皿	14.1*	6.4	4.2	胎土：灰	肥前 川内鶴山窯跡 1690～1740 年代 方形に輪削ぎ 3箇所	写真図版 4-8-66 20110466
図4-30-67 10002574	7B区	陶器 碗	12.7*	5.1*	7.9	胎土：灰白	肥前 内野山か 17c前半～中頃	写真図版 4-8-67 20110467
図4-30-68 10002552	7B区	青花 碗	-	-	-	胎土：灰白	景德镇窯系小野C群	写真図版 4-8-68 20110468
図4-30-69 10002563	7B区	陶器 碗	22.0*	8.4*	5.1	胎土：にぶい赤褐色 釉調：暗赤褐色・暗灰黄・灰白	肥前 武雄周辺 1730～40年代 三筋手 窯内1頭	写真図版 4-8-69 20110469
図4-30-70 10002560	7B区	陶器 碗	26.7*	11.7*	10.1	胎土：にぶい赤褐色 釉調：黒褐	肥前 17c中頃～後半 内面斜口板	写真図版 4-8-71 20110470
図4-31-71 10002543	7B区	染付磁器 皿	13.9*	5.0*	3.6	胎土：灰白	肥前 17c前半	写真図版 4-8-70 20110471
図4-31-72 10002544	7B区	染付磁器 皿	7.5*	3.1*	5.6	胎土：灰白	肥前 波佐見 19c前半	写真図版 4-9-72 20110472
図4-31-73 10002551	7B区	染付磁器 碗	10.0*	4.0	5.2	胎土：灰白・にぶい黄褐色 釉調：にぶい赤褐色	肥前 波佐見 18c初	写真図版 4-9-73 20110473
図4-31-74 100002559	7B区	陶器 火入	10.9*	6.1	6.2	胎土：明赤褐色 釉調：にぶい赤褐色	肥前 17c後半～18c前半 農村に日食	写真図版 4-9-74 20110474
図4-31-75 10002550	7B区	青花 碗	-	3.4*	-	胎土：灰白	景德镇窯系	写真図版 4-9-77 20110475
図4-31-76 10002569	7B区	陶器 碗	-	5.3	-	胎土：灰白	肥前 内野山 17c前半 染付胎土3箇所	写真図版 4-9-76 20110476
図4-31-77 10002571	7B区	陶器 碗	-	4.3	-	胎土：にぶい橙	肥前 17c前半	写真図版 4-9-78 20110477
図4-31-78 10002573	7B区	陶器 碗	-	5.2*	-	胎土：灰白	肥前 内野山 17c後半	写真図版 4-9-75 20110478
図4-31-79 10002564	7B区	瓦質土器 擂鉢	-	-	-	外：灰黃褐色 内：灰黃	外面保付着	写真図版 4-9-79 20110479
図4-31-80 10002565	7B区	瓦質土器 鍋	-	-	-	黄灰	外面保付着	写真図版 4-9-81 201104780
図4-31-81 10002555	7B区	陶器 擂鉢	-	-	-	外：灰赤・にぶい赤褐色 内：にぶい赤褐色	懸前 16c末～17c初	写真図版 4-9-80 20110481
図4-31-82 10002561	7B区	陶器 擂鉢	-	-	-	胎土：褐灰 釉調：暗赤褐色	肥前 17c後半	写真図版 4-9-84 20110482
図4-31-83 10002558	7B区 横出面	青磁 皿	-	-	-	胎土：灰白	竜泉窯系	写真図版 4-9-82 20110483
図4-31-84 10002556	7B区 横出面	青磁 碗	-	-	-	胎土：灰白	竜泉窯系	写真図版 4-9-83 20110484
図4-31-85 10002570	7B区	陶器 碗	-	4.1	-	胎土：褐灰	肥前 武雄黒牟田か 1600～40年代 そうめんうけ	写真図版 4-9-85 20110485
図4-31-86 10002596	7B区	陶器 碗	9.8*	3.9	4.7	胎土：灰白	肥前 17c末～18c前半 底部見込24cm印刷・刻印「清口」 (二はす印)	写真図版 4-9-86 20110486
図4-31-87 10002605	7B区	陶器 皿	12.2*	4.2	3.2	胎土：灰白	肥前 内野山 16c末～17c初頭 内面見込26cm直面	写真図版 4-9-87 20110487
図4-31-88 10002602	7B区	陶器 皿	12.4	4.2	4.0	胎土：灰白	肥前 内野山 1610～30年代	写真図版 4-9-88 20110488
図4-31-89 10002554	7B区 横出面	青磁 皿	-	6.5*	-	胎土：にぶい黄褐色	竜泉窯系 内面蛇の目状削ぎ	写真図版 4-9-89 20110489・490
図4-31-90 10002541	7B区	染付磁器 皿	13.3*	6.3	2.9	胎土：灰白	肥前 17c代	写真図版 4-9-90 20110491
図4-31-91 10002506	7B区 横出面	陶器 皿	10.9*	4.3*	3.0	胎土：にぶい黄褐色	朝鮮か 16c代から 内面見込24cm直面	写真図版 4-9-91 20110492・493
図4-31-92 10002599	7B区	陶器 皿	13.0	4.5	3.1	胎土：灰白	肥前 内野山 17c後半 内面見込26cmの日輪削ぎ	写真図版 4-9-92 20110494
図4-31-93 10002601	7B区 表土	陶器 皿	15.2	5.3	4.5	胎土：灰白	肥前 内野山 17c前半 内面見込25cm直面	写真図版 4-9-93 20110495
図4-32-94 10002553	7B区 表土	青花 碗	-	-	-	胎土：灰白	景德镇窯系小野C群	写真図版 4-9-94 20110496
図4-32-95 10002546	7B区 表土	染付磁器 碗	10.2	3.7	6.0	胎土：灰白	肥前 1820～60年代	写真図版 4-9-95 20110497

表4-1 7区出土遺物一覧

相国・番号 登録番号	出土位置	種別 器種	寸法(cm)			色調	備考	写真図版 写真登録番号
			口径	底径	高さ			
図4-32-96 10002604	7B区 表土	陶器 皿	-	4.2	-	胎土:灰黄 釉調:灰褐	肥前 1600~30年代	写真図版 4-9-96 20110498
図4-32-97 10002545	7B区 表土	染付磁器 碗	9.9*	3.7	4.9	胎土:灰白	肥前 波佐見 18c 中頃~後半	写真図版 4-9-97 20110499
図4-32-98 10002547	7B区 表土	染付磁器 碗	11.0*	4.0*	5.6	胎土:灰白	肥前 18c 前半~中頃 内面蛇の目軸割ぎ	写真図版 4-9-102 20110500
図4-32-99 10002549	7B区 表土	染付磁器 皿	13.0*	8.4*	3.4	胎土:灰白	肥前 19c 前半 蛇の目凹形高台 内面直腹	写真図版 4-9-98 20110501
図4-32-100 11000015	7C区	染付磁器 小皿	6.0	2.6	3.25	胎土:灰白	肥前 19c 前半	写真図版 4-9-99 20110502
図4-32-101 11000013	7C区	陶器 皿	-	3.9*	-	胎土:灰白	肥前 17c 後半~18c 前半	写真図版 4-9-100 20110503
図4-32-102 11000014	7C区	白磁 碗	-	3.8*	-	胎土:灰白	肥前か 18c 未か	写真図版 4-9-101 20110504
図4-32-103 11000016	7C区	染付磁器 碗	10.6*	4.5	5.2	胎土:灰白	肥前 18c 中頃~後半 内面蛇の目軸割ぎ	写真図版 4-9-107 20110505
図4-32-104 11000012	7C区	白磁 碗	-	4.0	-	胎土:灰白	肥前 18c 前半~中葉	写真図版 4-9-103 20110506
図4-32-105 11000021	7C区	土師器 小皿	6.6	3.2	1.2	浅黄柾	底部糸切	写真図版 4-9-104 20110507
図4-32-106 10002576	7C区 検出面	青花 皿	-	3.8	-	胎土:灰白	県衙窯系細小野B1群 16c後半~17c 初頭	写真図版 4-9-105 20110508・509
図4-32-107 11000031	7C区 検出面	白磁 皿	11.0*	4.4*	2.6	胎土:灰白	森田D群か	写真図版 4-9-106 20110510
図4-32-108 11000032	7C区 検出面	白磁 皿	-	3.9*	2.1	胎土:灰白	森田E群 高台内露胎	写真図版 4-9-108 20110511
図4-32-109 10002575	7C区 検出面	青花 皿	-	6.2*	-	胎土:淡黄 釉調:明オリーブ灰	福建系 小野C群 16c後半	写真図版 4-9-109 20110512・513
図4-32-110 10002577	7C区 検出面	青花 皿	-	5.2	-	胎土:灰白	福建系 16c後半 内面見込み・豊付から高台内露胎	写真図版 4-9-110 20110514・515
図4-32-111 11000033	7C区 検出面	白磁 皿	-	3.9*	-	胎土:灰白	森田D群	写真図版 4-9-111 20110516・517
図4-32-112 11000035	7C区 表土	青磁 碗	-	-	-	胎土:灰白 釉調:オリーブ灰	電竈窯系檢上田D類	写真図版 4-10-112 20110518
図4-32-113 11000034	7C区 表土	青磁 碗	-	-	-	胎土:灰白	電竈窯系檢上田C類	写真図版 4-10-113 20110519
図4-32-114 11000036	7C区 検出面	青磁 碗	-	6.2*	-	胎土:灰白 釉調:オリーブ黄	電竈窯系	写真図版 4-10-114 20110520・521
図4-32-115 11000037	7C区 検出面	青磁 碗	15.7*	-	-	胎土:灰白 釉調:オリーブ黄	電竈窯系 檀II bc類	写真図版 4-10-115 20110522
図4-32-116 11000038	7C区 検出面	青磁 碗	-	5.4	-	胎土:椎	電竈窯系 高台内露胎	写真図版 4-10-116 20110523
図4-32-117 11000006	7C区 検出面	染付磁器 皿	2.6	-	-	胎土:灰白	肥前 19c 代	写真図版 4-10-117 20110524
図4-32-118 11000003	7C区 検出面	染付磁器 皿	-	8.0	-	胎土:灰白	有田か 18c 前半	写真図版 4-10-118 20110525・526
図4-32-119 11000005	7C区 検出面	色絵磁器 皿	-	11.5*	-	胎土:灰白	肥前 1650年代	写真図版 4-10-119 20110527
図4-32-120 11000002	7C区 検出面	染付磁器 皿	13.6*	5.5*	3.2	胎土:灰白	肥前 17c 前半	写真図版 4-10-120 20110528
図4-33-121 11000007	7C区 検出面	青磁 火入	10.3*	10.2*	-	胎土:灰白 釉調:明オリーブ灰	肥前 18c	写真図版 4-10-123 20110529
図4-33-122 11000008	7C区 検出面	染付磁器 碗	6.9*	3.9*	5.5	胎土:灰白	波佐見 19c 前半	写真図版 4-10-121 20110530
図4-33-123 11000009	7C区 検出面	染付磁器 碗	10.2*	4.4*	5.2	胎土:にぶい黄柾	波佐見 18c 中頃~後半	写真図版 4-10-122 20110531
図4-33-124 11000010	7C区 検出面	染付磁器 碗	12.5*	-	-	胎土:白	肥前 17c 後半	写真図版 4-10-124 20110532
図4-33-125 11000019	7C区 検出面	染付磁器 碗	8.5	3.45	4.5	胎土:灰白	肥前 18c 末~19c 前半	写真図版 4-10-125 20110533
図4-33-126 11000018	7C区 検出面	染付磁器 碗	10.0*	4.15	4.6	胎土:灰白	肥前 18c 前半~中頃	写真図版 4-10-126 20110534
図4-33-127 11000017	7C区 検出面	染付磁器 碗	10.0	4.2	5.0	胎土:灰白	有田 1710~1750年代	写真図版 4-10-127 20110535

表4-1 7区出土遺物一覧

相国・番号 登録番号	出土位置	種別 器種	寸法(cm)			色調	備考	写真図版 写真登録番号
			口径	底径	高さ			
図4-33-128 11000039	7C区 検出面	陶器 碗	9.2*	-	-	胎土:灰白 釉調:淡黄	関西系色鉢陶器 18c代	写真図版 4-10-128 20110536
図4-33-129 11000041	7C区 検出面	陶器 碗	9.5*	4.6	6.3	胎土:灰	肥前 17c後半	写真図版 4-10-130 20110537
図4-33-130 11000042	7C区 検出面	陶器 碗	13.2*	5.4*	5.6	胎土:灰白 釉調:淡黄	肥前 17c後半 玉子手	写真図版 4-10-131 20110538
図4-33-131 11000043	7C区 検出面	陶器 火丸	12.0*	6.3*	5.9	胎土:棕	肥前 17c後半 二彩手	写真図版 4-10-129 20110539
図4-33-132 11000044	7C区 検出面	陶器 皿	-	4.5	-	胎土:灰白 釉調:灰オリーブ	肥前 1590~1610年代 脱胎津	写真図版 4-10-132 20110540・541
図4-33-133 11000045	7C区 検出面	陶器 皿	13.7*	4.5	3.5	胎土:灰白 釉調:灰黄	肥前 1610~30年代 内面見込み口直3箇所	写真図版 4-10-133 20110542
図4-33-134 11000022	7C区 検出面	土師器 小皿	6.9	4.9	1.2	浅黄褐	底部糸切 油煤付着	写真図版 4-10-136 20110543
図4-33-135 11000030	7C区 検出面	土師器 小皿	6.5	4.1	1.1	に赤い橙	底部糸切 油煤付着 底部穿孔	写真図版 4-10-141 20110544
図4-33-136 11000047	7C区 検出面	陶器 小杯	6.6	3.6	3.5	胎土:灰白 釉調:明褐色	内野山 17c末~18c前半	写真図版 4-10-142 20110545
図4-33-137 11000023	7C区 検出面	土師器 杯	10.0*	5.0	3.0	に赤い黄褐	底部糸切	写真図版 4-10-134 20110546
図4-33-138 11000029	7C区 検出面	土師器 杯	-	9.6	-	淡黄	底部糸切	写真図版 4-10-137 20110547
図4-33-139 11000024	7C区 検出面	土師器 杯	14.1*	9.9*	2.9	棕	底部糸切 板状圧痕	写真図版 4-10-138 20110548
図4-33-140 11000020	7C区 検出面	瓦質土器 鍋	31.2	22.9	5.0	に赤い黄褐	煤付着	写真図版 4-10-135 20110549
図4-33-141 11000026	7C区 検出面	瓦質土器 鍋	-	-	-	棕		写真図版 4-10-143 20110550
図4-33-142 11000027	7C区 検出面	瓦質土器 茶釜	-	-	-	棕・黒	煤付着	写真図版 4-10-139 20110551
図4-33-143 11000028	7C区 検出面	瓦質土器 鍋	-	-	-	外:黒褐 内:灰黄	煤付着	写真図版 4-10-140 20110552
図4-33-144 11000025	7C区 検出面	瓦質土器 鍋	-	-	-	黄灰		写真図版 4-10-144 20110553
図4-34-145 11000059	7C区 検出面	陶器 信持	-	-	-	胎土:黒褐 釉調:暗褐	肥前 17c中頃	写真図版 4-11-145 20110554
図4-34-146 11000051	7C区 検出面	陶器 皿	25.8*	10.6	6.9	胎土:赤褐	肥前 17c後半~18c初 二彩手 内面見込み砂目直	写真図版 4-11-146 20110555
図4-34-147 11000049	7C区 検出面	陶器 信持	34.5*	-	-	胎土:に赤い橙 釉調:黒褐	肥前 18~19c代	写真図版 4-11-147 20110556
図4-34-148 11000044	7C区 検出面	陶器 鍋	-	7.0	7.1	胎土:灰白 釉調:黄褐	関西系軟質施釉陶器 18~19c 煤付着 底部「無害」の刻印	写真図版 4-11-148 20110557
図4-34-149 11000042	7C区 表土	陶器 碗	-	4.8*	-	胎土:に赤い橙 釉調:オリーブ	肥前 1580~1610年代	写真図版 4-11-149 20110558
図4-34-150 11000041	7C区 表土	陶器 灯明貝	7.8	3.0	2.5	外:棕 内:に赤い赤褐	肥前 17c後半~18c代 油煤付着	写真図版 4-11-150 20110559
図4-34-151 11000011	7C区 表土	染付磁器 碗	9.9	4.9	5.7	胎土:灰白	肥前 18c末~19前半	写真図版 4-11-151 20110560
図4-34-152 11000004	7C区 表土	染付磁器 皿	12.4	4.5	3.5	胎土:灰白	波佐見 18c中頃~後半 内面蛇の目剥落	写真図版 4-11-152 20110561
図4-34-153 11000001	7C区 表土	染付磁器 皿	13.6*	7.5*	3.3	胎土:灰白	肥前 17c末~18c前半	写真図版 4-11-153 20110562
図4-34-154 10002044	71区 SK7018	染付磁器 猪口	-	-	-	胎土:灰白	肥前 18c末~19c前半	写真図版 4-11-154 20110563・564
図4-34-155 10002042	71区 SK7018	陶器 碗	-	5.1*	-	胎土:浅黄褐 釉調:明黄褐・黒褐	肥前 18c前半 内外面質入	写真図版 4-11-155 20110565
図4-34-156 10002043	71区 SK7018	陶器 碗	-	3.4	-	胎土:灰白 釉調:浅黄・暗オリーブ褐	肥前 17c前半~18前半	写真図版 4-11-156 20110566・0567
図4-34-157 10003103	71区 キル謹首	青銅製品	-	2.4	-	-	竹製羅宇残存 様は雅の最大径	写真図版 4-11-157 20110568・569
図4-34-158 10002046	71区 SK7019	瓦質土器 鍋	-	-	-	に赤い褐・黒褐	煤付着	写真図版 4-11-159 20110570・571
図4-34-159 10002047	71区 SK7019	瓦質土器 鍋	-	-	-	灰白		写真図版 4-11-158 20110572

表4-1 7区出土遺物一覧

掘削・番号 登録番号	出土位置	種別 器種	寸法(cm)			色調	備考	写真図版 写真登録番号
			口径	底径	高さ			
図4-34-160 10002050	71区 SK7020	白磁 灯芯押	長 3.9*	幅 2.9	-	胎土：白 釉調：明暦灰	肥前 1630～50年代	写真図版 4-11-160 20110573・574
図4-34-161 10002049	71区 SK7020	陶器 碗	11.5	4.1	4.1	胎土：灰白 釉調：浅黄・オリーブ褐	肥前 1690～18c前半	写真図版 4-11-161 20110575・576
図4-34-162 10002051	71区 SK7020	陶器 火入	-	6.2	-	胎土：明治褐 釉調：にぶい赤褐	肥前 17c末～18c前半	写真図版 4-11-162 20110577
図4-35-163 10003108	71区 Tr11層	銭貨 銅錢	-	径 2.4	-	-	寶永通寶 2.2g 新寶永	写真図版 4-11-163 20110578
図4-35-164 10002027	71区 Tr11層	染付磁器 鉢	-	4.2*	-	胎土：白	肥前 17c前半	写真図版 4-11-164 20110579
図4-35-165 10002023	71区 Tr11層	染付磁器 碗	11.4*	4.6*	5.1	胎土：白 釉調：明暦灰・暗青灰	肥前 17c前半 内面見込み蛇の目模様	写真図版 4-11-165 20110580
図4-35-166 10002019	71区 Tr12層	土師器 小皿	8.2	3.9	1.7	にぶい黄褐	底部系切	写真図版 4-11-166 20110581
図4-35-167 10002054	71区 Tr13層	土師器 小皿	9.8*	3.8*	2.2	にぶい黄褐	底部系切	写真図版 4-11-167 20110582
図4-35-168 10002055	71区 Tr13層	土師器 小皿	8.0	4.9	1.6	にぶい黄褐	底部系切	写真図版 4-11-168 20110583
図4-35-169 10002053	71区 Tr13層	染付磁器 皿	12.8*	5.0*	3.1	胎土：灰白 釉調：灰白・オリーブ	-	写真図版 4-11-169 20110584・585
図4-35-170 10002057	71区 Tr13層	瓦質土器 擂鉢	-	-	-	-	焼付着	写真図版 4-11-170 20110586・587
図4-35-171 10002025	71区 Tr8層	染付磁器 皿	-	3.7	-	胎土：灰白 釉調：浅黄・暗灰黄	肥前 17c後半～18c前半 内外面細かく貫入	写真図版 4-12-171 20110588・589
図4-35-172 10002026	71区 Tr8層	染付磁器 皿	14.6*	7.6*	2.7	胎土：灰白 釉調：明暦灰・暗青灰	肥前 1630～50年代	写真図版 4-12-172 20110590・591
図4-35-173 10002029	71区 Tr9層	瓦質土器 鍋	23.4*	-	-	外：にぶい黄褐・黒 内：灰黄褐・黒褐	焼付着	写真図版 4-12-173 20110592
図4-35-174 10002020	71区 Tr13層	土師器 小皿	5.2*	2.7*	2.1	にぶい黄褐	底部系切	写真図版 4-12-174 20110593
図4-35-175 10002024	71区 Tr3層	青磁 碗	-	-	-	胎土：灰白 釉調：灰オリーブ	電気窯系	写真図版 4-12-175 20110594
図4-35-176 10002074	71区 SK7022	土師器 皿	16.6*	10.6*	3.3	明治褐・橙	底部系切	写真図版 4-12-176 20110595
図4-35-177 10002073	71区 SK7022	陶器 碗	-	-	-	胎土：灰白 釉調：灰白	肥前 17c代 内外面細かく貫入	写真図版 4-12-177 20110596
図4-35-178 10002083	71区 SK7023	土師器 皿	8.6*	6.7*	1.4	にぶい橙	底部系切	写真図版 4-12-180 20110597
図4-35-179 10002079	71区 SK7023	土師器 皿	13.2*	10.4*	2.3	明暦灰	底部系切 板状压痕	写真図版 4-12-179 20110598
図4-35-180 10002082	71区 SK7023	土師器 皿	13.2*	-	10.0*	橙・にぶい赤褐	底部系切	写真図版 4-12-181 20110599
図4-35-181 10002080	71区 SK7023	土師器 皿	12.9*	7.2*	2.6	にぶい橙・にぶい褐	底部系切	写真図版 4-12-178 20110600
図4-35-182 10002081	71区 SK7023	土師器 皿	-	8.6*	-	にぶい橙・橙	内面耀板状压痕 底部系切	写真図版 4-12-183 20110601・602
図4-35-183 10002084	71区 SK7023	瓦質土器 擂鉢	-	-	-	橙灰・灰黃褐	17c代	写真図版 4-12-182 20110603・604
図4-35-184 10002060	71区 P7072	瓦質土器 鉢	-	-	-	灰黄	-	写真図版 4-12-184 20110605・606
図4-35-185 10002061	71区 P7063	瓦質土器 鉢	-	-	-	灰	-	写真図版 4-12-185 20110607
図4-35-186 10002089	71区 P7135	青磁 碗	-	-	-	胎土：灰白 釉調：オリーブ灰	電気窯系	写真図版 4-12-187 20110608
図4-35-187 10002062	71区 P7161	土師器 鍋	-	-	-	にぶい橙	-	写真図版 4-12-186 20110609・610
図4-35-188 10002085	71区 P7148	陶器 皿	9.8*	3.4	4.9	胎土：灰白 釉調：明暦灰	肥前 18c前半	写真図版 4-12-189 20110611
図4-35-189 10002086	71区 P7148	陶器 皿	-	4.6	-	胎土：浅黄褐 釉調：灰黃褐	肥前 1610～30年代 内面見込み3箇所の炒目痕	写真図版 4-12-190 20110612・613
図4-35-190 10002065	71区 P7148	瓦質土器 火鉢	-	-	-	黄灰・にぶい橙	-	写真図版 4-12-191 20110614・615
図4-36-191 10002091	71区 P7172	染付磁器 碗	9.8*	-	4.6	胎土：明暦灰	波佐見 18c前半	写真図版 4-12-188 20110616

表4-1 7区出土遺物一覧

掘削・番号 登録番号	出土位置	種別 器種	寸法(cm)			色調	備考	写真図版 写真登録番号
			口径	底径	高さ			
図4-36-192 10002059	7J区 P7172	瓦質土器 火鉢	-	脚部径 23.8	-	に赤い黄緑		写真図版 4-12-192 20110617
図4-36-193 10002096	7J区 P7193	土師器 皿	-	8.3*	-	に赤い褐・橙	底部糸切 板状圧痕	写真図版 4-12-193 20110618・619
図4-36-194 10002064	7J区 P7197	瓦質土器 火鉢	17.9*	-	-	に赤い褐・黒褐		写真図版 4-12-194 20110620
図4-36-195 10002092	7J区 P7197	染付磁器 碗	10.5*	6.0	6.3	胎土：灰白	肥前 1780～1810年代	写真図版 4-12-195 20110621・622
図4-36-196 10002094	7J区 P7197	染付磁器 猪口	-	6.3	-	胎土：灰白	肥前 18c 後半 蛇の目凹形高台	写真図版 4-12-196 20110623・624
図4-36-197 10002093	7J区 P7197	染付磁器 仏壇器	6.2*	3.8	5.9	胎土：灰白	肥前 18c 後半～19c 前半	写真図版 4-12-197 20110625
図4-36-198 10003073	7K区 P7232	陶器 灯明皿	7.8*	3.0*	2.2	胎土：に赤い褐 釉調：赤灰	肥前旗屋 17c 後半～18c 前半	写真図版 4-12-198 20110626・627
図4-36-199 10003077	7K区 P7239	土師器 小皿	6.2*	4.0*	1.2	に赤い黄緑	底部糸切	写真図版 4-12-199 20110628
図4-36-200 10003076	7K区 P7239	土師器 小皿	-	4.1	-	に赤い褐	底部糸切 板状圧痕	写真図版 4-12-200 20110629
図4-36-201 10003078	7K区 覆瓦	养生土器 甕	-	9.0	-	外：に赤い黄緑・に赤い褐 内：に赤い黄緑	煤付着	写真図版 4-13-202 20110630・661
図4-36-202 10003079	7L区 2tr	石製品 研	長 58+	幅 6.0	厚 1.9	暗赤褐	輝緑斜長岩 裏面に「赤闘印」の刻有(□は不明)	写真図版 4-12-201 20110631・632
図4-36-203 10003080	7L区 2tr	土師器 皿	12.0*	8.0*	3.6	に赤い褐	底部糸切	写真図版 4-13-203 20110633
図4-36-204 10003086	7L区 1tr	瓦器 鍋	-	-	-	外：黄灰・黒 内：灰	煤付着	写真図版 4-13-204 20110634・635
図4-36-205 10003088	7L区 2tr	染付磁器 碗	-	-	-	胎土：白 釉調：明青灰	崩落窓室系 16c 後半～17c 前半	写真図版 4-13-205 20110636・637
図4-36-206 10003087	7L区 1tr	瓦質土器 茶釜	-	-	-	黒褐・褐灰	煤付着	写真図版 4-13-206 20110638
図4-36-207 10003085	7L区 2tr 4 瓢	土師器 網	-	-	-	外：黒 内：灰黄褐	煤付着	写真図版 4-13-207 20110639
図4-36-208 10003082	7L区 3tr 2 瓢	青磁 碗	-	-	-	胎土：灰 釉調：灰オーリープ	電気窓室上田B IV類	写真図版 4-13-208 20110640
図4-37-209 10003102	7M区 1層	染付磁器 碗	8.8*	-	3.6	胎土：白 釉調：明緑灰	肥前 19c 前半	写真図版 4-13-209 20110641
図4-37-210 10003090	7M区 2tr	白磁 小皿	6.6	2.4	3.4	胎土：白 釉調：灰白	高台見込みに付着物	写真図版 4-13-210 20110642
図4-37-211 10003091	7M区 2tr	白磁 小皿	6.9	2.9	4.1	胎土：灰白 釉調：明緑灰	内面見込みに付着物	写真図版 4-13-211 20110643
図4-37-212 10003096	7M区 2tr	土師器 小皿	6.7	4.6	1.0	に赤い黄緑	底部糸切	写真図版 4-13-214 20110644
図4-37-213 10003093	7M区 2tr	土師器 小皿	6.2*	3.8*	1.1	褐	底部糸切	写真図版 4-13-215 20110645
図4-37-214 10003097	7M区 2tr	土師器 小皿	6.2	3.8	1.5	に赤い褐	底部糸切	写真図版 4-13-212 20110646
図4-37-215 10003095	7M区 2tr	土師器 小皿	7.8*	4.6	1.8	に赤い褐	底部糸切	写真図版 4-13-213 20110647
図4-37-216 10003100	7M区 4tr 1 瓢	土師器 小皿	5.6*	3.6	1.0	に赤い褐	底部糸切	写真図版 4-13-216 20110648
図4-37-217 10003118	7M区 2tr	銭貯 銭箱	-	径 2.5	-	-	寶永通寶 3.1g 古寶永	写真図版 4-13-217 20110649
図4-37-218 10003109	7M区 2tr 1 瓢	銭貯 銭箱	-	径 2.5	-	-	寶永通寶 3.3g 古寶永	写真図版 4-13-218 20110650
図4-37-219 10003117	7M区 2tr 1 瓢	銭貯 近代錢	-	径 2.4	-	-	1銭 大正 10年	写真図版 4-13-219 20110651
図4-37-220 10003110	7M区 2tr 4・5 瓢	銭貯 銭箱	-	径 2.4	-	-	寶永通寶 2.2g 新寶永	写真図版 4-13-220 20110652
図4-37-221 10003111	7M区 2tr 4・5 瓢	銭貯 銭箱	-	径 2.3	-	-	寶永通寶 2.7g 新寶永	写真図版 4-13-221 20110653
図4-37-222 10003112	7M区 2tr 4・5 瓢	銭貯 銭箱	-	径 2.3	-	-	寶永通寶 2.6g 新寶永	写真図版 4-13-222 20110654
図4-37-223 10003113	7M区 2tr 4・5 瓢	銭貯 銭箱	-	径 2.5	-	-	寶永通寶 2.4g 新寶永	写真図版 4-13-223 20110655

表 4-1 7 区出土遺物一覧

査回・番号 登録番号	出土位置	種別 器種	寸法(cm)			色調	備考	写真図版 写真登録番号
			口径	底径	器高			
図 4-37-224 10003114	7M 区 2tr 4・5 層	銭貨 銅錢	-	径 2.3	-	-	寛永通寶 2.2g 新寛永	写真図版 4-13-224 20110656
図 4-37-225 10003115	7M 区 2tr 4・5 層	銭貨 銅錢	-	径 2.4	-	-	寛永通寶 3.1g 新寛永	写真図版 4-13-225 20110657
図 4-37-226 10003116	7M 区 2tr 4・5 層	銭貨 銅錢	-	径 2.4	-	-	寛永通寶 3.3g 古寛永	写真図版 4-13-226 20110658
図 4-37-227 10003108	7M 区 2tr 4・5 層	銭貨 銅錢・鉄錢	-	径 2.2	-	-	鉄錢 1 枚と寛永通寶 2 枚が総重 8.1g(合計) 3 枚のうち元字錢 布付着 径は 1 枚目の数値	写真図版 4-13-227 20110659
図 4-37-228 10003119	7M 区 3tr	銭貨 銅錢	-	径 2.4	-	-	寛永通寶 2.1g 古寛永	写真図版 4-13-228 20110660

第5章 東畠瀬遺跡 6G 区

1 東畠瀬遺跡 6G 区の概要

東畠瀬遺跡 6G 区（宗源院跡）は、佐賀県佐賀市富士町大字閑屋字鶴に所在する。

宗源院は玉林寺（佐賀市大和町）の末寺で、戦国武将神代勝利の菩提寺である。寺の北西に隣接して神代勝利の墓、小城支藩の神代家一族や歴代住職の墓がある墓地（東畠瀬遺跡 9 区）が付随する。寺は嘉瀬川ダム建設に伴い佐賀市大和町に移築されているが、銘文に「天和三」（1683 年）、「佐賀郡安富庄畠瀬山宗源院」とある半鐘が現存する。また、寺に残る宗源院文書には文化年間に大規模な寺地整備が行われたことが記されている。

神代勝利は、江戸時代にまとめられた『神代家伝記』や『北肥輒誌』などによれば、三瀬宗利の提唱により山内の小領主をまとめて總大將となり、主に三瀬城を拠点として戦国時代に活躍し、後世にまで山内の英雄として親しまれている。佐賀市富士町・三瀬村を中心とする地域がその勢力下であり、ほぼ同じ時期に佐賀勢を勢力を伸ばしつつあった龍造寺隆信とは戦いと和睦を繰り返す関係にあった。永禄 7（1564）年に家督を子の長良に譲り、隠居所として畠瀬に城を築いたとされるが、翌永禄 8 年に畠瀬城で没している。宗源院は、勝利の生前に開基されたと伝えられる。長良は鍋島直茂の甥を養子としており、神代家は後に親類として佐賀鍋島藩の重臣となる。

6G 区は北西方向に延びる尾根の北東側斜面の山麓部、標高約 272 m の北に向かって開く谷部の奥まった部分に立地している（図 3-2・5-1）。調査区の北東側約 100 m には、神代勝利が築いたとされる畠瀬城のうち、館の部分にあたると推定される建物群などを確認した東畠瀬遺跡 6F 区（神代氏畠瀬館跡）が位置している。

調査の結果、整地（地業）層を挟んで重複する遺構面を 4 面確認した。上層から下層まで一連の土層図がないため、模式的に南北方向の堆積状況を図示したが（図 5-2）、現地表面から約 0.25 m 下を第 1 面、その 0.7 ~ 0.9 m 下層を第 2 面、その 0.2 ~ 0.4 m 下層を第 3 面、その 0.2 ~ 0.4 m 下層を第 4 面とした。各面のうち、第 1・2 面は明確に面を把握することができたのに対し、第 3・4 面は遺構面を認識するのがやや困難であったが、整地層の厚さや土質に起因するものと思われる。なお、各面の整地層から出土した遺物については、1 面と 2 面の間を「1 ~ 2 面」、2 面と 3 面の間を「2 ~ 3 面」という要領で注記しており、この報告でも使用する。

第 1 面では、現存した本堂や庫裡とほぼ同規模の礎石建物などが確認され、現代とほぼ同じ構造の寺院であったことが推定される。整地層から出土した遺物などから 19 世紀代の遺構面と考えられ、文献に残る文化年間の寺域整備によって成立したものと推測される。

第 2 面では、建物は確認できなかったが、建物の区画とみられる石列や庭園遺構などを検出した。この面では、庭園遺構に改変が認められ、新旧 2 時期の玉砂利敷が重複していることから、造成を伴わないと思われる改修が少なくとも 1 回は行われていることが確認できる。出土遺物から 18 世紀代の遺構面と考えられる。

第 3 面では、石組遺構、トイレ遺構などを確認したが、全体的な構造は不明な点が多い。出土遺物から 17 世紀後半代の遺構面と考えられる。

第 4 面では、掘立柱建物を構成すると思われる柱穴群、溝、石垣などを検出した。この面の下層にも整地層が認められるが、その下位において明確な遺構面が確認できなかったため、第 4 面が本格的な寺院として整備された最初の時期のものであると推定される。出土遺物から 16 世紀末～17 世紀前半代の遺構面と考えられる。

なお、現地では境内の現存する石垣を残したまま、第 4 面まで掘り下げて一度発掘調査を終了したが、調査後に石垣が崩壊する危険性があったので、掘削機により石垣を除去したところ、遺構と多数の遺物が出土したため、追加調査を行った。この部分を 6G 抜張区としたが、層位的な調査はできておらず、各遺構の状況などから遺構の所属時期を決め、元の調査区の遺構配置図と図面上で合成している。

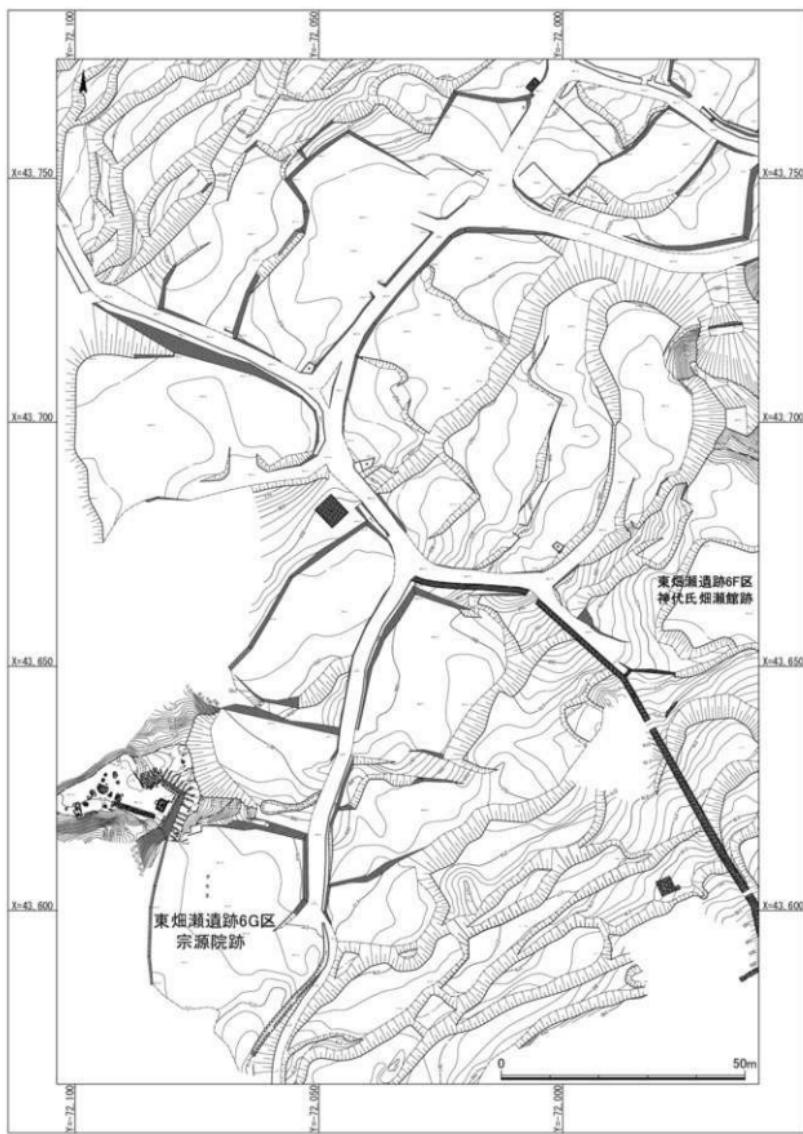


図 5-1 東畠瀬遺跡 6G 区周辺の地形 (1/1,000)

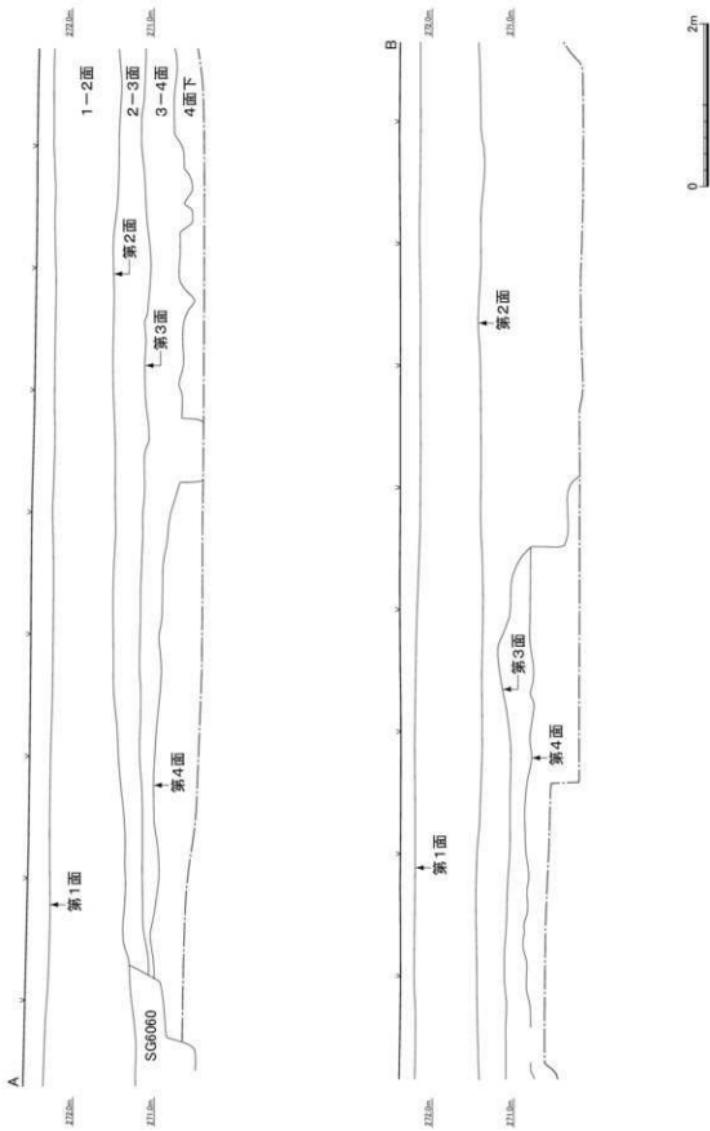


図 5-2 6G 区の土層 (1/60)

2 第1面の遺構と遺物

遺構

第1面の遺構としては、礎石建物2棟、溝2条、土坑2基などを確認した（図5-3）。礎石建物は、明治末頃に建立されたと推定されている移転前の本堂・庫裡とほぼ同じ構造であり、現存した建物の1段階古い建物であった可能性が高い。調査区南西部で確認された土坑2基（SX6070・6071）は、ほぼ同規模のものが並列しており、トイレであったと考えられる。その場合、移転前の建物配置で北側に位置した庫裡の北東側にトイレと風呂が設置されていたように、本堂に直接トイレが付随するとは思われないことから、移転前の配置とは逆に、北側のSB6012が本堂、南側のSB6013が庫裡であった可能性がある。SB6013には南側に母屋に付随する2間分の構造があるが、移転前の庫裡にも北側に1間半の下屋が付いており、建物の構造的にも同様である。

SB6012（図5-4）

調査区北部に位置する礎石建物で、主軸をN1°Eにとる南北棟の建物である。梁行3間×桁行4間で、柱間は6尺（1.98m）であり、床面積は47m²である。内部に束柱となると思われる礎石や柱穴が認められ、西側には半間分の軒が付く可能性がある。南側にはSB6013と繋ぐ構造が2間分確認できる。

SB6013（図5-4）

調査区南部に位置する礎石建物で、主軸をN1°Eにとる南北棟の建物である。梁行3間×桁行4間の母屋の南側に2間分の軒が付き、柱間は6尺（1.98m）であり、床面積は軒の部分を含めると70.6m²である。

遺物（図5-5・6）

1～3は第1面から出土した。1・2は肥前染付磁器碗で、1は端反形、2は丸形である。3は青銅製とみられる飾金具で、下面に径0.5cmの孔があり、表面に鳥を模した印刻が施される。

4～46は1～2面から出土したもので、第1面で使用されたものと第2面で使用されたものが含まれると考えられる。4～10は肥前陶器である。4は内野山窯の小杯で、鉄釉が施される。5は内野山窯と思われる碗で、外面に銅線釉、内面に透明釉が施される。6は碗で、内面に鉄絵が施される。7は京焼風陶器皿で、内面に山水文と思われる文様が施され、高台内に「小松吉」の押印がある。8は内野山窯の可能性がある皿で、鉄釉が施され、内面見込みを蛇の目剥ぎしている。9は灯明皿である。10は擂鉢で、全面に鉄釉が施される。11・12は関西系陶器で、11は灰釉を施した碗、12は内面に色絵が施された皿である。13は薩摩産とみられる陶器蓋、14は肥前陶器蓋である。15は関西系陶器土瓶で、鉄釉が施される。16は熊本産の可能性がある陶器土瓶で、灰釉が施される。17は関西系とみられる陶器鍋で、鉄釉が施される。

18～21は肥前白磁で、18が猪口、19が小碗、20が小碗で口銷、21が碗である。22は肥前染付磁器蓋である。23～32は肥前染付磁器碗である。23～26は小広東形、27～30は丸形、31・32は広東形、33は端反形である。31・32は釉が白濁して文様が不鮮明であり、焼成不良によるものと考えられる。34・35は肥前色絵磁器碗、36は肥前色絵素地碗である。37は肥前青磁染付碗で、内面見込みに手描きの五弁花文を施し、口銷である。38～41は肥前染付磁器小杯・猪口で、42は肥前染付磁器瓶である。43・44は肥前染付磁器皿で、43は平面形が扇形になるものとみられる。45・46は肥前染付磁器皿で、ほぼ同じ大きさ・文様のものである。

47～57は表面採集のものなどである。47～53は肥前陶磁器である。47は陶器皿で、平面は方形、高台は円形である。内面に竹が描かれる。48は染付磁器蓋付小鉢で、口縁部を釉剥ぎしている。49・50は色絵磁器で、49は外面に暦が書かれている。51は染付磁器蓋、52は磁器合子の身、53は染付磁器皿である。54～57は大



図5-3 第1面の遺構分布 (1/200)

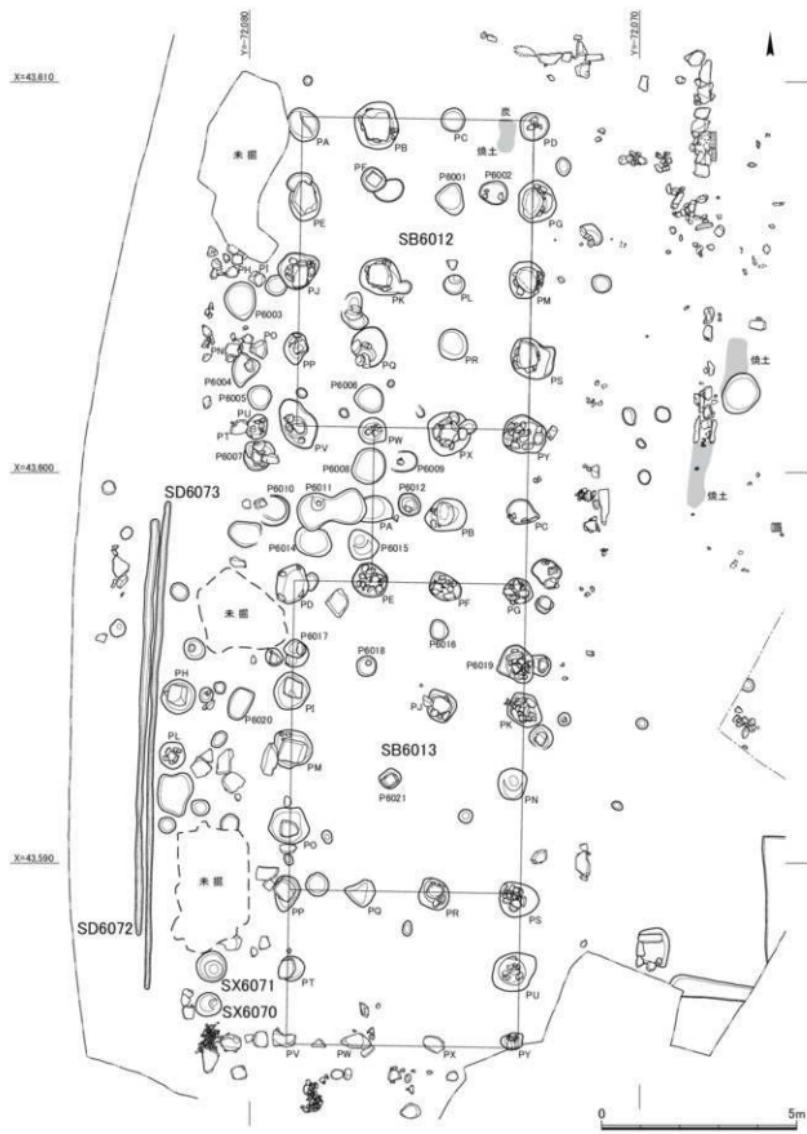


図 5-4 第 1 面の透構分布詳細 (1/125)

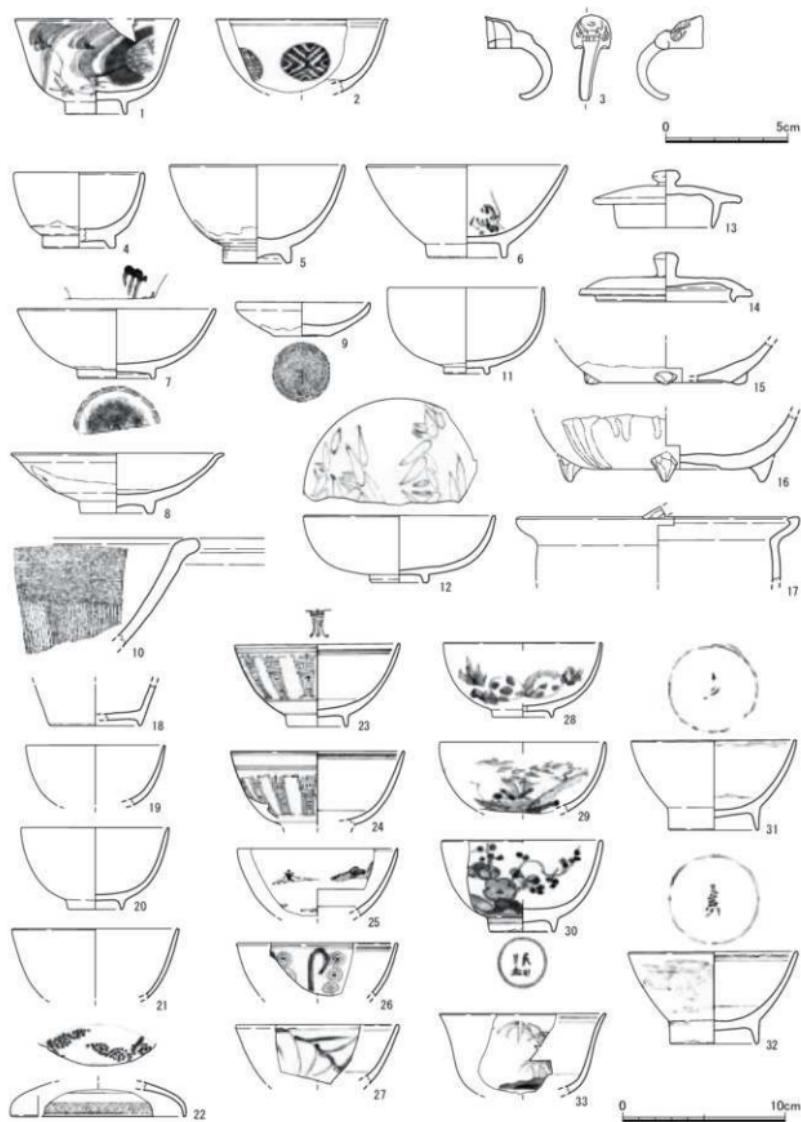


図5-5 第1面・1-2面の出土遺物（3は1/2、他は1/3）



図 5-6 1-2面の出土遺物・表採の遺物 (1/3)

正から昭和の磁器で、55・57は瀬戸・美濃産、56は肥前産のものである。

以上の他に図示していない出土遺物として、土師器小皿、瓦質土器鍋・火鉢などがあり、また錢貨として寛永通宝・文久永宝とともに、宋錢（天祐通宝？・元豐通宝？）が出土した。

表5-1 6G区第1面・1-2面の出土遺物

持団・番号 登録番号	出土位置	種別 器種	寸法 cm			色 調	備 考	写真掲版 写真登録番号
			口径	底径	高さ			
国5-1 10001285	1面	染付磁器 碗	10.1*	3.8	5.9	胎土:灰白	肥前 1820~50年代	5-3-1 20110295
国5-2 10001279	1面	染付磁器 碗	10.6*	-	-	胎土:灰白	肥前 18c後半~19c初	5-3-2 20110344
国5-3 11000166	1面	青磁製品 飾金貝	3.5	1.5	2.7		完形	5-3-3 20110696
国5-4 10001981	1-2面	陶器 小杯	8.0*	4.5*	4.7	胎土:灰白	内野山窯 17c末~18c前半	5-3-4 20110319
国5-5 10001282	1-2面	陶器 碗	10.8*	4.2	6.1	胎土:灰白	肥前 18c前半	5-3-5 20110293
国5-6 07001431	1-2面	陶器 碗	12.4*	5.0	5.7	胎土:灰白	肥前 18c前半	
国5-7 07001433	1-2面	陶器 皿	12.2*	5.0	4.2	胎土:灰白	肥前 17c後半「小松吉」	
国5-8 10001980	1-2面	陶器 皿	13.1*	4.4	3.7	胎土:灰白	内野山窯 18c前半	5-3-8 20110318
国5-9 10001975	1-2面	陶器 灯明皿	8.3	3.6	2.1	胎土:赤鉄	肥前 18c ロクロ回転右回り	
国5-10 10002504	1-2面	陶器 盆鉢	-	-	-	胎土:赤	肥前 18~19c	
国5-11 07001427	1-2面	陶器 碗	9.6*	2.8	5.3	胎土:灰白	関西系 18c	5-3-11 20110703
国5-12 07001422	1-2面	色絵陶器 皿	11.8*	3.6	4.1	胎土:灰白	関西系 18c前半	5-3-12 20110702
国5-13 10001982	1-2面	陶器 蓋	9.1	5.8	3.5	胎土:明褐灰	薩摩力 19c	5-3-13 20110321
国5-14 10002503	1-2面	陶器 蓋	10.7*	8.6*	3.0	胎土:赤褐	肥前 18c	
国5-15 10001983	1-2面	陶器 土瓶	-	7.8*	-	胎土:灰白	関西系 19c	5-3-15 20110364
国5-16 10001984	1-2面	陶器 土瓶	-	6.7*	-	胎土:明赤褐	熊本力 19c	5-3-16 20110379
国5-17 10001986	1-2面	陶器 鍋	17.4*	-	-	胎土:灰白	関西系力 18~19c	5-3-17 20110365
国5-18 10002502	1-2面	白磁 猪口	-	5.2*	-	胎土:灰白	肥前 18c前半	
国5-19 10002496	1-2面	白磁 小碗	8.6*	-	-	胎土:灰白	肥前 18c	5-3-19 20110382
国5-20 10001316	1-2面	白磁 小碗	9.1	2.4	5.0	胎土:灰白	有田 17c後半 口銷	5-3-20 20110302
国5-21 10002497	1-2面	白磁 碗	10.3*	-	-	胎土:灰白	肥前 17c後半~18c初	
国5-22 10001308	1-2面	染付磁器 蓋	10.8*	-	-	胎土:灰白	肥前 1770~1810年代	
国5-23 10001278	1-2面	染付磁器 碗	10.2	3.7	5.1	胎土:灰白	肥前 1770~90年代	5-3-23 20110290
国5-24 10001303	1-2面	染付磁器 碗	10.7*	-	-	胎土:灰白	肥前 1770~1810年代	5-3-24 20110354
国5-25 10001305	1-2面	染付磁器 碗	9.9*	-	-	胎土:灰白	肥前 18c後半~19c初	5-3-25 20110356
国5-26 10001306	1-2面	染付磁器 碗	10.0*	-	-	胎土:灰白	肥前 18c後半~19c初	5-3-26 20110357
国5-27 10001307	1-2面	染付磁器 碗	10.0*	-	-	胎土:灰白	肥前 19c前半	5-3-27 20110358
国5-28 10001314	1-2面	染付磁器 碗	9.8*	3.8*	4.6	胎土:灰白	肥前 18c	5-3-28 20110301

表5-1 6G区第1面・1-2面の出土遺物

横段番号	出土位置	種別 器種	寸法 cm			色調	備考	写真図版 写真登録番号
			口径	底径	器高			
5-5-29 10001315	1-2面	染付磁器 碗	10.2*	-	-	胎土:灰白	肥前 18c 前半	5-3-29 20110376
5-5-30 10002499	1-2面	染付磁器 碗	10.0*	4.1	5.7	胎土:灰白	肥前 18c 前半	5-3-30 20110328
5-5-31 10001280	1-2面	染付磁器 碗	10.2*	5.5	5.6	胎土:灰白	肥前 19c 前半	
5-5-32 10001281	1-2面	染付磁器 碗	10.5*	5.5	5.7	胎土:黄灰	肥前 19c 前半	5-3-32 20110292
5-5-33 10001311	1-2面	染付磁器 碗	10.2*	-	-	胎土:灰白	肥前 19c 初～暮末	5-3-33 20110360
5-6-34 10001284	1-2面	色绘磁器 碗	10.2	4.0	5.0	胎土:灰白	有田 18c 第2・3四半期	5-3-34 20110294
5-6-35 10002500	1-2面	色绘磁器 碗	9.9*	4.3	5.7	胎土:灰白	肥前 1670～90年代	5-3-35 20110329
5-6-36 10001304	1-2面	色绘磁器 碗	15.8*	-	-	胎土:灰白	肥前 1770～1810年代	5-3-36 20110355
5-6-37 10002498	1-2面	青磁染付 碗	9.1*	3.3	5.0	胎土:灰白	肥前 1690～1730年代 口跡	5-3-37 20110326・327
5-6-38 10001313	1-2面	染付磁器 小杯	7.5*	3.5	5.4	胎土:灰白	肥前 17c 後半～18c 初	5-3-38 20110300
5-6-39 10001310	1-2面	染付磁器 猪口	9.2*	4.6*	6.2	胎土:灰白	肥前 18c	5-3-39 20110299
5-6-40 10002501	1-2面	染付磁器 猪口	5.8*	-	-	胎土:灰白	肥前 1690～1730年代	5-3-40 20110383
5-6-41 10001309	1-2面	染付磁器 小杯	-	3.1	-	胎土:灰白	肥前 17c 後半	
5-6-42 10001319	1-2面	染付磁器 瓶	3.9	-	-	胎土:灰白	肥前 19c	
5-6-43 10001283	1-2面	染付磁器 小瓶	-	-	-	胎土:灰白	肥前 17c 後半	5-3-43 20110345
5-6-44 10001317	1-2面	染付磁器 皿	10.6*	6.7*	2.1	胎土:灰白	肥前 1780～1810年代	5-3-44 20110361
5-6-45 10001287	1-2面	染付磁器 皿	14.5	9.1	4.1	胎土:灰白	肥前 18c 後半	5-3-45 20110278
5-6-46 10001286	1-2面	染付磁器 皿	14.6	9.3	4.3	胎土:灰白	肥前 18c 後半	5-3-46 20110279
5-6-47 10002495	表採	陶器 皿	12.7	6.2	5.3	胎土:灰白	肥前 17c 末～18c 前半	5-3-47 20110337
5-6-48 10002491	表採	染付磁器 蓋付小鉢	9.3*	5.1*	5.0	胎土:灰白	肥前 19c 初～暮末	
5-6-49 10002492	表採	色绘磁器 碗	10.4*	4.8*	6.5	胎土:灰白	肥前 18c 後半～19c 初	5-3-49 20110324
5-6-50 10002494	表採	色绘磁器 段重	12.7	7.3	5.4	胎土:灰白	肥前 1780～1820年代	
5-6-51 10001263	表採	染付磁器 蓋	6.3	7.9	1.0	露胎部:灰白	肥前 暮末前後	
5-6-52 10001318	1-2面	白磁 合子身	6.1	3.1	2.1	胎土:灰白	肥前 19c 後半	
5-6-53 10002493	表採	染付磁器 皿	10.9	6.3	3.3	胎土:灰白	肥前 1820～60年代	
5-6-54 10001262	表採	白磁 杯	5.0*	2.0*	2.8	胎土:灰白	昭和 「香山結婚記念 清流寺」	
5-6-55 10001261	表採	染付磁器 皿	10.7	6.4	2.0	胎土:灰白	廻戸・美濃 大正前後	
5-6-56 10001257	表採	色绘磁器 碗	11.2	4.0	5.3	露胎部:灰白	肥前 昭和	
5-6-57 10001258	表採	色绘磁器 碗	12.3	4.5	5.6	胎土:灰白	廻戸・美濃 昭和	

3 第2面の遺構と遺物

第2面の遺構としては、庭園遺構、石列、玉砂利敷、溝などを確認した（図5-7）。この面には、造成土が明確ではない全面的な改修が認められ、部分的に古い時期の遺構（SG6060・SX6062など）が残っている。

改修後の新しい時期には、調査区中央に位置する直角に曲がるSX6018石列など真北に近い方位とそれと直交する石列が確認されることから、これらの石列によって建物区画が形成されていたものと推定される（図5-8）。区画内部の検出面には焼土の広がりが認められた。区画北部に位置する玉砂利を約 0.7×1.2 mの範囲に敷き詰めたSX6016は手洗いなど水に関連する遺構と思われる。また、調査区西部に位置する $0.1 \sim 0.6$ mの小型の石材を南北方向に並べたSX6015は建物に付随する花壇などの機能が考えられる。建物については、礎石建物の存在が考えられるが、礎石がほとんど確認できなかったため、確実に検出することはできなかったが、石列の方向などから第1面と同じく、真北を意識した主軸の建物であったとみられる。また、調査区南部には築山を伴った庭園遺構が検出された。

改修以前の遺構は、部分的にしか残存しておらず、全体像は不明であるが、玉砂利を長さ 5.6 m、幅 0.5 mの範囲に敷き詰めたSX6062の方位が上位の石列とほぼ同じである点やSG6060の状況などから、改修後の新しい時期とほぼ同じような構造であったことが推測される。

調査区北東部で確認された石列（図5-9）は、多くが第2面造成時に土留めのために設置されたものと考えられるが、北東端で確認されたSX6092は境内外郭の石垣、SX6066が古い時期の区画の石積であった可能性がある。調査区南部には、後方の山からの山崩れなどによるものと思われる石が散乱している。

庭園遺構（図5-10・11）

調査区南部に位置し、池と築山などからなる庭園遺構とみられる。改修によりSG6060から築山（SX6079）を作り、SG6061を作りかえられている。

SG6060は素掘りの池で、北西隅が検出されたが、全体の規模については不明である。北西隅の平面形は丸みを帯びながら直角に曲がる形状で、真北を意識した掘形であると考えられる。検出面から約 0.5 mの深さに、幅 $0.25 \sim 0.7$ mのテラス状の部分があり、さらにそのテラスから約 0.4 m掘り下げている。

改修の際にSG6060は黄色系統の砂（5・6層）で埋め立てられた後、その上位にSG6061などが構築されている。その改修時の祭祀に関連するとみられる遺構が、土師器小皿を12点まとめて廃棄したと思われるSX6057である。SG6061を構成する石列のほぼ真下から検出され、ほとんどの小皿は完形品であるが、1点のみ二つに割れた状態で出土している。

SX6061は石塀いの池で、SX6079を伴う。SX6079の北西隅より東側約 3.5 mのところから北に向かって石列が始まり、径約 4.0 mの円弧状に石材が並ぶが、長さ約 6 mまでは石材が確認できるものの、その東側の延長は攪乱を受けたためか、明確ではない。土層からみると、深さ 0.35 mである。SX6079は直角に曲がる石積で、築山と考えられる。北西隅から東に約 4.5 mまで石積が確認されるが、その延長は攪乱のためか不明であり、南に向かう石積は北西隅から約 2.3 mまで確認でき、その延長は調査区外に続いている。大きさ $0.3 \sim 1.1$ mのおおよそ長方体の石材を $1 \sim 2$ 段積み上げているが、本来の高さは不明である。

庭園や池の全体の構造などは明確にできないが、写真で見ると、SG6060を埋め立てた黄色系統の砂が調査区南部に分布している状況が認められる（写真図版5-5）、調査区東部で確認されたSX6090石列まで含めて構造を考える必要があるだろう。恐らく、庭園遺構西方の谷筋にある流路から水を引き込んで、池としたことが推測される。

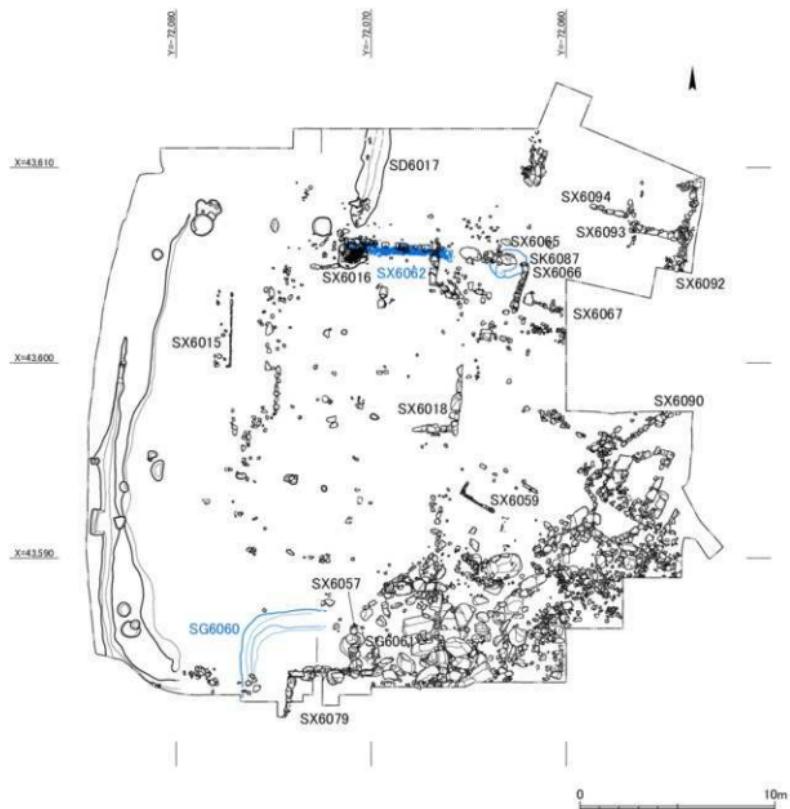


図 5-7 第2面の遺構分布 (1/250)

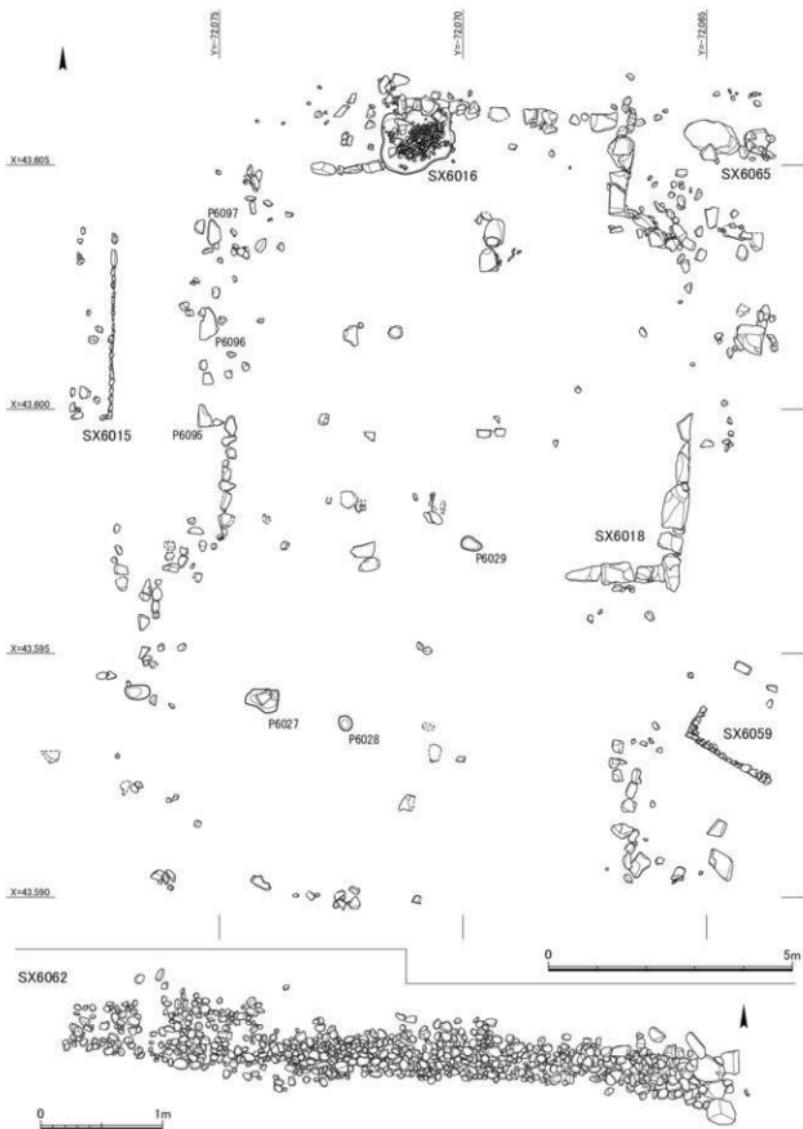


図5-8 第2面の建物区画 (1/100)、SX6062 (1/40)

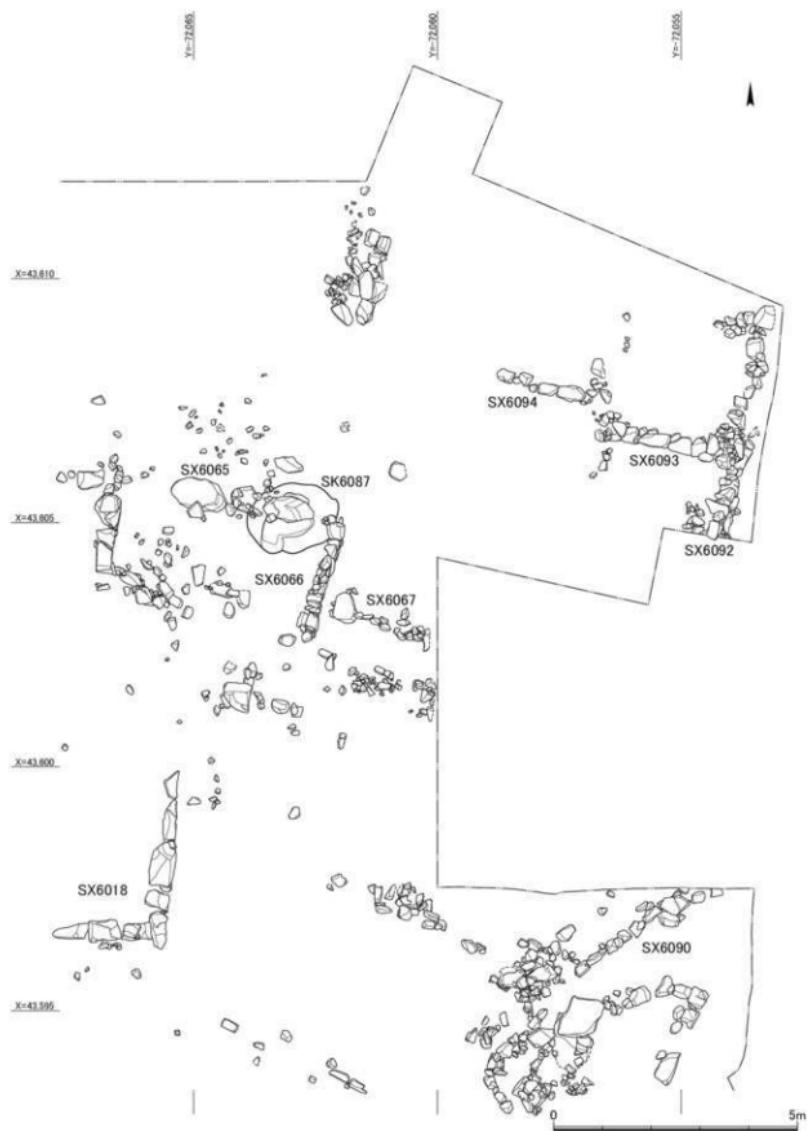


図5-9 第2面北東部の遺構分布詳細 (1/100)

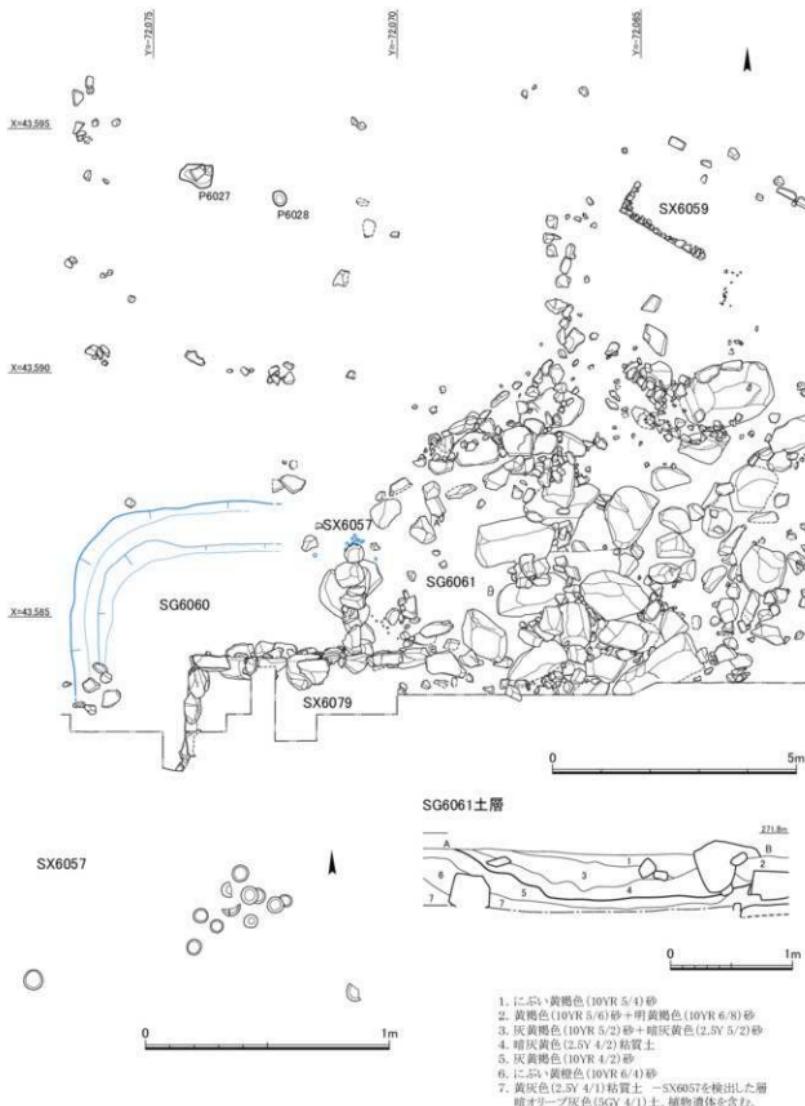


図5-10 第2面の庭園造構 (1/100)・土層 (1/40)、SX6057 (1/20)

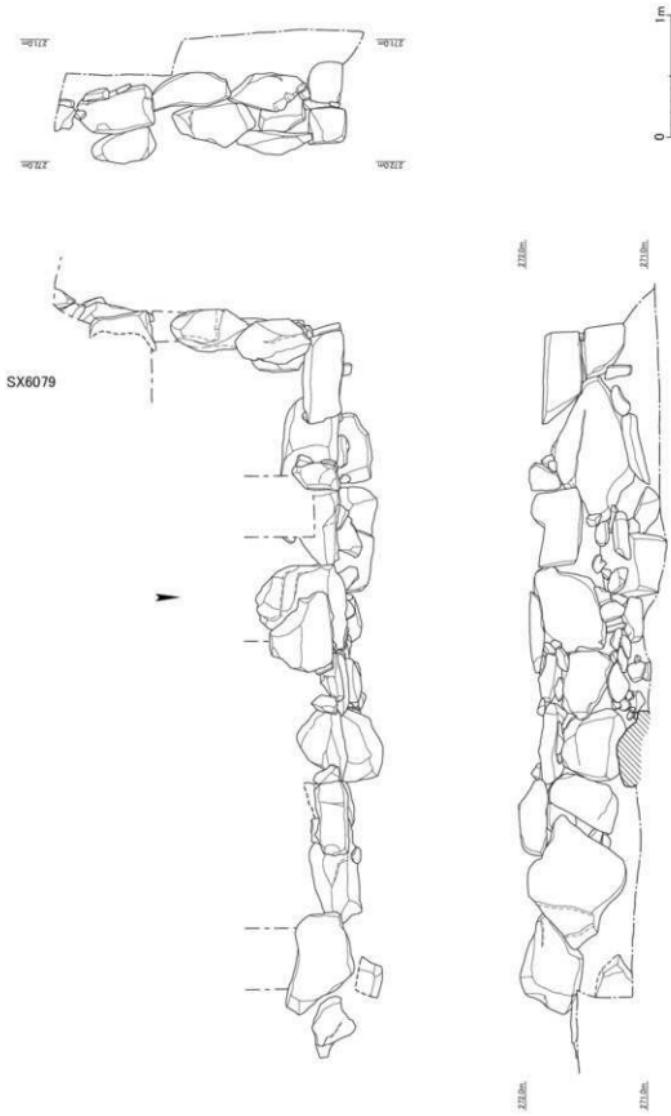


図 5-11 SX6079 (1/40)

遺物（図5－12・13）

58～140は第2面から出土した遺物である。第2面の整地層である2～3面出土遺物については、別項を設けて説明する。

58は肥前産の京焼風陶器皿で、内面に山水文が描かれ、高台内の円窓内に押印がある可能性がある。59は関西系もしくは肥前の陶器皿で、高台を丸く仕上げる特徴がある。60は薩摩か熊本産の土瓶蓋である。61・62はセットとなる可能性が高い肥前陶器土瓶とその蓋で、鉄軸と銅線軸で文様が描かれる。61の内面には墨書きがみられる。63は関西系陶器土瓶で、外面上位に鉄軸が施される。64は肥前産と思われる陶器擂鉢で、全面に釉が施される。65・66は同一個体と思われる陶器瓶で、鉄軸が施される。66の胎土から陶器としたが、65の胎土は磁器に近いものである。67は備前窯の陶器瓶で、外面に糸目がみられ、底面に「寺見」の銘がある。

68～73は肥前白磁で、68・69は小杯、70・71は小碗、72・73は碗である。68の高台内は無釉、69の外面上にはケズリの痕跡がみられ、70は口鉗、72の内外面には主に横方向の細かい傷がみられる。74は肥前染付磁器蓋付鉢、75・76は肥前染付磁器小杯、77は肥前染付磁器蓋である。78～86は肥前染付磁器碗である。78は筒形で、高台内に「大明年製」の銘款がある。79～81は丸形碗、82・85・86は小広東形碗、83是有田以外の製品の可能性がある丸形碗、84は波佐見系の丸形碗である。87は肥前色絵磁器碗で、色絵の部分は剥がれ落ち、痕跡のみである。88は肥前色絵素地の碗で、2～3面出土の285とほぼ同じ大きさ・文様のものである。89は肥前染付磁器碗で、やや大型のものである。90は肥前染付磁器仏飯器、91は肥前染付磁器蓋である。92は肥前色絵磁器人形で、鶴形とみられる。93は窯道具のトチンで、磁器用のものである。

94～105はSX6057出土の底部糸切の土師器小皿である。口径5.7～9.0cm、器高1.2～1.9cmのもので、器壁が厚手のものと薄手のものの2種類みられ、色調もさまざまである。99・101・103・105の口縁部には油煤が付着しており、灯明皿として使用していたものと思われる。106はSG6061、107はSG6060出土の底部糸切の土師器小皿である。108～132は底部糸切の土師器小皿で、口径5.5～9.1cm、器高1.0～2.3cmの大きさで、やはり器壁に2種類のものがみられる。108は底部に穿孔があり、灯明皿として使用した痕跡がみられるものもある。133～136は土師器杯で、133・134は底部糸切、135・136は底部にナデを施し、平滑に仕上げている。137は瓦質土器焙烙で、体部内外面はハケメを施し、外面はさらにナデを施す。138は瓦質土器焙烙または鍋で、底面にはタタキ状の圧痕がみられる。この他に図示していないが、瓦質土器火鉢・火入・茶釜などが出土した。

139は青銅製とみられる碗状の製品で、頂部に径0.2cmの孔があり、縁がやや肥厚していることから鉈のようなものであった可能性がある。外面に幅0.1cmの沈線が4条めぐる。140は鉄製の包丁で、形状などから菜切り用のものと思われる。

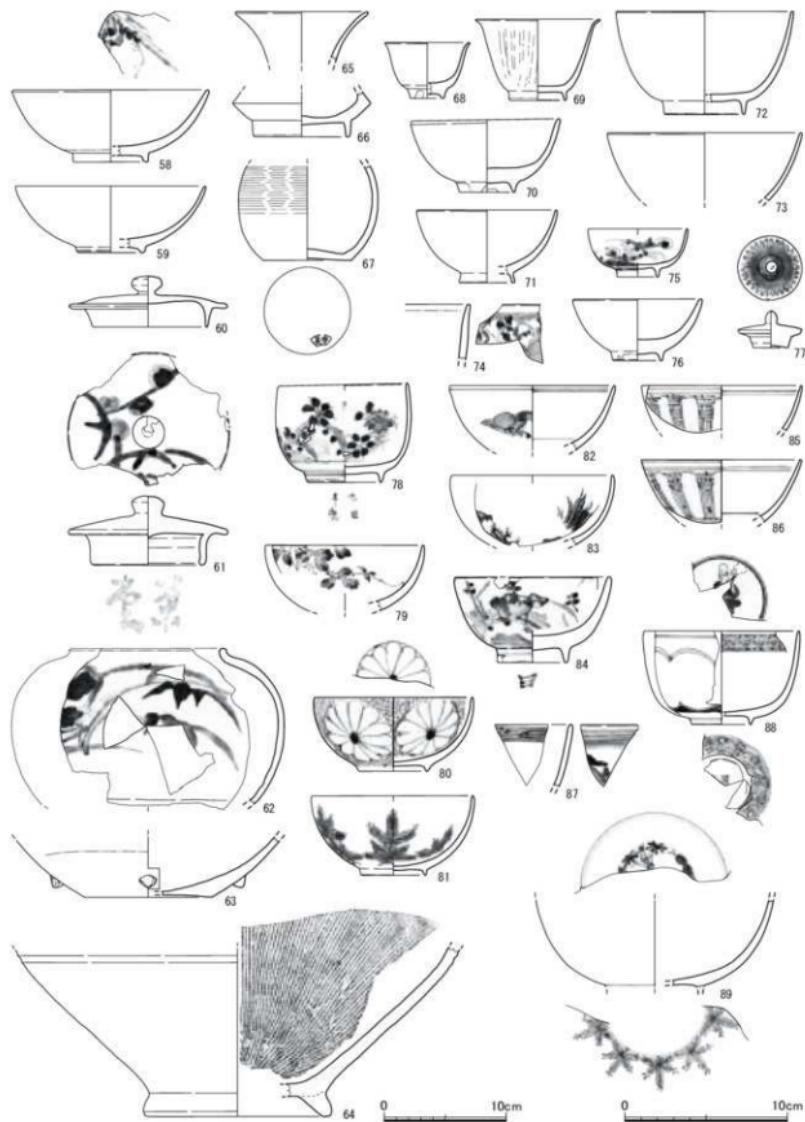


図5-12 第2面の出土遺物1 (64は1/4、他は1/3)

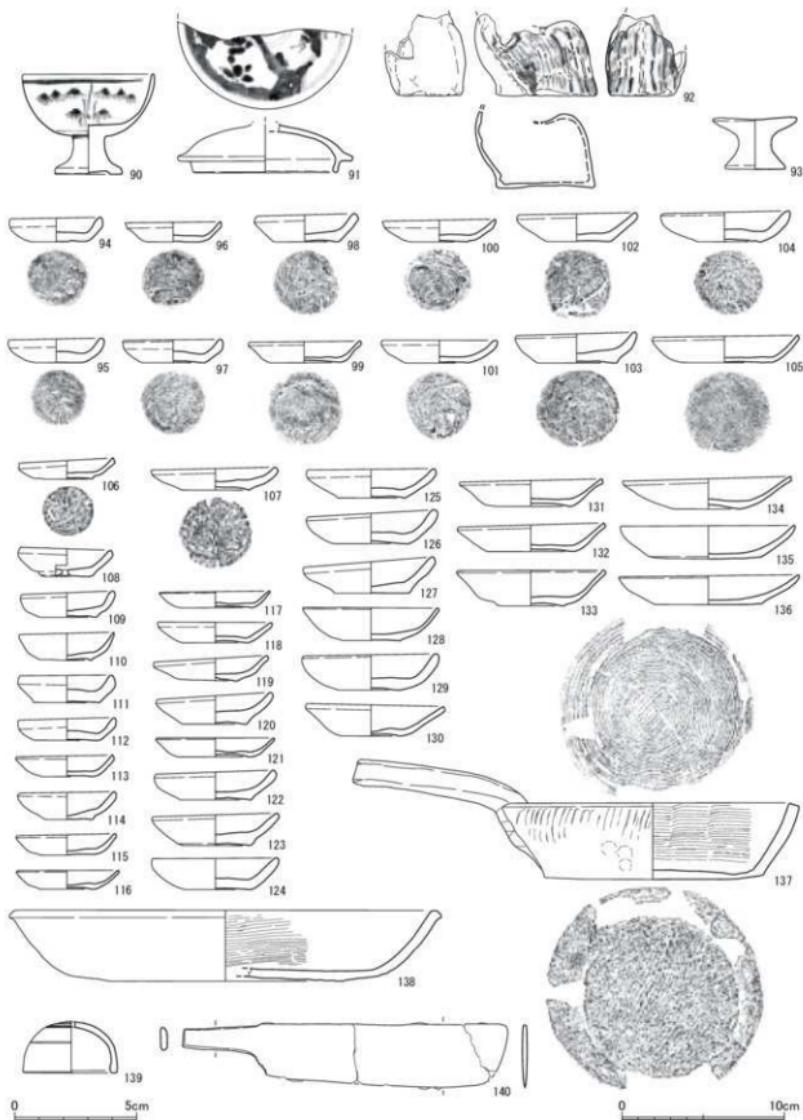


図5-13 第2面の出土遺物2 (139は1/2、他は1/3)

表 5-2 6G 区第2面の出土遺物

横段番号 登録番号	出土位置	種別 器種	寸法 cm			色調	備考	写真図版 写真登録番号
			口径	底径	器高			
図5-12-58 10001972	2面	陶器 皿	12.1*	4.6*	4.4	胎土:灰白	肥前 17c 後半～18c 初	
図5-12-59 10001971	2面	陶器 皿	10.7*	4.2*	4.1	胎土:灰白	関西系か縦前 17c 末～18c 前半	5-7-59 20110325
図5-12-60 10001977	2面	陶器 蓋	9.8	7.0	3.1	胎土:褐	薩摩か縦本 19c	5-7-60 20110320
図5-12-61 10001275	2面	陶器 蓋	6.9*	9.8*	4.3	胎土:に赤い黄緑	肥前 18c	5-7-61 20110370
図5-12-62 10001276	2面	陶器 土瓶	9.7*	-	-	胎土:に赤い黄緑	肥前 18c	5-7-62 20110371
図5-12-63 10001976	2面	陶器 土瓶	-	7.8	-	胎土:灰白	関西系 19c	
図5-12-64 10001979	2面	陶器 塗鉢	-	15.4	-	胎土:淡赤褐	肥前後 18c 末～19c	
図5-12-65 10001973	2面	陶器 瓶	8.2*	-	-	胎土:灰白		5-7-65 20110362
図5-12-66 10001974	2面	陶器 瓶	-	6.0*	-	胎土:灰白		5-7-66 20110363
図5-12-67 10001978	2面	陶器 瓶	-	5.4	-	胎土:灰赤	肥前 17c 後半～18c 「寺見」	5-7-67 20110317
図5-12-68 10001292	SX6062	白磁 小杯	5.2*	2.1*	3.5	胎土:灰白	肥前 1640～50年代	5-7-68 20110348
図5-12-69 10001291	2面	白磁 小杯	7.7*	3.5*	5.0	胎土:灰白	肥前 17c 後半	5-7-69 20110297
図5-12-70 10001265	2面	白磁 小碗	9.2	3.4	4.5	胎土:灰白	肥前 18c 口跡	5-7-70 20110282
図5-12-71 10001288	SX6061	白磁 小碗	8.7*	3.4*	4.5	胎土:灰白	肥前 18c	
図5-12-72 10001289	2面	白磁 碗	11.0*	5.0*	6.4	胎土:灰白	肥前 17c 後半前後	5-7-72 20110296
図5-12-73 10001290	2面	白磁 碗	-	-	-	胎土:灰白	肥前 17c 後半前後	
図5-12-74 10001297	2面	染付磁器 蓋付鉢	-	-	-	胎土:灰白	肥前 18c 前半	5-7-74 20110353
図5-12-75 10001271	SX6061	染付磁器 小杯	6.1	2.6	3.0	露胎部:灰白	肥前 17c 後半～18c 初	5-7-75 20110332
図5-12-76 10001266	2面	染付磁器 小杯	8.0*	3.1	3.8	胎土:灰白	肥前 18c	5-7-76 20110283
図5-12-77 10001272	2面	染付磁器 蓋	4.0	-	2.3	胎土:灰白	肥前 17c 後半	5-7-77 20110333
図5-12-78 10001269	2面	染付磁器 碗	8.0	4.5	6.1	胎土:灰白	肥前 1660～80年代	5-7-78 20110286
図5-12-79 10001293	2面	染付磁器 碗	9.8*	-	-	胎土:灰白	肥前 18c 前半	5-7-79 20110349
図5-12-80 10001298	2面	染付磁器 碗	9.8*	4.2*	4.6	胎土:灰白	肥前 18c 第2・3四半期	5-7-80 20110298
図5-12-81 10001268	2面	染付磁器 碗	10.0	4.0	4.9	胎土:灰白	肥前 18c 中頃～末	5-7-81 20110285
図5-12-82 10001295	2面	染付磁器 碗	10.2*	-	-	胎土:灰白	肥前 1770～90年代	5-7-82 20110351
図5-12-83 10001294	2面	染付磁器 碗	10.0*	-	-	胎土:灰白	肥前 18c 後半～19c 初	5-7-83 20110350
図5-12-84 10001267	2面	染付磁器 碗	9.7*	4.3	5.3	胎土:灰白	波佐見系 18c 後半	5-7-84 20110284
図5-12-85 10001301	2面	染付磁器 碗	9.9*	-	-	胎土:灰白	肥前 1770～1810年代	
図5-12-86 10001302	2面	染付磁器 碗	9.9*	-	-	胎土:灰白	肥前 1770～1810年代	
図5-12-87 10001296	2面	色绘磁器 碗	-	-	-	胎土:灰白	肥前 17c 後半	5-7-87 20110353

表5-2 6G区第2面の出土遺物

件名・番号 登録番号	出土位置	種別 器種	寸法 cm			色調	備考	写真図版 写真登録番号
			口径	底径	器高			
岡5-12-88 10001299	2面	色绘素地 画	9.6*	3.7*	5.8	胎土:灰白	肥前 1710~40年代	5-7-88 20110372-373
岡5-12-89 10001300	2面	染付磁器 画	-	-	-	胎土:灰白	肥前 1770~90年代	5-7-89 20110374-375
岡5-13-90 10001273	2面	染付磁器 伝飯器	8.1	4.2	6.2	胎土:灰白	肥前 17c 後半	5-7-90 20110288
岡5-13-91 10001270	2面	染付磁器 蓋	8.8*	10.8*	-	胎土:灰白	肥前 18c	5-7-91 20110287
岡5-13-92 10001277	2面	色绘磁器 人形	-	-	-	胎土:灰白	肥前 17c 後半 (~18c 前半)	5-7-92 20110289
岡5-13-93 10001274	2面	開道具 トチン	5.2	3.7	3.2	胎土:灰白	磁器生産用 17c 後半~18c	5-7-93 20110334
岡5-13-94 10001988	SX6057	土師器 小皿	5.7	3.5	1.5	にぶい黄橙	底部系切	5-7-94 20110305
岡5-13-95 10001992	SX6057	土師器 小皿	5.9	3.3	1.5	にぶい橙	底部系切	5-7-95 20110309
岡5-13-96 10001996	SX6057	土師器 小皿	5.9	3.2	1.2	灰白	底部系切	5-7-96 20110313
岡5-13-97 10001995	SX6057	土師器 小皿	6.2	3.8	1.4	淡褐	底部系切	5-7-97 20110312
岡5-13-98 10001997	SX6057	土師器 小皿	6.4	4.0	1.7	浅黄褐	底部系切	5-7-98 20110314
岡5-13-99 10001990	SX6057	土師器 小皿	7.0	4.4	1.3	淡黄	底部系切 口縁油保付着	5-7-99 20110307
岡5-13-100 10001989	SX6057	土師器 小皿	7.0	4.0	1.4	灰白	底部系切	5-7-100 20110306
岡5-13-101 10001987	SX6057	土師器 小皿	7.2*	4.0	1.4	浅黄	底部系切 口縁油保付着	5-7-101 20110304
岡5-13-102 10001994	SX6057	土師器 小皿	7.4	3.9	1.8	浅黄褐	底部系切	5-7-102 20110311
岡5-13-103 10001993	SX6057	土師器 小皿	7.5	5.0	1.9	淡褐	底部系切 口縁油保付着	5-7-103 20110310
岡5-13-104 10001991	SX6057	土師器 小皿	8.0	4.1	1.9	淡褐	底部系切	5-7-104 20110308
岡5-13-105 10001998	SX6057	土師器 小皿	9.0	5.7	1.7	外:淡黄 内:灰白	底部系切 口縁油保付着	5-7-105 20110315
岡5-13-106 10002505	SX6061	土師器 小皿	5.8	3.1	1.3	灰白	底部系切	5-7-106 20110330
岡5-13-107 10002514	SX6060	土師器 小皿	7.8	4.3	1.4	褐	底部系切 口縁油保付着	5-7-107 20110331
岡5-13-108 10002508	2面	土師器 小皿	5.5	2.9	1.8	にぶい黄橙	底部系切 底部に穿孔	
岡5-13-109 10002109	2面	土師器 小皿	5.8	3.4	1.6	浅黄褐	底部系切 口縁油保付着	
岡5-13-110 10002112	2面	土師器 小皿	5.8	3.2	1.8	浅黄褐	底部系切	
岡5-13-111 10002507	2面	土師器 小皿	5.9*	4.2	1.7	にぶい黄橙	底部系切 口縁油保付着	
岡5-13-112 10002108	2面	土師器 小皿	6.0	4.0	1.4	浅黄褐	底部系切	
岡5-13-113 10002506	2面	土師器 小皿	6.1	3.4	1.3	褐	底部系切	
岡5-13-114 10002110	2面	土師器 小皿	6.1	2.9	1.7	にぶい黄橙	底部系切	
岡5-13-115 10002111	2面	土師器 小皿	6.2	3.7	1.3	浅黄褐	底部系切	
岡5-13-116 10002136	2面	土師器 小皿	6.3	3.4	1.2	浅黄褐	底部系切	
岡5-13-117 10002138	2面	土師器 小皿	6.8	4.4	1.0	にぶい橙	底部系切	

表 5-2 6G 区第2面の出土遺物

横段番号 登録番号	出土位置	種別 器種	寸法 cm			色調	備考	写真図版 写真登録番号
			口径	底径	器高			
岡5-13-118 10002135	2面	土師器 小皿	7.0	4.1	1.3	にぶい橙	底部系切	
岡5-13-119 10002133	2面	土師器 小皿	7.1	3.6	1.6	浅黄褐	底部系切 L麻油塗付着	
岡5-13-120 10002509	2面	土師器 小皿	7.2	4.0	2.0	にぶい黄褐	底部系切 L麻油塗付着	
岡5-13-121 10002137	2面	土師器 小皿	7.3*	4.5	1.2	浅黄褐	底部系切 内面に煤付着	
岡5-13-122 10002105	2面	土師器 小皿	7.5	4.4	1.8	浅黄褐	底部系切	
岡5-13-123 10002510	2面	土師器 小皿	7.8	4.2	2.0	にぶい黄褐	底部系切 油塗付着	
岡5-13-124 10002104	2面	土師器 小皿	7.8	4.1	1.9	浅黄褐	底部系切	
岡5-13-125 10002107	2面	土師器 小皿	8.0	4.2	1.8	浅黄褐	底部系切	
岡5-13-126 10002106	2面	土師器 小皿	8.1	4.7	2.1	浅黄褐	底部系切	
岡5-13-127 10002512	2面	土師器 小皿	8.1	4.8	2.3	にぶい黄褐	底部系切 油塗付着	
岡5-13-128 10002140	2面	土師器 皿	8.4*	3.6	2.0	灰白	底部系切	
岡5-13-129 10002103	2面	土師器 小皿	8.4	4.4	2.2	浅黄褐	底部系切	
岡5-13-130 10002511	2面	土師器 小皿	8.5	3.7	2.0	灰白	底部系切 内・外面に煤付着	
岡5-13-131 10002101	2面	土師器 小皿	8.8	-	1.7	浅黄褐	底部系切	
岡5-13-132 10002513	2面	土師器 小皿	9.1	5.4	1.8	浅黄褐	底部系切	
岡5-13-133 10002139	2面	土師器 杯	9.2*	4.2	2.2	淡黄	底部系切	
岡5-13-134 10002000	2面	土師器 杯	10.4	4.2	2.0	外：浅黄褐 内：黒	底部系切	
岡5-13-135 10001999	2面	土師器 杯	10.8	6.6	2.1	淡褐		
岡5-13-136 10002102	2面	土師器 杯	11.1	6.6	1.8	灰白		
岡5-13-137 10002114	2面	瓦質土器 焰燒	18.2	13.5	4.7	にぶい褐	外面部付着	5-7-137 20110339
岡5-13-138 10002115	2面	瓦質土器 焰燒	26.5*	20.5*	4.3	明闇灰	外面部付着	
岡5-13-139 11000165	2面	青銅製品	口径 3.9	器高 2.1	厚 0.3			5-7-139 20110698
岡5-13-140 11000158	2面	鉄器 包丁	長 20.2	幅 3.9	厚 0.3			

4 2-3面の遺物

第2面の整地層とした2-3面の遺物は、6C区の調査でもっとも出土量が多い。しかし、第2面に明確な造成土を伴わないといみられる改修が行われていることが、この整地層の掘り下げ中に確實になったことなどから、かなり時期幅がある遺物群となっている。2-3面とした遺物には、第2面改修以後と以前に使用されていたもの、第2面造成時のもの、第3面で使用されていたものなどが混在しているものと思われる。出土量が多いこともあり、項を独立させて、説明することにする。また、整理期間の都合などで、陶磁器を中心報告する。

遺物（図5-15～23）

141～145は肥前陶器小杯で、鉄軸が施され、内野山窯の製品とみられる。146～154は肥前陶器碗である。146は天目形で、鉄軸が施される。147・148は全面に灰軸が施される。149は内外面に銅緑軸が施される。150はいわゆる献上唐津であるが、形態はあまり類例がないものである。151は筒形で、灰軸が施され、部分的に銅緑軸が掛っている。152～154は灰軸が施される。155は産地不明の陶器碗で、透明に近い釉薬を施し、藁灰軸と思われる軸を流し掛けている。156は小石原産の陶器碗で、鉄軸の上に藁灰軸を流し掛けている。157は京焼の可能性がある陶器碗で、外面に鉄絵を描く。

158～160は肥前陶器皿である。158は灰軸が施され、内面に胎土目跡が残る。159・160は灰軸が施される。161は刷毛目手の肥前陶器で、台付皿の可能性がある。162・163は肥前陶器皿である。162は灰軸が施され、高台内は蛇の目状に釉剥ぎされている可能性がある。163は内面に波刷毛目が施され、内面見込みを蛇の目釉剥ぎしたのち、鉄漿が塗布される。164・165は肥前陶器火入で、線香立てなどの用途が考えられる。口縁上面から胴部外面上半にかけて象嵌が施され、脚部は3箇所に抉りがあるものと思われる。内面は無軸で、164は胴部外下面に、165は胴部外面下半と高台内に鉄軸が施される。

166～181は肥前京焼風陶器である。166は筒形の碗で、外面に山水文が描かれ、高台内に「小松吉」の押印がある。167～178は内面に山水文が描かれた皿で、高台内には円圏がある。167は「小松吉」、168・169は「北嶋十」、170は「小倉」、171は「千?吉」、172は「山原住」、173～177は「清水」、178は「木下弥」の押印があり、これまでに類例が知られていないものがみられる。179は内面に不鮮明な文様が描かれた皿で、高台内に「清水」の押印がみられる。180・181は内面に山水文が描かれた皿で、高台内は円圏のみである。

182～190は器形や刷毛目の特徴などから、佐賀市川久保皿山窯跡の製品と考えられるものである。いずれも白土による巻刷毛目が内外面に施されている。182・183は小碗で、体部にえくぼをつくる。184～187は体部が段状に立ち上がる小碗、188・189は体部が内湾して立ち上がる碗、190は体部が段状に立ち上がる鉢である。

191～194は肥前陶器碗で、191は内外面に打刷毛目、192～194は外面に弦手、内面に打刷毛目が施されている。195は肥前陶器皿で、外面に弦手、内面に打刷毛目が施されている。これらは現川窯の製品ではない可能性があるという指摘を大橋康二氏より頂いている。

196は肥前陶器鉢で、内面に波刷毛目が施され、鉄軸が流し掛けられている。197は二彩手の肥前陶器大皿で、内面に波刷毛目が施され、鉄軸と銅緑軸が流し掛けられている。内面見込みと高台に目跡が残る。198は肥前陶器蓋付鉢で、外面に波刷毛目が施され、口縁部を釉剥ぎしている。199は肥前陶器鉢で、内外面に刷毛目が施される。199は第2面出土遺物であるが、挙図編集の都合上、ここに掲載した。

200は肥前陶器土瓶で、外面上半に白化粧土と銅緑軸で文様が施される。201は肥前産とみられる陶器土瓶で、胴部を直線的にくぼませたやや特異な形態をしており、無軸である。202・203はセットとなる可能性が高い京焼の陶器土瓶とその蓋で、色絵による文様が施される。204・205はセットと思われる肥前陶器水柱とその蓋で、206は205の把手になる可能性があり、いずれも鉄軸が施される。207は肥前産と思われる陶器水柱で、無軸で

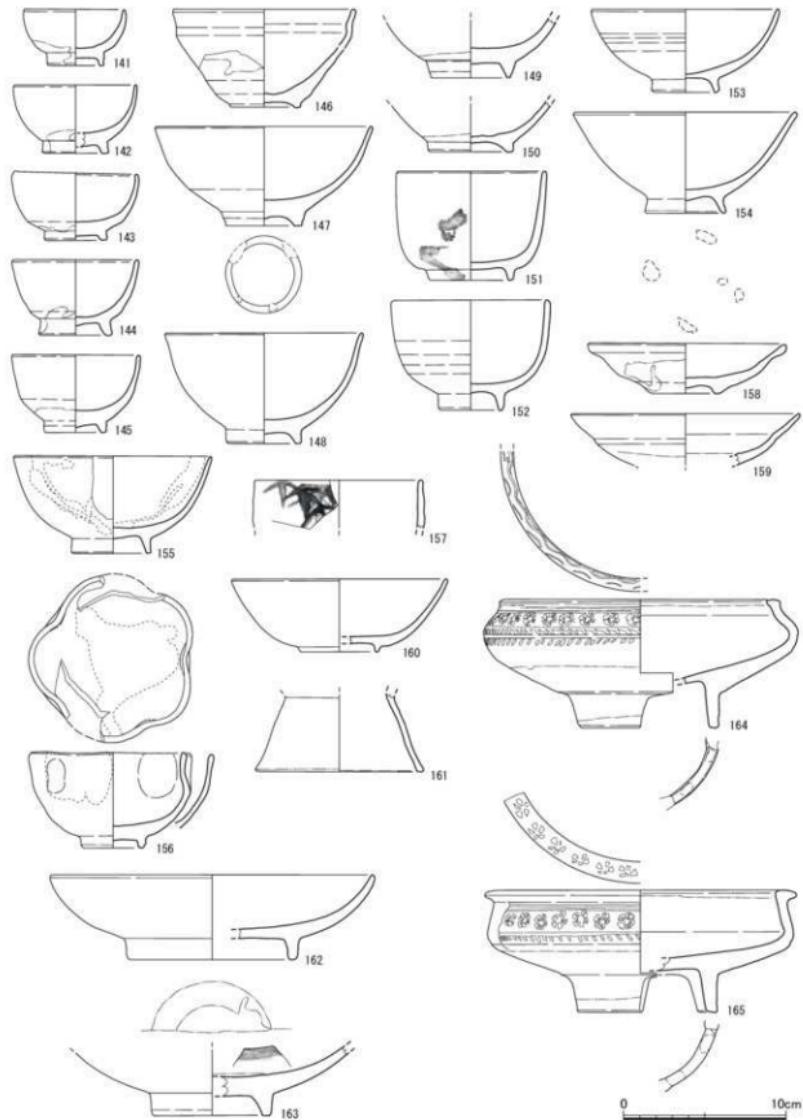


図 5-14 2-3面の出土遺物 1 (1/3)

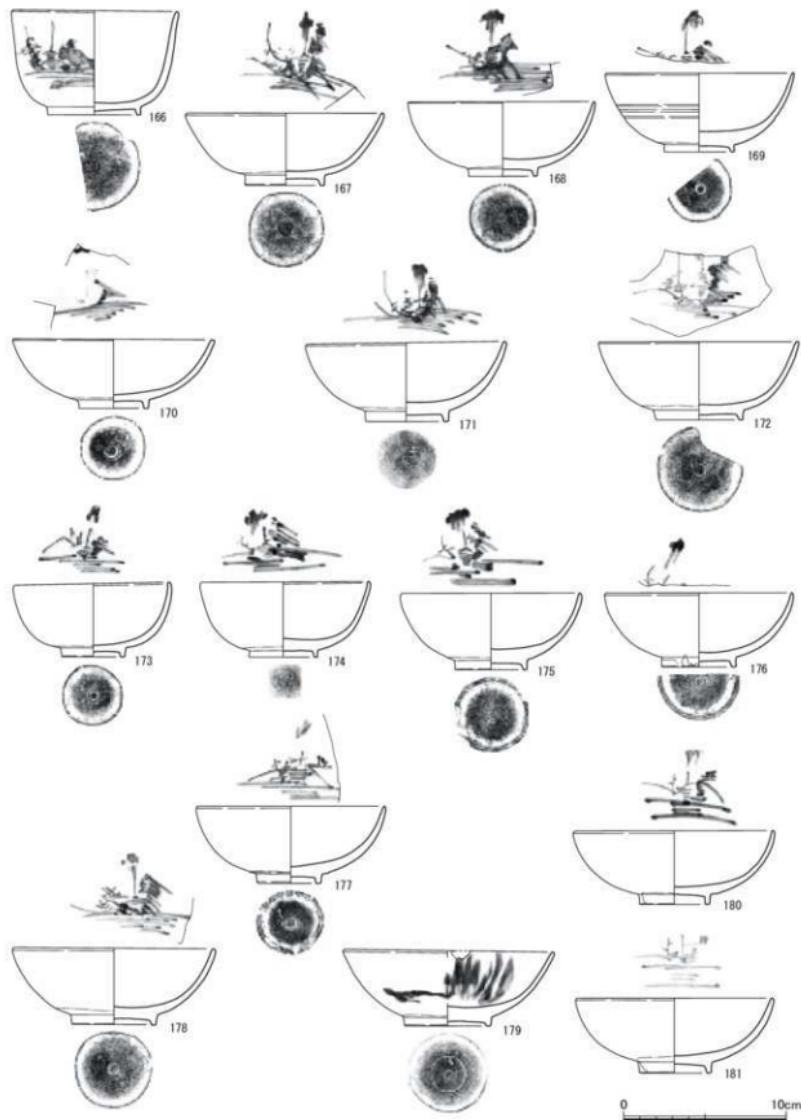


図5-15 2-3面の出土遺物2 (1/3)



図 5-16 2-3面の出土遺物 3 (1/3)

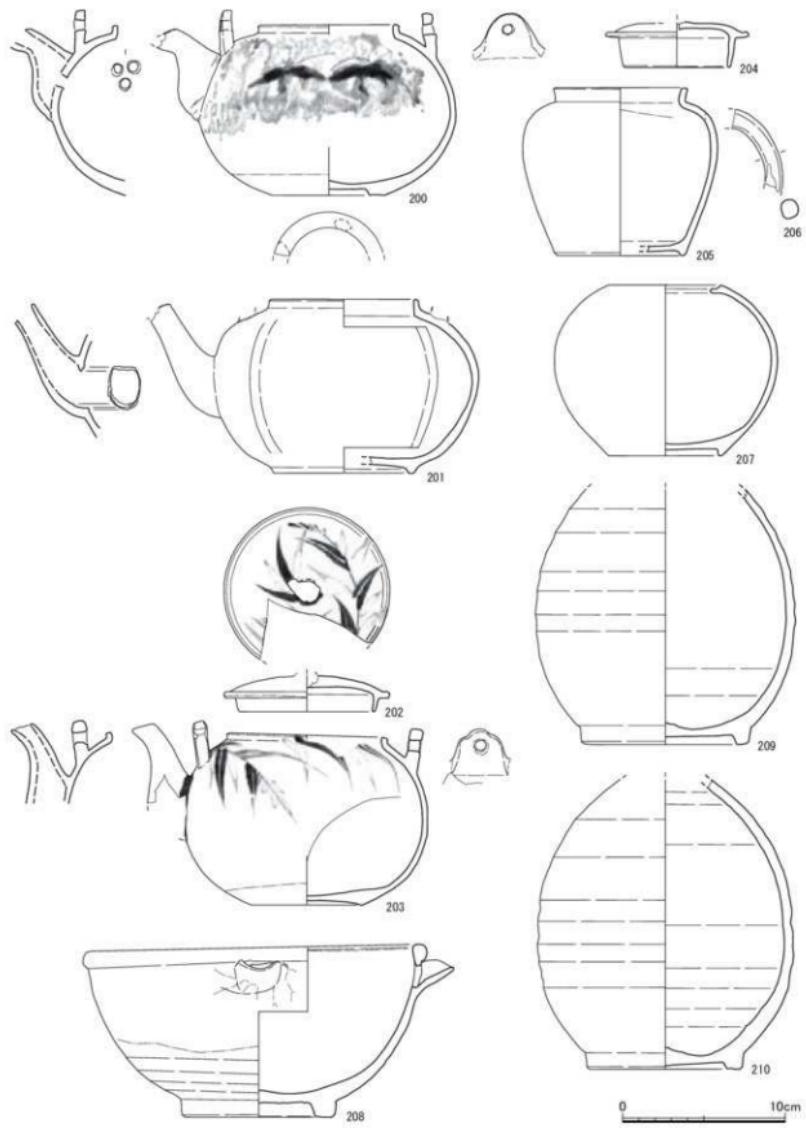


図 5-17 2-3面の出土遺物 4 (1/3)

あり、201と同じ窯の製品である可能性がある。208は肥前陶器片口で、鉄軸が施される。209・210は二彩手の肥前陶器瓶で、刷毛目が施されたのち、鉄軸と銅緑釉が流し掛けられる。

211～217は肥前陶器擂鉢である。211は内面の口縁端部を内側に若干とがらせたもので、口縁部のみに軸が施されている。212～216は平底で、口縁部のみに鉄軸を施すタイプで、212・213は口縁内面を肥厚させるもの、215・216は口縁部が玉縁状のものである。217は全面に鉄軸を施すタイプである。218は肥前陶器甕で、胴部内面には当て具痕の同心円文がみられる。

219～242は肥前白磁である。219～227は小碗で、220の外面にはケズリの痕跡がみられる。228・229は碗、230～233は小杯である。234～236は猪口で、口錫である。237～239は小皿である。240は皿で、内面に陽刻によるイチヨウの文様が施される。241・242は紅皿である。

243～250は肥前青磁で、243～245は碗である。246・247は同一個体と思われる瓶で、高台部は打ち欠きとみられ、肩部の装飾も打ち欠いている可能性がある。248・249は瓶、250は火入である。

251～280は肥前染付磁器碗で、丸形碗がほとんどである。251・252は文様が團線のみである。253・254はほぼ同じ大きさ・文様のもので、高台内に「宣明年製」の銘款がみられる。255の高台内には「大明年製」、256の高台内には「宣(明)年製」の銘款があり、257にも銘款がみられる。258・259は鳳凰と思われる鳥を描いたほぼ同じ大きさのもので、高台内には團線が描かれる。260にも258と似た鳥の文様が描かれる。261の高台内には團線、262の高台内には「大明年製」の銘款がみられる。264は口縁部端反の碗で、265の高台内には團線が描かれる。266は筒形で、高台内に銘款がみられる。267は内面見込みに手描きによる五井花文が施される。270の高台内には「大明年製」と思われる銘款がある。271～274は外面上にコンニャク印判による文様が施されたもので、273・274はほぼ同じ大きさ・文様のものである。275は第2面出土の80とほぼ同じ大きさ・文様のものである。276の高台内には銘款がみられる。277・278はほぼ同じ大きさ・文様のものである。279の高台内には團線、280の高台内には銘款がみられる。

281は肥前磁器碗で、外面に瑠璃釉が施される。282～284は肥前色絵磁器碗で、284は内面見込みを蛇の目釉剥ぎしたのち、青色の色絵を施している。285は肥前色絵素地の碗で、茶飲み用のものと思われる。内面見込みに人物、高台内に「富貴長春」の銘款がみられる。

286～288は肥前染付磁器小杯、289は肥前染付磁器猪口である。290～292は肥前染付磁器小碗で、292は嬉野吉田窯の製品である可能性がある。293～295は染付磁器小碗で、有田やその周辺の製品でない可能性が高い。295の高台には1箇所抉りがある。296～300は肥前染付磁器小碗である。297の高台内には「大明年製」の銘款がみられる。298～300は外面上にコンニャク印判による文様が施されたものである。301は肥前染付磁器仏飯器である。

302は肥前染付磁器蓋付小鉢で、口縁部を釉剥ぎしている。303は肥前染付磁器鉢で、輪出用に近いものである。304～308は肥前染付磁器皿で、305の高台内には1箇所ハリ支えの痕跡がみられる。309は肥前染付磁器鉢で、有田やその周辺の製品でない可能性がある。310は肥前染付磁器鉢で、内面見込みに手描きによる五井花文、高台内に銘款がみられる。

311は肥前色絵磁器瓶で、茶筅形になる可能性がある。312～318は肥前染付磁器瓶である。313・315・316は嬉野吉田窯の製品である可能性がある。319は肥前染付磁器花生、320・321は肥前色絵磁器水滴である。322は肥前染付磁器水滴で、一部に鉄軸が施される。323は肥前色絵磁器水滴で、外面は側面と上面の盛り上った部分を除いて露胎であり、その上に色絵付けが施される。

324～331は、18世紀後半以降の肥前染付磁器碗である。324は波佐見系の丸形碗、325～327はほぼ同じ大きさ・文様の丸形碗である。328～330は小広東形碗で、330は外面と内面見込みに同じ人物の絵柄が描かれる。331は第1面出土の2とほぼ同じ大きさ・文様のものである。

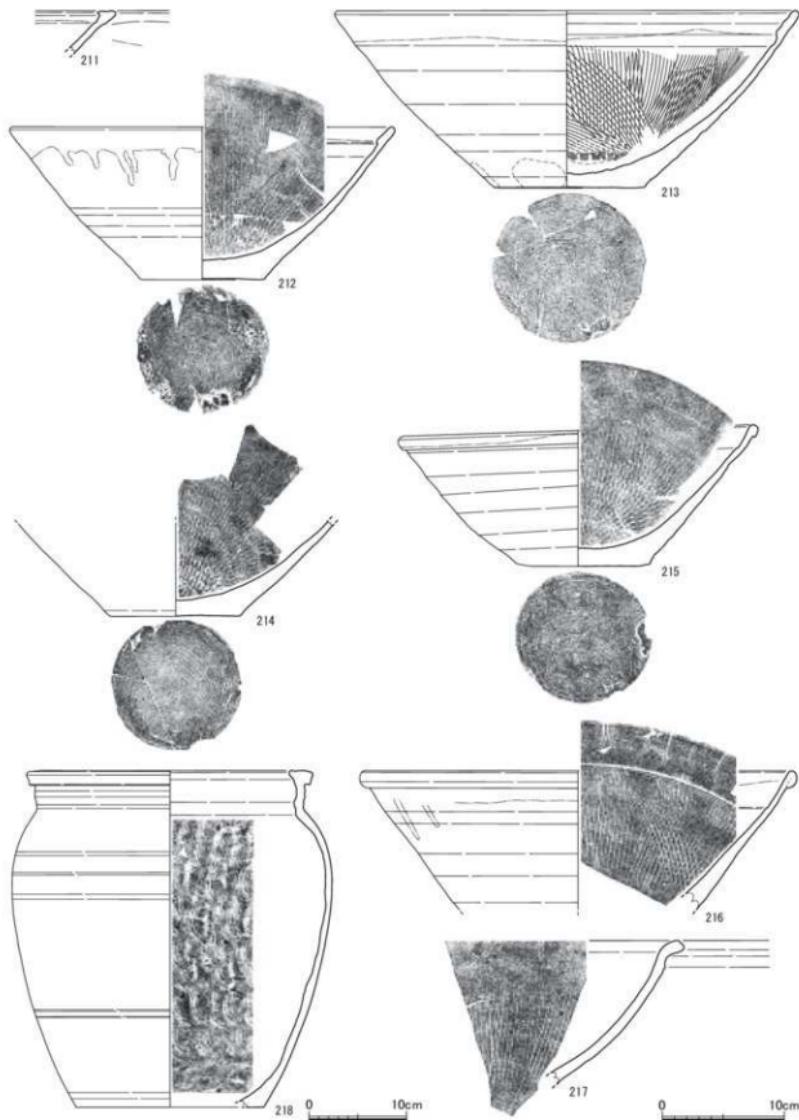


図5-18 2-3面の出土遺物5 (218は1/5、他は1/4)

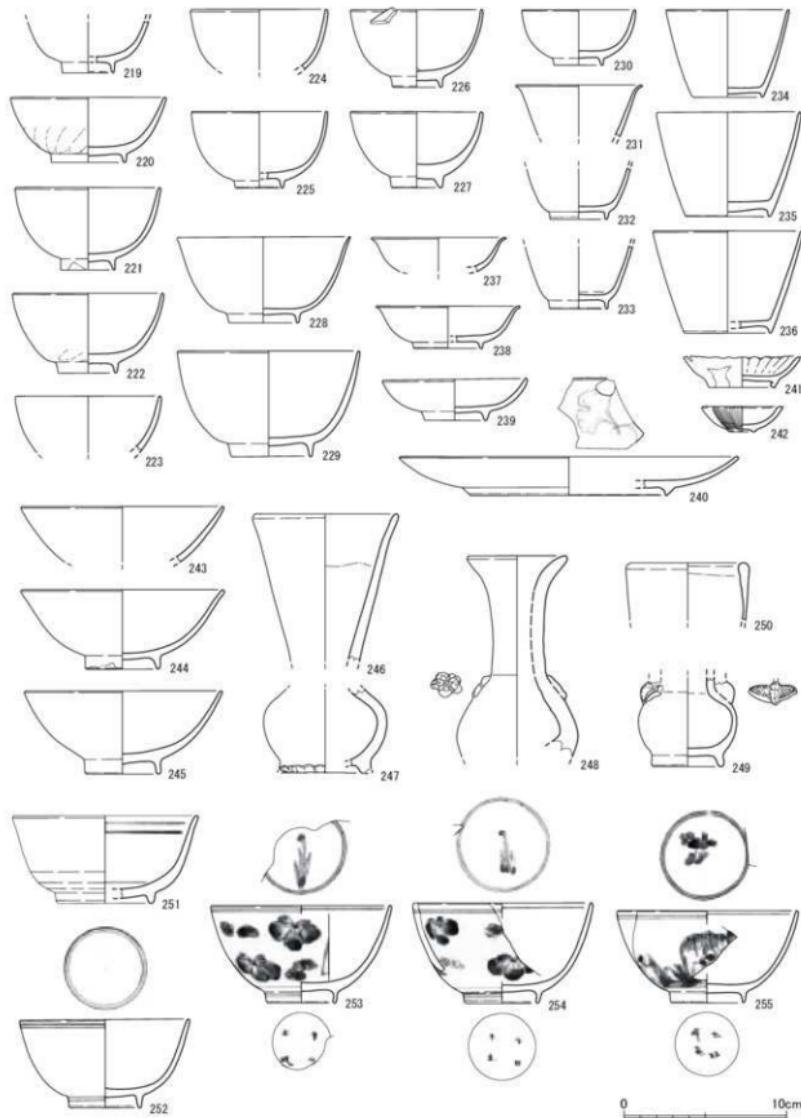


図 5-19 2-3面の出土遺物 6 (1/3)

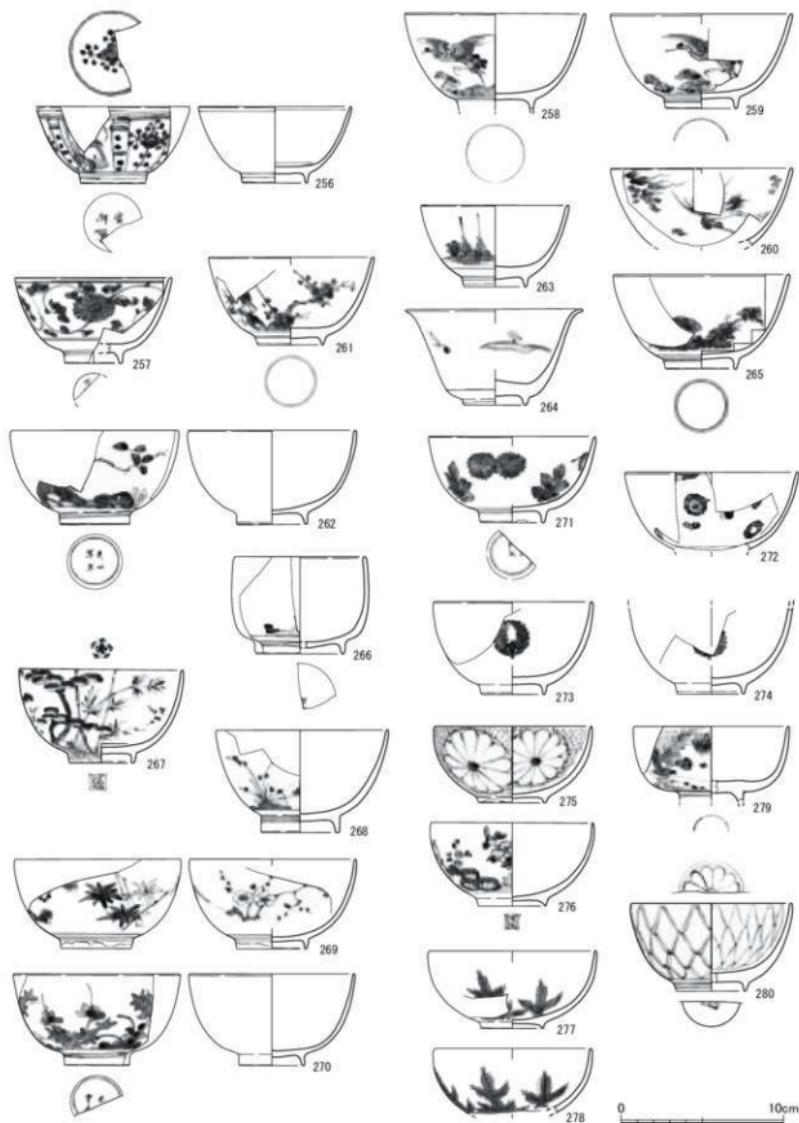


図5-20 2-3面の出土遺物7 (1/3)

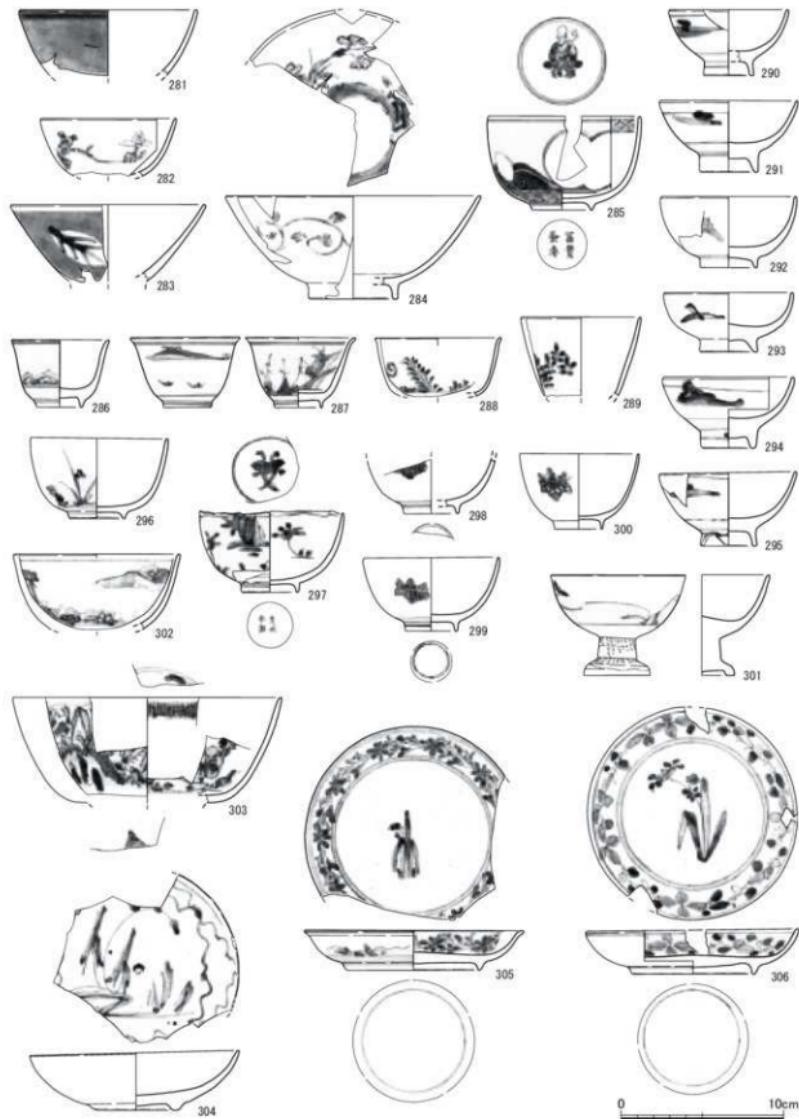


図 5-21 2-3面の出土遺物 8 (1/3)

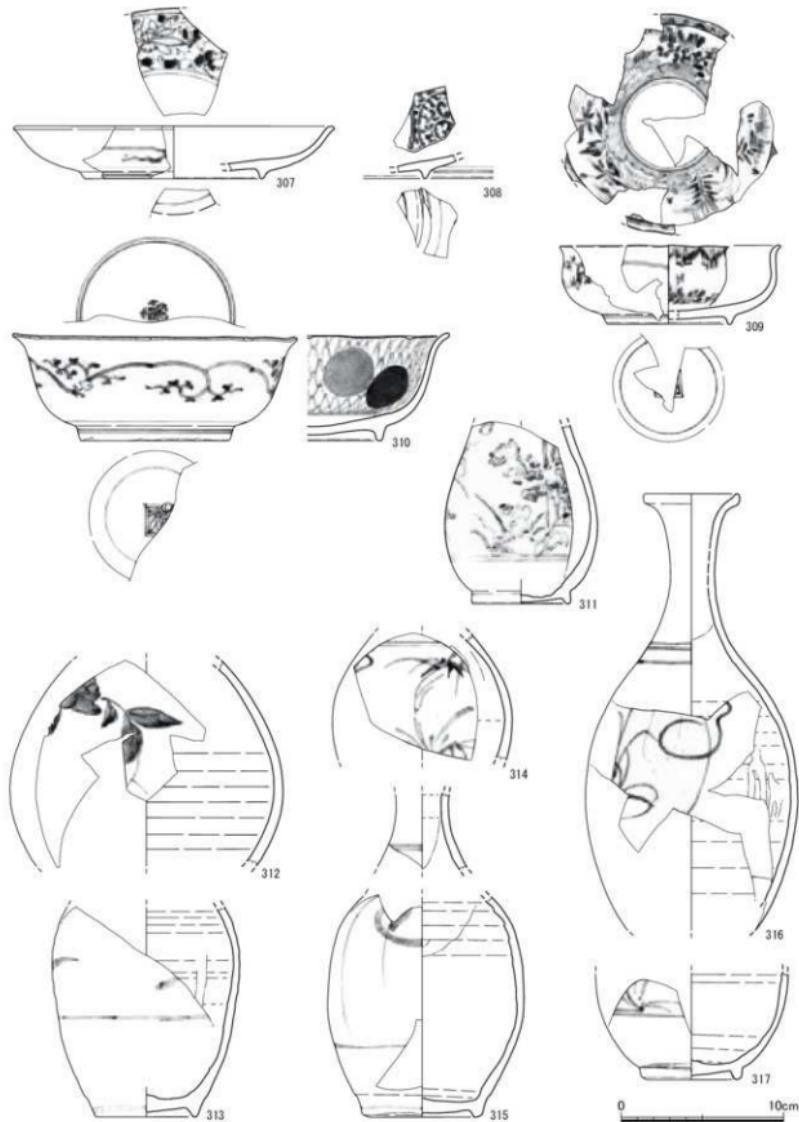


図 5-22 2-3面の出土遺物 9 (1/3)

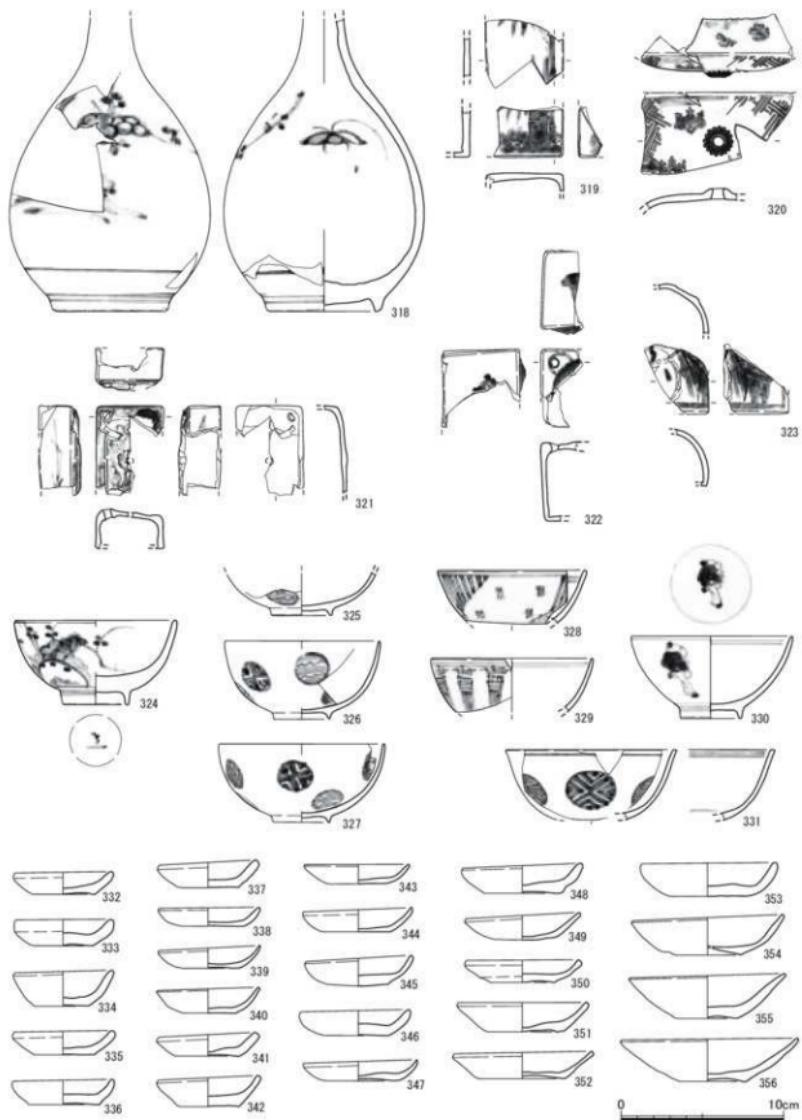


図 5-23 2-3面の出土遺物 10 (1/3)

322～353は底部糸切の土師器小皿である。口径6.1～8.4cm、器高1.2～2.2cmで、器壁が厚いものと薄いものの2種類がみられる。354～356は底部糸切の土師器杯で、底径が小さく、口縁部が大きく開く形態のものである。

表5-3 6G区第2-3面の出土遺物

持団・番号 登録番号	出土位置	種別 器種	寸法 cm			色 調	備 考	写真図版 写真登録番号
			口径	底径	器高			
図5-14-141 07001268	2-3面	陶器 小杯	6.3	3.5	3.4	胎土:暗褐色	内野山窯 17c後半	5-8-141 20110224
図5-14-142 07001270	2-3面	陶器 小杯	7.6*	4.1*	4.2	胎土:灰白色	内野山窯 17c後半	
図5-14-143 07001271	2-3面	陶器 小杯	7.8	3.9	4.2	胎土:灰白色	内野山窯 17c後半	5-8-143 20110226
図5-14-144 07001267	2-3面	陶器 小杯	7.8*	4.5	4.7	胎土:灰白色	内野山窯 17c後半	5-8-144 20110223
図5-14-145 07001269	2-3面	陶器 小杯	7.9	3.8	4.8	胎土:灰白色	内野山窯 17c後半	5-8-145 20110225
図5-14-146 07001266	2-3面	陶器 碗	11.2*	4.3	6.0	胎土:灰白色	肥前 16c末～17c初	
図5-14-147 07001294	2-3面	陶器 碗	13.4*	4.7	6.1	胎土:灰白色	肥前 17c前半～中頃	5-8-147 2011040
図5-14-148 07001421	2-3面	陶器 碗	12.3	4.7	6.8	胎土:灰白色	内野山窯 17c中頃	5-8-148 20110241
図5-14-149 07001273	2-3面	陶器 碗	-	4.8	-	胎土:浅黄褐色	内野山窯力 17c後半～18c初	5-8-149 20110227
図5-14-150 07001290	2-3面	陶器 碗	-	5.3	-	胎土:灰白色	唐津 17c後半 銚上唐津	5-8-150 20110229
図5-14-151 07001291	2-3面	陶器 碗	9.2	5.2	6.7	胎土:浅黄褐色	肥前 17c後半	5-8-151 20110237
図5-14-152 07001292	2-3面	陶器 碗	9.7	6.8	4.0	胎土:浅黄褐色	肥前 17c後半～18c初	5-8-152 20110238
図5-14-153 07001293	2-3面	陶器 碗	11.6*	4.2	5.1	胎土:灰白色	肥前 17c末～18c前半	
図5-14-154 07001300	2-3面	陶器 碗	13.8*	5.0	6.2	胎土:灰白色	肥前 17c後半	
図5-14-155 07001272	2-3面	陶器 碗	6.2	4.9	6.0	胎土:暗褐色	產地不明	5-8-155 20110235
図5-14-156 07001274	2-3面	陶器 碗	9.4	4.0	5.9	胎土:灰白色	小石原 元禄～18c前半	5-8-156 20110236
図5-14-157 07001295	2-3面	陶器 碗	10.4*	-	-	胎土:灰白色	京焼の可能性あり	5-8-157 20110341
図5-14-158 07001256	2-3面	陶器 皿	12.2*	4.5	3.0	胎土:浅黄褐色	肥前 1590～1610年代	
図5-14-159 07001275	2-3面	陶器 皿	14.1*	-	-	胎土:灰白色	内野山窯 17c末～18c前半	5-8-159 20110340
図5-14-160 07001299	2-3面	陶器 皿	13.3*	4.8	4.4	胎土:浅黄色	肥前 17c後半～18c初	
図5-14-161 07001254	2-3面	陶器 台付皿力	-	10.3*	-	胎土:灰	肥前 17c末～18c初	
図5-14-162 07001250	2-3面	陶器 皿	20.0*	10.4	5.2	胎土:灰白色	肥前 17c後半	5-8-162 20110250
図5-14-163 07001252	2-3面	陶器 皿	-	7.2*	-	胎土:浅黄褐色	内野山窯 17c中頃～後半	5-8-163 20110366
図5-14-164 07001248	2-3面	陶器 火入	17.3	9.6	7.9	胎土:灰	肥前 1630～50年代	5-8-164 20110249
図5-14-165 07001249	2-3面	陶器 火入	19.1*	9.7	7.6	胎土:灰	肥前 1630～50年代	
図5-15-166 07001297	2-3面	陶器 碗	10.3	5.7	6.4	胎土:灰	肥前 17c後半「小松吉」	5-8-166 20110244
図5-15-167 07001285	2-3面	陶器 皿	12.3	4.9	4.5	胎土:灰白色	肥前 17c後半「小松吉」	5-8-167 20110260
図5-15-168 07001287	2-3面	陶器 皿	11.5	4.3	4.6	胎土:灰白色	肥前 17c後半「北嶺十」	5-8-168 20110242-384

表 5-3 6G 区第2-3面の出土遺物

件名・番号 登録番号	出土位置	種別 器種	寸法 cm			色 潤	備 考	写真ID番 写真登録番号
			口径	底径	高さ			
岡 5-15-169 07001276	2-3面	陶器 皿	11.5*	4.3	4.8	胎土:灰白	肥前 17c 後半 「北嶋十」	5-8-169 20110367-368
岡 5-15-170 07001278	2-3面	陶器 皿	12.4*	4.3	4.2	胎土:灰白	肥前 17c 後半 「小食」	5-8-170 20110256
岡 5-15-171 07001288	2-3面	陶器 皿	12.4	5.1	4.8	胎土:灰白	肥前 17c 後半 「千?古」	5-8-171 20110243-385
岡 5-15-172 07001279	2-3面	陶器 皿	12.3*	5.4	4.8	胎土:灰白	肥前 17c 後半 「山原住」	
岡 5-15-173 07001466	2-3面	陶器 皿	9.7	3.9	4.5	胎土:淡黄褐	肥前 17c 後半 「清水」	5-8-173 20110262
岡 5-15-174 07001298	2-3面	陶器 皿	10.8*	4.3	4.6	胎土:灰白	肥前 17c 後半 「清水」	
岡 5-15-175 07001280	2-3面	陶器 皿	11.2*	4.4	4.7	胎土:灰白	肥前 17c 後半 「清水」	5-8-175 20110257
岡 5-15-176 07001282	2-3面	陶器 皿	11.6*	4.6	4.6	胎土:灰	肥前 17c 後半 「清水」	
岡 5-15-177 07001434	2-3面	陶器 皿	11.7	3.9	4.7	胎土:灰白	肥前 17c 後半 「清水」	5-8-177 20110261
岡 5-15-178 07001281	2-3面	陶器 皿	12.4	5.2	4.7	胎土:灰白	肥前 17c 後半 「木下彌」	5-8-178 20110258
岡 5-15-179 07001284	2-3面	陶器 皿	13.0	5.3	4.7	胎土:灰白	肥前 17c 後半 「清水」	5-8-179 20110259
岡 5-15-180 07001432	2-3面	陶器 皿	12.4	4.3	4.5	胎土:灰白	肥前 17c 後半～18c 初	5-8-180 20110245-386
岡 5-15-181 07001277	2-3面	陶器 皿	12.2*	4.4	4.6	胎土:灰白	肥前 17c 後半～18c 初	
岡 5-16-182 07001220	2-3面	陶器 小瓶	8.8*	3.8*	4.6	胎土:灰	川久保山窯 17c 後半～18c 前半	
岡 5-16-183 07001223	2-3面	陶器 小瓶	8.3	3.9	4.6	胎土:灰黄	川久保山窯 17c 後半～18c 前半	5-9-183 20110217
岡 5-16-184 07001225	2-3面	陶器 小瓶	8.0*	3.7*	4.8	胎土:浅黄	川久保山窯 17c 後半～18c 前半	
岡 5-16-185 07001224	2-3面	陶器 小瓶	8.2*	3.6	4.8	胎土:黑褐	川久保山窯 17c 後半～18c 前半	5-9-185 20110218
岡 5-16-186 07001221	2-3面	陶器 小瓶	8.8*	3.7	4.7	胎土:褐灰	川久保山窯 17c 後半～18c 前半	5-9-186 20110215
岡 5-16-187 07001219	2-3面	陶器 小瓶	8.3*	3.8	5.4	胎土:灰白	川久保山窯 17c 後半～18c 前半	5-9-187 20110214
岡 5-16-188 07001218	2-3面	陶器 小瓶	11.2	4.3	3.3	胎土:黄灰	川久保山窯 17c 後半～18c 前半	5-9-188 20110232
岡 5-16-189 07001226	2-3面	陶器 小瓶	11.2*	4.6*	4.3	胎土:褐灰・灰褐	川久保山窯 17c 後半～18c 前半	
岡 5-16-190 07001222	2-3面	陶器 钵	11.8*	5.0	4.6	胎土:褐灰	川久保山窯 17c 後半～18c 前半	5-9-190 20110216
岡 5-16-191 07001227	2-3面	陶器 鉢	9.4	4.0	4.8	胎土:灰赤	肥前 1690～18c 前半	5-9-191 20110219
岡 5-16-192 07001228	2-3面	陶器 鉢	9.1*	3.8*	5.3	胎土:灰赤	肥前 1690～18c 前半	
岡 5-16-193 07001230	2-3面	陶器 鉢	8.9*	3.8	5.3	胎土:暗赤褐	肥前 1690～18c 前半	5-9-193 20110221
岡 5-16-194 07001229	2-3面	陶器 鉢	11.4*	4.7*	5.8	胎土:褐灰	肥前 1690～18c 前半	5-9-194 20110220
岡 5-16-195 07001231	2-3面	陶器 鉢	12.4*	4.5	4.5	胎土:灰赤	肥前 1690～18c 前半	5-9-195 20110233
岡 5-16-196 07001215	2-3面	陶器 鉢	20.9*	8.5	8.7	胎土:褐灰	肥前 17c 後半	5-9-196 20110263
岡 5-16-197 07001214	2-3面	陶器 鉢	30.4	11.5	7.7	胎土:灰黄褐	肥前 17c 後半 二彩手	5-9-197 20110267
岡 5-16-198 10001921	2-3面	陶器 蓋付鉢	12.8*	-	-	胎土:にせい黄褐	肥前 17c 第4四半期～18c 初	
岡 5-16-199 10001922	2面	陶器 鉢	20.7*	8.1	8.2	胎土:橙	肥前 18c 前半～中頃	
岡 5-17-200 08000388	2-3面	陶器 土瓶	8.7*	6.9*	10.5	胎土:にせい黄褐	肥前 18c 中頃～後半	5-9-200 20110254

表5-3 6G区第2-3面の出土遺物

横段・番号 登録番号	出土位置	種別 器種	寸法 cm			色 潤	備 考	写真ID番 写真登録番号
			口径	底径	器高			
図5-17-201 08000386	2-3面	陶器 土瓶	9.2*	8.6*	10.7	に赤い赤褐・暗赤褐	肥前力 18c	5-9-201 20110253
図5-17-202 08000381	2-3面	陶器 蓋	8.3	10.2	-	胎土:灰白	京焼 18c 後半か	5-9-202 20110251
図5-17-203 08000382	2-3面	陶器 土瓶	9.9	-	11.3*	胎土:灰白	京焼 18c 後半か	5-9-203 20110251
図5-17-204 08000383	2-3面	陶器 蓋	6.3	8.8	-	胎土:灰	肥前 18c	5-9-204 20110231
図5-17-205 08000384	1-2面	陶器 水注	8.2	8.1*	10.3*	胎土:灰	肥前 18c	5-9-205 20110252
図5-17-206 08000385	1-2面	陶器 把手	-	-	-	胎土:灰	肥前 18c	
図5-17-207 08000387	2-3面	陶器 水注	6.8*	6.8*	10.5*	外:灰褐色 内:暗赤褐	肥前力 18-19c	
図5-17-208 10001985	2-3面	陶器 片口	20.8	9.4	10.6	胎土:に赤い相	肥前 17c 後半	
図5-17-209 08000374	2-3面	陶器 瓶	-	10.3	-	胎土:赤褐	肥前 17c 後半 二彩手	5-9-209 20110268
図5-17-210 08000375	2-3面	陶器 瓶	-	9.6	-	胎土:灰	肥前 17c 後半 二彩手	5-9-210 20110269
図5-18-211 08000353	2-3面	陶器 盤跡	-	-	-	胎土:相	肥前 17c 前半	
図5-18-212 08000358	2-3面	陶器 盤跡	31.6*	10.3	12.5	胎土:赤灰	肥前 17c 後半	5-9-212 20110281
図5-18-213 08000361	2-3面	陶器 盤跡	38.1	12.4	14.6	胎土:暗赤褐	肥前 17c 後半	5-9-213 20110276
図5-18-214 08000354	2-3面	陶器 盤跡	-	10.7	-	胎土:赤灰	肥前 17c 後半	
図5-18-215 08000343	2-3面	陶器 盤跡	29.6	11.0	11.6	胎土:赤褐	肥前 17c 末	
図5-18-216 08000344	2-3面	陶器 盤跡	35.8	-	-	胎土:赤	肥前 17c 末	
図5-18-217 08000351	2-3面	陶器 盤跡	-	-	-	胎土:灰白	肥前 18c	
図5-18-218 08000362	2-3面	陶器 瓶	30.3	19.2*	34.5	暗褐	肥前 1620~40年代	
図5-19-219 08000318	2-3面	白磁 小碗	-	3.2*	-	胎土:白	肥前 17c 後半	5-10-219 20110174
図5-19-220 08000321	2-3面	白磁 小碗	9.6	4.5	4.0	胎土:白	肥前 17c 後半	5-10-220 20110125
図5-19-221 08000316	2-3面	白磁 小碗	8.9	3.3	5.1	胎土:白	肥前 17c 後半	5-10-221 20110121
図5-19-222 08000317	2-3面	白磁 小碗	9.3	3.6	4.9	胎土:白	肥前 17c 後半	5-10-222 20110122
図5-19-223 08000325	2-3面	白磁 小碗	9.0*	-	-	胎土:白	肥前 17c 後半~18c 前半	5-10-223 20110175
図5-19-224 08000326	2-3面	白磁 小碗	8.4*	-	-	胎土:白	肥前 17c 後半~18c 初	5-10-224 20110176
図5-19-225 08000324	2-3面	白磁 小碗	8.4*	3.0	4.7	胎土:灰白	肥前 17c 後半~18c 初	5-10-225 20110193
図5-19-226 08000327	2-3面	白磁 小碗	8.2	3.1	4.8	胎土:白	肥前 17c 末~18c 前半	5-10-226 20110128
図5-19-227 08000315	2-3面	白磁 小碗	8.2*	3.2	4.7	胎土:灰白	肥前 18c 後半	5-10-227 20110120
図5-19-228 08000311	2-3面	白磁 碗	10.5*	4.0	5.3	胎土:白	肥前 1650~60年代	5-10-228 20110116
図5-19-229 08000310	2-3面	白磁 碗	11.2	5.0	6.5	胎土:白	肥前 17c 後半	5-10-229 20110115
図5-19-230 08000319	2-3面	白磁 小杯	7.0*	3.1*	3.4	胎土:白	肥前 17c 後半	5-10-230 20110123
図5-19-231 08000332	2-3面	白磁 小杯	7.8	-	-	胎土:白	肥前 17c 後半	
図5-19-232 08000329	2-3面	白磁 小杯	-	3.5	-	胎土:白	肥前 17c 後半	5-10-232 20110129

表 5-3 6G 区第2-3面の出土遺物

件名・番号 登録番号	出土位置	種別 器種	寸法 cm			色 潤	備 考	写真例 写真登録番号
			口径	底径	器高			
岡5-19-233 08000320	2-3面	白磁 小杯	-	3.5*	-	胎土:白	肥前 17c 後半	5-10-233 20110124
岡5-19-234 08000314	2-3面	白磁 猪口	7.4*	4.2	5.4	胎土:白	肥前 18c 前半 口錐	5-10-234 20110119
岡5-19-235 08000312	2-3面	白磁 猪口	8.8*	5.1	6.5	胎土:白	肥前 18c 前半 口錐	5-10-235 20110117
岡5-19-236 08000313	2-3面	白磁 猪口	9.1*	5.1	6.3	胎土:白	肥前 18c 前半 口錐	5-10-236 20110118
岡5-19-237 08000328	2-3面	白磁 小皿	8.3*	-	-	胎土:白	肥前 17c 後半	
岡5-19-238 08000323	2-3面	白磁 小皿	8.8*	4.2*	2.6	胎土:白	肥前 17c 後半	5-10-238 20110127
岡5-19-239 08000322	2-3面	白磁 小皿	8.9	3.9	2.6	胎土:白	肥前 17c 後半	5-10-239 20110126
岡5-19-240 08000331	2-3面	白磁 皿	20.9*	12.0*	2.4	胎土:白	肥前 1660 年代	5-10-240 20110178
岡5-19-241 10001935	2-3面	白磁 缸	7.2*	4.1	1.9	胎土:灰白	肥前 17c 末~ 18c 前半	
岡5-19-242 10001934	2-3面	白磁 缸	5.0*	1.6	1.6	胎土:灰白	肥前 18c 末~ 19c 前半	
岡5-19-243 08000335	2-3面	青磁 碗	12.5*	-	-	胎土:灰白	肥前 17c 後半~ 18c 前半	
岡5-19-244 08000334	2-3面	青磁 碗	12.5*	4.6*	4.9	胎土:灰白	肥前 17c 後半~ 18c 前半	5-10-244 20110699
岡5-19-245 08000336	2-3面	青磁 碗	12.2	4.7	5.1	胎土:灰白	肥前 17c 後半~ 18c 前半	5-10-245 20110700
岡5-19-246 08000338	2-3面	青磁 碗	8.9	-	-	胎土:灰白	肥前 17c 後半	
岡5-19-247 08000339	2-3面	青磁 瓶	-	-	-	胎土:灰白	肥前 17c 後半 高台打欠力	5-10-247 20110693
岡5-19-248 08000341	2-3面	青磁 瓶	6.2	-	-	胎土:灰	肥前 1630 ~ 50 年代	5-10-248 20110697
岡5-19-249 08000342	2-3面	青磁 瓶	-	4.4*	-	胎土:灰白	肥前 18c	5-10-249 20110695
岡5-19-250 08000340	2-3面	青磁 火人	7.4*	-	-	胎土:白	肥前 18c	
岡5-19-251 08000745	2-3面	染付磁器 碗	11.4*	5.8*	5.4	胎土:白・灰白	肥前 1610 ~ 30 年代	5-10-251 20110194
岡5-19-252 08000749	2-3面	染付磁器 碗	10.5	4.5	5.4	胎土:白	肥前 1650 ~ 60 年代	5-10-252 20110143
岡5-19-253 10002479	2-3面	染付磁器 碗	11.1*	4.3*	6.0	胎土:灰白	肥前 1660 ~ 70 年代	5-10-253 20110169
岡5-19-254 10002480	2-3面	染付磁器 碗	11.1*	4.6	6.2	胎土:灰白	肥前 1660 ~ 70 年代	5-10-254 20110170
岡5-19-255 10002481	2-3面	染付磁器 碗	11.1*	4.6	5.7	胎土:灰白	肥前 1660 ~ 70 年代	5-10-255 20110171
岡5-20-256 10002478	2-3面	染付磁器 碗	9.5*	4.1*	4.7	胎土:灰白	肥前 1660 ~ 70 年代	5-10-256 20110168
岡5-20-257 10001952	2-3面	染付磁器 碗	9.7*	3.6	5.3	胎土:灰白	肥前 1660 年代前後	5-10-257 20110002
岡5-20-258 08000737	2-3面	染付磁器 碗	11.1	4.8	-	胎土:白	肥前 1660 ~ 80 年代	5-10-258 20110132
岡5-20-259 08000738	2-3面	染付磁器 碗	11.2*	4.3*	5.8	胎土:白	肥前 1660 ~ 80 年代	5-10-259 20110133
岡5-20-260 10002465	2-3面	染付磁器 碗	11.2*	-	-	胎土:灰白	肥前 1660 ~ 90 年代	
岡5-20-261 08000735	2-3面	染付磁器 碗	10.2*	4.0	5.4	胎土:白	肥前 1670 ~ 90 年代	5-10-261 20110131
岡5-20-262 10002475	2-3面	染付磁器 碗	10.3*	4.3	5.8	胎土:灰白	肥前 1670 ~ 90 年代	5-10-262 20110166
岡5-20-263 08000743	2-3面	染付磁器 碗	9.1	3.8	5.0	胎土:灰白	肥前 17c 後半	5-10-263 20110138
岡5-20-264 08000748	2-3面	染付磁器 碗	10.9	3.9	5.9	胎土:白	肥前 17c 後半	5-10-264 20110142

表5-3 6G区第2-3面の出土遺物

横段・番号 登録番号	出土位置	種別 器種	寸法 cm		色調	備考	写真箇所 写真登録番号	
			口径	底径				
図5-20-265 10001954	2-3面	染付磁器 碗	10.8*	4.4	5.8	胎土:灰白	肥前 17c後半	5-10-265 20110004
図5-20-266 10002477	2-3面	染付磁器 碗	8.1*	5.4*	6.0	胎土:灰白	肥前 1690~18c第1四半期	5-10-266 20110200
図5-20-267 08000734	2-3面	染付磁器 碗	10.1	4.0	5.7	胎土:白	肥前 1690~18c第1四半期	5-10-267 20110130
図5-20-268 08000741	2-3面	染付磁器 碗	10.6*	4.8	6.3	胎土:灰白	肥前 17c末~18c前半	5-10-268 20110136
図5-20-269 08000740	2-3面	染付磁器 碗	10.3*	4.7	5.5	胎土:白	肥前 17c末~18c初	5-10-269 20110135
図5-20-270 10002476	2-3面	染付磁器 碗	10.3*	4.0*	5.6	胎土:灰白	肥前 1690~1730年代	5-10-270 20110167
図5-20-271 10002474	2-3面	染付磁器 碗	10.3*	4.0*	5.3	胎土:灰白	肥前 1690~18c第1四半期	5-10-271 20110165
図5-20-272 10002462	2-3面	染付磁器 碗	10.7*	-	-	胎土:灰白	肥前 17c末~18c前半	5-10-272 20110199
図5-20-273 10002463	2-3面	染付磁器 碗	9.8*	4.0	5.7	胎土:灰白	肥前 1690~1730年代	5-10-273 20110159
図5-20-274 10002464	2-3面	染付磁器 碗	-	4.3	-	胎土:灰白	肥前 1690~1730年代	
図5-20-275 08000750	2-3面	染付磁器 碗	9.8	4.2	5.7	胎土:白	肥前 18c前半	5-10-275 20110144
図5-20-276 08000736	2-3面	染付磁器 碗	10.0	4.1	5.1	胎土:白	肥前 18c前半	5-10-276 20110173
図5-20-277 10002468	2-3面	染付磁器 碗	10.4*	3.9*	4.8	胎土:灰白	肥前 18c前半	5-10-277 20110161
図5-20-278 10002469	2-3面	染付磁器 碗	9.7	-	-	胎土:灰白	肥前 18c前半	5-10-278 20110162
図5-20-279 08000744	2-3面	染付磁器 碗	9.6*	4.2*	-	胎土:白	肥前 18c前半	5-10-279 20110139
図5-20-280 08000747	2-3面	染付磁器 碗	10.0*	4.3*	5.4	胎土:白	肥前 18c前半	5-10-280 20110141
図5-21-281 10001938	2-3面	磁器 碗	11.0*	-	4.1	胎土:灰白	肥前 17c後半 外面珊瑚釉	5-11-281 20110196
図5-21-282 10001933	2-3面	色絵磁器 小碗	8.4*	-	3.5	胎土:灰白	肥前 1670~1700年代	5-11-282 20110180
図5-21-283 10001936	2-3面	色絵磁器 小碗	12.0*	-	4.8	胎土:灰白	肥前 17c後半	5-11-283 20110182
図5-21-284 10001937	2-3面	色絵磁器 小碗	15.7*	5.5	6.4	胎土:灰白	肥前 1670~90年代	5-11-284 20110201~202
図5-21-285 08000746	2-3面	染付磁器 碗	9.4*	3.7	5.8	胎土:白	肥前 1710~40年代	5-11-285 20110140
図5-21-286 10001947	2-3面	染付磁器 小杯	6.0	2.8	4.2	胎土:白	肥前 1630~50年代	5-11-286 20110156
図5-21-287 10001945	2-3面	染付磁器 小杯	6.8	2.9	4.3	胎土:白	肥前 17c後半	5-11-287 20110154
図5-21-288 10002461	2-3面	染付磁器 小杯	7.8*	-	-	胎土:白	肥前 1660~90年代	5-11-288 20110190
図5-21-289 10001944	2-3面	染付磁器 猪口	7.4*	-	4.8	胎土:灰白	肥前 18c前半	5-11-289 20110189
図5-21-290 10001931	2-3面	染付磁器 小碗	7.4*	3.1	4.1	胎土:灰白	肥前 18c前半	
図5-21-291 10001927	2-3面	染付磁器 小碗	8.6*	3.6	4.4	胎土:灰白	肥前 18c前半	5-11-291 20110148
図5-21-292 10001928	2-3面	染付磁器 小碗	8.4*	3.5	4.4	胎土:灰白	肥前(吉田窯力) 18c前半	5-11-292 20110149
図5-21-293 10001926	2-3面	染付磁器 小碗	7.9*	3.6	3.7	胎土:灰白	在地力 18c前半~中頃	5-11-293 20110147
図5-21-294 10001929	2-3面	染付磁器 小碗	8.1	3.4	4.4	胎土:灰白	在地力 18c前半~中頃	5-11-294 20110150
図5-21-295 10001930	2-3面	染付磁器 小碗	8.5	3.5	4.5	胎土:灰白	在地力 18c前半~中頃	5-11-295 20110151
図5-21-296 08000739	2-3面	染付磁器 小碗	8.4	3.3	4.9	胎土:白・灰白	肥前 1690~18c前半	5-11-296 20110134

表 5-3 6G 区第2-3面の出土遺物

件名・番号 登録番号	出土位置	種別 器種	寸法 cm			色 潤	備 考	写真例 写真登録番号
			口径	底径	器高			
岡 5-21-297 10002482	2-3面	染付磁器 小瓶	8.9	3.5	5.0	胎土:灰白	肥前 17c 第4四半期	5-11-297 20110172
岡 5-21-298 10002467	2-3面	染付磁器 小瓶	-	3.3*	-	胎土:灰白	肥前 1690 ~ 1730 年代	
岡 5-21-299 10002466	2-3面	染付磁器 小瓶	8.4	3.2	4.5	胎土:灰白	肥前 1690 ~ 1730 年代	5-11-299 20110160
岡 5-21-300 10001946	2-3面	染付磁器 小瓶	7.3	2.9	4.6	胎土:白	肥前 1690 ~ 18c 第1四半期	5-11-300 20110155
岡 5-21-301 10001948	2-3面	染付磁器 仏壇器	8.3	4.1	6.2	胎土:白	肥前 1640 ~ 50 年代	5-11-301 20110157
岡 5-21-302 10002460	2-3面	染付磁器 蓋付小鉢	10.3*	-	-	胎土:白	肥前 17c 後半	5-11-302 20110198
岡 5-21-303 08000757	2-3面	染付磁器 鉢	16.6*	-	-	胎土:白	肥前 1660 ~ 90 年代	
岡 5-21-304 08000755	2-3面	染付磁器 皿	12.9*	5.2	3.5	胎土:灰白	肥前 1630 ~ 40 年代	5-11-304 20110248
岡 5-21-305 08000751	2-3面	染付磁器 皿	13.5*	8.1	2.5	胎土:白	肥前 1660 ~ 70 年代	5-11-305 20110246+389
岡 5-21-306 08000752	2-3面	染付磁器 皿	13.1	7.6	2.7	胎土:白	肥前 1650 ~ 70 年代	5-11-306 20110247+390
岡 5-22-307 08000753	2-3面	染付磁器 皿	19.7*	10.9*	3.2	胎土:白	肥前 18c 前半	
岡 5-22-308 08000754	2-3面	染付磁器 皿	-	-	-	胎土:白	肥前 18c 前半	5-11-308 20110342+343
岡 5-22-309 08000756	2-3面	染付磁器 鉢	13.6	7.7	4.9	胎土:白	肥前 18c 第1四半期前後	5-11-309 20110277
岡 5-22-310 08000758	2-3面	染付磁器 鉢	17.6	9.1	6.4	胎土:白	肥前 1690 ~ 1730 年代	5-11-310 20110265
岡 5-22-311 08000708	2-3面	色絵磁器 瓶	-	6.1*	-	胎土:白	肥前 1650 ~ 60 年代	5-11-311 20110274
岡 5-22-312 08000706	2-3面	染付磁器 瓶	-	-	-	胎土:灰白	肥前 17c 後半	
岡 5-22-313 08000702	2-3面	染付磁器 瓶	-	6.2	-	胎土:灰白	肥前(吉田窯力) 17c 後半	5-11-313 20110271
岡 5-22-314 08000704	2-3面	染付磁器 瓶	-	-	-	胎土:灰白	肥前 17c 後半	
岡 5-22-315 08000703	2-3面	染付磁器 瓶	-	7.4	-	胎土:灰白	肥前(吉田窯力) 17c 後半	
岡 5-22-316 08000709	2-3面	染付磁器 瓶	5.8	-	-	胎土:灰白	肥前(吉田窯力) 17c 後半	
岡 5-22-317 08000707	2-3面	染付磁器 瓶	-	5.8	-	胎土:にせい黄橙	肥前 17c 後半	
岡 5-23-318 08000701	2-3面	染付磁器 瓶	-	7.0	-	胎土:白	肥前 17c 後半 ~ 18c 初	5-11-318 20110270
岡 5-23-319 10001939	2-3面	染付磁器 花生	4.8	-	-	胎土:灰白	肥前 1670 ~ 90 年代	5-11-319 20110183+184
岡 5-23-320 10001942	2-3面	色絵磁器 水滴	-	-	-	胎土:灰白	有田 1680 ~ 90 年代	5-11-320 20110197
岡 5-23-321 10001940	2-3面	色絵磁器 水滴	4.1	-	2.6	胎土:灰白	有田 18c 後半	5-11-321 20110185
岡 5-23-322 10001941	2-3面	染付磁器 水滴	-	-	-	胎土:灰白	肥前 18c 中頃~末	5-11-322 20110186+187
岡 5-23-323 10001943	2-3面	色絵磁器 水滴	-	-	-	胎土:灰白	肥前 18c 後半 ~ 19c 初	5-11-323 20110188
岡 5-23-324 10001923	2-3面	染付磁器 瓶	10.0	4.1	5.2	胎土:灰白	波佐見系 18c 後半	5-11-324 20110145
岡 5-23-325 10002472	2-3面	染付磁器 瓶	-	3.3*	-	胎土:灰白	肥前 18c 後半	
岡 5-23-326 10002471	2-3面	染付磁器 瓶	9.6*	3.5	4.9	胎土:灰白	肥前 18c 後半	
岡 5-23-327 10002470	2-3面	染付磁器 瓶	10.2*	3.5*	5.0	胎土:灰白	肥前 18c 後半	5-11-327 20110163
岡 5-23-328 10001924	2-3面	染付磁器 瓶	9.2	-	3.3	胎土:灰白	肥前 1770 ~ 1810 年代	

表5-3 6G区第2-3面の出土遺物

横固・番号 登録番号	出土位置	種別 器種	寸法 cm		色 潤	備 考	写真固固 写真登録番号	
			口径	底径				
岡5-23-329 100001925	2-3面	染付磁器 碗	10.0*	-	3.3	胎土:灰白	肥前 1770 ~ 1810年代	
岡5-23-330 080000742	2-3面	染付磁器 碗	9.9*	3.7	5.1	胎土:白	肥前 1770 ~ 1810年代	5-11-330 20110137
岡5-23-331 100002473	2-3面	染付磁器 碗	10.6*	-	-	胎土:灰白	肥前 18c 第4四半期	
岡5-23-332 100002432	2-3面	土師器 小皿	6.1	3.9	1.4	浅黄柾	底部系切 口縁油煤付着	
岡5-23-333 100002431	2-3面	土師器 小皿	6.1	4.0	1.6	浅黄柾	底部系切	
岡5-23-334 100002446	2-3面	土師器 小皿	6.2	3.5	2.2	浅黄柾	底部系切	
岡5-23-335 100002430	2-3面	土師器 小皿	6.3	3.7	1.5	浅黄柾	底部系切	
岡5-23-336 100002433	2-3面	土師器 小皿	6.3	4.4	2.1	黄柾	底部系切	
岡5-23-337 100002441	2-3面	土師器 小皿	6.3	3.8	1.7	浅黄柾	底部系切	
岡5-23-338 100002438	2-3面	土師器 小皿	6.3	3.6	1.2	浅黄柾	底部系切 口縁油煤付着	
岡5-23-339 100002434	2-3面	土師器 小皿	6.3	3.5	1.4	浅黄柾	底部系切 口縁油煤付着	
岡5-23-340 100002435	2-3面	土師器 小皿	6.3	3.3	1.6	淡黄	底部系切 口縁油煤付着	
岡5-23-341 100002439	2-3面	土師器 小皿	6.4	3.9	1.4	柾	底部系切	
岡5-23-342 100002445	2-3面	土師器 小皿	6.4	3.7	1.9	浅黄柾	底部系切	
岡5-23-343 100002437	2-3面	土師器 小皿	6.5	3.6	1.2	浅黄柾	底部系切	
岡5-23-344 100002440	2-3面	土師器 小皿	6.7	4.2	1.5	浅黄柾	底部系切	
岡5-23-345 100002451	2-3面	土師器 小皿	6.7	3.8	1.9	黒柾	底部系切	
岡5-23-346 100002436	2-3面	土師器 小皿	6.8	4.0	1.6	柾	底部系切 口縁油煤付着	
岡5-23-347 100002443	2-3面	土師器 小皿	7.0	4.6	1.3	浅黄柾	底部系切 口縁油煤付着	
岡5-23-348 100002442	2-3面	土師器 小皿	7.0	4.9	1.9	に赤い黄柾	底部系切	
岡5-23-349 100002449	2-3面	土師器 小皿	7.1	4.0	1.7	灰白	底部系切 口縁油煤付着	
岡5-23-350 100002444	2-3面	土師器 小皿	7.2	4.0	1.4	柾	底部系切 口縁油煤付着	
岡5-23-351 100002450	2-3面	土師器 小皿	8.1	4.8	1.8	に赤い柾	底部系切	
岡5-23-352 100002453	2-3面	土師器 小皿	8.7	5.4	1.7	浅黄柾	底部系切 口縁油煤付着	
岡5-23-353 100002454	2-3面	土師器 小皿	8.4	4.9	2.1	浅黄柾	底部系切	
岡5-23-354 100002457	2-3面	土師器 杯	9.4	4.0	2.5	灰白	底部系切	
岡5-23-355 100002456	2-3面	土師器 杯	9.7	4.0	2.8	浅黄柾	底部系切	
岡5-23-356 100002455	2-3面	土師器 杯	11.0	4.2	2.7	に赤い黄柾	底部系切	

5 第3面の遺構と遺物

遺構

第3面の遺構としては、石組遺構、トイレ遺構、石列、土坑などを検出したが、全体的に明確な遺構は少なく、柱穴も多くの検出されていない（図5-24）。調査区北部に周囲より約0.1m高い基壇状の部分を約0.6×0.7mの範囲で確認し、そのほぼ中央にSX6058があるが、その性格は不明といわざるを得ない。また、調査区西部に位置する石列であるSX6064、東部に位置する方形状の石組であるSX6078も性格不明であり、第3面は全体的にその構造を把握することが難しい。調査区北部に位置するSX6069は最下層に炭化物層が認められる土坑である。

ただ、調査区北東部に位置するSX6100トイレ遺構は簡易的なものではなく、第4面との間に厚くないとはいえ整地層が認められることから、何らかの施設があったことは確実であろう。柱穴の少なさからみて、礎石建物が存在した可能性が高いものと思われる。なお、SX6058周辺とSX6100周辺は1.3mほどの標高差があるが、その間がどのような構造になっていたかは、調査で明らかにできなかった。

SX6058（図5-25）

調査区北部に位置する性格不明の石組遺構である。長さ0.6m、幅0.2～0.25mの石材を中心として約1.6m四方の方形状に石を並べており、約0.7×0.85mほどの空間を作り出している。図示していないが、周辺の土層などからみて、掘形をもつものではなく、基壇状の盛土構築中に設置されたものと考えられる。石列は1段のみ検出されているが、これより上部にも石が積み上げられていたかどうかは不明である。

SX6063（図5-25）

調査区北部に位置する完形の染付磁器小壺1点・土師器小皿2点、破片となった土師器小皿1点分が比較的集中して出土した部分を遺構とした。わずかな掘り込みが確認できたようであるが、SX6058に近接していることから、一連の構築作業中に埋置された可能性が高い。

SX6063出土遺物（図5-27）

357・358は底部糸切の土師器小皿で、357は口縁部に油煤が付着している。359は底部糸切の土師器杯である。360は肥前染付磁器小壺で、内面と底部は無釉である。外面に瓢箪が2箇所、十字のそれぞれの先端に円が描かれた文様が1箇所描かれる。

SX6100（図5-26）

調査区北東部に位置するトイレと考えられる遺構である。調査期間の都合で詳細に構築状況などは確認できなかつたが、平面が約2.0m四方の方形状に0.1～0.7mの大きさの石材を並べて、区画を形成している。区画内部の南辺に近接して木桶を2個並置している形態からトイレ遺構と推定した。区画の四隅には礎石となる可能性がある石材が配置されており、北辺については構築当初から石が配されていなかつたかどうかは不明である。確実ではないが、西辺にのみ下位に3段ほどの石材が確認できたので、第4面のSX6095から南方向に構築されていた石垣を利用した可能性がある。また、南辺中央から約0.6m南に大きさ0.5mの扁平な石材が置かれたような状態で確認され、SX6100に関連する可能性がある。

内部の木桶は西側のもの（SX6101）は底部付近の板材が比較的良好に残存していたが、東側のもの（SX6102）はごくわずかに板材が残るのみで、土層でその存在が確認されるだけである。SX6101内部からは種子が多数出土しており、金原正明先生の現地における分析では、ウメがもっとも多く、他にヤマモモ・カキ・ナスの種子が確認されている。



図5-24 第3面の造構分布 (1/250)

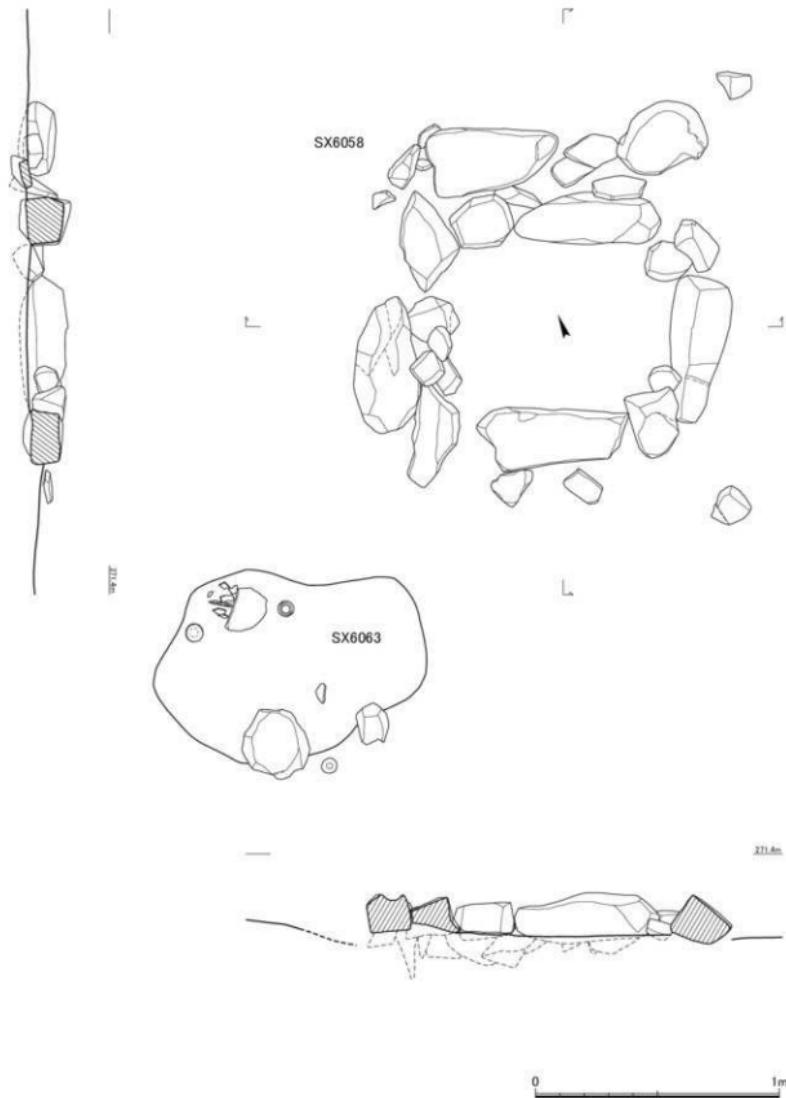
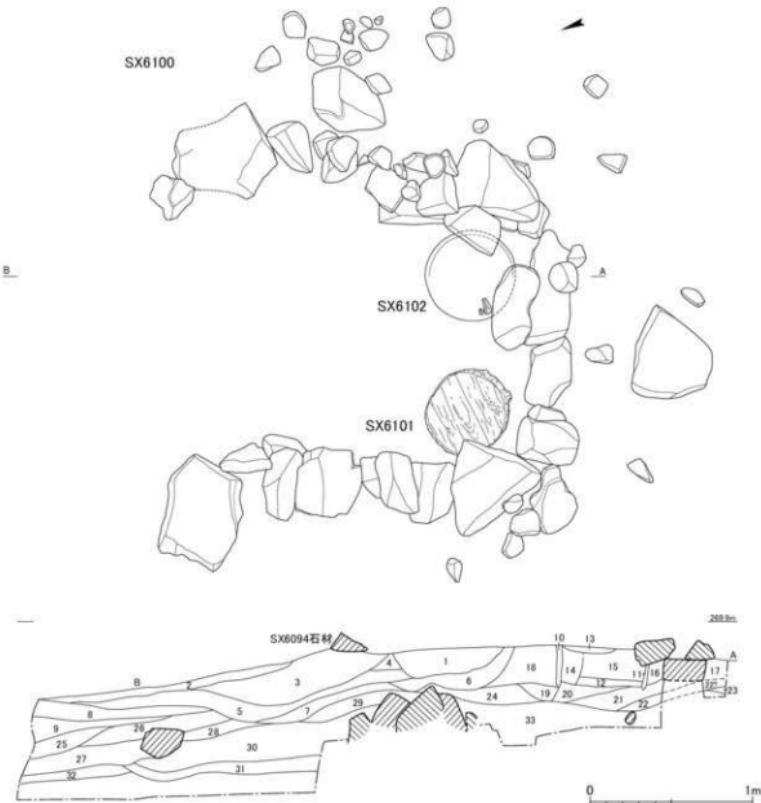


図 5-25 SX6058 (1/20)



1. にぶい黄色(2.5Y 6/3)砂質土 砂礫を含む。
2. 淡黄色(2.5Y 7/3)砂 一第2面造成土
3. 淡黄色(2.5Y 7/3)砂質土 第2面造成土
4. 灰白色(5Y 7/2)砂質土
5. 灰色(5Y 6/1)+灰白色(2.5Y 8/2)砂質土
6. 灰黃色(2.5Y 6/2)砂質土
7. 灰色(5Y 6/1)砂質土+灰黃褐色(10YR 6/2)土 砂を含む。
8. 灰色(N 6/)土
9. 灰白色(7.5Y 7/1)砂質土
10. 黄褐色(2.5Y 6/1)細砂 -SX6102木桶の底跡
11. 灰白色(2.5Y 7/1)砂質土 -SX6102木桶の痕跡
12. 棕褐色(10YR 6/1)細砂 -SX6102木桶の痕跡
13. 黃褐色(10YR 8/6)粘質土
14. にぶい黄褐色(10YR 7/4)砂質土
15. 灰黄色(2.5Y 7/2)砂質土 砂を多く含む。
16. にぶい黄褐色(10YR 7/3)砂質土
17. 灰黄褐色(10YR 6/2)土 黄橙色ブロックを含む。
18. 灰黄褐色(10YR 6/2)砂質土
19. 灰黄褐色(10YR 5/2)砂質土
20. 黄褐色(2.5Y 6/1)砂質土
21. 暗灰黄色(2.5Y 5/2)土+黄灰色(2.5Y 6/1)砂質土
22. にぶい褐色(7.5YR 5/4)土+暗灰黄色(2.5Y 5/2)土
23. 灰白色(N 6/)砂質土
24. 灰白色(5Y 7/1)砂質土
25. 暗褐色(3.5Y 7/1)土 第3面の底表土か
26. 灰白色(7.5Y 7/1)砂質土
27. 灰白色(N 7/)土 砂礫を多く含む。
28. 灰色(7.5Y 6/1)砂質土
29. 灰色(N 6/)砂質土
30. 青灰黄色(5BG 6/1)土+灰黄色(10Y 5/1)土 砂を含む。
31. 黑褐色(10YR 3/1)土
32. 灰色(10Y 5/1)土
33. 灰色(N 4/)土

図 5-26 SX6100 (1/30)

遺物（図5-27～29）

第3面と3-4面から出土した遺物としては、中世の輸入陶磁器（白磁・青磁・青花）、中世～近世の国産陶磁器（肥前・常滑・備前）、在地系土器（土師器・瓦質土器）などの他、銅製柄付鉄刀子がある。

361～369は第3面から出土した。361は肥前陶器擂鉢で、玉縁状の口縁部のみに鉄軸を施す。362～364は肥前染付磁器である。362は碗で、吳器手を意識した器形の可能性がある。363は油壺、364は芙蓉手の皿である。365は肥前白磁瓶である。366は底部糸切の土師器小皿で、SX6100周辺から出土した完形のものである。367は底部糸切の土師器杯である。368は瓦質土器鍋または焙烙である。369は鉄製刀子で、長さ9.6cmの柄の部分には鉄地に銅板が被せられている。SX6058横から出土した。

370～440は第3面の整地層とした3-4面から出土した遺物で、第4面で使用されていたもの、第3面造成時のもの、第3面で使用されていたものが含まれているものと考えられる。

370は白磁森田D群の皿である。371～376は竜泉窯系青磁である。371～374は碗で、371は線描きの蓮弁文を施す上田B IV類、372は片切形に近い丸彫で蓮弁文を施す上田B III a類、373は外面無文のI類、374は口縁が外反する上田D類である。375は皿、376は稜花皿である。377～383は青花である。377は皿小野B1群、378は皿小野C群である。379・381は皿、380は碗または皿の口縁部である。382は小杯の口縁部、383は碗の底部である。384は青花香炉と考えられる。385は朝鮮王朝期の陶器瓶で、白象嵌が施される。386は常滑窯の大費胴部破片である。

387～389は肥前陶器碗である。387は天目形で、鉄軸が施される。388・389は内野山窯の製品とみられ、灰軸が施される。390～399は肥前陶器皿である。390は口縁部をなぶり口にしたもので、薦灰軸が施される。391は岸岳系製品で薦灰軸の可能性がある。392～394は灰軸が施され、内面に胎土目跡が残る。395～399は溝縁のもので、灰軸が施され、砂目跡が残る。400は肥前陶器花瓶または水差で、銅軸が施される。401は肥前産と思われる陶器鉢で、タタキ成形である。402は肥前陶器甕で、底部に目跡が残る。403は肥前または福岡産の陶器甕で、鉄軸が施され、内面には当て具痕がみられない。同一個体と思われる破片には、文字の可能性がある陽刻がある。

404～408は肥前染付磁器碗である。404は筒形で、高台骨付は釉剥ぎである。405は全釉で、高台に目跡が残る。406～408は丸形碗である。409・410は内外面で軸を掛け分ける磁器碗で、外面に409は鉄軸、410は青磁軸を施す。411は染付とみられる肥前磁器碗で、高麗茶碗に近い形態と思われる。412は肥前青磁碗で、高台内は無釉である。413は肥前染付磁器瓶で、焼成不良のため、釉の発色が悪い部分が多い。414は肥前染付磁器小甕、415は染付とみられる磁器瓶である。

416～425は底部糸切の土師器小皿で、口径5.6～8.6cm、器高1.4～2.2cmである。426～431は底部糸切の土師器杯である。432は土師器火入れで、3箇所に脚が付く。433・434は瓦質土器火鉢で、434には印刻文が施される。435・436は瓦質土器茶釜で、435の肩部には印刻文が施される。437は瓦質土器擂鉢である。438は土師器鍋で、口縁部が玉縁状のⅢ類、439・440は瓦質土器鍋で、直口口縁で鉢形のIV類である。

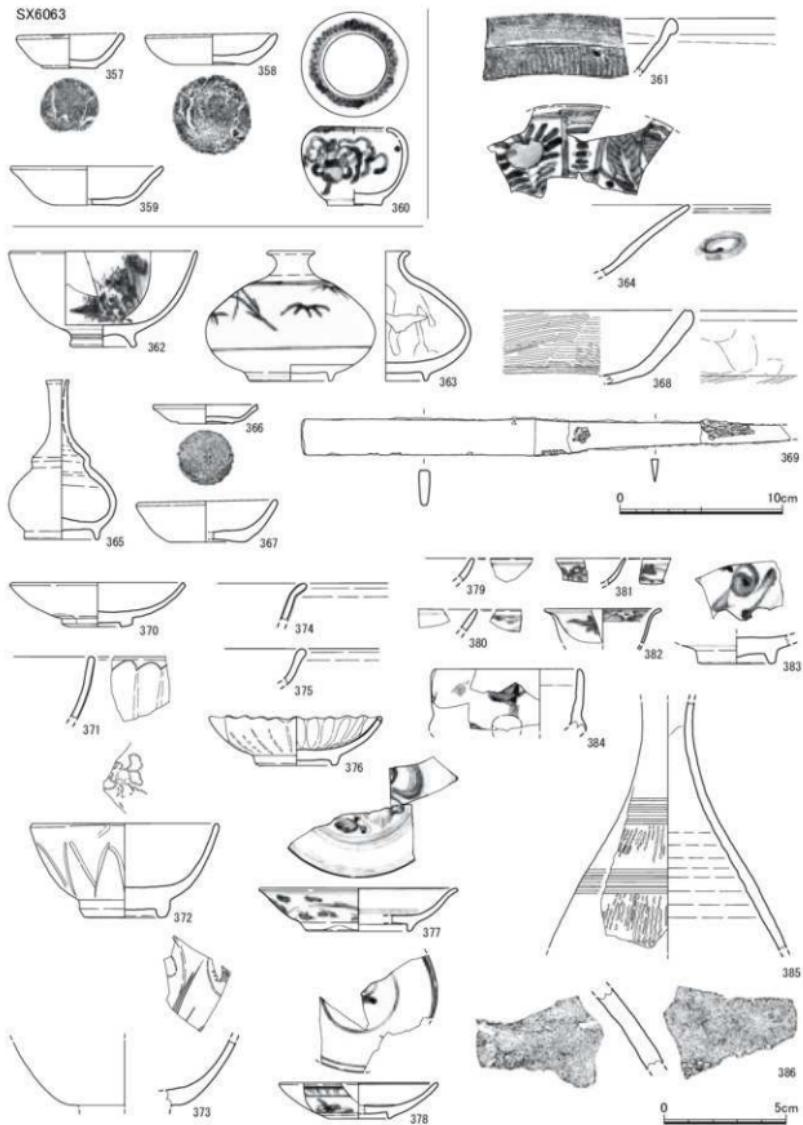


図5-27 第3面・3-4面の出土遺物 (369は1/2、他は1/3)

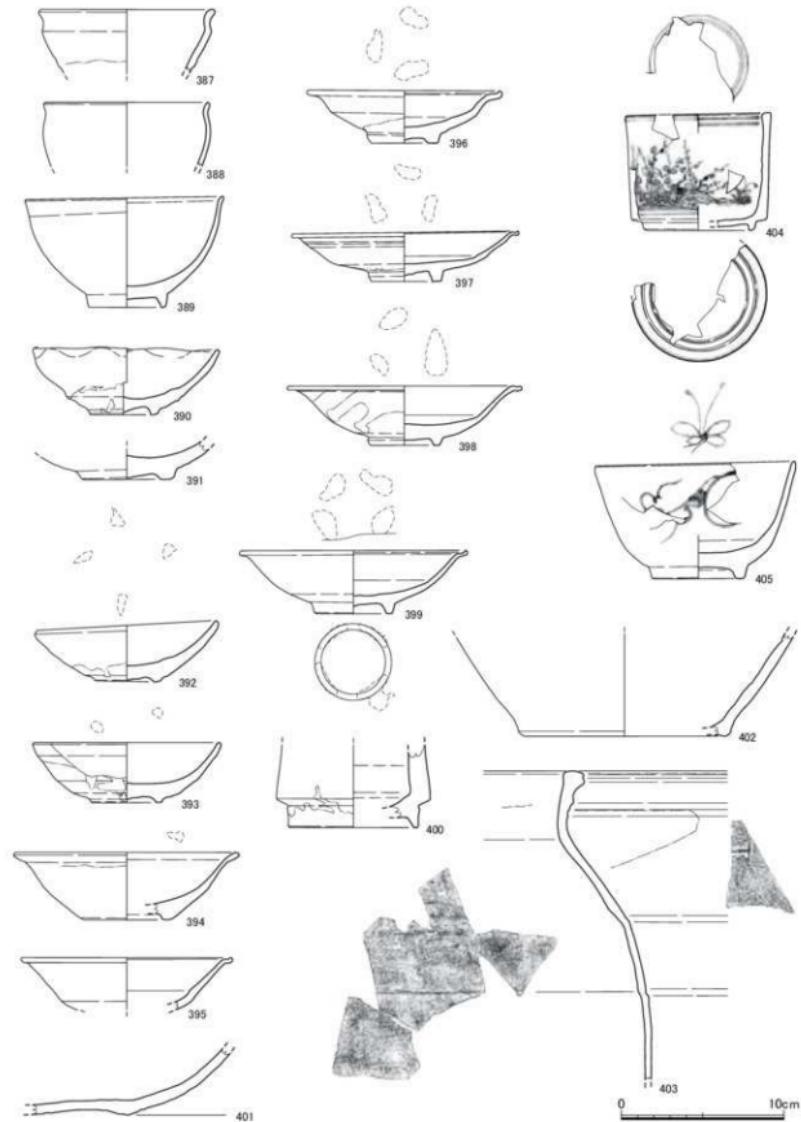


図 5-28 3-4面の出土遺物 2 (1/3)

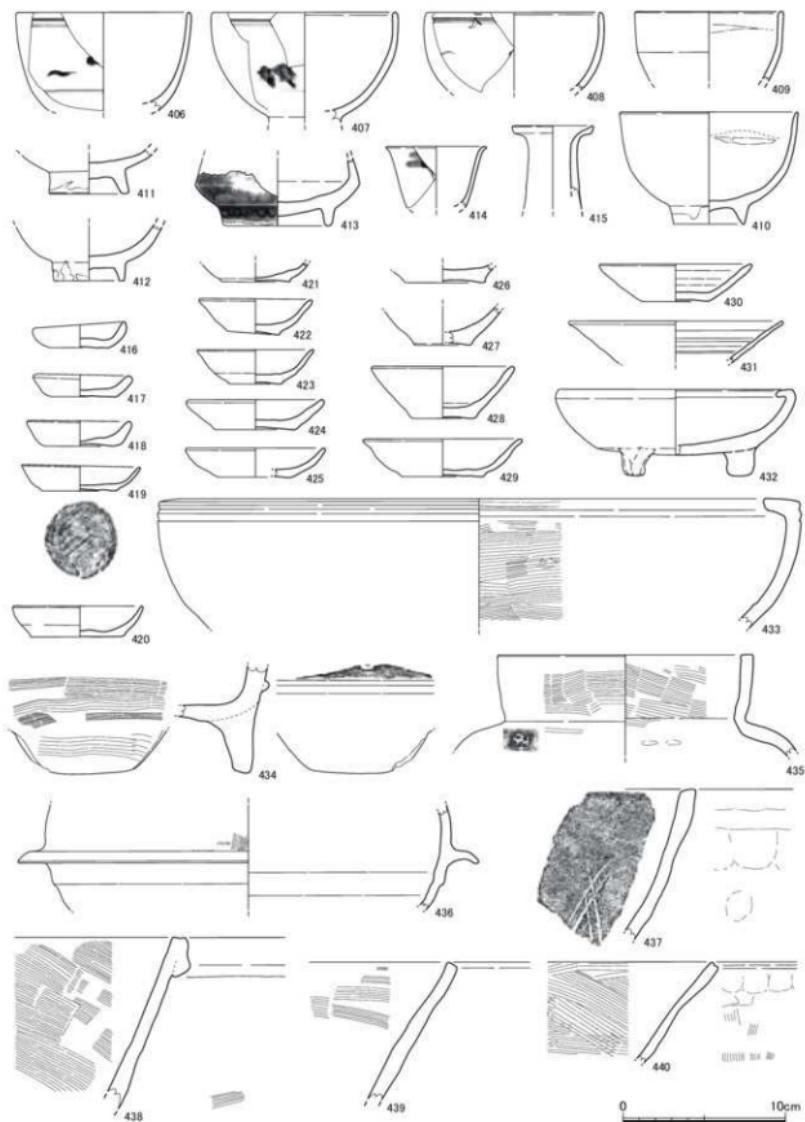


図5-29 3-4面の出土遺物3 (1/3)

表5-4 6G区第3面・3-4面の出土遺物

横段番号	出土位置	種別 器種	寸法 cm			色調	備考	写真図版 写真登録番号
			口径	底径	器高			
図5-27-357 10001914	SX6063	土師器 小瓶	6.6	3.6	2.2	に赤い黄褐	底部斜切 口縁油煤付着	5-15-357 20110026
図5-27-358 10001916	SX6063	土師器 小瓶	8.2	4.6	1.9	褐	底部斜切	5-15-358 20110027
図5-27-359 10001915	SX6063	土師器 杯	9.4*	2.0*	2.4	外:浅黄 内:黄灰	底部斜切後ナデか	
図5-27-360 10002525	SX6063	染付磁器 小瓶	3.9	3.3	4.9	露胎釉:灰白	肥前 1650~60年代	5-15-360 20110028-29
図5-27-361 10001920	3面	陶器 埴輪	-	-	-	胎土:黒褐	肥前 17c 末	
図5-27-362 10001953	3面	染付磁器 碗	11.6	4.1	5.9	胎土:灰白	肥前 1660~80年代	5-15-362 20110003
図5-27-363 10001932	3面	染付磁器 油壺	3.0*	5.2	8.0	胎土:灰白	肥前 17c 後半	5-15-363 20110152
図5-27-364 10001255	3面	染付磁器 皿	-	-	-	胎土:灰白	肥前 1655~60年代	5-15-364 20110093-94
図5-27-365 10001256	3面	白磁 瓶	1.4	4.5	9.8	胎土:灰白	肥前 17c 後半	5-15-365 20110023
図5-27-366 10001899	SX6100	土師器 小瓶	6.4	3.4	1.2	褐	底部斜切	
図5-27-367 10001913	3面	土師器 杯	8.7	4.5	2.6	褐	底部斜切 口縁油煤付着	
図5-27-368 10001918	3面	瓦質土器 鍋	-	-	-	灰黄褐		
図5-27-369 10003120	3面	鐵器 刀子	長 20.0*	幅 1.5*	厚 0.5		重さ 33.4g 刃部先端欠損	5-15-369 20110205
図5-27-370 07003921	3-4面	白磁 皿	10.8*	4.3	2.7	胎土:灰白	森田 D 群	5-15-370 20110087
図5-27-371 07003912	3-4面	青磁 碗	-	-	-	胎土:灰白	竜泉窯系 碗上田 D 類	5-15-371 20110060
図5-27-372 07003911	3-4面	青磁 碗	11.6*	5.0*	5.8	胎土:灰白	竜泉窯系 碗上田 B III a 類	5-15-372 20110012
図5-27-373 07003926	3-4面	青磁 碗	-	5.9*	-	胎土:灰白	竜泉窯系 碗 I 類	5-15-373 20110090
図5-27-374 07003914	3-4面	青磁 碗	-	-	-	胎土:灰白	竜泉窯系 碗上田 D 類	5-15-374 20110061
図5-27-375 07003882	3-4面	青磁 皿	-	-	-	胎土:灰白	竜泉窯系	5-15-375 20110034
図5-27-376 07003923	3-4面	青磁 桃花皿	10.6	5.1	3.0	胎土:淡黄	竜泉窯系	5-15-376 20110013
図5-27-377 07003922	3-4面	青花 皿	12.2*	6.6*	2.7	胎土:灰白	小野 B1 群	5-15-377 20110088-89
図5-27-378 07003920	3-4面	青花 皿	9.8*	3.7*	2.2	胎土:灰白	小野 C 群	5-15-378 20110085-86
図5-27-379 07003915	3-4面	青花 皿	-	-	-	胎土:灰白		5-15-379 20110062
図5-27-380 07003916	3-4面	青花 皿	-	-	-	胎土:灰白	福建系	5-15-380 20110063
図5-27-381 07003917	3-4面	青花 皿	-	-	-	胎土:灰白	景德镇窯系	5-15-381 20110064
図5-27-382 07003918	3-4面	青花 小杯	7.2*	-	-	胎土:灰白	景德镇窯系	5-15-382 20110067-68
図5-27-383 07003919	3-4面	青花 碗	-	4.8	-	胎土:灰白		5-15-383 20110068-69
図5-27-384 10001963	3-4面	青花 香炉	9.0*	-	-	胎土:浅黄褐	福建系 16c 後半~17c 前半	5-15-384 20110099
図5-27-385 07003929	3-4面	陶器 瓶	-	-	-	胎土:灰白	朝鮮 15-16c 白象嵌	5-15-385 20110111
図5-27-386 07003927	3-4面	陶器 大甕	-	-	-	外:灰白・褐灰 内:褐灰・褐	常滑 14c 前後	5-15-386 20110091

表5-4 6G区第3面・3-4面の出土遺物

横段・番号 登録番号	出土位置	種別 器種	寸法 cm			色 調	備 考	写真図版 写真登録番号
			口径	底径	器高			
岡5-28-387 07001239	3-4面	陶器 碗	8.8*	-	-	胎土:灰白	肥前 1590~1610年代	5-16-387 20110031
岡5-28-388 07001240	3-4面	陶器 碗	-	-	-	胎土:灰白	肥前(内野山原力) 1610~30年代	5-16-388 20110032
岡5-28-389 10001322	3-4面	陶器 碗	12.3	4.8	6.8	胎土:灰白	内野山窯 1610~30年代	5-16-389 20110001
岡5-28-390 07001235	3-4面	陶器 皿	11.3	4.2	4.1	胎土:灰白	肥前 1580~90年代	5-16-390 20110015
岡5-28-391 07001237	3-4面	陶器 皿	-	5.7	-	胎土:灰白	岸岱系か	5-16-391 20110075-76
岡5-28-392 07001234	3-4面	陶器 皿	11.3	4.2	3.8	胎土:褐	肥前 1590~1610年代	5-16-392 20110014
岡5-28-393 07001236	3-4面	陶器 皿	11.6*	4.2	3.7	胎土:灰白	肥前 1590~1610年代	5-16-393 20110073-74
岡5-28-394 07001238	3-4面	陶器 皿	13.8*	5.7*	4.2	胎土:浅黄褐	肥前 1590~1610年代	5-16-394 20110077
岡5-28-395 07001243	3-4面	陶器 皿	13.0*	-	-	胎土:灰白	肥前 1610~30年代	5-16-395 20110033
岡5-28-396 07001242	3-4面	陶器 皿	12.0	4.2	3.2	胎土:灰	肥前 1610~30年代	5-16-396 20110016
岡5-28-397 07001241	3-4面	陶器 皿	14.0*	4.4	3.0	胎土:浅黄	肥前 1610~30年代	5-16-397 20110018
岡5-28-398 08000379	3-4面	陶器 皿	14.5*	4.3	3.6	胎土:灰白	肥前 1610~30年代	5-16-398 20110022
岡5-28-399 07001245	3-4面	陶器 皿	14.0*	4.8	3.9	胎土:灰白	内野山窯 1610~30年代	5-16-399 20110017
岡5-28-400 10001961	3-4面	陶器 花瓶か水槽	-	8.0	-	胎土:灰黄	肥前 1610~50年代	5-16-400 20110098
岡5-28-401 10001964	3-4面	陶器 鉢	-	-	-	外:赤灰・にふい赤褐 内:赤灰	肥前か 16c末~17c初	5-16-401 20110112
岡5-28-402 10001965	3-4面	陶器 鉢	-	13.1	-	外:にふい赤褐 内:黄灰	肥前 17c 第1四半期	5-16-402 20110106
岡5-28-403 10002458	3-4面	陶器 甕	-	-	-	胎土:灰白	肥前か福岡(高田か) 17c 第1四半期	5-16-403 20110113-114
岡5-28-404 10001254	3-4面	染付磁器 碗	8.9	6.8	7.3	胎土:灰白	肥前 1610~30年代	5-16-404 20110010
岡5-28-405 10001252	3-4面	染付磁器 碗	12.3*	5.7	7.2	胎土:灰白	肥前 1610~30年代	5-16-405 20110008
岡5-29-406 10001949	3-4面	染付磁器 碗	10.8*	-	-	胎土:灰白	肥前 1630~40年代	5-16-406 20110096
岡5-29-407 10001950	3-4面	染付磁器 碗	11.5*	-	-	胎土:灰白	肥前 1640~60年代	
岡5-29-408 10001951	3-4面	染付磁器 碗	10.8*	-	-	胎土:灰白	肥前 1630~50年代	5-16-408 20110070
岡5-29-409 10001959	3-4面	磁器 碗	9.2*	-	-	胎土:灰白	肥前 1630~40年代	5-16-409 20110072
岡5-29-410 10001957	3-4面	磁器 碗	11.0*	4.4	6.9	胎土:灰白・灰黄	肥前 1630~40年代	5-16-410 20110005
岡5-29-411 10001967	3-4面	磁器 碗	-	4.9	-	胎土:灰白	肥前 1630~50年代	5-16-411 20110025
岡5-29-412 10001958	3-4面	青磁 碗	-	4.4	-	胎土:灰白・浅黄褐	肥前 1630~40年代	5-16-412 20110024
岡5-29-413 10001962	3-4面	染付磁器 瓶	-	6.80	-	胎土:灰白	肥前 1640~60年代	5-16-413 20110006
岡5-29-414 10001956	3-4面	染付磁器 小杯	6.2*	-	-	胎土:灰白	肥前 17c 後半	5-16-414 20110071
岡5-29-415 10001960	3-4面	染付磁器 瓶	5.0*	-	-	胎土:灰白	肥前 17c 中~後半	5-16-415 20110097
岡5-29-416 10001917	3-4面	土師器 小皿	5.6	3.6	1.6	胎土:灰白	底部系切	

表 5-4 6G 区第3面・3-4面の出土遺物

横段番号 登録番号	出土位置	種別 器種	寸法 cm			色調	備考	写真図版 写真登録番号
			口径	底径	器高			
岡 5-29-417 10001889	3-4面	土師器 小皿	6.1	4.1	1.4	浅黄褐	底部系切	
岡 5-29-418 10001890	3-4面	土師器 小皿	6.4	4.4	1.4	浅黄褐	底部系切	
岡 5-29-419 10001888	3-4面	土師器 小皿	7.3	4.7	1.6	浅黄褐	底部系切	
岡 5-29-420 10001906	3-4面	土師器 小皿	8.0	5.8	1.9	褐	底部系切 口縁油付着	
岡 5-29-421 10001891	3-4面	土師器 小皿	-	4.2*	*	浅黄褐	底部系切	
岡 5-29-422 10001887	3-4面	土師器 小皿	7.0	3.2	2.2	浅黄褐	底部系切	
岡 5-29-423 10001886	3-4面	土師器 小皿	7.2*	3.4*	2.1	灰白	底部系切	
岡 5-29-424 10001911	3-4面	土師器 小皿	8.5*	4.9*	1.9	外：にぶい・褐 内：灰黄褐	底部系切	
岡 5-29-425 10001893	3-4面	土師器 小皿	8.6*	4.6*	1.9	褐	底部系切	
岡 5-29-426 10001895	3-4面	土師器 杯	-	4.9	-	褐	底部系切	
岡 5-29-427 10001905	3-4面	土師器 杯	-	3.6*	*	外：にぶい・黄褐 内：灰黄褐	底部系切	
岡 5-29-428 10001903	3-4面	土師器 杯	8.8*	3.6	3.2	にぶい・黄褐・灰黄褐	底部系切	
岡 5-29-429 10001894	3-4面	土師器 杯	9.8*	5.2*	2.3	外：にぶい・黄褐 内：にぶい・黄褐	底部系切	
岡 5-29-430 10001884	3-4面	土師器 杯	9.4	4.1	2.3	浅黄褐	底部系切	
岡 5-29-431 10001904	3-4面	土師器 杯	13.2*	-	*	灰白		
岡 5-29-432 10001888	3-4面	土師器 火鉢	14.8*	-	5.3	明黄褐	口縁煤付着	
岡 5-29-433 10001872	3-4面	瓦質土器 火鉢	39.6*	-	-	灰		5-16-433 20110208
岡 5-29-434 10001919	3-4面	瓦質土器 火鉢	-	-	-	外：褐灰 内：灰黄		
岡 5-29-435 10001885	3-4面	瓦質土器 茶釜	15.8*	-	-	褐灰		
岡 5-29-436 10001900	3-4面	瓦質土器 茶釜	28.3*	-	-	外：褐 内：黒褐	外面部付着	
岡 5-29-437 10001910	3-4面	瓦質土器 擂鉢	-	-	-	外：黄灰 内：にぶい・黄褐		
岡 5-29-438 10001897	3-4面	土師器 鍋	-	-	-	褐	外面部付着	5-16-438 20110209
岡 5-29-439 10001896	3-4面	瓦質土器 鍋	-	-	-	にぶい・褐	外面部付着	
岡 5-29-440 10001909	3-4面	瓦質土器 鍋	-	-	-	褐灰・淡黄	外面部付着	

6 第4面の遺構と遺物

遺構

第4面の遺構としては、石垣や階段を作う石列、溝、柱穴などを確認した（図5-30）。第4面は、調査区北部に位置するおよそ N65°W の方向に沿って 0.1 ~ 0.9 m の大きさの石材が列状に分布する SX6088 を境界として北側が南側より 0.8 ~ 0.9 m 低い2段の平坦面をもつ構造となっている。SX6088 は本来段の法面に積み上げられていた低い石垣であったと推測され、階段状に3段石材が積み上げられた SX6087 を伴っている。SX6088 の延長が東西両側とも調査区外に延びるのかは不明であるが、SX6088 とほぼ直角をなす SX6098 は関連する石積の可能性がある。

SX6088 南側には多くの柱穴が確認されており（図5-31）、調査期間の都合により現地での詳細な検討ができておらず、確実な建物等については不明であるが、掘立柱建物が存在した可能性が高い。調査区南部で確認された

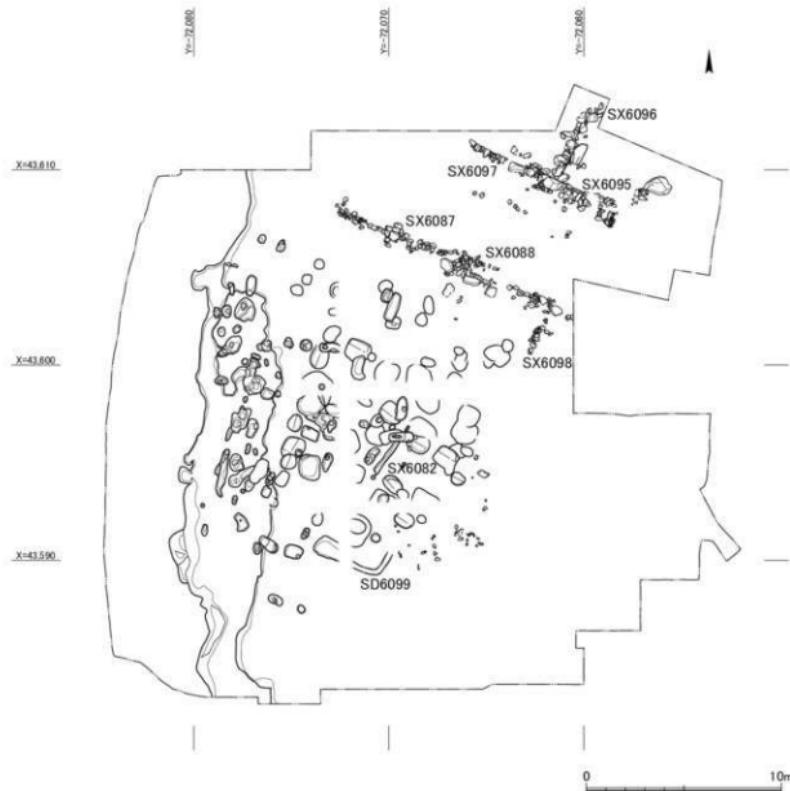


図5-30 第4面の遺構分布 (1/250)

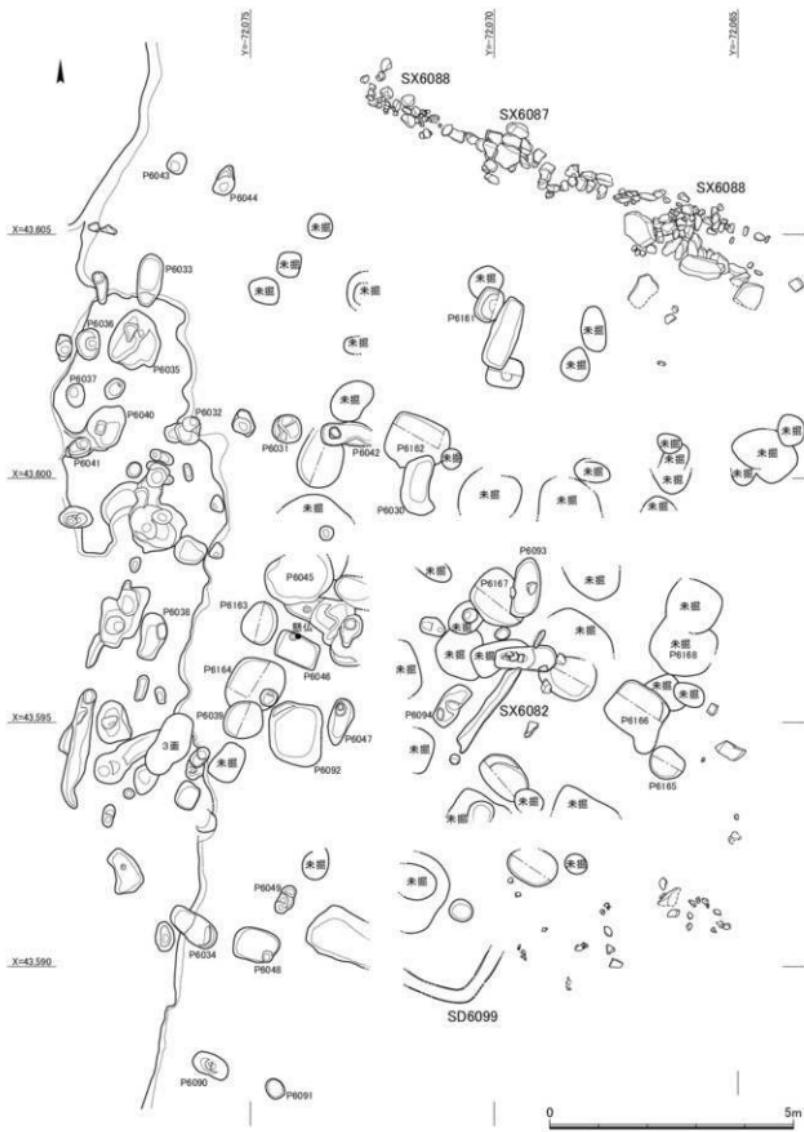


図5-31 第4面の造構分布詳細1 (1/100)

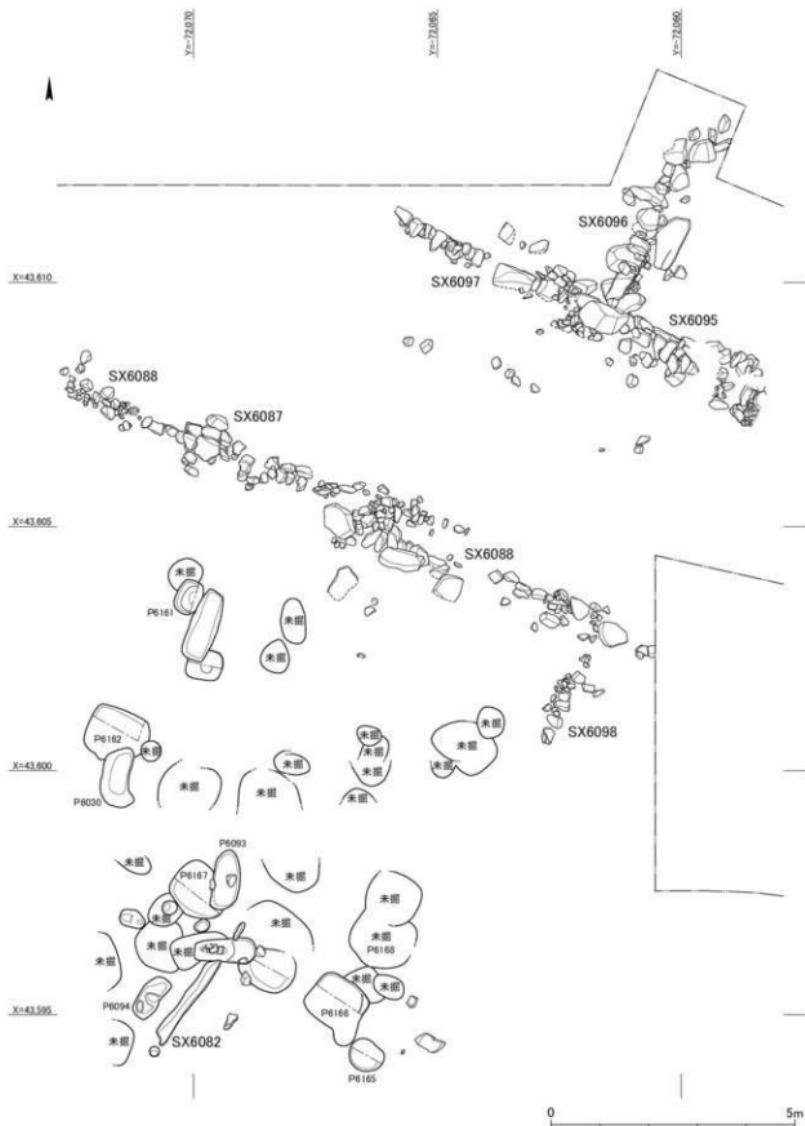


図5-32 第4面の遺構分布詳細2 (1/100)

SD6099 は、ほぼ直角に曲がる深さ 0.03 m のごく浅い溝で、確実に検出された部分は短いものの、写真では北西に延びていた痕跡がみられ（写真図版 5-18）、さらに調査区西部には SD6099 とほぼ同じ方位の断片的な溝が確認できるため、これらが一連となって建物の雨落ち溝であった可能性がある。また、調査区ほぼ中央に位置する SX6082 は、長さ 2.3 m、幅 0.06 m の褐色粘土が検出されたもので、板材の痕跡である可能性があり、建物の構造に関連するかもしれない。このように、断片的な根拠ではあるが、SX6088 とほぼ主軸方位を同じくする建物が南側の平坦面に存在したことが推測される。

北側の 1 段低い平坦面には、確実な柱穴などは確認できておらず（図 5-32）、本来建物などが存在しなかったものと思われる。この平坦面の北側に直角をなす低い石垣と思われる SX6095・6096 があり、その部分までが寺域であり、SX6097 は造成の際に土留めのために置かれた石列であると推定している。SX6095 と 6096 が接する部分の外側（北東側）には第 4 面当時の堆積と考えられる黒褐色土が認められ、肥前陶器皿（460）や皿形の瓦質土器鉢などが廃棄されたような状態で出土した。

遺物（図 5-33～35）

第 4 面と 4 面下層（4 面下と注記）から出土した遺物としては、中世の輸入陶器（白磁・青磁・青花・施釉陶器）、中世～近世の国産陶器（肥前・備前）、在地系土器（土師器・瓦質土器）などの他、銅製の懸仏の一部がある。遺構から出土した遺物についても、まとめて報告しており、出土位置については表に記している。

441～501 は第 4 面、第 4 面で検出した遺構から出土した。

441・442 は白磁皿で、441 が森田 D 群、442 が森田 E 群で、高台内に染付が施される。443～448 は竜泉窯系青磁である。443 は外面無文の碗で、内面に陽刻による文様が描かれる。444 は外面鈴連弁文の碗 II bc 類、445・446 は口縁が外反する碗上田 D 類である。447 は碗または皿の口縁部、448 は盤である。449～453 は青花で、449 は小野 C 群の碗、450 は小杯、451・452 は小野 B1 群の皿、453 は小野 C 群の皿である。454 は朝鮮半島産の象嵌青磁で、外面に白象嵌が施される。455 は中国南部産とみられる陶器壺の肩部で、耳が付き、褐釉が施される。茶壺のもの可能性がある。456 は備前窯の陶器壺である。

457・458 は肥前陶器碗で、灰釉が施される。459・460 は肥前陶器皿で、灰釉が施され、459 は胎土目跡、460 は砂目跡が残る。461 は肥前産の陶器甕と考えられ、鉄釉が施され、口縁上面に貝目跡が残る。462 は肥前陶器壺で、鉄釉が施され、内面に当て具痕の同心円文がみられる。463 は肥前陶器鉢で、片口の可能性があり、灰釉が施される。

464・465 は肥前染付磁器碗で、464 の高台内は軸がかかる部分もあるが無軸で、465 は全面に施釉される。466 は肥前染付磁器皿で、内面見込みに砂が付着している。

467～472 は底部糸切の土師器小皿である。473～483 は底部糸切の土師器杯で、473・474 は内面に沈線状の調整痕がみられ、475 は内面見込みに螺旋状の沈線が施される。480・481 は器高がやや高い形態、483 は大型のものである。484～488 は底部糸切の土師器小皿または杯の底部で、小穴から出土した。489～492 は瓦質土器火鉢で、490～492 は外面に印刻文が施される。493～495 は瓦質土器鉢で、493 は外反口縁で鉢形の V 類、494 は直口口縁で鉢形の IV 類、495 は皿形の VI 類である。496・497 は瓦質土器で、焰烙と思われる。498 は瓦質土器茶釜で、外面に沈線が 1 条巡り、印刻文が施される。499・500 は瓦質土器鉢で、内面に使用による磨滅痕がみられる。

501 は P6046 付近から出土した高さ 2.9cm の懸仏の一節で、背面に径 0.4cm、高さ 0.2cm の突起が付く。蛍光 X 線分析では、銅と鉛がほぼ拮抗する成分である¹³⁾。

502～523 は第 4 面の整地層とした 4 面下から出土した。

502・503 は白磁森田 E 群の皿である。504～506 は竜泉窯系青磁で、504 は外反口縁の上田 D 類、505 は劍

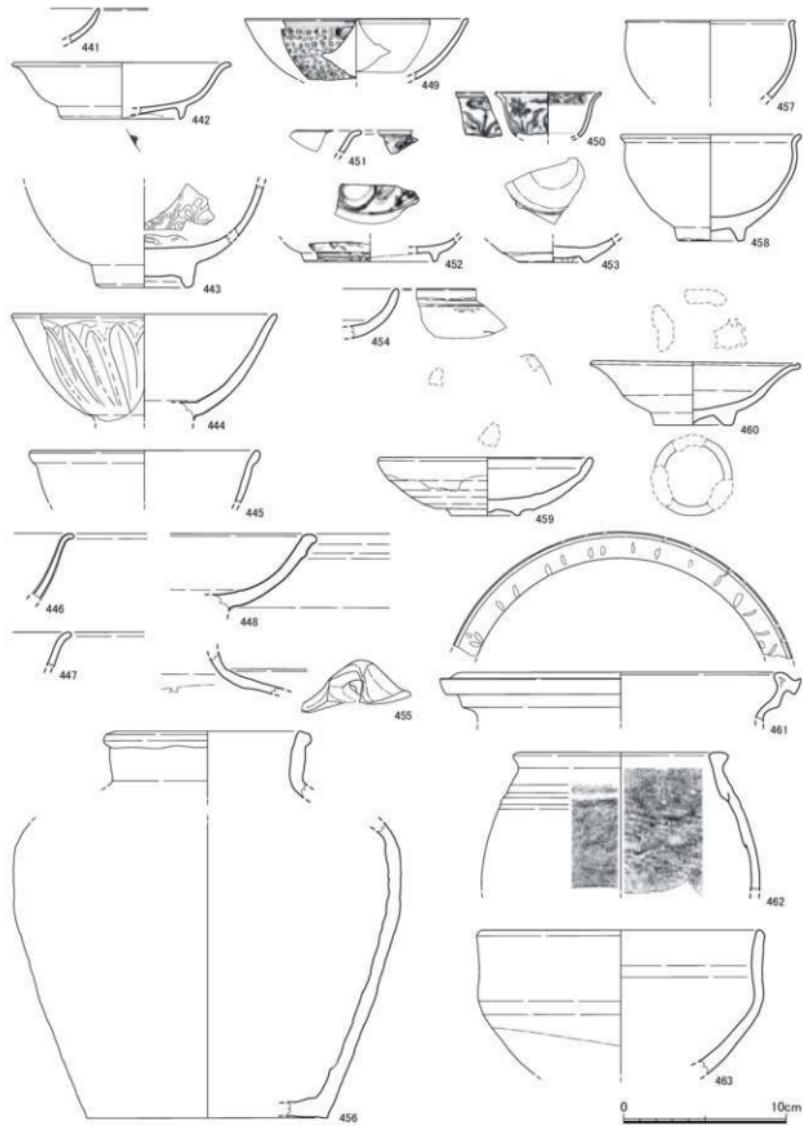


図5-33 第4面の出土遺物1 (1/3)

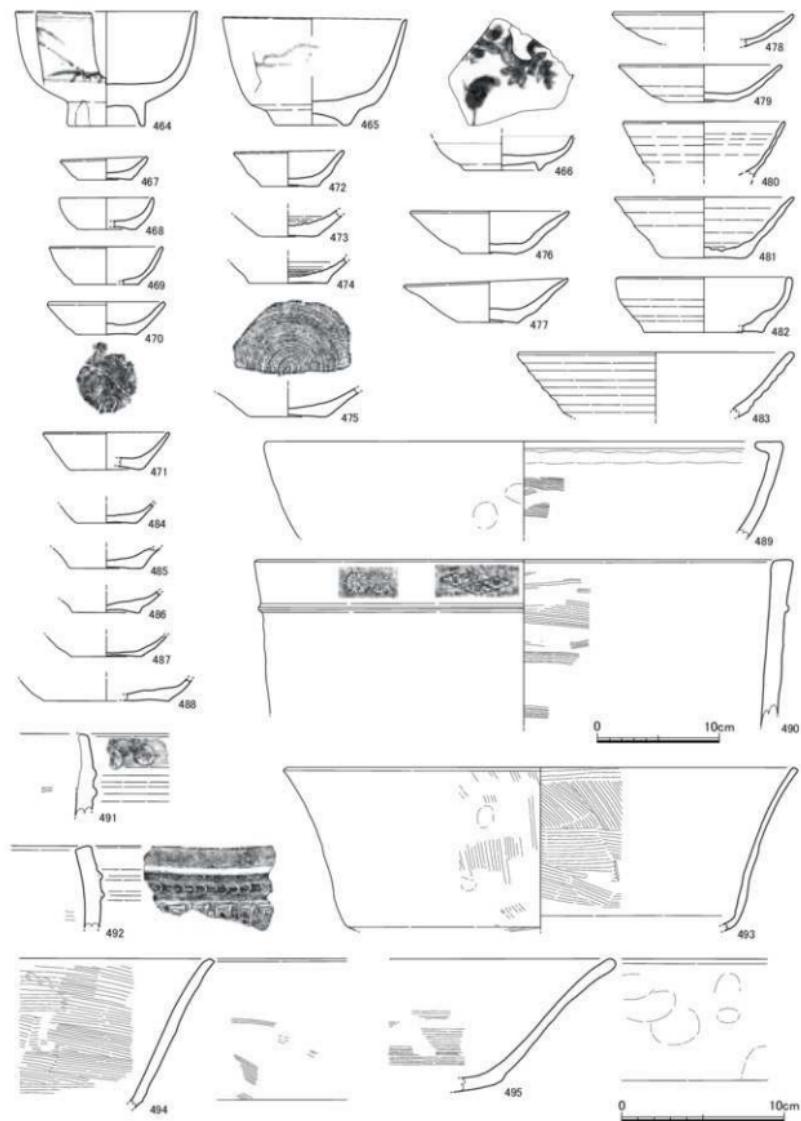


図 5-34 第4面の出土遺物 2 (489・490は1/4、他は1/3)

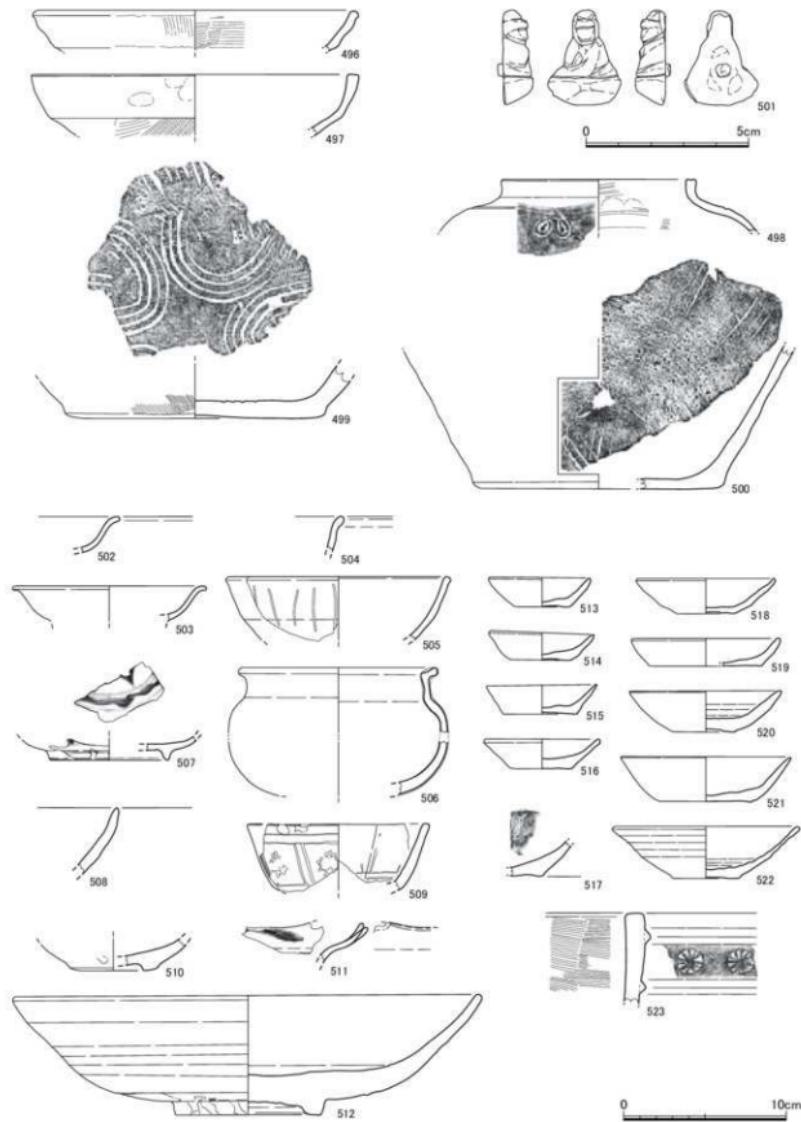


図5-35 第4面・4面下の出土遺物 (501は2/3、他は1/3)

頭を省略した線描蓮弁文を施した上田 B IV 類、506 は壺である。507 は青花皿で、高台が付き外反口縁の小野 B1 群である。508 は中国産の黒釉陶器天目碗である。509 は朝鮮半島産の象嵌青磁角鉢で、外面に白象嵌が施される。

510~511 は肥前陶器皿で、灰釉が施され、511 は内面に鉄絵が描かれる。512 は肥前陶器大皿で、灰釉が施され、底部は無釉で、耕穀痕がみられる。有田小森窯跡出土品に類似がある。一部の破片が 4 面下から出土したため、ここに図示しているが、第 4 面で使用されていた製品の可能性がある。

513~516 は底部糸切の土師器小皿、517~522 は底部糸切の土師器杯で、517 は内面見込みに螺旋状の沈線が施される。523 は瓦質土器火鉢で、外面に印刻文が施される。

表 5-5 6G 区第4面・4面下の出土遺物

持闇・番号 登録番号	出土位置	種別 器種	寸法 cm			色 調	備 考	写真版 写真登録番号
			L径	底径	器高			
国 5-33-441 07003894	4 面	白磁 皿	-	-	-	胎土:白	森田 D 群	5-19-441 20110040
国 5-33-442 07003899	4 面	白磁 皿	13.5*	7.4*	3.5	胎土:白	森田 E 群	5-19-442 20110105
国 5-33-443 07003887	4 面	青磁 皿	-	6.0	-	胎土:灰白	竜泉窯系	5-19-443 20110082
国 5-33-444 07003881	4 面	青磁 皿	16.3*	-	-	胎土:灰白	竜泉窯系 磁口 bc 類	5-19-444 20110103
国 5-33-445 07003883	4 面	青磁 皿	14.2*	-	-	胎土:灰白	竜泉窯系 磁口 D 類	5-19-445 20110035
国 5-33-446 07003885	4 面	青磁 皿	-	-	-	胎土:灰白	竜泉窯系	5-19-446 20110037
国 5-33-447 07003884	4 面	青磁 皿	-	-	-	胎土:灰白	竜泉窯系	5-19-447 20110036
国 5-33-448 07003886	4 面	青磁 皿	-	-	-	胎土:灰白	竜泉窯系	5-19-448 20110104
国 5-33-449 07003898	4 面	青花 皿	13.7*	-	-	胎土:白	景德鎮窯系 小野 C 群	5-19-449 20110046
国 5-33-450 07003900	4 面	青花 小杯	6.5*	-	-	胎土:白	景德鎮窯系 16c 後半	5-19-450 20110047
国 5-33-451 07003895	4 面	青花 皿	-	-	-	胎土:白	景德鎮窯系 小野 B1 群	5-19-451 20110041
国 5-33-452 07003896	4 面	青花 皿	-	8.0*	-	胎土:白	景德鎮窯系 小野 B1 群	5-19-452 20110042-43
国 5-33-453 07003897	4 面	青花 皿	-	4.4*	-	胎土:灰白	福建系 小野 C 群	5-19-453 20110044-45
国 5-33-454 07003891	4 面	象嵌青磁 皿	-	-	-	胎土:灰白	朝鮮半島	5-19-454 20110039
国 5-33-455 10001970	4 面	陶器 壺	-	-	-	胎土:灰	中国南部 15-16c	5-19-455 20110110
国 5-33-456 10001969	4 面	陶器 壺	12.8*	-	-	灰赤・暗赤灰	備前 15-16c	5-19-456 20110102
国 5-33-457 07003892	4 面	陶器 壺	10.4*	-	-	胎土:灰白	内野山 1610 ~ 30 年代	5-20-457 20110038
国 5-33-458 07003890	4 面	陶器 壺	11.1*	4.1	6.6	胎土:灰	肥前 1610 ~ 30 年代	5-20-458 20110011
国 5-33-459 07003889	4 面	陶器 壺	13.3*	4.4	3.6	胎土:黄灰	肥前 1590 ~ 1610 年代	5-20-459 20110020
国 5-33-460 080000378	4 面	陶器 壺	13.2*	4.8	3.8	胎土:灰白	肥前 1610 ~ 1630 年代	5-20-460 20110021
国 5-33-461 10001331	4 面	陶器 壺	22.2*	-	-	胎土:褐灰	肥前力 16c 末 ~ 17c 初	5-19-461 20110107
国 5-33-462 10001332	4 面	陶器 壺	13.6*	-	-	胎土:黄灰	肥前 16c 末 ~ 17c 初	5-19-462 20110108
国 5-33-463 10001968	4 面	陶器 火鉢	17.7*	-	-	胎土:にじい黄糖	肥前 1590 ~ 1630 年代	5-19-463 20110109
国 5-34-464 10001253	4 面	染付磁器 壺	11.2*	4.7	7.1	胎土:灰白	肥前 1630 ~ 50 年代	5-20-464 20110009

表5-5 6G区第4面・4面下の出土遺物

接頭・番号 登録番号	出土位置	種別 器種	寸法 cm			色調	備考	写真図版 写真登録番号
			口径	底径	器高			
岡5-34-465 10001251	4面	染付磁器 碗	11.3*	4.6	6.7	磁土:灰白	肥前 1610~30年代	5-20-465 20110007
岡5-34-466 10001966	4面	染付磁器 皿	-	4.7	-	磁土:灰白	肥前 1630~50年代	5-20-466 20110100-101
岡5-34-467 10001874	4面	土師器 小皿	5.4	3.3	1.5	にぶい黄柾	底部系切	
岡5-34-468 10001881	P6041	土師器 小皿	5.8*	3.6*	2.0	外:にぶい黄柾 内:柾	底部系切	
岡5-34-469 10001850	P6167	土師器 小皿	7.0*	4.0*	2.3	にぶい黄柾・褐灰	底部系切	
岡5-34-470 10001877	4面	土師器 小皿	7.2*	-	-	柾	底部系切	
岡5-34-471 10001837	4面	土師器 小皿	7.8*	4.6	2.3	外:灰白 内:灰白・灰黄柾	底部系切	
岡5-34-472 10001876	4面	土師器 小皿	6.8	3.6	2.2	にぶい柾	底部系切	
岡5-34-473 10001879	P6035	土師器 杯	-	3.8*	-	にぶい柾	底部系切	
岡5-34-474 10001875	4面	土師器 杯	-	4.8*	-	灰白	底部系切	5-20-474 20110212-213
岡5-34-475 10001880	4面	土師器 杯	-	4.6*	-	灰白	底部系切 底部煤付着	
岡5-34-476 10001835	4面	土師器 杯	9.8	3.6	2.6	浅黄柾	底部系切	
岡5-34-477 10001836	4面	土師器 杯	10.1	3.6	2.8	浅黄柾	底部系切	
岡5-34-478 10001856	P6166	土師器 杯	11.2*	-	-	にぶい柾		
岡5-34-479 10001838	4面	土師器 杯	9.9*	4.2	2.3	浅黄柾	底部系切	
岡5-34-480 10001844	P6167	土師器 杯	10.0*	-	-	浅黄柾		
岡5-34-481 10001833	4面	土師器 杯	11.0*	5.4*	4.7	にぶい黄柾	底部系切	
岡5-34-482 10001878	4面	土師器 杯	10.8*	7.2*	3.9	柾	底部系切	
岡5-34-483 10001834	4面	土師器 杯	17.0*	-	-	灰白		
岡5-34-484 10001852	P6094	土師器 杯	-	3.7	-	浅黄柾	底部系切	
岡5-34-485 10001855	P6166	土師器 杯	-	4.4	-	浅黄柾	底部系切	
岡5-34-486 10001854	P6166	土師器 杯	-	4.0	-	にぶい黄柾	底部系切	
岡5-34-487 10001853	P6168	土師器 杯	-	4.4	-	にぶい黄柾	底部系切	
岡5-34-488 10001851	P6162	土師器 杯	-	7.8*	-	外:にぶい柾 内:灰白	底部系切	
岡5-34-489 10001873	4面	瓦質土器 火鉢	42.6*	-	-	にぶい黄柾	内面に黒斑	
岡5-34-490 10001902	4面	瓦質土器 火鉢	44.2	-	-	灰		
岡5-34-491 10001843	4面	瓦質土器 火鉢	-	-	-	浅黄柾		
岡5-34-492 10001840	4面	瓦質土器 火鉢	-	-	-	褐灰		5-20-492 20110211
岡5-34-493 10001845	4面	瓦質土器 鍋	31.6*	-	-	にぶい黄柾	外面部付着	
岡5-34-494 10001847	4面	瓦質土器 鍋	-	-	-	にぶい黄柾	外面部付着	
岡5-34-495 10001846	4面	瓦質土器 鍋	-	-	-	外:褐灰 内:黑	外面部付着	5-20-495 20110207
岡5-35-496 10001841	P6167	瓦質土器 焰口	20.1*	-	-	灰白		

表 5-5 6G 区第4面・4面下の出土遺物

横段・番号 登録番号	出土位置	種別 器種	寸法 cm			色 調	備 考	写真図版 写真登録番号
			口径	底径	器高			
図 5-35-497 10001849	4 面	瓦質土器 焰鋸	20.2°	-	-	外: にぶい黄褐 内: 灰黄		
図 5-35-498 10001839	4 面	瓦質土器 茶釜	12.0°	-	-	灰白		5-20-498 20110210
図 5-35-499 10001858	4 面	瓦質土器 焰鋸	-	28.4°	-	褐色		5-20-499 20110206
図 5-35-500 10001901	4 面	瓦質土器 焰鋸	-	15.4°	-	外: 灰 内: にぶい赤褐		
図 5-35-501 10003121	4 面	銅製品 懸札	長 2.9	幅 2.3	厚 1.1		重さ 17.2g	5-19-501 20110203-204
図 5-35-502 07003904	4 面下	白磁 皿	-	-	-	胎土: 白	森田 E 群	5-20-502 20110052
図 5-35-503 07003905	4 面下	白磁 皿	11.9°	-	-	胎土: 白	森田 E 群	5-20-503 20110053
図 5-35-504 07003908	4 面下	青磁 碗	-	-	-	胎土: 灰白	竜泉窯系 碗上田 D 類	5-20-504 20110057
図 5-35-505 07003888	4 面下	青磁 碗	13.8°	-	-	胎土: にぶい柑	竜泉窯系 碗上田 B IV 類	5-20-505 20110084
図 5-35-506 07003909	4 面下	青磁 壺	12.3°	-	-	胎土: 灰白	竜泉窯系	5-20-506 20110058
図 5-35-507 07003906	4 面下	青磁 皿	7.2°	-	-	胎土: 灰白	福建系 小野 B1 群	5-20-507 20110054+55
図 5-35-508 07003910	4 面下	黒釉陶器 碗	-	-	-	胎土: 灰白	中国 14+15c 天目	5-20-508 20110059
図 5-35-509 07003907	4 面下	象嵌青磁 角鉢	11.2°	-	-	胎土: 灰白	朝鮮半島	5-20-509 20110056
図 5-35-510 07003902	4 面下	陶器 皿	-	5.4°	-	胎土: 灰黄褐	肥前 1590~1610 年代	5-20-510 20110049+50
図 5-35-511 07003903	4 面下	陶器 皿	-	-	-	胎土: にぶい黄褐	肥前 1590~1610 年代	5-20-511 20110051
図 5-35-512 07003901	4 面下	陶器 大皿	28.9°	9.0	7.4	胎土: 灰白・灰黄褐	肥前 1590~1610 年代	5-20-512 20110030
図 5-35-513 10001869	4 面下	土師器 小皿	6.3	3.3	1.8	浅黄褐	底部系切	
図 5-35-514 10001863	4 面下	土師器 小皿	6.4	3.7	1.8	浅黄褐	底部系切 口縁油燐付	
図 5-35-515 10001866	4 面下	土師器 小皿	6.8	4.6	1.8	橙	底部系切	
図 5-35-516 10001868	4 面下	土師器 小皿	7.2°	3.8	1.9	浅黄褐	底部系切	
図 5-35-517 10001871	4 面下	土師器 杯	-	-	-	浅黄褐	底部系切	
図 5-35-518 10001870	4 面下	土師器 小皿	8.6°	3.6°	2.2	浅黄褐	底部系切	
図 5-35-519 10001865	4 面下	土師器 杯	9.2°	7.0°	1.7	黄褐	底部系切	
図 5-35-520 10001864	4 面下	土師器 杯	9.4°	3.9	2.6	浅黄褐	底部系切	
図 5-35-521 10001862	4 面下	土師器 杯	10.4°	5.8°	3.8	外: にぶい柑 内: 柑	底部系切	
図 5-35-522 10001861	4 面下	土師器 杯	11.5°	4.2	3.2	灰白	底部系切	
図 5-35-523 10001867	4 面下	瓦質土器 火鉢	-	-	-	外: にぶい黄褐 内: にぶい褐		

7　まとめ

東畠瀬遺跡 6C 区では、戦国武将神代勝利の菩提寺であった宗源院の下層について発掘調査を行い、江戸時代の遺構面を 4 面確認し、多くの遺物が出土した。調査の内容について、寺院の変遷とその背景を簡潔ながらまとめておきたい。

1) 各面の様相

第 1 面では、現存していた本堂・庫裡とほぼ同じ規模の建物を確認し、1 段階古い本堂・庫裡であったと推定される。本堂と庫裡の位置については、現存していたものとは南北逆になる可能性はあるが、造成による整地を伴う建て替えが行われたことが考えられる。第 1 面の時期については、第 1 面から出土した遺物は少ないので、第 1 面の整地層である 1-2 面出土遺物が 18 世紀後半から 19 世紀初頭のものを中心としているため、1800 年前後の時期が推定される。宗源院に残されていた宗源院文書には、文化 2 (1805) 年の「瑞雲山本堂再興目安帳」、文化 5 (1808) 年「觀音再興并堂一字造営目安帳」などがあり、文化年間に大規模な寺地整備が行われたことが判明する。考古学的に推定される整地の時期と符合するため、第 1 面は文化年間 (19 世紀初頭) に整備されたものと断定できよう。寺域北東部に現存していた石垣もこの時期に構築されたものと思われる。

第 2 面では、建物区画や庭園遺構などを検出し、ほぼ同一面での大規模な改修が行われたことが確認された。建物自体については不明であるが、礎石建物の存在が推定され、庭園や花壇状の遺構が伴うことから、ある程度の規模の寺院が建立されていた可能性が高い。なお、各面を通じて瓦がほとんど出土していないため、礎石建物であっても、瓦葺ではない建物であったと考えられる。庭園は素掘りの池から築山を伴う石囲いの池へと変遷しており、寺院の格を知る手掛かりとなろう。第 2 面の時期については、出土遺物が 18 世紀代を中心とし、時期幅はあるものの、第 2 面の整地層である 2-3 面出土遺物は 17 世紀後半のものが大多数を占めることから、18 世紀代の時期とみられる。改修の時期について詳細にすることはできないが、1-2 面で 18 世紀後半、2-3 面で 18 世紀前半の遺物が出土しており、18 世紀中頃ではないかと思われる。

第 3 面では、石組遺構やトイレ遺構を確認したが、第 2 面の整地層があまり厚くないことや明確な遺構が少ないこともあり、全体像を把握するのは難しい。ただ、トイレ遺構の状況などから、ある程度の規模の建物などが存在していたことが示唆される。SX6058 石組遺構は性格不明といわざるを得ないが、基壇状をなす部分のほぼ中央にあることから、何らかの施設の下部構造であった可能性がある²⁾。第 3 面の時期については、SX6058 に関連すると推定される SX6063 出土の肥前染付磁器小壺が 1650 ~ 60 年代のものであり、第 3 面の整地層である 3-4 面出土遺物に 17 世紀前半代の遺物が多いことから、17 世紀第 3 四半世紀に整備が行われたことが推測される。

第 4 面では、石垣、石列、溝、小穴などを検出し、明確にすることはできなかったが、掘立柱建物の存在が推定される。この面からは懸仏の一部が出土しており、寺院であったことを示す遺物であると考えられ、ある程度の広さの寺域を有するものとみられる。第 4 面で検出された遺構の方位から、真北を意識した第 1・2 面とは異なり、地形に沿った寺院の構造となっている。第 4 面の時期については、第 4 面から 17 世紀前半代の遺物が出土していることから、この時期に使用された面と推定される。整備された時期については、整地層である 4 面下から大橋 1 期の陶器が出土していることから、16 世紀末を大きく超えることはないであろう。

第 4 面の下層については、試掘坑で遺構面を確認することはできなかった。したがって、第 4 面が最初に本格的な寺院として整備されたものであると考えられる。第 4 面を中心に戦国時代のものを主体とした中世の遺物が出土しているが、寺院に関係するものか、勝利が隠居所とした畠瀬城に伴うものかは不明であり、もし戦国期に遡る施設があったとしても、ごく簡素なものであったと思われる³⁾。

2) 出土遺物について

6G 区からは数多くの遺物が出土しているが、整理期間の都合などで、陶磁器を主として報告した。今回の報告のみでは、宗源院跡出土遺物の全体像を知ることができない点を御了承願いたい。

陶磁器類の中では、2-3面から1-2面にかけて肥前白磁が一定の割合を占める点が注目され、肥前青磁を含め寺院跡出土遺物の特徴が表れている可能性が高い。また、恐らく組物と思われるほど同じ大きさ・文様の染付磁器が多く確認されることも特徴的であり、一般的な集落の様相とはやや異なる点がみられる。

定量的な分析ができていないが、陶磁器の組成を概観すると、17世紀代は肥前産のものでほぼ独占されているが、18世紀代には関西系陶器がみられるようになり、19世紀になると薩摩や熊本産の土瓶などが入ってきている。このような様相は、恐らく一般的な集落でもみられるものと思われる。

産地の点では、佐賀市川久保皿山窯の製品が確認されている。巻刷毛目で装飾され、器形などに特徴があり、生産地と消費地の関係を知るうえで手掛かりとなる。嘉瀬川ダム建設に伴う発掘調査では散見されているよう、東畠瀬遺跡7区でも出土している。特に、川久保皿山窯は神代領内にあり、山内との関連が深いかもしれない。このほか、有田やその周辺の製品ではない可能性の染付磁器や産地不明の陶器碗などが出土しており、その産地については今後の課題である。

また、組物になる可能性がある京焼風陶器皿が多く出土しているが、高台内の押印には「北嶋十」「山原住」などのこれまで類例が知られていないものが確認される。これらについても産地や類例を含め、検討が必要である。

陶磁器以外では、第2面、2-3面を中心とした土師器小皿の出土が目立ち、祭祀に関係する可能性がある。詳細な分析は行っていないが、およそ口径など大きさが縮小傾向にあり、18世紀代になると器壁の薄手のものが出現するようである。図示したものは少ないが、瓦賀土器鍋・焰烙・火鉢などが各遺構面や整地層から出土しており、第2面では包丁があることから、住職や管理する人が住んでいた可能性が高い。

3) 造営・改修の契機と背景

6G 区の調査によって、宗源院は 16世紀末～17世紀初頭に本格的な寺院として整備されて以降、改修が何回も行われ、現代にいたっていることが判明した。ここでは、その背景について簡単に述べてみたい。

宗源院で行われる重要な儀式として、神代勝利の 50 年ごとの年忌がある。史料には、元治元（1864）年に三百回忌（「当院開基公三百回忌記録」宗源院文書）、文化 11（1814）年に二百五十年忌、宝暦 14（1764）年に二百年忌（「宗源院開基公二百年忌 二百五十年 両度之記録」）を行っていることがみられる。このうち、文化 11 年の二百五十年忌は、第 1 面整備の時期と符合するので、文化年間の大規模な整備は二百五十年忌に向けた整備であると考えられる。また、宝暦 14 年の二百年忌は 18 世紀中頃と思われる第 2 面の大規模な改修時期に近く、記録にはないものの、第 3 面の整備時期が 17 世紀第 3 四半世紀に推定されることから、行われたとすれば寛文 4（1664）年の百年忌を契機としたことが推測される。このように、発掘調査で確認された第 1 面整備、第 2 面の改修、第 2 面整備、第 3 面整備と五十年忌は回数的にも同じであるため、宗源院の整備・改修は五十年忌を契機に行われている可能性がある。なお、「曹洞宗由緒」に残る宗源院の記録に、寛文 3（1663）年に鍋島光茂より「茶湯薪用山林芭町余寄付」、宝永元（1704）年に神代彈正より「茶湯料米三石永代被遺御寄付」とあり、年忌に向けた整備と関連するかもしれない。

上記の推定が正しければ、宗源院は慶長 19（1614）年の五十年忌を執り行うために本格的に整備されたとみられる。出土遺物の面からは矛盾がないので、契機としては十分に考えられることである。これに関連して、宗源院墓地（9 区）にある神代勝利の墓とされる宝篋印塔が 17 世紀前半～中頃の作と推定されていることから、この石塔も第 4 面あるいは第 3 面の整備に伴って製作されたものかもしれない。

ところで、記録に残る年忌の施主についてみると、三百回忌と二百五十年忌では川久保神代家の当主が務めてい

るが、二百年忌では当主の嫡子の子が施主となっており、興味深い。神代家には宗源院に関する史料がみられないようであり、意外と宗源院との関係が薄い可能性がある。少なくとも二百年忌は実質的に執り行つた別の人物がいると考えられるが、その候補として宗源院墓地に葬られている小城鍋島家に仕えた神代家（以下、小城神代家）が挙げられる。宗源院に付属する墓地に葬られていることから、宗源院の維持管理について小城神代家が実質的な主体者であった可能性が高い。恐らく、勝利の50年ごとの年忌についても重要な役割を果たしたに違いない。

ところが、小城神代家は4代とされる利尚が寛永14・15（1637・38）年の島原の乱で功名を挙げたことから、小城支藩の主要な家臣となるが、それ以前については不明な点が多い¹⁾。したがって、宗源院の第4面整備に小城神代家が関わっていたとは考えにくい。神代本家と宗源院のかかわりが明らかでない中、宗源院の創建ともいえる第4面の整備の主体者は誰であろうか。

確証はないが、本格的な寺院として整備に関わったのは鍋島本家ではないかと思われ、少なくとも直茂、勝茂の意向が働いていたのではないかと思う。寛文3（1663）年に2代藩主光茂より寄付があったことは示唆的である。鍋島家にとって山内は決して支配が容易な地域ではなく、細心の注意を払う必要があったことが「鍋島勝茂・元茂知行覺書」（小城鍋島家文書）からうかがえる。神代勝利が2回、長良が1回、山内から落ち延びなければならぬ状況になってしまっても、再び山内の総大将として帰還していることがその背景にあるものと思われる。江戸時代初期は、勝茂が開ヶ原の戦い自体には参加していないものの西軍の一員として伏見城・安濃津城攻めに参加しており、また龍造寺家の関係も整理されておらず、鍋島家は決して安泰な地位にあったわけではない。もし、山内の支配がうまくいかず、何か事が起これば、改易の可能性もあったはずで、山内の支配にはかなり腐心していたものと思われる。このようなことが、宗源院を本格的な寺院として整備することの背景にあったのではないかと推測するのである。勝利が亡くなった畠瀬の地に寺院を創建して、山内の英雄として鍋島家が勝利を敬っていることを示すことによって、山内を安定的に支配するための象徴的な役割を宗源院が担っていたのではないかと思う。

いずれにせよ、宗源院の本格的な整備・改修とその背景は、宗源院墓地の分析を含めて、より広い視野での検討が必要になるものと思われる。

注

- 1) 369の刀子と合わせ2点の分析・保存修理にあたっては、福岡市埋蔵文化財センターのご好意により、機器等を利用させていただいた。
- 2) 懐疑の域を出ないが、神代勝利の墓とされる宝鏡印塔が当初はここに設置されていた可能性もある。
- 3) 東畠瀬遺跡では16世紀後半の遺物は意外と少なく、勝利の死後に畠瀬城が積極的に利用されていたとはいえない。勝利が畠瀬で過ごした時間もごく短いことから、本格的な寺院があつたとは考えにくい。
- 4) 小城神代家と島原の亂の絆についてでは「元茂公御年譜」に詳しいが、島原の乱が発生した時には利尚、その弟の兵衛は江戸にいたことが分かり、利尚は鍋島家に仕えていたかどうかも定かではない。系図では勝利につなげているものの、出自自体はかなり怪しい。

第5章 参考・引用文献

- 上田秀夫（1982）「14～16世紀の青磁碗の分類」『貿易陶磁研究』No. 2 日本貿易陶磁研究会
 小堀敬敏（1982）「15、16世紀の壺形碗、皿の分類とその年代」『貿易陶磁研究』No. 2 日本貿易陶磁研究会
 畠瀬川ダム建設に伴う学術調査委員会（2000）「畠瀬川ダム建設に伴う学術調査報告書」富士町教育委員会
 九州近世陶磁学会（2000）「九州陶磁の編年」
 佐賀県教育委員会（2007）「東畠瀬遺跡1・大野遺跡1」佐賀県文化財調査報告書第170集
 佐賀県教育委員会（2008）「西畠瀬遺跡1」佐賀県文化財調査報告書第176集
 佐賀県教育委員会（2009）「西畠瀬遺跡2・大井遺跡」佐賀県文化財調査報告書第180集
 佐賀県教育委員会（2010）「東畠瀬遺跡2・畠瀬城跡」佐賀県文化財調査報告書第185集
 佐賀県立図書館（1990）「佐賀縣史稿集成 古文書編」第30巻
 佐賀大学文系基礎学研究プロジェクト（2004）「小城鍋島文庫に見る小城鍋島藩と島原の乱」
 佐賀市教育委員会（2001）「佐賀市埋蔵文化財確認調査報告書—1997・1998年度—」佐賀市文化財調査報告書第122集
 全国神代ゆかりの会（1980）「神代家伝記」「神代家とその一族」1号
 全国神代ゆかりの会（1981）「神代家とその一族」2号
 太宰府市教育委員会（2000）「太宰府城跡第XV—陶磁器分類編—」太宰府市の文化財第49集
 他水真眞（1990）「肥前における中世後期の在地土器」『中世土器の基礎研究Ⅵ』日本中世土器研究会

- 富士町教育委員会（2005）『相模城跡』富士町文化財調査報告書第4集
富士町誌編さん委員会（1968）『富士町誌』富士町教育委員会
富士町史編さん委員会（2000）『富士町史』上巻・下巻 富士町
森川 勉（1982）「14～16世紀の白磁の型式分類と編年」『貿易陶磁研究』No. 2 日本貿易陶磁研究会
森木朝子・片山まび（2000）「博多出土の高麗・朝鮮陶磁の分類試案」『博多研究会誌』第8号 博多研究会

第6章 東畠瀬遺跡9区

1 東畠瀬遺跡9区の概要

東畠瀬遺跡は、佐賀県佐賀市富士町大字閑屋字鶴・辻・田野々・平・川向に所在する。

東畠瀬地区は、嘉瀬川中流域の左岸に位置し、ダム建設に伴い全戸移転するまで北西向きの山麓部斜面一帯に集落が展開していた。当地には、各地に割拠した小領主をまとめあげて山内を統一し、佐賀の龍造寺隆信と朝を競った神代勝利が隠居所とした畠瀬城があったとされ、さらに勝利の菩提寺である宗源院がある。嘉瀬川を挟んだ対岸には西畠瀬地区があり、東西の畠瀬地区は、藩政期には東畠瀬が佐賀本藩領、西畠瀬が小城鍋島家（小城支藩）領に属し、昭和31（1956）年に旧富士町として合併するまで佐賀郡小門村と小城郡南山村に分かれていた。現在は国道323号線が古湯地区から西畠瀬を経て栗並地区に続いているが、近世以前の基幹道は小瀬川地区から峠を越えて東畠瀬に入り、嘉瀬川を渡って西畠瀬に向かうという経路であったことが『正保四年肥前一国絵図』などからも読み取れる。

東畠瀬遺跡では、嘉瀬川ダム建設事業に伴い1～9区の発掘調査が実施され、縄文時代～弥生時代の集落跡・遺物包含層、中世の集落跡・城館跡、近世の寺院跡・集落跡などが確認されている。

今回報告する9区は、上記した神代勝利やその子孫および宗源院の歴代住職墓がある墓地（宗源院墓地）で、遺跡域の南端に近く、旧東畠瀬集落域からみても南端に近い。当地がダム建設のために水没することから、墓地の移転（改葬）が計画されたが、当地が東畠瀬遺跡の範囲に含まれることに加え、神代勝利およびその一族に関連する遺跡・遺構は地域において特に重要なものであることなどを考慮し、改葬前に本調査を実施することとした。

調査は、あらかじめ墓石・石塔類などを記録化し、これらを移転のため撤去した後、あらためて遺構検出作業を行い墓壙等の調査を実施した。

2 9区の遺構と遺物

1) 外表施設

宗源院墓地の調査では、墓地の移転に先だって、まず墓石・石塔類等の外表施設を記録化し、これらを撤去した後、改めて遺構検出を行い、下部遺構の調査を行った。

外表施設については、墓地内の石塔類や自然石にはSXの遺構略号を付した。ちなみに、神代勝利の墓と伝えられているものはSX9001である。なお、報告に際して外表施設の左右を示す場合には、調査者からみた左右を表記する。

SX9001（図6-3・12）

調査区の東端近くに位置する。神代勝利の墓と伝えられるもので、正面は西を向く。竿石を3段に巡らし、その上に、さらに一回り小型の竿石を巡らし内側に板石を敷き並べ基壇としている。基壇の端には玉垣が巡り、正面には石門をもつ。基壇中央には台石があり、その上に宝篋印塔が載る。基壇に使用された石はすべて花崗岩で、玉垣、石門、台石、宝篋印塔は安山岩製である。調査時点において、石門は破損しており、基壇正面に積み重ねられた状態であった（図は石門を復元した姿）。宝篋印塔は、方柱状の相輪、開きぎみの隅脚突起をもつ笠、縱長方形の軸、裾括がりで下部がアーチ状の基礎からなり、全高は1.06mである。宝篋印塔の軸の正面には「心」、後面には「星」、右側面には「日」、左側面には「月」の銘がある。また、基礎の正面には「覺善堅利 大禪定門」の銘がある。

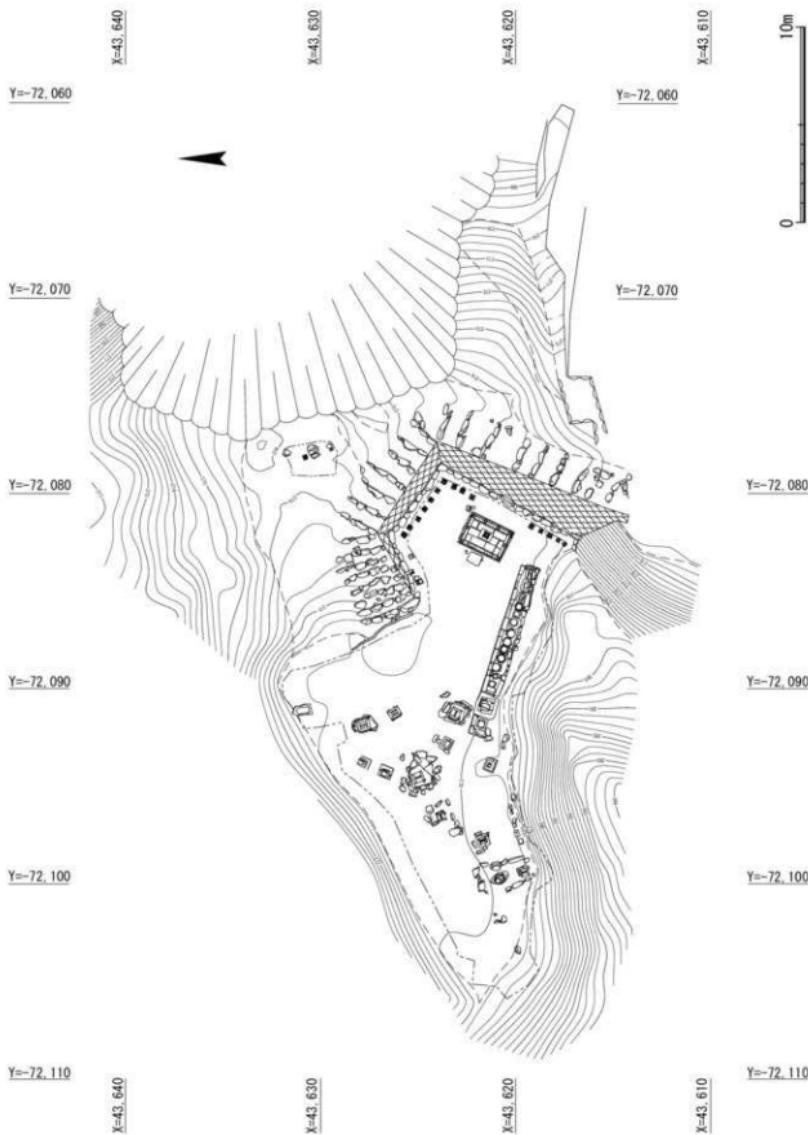


図 6-1 周辺地形図 (1/250)

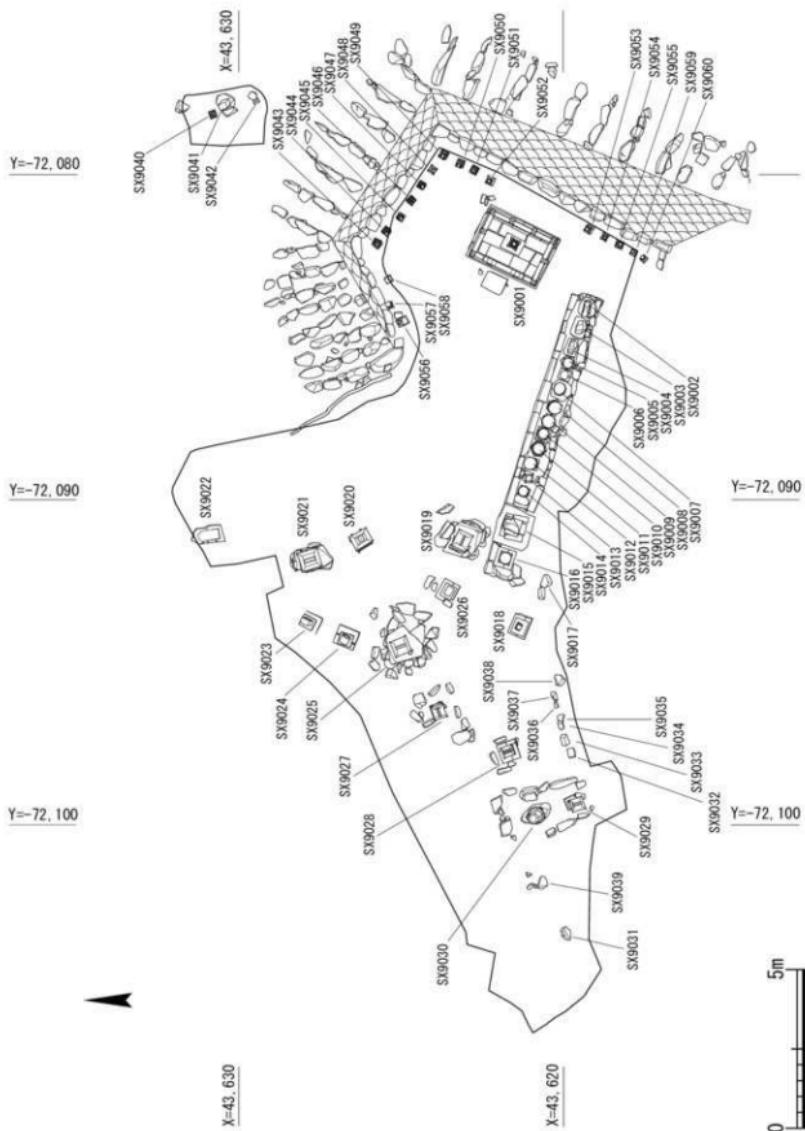


図 6-2 外表施設位置図 (1/150)

なお、相輪についてみると、左側面のみ九輪を表現した線刻がなく（この面が本来の後面であったと考えられる）、軸については、正面のみに縱方向の線刻が施されており、さらに、笠の線刻や基礎の段が後面では省略されていることなどから、この宝篋印塔は、方向（特に正面觀）を意識して造られていると推定される。

SX9002（図6-4・12）

調査区の南東部に概ね東西に長軸をとる基壇が築かれており、基壇上に宗源院の歴代住職墓の多くが北向きに並べられている（SX9002～SX9014）。SX9002は、この基壇の最も東端に位置しており、西隣にはSX9003がある。

扁平に加工された石塔と、下部の台石の2石からなり、ともに安山岩製である。石塔は、高さ0.86m、幅0.52m、厚さ0.18mである。石塔正面の花燈形の中に「加永二酉年 十二世大和尚 四月廿六日」の銘がある。

SX9003（図6-4・12）

調査区の南東部、歴代住職墓が並ぶ基壇上にある。東隣にはSX9002、西隣にはSX9004がある。やや厚みのある自然石風の石塔と台石の2石からなり、ともに安山岩製である。石塔は、高さ0.65m、幅0.39m、厚さ0.29mである。石塔正面の花燈形の中に「八世大和尚」の銘がある。

SX9004（図6-4・12）

歴代住職墓が並ぶ基壇上にある。東隣にはSX9003が、西隣にはSX9005がある。自然石風の石塔と台石からなり、ともに安山岩製である。石塔は、高さ0.66m、幅0.45m、厚さ0.23mである。石塔正面の花燈形の中に「六世大和尚」の銘がある。

SX9005（図6-4・12）

歴代住職墓が並ぶ基壇上にある。東隣にはSX9004が、西隣にはSX9006がある。塔身・中台・基礎からなる無縫塔で、塔身は花崗岩製、中台と基礎は安山岩製である。塔身は、高さ0.43m、最大径0.31mで、正面に「碧雲緑雪首座」、裏側に「享保六□正月十八日」の銘をもつ（□は判読不能）。基礎は、六角形で反花座を置く。

SX9006（図6-4・12）

歴代住職墓が並ぶ基壇上にある。東隣にはSX9004が、西隣にはSX9006がある。塔身・中台・基礎からなる無縫塔で、塔身・中台は安山岩製、基礎は花崗岩製である。塔身は、高さ0.41m、最大径0.27mで、正面に「鏡翁仙和尚」、裏側に「元禄九丙子天霜月廿六日 毒岳立之」の銘をもつ。

SX9007（図6-4）

歴代住職墓が並ぶ基壇上にある。東隣にはSX9006が、西隣にはSX9008がある。塔身・請花座・基礎からなる無縫塔で、各部位はすべて花崗岩製である。塔身は、高さ0.47m、最大径0.38mである。銘は見当たらない。

SX9008（図6-4・12）

歴代住職墓が並ぶ基壇上にある。東隣にはSX9007が、西隣にはSX9009がある。塔身・請花座・基礎からなる無縫塔で、各部位はすべて安山岩製である。塔身は、高さ0.48m、最大径0.42mで、正面に「前徳持當山中興十世惠照天大和尚禪師」、右側面に「文政二己年卯九月初六日」の銘をもつ。基礎は、六角形で反花座を置く。

SX9009（図6-4・12）

歴代住職墓が並ぶ基壇上にある。東隣にはSX9008が、西隣にはSX9010がある。塔身・請花座・基礎からなる無縫塔で、各部位はすべて安山岩製である。塔身は、高さ0.44m、最大径0.39mで、正面に「前□□□山九世雪山亭大和尚禪師」の銘をもつ（□は判読不能）。基礎は六角形で反花座を置く。

SX9010（図6-5・12）

歴代住職墓が並ぶ基壇上にある。東隣にはSX9009が、西隣にはSX9011がある。塔身・請花座・基礎からなる無縫塔で、塔身・請花座は安山岩製、基礎は花崗岩製である。塔身は、高さ0.43m、最大径0.33mで、正面に施された花燈形の中に「七世無闇玄大和尚」、正面や右側に「安永二癸巳年二月六日示寂」の銘をもつ。基礎は方形で、正面に「四世梁全大和尚」の銘をもつ。

SX9011（図6-5・12）

歴代住職墓が並ぶ基壇上にある。東隣にはSX9010が、西隣にはSX9012がある。塔身・請花座・基礎からなる無縫塔で、各部位はすべて安山岩製である。塔身は、高さ0.49m、最大径0.36mで、正面に施された花燈形の中に「當院前住海翁玉印和尚品位」、正面右側に「元文四巳未年九月二十三日」の銘をもつ。基礎は六角形で反花座を置く。

SX9012（図6-5）

歴代住職墓が並ぶ基壇上にある。東隣にはSX9011が、西隣にはSX9013がある。塔身・請花座・中台・基礎の4石からなる無縫塔である。塔身・請花座は花崗岩製、中台・基礎は安山岩製である。塔身は、高さ0.48m、最大径0.38mである。銘は見当たらない。

SX9013（図6-5・13）

歴代住職墓が並ぶ基壇上にある有耳五輪塔で、東隣にはSX9012が、西隣にはSX9014がある。各部位はすべて安山岩製、地表面からの全高は約0.68mである。水輪の正面に「照」、左側面に「圓」、後面に「明」の銘がある。また、右側面にも銘があるが判読できない。

SX9014（図6-5・13）

歴代住職墓が並ぶ基壇の最西端に位置する。東隣にはSX9013が、西隣（基壇外）にはSX9015がある。塔身・請花座・中台・基礎からなる無縫塔で、基礎だけが花崗岩製、他の3石は安山岩製である。塔身は、高さ0.43m、最大径0.32mである。塔身の正面に「十六世大和尚」の銘、右側に「明治十四巳八月廿八日」の銘がある。

SX9015（図6-5・13）

歴代住職墓が並ぶ基壇の西側に隣接し、正面は北を向く。西隣にはSX9016がある。塔身・中台・下台および花立（左側のみ）からなり、塔身と花立は蛇紋岩製、中台と下台は安山岩製である。下台の下にはさらに大型の扁平な自然石を敷き基礎としている。塔身から下台までの全高は約1.7mである。塔身は自然石風で、正面に施された花燈形の中に「十七代鷲山大和尚」の銘をもち、側面には矢穴が残る。中台の正面には「明治三十四年新六月廿一日旧五月六日」、同じく中台の左側面には「設立主 安都間クラ」の銘がある。下台には香炉が造りつけられている。

SX9016（図6-5）

歴代住職墓が並ぶ基壇の西側、SX9015の西隣に位置し、正面は北を向く。塔身・請花座・中台・下台・基からなる無縫塔である。塔は、縁石（自然石）を回し内部に土を充填した上に築かれている。塔身は、高さ0.49m、最大径0.35mである。昭和期に没した和尚の墓で、正面に施された花燈形の中に「二十二世天冲鷹雲大和尚」、正面右側に没年、同じく正面左側に建立者の銘をもつ。事前に改葬されており、調査の対象とはしておらず、外表施設は図化したが、僧名以外の銘文については図示していない。

SX9017（図6-6・13）

調査区南側の急斜面を背にして位置し、北を正面とする自然石の塔である。SX9016の背後にあたる。地表面からの高さは、約0.8mで、正面に「加永六年 天山仙桂上座 丑三月十日」の銘がある。花崗岩製である。

SX9018（図6-6・13）

調査区南側の急斜面を背にして位置する丸石塔（位牌形）で、北を正面とする塔で、塔身・中台・下台からなる。塔身のみ安山岩製で、中台・下台は花崗岩製である。塔身は円頂方形で、高さ0.48m、幅0.23m、厚さ0.16m、正面に施された花燈形の中に「豊室妙念大姉」、右側面に「明治十二年五月七日」の銘をもつ。

SX9019（図6-6・13）

調査区の中央部、やや南寄りに位置する石祠で、正面は北を向く。背後にはSX9015、SX9016がある。入母屋造りの屋根・観音屏のついた祠・方形の下台からなり、各部位はすべて安山岩製である。屋根から下台までの全高は0.84mである。下台の下には、大型の自然石が下部遺構（石室）の蓋として敷かれているが、この蓋石は水平が保たれておらず、下石と蓋石の間に人頭大の自然石を挿み込み、石塔を安定させている。祠の中には花燈形が施され、その中に「蘭庭元秀禪尼」の銘が、祠の後面には「元禄十一戊寅年三月念八日」の銘がそれぞれある。

SX9020（図6-6・13）

調査区の中央部に位置する石祠で、正面は北東を向く。北隣にSX9021がある。宝形造りの屋根・観音屏のついた祠・請花座・下台からなり、各部位はすべて安山岩製である。屋根から下台までの全高は1.49mである。祠の中には花燈形が施され「一應妙機信女」の銘がある。

SX9021（図6-7・13）

調査区の中央部、やや北寄りに位置する石祠で、正面は北東を向く。南隣にSX9020がある。寄棟造りの屋根・観音屏のついた祠・下台からなり、各部位はすべて安山岩製である。下台の下には大型の基礎石を敷き、さらに基礎石の下部に人頭大の石を咬ませ水平を保たせている。屋根から下台までの高さは0.81mである。祠内部に施された花燈形の中には五輪塔が陽刻されており、「白室道光禪定門」の銘をもつ。また、右扉の内側中央には「寛文十年庚戌歲十一月十四日」、左扉の内側中央には「前神代次兵衛副利尚卒示」の銘がある。

SX9022（図6-6・13）

調査区の最北端に位置する石塔で、正面は南を向く。石塔の背後には、北向きの急斜面が迫る。花崗岩の自然石に花燈形を施し、その中に「繁室妙昌位」の銘をおく。石塔は、後向きに倒れている。地表面からの石塔の長さは約1.24mである。

SX9023（図6-7・14）

調査区の中央部、やや西寄りに位置する丸石塔（位牌形）で、正面は南東を向く。南西隣にSX9024がある。塔身・中台・下台からなり、すべて花崗岩製である。塔身は円頂方形で、高さ0.54m・幅0.3m・厚さ0.22m、正面に施された花燈形の中に「天真禪童子」の銘をもつ。下台は半分以上が埋まり、塔全体が傾いている。

SX9024（図6-7・14）

調査区の中央部、やや西寄りに位置する丸石塔（位牌形）で、正面は南東を向く。北東隣にはSX9023がある。塔身・中台・下台からなり、すべて花崗岩製である。塔身は円頂方形で、高さ0.55m・幅0.31m・厚さ0.22m、正面に施された花燈形の中に「槐窓覺夢信女」の銘をもつ。下台は半分近くが埋まり、塔全体が傾いている。

SX9025（図6-7・14）

調査区の中央部、やや西寄りに位置する石祠で、正面は北東を向く。東隣にはSX9026がある。入母屋造りの屋根・銀音扉のついた祠・方形の下台からなり、各部位はすべて安山岩製である。屋根から下台までの全高は0.83mである。下台の下には、大型の自然石（花崗岩）が下部遺構（石室）の蓋として敷かれている。下台と蓋石の間に幾つかの小砾を挿込み、石塔を安定させている。祠の中には花燈形が施され、その中に「一吼軒主獅戲定活禪門」の銘が、祠の後面には「元禄九丙子天三月二十日逝」の銘がある。

SX9026（図6-8・14）

調査区の中央部、やや西寄りに位置する丸石塔（位牌形）で、正面は北東を向く。東隣にはSX9019が、西隣にはSX9025があり、ちょうど両者に挟まれた格好になる。塔身・中台・下台からなり、すべて花崗岩製である。塔身は円頂方形で、高さ0.55m・幅0.31m・厚さ0.22m、正面に施された花燈形の中に「涼薰禪童子」の銘をもつ。

SX9027（図6-8・14）

調査区の西部、中央寄りに位置する石祠で、正面は北を向く。東隣にはSX9025がある。入母屋造りの屋根・銀音扉のついた祠・方形の下台からなり、各部位はすべて安山岩製である。屋根から下台までの全高は0.75mである。祠の中に「鑑室明周大姉之塔」、左扉の内側左寄りに「享保十四歳己酉三月六日卒去」の銘がある。

SX9028（図6-8・14）

調査区の西部に位置する石祠で、正面は東を向く。背後にはSX9030がある。入母屋造りの屋根・銀音扉のついた祠・中台・下台からなり、すべて安山岩製である。屋根から下台までの全高は0.85mである。祠の中に「金剛軒南山涼薰居士」、右扉の内側中央に「俗名神代官右衛門物部利經」、左扉の内側中央に「文化二年乙丑六月十日卒」の銘がある。

SX9029（図6-8・14）

調査区の南西部に位置する石祠で、正面は東を向く。北隣にはSX9030があり、ともに縁石で囲まれている。入母屋造りの屋根・銀音扉のついた祠（扉は左側だけ残存）・下台からなり、すべて安山岩製である。地表面からの高さは、約0.7mである。祠の中に「真際院活巖法水大姉之塔」、左扉の内側左寄りに「寛保四歳甲子正月二十五日卒□」の銘がある（□は判読不能）。

SX9030（図6-8・14）

調査区の南西部に位置し、正面は東を向く。南隣にはSX9029があり、ともに縁石で囲まれている。塔身・請花座・基礎からなり、塔身・請花座は安山岩製、基礎は花崗岩製である。塔身は、頂部が丸い六角柱で、高さ0.91m・幅0.36mである。塔身の正面には花燈形が施され、その中に「桃林軒徹外元聞老居士」、右面に「元文三戊午天」、左面に「夏五月朔日卒」の銘がある。基礎は自然石である。

SX9031（図6-8・14）

調査区の最西端に位置し、正面は北を向く。自然石を用いた塔で、地表面からの長さは、約0.75mである。正面に花燈形を施し、その中に「作夢童子」の銘をもつ。

SX9032（図6-9・14）

調査区南側の急斜面を背にして位置する丸石塔（位牌形）で、正面は北を向く。東隣にSX9033がある。円頂方形の花崗岩製の石塔で、地表面からの高さ約0.55m・幅0.30m・厚さ0.23mである。正面に花燈形が施されており、その中に「紅雪禪童女」の銘がある。

SX9033（図6-9）

調査区南側の急斜面を背にして位置する。西隣にSX9032、東隣にSX9034がある。花崗岩製の方形の石塔で、地表面からの高さ約0.54m・幅約0.30m・厚さ約0.16mである。北面に花燈形や銘があったような痕跡があるが、剥離のため判然としない。

SX9034（図6-9・14）

調査区南側の急斜面を背にして位置し、正面は北を向く。西隣にはSX9033、東隣にはSX9035がある。花崗岩製の方形の石塔で、地表面からの高さ約0.54m・幅約0.31m・厚さ約0.17mである。正面に「享和元西天蟠龍上座八月廿六日」の銘がある。

SX9035（図6-9）

調査区南側の急斜面を背にして位置する、花崗岩を用いた塔である。西隣にはSX9034、東隣にはSX9036がある。地表面からの高さは約0.47mである。銘などは見当たらない。

SX9036（図6-9）

調査区南側の急斜面を背にして位置する、花崗岩を用いた塔である。西隣にはSX9035、東隣にはSX9037がある。地表面からの高さは約0.33mである。銘などは見当たらない。

SX9037（図6-9）

調査区南側の急斜面を背にして位置する、花崗岩を用いた塔である。西隣にはSX9036、東隣にはSX9038がある。地表面からの高さは約0.52mである。銘などは見当たらない。

SX9038（図6-9）

調査区の南側の急斜面を背にして位置する、花崗岩を用いた塔である。西隣にはSX9037がある。地方面からの高さは約0.40mである。銘などは見当たらない。

SX9039

調査区西端近くに位置し、西隣にはSX9031がある。花崗岩を数個配しただけのものである。なお、実測図は作成していない。

SX9040（図6-9）

墓地北東部の一段低い場所に位置し、SX9041、SX9042とともに、他の石塔類から離れた場所にある。正面は南西を向く。頭部を欠いた石仏坐像、五輪塔の火輪、逆さに置いた宝篋印塔の笠からなり、すべて安山岩製で、全高は0.42mである。銘などは見当たらない。

SX9041（図6-9・14）

墓地北東部の一段低い場所に位置し、SX9040、SX9042とともに、他の石塔類から離れた場所にある。正面は南西を向く。平頂方形の塔身、自然石を用いた基礎からなる。塔身は、花崗岩製で高さ0.54m、幅0.27m、厚さ0.22mである。正面に施された花燈形の中に「為幻身了□」の銘がある。（□は判読不能、蓮弁か？）

SX9042（図6-9）

墓地北東部の一段低い場所に位置し、SX9040、SX9041とともに、他の石塔類から離れた場所にある。正面は南西を向く。安山岩製の有蓋類型板碑で、地表面からの長さ約0.47m、幅0.20m、厚さ0.13mである。後方に若干傾いて立っている。銘などは見当たらない。

SX9043（図6-10）

調査区東部の石垣周縁に並べられた石塔の中のひとつで、北東側の列中、西端に位置する。東隣にはSX9044がある。安山岩製の宝篋印塔で、全高は約0.73mである。円柱の相輪、外開きの隅飾突起をもち軒上3段・軒下2段の笠、方形の軸、やや裾折りで下部がアーチ状の基礎からなる宝篋印塔である。銘などは見当たらない。

SX9044（図6-10）

石垣周縁に並ぶ石塔のうち、北東側の列中に位置する。西隣にはSX9043、東隣にはSX9045がある。宝篋印塔と五輪塔の部材が混在し、宝篋印塔の方柱の相輪、線刻を有する有耳五輪塔の火輪、宝篋印塔の方形の軸、やや裾折りで下部がアーチ状の基礎からなる。各部位はすべて安山岩製で、全高は約0.66mである。銘などは見当たらない。

SX9045（図6-10）

石垣周縁に並ぶ石塔のうち、北東側の列中に位置する。西隣にはSX9044、東隣にはSX9046がある。円柱の相輪、外開きの大きな隅飾突起をもつ軒上3段・軒下2段の笠、方形の軸、やや裾折りで下部がアーチ状の基礎からなる宝篋印塔である。各部位はすべて安山岩製、全高は約0.67mである。銘などは見当たらない。

SX9046（図6-10）

石垣周縁に並ぶ石塔の列のうち、北東側の列中に位置する。西隣にSX9045、東隣にSX9047がある。宝篋印塔と五輪塔の部材が混在し、宝篋印塔の方柱の相輪、線刻を有する有耳五輪塔の火輪、宝篋印塔の方形の軸、方形の基礎からなる。各部位はすべて安山岩製で、地表面からの全高は、約0.67mである。銘などは見当たらない。

SX9047（図6-10）

石垣周縁に並ぶ石塔の列のうち、北東側の列中に位置する。西隣にSX9046、東隣にSX9048がある。方柱の相輪、外開きの隅飾突起をもつ軒上3段・軒下2段の笠、方形の軸、方形の基礎からなる宝篋印塔である。各部位はすべて安山岩製で、全高は約0.70mである。銘などは見当たらない。

SX9048（図6-10）

石垣周縁に並ぶ石塔の列のうち、北東側の列中、東端近くに位置する。西隣にはSX9047、東隣にはSX9049がある。宝篋印塔と五輪塔の部材が混在しており、宝篋印塔の円柱の相輪、有耳五輪塔の火輪、宝篋印塔の方形の軸、方形の基礎からなる。各部位はすべて安山岩製で、全高は約0.65mである。銘などは見当たらない。

SX9049（図6-10）

石垣周縁に並ぶ石塔の列のうち、北東側の列中の東端に位置する。西隣にはSX9048、南隣にはSX9050がある。方柱の相輪、外開きの隅飾突起をもつ軒上3段・軒下1段の笠、方形の軸、わずかに裾括がりの基礎からなる宝篋印塔である。各部位はすべて安山岩製で、地表面からの全高は約0.67mである。銘などは見当たらない。

SX9050（図6-10）

石垣周縁に並ぶ石塔の列のうち、南東側の列中の北端近くに位置する。北隣にはSX9049、南隣にはSX9051がある。宝篋印塔の円柱の相輪とやや外開きの隅飾突起をもつ軒上3段・軒下2段の笠、五輪塔の火輪、わずかに裾括がりの宝篋印塔の基礎からなる。各部位はすべて安山岩製で、地表面からの全高は約0.73mである。銘などは見当たらない。

SX9051（図6-10）

石垣周縁に並ぶ石塔の列のうち、南東側の列の北寄りに位置する。北隣にはSX9050、南隣にはSX9052がある。円柱の相輪、やや外開きで大きな隅飾突起をもつ軒上3段・軒下2段の笠、方形の軸、方形の基礎からなる宝篋印塔である。各部位はすべて安山岩製で、地表面からの全高は約0.72mである。銘などは見当たらない。

SX9052（図6-10）

石垣周縁に並ぶ石塔の列のうち、南東側の列の北寄りに位置する。北隣にはSX9051、やや距離をあけ、南隣にはSX9053がある。宝篋印塔と五輪塔の部材が混在しており、宝篋印塔の円柱の相輪、五輪塔の火輪、宝篋印塔の方形の軸、五輪塔の火輪からなる。各部位はすべて安山岩製で、地表面からの全高は約0.65mである。銘などは見当たらない。

SX9053（図6-10）

石垣周縁に並ぶ石塔の列のうち、南東側の列の南寄りに位置する。北隣には、やや距離をあけ SX9052 が、南隣には SX9054 がそれぞれ位置する。方柱の相輪、外開きの隅飾突起をもつ軒上3段・軒下1段の笠、方形の軸、裾括がりで下部がアーチ状の基礎からなる宝篋印塔である。各部位はすべて安山岩製、全高は約0.67mである。銘などは見当たらない。

SX9054（図6-10）

石垣周縁に並ぶ石塔の列のうち、南東側の列の南寄りに位置する。北隣にはSX9053、南隣にはSX9055がある。

宝篋印塔と五輪塔の部材が混在しており、宝篋印塔の方柱の相輪、有耳五輪塔の火輪、宝篋印塔の方形の軸と方形の基礎からなる。各部位はすべて安山岩製で、地表面からの全高は約 0.53 m である。銘などは見当たらない。

SX9055（図 6-11）

石垣周縁に並ぶ石塔の列のうち、南東側の列の南よりに位置する。北隣には SX9054、南隣には SX9059 がある。円柱の相輪、外開きの隅飾突起をもつ軒上 3 段・軒下 2 段の笠、根拠がりで下部がアーチ状の基礎からなる。いずれも宝篋印塔の部材である。各部位はすべて安山岩製で、全高は約 0.60 m である。銘などは見当たらない。

SX9056（図 6-11）

石垣周縁に並ぶ石塔の列のうち、北西側の列の南端に位置する。円柱の相輪、方形の基礎からなる。いずれも宝篋印塔の部材で、安山岩製である。地表面からの高さは約 0.33 m である。

SX9057

石垣周縁に並ぶ石塔の列のうち、北西側の列の南寄りに位置する。南隣には SX9056、北隣には SX9058 がある。五輪塔の空風輪と、有耳五輪塔の火輪の 2 石からなる。各部位は安山岩製で、全高は 0.31 m である。なお、SX9057 については、調査時には実測図作成および写真撮影を行っていないため、墓地移転後の写真を掲載した。

SX9058

石垣周縁に並ぶ石塔の列のうち、北西側の列の北端に位置する。南隣には SX9057、東隣には SX9043 がある。五輪塔と宝篋印塔の部材が混在し、五輪塔の空風輪と、やや外開きの隅飾突起をもつ軒上 1 段の宝篋印塔の笠の 2 石からなる。各部位は安山岩製で、全高は 0.43 m である。なお、SX9058 については、調査時には実測図作成および写真撮影を行っていないため、墓地移転後の写真を掲載した。

SX9059

石垣周縁に並ぶ石塔の列のうち、南東側の列の南端近くに位置する。北隣には SX9055、南隣には SX9060 がある。方柱の相輪、根拠がりで下部がアーチ状の基礎の 2 石からなる。各部位は安山岩製で、全高は 0.31 m である。なお、実測図は作成していない。

SX9060

石垣周縁に並ぶ石塔の列のうち、南東側の列の南端に位置する。北隣には SX9059 がある。宝篋印塔の円柱の相輪、有耳五輪塔の火輪の 2 石からなる。各部位は安山岩製で、全高は 0.42 m である。なお、実測図は作成していない。



0 1m

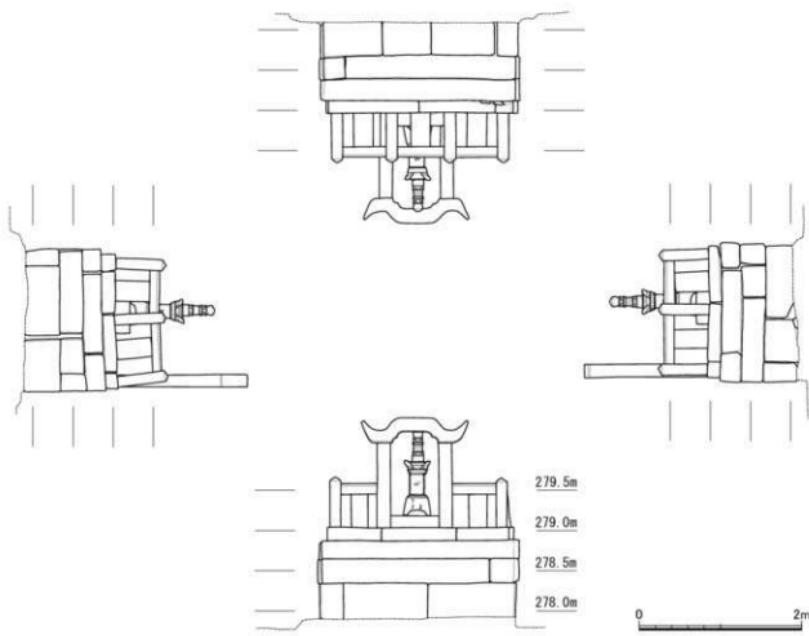


図6-3 外表施設1(1/60)

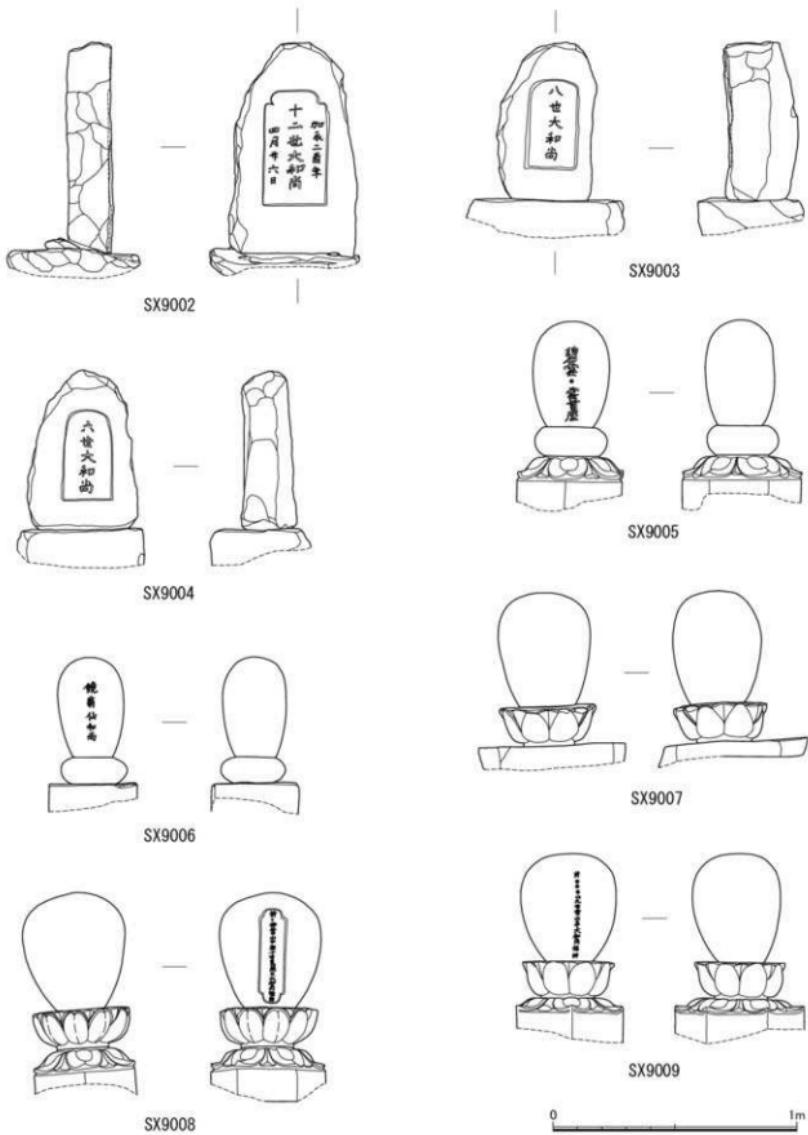


図6-4 外表施設2(1/60)

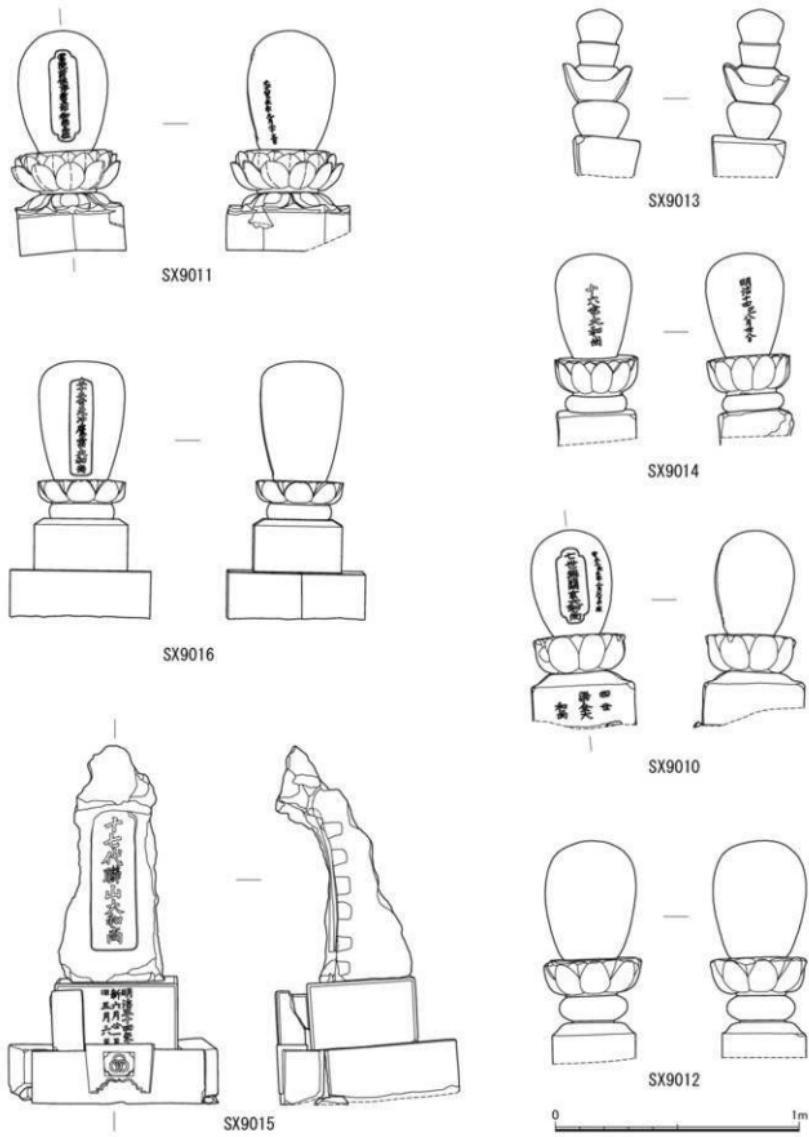


図6-5 外表施設 3(1/60)

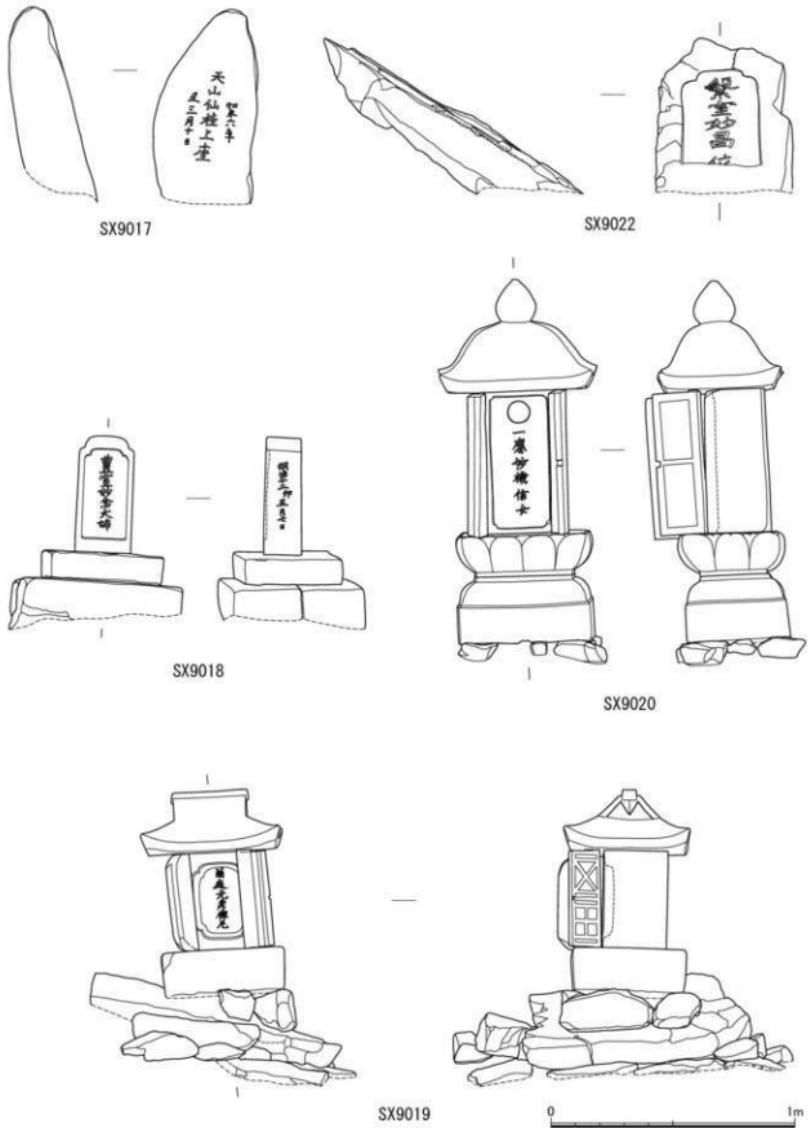


図6-6 外表施設 4(1/60)

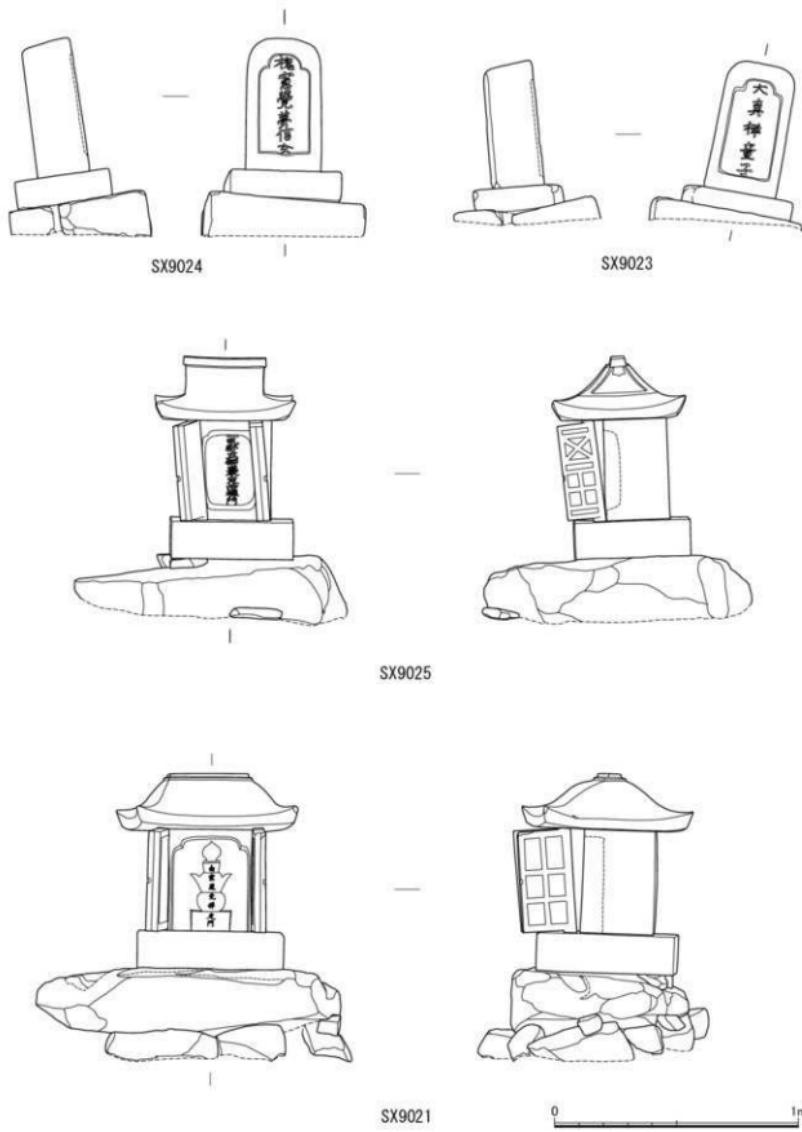


図6-7 外表施設 5(1/60)

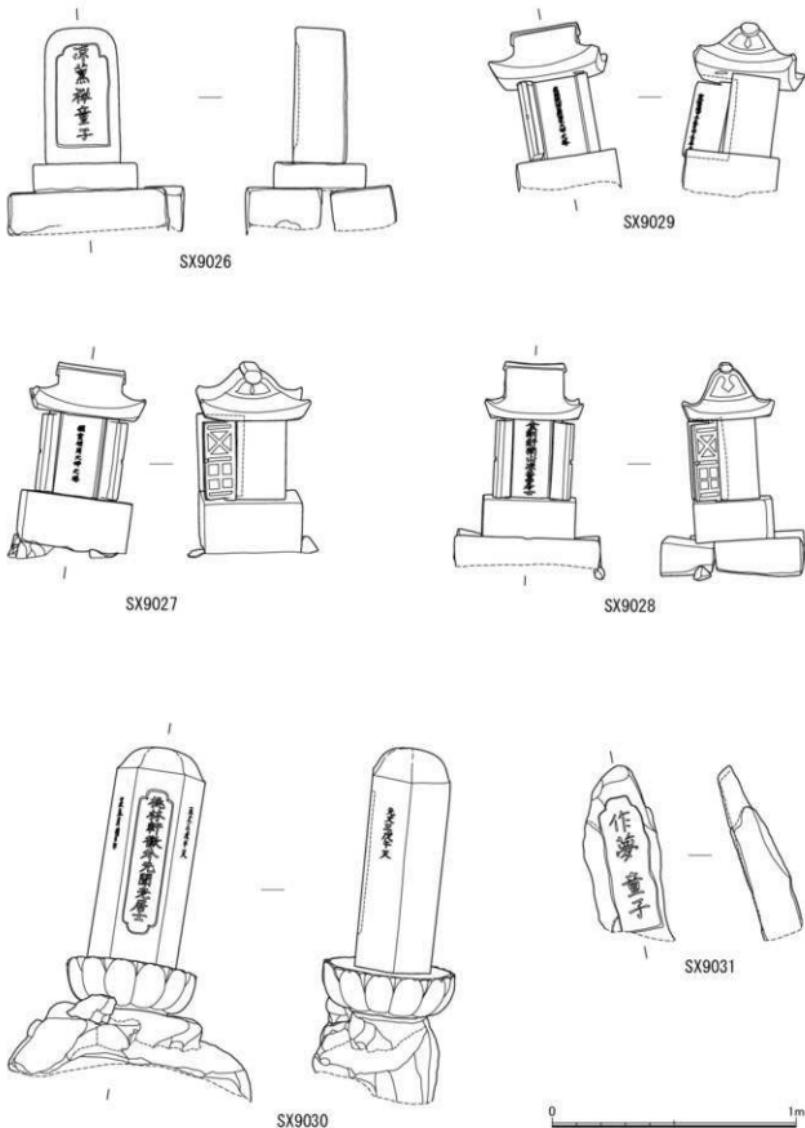


図6-8 外表施設6(1/60)

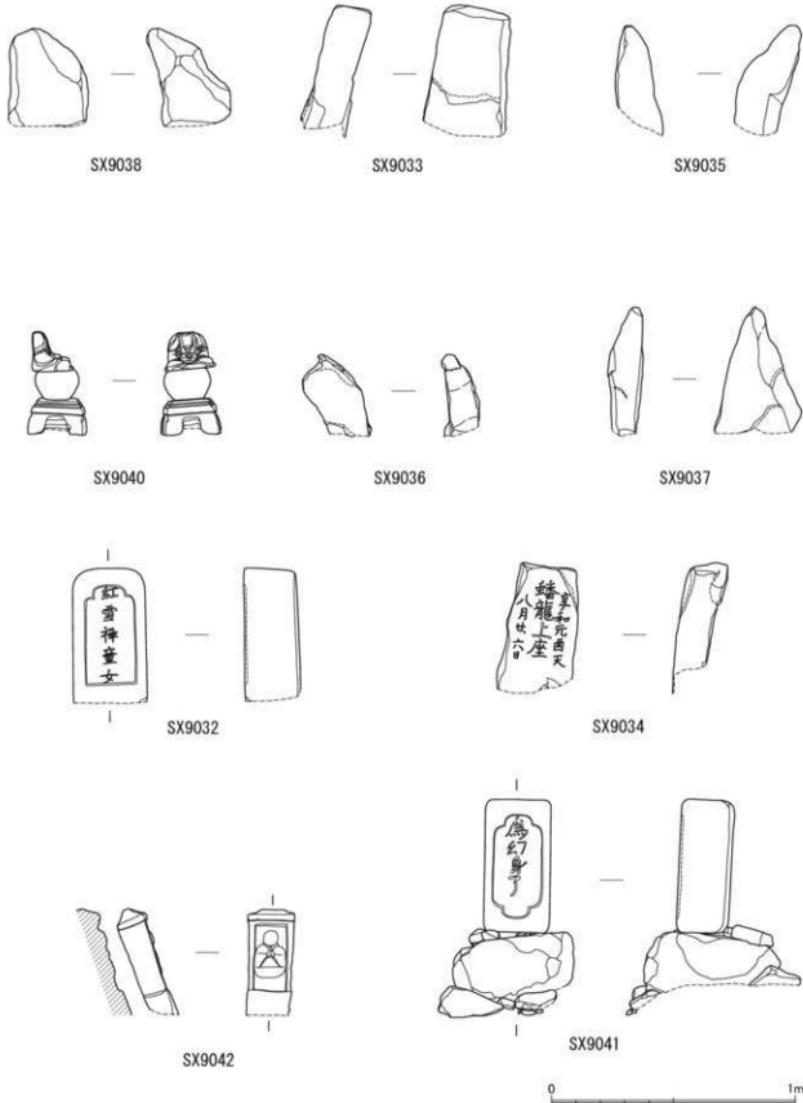


図6-9 外表施設7(1/60)

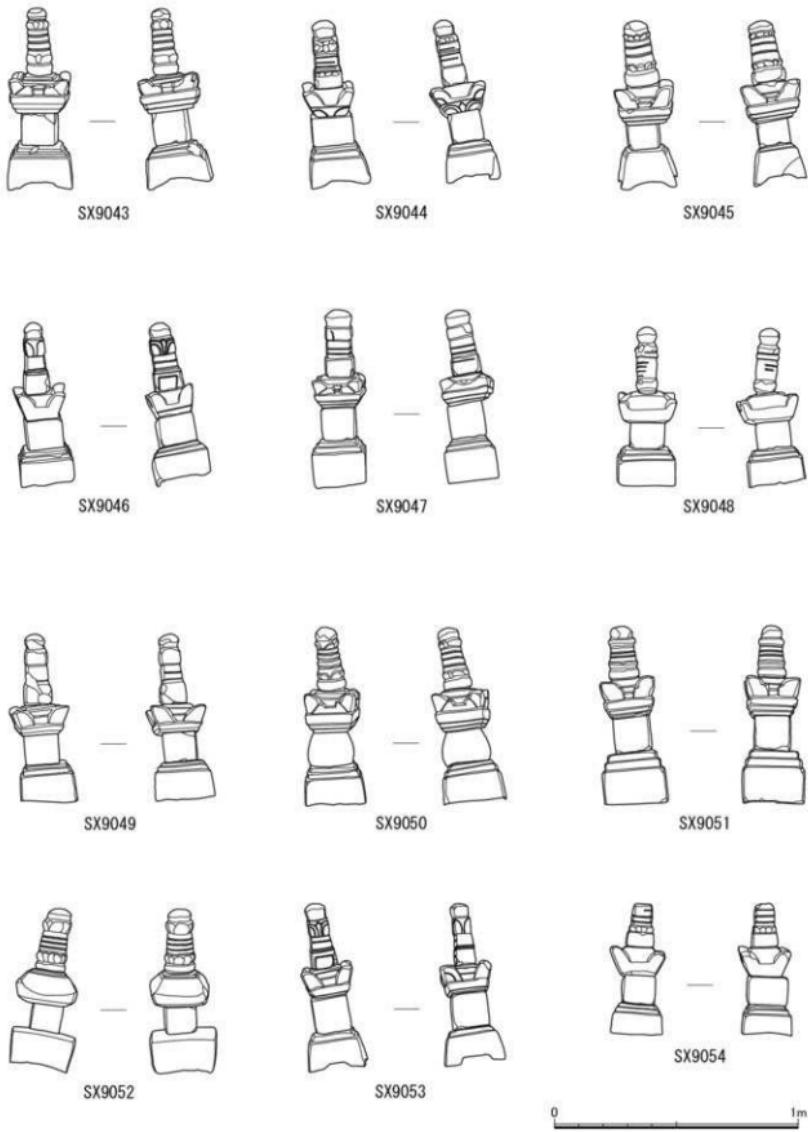


图 6-10 外表施設 8 (1/60)

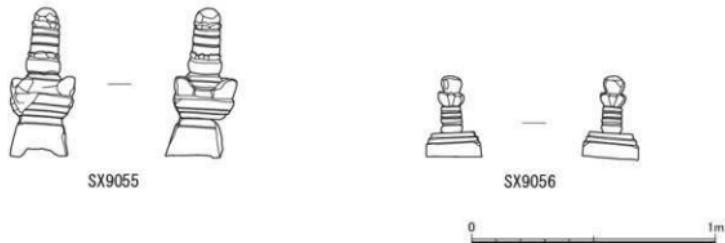


図6-11 外表施設9 (1/60)

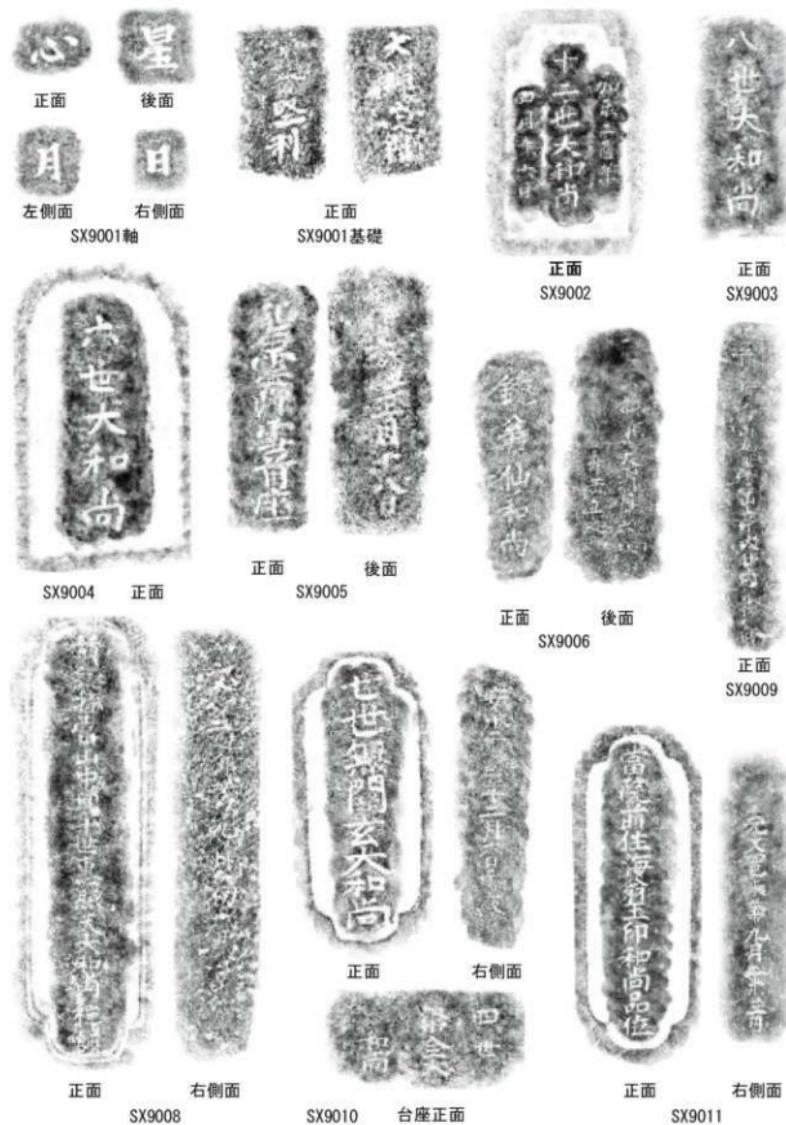


图 6-12 外表施設拓本 1 (缩尺不同)

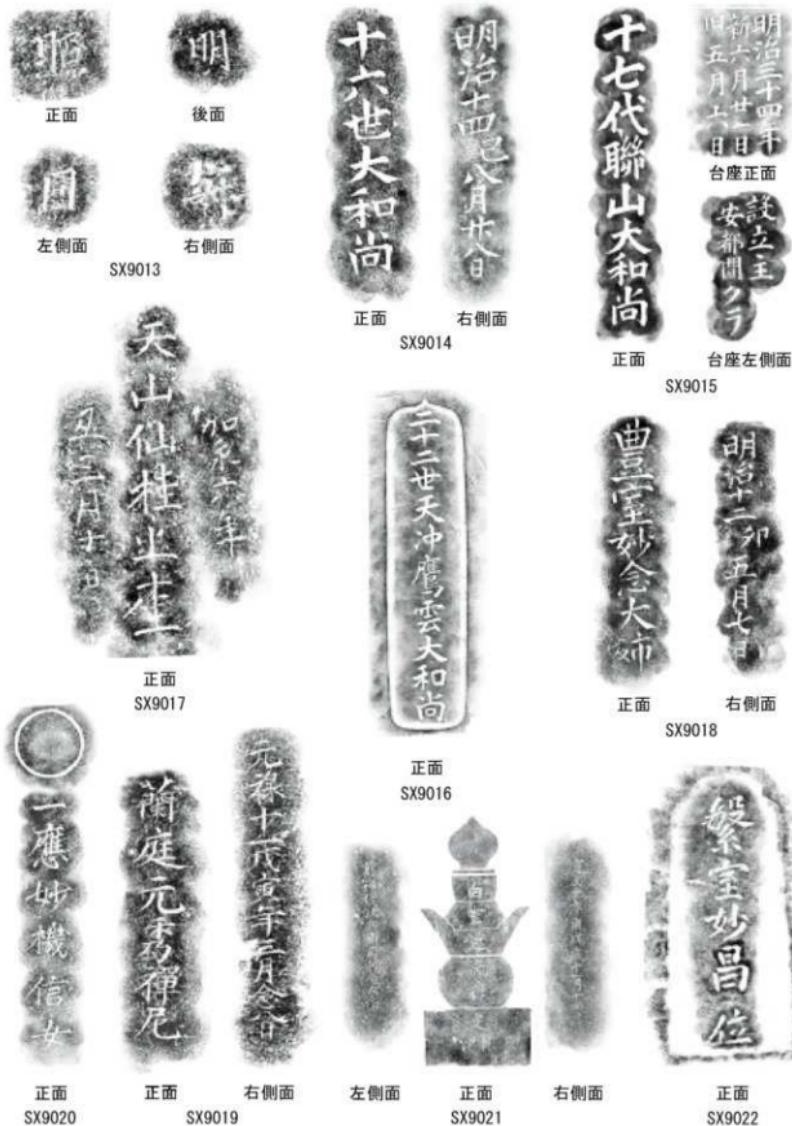


图 6-13 外表施設拓本 2 (縮尺不同)

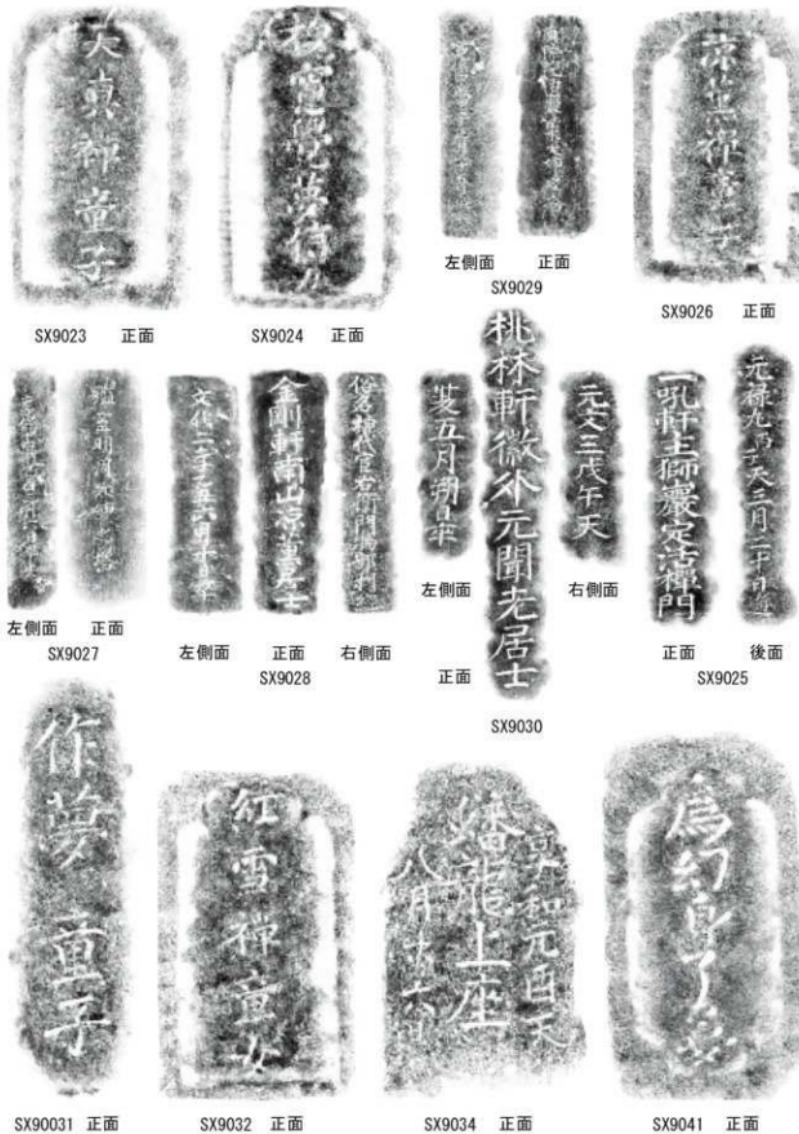


图 6-14 外表施設拓本 3 (縮尺不同)

表6-1 9区外表施設一覧

因数番号	遺構番号	石塔		基	被葬者		直下の道構	写真図版番号
		構成	高さ(m)		名前・統稱	生没年		
図6-3-12	SX9001	宝慶印塔	1.06 (基礎除く)	心・星・日・月 寛延堅大神定門	神代勝利	?~承暦8(1565)	-	写真図版 6-2
図6-4-12	SX9002	石碑	0.86 (基礎除く)	加永二酉年 十二世大和尚 四月廿六日	12代住職	?~嘉永2(1849)	-	写真図版 6-3
図6-4-12	SX9003	石碑	0.65 (基礎除く)	八世大和尚	8代住職	?~天明4(1784)	-	写真図版 6-3
図6-4-12	SX9004	石碑	0.66 (基礎除く)	六世大和尚	6代住職	?~安永2(1773)	-	写真図版 6-3
図6-4-12	SX9005	無縫塔	0.43 (塔身のみ)	岩谷継雪首座 享保六正月十八日	岩谷継雪首座	?~享保6(1721)	-	写真図版 6-3
図6-4-12	SX9006	無縫塔	0.41 (塔身のみ)	鏡詔仙和尚 元禄9丙子天暦月廿六日 善岳立之	鏡詔仙和尚	?~元禄9(1696)	-	写真図版 6-3
図6-4	SX9007	無縫塔	0.47 (塔身のみ)	-	-	-	-	写真図版 6-3
図6-4-12	SX9008	無縫塔	0.48 (塔身のみ)	前諸持山中興十世惠照天大和尚神師 文政二己卯九月廿六日	10代住職 惠照天大和尚	?~文政2(1819)	-	写真図版 6-3
図6-4-12	SX9009	無縫塔	0.44 (塔身のみ)	前○○○山九世哲亭大和尚禪師	9代住職 哲亭大和尚	?~寛政5(1793)	-	写真図版 6-3
図6-5-12	SX9010	無縫塔	0.43 (塔身のみ)	七世無闇弘大和尚(塔身) 安永二癸巳年二月八日示寂(塔身) 四世 塚全大和尚(基礎)	7代住職 無闇弘大和尚	?~安永2(1773)	-	写真図版 6-4
図6-5-12	SX9011	無縫塔	0.49 (塔身のみ)	窟院前住海昌玉印和尚品位 元文四己未年九月二十三日	3代住職 海昌玉印和尚	?~元文4(1739)	-	写真図版 6-4
図6-5	SX9012	無縫塔	0.48 (塔身のみ)	-	-	-	-	写真図版 6-4
図6-5-13	SX9013	五輪塔	0.68	正面「頤」、左側「圓」、 裏側「頤」右側「圓」	-	-	-	写真図版 6-4
図6-5-13	SX9014	無縫塔	0.43 (塔身のみ)	十六世大和尚 明治十四己酉八月廿八日	-	-	-	写真図版 6-4
図6-5-13	SX9015	石碑	1.70	十七代繼山大和尚 明治三十四年 新六月廿一日 五月六日 設立主 阿部間クラ	17代住職 繼山大和尚	?~明治34(1901)	ST9131	写真図版 6-4
図6-5	SX9016	無縫塔	0.49 (塔身のみ)	二十二世天冲蘆雲大和尚	22代住職 天冲蘆雲大和尚	(昭和)	-	写真図版 6-4
図6-6-13	SX9017	石碑	0.80	加永六年 天山仙柱上座 三月十日	天山仙柱 天山空仙和尚の弟子	?~嘉永6(1853)	-	写真図版 6-5
図6-6-13	SX9018	丸石塔 (鉢彌形)	0.75	廣室妙念大姉 明治十二年五月七日	15代住職の妻	?~明治12(1879)	ST9136	写真図版 6-5
図6-6-13	SX9019	石祠	0.84 (基礎除く)	蘭庭元秀禪尼 元禄十一戊寅年三月八日	5代利尚の妻	?~元禄11(1698)	ST9106	写真図版 6-5
図6-6-13	SX9020	石祠	1.49	一應妙機信女	4代利尚の妻	慶長11(1606) ~ 承応3(1654)	ST9103	写真図版 6-5
図6-7-13	SX9021	石祠	0.81 (基礎除く)	百室道光神定門 前神代次兵衛利尚卒示 寛文十九庚戌歳十一月十四日	4代神代利尚	慶長8(1603) ~ 寛文10(1670)	ST9102	写真図版 6-5-6
図6-6-13	SX9022	石碑	0.64	繁室妙昌位	4代利尚の義母	-	ST9101	写真図版 6-6
図6-7-14	SX9023	丸石塔 (鉢彌形)	0.54 (塔身のみ)	天真禪童子	宮次郎 7代利尚の次男	?~享保11(1726)	ST9104	写真図版 6-6
図6-7-14	SX9024	丸石塔 (鉢彌形)	0.55 (塔身のみ)	楓窓覺夢信女	かう 6代利尚か7代利尚の娘	?~正徳4(1714)	ST9105	写真図版 6-6

表6-1 9区外表施設一覧

図版番号	道構番号	石塔		基	被葬者		直下の道構	写真図版番号
		構成	高さ(m)		名前・続柄	生没年		
図6-7-14	SX9025	石祠	0.83 (基礎除く)	一吼軒主御鑑定活神門 元禄九年丙天三月二十日逝	5代 神代利実	寛永3(1626)～ 元禄9(1696)	ST9108	写真図版 6-6
図6-8-14	SX9026	石碑	0.55 (塔身のみ)	涼薰禪童子	晴之助 6代利康の末子か 7代利亮の子	?～寛延3(1750)	ST9107	写真図版 6-6
図6-8-14	SX9027	石祠	0.75	龍室明與大助之塔 享保十四歳己酉三月六日卒去	7代利亮の妻	?～享保14(1729)	ST9109	写真図版 6-7
図6-8-14	SX9028	石祠	0.85	金剛軒曲山涼薰房士 文化二年乙丑六月十日卒 俗名神代宮右衛門掛部利經	9代 神代利經	?～文化2(1805)	ST9112	写真図版 6-7
図6-8-14	SX9029	石祠	0.70	真間院活鑑法水大助之塔 寛保四歲甲子正月二十五日卒□	6代利康の妻	?～寛保4(1744)	ST9114	写真図版 6-7
図6-8-14	SX9030	石碑	0.91 (塔身のみ)	桃林軒鑑外元老居士 元文三戊午天 夏五月朔日卒	6代 神代利康	寛文2(1662)～ 元文3(1738)	ST9115	写真図版 6-7
図6-8-14	SX9031	石碑	0.75	作夢童子	-	-	ST9118	写真図版 6-7
図6-9-14	SX9032	丸石塔 (位牌形)	0.55	紅雪禪童女	とと・とも 7代利亮の娘	?～享保7(1722)	-	写真図版 6-7
図6-9	SX9033	石碑	0.54	-	-	-	-	写真図版 6-7
図6-9-14	SX9034	石碑	0.54	享和元西天蠻巣庵 八月廿六日	10代住職 惠照天大和尚の弟子	?～享和元年(1801)	-	写真図版 6-7
図6-9	SX9035	石碑	0.47	-	-	-	-	写真図版 6-7
図6-9	SX9036	石碑	0.33	-	-	-	-	写真図版 6-7
図6-9	SX9037	石碑	0.52	-	-	-	-	写真図版 6-7
図6-9	SX9038	石碑	0.40	-	-	-	-	写真図版 6-7
-	SX9039	-	-	-	-	-	ST9117	写真図版 6-8
図6-9	SX9040	組合石塔	0.42	-	-	-	-	写真図版 6-8
図6-9-14	SX9041	石碑	0.54 (塔身のみ)	為幻身了□	-	-	-	写真図版 6-8
図6-9	SX9042	板碑	0.47	-	-	-	-	写真図版 6-8
図6-10	SX9043	宝鏡印塔	0.73	-	-	-	-	写真図版 6-8
図6-10	SX9044	宝鏡印塔	0.66	-	-	-	-	写真図版 6-8
図6-10	SX9045	宝鏡印塔	0.67	-	-	-	-	写真図版 6-8
図6-10	SX9046	宝鏡印塔	0.67	-	-	-	-	写真図版 6-9
図6-10	SX9047	宝鏡印塔	0.70	-	-	-	-	写真図版 6-9
図6-10	SX9048	組合石塔	0.64	-	-	-	-	写真図版 6-9

表6-1 9区外表施設一覧

因数番号	道構番号	石塔		基	被覆者		直下の道構	写真図版番号
		構成	高さ(m)		名前・姓柄	生没年		
岡6-10	SX9049	宝篋印塔	0.67	-	-	-	-	写真図版 6-9
岡6-10	SX9050	組合石塔	0.73	-	-	-	-	写真図版 6-9
岡6-10	SX9051	宝篋印塔	0.72	-	-	-	-	写真図版 6-9
岡6-10	SX9052	組合石塔	0.65	-	-	-	-	写真図版 6-9
岡6-10	SX9053	宝篋印塔	0.67	-	-	-	-	写真図版 6-9
岡6-10	SX9054	組合石塔	0.53	-	-	-	-	写真図版 6-10
岡6-11	SX9055	組合石塔	0.60	-	-	-	-	写真図版 6-10
岡6-11	SX9056	組合石塔	0.33	-	-	-	-	写真図版 6-10
-	SX9057	組合石塔	0.31	-	-	-	-	写真図版 6-10
-	SX9058	組合石塔	0.43	-	-	-	-	写真図版 6-10
-	SX9059	組合石塔	0.31	-	-	-	-	写真図版 6-10
-	SX9060	組合石塔	0.42	-	-	-	-	写真図版 6-10

2) 下部遺構と遺物

外表施設の記録化が終了した後、墓地移転のため石塔類が撤去された。SX9001については、基壇内部を調査する必要があるため、宝篋印塔・台石・石門・玉垣だけを先行して撤去し、基壇を構成する板石および竿石は調査に際し随時撤去することとした。SX9001以外の遺構については、外表施設を基礎石まですべて撤去した後、あらためて遺構検出を行い、下部遺構の調査を実施した。

調査および報告に際しては、墓と判るものについてはSTの遺構略号を、墓とは断定しかねるものについてはSXの遺構略号をそれぞれ付した。なお、火葬骨・髪・歯の埋納遺構および内容物の不明な埋納遺構についてもSTの遺構略号を付した。ここでは、上記の遺構の種別如何に関わらず、遺構番号順に報告する。

SX9001

基壇は竿石を4段重ね、内部に土石を充填し、上部に板石を敷き並べて造られている。調査に際しては、基壇上部の板石を除去した後、内部を調査しながら1段ずつ竿石を撤去する方法を繰り返した（写真図版6-13・14）。

基壇内部は上から1段目、2段目は主に花崗岩風化土が充填されていたが、3段目あたりから礫が増え始め、3段目下部から4段目下部（基底面）にかけては著しく多くの礫が充填されていた。また、基壇内部からは径3.0～4.0cmほどの玉石が若干数出土した。玉石は、墓地のいずれかの場所に敷かれていたものが、散乱した後、基壇を築いた際に混入したものと考えられる。つまり、基壇内部の土は、墓地内の土を集めて充填したものと推定される。ちなみに、基底面の中央（概ね宝篋印塔の真下）は、径0.50m程度の範囲が0.10m前後掘りくぼめられ礫が詰められていた。これは、上部に石塔など重量物が据え置かれることを意識した造作であるかもしれない。

基壇内部からは、竿石のおおよそ2段目のレベルで、寛永通宝と5円玉が、おおよそ3段目のレベルで、寛永通宝・1円玉・5円玉・10円玉・土師器小皿が、おおよそ4段目から基底面にかけて、寛永通宝・半錢玉・土師器小皿・土師器鉢等が出土した。また、竿石の1段目と2段目の間に寛永通宝と1銭玉が、2段目と3段目の間に10円玉が、それぞれ抑まれていた。

基壇の基底面より下位については、サブトレーナーを設定し調査したが何も検出されず、今回の調査では、基壇内部および基壇の下からは、内部主体や祭祀に関連するような施設は確認されなかった。なお、出土遺物のうち現行銭は、図示していない。

SX9001出土遺物（図6-30）

1・2は土師器小皿で、1は口縁部に油煤が付着しており、底部糸切である。3は土師器鍋で、外面に煤が付着している。1・3は竿石のおおよそ4段目から基底面にかけて、2はおおよそ3段目のレベルから出土した。

4・5・7・8・10～12・14は寛永通寶で、4・5・8・11・12は古寛永、10・14は新寛永である。9は銅銭であるが欠損しており、寶の文字しか読み取れないため、種類は不明である。15は鉄銭で、錯のため種類不明である。6・13は近代の1銭玉と半錢玉である。4～6は竿石のおおよそ1段目、8・9はおおよそ2段目、10はおおよそ3段目、11～15はおおよそ4段目から基底面にかけて出土した。

ST9101（図6-17）

調査区の最北端、外表施設SX9022からやや南西にずれた地点に位置する墓である。円形の墓壇に陶器の甕を入れ、石蓋を載せる。墓壇の大きさは径約0.70m、検出面からの深さは0.41mである。甕の中からは古銭2枚および火葬骨が出土した。また、甕の下には古銭が5枚重ねて置かれていた。

ST9101出土遺物（図6-30）

16は肥前産の陶器甕で、蔵骨器に転用されていた。肩部に縄状の突帯2条を貼り付け、白土を流し掛けて装飾する。17・18は棺内、19～23は棺外から出土した寛永通寶で、17・20は古寛永、その他のものは新寛永で、

新寛永のうち 18・19 は文鏡である。

ST9102 (図 6-17)

調査区の中央部、やや北寄りにあり、外表施設 SX9021 のほぼ直下に位置する墓である。方形の墓壙で、墓壙の北端に皿で蓋をした甕が埋納されていた。皿・甕ともに陶器である。墓壙の大きさは約 0.62×0.61 m で、検出面からの深さは約 0.29 m である。甕の中からは、火葬骨を入れた磁器の小鉢と蓋付の曲物が出土しており、曲物の中に小鉢が納められていたものと考えられる。副葬品は出土しなかった。

なお、墓壙東寄りの遺構検出面より高い位置から陶器の線香立が出土したが、墓壙埋土に所属するのか、表土中のものなのか判然としなかった。

ST9102 出土遺物 (図 6-30・6-31)

24 は肥前産の陶器甕で、全体に鉄釉を施し、肩部には緑釉を流し掛けて装飾している。外面に格子目状の当て具・叩き具痕が残る。25 は肥前産の陶器皿で、内面は象嵌文様を施し、見込みに 4箇所の胎土目痕が残る。26・27 は曲物とその蓋で、身は側板の一部、蓋は全体のおよそ 1/2 が残存している。蓋は、宝珠形のつまみと直方体の飾りおよび蓋部からなり、つまみははずれて出土した。つまみの頂部から飾りにかけて穿孔されていることから、つまみと飾りを接続するための何らかの付属品があったと考えられる。

28・29 は肥前産の白磁蓋付丸形碗で、嬉野不動山で生産された可能性がある。30 は肥前産の陶器線香立て、内面底部から外面胴部上半にかけて黒褐釉を施し、高台は露胎である。

ST9103 (図 6-17)

調査区の中央部、やや北寄りにあり、外表施設 SX9020 のほぼ直下に位置する墓である。円形の墓壙で、径約 0.30 m、検出面からの深さは 0.22 m である。陶器の甕の中から、火葬骨を入れた磁器の碗と小鉢が出土している。また、甕の中には、蓋として使用されたと思われる陶器の皿が落ち込んだ状態で出土した。なお、副葬品は出土しなかった。

ST9103 出土遺物 (図 6-31)

31 は肥前産の陶器甕で、藏骨器の外容器に転用されていた。外面底部に胎土目痕が残る。32 は肥前系の染付磁器皿である。33 は肥前産の染付磁器蓋付小鉢で、藏骨器として用いられていた。蓋はなく、口縁部を打ち欠いている。34 は肥前産の白磁丸形碗で、火葬骨を入れた 33 に被せられていた。

ST9104 (図 6-18)

調査区の北端近く、やや西寄りにあり、外表施設 SX9023 の直下に位置する墓である。一見、二段掘りのようにも見えるが、崩れ等のために出来上がった形であろう。方形の墓壙で、検出面における大きさは約 1.20×1.10 m、底面は概ね 0.84×0.82 m、検出面からの深さは約 1.35 m である。墓壙からは、鉄釘および人骨が出土した。副葬品は出土しなかった。

ST9105 (図 6-18)

調査区の北端近く、やや西寄りにあり、外表施設 SX9024 の直下に位置する墓である。方形の墓壙で、検出面における大きさは 1.16×0.94 m、底面の大きさは 0.87×0.72 m、検出面からの深さは 1.43 m である。墓壙からは、鉄釘および人骨が出土した。副葬品は出土しなかった。

ST9106 (図 6-18)

調査区のほぼ中央にあり、外表施設 SX9019 の直下に位置する。ST9108 とともに方形の石室を有する墓で、掘

り込みの中に石を積上げ構築されている。掘り込みの東側の一部は、ST9144と重複し、ST9106が古い。掘り込みの規模は約2.0m四方で、石室の内寸は0.75m四方、最上段の石から底面までの深さは1.25mである。石室からは、鉄釘、木片（棺材の一部）および人骨が出土したが、副葬品は出土しなかった。なお、石室の上には、蓋と外表施設SX9019の基礎を兼ねた大型の自然石（花崗岩）が載せられている。

ST9107（図6-19）

調査区のほぼ中央、ST9106とST9108の間にあり、外表施設SX9026の直下に位置する墓である。片側二段掘りの方形の墓で、墓壇全体の規模は約1.32×1.02m、2段目の規模は、0.93×1.02m、底面の大きさは0.83×0.69m、検出面からの深さは、0.93mである。墓壇からは、鉄釘、磁器の小徳利、同じく磁器の緒縛もしくは根付、刀、古銭4枚および人骨が出土した。

ST9107出土遺物（図6-31）

35は肥前産の白磁小徳利で、型押成形され底部は露胎である。36は肥前産の色絵磁器で、人物形の緒縛もしくは根付と考えられ、型押成形され底部は露胎である。また、額や鳥帽子・着衣の表現を赤・金の色絵具で上絵付し、背面から底部にかけて穿孔を施している。37は刀で、被葬者が小児であるので、懐刀であるのかもしれない。刃部分から2つに折れた状態で出土した。刃部の大半は欠損しており、劣化が著しく鞘と鍔着している。また、鷲は青銅製で、大部分が欠損している。梢円形で透かしを施している。切羽・縁金は青銅製、鷲口は木製である。さらに、柄には、装飾用に用いられた副板が付着し残存しており、大小の円形の打出文様がみてとれる。なお、刀の図面は、残存状態の良い面を図示しているため、刃・鞘部分は差裏、柄は差表となっている。38～41は寛永通寶で、39・40は古寛永、38・41は新寛永である。

ST9108（図6-19）

調査区の中央部、やや西寄りにあり、外表施設SX9025の直下に位置する墓である。ST9106とともに方形の石室を有する墓で、掘り込みの中に石を積上げ構築されている。掘り込みの規模は約2.00m四方で、石室の内寸は0.95～0.90m、最上段の石から底面までの深さは0.95mである。石室からは、鉄釘、古銭2枚および人骨が出土した。他に副葬品は出土しなかった。なお、石室の上には、蓋と外表施設SX9025の基礎を兼ねた大型の自然石（花崗岩）が載せられていた。

ST9108出土遺物（図6-32）

42・43は寛永通寶で、ともに古寛永である

ST9109（図6-19）

調査区の南西部、中央寄りにあり、外表施設SX9027の直下に位置する墓である。方形の墓壇で、検出面での大きさは1.52×1.27m、底面は約1.10×0.84m、検出面からの深さは約1.61mである。墓壇からは鉄釘の他、陶器の華瓶、人骨が出土した。なお、墓壇最上部から、髪を入れられた磁器の蓋付碗が出土したが（ST9110）、墓壇を埋め戻す際に同時に埋納されたものか、ある時間が経過した後、改めて埋納されたものかは判然としない。

ST9109出土遺物（図6-32）

44は肥前産の陶器華瓶で、多久・武雄周辺で生産された可能性がある。胴くびれ部より上半は灰釉の上に白土で装飾し、下半には錦釉を施している。

ST9110（図6-19）

調査区の南西部、中央寄りにある埋納遺構で、ST9109と重複する位置から磁器の蓋付碗が出土した。径約0.20

～0.30mの円形の掘り方をもつよりもみえるが、明確ではない。碗には髪が入れられていた。

ST9110 出土遺物（図6-32）

45は肥前産の白磁蓋、46は肥前産の白磁碗である。蓋と碗では大きさが合わないため、別個体の蓋と碗を組み合わせたものであろう。

ST9111（図6-20）

調査区の南西部、やや中央寄りにあり、ST9109の南西側に位置する墓である。方形の墓壙で、検出面での大きさは1.12×1.11m、底面は0.79～0.81m四方である。検出面からの深さは約1.06mである。墓壙からは鉄釘が出土したが、副葬品は出土しなかった。また、歯が数点残存していたが、採取できなかった。なお、当墓壙に対応する明確な外表施設はなかったが、調査前には数点の自然石がとどまっており、これらの自然石が外表施設の一部だったのかもしれない。

ST9112（図6-20）

調査区の南西部にあり、外表施設SX9028の直下に位置し、円形の墓壙をもち、陶器の大型の甕を棺身とし、同じく陶器の鉢を蓋として用いた墓である。検出面での大きさは径約1.20m、底面は径0.40～0.50m、検出面からの深さは約2.57mである。棺内部からは、布袋に入った煙管、毛抜、古銭27枚以上および人骨が出土した。遺物は、散乱せず1箇所からまとめて出土した。

ST9112 出土遺物（図6-32・33、写真図版6-26・27）

47は肥前産の陶器鉢で、全体に鉄釉を施し、梢の蓋として転用している。48は肥前産の陶器甕で、全体に鉄釉を施し、肩部から胴部にかけて3箇所に3～4条の沈線を巡らす。49は青銅製の毛抜で、全体に鍍銀を施し、外面には桔梗文様の毛彫、留金具には菊花が表現されている。50・51は煙管の雁首と吸口で、ともに青銅製。残存する羅字は竹製である。煙管は、布袋に入った状態で出土したが、羅字の中ほどで2つに折れている（布袋=写真図版6-62）。なお、吸口には布片が付着している。52～58は寛永通寶で、54は古寛永、52・53・55・56は新寛永、新寛永のうち56は元字錢である。59～64は鉄錢と銅錢が複数枚、錯着したものである。錢のうち図示できなかったものは写真のみ掲載している（写真図版6-26-56）。

ST9114（図6-21）

調査区の南西部、調査区南側の急斜面の裾にあり、外表施設SX9029の直下に位置する墓で、北隣にはST9115がある。方形二段掘りの石蓋を有する墓で、1段目は1.49×1.30mで検出面からの深さは約1.02m、2段目は約0.90×0.80m、深さ約0.96mである。蓋石は約0.9×0.7m、厚さ約0.1mの自然石の板石で、墓壙の大きさとほとんど差がないため、調査時は墓壙に落ちかけの状態であった。墓壙からは、鉄釘、古銭8枚および人骨が出土した。なお、古銭8枚は人骨の膝に載った状態で重なって出土した。

ST9114 出土遺物（図6-33）

65～72は寛永通寶で、68は古寛永、その他は新寛永である。

ST9115（図6-21）

調査区の南西部にあり、外表施設SX9030の直下に位置する墓である。南隣にはST9114がある。方形二段掘りの石蓋を有する墓で、1段目の大きさは1.50×1.39mで検出面からの深さ0.57m、2段目の大きさは0.70×0.66m、深さは0.98mである。蓋石は約1.00×0.70m、厚さ0.10mほどの自然石の板石である。蓋石が多少‘いびつ’であるため、墓壙との間に隙間が生じており、隙間を埋めるためであろうか0.10～0.20m程度の石

数個を充填している。

また、墓壙底面には、0.15～0.30 mほどの板石が3個敷かれているが、底面すべてを覆っているわけではない。墓壙からは、鉄釘、木片（棺材の一部）、布片、扇子および人骨が出土した。

ST9115 出土遺物

ST9115 からは、扇子が出土したが、骨部分がほとんど残存せず、表面に塗布された赤漆塗膜が断片となって出土したのみである（写真図版 6-27-76）。

ST9117（図6-22）

調査区の西端近くにあり、外表施設 SX9039 の直下に位置する墓で、西隣には ST9118 がある。方形二段掘りの墓壙をもち、1段目の大さは 1.90 × 1.79 m で検出面からの深さ 0.80 m、2段目の大さは 0.85 × 0.84 m で、深さは約 1.30 m である。墓壙からは、鉄釘、古銭 20 枚以上の他、人骨が出土した。なお、古銭は人骨の頭部の下から連なった状態で出土した。古銭には布片が付着しており、袋に入れられるか、布で包まれていたものと考えられる。

ST9117 出土遺物

写真図版 6-27-74・75 は銅銭である。75 は 15 枚以上が接着し、74 は 5 枚が接着したもので、いずれも文字が判読できないため種類は不明である。両者とも布片が付着し、74 の孔には錢を束ねていた紐が残存する。

ST9118（図6-22）

調査区の西端にあり、外表施設 SX9031 の直下に位置する墓で、東隣には ST9117 がある。方形二段掘りの墓壙をもち、1段目は 1.85 × 1.58 m で、検出面からの深さ約 0.35 m、2段目は約 0.87 × 0.85 m で、深さは約 1.35 m である。2段目は、1段目の北東側に片寄って掘られている。墓壙からは、鉄釘、古銭 23 枚の他、人骨が出土した。古銭については、連なった状態ではないが、1箇所からまとまって出土した。

なお、平面図において、墓壙の1段目の平面形は台形であるが、これは墓壙北西側を掘り過ぎて、本来の形状の追及が困難になったことによるもので、本来は方形であったと推定される。さらに、断面見通し図において、墓壙1段目の深さに大きな差があり、北側で深く、南側で浅くなっているが、これは墓壙1段目の北側を掘り過ぎたため、本来は南側の深さと同程度であったと推定される。

ST9118 出土遺物（図6-33）

73～95 は寛永通寶で、73・74・81・87 は古寛永、その他のものは新寛永で、新寛永のうち 77・79・80・85 は文銭、90・95 は元字銭である。

ST9119（図6-20）

調査区の東端近くにあり、外表施設 SX9003 のやや北にずれた地点に位置する。陶器の甕を棺身とし、同じく陶器の鉢を棺蓋とする。墓壙は円形で、検出面での大きさは径約 0.90 m、同じく検出面からの深さは 0.64 m である。墓壙底部は、深いレンズ状である。

棺内からは、磁器の碗・小杯 2 点・小皿、1.0～5.0cm ほどの石 2 個の他、火葬骨が出土した。また、棺底部からは、痕跡程度ではあるがワラ状の植物繊維が出土した。碗については、口縁部を打ち欠いており、欠けた破片が棺内から出土した。なお、棺内から出土した 2 個の石については、この石よりも下位から棺蓋の破片が出土しないことから、当初から棺内に入れられていたものと考えられる。

棺外からは、土師器の小皿が 3 点出土した。うち 2 点は半分に割られていた。いずれも墓壙底部より浮いた位置で出土したことから、埋め戻しの際（甕埋置の際）に埋められたものと考えられる。

ST9119 出土遺物（図6-34）

96は肥前産の陶器皿で、鉢形に開く口縁部には、銅緑釉の上に白土を掛け波状の刷毛目で装飾し、内外面胴部から底には鋸歯を施している。97は肥前産の陶器甕で、内外面に格子目文の當て具・叩き具痕が残る。98～100は土師器小皿で、99は底部糸切である。101は肥前産の白磁小杯、102は肥前産の染付小皿、103は肥前産の染付小杯である。104は肥前産の色絵磁器で、古九谷様式の丸形碗である。外面に州浜や扇等を上絵付けし、高台置付には砂目痕が残る。

ST9121（図6-23）

調査区の南東部にあり、外表施設SX9008・SX9009の南側に位置する墓である。北側に位置するST9122より新しい。方形の墓壙で、検出面での大きさは1.24×1.22m、検出面からの深さ約1.70m、底面の大きさは0.72×0.71mである。墓壙からは人骨の他は何も出土しなかった。

ST9122（図6-23）

調査区の南東部にあり、外表施設SX9008～SX9011の直下に位置する墓である。四方でST9121・ST9123・ST9124・ST9127と重複するが、いずれの遺構よりも古い。円形の墓壙で、検出面での径は1.50～1.80m、同じく検出面からの深さ約1.75m、墓壙底面は径0.55～0.65mである。墓壙の壁面には凹凸があるが、これは墓壙を掘削した箇所が花崗岩風化土の硬い岩脈と風化が進行した軟質土とが互層をなしていることから生じたものと考えられる。

墓壙からは、人骨の他、水晶製の数珠玉12個とガラス製玉1個が出土した。数珠玉はまとまりをもたず、ばらばらに出土した人が骨に絡むような状態であったことから、少なくとも遺体を持たせるか、あるいは遺体に載せられていたものと考えられる。なお、墓壙が円形であること、鉄釘が出土していないことから、棺は蓋を釘打ちしない丸桶だったと推定される。

ST9122 出土遺物（図6-34）

105～115・117・118は水晶製の数珠玉で、117には鍍金された青銅製金具が付属する。この金具には環があり、房等を付けていたと考えられる。また、117は径2.1cm、118は径1.6cmと大型で、T字状に穿孔している。その他の玉は径0.9～1.0cmと小型である。116はガラス製の玉であるが、水晶製の玉と共に数珠玉を構成したものか、他の用途であった可能性も考えられる。

ST9123（図6-23）

調査区の南東部にあり、外表施設SX9008のやや北側に位置する墓である。南側で重複するST9122より新しい。円形の墓壙で、検出面では径1.00～1.05m、底面での径は0.84～0.92m、検出面からの深さは約0.89mである。墓壙からは鉄釘と人骨が出土した。

ST9124（図6-24）

調査区の南東部にあり、外表施設SX9012・SX9013のやや南側に位置する墓である。方形の墓壙をもち、検出面での大きさは1.57×1.54m、底面では1.34×1.32m、検出面からの深さは1.43mである。墓壙西端にはST9125があるが、重複関係にあるのか、墓壙を埋める際に埋納したのかは判然としなかった。重複関係にあるのであれば、ST9125のほうが新しいことになる。墓壙からは、青銅製の絡子環・吊金具、不明鉄製品・漆の塗膜片・古銭30枚・鉄釘・人骨が出土した。鉄釘以外の遺物は、人骨に絡んで出土しており、古錢については1箇所からまとまって出土した。

ST9124 出土遺物（図6-35）

119～148は寛永通寶で、121・123・124・127・132・133・136・137・146・147は古寛永、その他は新寛永で、新寛永のうち128・129・148は文銭である。

149は不明鉄製品で、仏具もしくは禪僧の持物の可能性がある。長方形の板を山形に折り曲げて成形し、全体の中ほどには段があり、握り部を作り出しているように感じられる。表面に木片・織物片が付着する。150・151は青銅製の吊金具と格子環（禪宗系統で用いられる袈裟に付属する環）である。150は格子環を掛け吊り下げるための吊金具で、先端部がわずかに欠損している。150・151ともに織物が付着し、150には糸が残存する。

写真図版6-29-156は漆の塗膜片で、図化はしていない。いずれも漆器の一部であった可能性があるが、木地部分は腐朽し残存しない。

ST9125（図6-24）

調査区の南東部にあり、外表施設SX9014のやや南側に位置する。ST9124の墓壙西端から出土した埋納遺構で、磁器の藏骨器であるが、ST9124と重複関係にあるのか、墓壙を埋める際に埋納されたものかは判然としなかった。なお、藏骨器には火葬骨が入れられていた。

ST9125 出土遺物（図6-35）

152・153は肥前産の白磁蓋付小壺である。

ST9127（図6-24）

調査区の南東部にあり、外表施設SX9010・SX9011の北側に位置する墓である。墓壙の南東側で重複するST9122および西側で重複するSX9128より新しい。方形の墓壙をもち、検出面での大きさは1.55×1.22m、底面の大きさは0.90×0.84m、検出面からの深さは約1.79mである。墓壙からは、鉄釘および人骨が、墓壙埋土からは白磁の水滴が出土した。

なお、墓壙中央でST9145（白磁の藏骨器）が、同じく墓壙東部でST9146（陶器の甕）・9147（陶器の藏骨器）が出土した。いずれも墓壙の中心近くから出土しており、墓壙を埋め戻す際に埋納されたものと考えられる。

ST9127 出土遺物（図6-35）

154は肥前産の白磁唐人形水滴で、型押成形しており、唐人の両肩に1個所ずつ孔を設けている。

ST9128（図6-25）

調査区の南東部にあり、外表施設SX9013の北側に位置する、性格不明遺構である。円形の土壙で検出面での径は0.53～0.55m、底面の径は0.18～0.20m、検出面からの深さは約0.20mである。埋土から焼骨が1片出土した。なお、重複するST9141より古い。さらに西側でST9143、東側でST9127と重複し、いずれよりも新しい。

ST9130（図6-24）

調査区の中央部南寄りにあり、外表施設SX9014・SX9015の直下に位置する墓である。西側で重複するST9131より古く、北側で重複するST9143より新しい。方形の墓壙をもち、検出面での大きさは南北で約1.55m、東西は推定約1.30mである。墓壙底面の大きさは、南北で0.76m、東西もほぼ同程度であると推定される。検出面からの深さは1.81mである。墓壙からは、土師器小皿、銅製品（いわゆる雁首銭）、鉄釘6枚（？）、鉄釘および人骨が出土した。

なお、人骨については、頭蓋骨が見当たらないが、重複するST9131からは頭蓋骨が2個出土しており、ST9131の墓壙を掘削する際に出土したST9130の骨を再埋納したものと考えられる。

ST9130 出土遺物（図6-36）

155は青銅製品で、いわゆる雁首錢である。156は土師器小皿である。写真図版6-29-160~162は鉄錢で、160は、2枚ほどが錯着しているが、枚数は錯のため不明である。161・162は各2枚が錯着している。

ST9131（図6-24）

調査区の中央部南寄りにあり、外表施設SX9015の直下に位置する墓である。東側で重複するST9130より新しい。方形の墓壙をもち、検出面での大きさは1.05×0.91m、底面の大きさは0.69×0.64m、検出面から底面までの深さは約2.15mである。墓壙からは、鉄釘、扇子、不明金属製品、ガラス製のボタン6個、ガラス製の玉、金モール、人骨が出土した。ボタンおよび金モールについては、肋骨付近から出土した。

人骨については、頭蓋骨が2個出土したが、これは、墓壙を掘削する際、隣接するST9130の骨が出土したため、再埋納したものと考えられる。なお、ST9130の頭蓋骨が潰れていないこと、さらに、頭蓋骨の上にはST9131の大腿骨が載っていることから、この頭蓋骨はST9131の棺に入れられて再埋納されたものと推定される。

ST9131 出土遺物（図6-36）

157~162はガラス製ボタンである。163はガラス製玉で、琥珀色を呈する。玉はこの1点しか出土しておらず、どのような用途であるのか不明である。164は不明金属製品（真鍮製か）で、用途は不明である。165は扇子で、要付近より下部は欠損している。骨は竹製で、親骨の表面には赤漆、中骨基部の扇面に隠れない部分には赤色顔料を塗布しており、また親骨の3箇所に透かし飾りがある。なお、扇面の紙は残存状態が悪く、図化に耐えなかつたため、骨部分のみ図示した。金モールは図化できなかつたので写真を掲載しておく（写真図版6-29-173）。

ST9132（図6-22）

調査区の中央部南端にあり、外表施設SX9015・SX9016の南側に位置する埋納遺構で、0.20×0.19m、深さ0.20mの小穴に白磁の藏骨器を埋納している。藏骨器の中からは何も出土しなかつた。

ST9132 出土遺物（図6-36）

166・167は、肥前産の白磁蓋付小壺である。

ST9133

調査区の中央部南寄りにあり、SX9016の直下に位置する墓である。この墓については、墓地移転に先行し遺族個人で改葬が行われており、調査の対象とはしていないため、墓壙等の記録化は行っていない。

ST9134

調査区の中央部南寄りにあり、ST9133とST9135の間で出土した白磁の藏骨器である（写真図版6-20）。原位置は保たれていないが、遺構番号を付した。藏骨器には火葬骨が入れられていた。

ST9134 出土遺物（図6-36）

168・169は、肥前産の白磁蓋小壺である。

ST9135（図6-22）

調査区の中央部南寄りにあり、外表施設SX9018の北東側に位置する。ST9136に隣接する位置である。0.38×0.21m、深さ0.11mの楕円形の小穴で、内部からは陶器の土瓶が出土した。土瓶の中からは何も出土しなかつたが、土瓶を利用した胞衣埋納の可能性がある。

ST9135 出土遺物（図6-36）

170・171は肥前産の陶器土瓶で、蓋・身とともに外面は銅縁釉を施し、身の外面底部には煤が付着している。

ST9136（図6-25）

調査区の中央部南寄りにあり、外表施設SX9018の直下に位置する墓である。円形の墓壙で、検出面での径は約0.90m、底面での径は約0.70m、出面からの深さは2.20mである。墓壙からは木製の櫛、古銭46枚および人骨が出土し、鉄釘は出土しなかった。古銭は墓壙底部に散らばっているだけでなく、頭蓋骨に載った状態のものもあった。また、頭蓋骨上の古銭に接して布が残存しており、銭に通して束ねていた布であった可能性もある。

なお、墓壙が円形であること、鉄釘が出土していないことから、棺は蓋を釘打ちしない丸桶だったと推定される。さらに、頭蓋骨の上に載った状態の古銭は、当初から頭部に載せられていた銭が、腐朽に伴う人骨の移動に関わらず原位置を保ったと考えるより、棺蓋の上に置かれていた銭が落下したと考えたほうがよさそうである。ただし、棺蓋上に置かれていたのは、一部の銭だったのか、すべての銭だったのかは判然としない。

ST9136 出土遺物（図6-36・37）

172～190・192～218は寛永通寶で、181・182・204・205・206は古寛永、その他のものは新寛永である。新寛永のうち215は長字銭、192・193には布片が付着する。191は摩耗しており種類は不明である。219は木製の櫛で、全体の1/2程度が残存する。樹種は不明である。

ST9137（図6-25）

調査区の中央部や東寄りに位置する、ST9138の墓壙内に埋納されていた白磁の蓋付碗である。碗には、髪を入れられていた。墓壙のやや北寄り、検出面から0.35mの深さから出土した。ST9138の検出の際、掘り方が確認されなかつたことから、ST9138の墓壙を埋め戻す際に、埋納されたものと推定される。

ST9137 出土遺物（図6-37）

220・221は肥前産の白磁蓋付碗である。

ST9138（図6-25）

調査区の中央部、やや北東寄りに位置する墓である。直上および近接した位置に外表施設はない。方形二段掘りの墓壙をもち、2段目は南東側に偏って掘られている。墓壙1段目の検出面での大きさは1.19×1.11m、同じく検出面からの深さは0.21m、2段目は0.80×0.76m、深さ1.99m、検出面から底部までの深さは2.20m、底面は0.58×0.55mの隅丸方形である。

墓壙からは、鉄釘、ガラス製の数珠玉66点、布で包まれた古銭11枚（文久永寶6枚・天保通寶5枚）、木製の煙管筒に入った状態の煙管および人骨が出土した。数珠玉はばらばらの状態、古銭は墓壙底面近くから銷着した状態、煙管は墓壙底面から若干浮いた位置から煙管筒に入ったまま、2つに折れた状態でそれぞれ出土した。さらに、人骨の下からは間隙をおかず植物の葉が出土しており、葉は棺底に敷かれていたものと推定される。

なお、墓壙内やや北寄り、検出面から0.35mの深さから磁器の蓋付碗が出土し（ST9137）、中には髪を入れられていたが、これは墓壙を埋め戻す際に埋納したものと推定される。

ST9138 出土遺物（図6-37・6-38）

222～227は文久永寶、228～232は天保通寶で、すべて布袋に入った状態で出土した。233は煙管で、雁首・吸口は青銅製、羅宇は竹製である。234の中に入れられ、2つに折れた状態で出土した。

234は木製の煙管筒で、中に入っていた煙管とともに2つに折れて出土した。蓋・身とともに、一本を割り抜いて作られており、外面には、極めて細密な格子目文様を彫り込んでいる。また、蓋の縁金には筒と煙草入とを結び

付けるための紐と緒縫を装着している。235～301はガラス製数珠玉である。235は径1.35cm、236は径1.60cmと大型で、236はT字状の孔を設けている。その他の玉は径0.9～1.0cmと小型である。

ST9141（図6－25）

調査区の南東部にあり、外表施設SX9013の北側に位置する。重複するSX9128より新しい。0.3×0.2mほど
の楕円形の小穴の中に陶器の藏骨器が埋納されていた。SX9128を調査する過程で出土したため、ST9141本来の
掘り方は形状が不明な部分もあるが、下部においてSX9128のものとは異なる埋土が確認されたことから、重複
関係にあることが判明した。藏骨器には火葬骨が入れられていた。

ST9141出土遺物（図6－38）

302・303は肥前産の陶器蓋付小壺で、外面に白化粧土を施す。

ST9143（図6－25）

調査区の中央部、やや東寄りにあり、外表施設SX9014の北側に位置する墓である。東側でSX9128、西側で
ST9144、南側でST9130と重複するが、いずれの遺構よりも古い。方形の墓壙をもつが、他の遺構と重複しており、
検出面での大きさは不明である。推定すれば、南北1.1×東西0.90mほどになろうか。墓壙底面の大きさは0.63
×0.53m、検出面からの深さは1.08mである。

墓壙からは、鉄釘、鉄製の糸切鉄、巻貝・二枚貝、掛軸の木製八双と軸棒、磁器製の小皿、ガラス製の玉1点・
人骨が出土した。なお、二枚貝には微量の赤色顔料が残存しており、紅入れであったことがうかがえる。また、玉
については1点しか出土していないことから、数珠玉と考えるより、掛軸に付属する飾りであると考えた方が自然
であろう。

ST9143出土遺物（図6－38）

304は掛軸の木製八双、305は掛軸の木製軸棒である。304（八双）には一対の青銅製鎗（吊手と座金具）が付
属する。304・305のそれぞれに金糸が織り込まれた裂（綱）の一部が残存する。ともに樹種は不明である。

306は鉄製の鉈尾と考えられ、薄い鉄板の三辺の端を折り曲げている。表面に木質が付着する。307はガラス
製玉で、T字状の孔を設ける。308は二枚貝でシジミガイ、309は巻貝でツメタガイと考えられるが専門家の鑑
定を受けたものではない。308の内側には微量の赤色顔料（紅）が残存しており、紅入として用いられたものであ
ろう。310は鉄製の鉈で、布片が付着している。311は肥前産の白磁小皿で、型押成形され底部は露胎である。

ST9144（図6－23）

調査区の中央部、やや東寄りにあり、外表施設SX9015の北側に位置する墓である。東側でST9143、西側で
ST9106と重複するが、どちらの遺構よりも新しい。おおむね楕円形の墓壙をもち、検出面での大きさは0.92×0.62
m、墓壙底部は方形で0.43×0.41m、検出面からの深さは0.86mである。墓壙からは、鉄釘と人骨が出土した。

ST9145（図6－24）

調査区東端近くにあり、外表施設SX9010・SX9011の北側に位置する。ST9127の墓壙のほぼ中央、深さ0.45
mの地点から出土した陶器の藏骨器である。ST9127と重複関係にある独立した遺構なのか、墓壙を埋め戻す際に
埋納したもののかが判然としなかったため、独立した遺構番号を付与している。藏骨器の中には人骨（歯）が入
れられていた。

ST9145出土遺物（図6－39）

312・313は肥前産の蓋付小壺で、外面に白化粧土を施している。

ST9146（図6-24）

調査区の東端近くにあり、外表施設SX9010・SX9011の北側に位置する。ST9127の墓壙の東寄り、深さ0.35mの地点から出土した陶器の甕である。陶器の擂鉢を蓋としていたようで、破片が甕の中に落ちこんでいた。甕の内部には火葬骨が入っており、火葬骨の上に別の蔵骨器（ST9147）が載った状態で出土した。ST9127と重複関係にある独立した遺構なのか、墓壙を埋め戻す際に埋納したのかが判然としなかったため、独立した遺構番号を付与している。

ST9146出土遺物（図6-40）

314は肥前産の陶器擂鉢で、内外面の上半部に鉄軸を施す。315は肥前産の陶器甕で、肩部に縄状突帯1条を貼り付け、その下に2条の沈線をめぐらす。外面底部に3箇所の胎土目痕、内面に格子目状の當て具痕が残る。

ST9147（図6-24）

調査区の東端近くにあり、外表施設SX9010・SX9011の北側に位置する。ST9127の墓壙から出土した陶器の甕（ST9146）の中から出土した。白磁の蔵骨器で、中に火葬骨が入れられていた。説明の際の煩雑さを避けるため、独立した遺構略号を付与している。蔵骨器は、ST9146の火葬骨に載った状態で出土した。

ST9147出土遺物（図6-40）

316・317は肥前産の白磁蓋付小壺である。

ST9148

調査区の南東部、外表施設SX9016とSX9017の間に位置する白磁の蔵骨器である。原位置は保たれていないが、遺構番号を付した。内部には、火葬骨が入れられていた。

ST9148出土遺物（図6-40）

318・319は肥前産の白磁蓋付小壺で、明治以降に製作されたものである。

SX9149（図6-26）

調査区の中央部、やや北寄りにあり、外表施設SX9020・SX9021の西側に位置する埋納遺構である。平面は0.80×0.40mの楕円形で、検出面からの深さは0.40m、底面は径0.30×0.35mのいびつな楕円形である。遺構は、南側が深く掘られており、陶器の甕が出土した。甕は、同じく陶器の皿で蓋をされていた。甕の内部には、底部から約18cmの高さまで炭が充填されており、中央付近から8本の筒状の炭化した遺物が炭の中にまとめて立てられた状態で出土した。遺物は、触れるだけで破碎するほど劣化が進んでいた。

この遺構・遺物を一瞥すると、経典を埋納した経塚であるように思えることから、炭化した筒状の遺物について赤外線スキャナを用いて調査したが、文字等は読み取れなかった。さらに、詳細に検討するため、九州国立博物館においてX線CTスキャン装置で状態や断面調査を実施した。その結果、幅20cm前後の紙と思われる巻物であること、巻物は計8巻がまとめられた状態で付着していること、それぞれの巻物に軸はなく、最も外側はやや厚みのあるもので巻かれていることなどが判った。

これらのことから総合すると、SX9149は巻物を埋納した埋納遺構である可能性が高いが、はたして巻物に書かれているものが経典なのかどうかは不明である。

SX9149出土遺物（図6-40）

320は肥前産の二彩手陶器鉢で、鉄軸を挿いて櫛描き波状文を施している。321は肥前産の陶器甕で、全体に鉄軸を施しており、肩部には白化粧土を流し掛けて装飾している。

検出面出土および表採遺物（図6-40、写真図版6-8）

322は肥前産の陶器蓋である。323は肥前産の青磁壺としたが、火入や瓶の可能性もある。324は肥前産の染付磁器碗である。325は肥前産の陶器鉢で、322と同一個体と考えられる。326は肥前産の陶器土瓶で、外面底部に煤が付着している。327は肥前産の染付磁器皿である。

なお、検出面出土および表採の銭は、拓本をとっておらず、写真のみ掲載している。写真図版6-32-336・337・339は寛永通寶で、いずれも新寛永、339は文銭である。写真図版6-32-338は文久永寶である。写真図版6-32-340は1/3程度が欠損しているが、おそらく元豊通寶であろう。

SX9001周辺の出土遺物（図6-41）

328～330・332～340・342～350は寛永通寶で、335・340・343・347は古寛永、その他は新寛永で、新寛永のうち342は文銭、345は元字銭である。331は昭武通寶、341は文久永寶である。

3 まとめ

東畠瀬遺跡9区（宗源院墓地）では、神代勝利とその一族、また宗源院歴代住職の墓を調査した。

宗源院墓地の調査は、墓地の移転に先だって、まず墓石・石塔類等の外表施設を記録化し、これらを撤去した後、改めて遺構検出を行い墓壙等の下部遺構について調査した。以上のような手順で調査を行ったため、ここでも外表施設や下部遺構等の項目に分けて概要を説明する（1）。

外表施設について

宗源院墓地で確認された外表施設（墓石・石塔類）は、自然石の配石も含めると総数60基である。

外表施設は、宝篋印塔、有耳五輪塔、無縫塔、石祠、丸石塔（位牌形）、有蓋類型板碑、自然石および宝篋印塔や五輪塔等の各部材が組み合わせられた石塔に大別できる。外表施設には、墓碑銘から判断できるものとして、神代家一族と歴代住職の墓がある。調査区の東端付近には、神代勝利墓、東端の石垣周縁には部材が組み合わせられた石塔群が分布する。また、概ね中央部から南西部には神代家一族の各墓、南東部には歴代住職墓がそれぞれ位置している。

神代家一族の墓には、石祠・丸石塔（位牌形）・六角形塔があり、正面は概ね北から北東に向かっている。このうち石祠は、神代家歴代当主と妻の墓だけに用いられている。7基の石祠のうち、SX9020は、屋根が宝形造りで、請花座をもつ点が他の石祠と異なるが、他の6基については、SX9021の屋根が寄棟造りである点を省けば同じ形態である。

また、歴代住職の墓には、無縫塔・自然石が用いられている。住職墓の多くは、調査区の南東部に築かれた基壇上に、正面を北にして並べられている。基壇上の住職墓は、各部材が組み換えられており、造られた当初の姿を留めるものはほとんどない。

なお、調査区東端の石垣周縁に並べられていた石塔群には、室町時代後期～戦国時代のものが多く含まれている。東畠瀬地区では、畠瀬城跡（畠瀬城跡2・3区）や神代氏館跡（東畠瀬遺跡6区）等、室町時代後期～戦国時代の遺跡が調査され、山内における拠点的な場所であったことが判明しており、これらの石塔は、東畠瀬地区に造立されていたものが、後世になり集められたものと考えられる。

下部遺構について

総数40基が確認でき、その内訳は、墓37基、埋納遺構2基、不明遺構1基である。火葬骨・髪・歯の埋納遺

構や内容物がわからない埋納遺構が10基あるが、報告に際しては、これらも墓として扱った。

墓壙には、方形、円形の2種類のものがあるが、方形墓壙が大多数である。方形墓壙の墓は、素掘りのもの、石室を有するもの、二段掘りのもの、片側二段掘りのもの、二段掘りで石蓋を有するもの等多様である。多くから釘が出土していることから、棺は釘を使用した箱形棺であったと考えられる。

一方、円形墓壙の墓は、素掘りのものに限られる。このうち、釘が全く出土していない墓は、釘を使用しない丸桶を棺として用いていたと考えられる。また、陶器の甕を棺に転用している場合もある。

下部遺構のうち、火葬骨・髪・歯が入れられた蔵骨器や蓋付小鉢が10基確認されているが、その中でも原位置が保たれている8基のうち、他の墓壙との関係が読み取れない位置から出土したST9132を除く7基については、それらが埋納された状況を幾通りか想定できる。

まず、他の墓壙の端に重複するか、墓壙に近接する位置で出土したもの(ST9110・ST9125・ST9141)については、主たる墓に関係するものである可能性があろう。ただし、これらについては、埋納されたものが火葬骨のほか、髪もあることから、すべてを単純に埋葬行為と理解してよいのか疑問である。

一方、他の墓壙と完全に重複した位置から出土したもの(ST9137・ST9145・ST9146・ST9147)については、主たる墓の墓壙を掘る際、過去に埋納された蔵骨器等が露出したため、埋め戻しに際して埋納されたものか、あるいは、主たる墓の外表施設が原位置から動かされた後、偶然同じ場所に埋納されたものか、または、主たる墓の造営に際して当初から埋納されたものなのか、いずれかの可能性が考えられる。

なお、調査区の南東部に並ぶ歴代住職墓については、墓が並ぶ基壇の内部からは何も出土しなかった。また、基壇撤去後、下部遺構を調査したが、これら住職墓と対応するような位置で墓壙は確認されなかった。ちなみに、ST9122およびST9130については、基壇直下に位置するが、基壇上の石塔と対応するものとは捉えにくく、後述するように、これら住職墓の並ぶ基壇は、後世築造されたものと考えられる。

さらに、墓地では、墓壙の構造や規模が類似する墓が隣接して営まれている傾向が認められ、これらは夫婦や近親者の墓である可能性がある。なお、夫婦の墓と考えられるものについては、項目を分けて記述する。

外表施設と下部遺構の対応関係

宗源院墓地からは、外表施設の直下から下部遺構が検出されたもの、すなわち墓石と墓壙の対応関係が保たれていると考えられる墓が17基確認された。このうち、ST9102とST9103、ST9106とST9108、ST9114とST9115の3組は、墓が近接して営まれており、下部遺構の構造が類似している。さらに、墓碑銘と文献とを照らし合わせると、3組とも夫婦の墓である可能性が高い。

ST9102とST9103のうち、ST9102には、俗名・戒名・没年月日の銘、ST9103には、戒名の銘があり、ST9102は4代神代利尚(1603~1670)、ST9103は利尚の妻(1606~1654)の墓であることが推定される。これらの墓は、屋根や祠部分の形態が多少異なるが、ともに石祠を用いていること、火葬骨が蔵骨器に入れられていること、さらに、甕と皿を用いた外容器に蔵骨器が納められていることなど類似する点が多い。

ST9106とST9108は、ともに戒名と没年月日の銘があり、ST9108は、5代神代利実(1626~1696)の墓、ST9106は利実の妻(?)~1698の墓であると推定される。両者は、外表施設に石祠を用いるだけでなく、同規模の石室を有する点で共通する。夫妻の墓の間には、ST9107があるが、これは夫妻の墓が造られた後に営まれたものであり、元々夫妻の墓は並ぶように位置していることがわかる。

ST9114とST9115についても、ともに戒名と没年月日の銘があり、ST9115は6代神代利庸(1662~1738)の墓、ST9114はその妻(?)~1744の墓であると推定される。両者は隣接して営まれており、縁石に囲まれている。また、墓の構造もともに方形二段掘りで石蓋を有し、墓壙も同規模である。ただし、両者の外表施設は異なっており、利庸の墓は六角形塔、妻の墓は石祠である。利庸の墓に用いられている六角形塔は、他の歴代当主・妻の墓に

はみられない特異なものである。

なお、これらの3組の墓からは、すべて人骨が出土しており、形質人類学的な所見は、銘文等から得られる情報（性別・年齢など）と矛盾はない。

SX9001について

神代勝利の墓と伝えられている墓（以下、勝利墓）である。勝利墓では基壇内部の調査を行うため、外表施設の記録化を行った後、宝鏡印塔・台石・石門・玉垣を先行して撤去し、その後、基壇を構成する板石と竿石を撤去しながら調査を実施した。その結果、基壇内部からは、内部主体や祭祀に関わるような施設は確認されなかった。また基壇撤去後、あらためて遺構検出およびトレンチを設定し調査を行ったが、基壇直下からも何も出土しなかった。

なお、基壇内からは、土器類の小皿や鍋片、古錢・近代錢・現行錢などの銭貨が出土し、とくに基壇最下部付近で、近代の半錢玉が出土している。出土した半錢玉の発行年は、錯のため確認できないが、半錢玉自体の発行期間は、明治6年～21年に限定される（2）。また基壇の2段目・3段目から1円玉・5円玉・10円玉等の現行錢も出土している。これらの銭貨が出土したことから、勝利墓は少なくとも明治6年以降、あるいは昭和期においても基壇の改修等が行われた可能性がある。

ちなみに、基壇内からは他の遺物に混じって径約3.0～4.0cmの玉石が若干数出土した。この玉石は、墓地のいずれかの場所に散逸していたものが、散乱した後、基壇を築いた際に混入したものと考えられる。つまり、基壇内部の土は、墓地内の土を集め充填したものと推定される。

トレンチ調査の概要

SX9001の正面（勝利墓の西側）には、他の墓が営まれていない空間があり、この空間が当初からあったものか、あるいは墓石が散逸もしくは撤去されただけで、元々は墓が営まれていたのか等について不明な点があった。そこで、旧地形の復元も兼ね、調査区の北部から東部に7箇所のトレンチを設定して調査を行った。

これら各トレンチの調査成果を総括すると、調査区の北部から東部において、1層から4層の土層が確認された。1層は、調査区の東部から北東部で確認でき、石垣に伴う裏込めや造成盛土である。2層も同様に石垣築造に伴う造成盛土であるが、石垣築造前に堆積した土も含まれている。3層は花崗岩風化土、4層は岩盤で、とともに地山である。ちなみに、墓はすべて3層もしくは4層に掘り込まれている。1・2層は石垣の周辺、つまり、調査区の東部一帯に分布し、北から北東に向かって傾斜する3層（旧地形面）の縁辺を覆うように堆積している。なお、各トレンチでは、墓およびその他の遺構は確認されず、遺物も出土していない。このことから調査区の東部は、石垣築造以前には北および北東に向かう緩やかな斜面であり、墓は営まれていなかったことが明らかとなった。

なお、史料によると、文化8年（1811）5月中旬、長雨で勝利の廟処が崩落したため、その措置として石垣普請が行われたとされており、廟処の崩落が契機となり石垣が築造されたことがうかがえる。トレンチによる調査結果も、勝利墓は2層（石垣築造に伴う造成盛土）の上に建てられており、史料の内容と矛盾しない。これらのことから、勝利墓が現在の位置に建てられたのは、少なくとも文化8年以降と考えることができよう。また、史料にある廟処が崩落したとの記述は、逆にいうと、文化8年以前にはすでに「廟処」が存在したとも解されるわけで、「廟処」が建っていたとすれば、少なくとも1・2層よりも古い層、すなわち、3層・4層もしくはこれらに堆積した表土上に建っていたことになる。勝利墓の宝鏡印塔は、戦国期の特徴を多分に残しており、17世紀代に造られたものと推定されるが、上記のことと考えあわせると、「廟」は石垣築造に伴い移築される以前から、ほぼ同じ場所に存在していた可能性は否定できない。

SX9149について

調査区の中央部北寄り、ST9102とST9103の西側に位置している。検出時には、盛土や石塔等の外表施設は確認できなかった。遺構は、梢円形の土壤に、皿で蓋をした甕が埋められており、甕の内部からは炭と巻物8本が炭化した状態で出土した。これらの状況からSX9149は経塚である可能性が高いと考えられる。外容器の甕と皿の製作年代は17世紀後半であり、宗源院墓地で本格的に造塚が開始される時期、もしくは、初期に営まれた墓と同時期に埋納されたと推定される。つまり、墓地に墓を営む前に、当地を聖地化したとも考えられる。

また、外容器（甕・皿）の製作年代が17世紀後半ということと、4代夫妻の墓に隣接して営まれていることを考慮すれば、墓地に墓が営まれ始めた後のある時に、4代夫妻の追善供養を行う目的で埋納されたとも考えられよう。さらに、この経塚が4代利尚本人（1603～1670）によって営まれたと考えるならば、利尚本人の生前供養や後生善処、または先に亡くなった妻の供養を意図して営まれたものである可能性もあるろう。

その他

宗源院墓地は、4代利尚夫妻の墓（ST9102・ST9103）の造営によって始まる。墓碑銘によれば、利尚の妻は承応3年（1654）に没しており、没年が確認できるものとしては最も古い墓である。また、ほぼ同時に、夫妻の墓に隣接した場所に経塚が営まれたと考えられるが、前述したとおり、墓地の聖地化のためのものなのか、夫妻の供養を意図したもののかは定かでない。

また、この墓地では4代夫妻の墓の造営に際し、山腹が切り開かれ平坦面が造成されたと考えられるが、その後の一族墓が営まれる墓地南西部まで一度に開削されたのか、段階的に開削されたのかは不明である。

ちなみに、4代夫妻およびほぼ同時期の墓である妻の実母（ST9101）・関係不明の子供（ST9119）、つまり宗源院墓地における最初期の墓はすべて火葬で、その後の一族はすべて土葬である。4代利尚の妻は、宗源院の開基とされる人物で、宗源院にとっては重要な人物であり、葬法の違いは、単に時期的あるいは地域的な慣習を表しているのではなく、4代夫妻の立場の特殊性によるものかもしれない。

なお、前述したように、勝利墓は宝鏡印塔の特徴から17世紀代に造られたものと推定されることや、同じく前述したように、江戸後期の石垣築造以前から勝利の「廟」があったらしいことから、4代夫妻の造墓以前に、この地に存在していた可能性は否定できない。この場合の「この地」とは、無論、石垣築造前の旧地形上の一角を指す。

墓地を概観すると、おおよそ中央部から南西部にかけては外表施設が伴う神代家一族墓が分布し、南東部には外表施設が伴わない墓が群をなす。これら南東部の墓の上には基壇が設けられ歴代住職の外表施設が並べられている。基壇は、南東部に営まれていた歴代住職墓の外表施設を、後世まとめたものと考えるのが自然であろう。

註

1) 神代家一族に関しては「神代家物語系譜」「宗源院過去帳」「宗源院文書」の史料がある。さらに、これらを総括したとして「意綱川ダム建設に伴う学術調査報告書」があり参考とした。宗源院墓地に葬られている神代家一族については、神代利を祖とし、鍋島氏に仕え、小城支藩創設の際、佐賀本藩から移籍した一族である。神代家は、移籍組を出す「八十三士」に名を連ねるとともに、藩の要職を務めたとされる（吉松 1974・宮島 2004）。なお、神代家一族の墓は、今河調査を実施した宗源院墓地だけではなく、小城市小城町頭田に所在する鷲山真照寺にも埋められていることがわかっている。

2) ただし、平賀玉は明治11年に発行されていない。

参考・引文文献

- 吉松要輔（1974）「近世 1. 小城藩の成立」「小城町史」小城町史編集委員会編
- 嘉瀬川ダム建設に伴う学術調査委員会（2000）「意綱川ダム建設に伴う学術調査報告書」富士町教育委員会
- 佐賀県立図書館編（1986）「佐賀縣史料集成 古文書編」第27巻 佐賀県立図書館
- 全国田代ゆかりの会（1980）「神代家伝記」「神代家とその一族」1号
- 富士町史編纂委員会（2000）「富士町史」上巻 富士町
- 三瀬村誌編纂委員会（1977）「三瀬村誌」三瀬村
- 宮島敬一編（2004）「小城鍋島文庫にみる小城鍋島藩と鳥原の乱」佐賀大学文系基礎学研究プロジェクト

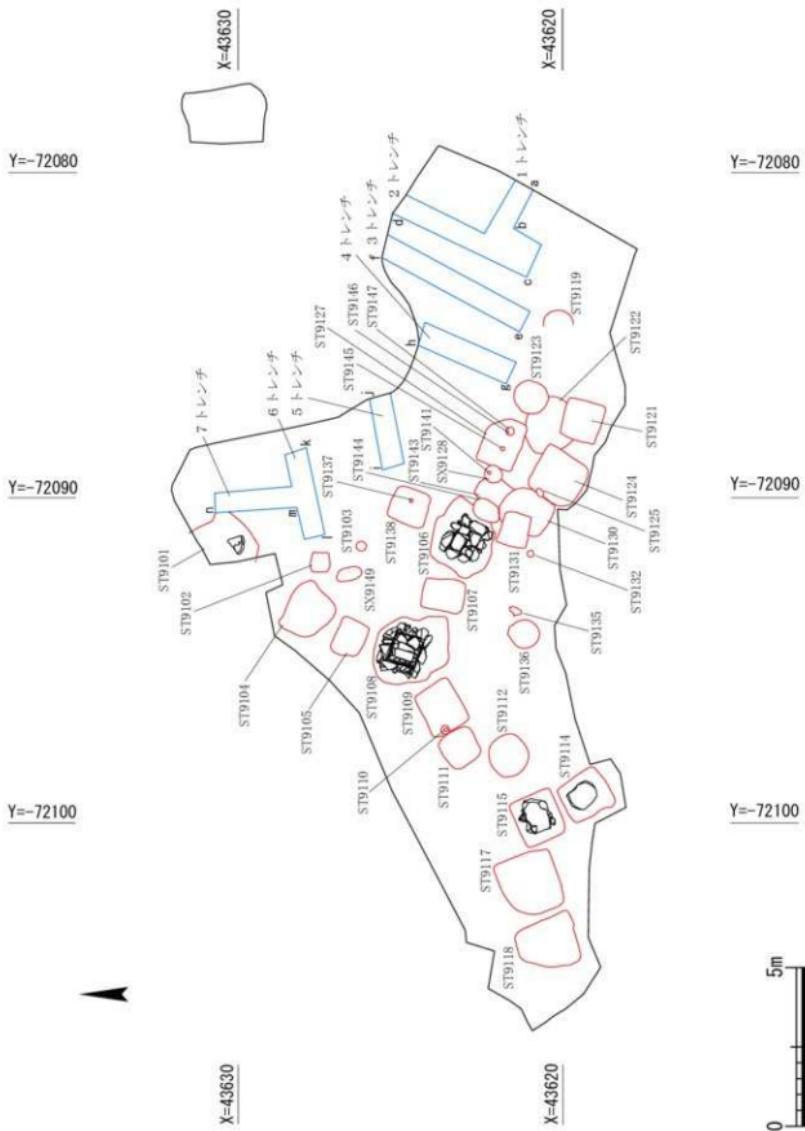


図6-15 下部構造及びトレーンチ配置図(1/150)

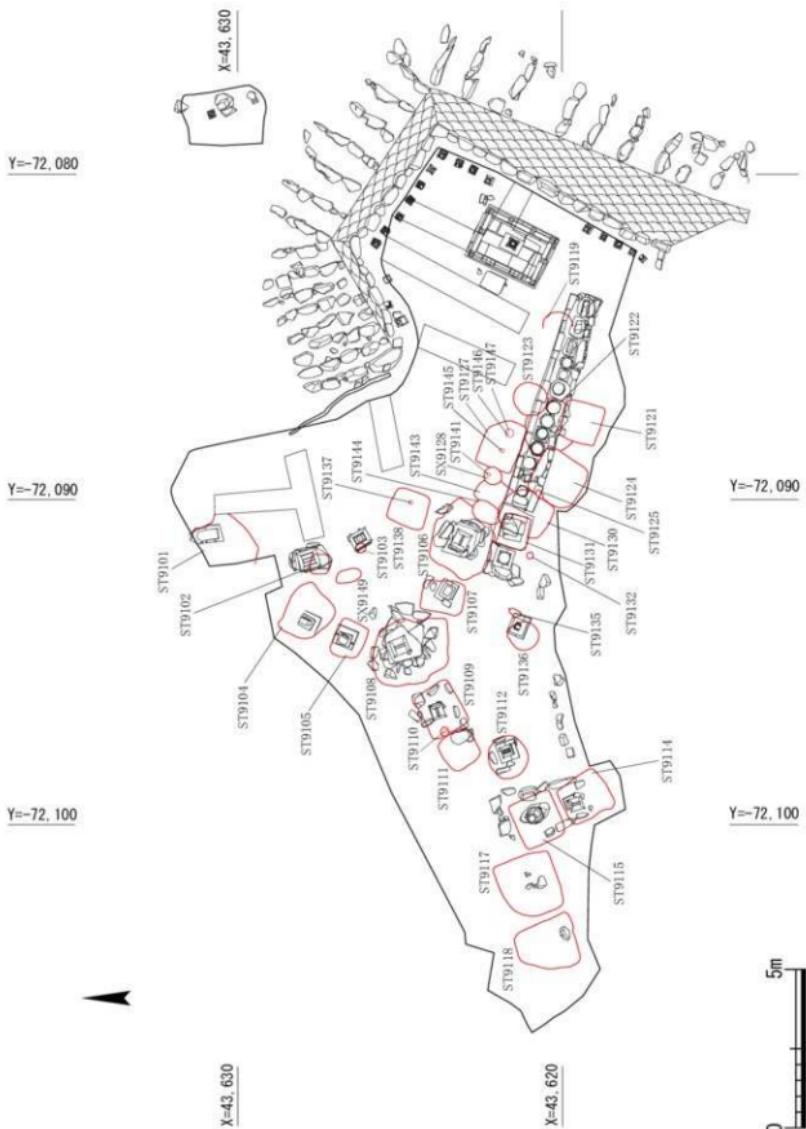


図6-16 外表施設及び下部遺構位置図（1/150）

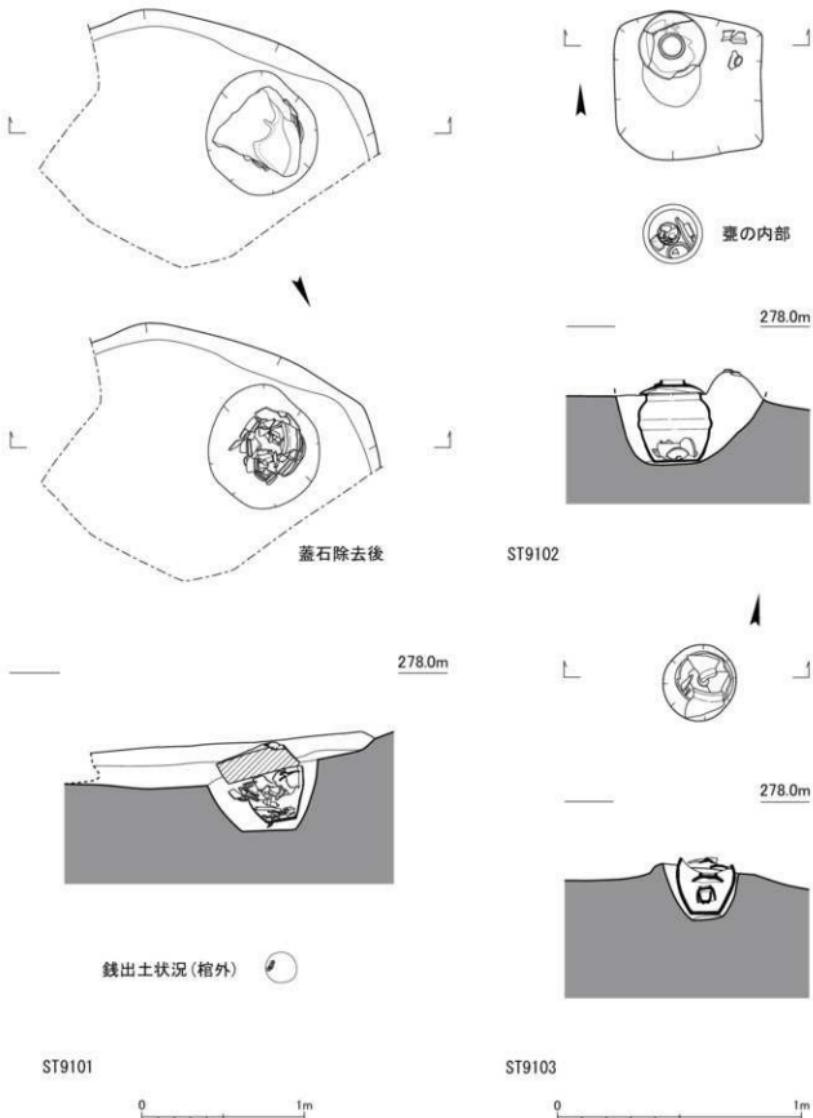


図6-17 下部遺構1 (1/20・1/30)

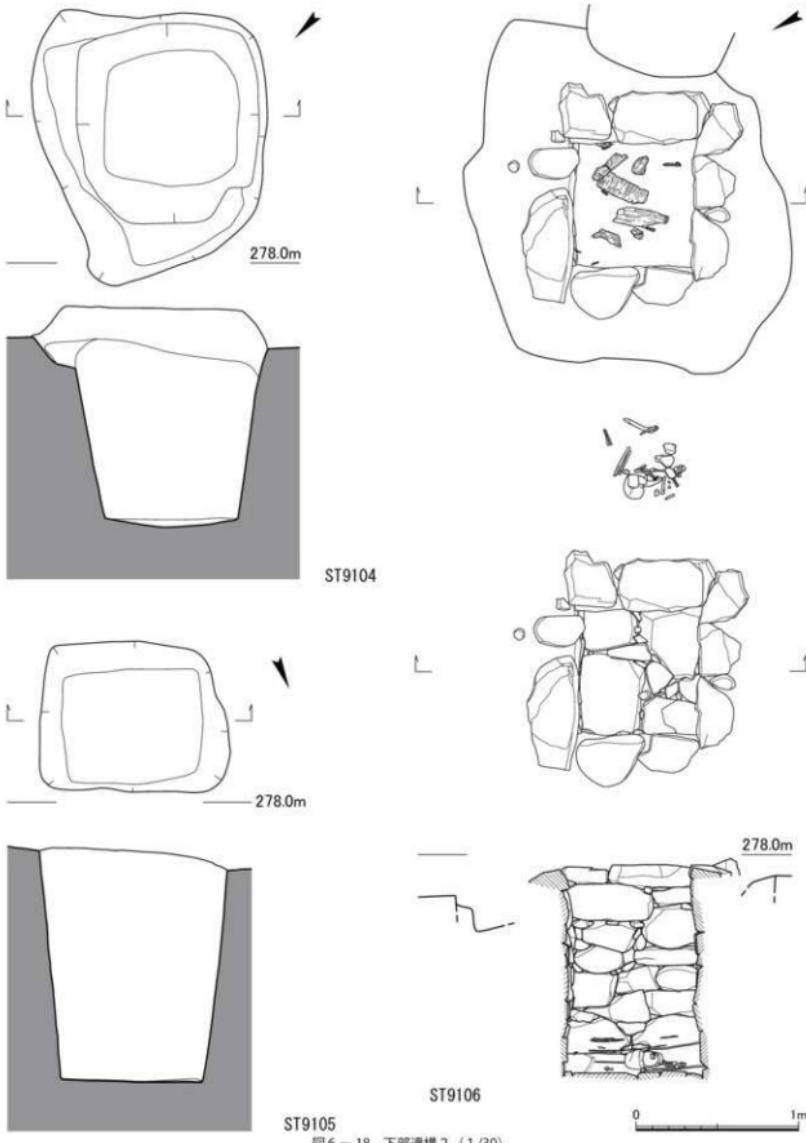


图6-18 下部遗构2 (1/30)

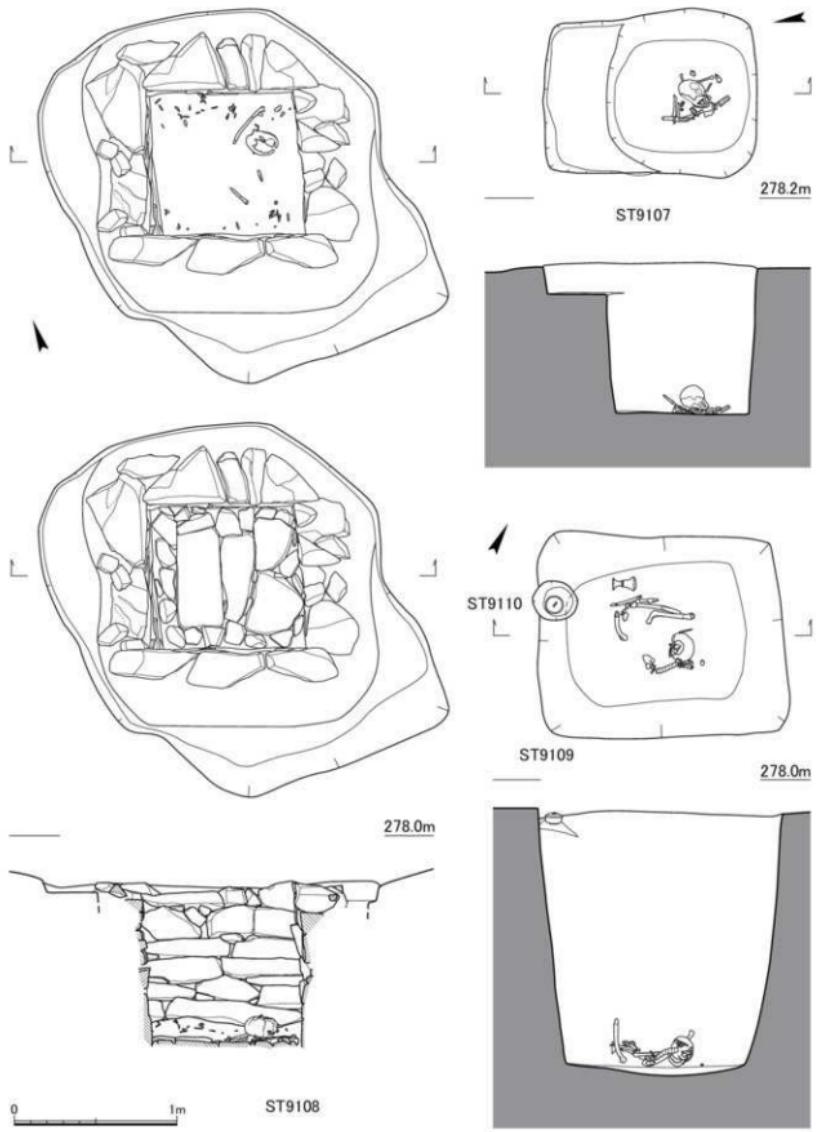


図6-19 下部遺構3 (1/30)

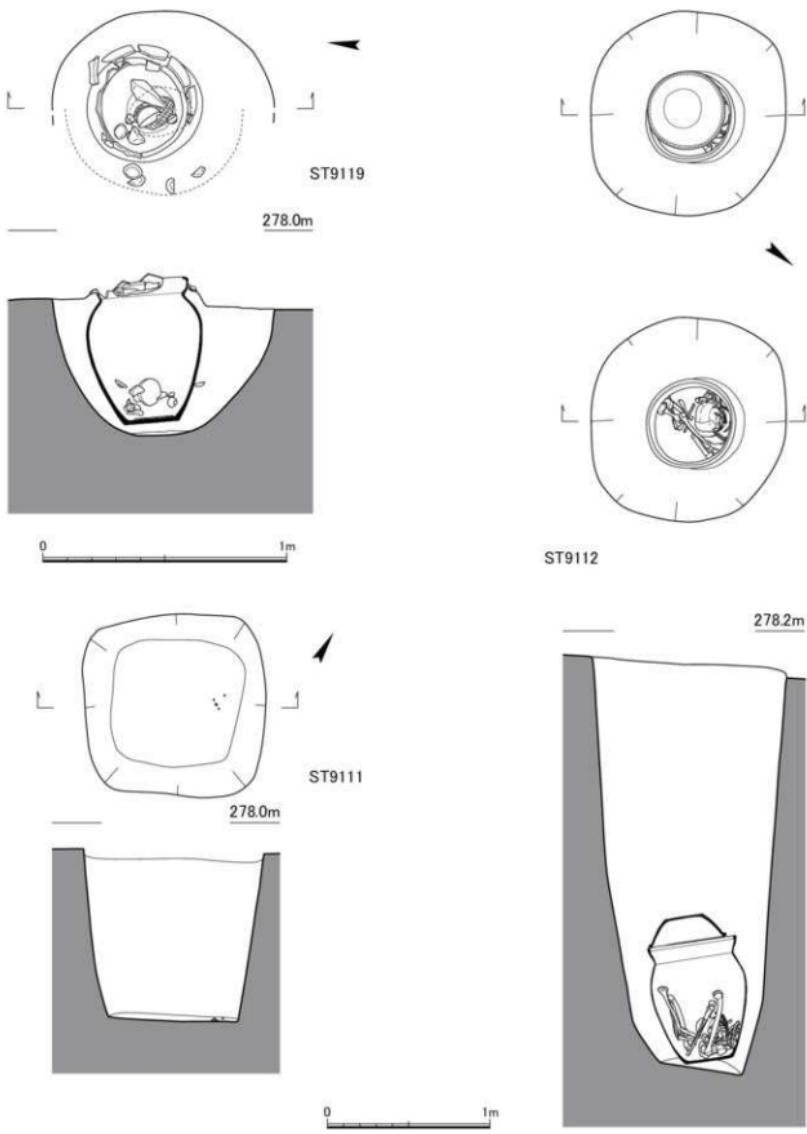


图6-20 下部遗模4 (1/20·1/30)

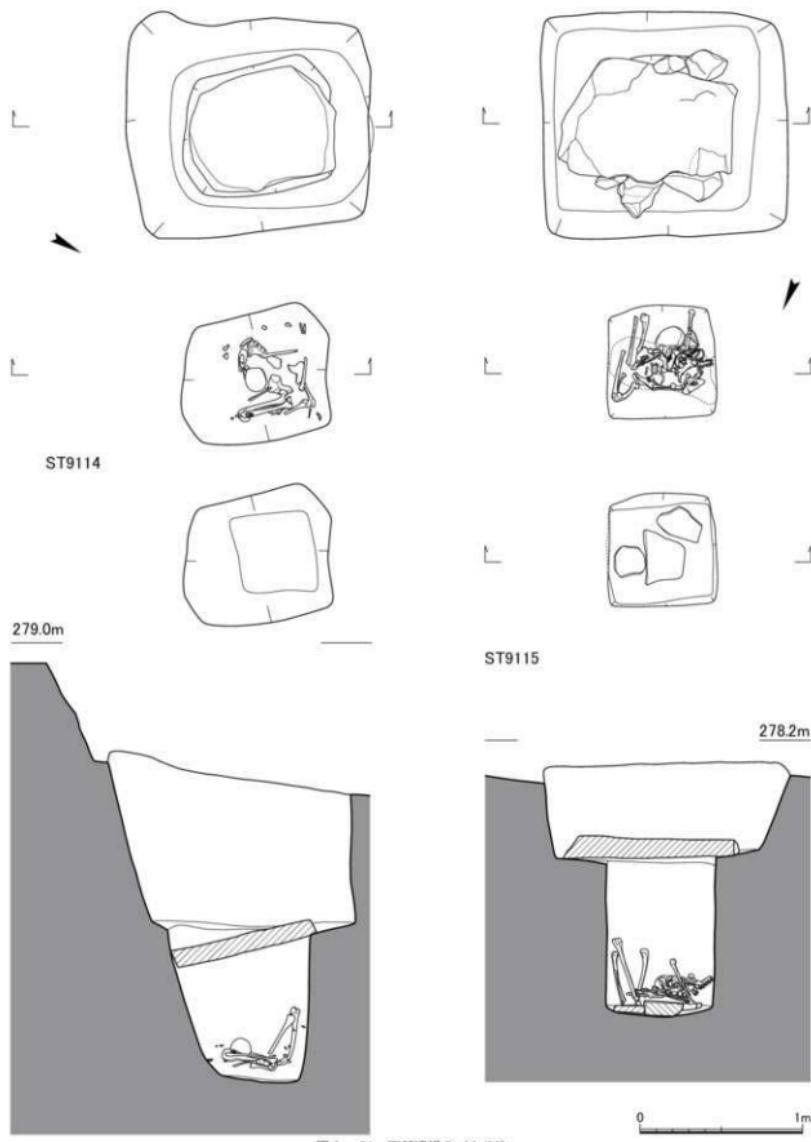


図6-21 下部遺構5 (1/30)

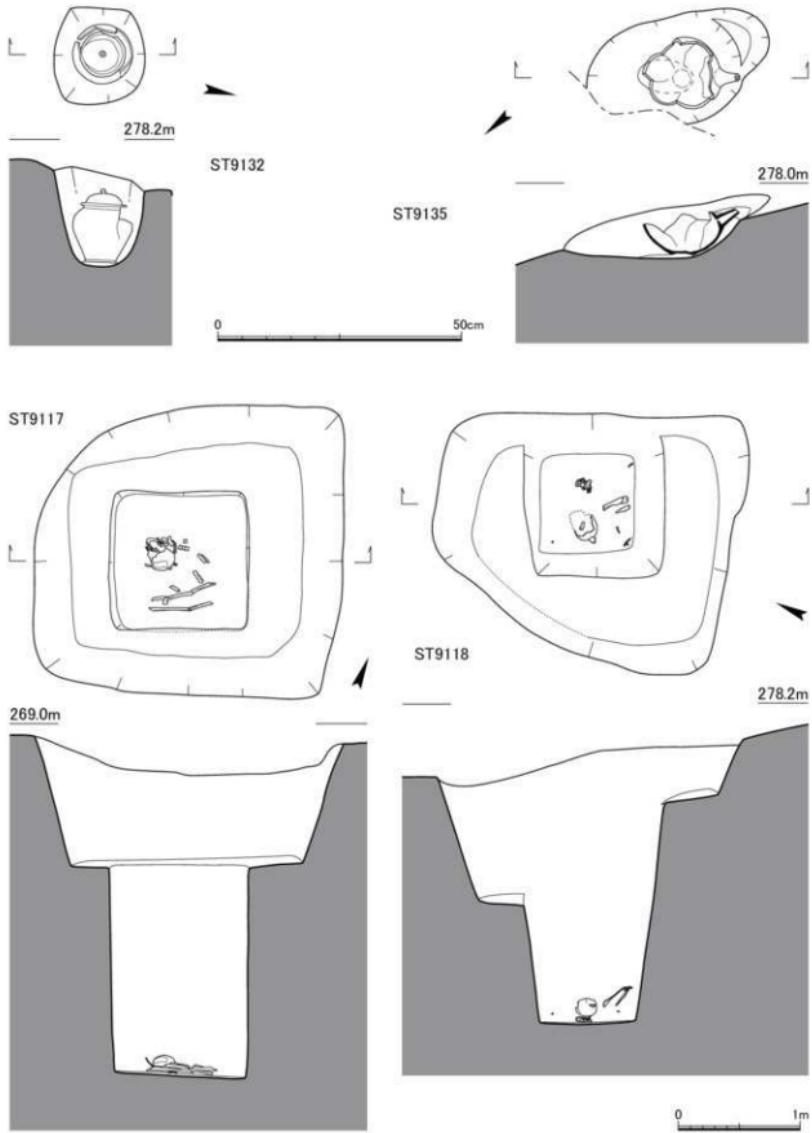


図6-22 下部遺構6 (1/10・1/30)

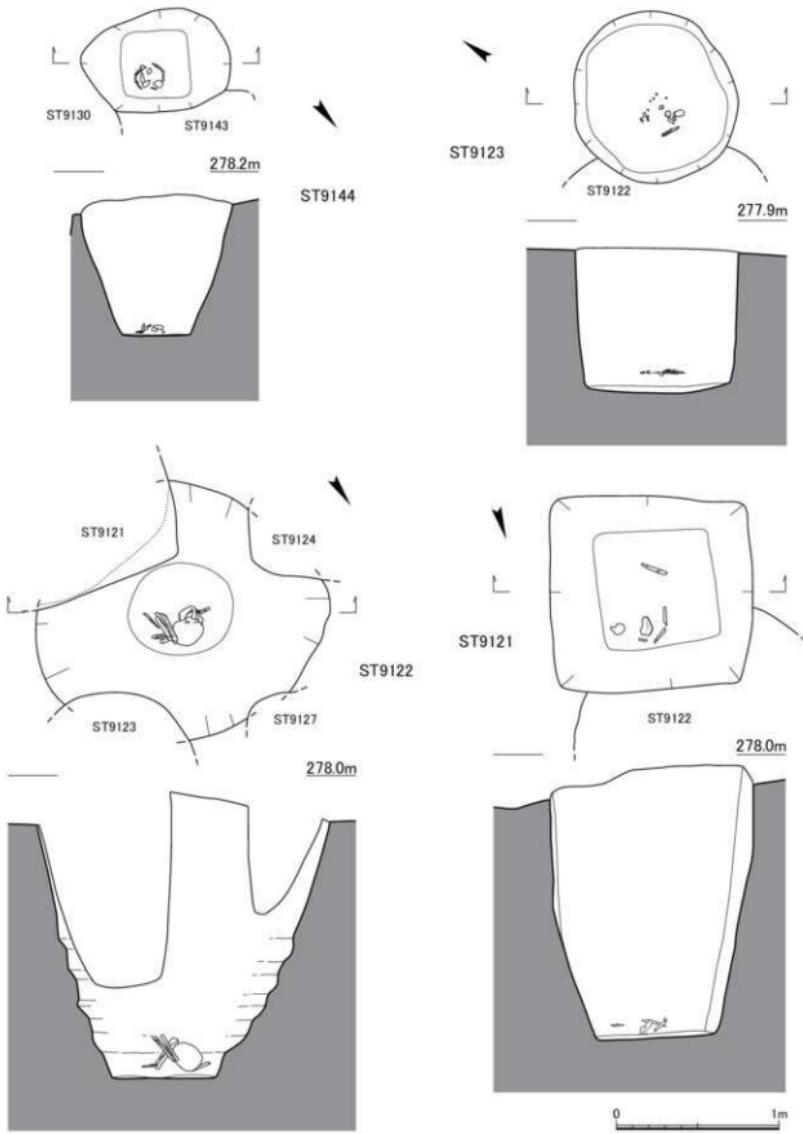


図6-23 下部遺構7 (1/30)

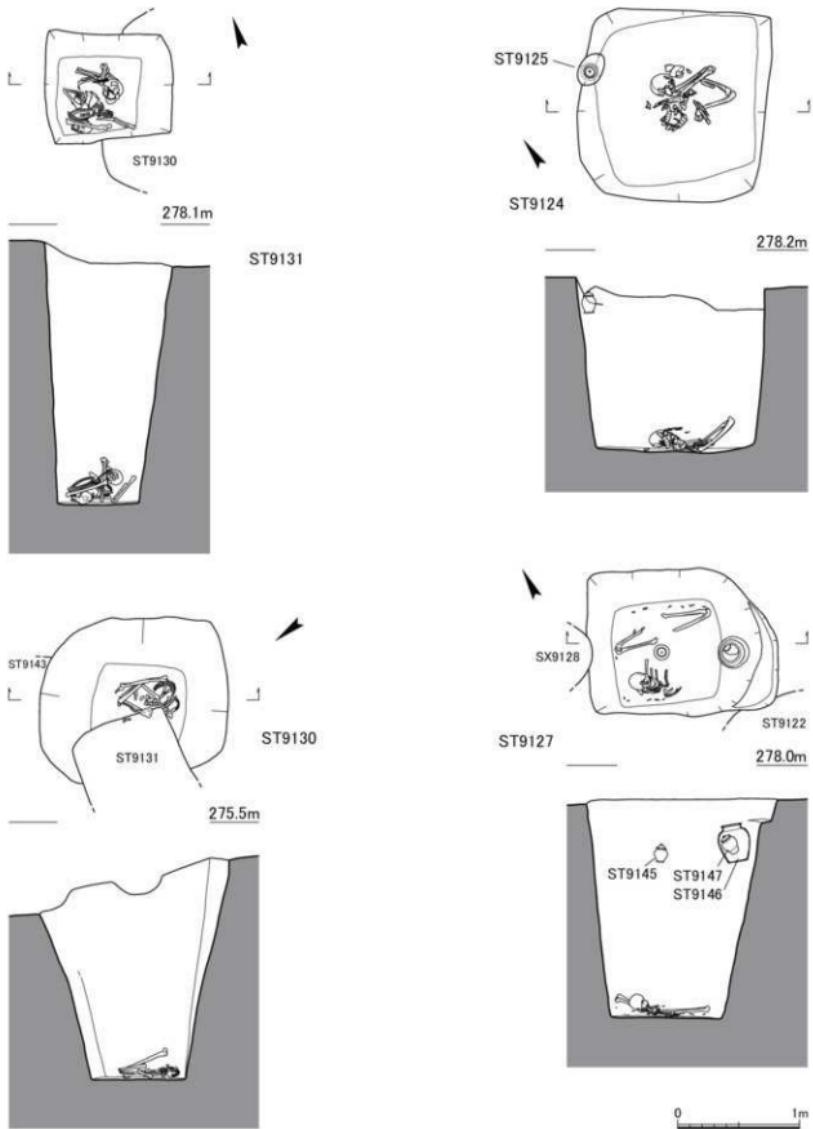


図6-24 下部遺構8 (1/40)

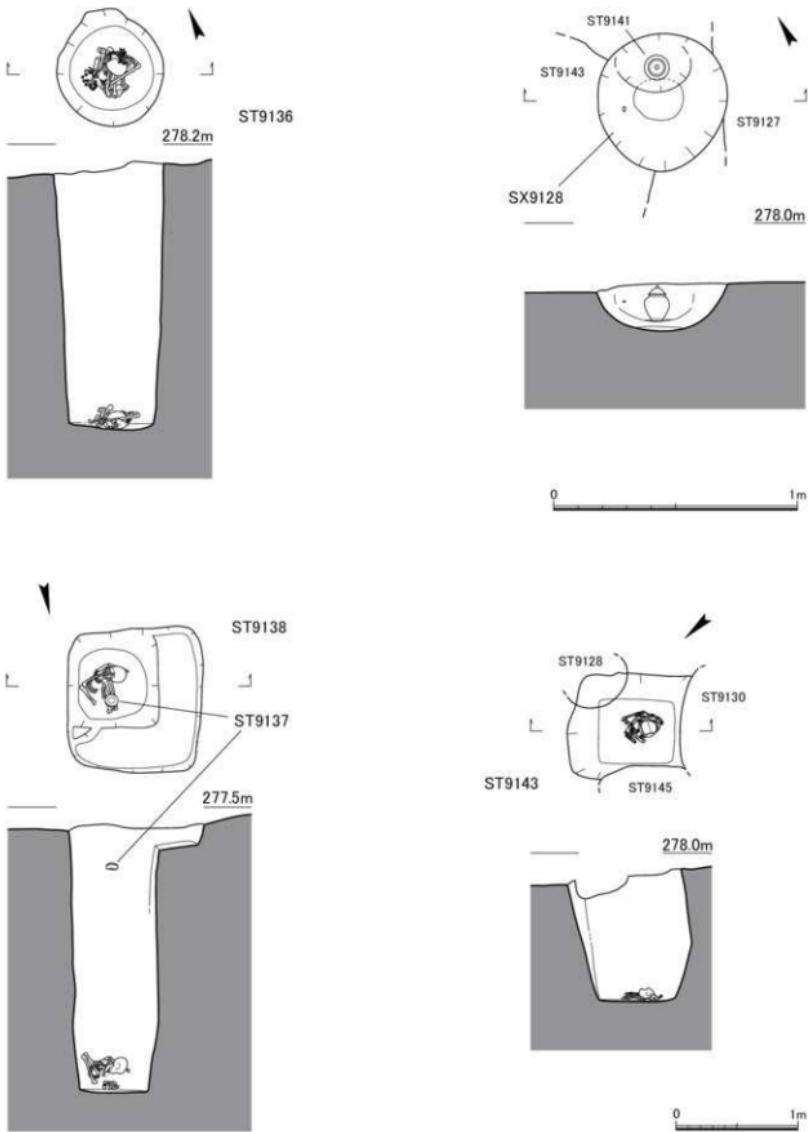
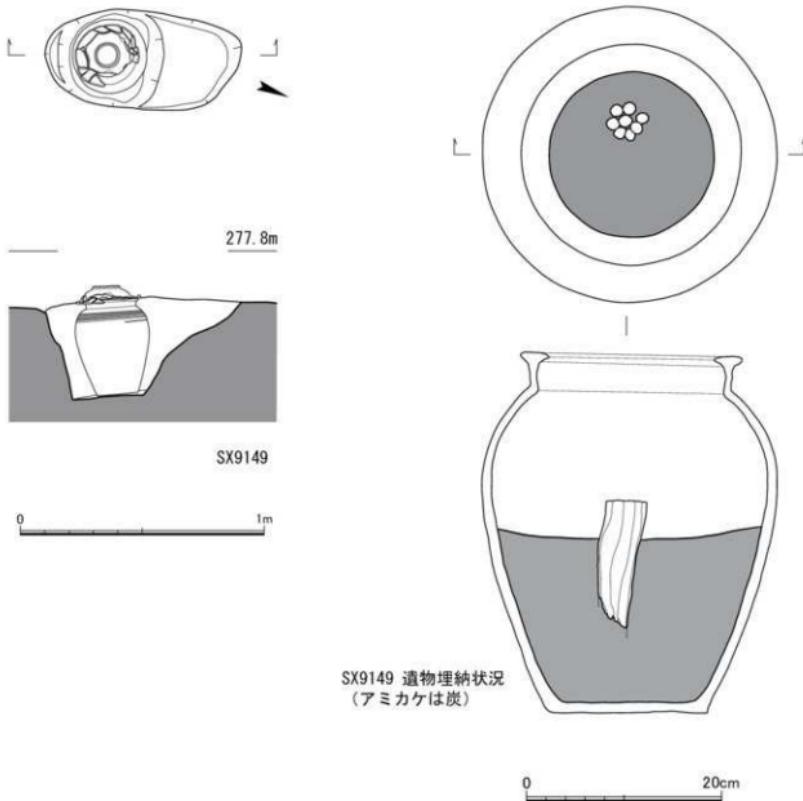


図6-25 下部遺構9 (1/20・1/40)



SX9149 遺物埋納状況
(アミカケは炭)

図6-26 下部遺構 10・SX9149 遺物理納状況 (1/5・1/20)

表6-2 9区下部遺構一覧

図版番号	遺構番号	基壇等			釋法	棺(容器)	その他	出土物	人物の所見 (性別・年齢)	直上の 外表施設	写真図版 番号
		(上面) (底面) (深さ)	単位(m)	その他の 特徴							
-	SX9001	-	-	-	-	-	-	土師器小皿・土師器網、 鉢(寛永通宝・半錢、 1銭・1円・5円・10円)	-	-	写真図版 6-13・14
図6-17	ST9101	円形	(上面) 径0.7 (底面) 0.41	石蓋	火葬	甕	-	鉢(寛永通宝)	女性の可能性?	SX9022	写真図版 6-14
図6-17	ST9102	方形	(上面) 0.62 × 0.61 (底面) 0.29	-	火葬	甕、皿、碗、 蓋付曲物	-	-	?・熟年以上	SX9021	写真図版 6-14
図6-17	ST9103	円形	(上面) 径0.3 (底面) 0.22	-	火葬	甕、皿、碗、 小鉢	-	-	?・壮年以降だが 老年には達していない	SX9020	写真図版 6-14
図6-18	ST9104	方形	(上面) 1.2 × 1.1 (底面) 0.84 × 0.82 (深さ) 1.35	-	土葬	箱形棺	-	鉄釘	?・2~3歳	SX9023	写真図版 6-15
図6-18	ST9105	方形	(上面) 1.16 × 0.94 (底面) 0.87 × 0.72 (深さ) 1.43	-	土葬	箱形棺	-	鉄釘	?・10代後半	SX9024	写真図版 6-15
図6-18	ST9106	方形	(上面) 径2.0 (底面) 1.25	石室	土葬	箱形棺	-	鉄釘、木片	女性・高齢	SX9019	写真図版 6-15
図6-19	ST9107	方形	(上面) 1.32 × 1.02 (底面) 0.83 × 0.69 (深さ) 0.93	片側 二段振り	土葬	箱形棺	-	縁締めか組付。小便利、 刀、鉢(寛永通宝)、 鉄釘	?・3~4歳	SX9026	写真図版 6-15
図6-19	ST9108	方形	(上面) 径2.0 (底面) 0.95	石室	土葬	箱形棺	-	鉢(寛永通宝)、鉄釘	男性的・高齢	SX9025	写真図版 6-15
図6-19	ST9109	方形	(上面) 1.52 × 1.27 (底面) 1.10 × 0.84 (深さ) 1.61	-	土葬	箱形棺	ST9110が 埋土中より出土	革瓶、鉄釘	女性・壯年	SX9027	写真図版 6-16
図6-19	ST9110	円形	(上面) 径0.2~0.3	-	火葬	蓋付甕	ST9109の 埋土中から出土	-	-	-	写真図版 6-16
図6-20	ST9111	方形	(上面) 径1.12 × 1.11 (底面) 径0.81~0.79 (深さ) 1.06	-	土葬	箱形棺	-	鉄釘	-	-	写真図版 6-16
図6-20	ST9112	円形	(上面) 径1.2 × 1.05 (底面) 径0.4~0.5 (深さ) 2.57	-	土葬	焼、鉢	-	埋管、煙入れ(布袋)、 毛抜き、鉢(寛永通宝)、 鉄釘	男性・壮年後半~ 熟年前半	SX9028	写真図版 6-16・17
図6-21	ST9114	方形	(上面) 1.49 × 1.30 (底面) 1.58	二段振り 石蓋	土葬	箱形棺	-	鉢(寛永通宝)、鉄釘	女性・熟年後半~ 老年	SX9029	写真図版 6-17
図6-21	ST9115	方形	(上面) 1.50 × 1.39 (底面) 1.55	二段振り 石蓋	土葬	箱形棺	-	扇子、鉄釘、布片、 木片	男性・老年	SX9030	写真図版 6-17・18
図6-22	ST9117	方形	(上面) 1.90 × 1.79 (底面) 2.10	二段振り	土葬	箱形棺	-	鉢(寛永通宝)、鉄釘、 布片	男性的・熟年以降	SX9039	写真図版 6-18
図6-22	ST9118	方形	(上面) 1.85 × 1.58 (底面) 1.70	二段振り	土葬	箱形棺	-	鉢(寛永通宝)、鉄釘	女性的・熟年以降	SX9031	写真図版 6-18
図6-20	ST9119	円形	(上面) 径0.9 (底面) 0.64	-	火葬	甕、鉢	-	碗、小杯、小皿、薬? 小石、土師器小皿(相外)	?・4~5歳	-	写真図版 6-18・19
図6-23	ST9121	方形	(上面) 1.24 × 1.22 (底面) 0.72 × 0.71 (深さ) 1.70	-	土葬	-	-	-	男性的・高齢	-	写真図版 6-19
図6-23	ST9122	円形	(上面) 径1.5~1.8 (底面) 0.55~0.65 (深さ) 1.75	-	土葬	丸桶	-	水晶製(数珠玉)・ ガラス製玉	男性・熟年後半か 老年	-	写真図版 6-19
図6-23	ST9123	円形	(上面) 径1.0~1.05 (底面) 0.92~0.84 (深さ) 0.89	-	土葬	箱形棺	-	鉄釘	男性的・高齢の 可能性	-	写真図版 6-19
図6-24	ST9124	方形	(上面) 1.57 × 1.54 (底面) 1.34 × 1.32 (深さ) 1.43	-	土葬	箱形棺	-	硝子環、呂貝貝、 不明鉄製品、漆塗器片、 鉢(寛永通宝)、鉄釘	男性・熟年後半か 老年	-	写真図版 6-19・20

表6-2 9区下部遺構一覧

岡阪番号	遺構番号	遺構等			発法	棺(容器)	その他	出土遺物	人骨の所見 (性別・年齢)	直上の 外施施設	写真図版 番号
		平面形 (底面) (深さ)	単位(m)	その他の 特徴							
岡6-24	ST9125	-	-	-	火葬	藏骨器	-	-	?・6~7歳	-	-
岡6-24	ST9127	方形	(上面) 1.55×1.22 (底面) 0.90×0.84 (深さ) 1.79	-	土葬	箱形棺	埋土中から T9145・9146・ 9147が出土	水滴、鉄釘	男性・熟年	-	写真図版 6-20
岡6-25	SX9128	円形	(上面) 径0.53~0.55 (底面) 径0.18~0.2 (深さ) 0.2	-	-	-	埋土中から検出 1片・ST9141 出土	-	-	-	写真図版 6-23
岡6-24	ST9130	方形	(上面) 1.55×1.3 (底面) 0.76×0.76 (深さ) 1.81	-	土葬	箱形棺	-	雁首銛、鐵鋸、鉄釘	男性・熟年	-	写真図版 6-20
岡6-24	ST9131	方形	(上面) 1.05×0.91 (底面) 0.69×0.64 (深さ) 2.15	-	土葬	箱形棺	-	扇子、ボタン、金糸〔金 モール〕、ガラス製玉、 不明金属製品、鉄釘	男性・熟年後半~ 老年前期	SX9015	写真図版 6-20
岡6-22	ST9132	方形	(上面) 0.2×0.19 (深さ) 0.2	-	火葬	藏骨器	-	-	-	-	写真図版 6-20
-	ST9133	-	-	-	-	-	-	-	-	SX9016	-
-	ST9134	-	-	-	火葬	藏骨器	-	-	?・熟年以降	-	写真図版 6-20
岡6-22	ST9135	横円形	(上面) 0.38×0.21 (深さ) 0.11	-	-	土壙	隨衣埋納?	-	-	-	写真図版 6-21
岡6-25	ST9136	円形	(上面) 径0.9 (底面) 径0.7 (深さ) 2.2	-	土葬	桶棺	-	櫛、残(資通寶)	女性・壯年前半	SX9018	写真図版 6-21
岡6-25	ST9137	-	-	-	-	蓋付罐	ST9138に埋納	-	-	-	写真図版 6-21
岡6-25	ST9138	方形	(上面) 1.19×1.11 (底面) 0.58×0.55 (深さ) 2.20	片側 二段振り	土葬	箱形棺	埋土中から ST9137が出土	埋甕、焼瓦筒、数珠玉、 鉢(文久永寶・天保通寶)、 布袋(巾着)、鉄釘、墨	男性・壮年後半	-	写真図版 6-21
岡6-25	ST9141	横円形	(上面) 0.3×0.2	-	火葬	蓋付小壺	-	-	?・熟年以上か	-	写真図版 6-21
岡6-25	ST9143	方形	(底面) 0.63×0.53 (深さ) 1.08	-	土葬	箱形棺	-	小瓶、鉄製鉗、巻貝、 二枚貝(紅貝か)、 指輪の八双・韁神、 ガラス製玉、鉄釘	?・4歳程度	-	写真図版 6-22
岡6-23	ST9144	横円形	(上面) 0.92×0.62 (底面) 0.43×0.41 (深さ) 0.86	-	土葬	箱形棺	-	鉄釘	?・1歳半から2 歳程度	-	写真図版 6-22
岡6-24	ST9145	-	-	-	函 埋納	蓋付小壺	ST9127 埋土中 に埋納	-	?・熟年以上	-	写真図版 6-22
岡6-24	ST9146	-	(深さ) 0.35	-	火葬	甕、擂鉢	ST9127 埋土中 に埋納	-	男性か・成人	-	写真図版 6-22
岡6-24	ST9147	-	-	-	火葬	藏骨器	ST9146の中 に埋納	-	男性か・熟年	-	写真図版 6-22
-	ST9148	-	-	-	火葬	蓋付小壺	-	-	?・胎兒 (未熟児)か	-	-
岡6-26	SX9149	横円形	(上面) 0.8×0.4 (底面) 0.3×0.35 (深さ) 0.4	-	-	-	埋納遺構 (經塚か)	甕、組、經典字(卷物8 本)・灰	-	-	写真図版 6-23

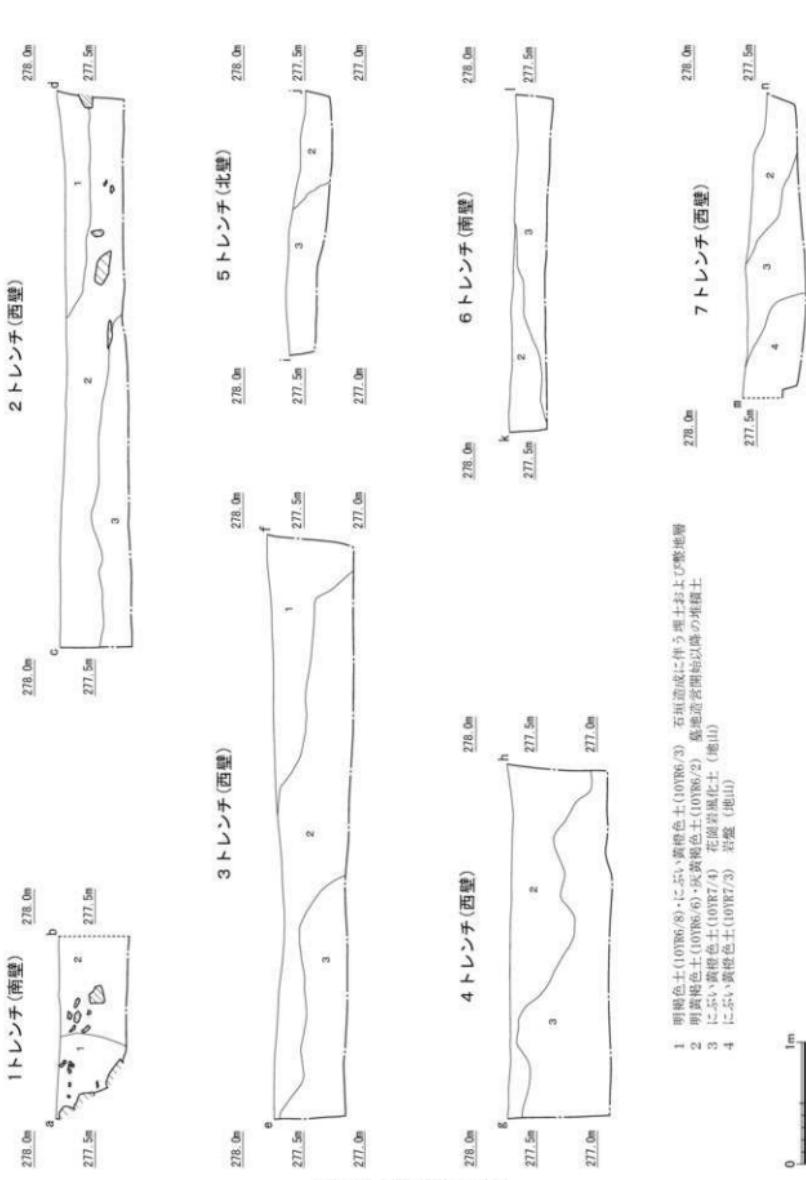


図 6-27 土層断面図 (1/40)

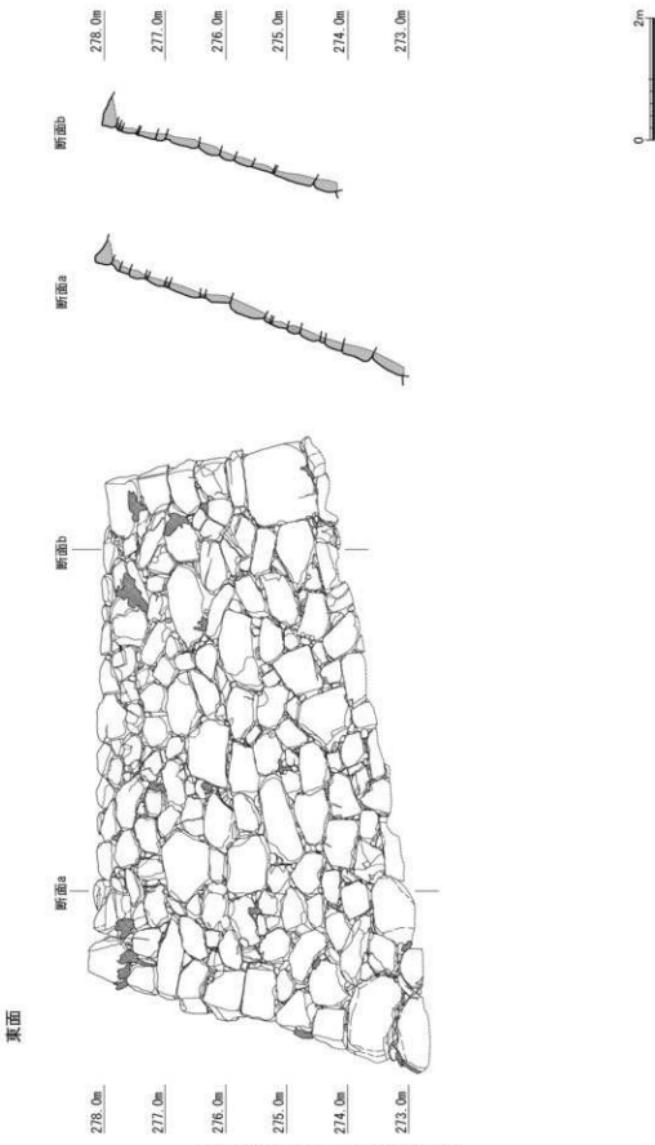
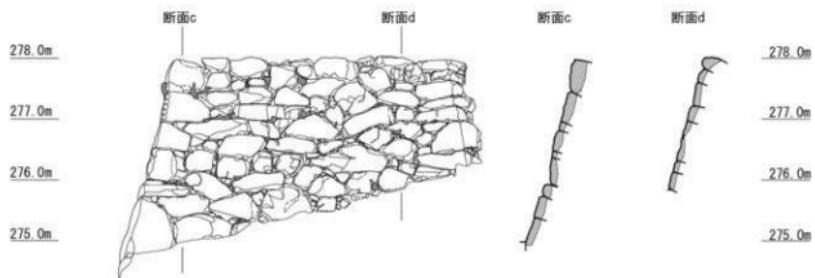
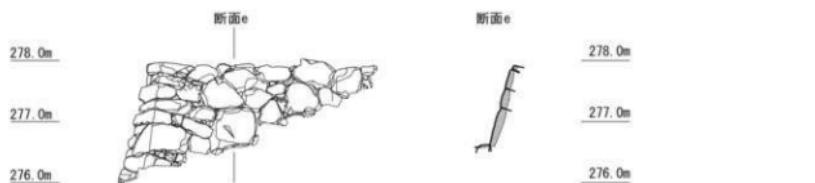


圖 6-28 石垣東面立面・断面図（1/80）

北面



西面



0 2m

図6-29 石垣北面及び西面立面・断面図 (1/150)

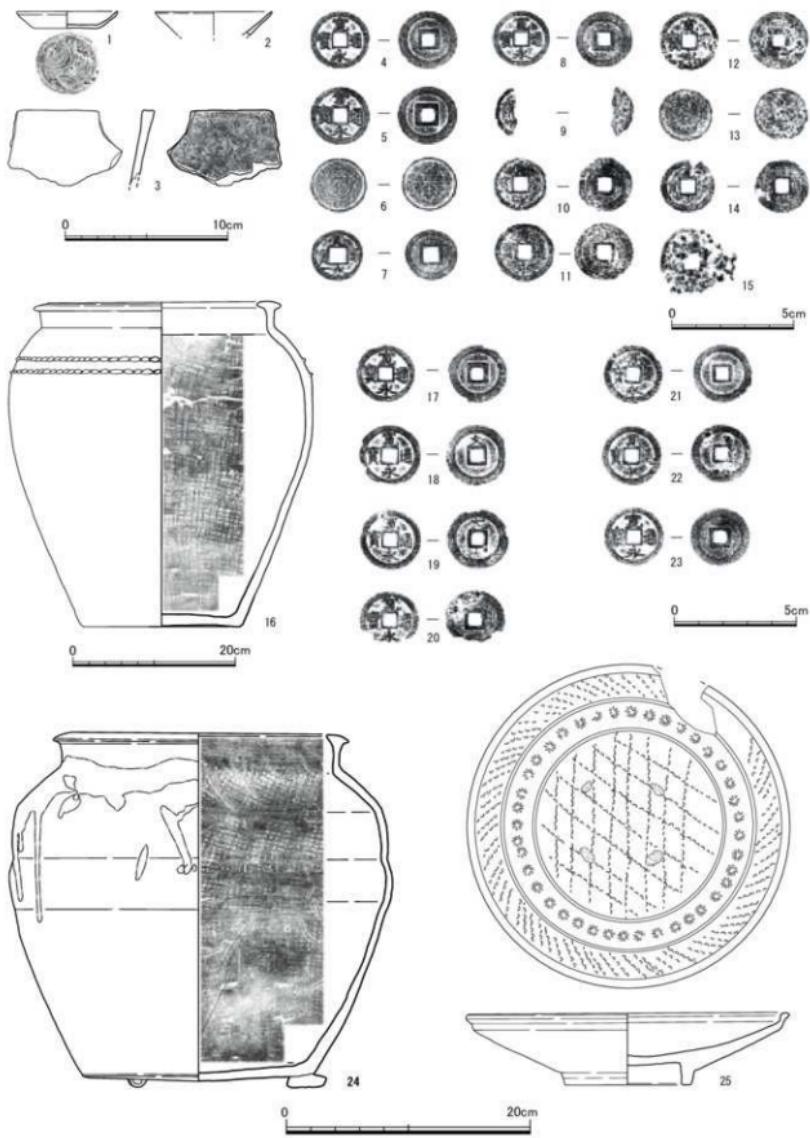


図6-30 9区出土遺物1 (1/2+1/3+1/4+1/6)

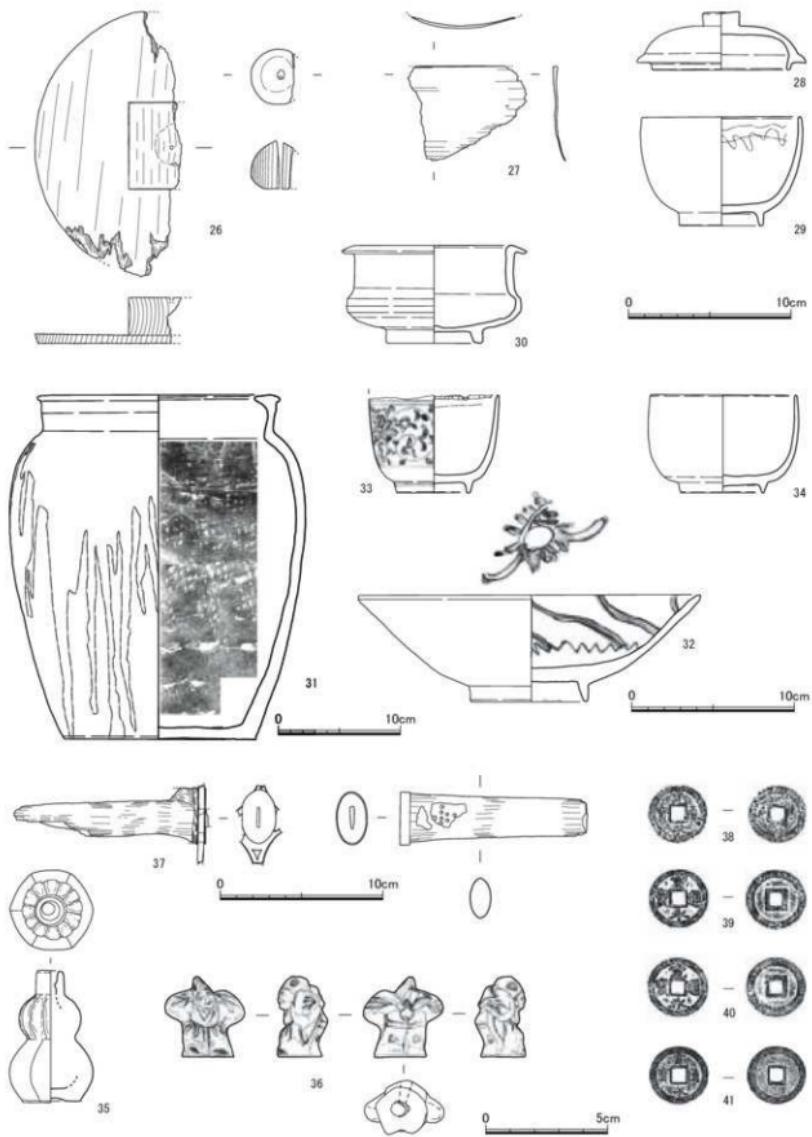


図6-31 9区出土遺物2 (1/2+1/3+1/4)

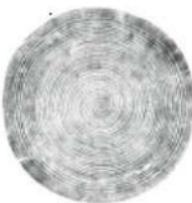
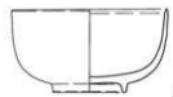
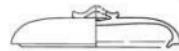
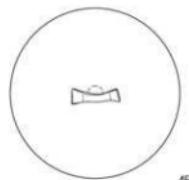
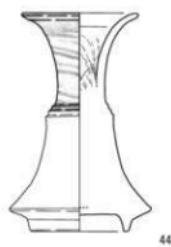
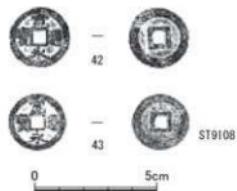


图 6-32 9 区出土遗物 3 (1/2 + 1/6)

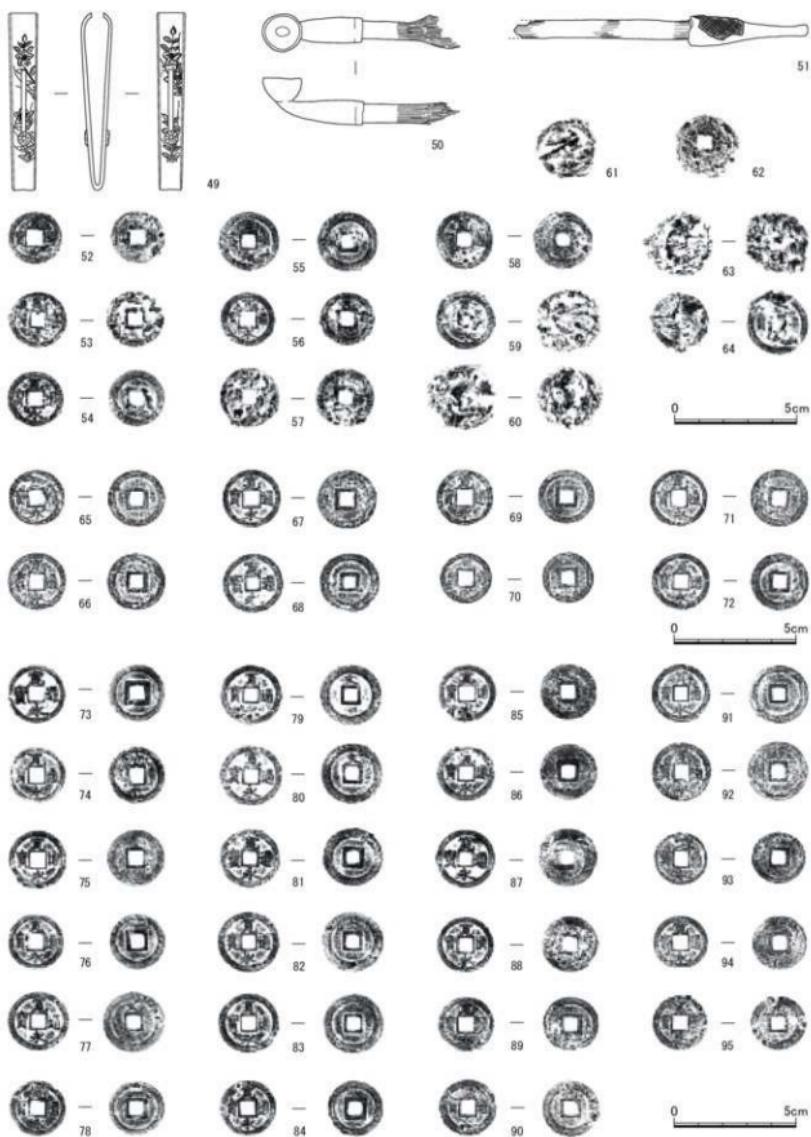


図6-33 9区出土遺物4 (1/2)

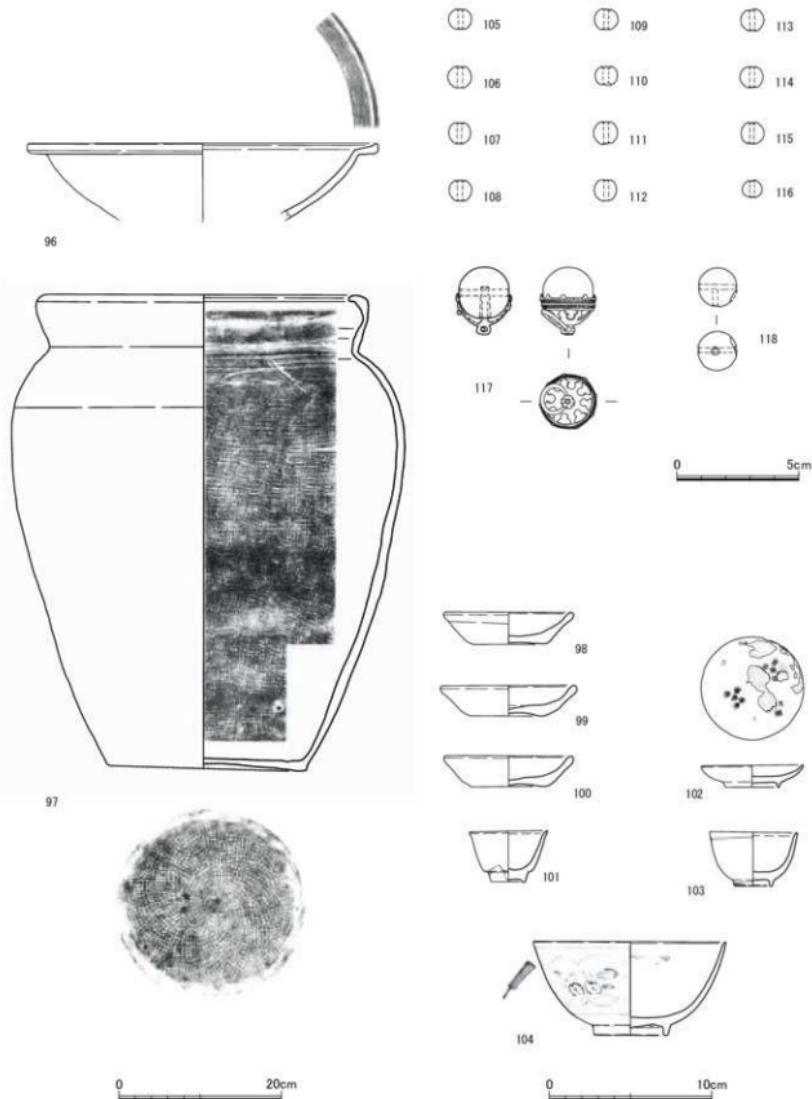


图6-34 9区出土遗物5 (1/2+1/3+1/6)

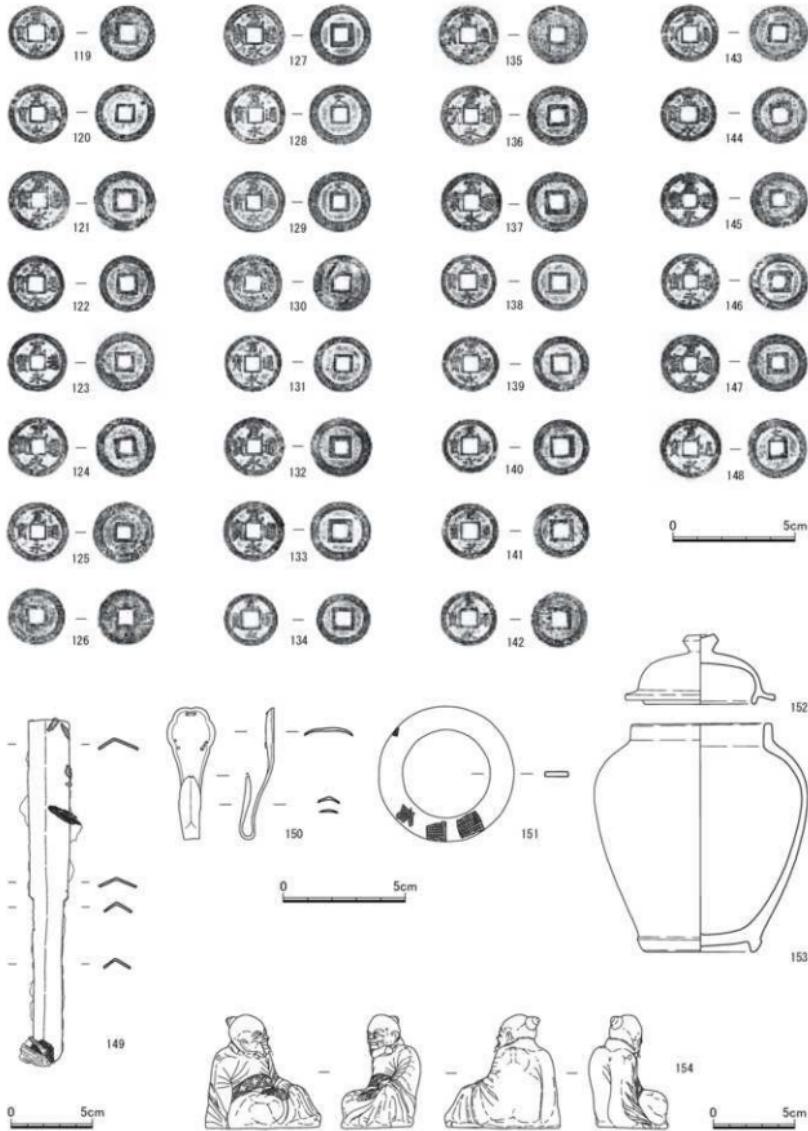


図6-35 9区出土遺物6 (1/2・1/3)

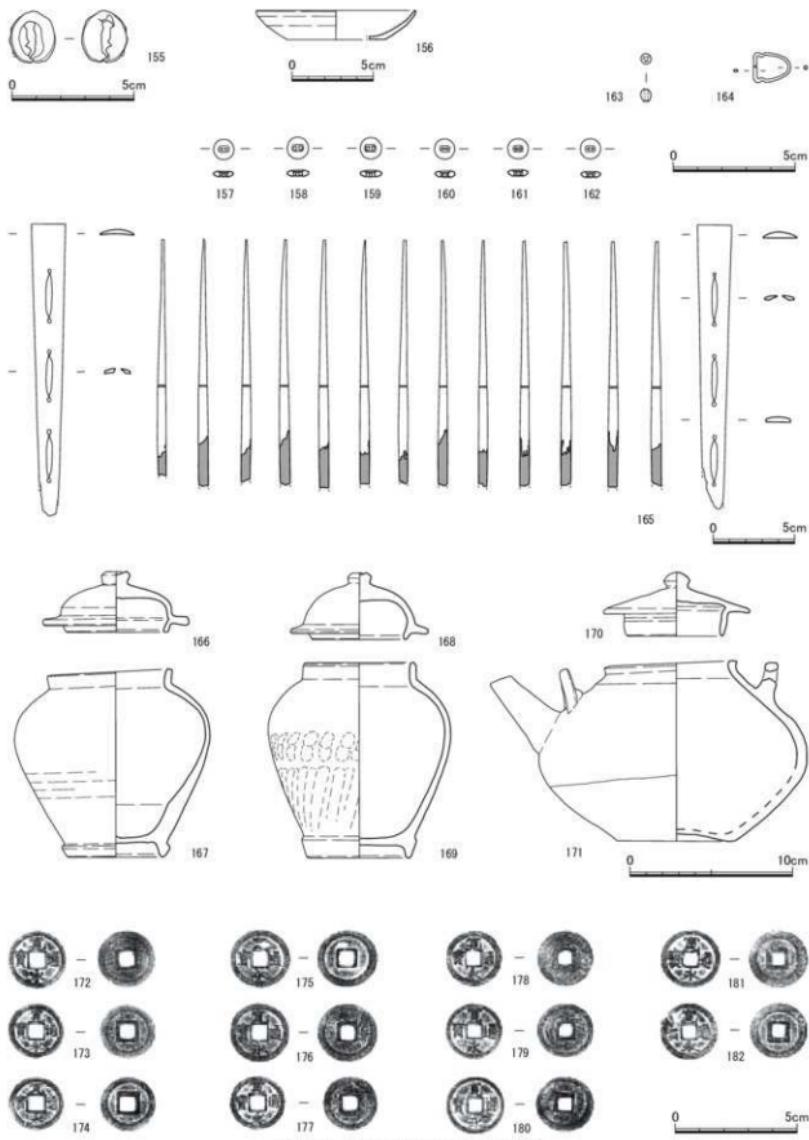


图 6-36 9区出土遗物 7 (1/2 · 1/3)

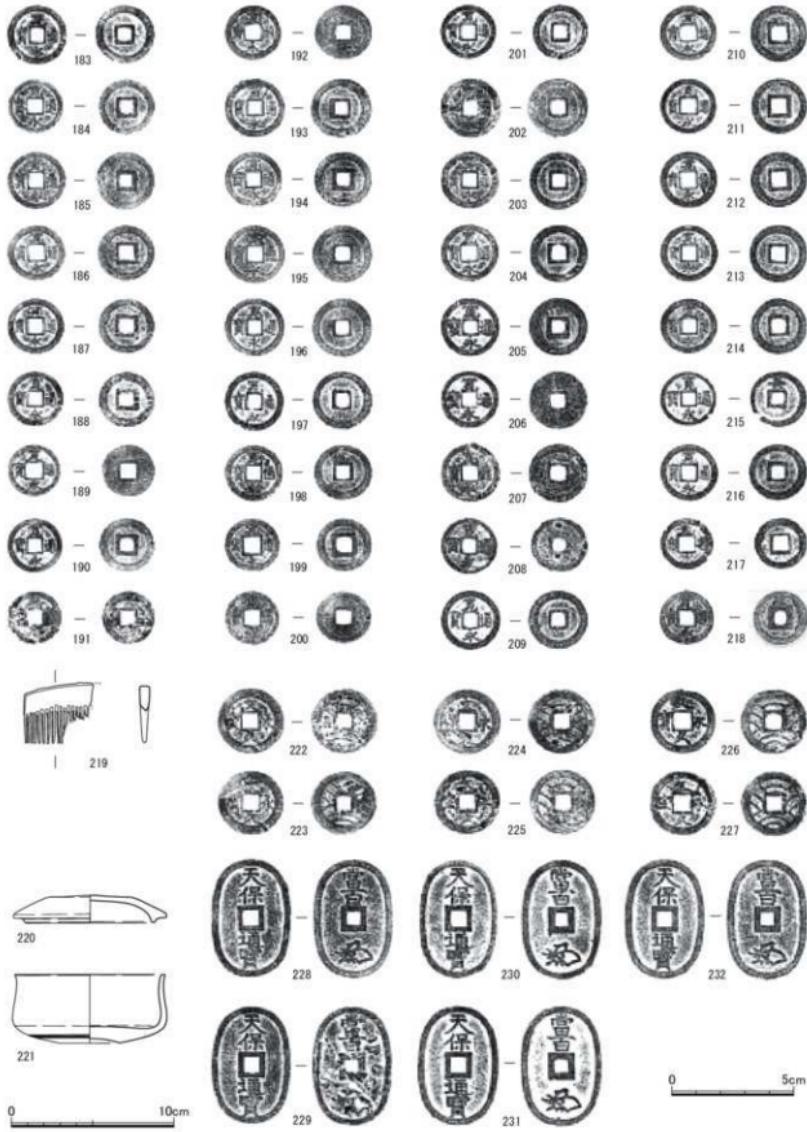


図6-37 9区出土遺物8 (1/2・1/3)

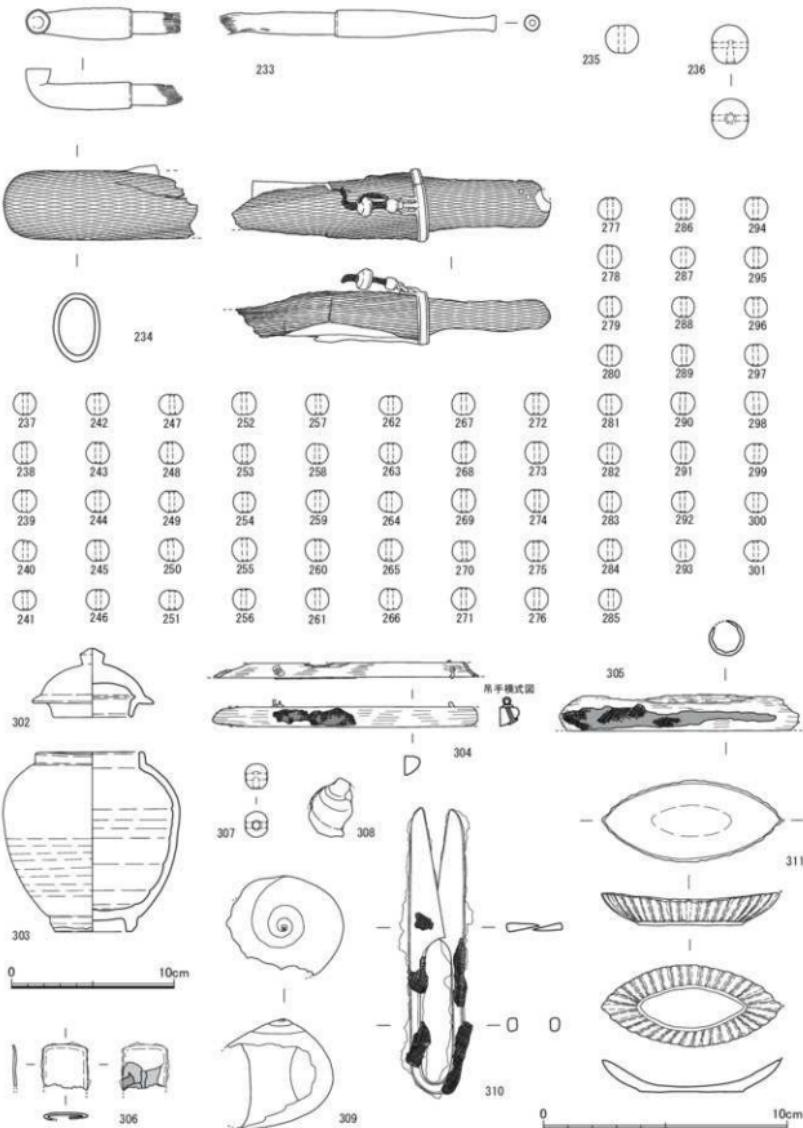


图 6-38 9 区出土遗物 9 (1/2 + 1/3)

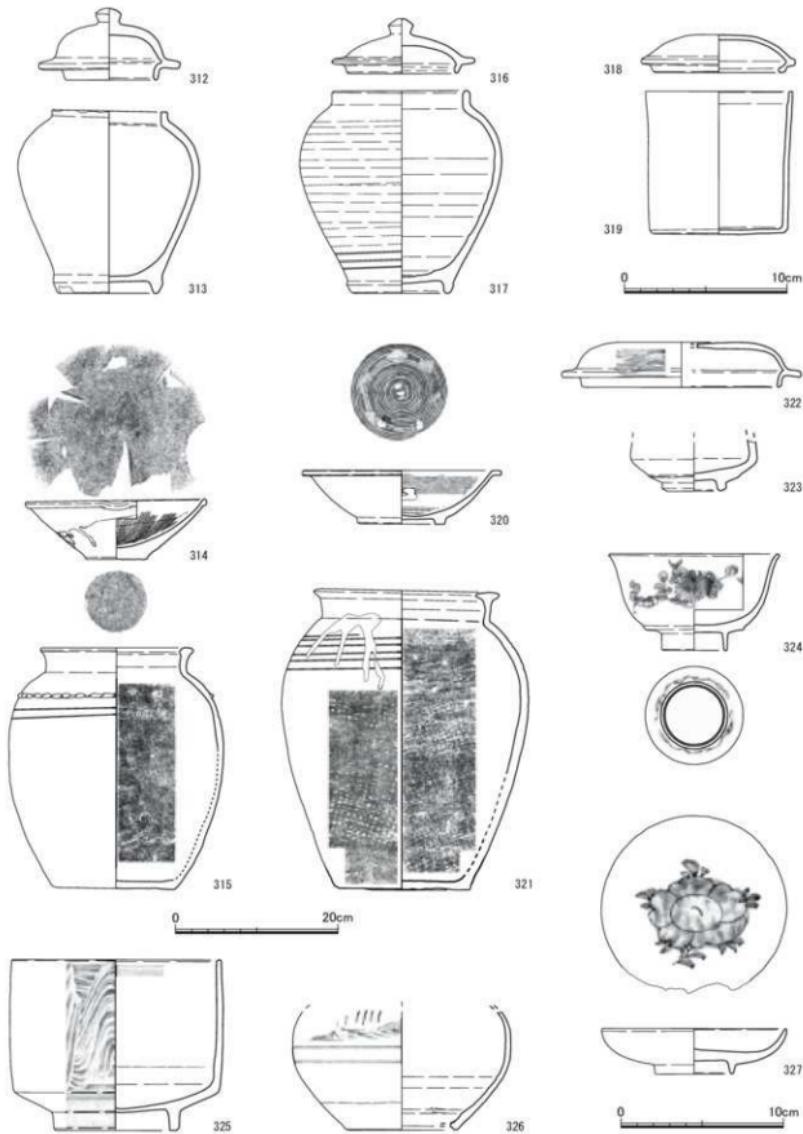


図6-39 9区出土遺物10 (1/3・1/6)

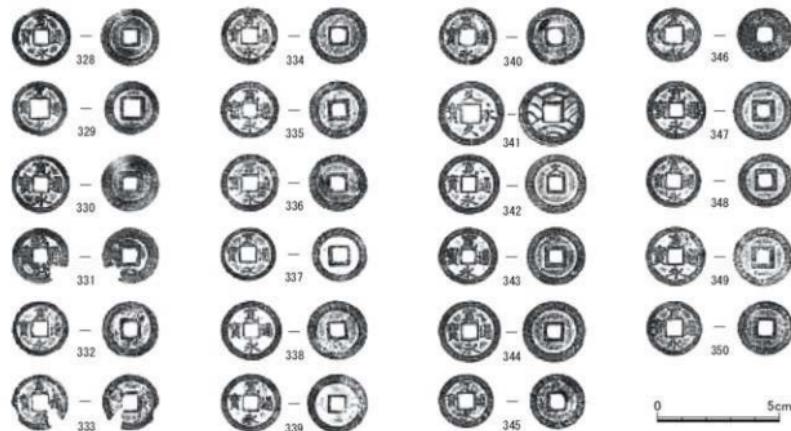


图6-40 9区出土遗物11 (1 / 2)

表6-3 9区出土遺物一覧

件名・番号 登録番号	出土位置	種別 器種	寸法 cm			色調	備考	写真図版 写真登録番号
			口径 / 長	底径 / 幅	高さ / 厚			
図6-30-1 10000040	SX9001	土師器 小皿	6.2	4.0	1.0	橙	底部斜切 油焼付着	写真図版 6-25-1 20102057
図6-30-2 10000041	SX9001	土師器 小皿	7.2*	-	-	橙		写真図版 6-25-2 20102058
図6-30-3 10000042	SX9001	土師器 刷毛	-	-	-	内：橙・にぶい黄橙 外：にじみ、褐	焼付着	写真図版 6-25-3 20102059
図6-30-4 09001633	SX9001	残鉢 刷毛	-	径 2.4	-	-	寛永通寶 2.9g 古寛永	写真図版 6-25-4 20080873
図6-30-5 09001634	SX9001	残鉢 刷毛	-	径 2.4	-	-	寛永通寶 3.3g 古寛永	写真図版 6-25-5 20080874
図6-30-6 09001635	SX9001	残鉢 近代鉢	-	径 2.3	-	-	1銁	写真図版 6-25-6 20080875
図6-30-7 09001636	SX9001	残鉢 刷毛	-	径 2.15	-	-	寛永通寶 2.2g 新寛永	写真図版 6-25-7 20080876
図6-30-8 09001638	SX9001	残鉢 刷毛	-	径 2.35	-	-	寛永通寶 2.0g 古寛永	写真図版 6-25-8 20080879
図6-30-9 09001639	SX9001	残鉢 刷毛	-	径 約2.3	-	-	寛永通寶か 1/3程度残存	写真図版 6-25-9 20080880
図6-30-10 09001645	SX9001	残鉢 刷毛	-	径 2.25	-	-	寛永通寶 1.6g	写真図版 6-25-10 20080889
	SX9001	残鉢 刷毛	-	-	-	-	寛永通宝か 6個ほどの破片 計2.6g	写真図版 6-25-13 20080892
図6-30-11 09001647	SX9001	残鉢 刷毛	-	径 2.45	-	-	寛永通寶 2.1g	写真図版 6-25-11 20080893
図6-30-12 09001648	SX9001	残鉢 刷毛	-	径 2.4	-	-	寛永通寶 2.8g 古寛永	写真図版 6-25-12 20080894
図6-30-13 09001649	SX9001	残鉢 近代鉢	-	径 2.2	-	-	平鉢	写真図版 6-25-14 20080895
図6-30-14 09001650	SX9001	残鉢 刷毛	-	径 2.2	-	-	寛永通寶 1.8g 新寛永	写真図版 6-25-15 20080896
図6-30-15 09001651	SX9001	残鉢 刷毛	-	径 約2.5	-	-	鉢のため残種不明	写真図版 6-25-16 20080897
図6-30-16 10000059	ST9101	陶器 瓶	30.3	19.6	39.7	胎土：にぶい赤褐色・明褐色 釉調：明褐色	肥前 17c後半 内面格子文当て具痕	写真図版 6-25-17 20102077
図6-30-17 09001490	ST9101	残鉢 刷毛	-	径 2.45	-	-	寛永通寶 2.5g 古寛永 相内出土	写真図版 6-25-18 20080721
図6-30-18 09001491	ST9101	残鉢 刷毛	-	径 2.5	-	-	寛永通寶 3.1g 新寛永(文銘) 相内出土	写真図版 6-25-19 20080722
図6-30-19 09001492	ST9101	残鉢 刷毛	-	径 2.5	-	-	寛永通寶 3.0g 新寛永(文銘) 相外出土	写真図版 6-25-20 20080723
図6-30-20 09001493	ST9101	残鉢 刷毛	-	径 2.45	-	-	寛永通寶 2.1g 古寛永 相外出土	写真図版 6-25-21 20080724
図6-30-21 09001494	ST9101	残鉢 刷毛	-	径 2.45	-	-	寛永通寶 2.6g 新寛永 相外出土	写真図版 6-25-22 20080725
図6-30-22 09001495	ST9101	残鉢 刷毛	-	径 2.45	-	-	寛永通寶 3.1g 新寛永 相外出土	写真図版 6-25-23 20080726
図6-30-23 09001496	ST9101	残鉢 刷毛	-	径 2.45	-	-	寛永通寶 3.0g 新寛永 相外出土	写真図版 6-25-24 20080727
図6-30-24 10000060	ST9102	陶器 瓶	24.1	18.7	28.4	胎土：褐灰 釉調：明褐色・オリーブ黄・オーバーブラック	肥前 17c後半 内外面格子文当て具・ 明褐色 底付 内面見込み胎土目痕3箇所	写真図版 6-25-30 20102078
図6-30-25 10000061	ST9102	陶器 瓶	26.4	10.4	5.8	胎土：にぶい黄褐色 釉調：にぶい赤褐色	肥前 武藏白山か 1630～1650年代 内面見込み胎土目痕4箇所	写真図版 6-25-29 20102023
図6-31-26 09001487	ST9102	木製品 曲物・蓋	長 (高) 6.0+	幅 6.85+	厚 0.25	-	09001712とセット	写真図版 6-25-27 20091668・ 20110926
図6-31-27 09001712	ST9102	木製品 曲物・身	16.8*	-	5.8*	-	09001487とセット	写真図版 6-25-28 20110927
図6-31-28 10000019	ST9102	白磁 蓋付碗・蓋	8.5	最大径 10.4	3.5	胎土：灰白	肥前 始野大動山か 1660～1670年代 10000019とセット	写真図版 6-25-26 20102039
図6-31-29 10000015	ST9102	白磁 蓋付碗・碗	9.8	5.2	6.7	胎土：灰白	肥前 始野大動山か 1660～1670年代 10000019とセット	写真図版 6-25-26 20102039

表6-3 9区出土遺物一覧

横列・番号 登録番号	出土位置	種別 器形	寸法 cm			色調	備考	写真図版 写真登録番号
			口径／長	底径／幅	高さ／厚			
岡 6-31-30 10000014	ST9102	陶器 縁香立	11.4*	5.9	6.0*	胎土：浅黄褐 釉調：赤黒	肥前 17c 後半	写真図版 6-25-25 20102038
岡 6-31-31 10000061	ST9103	陶器 瓶	19.9	15.8	28.3	胎土：暗褐 釉調：暗褐	肥前 1650～1660年代 格子紋文打て具・叩き具痕 胎土目皿 2箇所残存	写真図版 6-26-34 20102079
岡 6-31-32 10000013	ST9103	染付磁器 皿	21.1	7.3	6.6	胎土：灰白	肥前系 1650年代	写真図版 6-26-33 20102037
岡 6-31-33 10000008	ST9103	染付磁器 蓋付小鉢・身	8.0	4.1	6.0	胎土：白	肥前 1660年代 口縁部打ち欠き	写真図版 6-26-32 20102029
岡 6-31-34 10000007	ST9103	白磁 碗	9.0	5.1	6.0	胎土：白	肥前有田 1660～1680年代	写真図版 6-26-31 20102028
岡 6-31-35 10000009	ST9107	白磁 小瓶	1.1	2.4	5.4	胎土：灰白	肥前系 1650年代	写真図版 6-26-42 20102030
岡 6-31-36 10000011	ST9107	色绘磁器 縁飾・組付か	高 3.3	幅 3.3	厚 1.9	胎土：灰白	肥前 色繪（赤・金使用） 底部から背面に孔	写真図版 6-26-41 20102032・2035
岡 6-31-37 09001710	ST9107	鉄製品 刀	長 22.5+	-	-	-	柄部は光面。刃部・鞘部は荒面 を鋭化	写真図版 6-26-36 20102004
岡 6-31-38 09001497	ST9107	銭貨 銅錢	-	径 2.4	-	-	寛永通寶 2.8g 新寛永	写真図版 6-26-37 20080728
岡 6-31-39 09001498	ST9107	銭貨 銅錢	-	径 2.45	-	-	寛永通寶 3.2g 古寛永	写真図版 6-26-38 20080729
岡 6-31-40 09001499	ST9107	銭貨 銅錢	-	径 2.5	-	-	寛永通寶 3.3g 古寛永	写真図版 6-26-39 20080730
岡 6-31-41 09002931	ST9107	銭貨 銅錢	-	径 2.4	-	-	寛永通寶 2.4g 新寛永	写真図版 6-26-40 20102019
岡 6-32-42 09001500	ST9108	残銭 銅錢	-	径 2.5	-	-	寛永通寶 2.8g 古寛永	写真図版 6-26-43 20080731
岡 6-32-43 09001501	ST9108	残銭 銅錢	-	径 2.35	-	-	寛永通寶 2.5g 古寛永	写真図版 6-26-44 20080732
岡 6-32-44 10000018	ST9109	陶器 草瓶	7.3	6.1	13.4	胎土：灰黄 釉調：灰黄・墨褐	肥前 多久・武雄周辺か 17c末～18c前半	写真図版 6-26-45 20102042
岡 6-32-45 10000030	ST9110	白磁 蓋付瓶・盖	9.1	最大径 10.5	2.6*	胎土：白	肥前 18c代 10000031とセットではない	写真図版 6-26-46 20102048
岡 6-32-46 10000031	ST9110	白磁 蓋付瓶・身	9.6	4.5	5.1	胎土：白	肥前 18c代 10000030とセットではない	写真図版 6-26-46 20102048
岡 6-32-47 10000054	ST9112	陶器 鉢	48.4	23.7	16.4	胎土：赤茶褐 釉調：茶褐	肥前 19c代	写真図版 6-27-63 20102072
岡 6-32-48 10000063	ST9112	陶器 瓶	56.4	29.2	75.0	にふい赤褐	肥前 19c代	写真図版 6-27-64 20102081
岡 6-33-49 09001705	ST9112	青磁製品 毛板	長 7.3	幅 1.2	厚 1.2	-	鏡面 棘突文様毛彫	写真図版 6-27-65 20101999・2000
岡 6-33-50 09001707	ST9112	青磁・竹製品 理官百合	長 12.1+	径 1.5	-	-	径は椎首の最大径 09001706と同一個体	写真図版 6-27-61 20102001
岡 6-33-51 09001706	ST9112	青磁・竹製品 理官百合	長 8.1+	径 1.2	-	-	径は吸いの最大径 布片付着 09001707と同一個体	写真図版 6-27-61 20102001
-	ST9112	布製品 理官入	-	-	-	-	錦袋が入った状態で出土	写真図版 6-27-62 20102008
岡 6-33-52 09001502	ST9112	残銭 銅錢	-	径 2.25	-	-	寛永通寶 2.6g 新寛永	写真図版 6-26-47 20080733
岡 6-33-53 09001503	ST9112	残銭 銅錢	-	径 2.35	-	-	寛永通寶 1.7g 新寛永	写真図版 6-26-48 20080734
岡 6-33-54 09001504	ST9112	残銭 銅錢	-	径 2.3	-	-	寛永通寶 2.9g 古寛永	写真図版 6-26-49 20080735
岡 6-33-55 09001505	ST9112	残銭 銅錢	-	径 2.5	-	-	寛永通寶 4.0g 新寛永	写真図版 6-26-50 20080736
岡 6-33-56 09001506	ST9112	残銭 銅錢	-	径 2.25	-	-	寛永通寶 (元字政) 1.9g 新寛永	写真図版 6-26-51 20080737
岡 6-33-57 09001507	ST9112	残銭 銅錢	-	径 2.5	-	-	寛永通寶 3.3g	写真図版 6-26-52 20080738
岡 6-33-58 09001508	ST9112	残銭 銅錢	-	径 2.4	-	-	寛永通寶 2.8g	写真図版 6-26-53 20080739
岡 6-33-59 09001509	ST9112	残銭 銅錢・鉄錢	-	径 2.4	-	-	寛永通寶 新寛永 裏面で鉄錢と錯着 2枚で 7.0g	写真図版 6-26-54 20080740

表6-3 9区出土遺物一覧

横列 登録番号	出土位置	種別 器種	寸法 cm			色調	備考	写真図版 写真登録番号
			口径 / 長	底径 / 幅	高さ / 厚			
岡 6-33-60 09001510	ST9112	銭貨 鉄錢か	-	径 2.5	-	-	2~3枚踏着か 9.4g	写真図版 6-26-55 20080741
岡 6-33-61 09001511	ST9112	銭貨 銅錢・鉄錢	-	径 2.4	-	-	寛永通寶と鉄錢が付着 8.3g	写真図版 6-26-57 20080742
岡 6-33-62 09001512	ST9112	銭貨 銅錢・鉄錢	-	径 2.35	-	-	銅錢と鉄錢が付着 11.2g 布付着	写真図版 6-26-58 20080743
岡 6-33-63 09001513	ST9112	銭貨 鉄錢	-	径 約2.5	-	-	2~3枚踏着か 11.8g	写真図版 6-26-59 20080744
岡 6-33-64 09001514	ST9112	銭貨 銅錢・鉄錢	-	径 2.5	-	-	鉄錢を挟み 2枚の寛永通寶 (銅錢)が踏着 10.1g	写真図版 6-26-60 20080745
-	ST9112	銭貨 銅錢・鉄錢	-	径 2.5	-	-	銅錢と鉄錢が踏着 計 10.4g 布付着	写真図版 6-26-56 20090946
岡 6-33-65 09001515	ST9114	銭貨 銅錢	-	径 2.35	-	-	寛永通寶 2.8g 新寛永	写真図版 6-27-66 20080746
岡 6-33-66 09001516	ST9114	銭貨 銅錢	-	径 2.4	-	-	寛永通寶 3.2g 新寛永か	写真図版 6-27-67 20080747
岡 6-33-67 09001517	ST9114	銭貨 銅錢	-	径 2.4	-	-	寛永通寶 2.6g 新寛永	写真図版 6-27-68 20080748
岡 6-33-68 09001518	ST9114	銭貨 銅錢	-	径 2.5	-	-	寛永通寶 3.0g 古寛永	写真図版 6-27-69 20080749
岡 6-33-69 09001519	ST9114	銭貨 銅錢	-	径 2.3	-	-	寛永通寶 2.3g 新寛永	写真図版 6-27-70 20080750
岡 6-33-70 09001520	ST9114	銭貨 銅錢	-	径 2.15	-	-	寛永通寶 2.6g	写真図版 6-27-71 20080751
岡 6-33-71 09001521	ST9114	銭貨 銅錢	-	径 2.4	-	-	寛永通寶 2.6g 新寛永	写真図版 6-27-72 20080752
岡 6-33-72 09001522	ST9114	銭貨 銅錢	-	径 2.4	-	-	寛永通寶 3.1g 新寛永	写真図版 6-27-73 20080753
-	ST9115	漆 扇子	-	-	-	-	扇子の漆塗膜	写真図版 6-27-76 20102006
-	ST9117	銭貨 銅錢	-	-	-	-	銅錢 15枚以上が踏着	写真図版 6-27-75 20080947
-	ST9117	銭貨 銅錢	-	-	-	-	銅錢 5枚が踏着	写真図版 6-27-74 20080948
岡 6-33-73 09001523	ST9118	銭貨 銅錢	-	径 2.4	-	-	寛永通寶 3.4g 古寛永	写真図版 6-28-77 20080754
岡 6-33-74 09001524	ST9118	銭貨 銅錢	-	径 2.35	-	-	寛永通寶 2.5g 古寛永	写真図版 6-28-78 20080755
岡 6-33-75 09001525	ST9118	銭貨 銅錢	-	径 2.4	-	-	寛永通寶 2.8g 新寛永	写真図版 6-28-79 20080756
岡 6-33-76 09001526	ST9118	銭貨 銅錢	-	径 2.3	-	-	寛永通寶 3.2g 新寛永	写真図版 6-28-80 20080757
岡 6-33-77 09001527	ST9118	銭貨 銅錢	-	径 2.5	-	-	寛永通寶 3.3g 新寛永 (文面)	写真図版 6-28-81 20080758
岡 6-33-78 09001528	ST9118	銭貨 銅錢	-	径 2.3	-	-	寛永通寶 2.9g 新寛永	写真図版 6-28-82 20080759
岡 6-33-79 09001529	ST9118	銭貨 銅錢	-	径 2.55	-	-	寛永通寶 3.6g 新寛永 (文面)	写真図版 6-28-83 20080760+761
岡 6-33-80 09001530	ST9118	銭貨 銅錢	-	径 2.5	-	-	寛永通寶 3.3g 新寛永 (文面)	写真図版 6-28-84 20080762+763
岡 6-33-81 09001531	ST9118	銭貨 銅錢	-	径 2.45	-	-	寛永通寶 3.6g 古寛永	写真図版 6-28-85 20080764
岡 6-33-82 09001532	ST9118	銭貨 銅錢	-	径 2.5	-	-	寛永通寶 2.7g 新寛永 (文面)	写真図版 6-28-86 20080765
岡 6-33-83 09001533	ST9118	銭貨 銅錢	-	径 2.5	-	-	寛永通寶 3.4g 新寛永	写真図版 6-28-87 20080766
岡 6-33-84 09001534	ST9118	銭貨 銅錢	-	径 2.3	-	-	寛永通寶 3.0g 新寛永	写真図版 6-28-88 20080767
岡 6-33-85 09001535	ST9118	銭貨 銅錢	-	径 2.35	-	-	寛永通寶 1.9g 新寛永	写真図版 6-28-89 20080768
岡 6-33-86 09001536	ST9118	銭貨 銅錢	-	径 2.4	-	-	寛永通寶 2.5g 新寛永	写真図版 6-28-90 20080769
岡 6-33-87 09001537	ST9118	銭貨 銅錢	-	径 2.45	-	-	寛永通寶 3.1g 古寛永	写真図版 6-28-91 20080770

表6-3 9区出土遺物一覧

横列・番号 登録番号	出土位置	種別 器種	寸法 cm			色調	備考	写真図版 写真登録番号
			口径 / 長 底径 / 幅	高さ / 厚				
岡 6-33-88 09001538	ST9118	残貨 銅錢	-	径 2.35	-	-	寛永通寶 2.6g 新寛永	写真図版 6-28-92 20080771
岡 6-33-89 09001539	ST9118	残貨 銅錢	-	径 2.35	-	-	寛永通寶 2.5g	写真図版 6-28-93 20080772
岡 6-33-90 09001540	ST9118	残貨 銅錢	-	径 2.35	-	-	寛永通寶 2.4g 新寛永 (元字錢)	写真図版 6-28-94 20080773
岡 6-33-91 09001541	ST9118	残貨 銅錢	-	径 2.45	-	-	寛永通寶 3.2g 新寛永	写真図版 6-28-95 20080774
岡 6-33-92 09001542	ST9118	残貨 銅錢	-	径 2.5	-	-	寛永通寶 3.6g	写真図版 6-28-96 20080775
岡 6-33-93 09001543	ST9118	残貨 銅錢	-	径 2.2	-	-	寛永通寶 2.2g 新寛永	写真図版 6-28-97 20080776
岡 6-33-94 09001544	ST9118	残貨 銅錢	-	径 2.25	-	-	寛永通寶 2.1g 新寛永	写真図版 6-28-98 20080777
岡 6-33-95 09001545	ST9118	残貨 銅錢	-	径 2.3	-	-	寛永通寶 2.7g 新寛永 (元字錢)	写真図版 6-28-99 20080778
岡 6-34-96 10000057	ST9119	陶器皿	43.2*	-	-	胎土：明治褐 釉面：青釉	肥前 1650年代	写真図版 6-28-114 20102074・2075
岡 6-34-97 10000058	ST9119	陶器皿	40.9	24.2	58.3	胎土：灰褐 釉面：褐	肥前 1630～1650年代 内面格子口文當て具痕有り	写真図版 6-28-115 20102076
岡 6-34-98 10000064	ST9119	土師器 小皿	8.0	4.5	2.0	胎		写真図版 6-28-116 20102025
岡 6-34-99 10000065	ST9119	土師器 小皿	8.4	4.5	1.9	に少し黄粉	底部承切	写真図版 6-28-117 20102026
岡 6-34-100 10000066	ST9119	土師器 小皿	8.0	4.6	1.9	に少し黄粉		写真図版 6-28-118 20102027
岡 6-34-101 10000017	ST9119	白磁 小杯	4.8	2.1	3.1	胎土：純白	1650年代前後	写真図版 6-28-121 20102041
岡 6-34-102 10000012	ST9119	染付磁器 小皿	6.3	3.3	1.3	胎土：白	内外面に付着物	写真図版 6-28-119 20102036
岡 6-34-103 10000016	ST9119	染付磁器 小杯	5.4	2.4	3.3	胎土：灰白	1650年代	写真図版 6-28-120 20102040
岡 6-34-104 10000010	ST9119	色絵磁器 碗	11.9	4.6	5.8	胎土：白	肥前 古九谷様式 1650～1660年代 底部紺口痕	写真図版 6-28-122 20102031
岡 6-34-105 09001717	ST9122	水晶製品 数珠玉	-	径 0.95	-	-		写真図版 6-28-100 20094742
岡 6-34-106 09001718	ST9122	水晶製品 数珠玉	-	径 1.0	-	-		写真図版 6-28-101 20094743
岡 6-34-107 09001719	ST9122	水晶製品 数珠玉	-	径 0.9	-	-		写真図版 6-28-102 20094744
岡 6-34-108 09001720	ST9122	水晶製品 数珠玉	-	径 0.95	-	-		写真図版 6-28-103 20094745
岡 6-34-109 09001721	ST9122	水晶製品 数珠玉	-	径 0.95	-	-		写真図版 6-28-104 20094746
岡 6-34-110 09001722	ST9122	水晶製品 数珠玉	-	径 0.9	-	-		写真図版 6-28-105 20094747
岡 6-34-111 09001723	ST9122	水晶製品 数珠玉	-	径 1.0	-	-		写真図版 6-28-106 20094748
岡 6-34-112 09001724	ST9122	水晶製品 数珠玉	-	径 0.9	-	-		写真図版 6-28-107 20094749
岡 6-34-113 09001725	ST9122	水晶製品 数珠玉	-	径 0.95	-	-		写真図版 6-28-108 20094750
岡 6-34-114 09001726	ST9122	水晶製品 数珠玉	-	径 0.95	-	-		写真図版 6-28-109 20094751
岡 6-34-115 09002927	ST9122	水晶製品 数珠玉	-	径 1.05	-	-		写真図版 6-28-110 20102016
岡 6-34-116 09002928	ST9122	ガラス製品 玉	-	径 1.6	-	-		写真図版 6-28-111 20092016
岡 6-34-117 09001715	ST9122	水晶製品 数珠玉	-	径 2.1	-	-	鍍金青銅製金具付き T字状の孔	写真図版 6-28-112 20094740
岡 6-34-118 09001716	ST9122	水晶製品 数珠玉	-	径 1.6	-	-	T字状の孔	写真図版 6-28-113 20094741

表6-3 9区出土遺物一覧

横列 番号 登録番号	出土位置	種別 器種	寸法 cm			色調	備考	写真図版 写真登録番号
			口径 / 長	底径 / 幅	高 / 厚			
岡-35-119 09001546	ST9124	残貨 銅錢	-	径 2.3	-	-	寛永通寶 2.1g 新寛永	写真図版 6-29-123 20080779
岡-35-120 09001547	ST9124	残貨 銅錢	-	径 2.45	-	-	寛永通寶 2.9g 新寛永	写真図版 6-29-124 20080780
岡-35-121 09001548	ST9124	残貨 銅錢	-	径 2.5	-	-	寛永通寶 3.0g 古寛永	写真図版 6-29-125 20080781
岡-35-122 09001549	ST9124	残貨 銅錢	-	径 2.3	-	-	寛永通寶 3.3g 新寛永	写真図版 6-29-126 20080782
岡-35-123 09001550	ST9124	残貨 銅錢	-	径 2.45	-	-	寛永通寶 4.0g 古寛永	写真図版 6-29-127 20080783
岡-35-124 09001551	ST9124	残貨 銅錢	-	径 2.5	-	-	寛永通寶 4.1g 古寛永	写真図版 6-29-128 20080784
岡-35-125 09001552	ST9124	残貨 銅錢	-	径 2.55	-	-	寛永通寶 4.0g 新寛永	写真図版 6-29-129 20080785
岡-35-126 09001553	ST9124	残貨 銅錢	-	径 2.35	-	-	摩耗により種類不明 2.5g	写真図版 6-29-130 20080786
岡-35-127 09001554	ST9124	残貨 銅錢	-	径 2.5	-	-	寛永通寶 3.1g 古寛永	写真図版 6-29-131 20080787
岡-35-128 09001555	ST9124	残貨 銅錢	-	径 2.5	-	-	寛永通寶 3.3g 新寛永(文様)	写真図版 6-29-132 20080788 - 0789
岡-35-129 09001556	ST9124	残貨 銅錢	-	径 2.55	-	-	寛永通寶 3.4g 新寛永(文様)	写真図版 6-29-133 20080790 - 0791
岡-35-130 09001557	ST9124	残貨 銅錢	-	径 2.4	-	-	寛永通寶 3.2g 新寛永	写真図版 6-29-134 20080792
岡-35-131 09001558	ST9124	残貨 銅錢	-	径 2.4	-	-	寛永通寶 2.9g 新寛永	写真図版 6-29-135 20080793
岡-35-132 09001559	ST9124	残貨 銅錢	-	径 2.5	-	-	寛永通寶 3.8g 古寛永	写真図版 6-29-136 20080794
岡-35-133 09001560	ST9124	残貨 銅錢	-	径 2.5	-	-	寛永通寶 2.7g 古寛永	写真図版 6-29-137 20080795
岡-35-134 09001561	ST9124	残貨 銅錢	-	径 2.2	-	-	寛永通寶 2.4g 新寛永	写真図版 6-29-138 20080796
岡-35-135 09001562	ST9124	残貨 銅錢	-	径 2.5	-	-	寛永通寶 2.7g 新寛永	写真図版 6-29-139 20080797
岡-35-136 09001563	ST9124	残貨 銅錢	-	径 2.5	-	-	寛永通寶 3.0g 古寛永	写真図版 6-29-140 20080798
岡-35-137 09001564	ST9124	残貨 銅錢	-	径 2.5	-	-	寛永通寶 4.1g 古寛永	写真図版 6-29-141 20080799
岡-35-138 09001565	ST9124	残貨 銅錢	-	径 2.3	-	-	寛永通寶 2.5g 新寛永	写真図版 6-29-142 20080800
岡-35-139 09001566	ST9124	残貨 銅錢	-	径 2.3	-	-	寛永通寶 2.6g 新寛永	写真図版 6-29-143 20080801
岡-35-140 09001567	ST9124	残貨 銅錢	-	径 2.3	-	-	寛永通寶 2.6g 新寛永	写真図版 6-29-144 20080802
岡-35-141 09001568	ST9124	残貨 銅錢	-	径 2.35	-	-	寛永通寶 2.8g 新寛永	写真図版 6-29-145 20080803
岡-35-142 09001569	ST9124	残貨 銅錢	-	径 2.35	-	-	寛永通寶 2.6g 新寛永	写真図版 6-29-146 20080804
岡-35-143 09001570	ST9124	残貨 銅錢	-	径 2.4	-	-	寛永通寶 3.2g 新寛永	写真図版 6-29-147 20080805
岡-35-144 09001571	ST9124	残貨 銅錢	-	径 2.3	-	-	寛永通寶 2.8g 新寛永	写真図版 6-29-148 20080806
岡-35-145 09001572	ST9124	残貨 銅錢	-	径 2.4	-	-	寛永通寶 3.2g	写真図版 6-29-149 20080807
岡-35-146 09001573	ST9124	残貨 銅錢	-	径 2.4	-	-	寛永通寶 2.9g 古寛永	写真図版 6-29-150 20080808
岡-35-147 09001574	ST9124	残貨 銅錢	-	径 2.45	-	-	寛永通寶 3.0g 古寛永	写真図版 6-29-151 20080809
岡-35-148 09001575	ST9124	残貨 銅錢	-	径 2.5	-	-	寛永通寶 3.2g 新寛永(文様)	写真図版 6-29-152 20080810
岡-35-149 09001704	ST9124	不明鉄製品	長 16.0	幅 2.5	厚 0.1	-	木片・布片着 神像持物・仏具か	写真図版 6-29-153 20101998
岡-35-150 09001703	ST9124	青銅製品 呂金具	長 5.4	幅 2.0	厚 0.1強	-	09001702と組み合わせて使用	写真図版 6-29-154 20101997

表6-3 9区出土遺物一覧

横列・番号 登録番号	出土位置	種別 器種	寸法 cm			色調	備考	写真図版 写真登録番号
			口径 / 長 底径 / 幅	高さ / 厚				
岡-35-151 09001702	ST9124	青銅製品 硝子環	5.5	幅 0.9	厚 0.2	-	布付着 09001703 と組み合わせて使用	写真図版 6-29-155 20101996
岡-35-152 10000024	ST9125	白磁 磁付器・蓋	6.8	最大径 9.2	4.3	胎土：灰白	17c 後半～18c 初 10000025 とセット	写真図版 6-29-157 20102045
岡-35-153 10000025	ST9125	白磁 磁付器・身	8.6	6.7	14.0	胎土：灰白	17c 後半～18c 初 10000024 とセット	写真図版 6-29-157 20102045
岡-35-154 10000032	ST9127	白磁 水滴	-	底部幅 7.0 × 4.3	7.0	胎土：灰白	17c 後半～18c 前半 内側に 1 回有り孔	写真図版 6-29-158 20102051
岡-36-155 09001698	ST9130	銅製品 座右置小皿	長径 2.1	短径 1.85	厚 0.3	-		写真図版 6-29-159 20080952
岡-36-156 10000055	ST9130	土師器 小皿	9.8*	6.0*	1.8	灰黄		写真図版 6-29-163 20110391
-	ST9130	残鉢 鉢底	-	径 2.6*	-	-	鉢底か	写真図版 6-29-160 20080949
-	ST9130	残鉢 鉢底	-	径 2.5*	-	-	鉢底 2 枚付着 計 5.0g	写真図版 6-29-161 20090950
-	ST9130	残鉢 鉢底	-	径 2.5*	-	-	鉢底 2 枚付着 計 7.5g	写真図版 6-29-162 20080951
岡-36-157 09002920	ST9131	ガラス製品 ボタン	径 1.1	-	厚 0.3	白		写真図版 6-29-165 20102008
岡-36-158 09002921	ST9131	ガラス製品 ボタン	径 1.2	-	厚 0.3	白		写真図版 6-29-166 20102009
岡-36-159 09002922	ST9131	ガラス製品 ボタン	径 1.2	-	厚 0.4	白		写真図版 6-29-167 20102010
岡-36-160 09002923	ST9131	ガラス製品 ボタン	径 1.1	-	厚 0.4	白		写真図版 6-29-168 20102011
岡-36-161 09002924	ST9131	ガラス製品 ボタン	径 1.1	-	厚 0.3	白		写真図版 6-29-169 20102012
岡-36-162 09002925	ST9131	ガラス製品 ボタン	径 1.1	-	厚 0.3	白		写真図版 6-29-170 20102013
岡-36-163 09002929	ST9131	ガラス製品 玉	-	径 0.4	-	-		写真図版 6-29-164 20102017
岡-36-164 09002930	ST9131	不明金属製品	1.25	1.5	-	-	真鍮製か	写真図版 6-29-171 20102018
岡-36-165 09001711	ST9131	竹製品 扇子	長 17.5 幅 中骨：15.3 中骨：15.3	幅 中骨：2.1 中骨：0.7	厚 0.4 中骨：0.1	-	側骨表面に赤漆 中骨下部に赤色顔料塗布	写真図版 6-29-172 20102005
-	ST9131	金モール	-	-	-	-		写真図版 6-29-173 20102099 · 2100 · 2101
岡-36-166 10000028	ST9132	白磁 磁付器・蓋	6.8	最大径 9.0	3.7	胎土：白	肥前 17c 後半～18c 初 10000029 とセット	写真図版 6-30-174 20102047
岡-36-167 10000029	ST9132	白磁 磁付器・身	7.4 ~ 7.7	6.0	11.4	胎土：白	肥前 17c 後半～18c 初 10000028 とセット	写真図版 6-30-174 20102047
岡-36-168 10000034	ST9134	白磁 磁付器・蓋	5.9*	最大径 8.5*	4.1	胎土：白	肥前 1690 年代か 10000033 とセット	写真図版 6-30-175 20102053
岡-36-169 10000033	ST9134	白磁 磁付器・身	7.0*	6.2	12.0	胎土：白	肥前 1690 年代か 10000034 とセット	写真図版 6-30-175 20102053
岡-36-170 10000035	ST9135	陶器 土瓶・蓋	6.0	最大径 9.1	3.9	胎土：灰褐色 釉調：コバルトブルー	肥前 武雄黒牛田系統 19c 代	写真図版 6-30-176 20102054
岡-36-171 10000036	ST9135	陶器 土瓶・身	8.2	7.2	11.0	胎土：灰褐色 釉調：コバルトブルー	肥前 武雄黒牛田系統 19c 代	写真図版 6-30-176 20102054
岡-36-172 09001576	ST9136	残鉢 鉢底	-	径 2.35	-	-	寛永通寶 2.8g 新寛永	写真図版 6-30-179 20080811
岡-36-173 09001577	ST9136	残鉢 鉢底	-	径 2.3	-	-	寛永通寶 2.6g 新寛永	写真図版 6-30-180 20080812
岡-36-174 09001578	ST9136	残鉢 鉢底	-	径 2.3	-	-	寛永通寶 2.4g 新寛永	写真図版 6-30-181 20080813
岡-36-175 09001579	ST9136	残鉢 鉢底	-	径 2.45	-	-	寛永通寶 2.5g 新寛永	写真図版 6-30-182 20080814
岡-36-176 09001580	ST9136	残鉢 鉢底	-	径 2.45	-	-	寛永通寶 2.6g 新寛永	写真図版 6-30-183 20080815
岡-36-177 09001581	ST9136	残鉢 鉢底	-	径 2.25	-	-	寛永通寶 3.6g 新寛永	写真図版 6-30-184 20080816

表6-3 9区出土遺物一覧

横列 番号 登録番号	出土位置	種別 器種	寸法 cm			色調	備考	写真図版 写真登録番号
			口径 / 長 底径 / 幅	高さ / 厚				
円6-36-178 09001582	ST9136	残貨 銅錢	-	径 2.3	-	-	寛永通寶 2.7g 新寛永	写真図版 6-30-185 20080817
円6-36-179 09001583	ST9136	残貨 銅錢	-	径 2.3	-	-	寛永通寶 2.4g 新寛永	写真図版 6-30-186 20080818
円6-36-180 09001584	ST9136	残貨 銅錢	-	径 2.4	-	-	寛永通寶 2.8g 新寛永	写真図版 6-30-187 20080819
円6-36-181 09001585	ST9136	残貨 銅錢	-	径 2.4	-	-	寛永通寶 3.6g 古寛永	写真図版 6-30-188 20080820
円6-36-182 09001586	ST9136	残貨 銅錢	-	径 2.35	-	-	寛永通寶 3.4g 古寛永	写真図版 6-30-189 20080821
円6-37-183 09001587	ST9136	残貨 銅錢	-	径 2.4	-	-	寛永通寶 3.0g 新寛永	写真図版 6-30-190 20080822
円6-37-184 09001588	ST9136	残貨 銅錢	-	径 2.3	-	-	寛永通寶 3.0g 新寛永	写真図版 6-30-191 20080823
円6-37-185 09001589	ST9136	残貨 銅錢	-	径 2.4	-	-	寛永通寶 4.7g 新寛永	写真図版 6-30-192 20080824
円6-37-186 09001590	ST9136	残貨 銅錢	-	径 2.3	-	-	寛永通寶 3.1g 新寛永	写真図版 6-30-193 20080825
円6-37-187 09001591	ST9136	残貨 銅錢	-	径 2.3	-	-	寛永通寶 2.1g 新寛永	写真図版 6-30-194 20080826
円6-37-188 09001592	ST9136	残貨 銅錢	-	径 2.3	-	-	寛永通寶 3.2g 新寛永	写真図版 6-30-195 20080827
円6-37-189 09001593	ST9136	残貨 銅錢	-	径 2.2	-	-	寛永通寶 2.0g 新寛永	写真図版 6-30-196 20080828
円6-37-190 09001594	ST9136	残貨 銅錢	-	径 2.25	-	-	寛永通寶 3.1g 新寛永	写真図版 6-30-197 20080829
円6-37-191 09001595	ST9136	残貨 銅錢	-	径 2.2	-	-	摩利のため錢種不明 3.3g	写真図版 6-30-198 20080830
円6-37-192 09001596	ST9136	残貨 銅錢	-	径 2.35	-	-	寛永通寶 布片付着 3.2g 新寛永	写真図版 6-30-199 20080831
円6-37-193 09001597	ST9136	残貨 銅錢	-	径 2.5	-	-	寛永通寶 布片付着 3.5g 新寛永	写真図版 6-30-200 20080832
円6-37-194 09001598	ST9136	残貨 銅錢	-	径 2.35	-	-	寛永通寶 2.6g 新寛永	写真図版 6-30-201 20080833
円6-37-195 09001599	ST9136	残貨 銅錢	-	径 2.45	-	-	寛永通寶 2.6g 新寛永	写真図版 6-30-202 20080834
円6-37-196 09001600	ST9136	残貨 銅錢	-	径 2.45	-	-	寛永通寶 2.8g 新寛永	写真図版 6-30-203 20080835
円6-37-197 09001601	ST9136	残貨 銅錢	-	径 2.4	-	-	寛永通寶 3.1g 新寛永	写真図版 6-30-204 20080836
円6-37-198 09001602	ST9136	残貨 銅錢	-	径 2.35	-	-	寛永通寶 3.4g 新寛永	写真図版 6-30-205 20080837
円6-37-199 09001603	ST9136	残貨 銅錢	-	径 2.25	-	-	寛永通寶 2.5g 新寛永	写真図版 6-30-206 20080838
円6-37-200 09001604	ST9136	残貨 銅錢	-	径 2.3	-	-	寛永通寶 2.0g	写真図版 6-30-207 20080839
円6-37-201 09001605	ST9136	残貨 銅錢	-	径 2.25	-	-	寛永通寶 2.8g 新寛永	写真図版 6-30-208 20080840
円6-37-202 09001606	ST9136	残貨 銅錢	-	径 2.5	-	-	寛永通寶 3.1g	写真図版 6-30-209 20080841
円6-37-203 09001607	ST9136	残貨 銅錢	-	径 2.4	-	-	寛永通寶 3.0g 新寛永	写真図版 6-30-210 20080842
円6-37-204 09001608	ST9136	残貨 銅錢	-	径 2.35	-	-	寛永通寶 3.1g 古寛永	写真図版 6-30-211 20080843
円6-37-205 09001609	ST9136	残貨 銅錢	-	径 2.4	-	-	寛永通寶 2.8g 布付着	写真図版 6-30-212 20080844
円6-37-206 09001610	ST9136	残貨 銅錢	-	径 2.4	-	-	寛永通寶 3.0g 古寛永	写真図版 6-30-213 20080845
円6-37-207 09001611	ST9136	残貨 銅錢	-	径 2.45	-	-	寛永通寶 2.4g 古寛永	写真図版 6-30-214 20080846
円6-37-208 09001612	ST9136	残貨 銅錢	-	径 2.35	-	-	寛永通寶 3.7g 新寛永	写真図版 6-30-215 20080847
円6-37-209 09001613	ST9136	残貨 銅錢	-	径 2.4	-	-	寛永通寶 3.2g 新寛永	写真図版 6-30-216 20080848

表6-3 9区出土遺物一覧

横列・番号 登録番号	出土位置	種別 器種	寸法 cm			色調	備考	写真図版 写真登録番号
			口径 / 長 底径 / 幅	高さ / 厚				
図6-37-210 09001614	ST9136	残貨 刷鉢	-	径 2.3	-	-	寛永通寶 2.4g 新寛永	写真図版 6-30-217 20080849
図6-37-211 09001615	ST9136	残貨 刷鉢	-	径 2.0	-	-	寛永通寶 2.0g 新寛永	写真図版 6-30-218 20080850
図6-37-212 09001616	ST9136	残貨 刷鉢	-	径 2.35	-	-	寛永通寶 2.2g 新寛永	写真図版 6-30-219 20080851
図6-37-213 09001617	ST9136	残貨 刷鉢	-	径 2.4	-	-	寛永通寶 2.8g 新寛永	写真図版 6-30-220 20080852
図6-37-214 09001618	ST9136	残貨 刷鉢	-	径 2.3	-	-	寛永通寶 3.0g 新寛永	写真図版 6-30-221 20080853
図6-37-215 09001619	ST9136	残貨 刷鉢	-	径 2.3	-	-	寛永通寶 2.6g 新寛永 (長字版)	写真図版 6-30-223 20080854
図6-37-216 09001620	ST9136	残貨 刷鉢	-	径 2.35	-	-	寛永通寶 2.5g 新寛永	写真図版 6-30-222 20080855
図6-37-217 09001621	ST9136	残貨 刷鉢	-	径 2.2	-	-	寛永通寶 1.7g 新寛永	写真図版 6-30-224 20080856
図6-37-218 09002932	ST9136	残貨 刷鉢	-	径 2.25	-	-	寛永通寶 3.5g 新寛永	写真図版 6-30-225 20102020
図6-37-219 09001484	ST9136	木製品 櫛	-	-	厚 0.4	-		写真図版 6-30-178 20091639
図6-37-220 10000037	ST9137	白磁 蓋付碗・蓋	8.1	最大径 9.5	1.7	胎土：灰白	18c末～幕末	写真図版 6-30-177 20102055
図6-37-221 10000038	ST9137	白磁 蓋付碗・身	9.2	3.7	4.2	胎土：白	18c末～幕末	写真図版 6-30-177 20102056
図6-37-222 09001622	ST9138	残貨 刷鉢	-	径 2.75	-	-	文久永寶 3.7g	写真図版 6-30-226 20080857
図6-37-223 09001623	ST9138	残貨 刷鉢	-	径 2.7	-	-	文久永寶 3.5g	写真図版 6-30-227 20080858
図6-37-224 09001624	ST9138	残貨 刷鉢	-	径 2.7	-	-	文久永寶 3.0g	写真図版 6-30-228 20080859
図6-37-225 09001625	ST9138	残貨 刷鉢	-	径 2.7	-	-	文久永寶 3.6g	写真図版 6-30-229 20080860
図6-37-226 09001626	ST9138	残貨 刷鉢	-	径 2.7	-	-	文久永寶 4.6g	写真図版 6-30-230 20080861
図6-37-227 09001627	ST9138	残貨 刷鉢	-	径 2.7	-	-	文久永寶 4.7g	写真図版 6-30-231 20080862
図6-37-228 09001628	ST9138	残貨 刷鉢	4.9	3.3	-	-	天保通寶 20.4g	写真図版 6-30-232 20080863・0864
図6-37-229 09001629	ST9138	残貨 刷鉢	4.9	3.25	-	-	天保通寶 20.9g	写真図版 6-31-233 20080865・0866
図6-37-230 09001630	ST9138	残貨 刷鉢	4.95	3.25	-	-	天保通寶 21.4g	写真図版 6-31-234 20080867・0868
図6-37-231 09001631	ST9138	残貨 刷鉢	4.95	3.3	-	-	天保通寶 19.4g	写真図版 6-31-235 20080869・0870
図6-37-232 09001632	ST9138	残貨 刷鉢	4.9	3.25	-	-	天保通寶 22.4g	写真図版 6-31-236 20080871・0872
図6-38-233 09001709	ST9138	青銅・木製品 煙管	長 18.8+	径 1.3	-	-	径は烟管の最大径	写真図版 6-31-304 20102003
図6-38-234 09001708	ST9138	木製品 煙管	-	幅 2.3	厚 1.5	-	幅・厚さは身の数値	写真図版 6-31-305 20102002
図6-38-235 09001729	ST9138	ガラス製品 数珠玉	-	径 1.35	-	-		写真図版 6-31-237 20094754
図6-38-236 09001728	ST9138	ガラス製品 数珠玉	-	径 1.6	-	-	T字状の孔	写真図版 6-31-238 20094753
図6-38-237 09001730	ST9138	ガラス製品 数珠玉	-	径 0.9	-	-		写真図版 6-31-239 20094755
図6-38-238 09001731	ST9138	ガラス製品 数珠玉	-	径 0.9	-	-		写真図版 6-31-240 20094756
図6-38-239 09001732	ST9138	ガラス製品 数珠玉	-	径 0.95	-	-		写真図版 6-31-241 20094757
図6-38-240 09001733	ST9138	ガラス製品 数珠玉	-	径 0.95	-	-		写真図版 6-31-242 20094758
図6-38-241 09001734	ST9138	ガラス製品 数珠玉	-	径 0.9	-	-		写真図版 6-31-243 20094759

表6-3 9区出土遺物一覧

横列・番号 登録番号	出土位置	種別 形態	寸法 cm			色調	備考	写真図版 写真登録番号
			口径 / 長	底径 / 幅	高さ / 厚			
図6-38-242 09001735	ST9138	ガラス製品 数珠玉	-	径 0.95	-	-	-	写真図版 6-31-244 20094760
図6-38-243 09001736	ST9138	ガラス製品 数珠玉	-	径 0.95	-	-	-	写真図版 6-31-245 20094761
図6-38-244 09001737	ST9138	ガラス製品 数珠玉	-	径 1.0	-	-	-	写真図版 6-31-246 20094762
図6-38-245 09001738	ST9138	ガラス製品 数珠玉	-	径 0.95	-	-	-	写真図版 6-31-247 20094763
図6-38-246 09001739	ST9138	ガラス製品 数珠玉	-	径 0.95	-	-	-	写真図版 6-31-248 20094764
図6-38-247 09001740	ST9138	ガラス製品 数珠玉	-	径 1.0	-	-	-	写真図版 6-31-249 20094765
図6-38-248 09001741	ST9138	ガラス製品 数珠玉	-	径 1.0	-	-	-	写真図版 6-31-250 20094766
図6-38-249 09001742	ST9138	ガラス製品 数珠玉	-	径 1.0	-	-	-	写真図版 6-31-251 20094767
図6-38-250 09001743	ST9138	ガラス製品 数珠玉	-	径 1.0	-	-	-	写真図版 6-31-252 20094768
図6-38-251 09001744	ST9138	ガラス製品 数珠玉	-	径 0.95	-	-	-	写真図版 6-31-253 20094769
図6-38-252 09001745	ST9138	ガラス製品 数珠玉	-	径 1.0	-	-	-	写真図版 6-31-254 20094770
図6-38-253 09001746	ST9138	ガラス製品 数珠玉	-	径 0.9	-	-	-	写真図版 6-31-255 20094771
図6-38-254 09001747	ST9138	ガラス製品 数珠玉	-	径 0.9	-	-	-	写真図版 6-31-256 20094772
図6-38-255 09001748	ST9138	ガラス製品 数珠玉	-	径 1.0	-	-	-	写真図版 6-31-257 20094773
図6-38-256 09001749	ST9138	ガラス製品 数珠玉	-	径 0.95	-	-	-	写真図版 6-31-258 20094774
図6-38-257 09001750	ST9138	ガラス製品 数珠玉	-	径 0.95	-	-	-	写真図版 6-31-259 20094775
図6-38-258 09001751	ST9138	ガラス製品 数珠玉	-	径 0.9	-	-	-	写真図版 6-31-260 20094776
図6-38-259 09001752	ST9138	ガラス製品 数珠玉	-	径 0.95	-	-	-	写真図版 6-31-261 20094777
図6-38-260 09001753	ST9138	ガラス製品 数珠玉	-	径 1.0	-	-	-	写真図版 6-31-262 20094778
図6-38-261 09001754	ST9138	ガラス製品 数珠玉	-	径 0.95	-	-	-	写真図版 6-31-263 20094779
図6-38-262 09001755	ST9138	ガラス製品 数珠玉	-	径 0.95	-	-	-	写真図版 6-31-264 20094780
図6-38-263 09001756	ST9138	ガラス製品 数珠玉	-	径 0.9	-	-	-	写真図版 6-31-265 20094781
図6-38-264 09001757	ST9138	ガラス製品 数珠玉	-	径 0.95	-	-	-	写真図版 6-31-266 20094782
図6-38-265 09001758	ST9138	ガラス製品 数珠玉	-	径 1.0	-	-	-	写真図版 6-31-267 20094783
図6-38-266 09001759	ST9138	ガラス製品 数珠玉	-	径 0.9	-	-	-	写真図版 6-31-268 20094784
図6-38-267 09001760	ST9138	ガラス製品 数珠玉	-	径 0.95	-	-	-	写真図版 6-31-269 20094785
図6-38-268 09001761	ST9138	ガラス製品 数珠玉	-	径 0.95	-	-	-	写真図版 6-31-270 20094786
図6-38-269 09001762	ST9138	ガラス製品 数珠玉	-	径 1.0	-	-	-	写真図版 6-31-275 20094787
図6-38-270 09001763	ST9138	ガラス製品 数珠玉	-	径 0.95	-	-	-	写真図版 6-31-276 20094788
図6-38-271 09001764	ST9138	ガラス製品 数珠玉	-	径 1.0	-	-	-	写真図版 6-31-277 20094789
図6-38-272 09001765	ST9138	ガラス製品 数珠玉	-	径 1.0	-	-	-	写真図版 6-31-278 20094790
図6-38-273 09001766	ST9138	ガラス製品 数珠玉	-	径 0.95	-	-	-	写真図版 6-31-271 20094791

表6-3 9区出土遺物一覧

横列・番号 登録番号	出土位置	種別 器種	寸法 cm			色調	備考	写真図版 写真登録番号
			口径 / 長	底径 / 幅	高さ / 厚			
図6-38-274 09001767	ST9138	ガラス製品 数珠玉	-	径 0.95	-	-	-	写真図版 6-31-276 20094792
図6-38-275 09001768	ST9138	ガラス製品 数珠玉	-	径 1.0	-	-	-	写真図版 6-31-277 20094793
図6-38-276 09001769	ST9138	ガラス製品 数珠玉	-	径 1.0	-	-	-	写真図版 6-31-278 20094794
図6-38-277 09001770	ST9138	ガラス製品 数珠玉	-	径 0.95	-	-	-	写真図版 6-31-279 20094795
図6-38-278 09001771	ST9138	ガラス製品 数珠玉	-	径 1.0	-	-	-	写真図版 6-31-280 20094796
図6-38-279 09001772	ST9138	ガラス製品 数珠玉	-	径 0.95	-	-	-	写真図版 6-31-281 20094797
図6-38-280 09001773	ST9138	ガラス製品 数珠玉	-	径 0.95	-	-	-	写真図版 6-31-282 20094798
図6-38-281 09001774	ST9138	ガラス製品 数珠玉	-	径 1.0	-	-	-	写真図版 6-31-283 20094799
図6-38-282 09001775	ST9138	ガラス製品 数珠玉	-	径 0.95	-	-	-	写真図版 6-31-284 20094800
図6-38-283 09001776	ST9138	ガラス製品 数珠玉	-	径 0.9	-	-	-	写真図版 6-31-285 20094801
図6-38-284 09001777	ST9138	ガラス製品 数珠玉	-	径 1.0	-	-	-	写真図版 6-31-286 20094802
図6-38-285 09001778	ST9138	ガラス製品 数珠玉	-	径 0.9	-	-	-	写真図版 6-31-287 20094803
図6-38-286 09001779	ST9138	ガラス製品 数珠玉	-	径 0.95	-	-	-	写真図版 6-31-288 20094804
図6-38-287 09001780	ST9138	ガラス製品 数珠玉	-	径 1.0	-	-	-	写真図版 6-31-289 20094805
図6-38-288 09001781	ST9138	ガラス製品 数珠玉	-	径 0.95	-	-	-	写真図版 6-31-290 20094806
図6-38-289 09001782	ST9138	ガラス製品 数珠玉	-	径 0.9	-	-	-	写真図版 6-31-291 20094807
図6-38-290 09001783	ST9138	ガラス製品 数珠玉	-	径 1.0	-	-	-	写真図版 6-31-292 20094808
図6-38-291 09001784	ST9138	ガラス製品 数珠玉	-	径 0.95	-	-	-	写真図版 6-31-293 20094809
図6-38-292 09001785	ST9138	ガラス製品 数珠玉	-	径 0.95	-	-	-	写真図版 6-31-294 20094810
図6-38-293 09001786	ST9138	ガラス製品 数珠玉	-	径 0.95	-	-	-	写真図版 6-31-295 20094811
図6-38-294 09001787	ST9138	ガラス製品 数珠玉	-	径 0.95	-	-	-	写真図版 6-31-296 20094812
図6-38-295 09001788	ST9138	ガラス製品 数珠玉	-	径 0.95	-	-	-	写真図版 6-31-297 20094813
図6-38-296 09001789	ST9138	ガラス製品 数珠玉	-	径 0.9	-	-	-	写真図版 6-31-298 20094814
図6-38-297 09001790	ST9138	ガラス製品 数珠玉	-	径 0.95	-	-	-	写真図版 6-31-299 20094815
図6-38-298 09001791	ST9138	ガラス製品 数珠玉	-	径 0.95	-	-	-	写真図版 6-31-300 20094816
図6-38-299 09001792	ST9138	ガラス製品 数珠玉	-	径 0.95	-	-	-	写真図版 6-31-301 20094817
図6-38-300 09001793	ST9138	ガラス製品 数珠玉	-	径 0.9	-	-	-	写真図版 6-31-302 20094818
図6-38-301 09002926	ST9138	ガラス製品 数珠玉	-	径 1.0	-	-	-	写真図版 6-31-303 20102014
図6-38-302 10000022	ST9141	陶器 破片器・蓋	4.9	最大径 7.5	4.2	胎土：に赤い斑 輪調：に赤い黄斑	肥前唐津 18c 墓 10000023 とセット	写真図版 6-31-306 20102044
図6-38-303 10000023	ST9141	陶器・身	6.3	4.9	11.0	胎土：灰 輪調：白色	肥前 18c 墓 日直 10000022 とセット	写真図版 6-31-306 20102044
図6-38-304 09001485	ST9143	木製品 担軸 八双	長 10.9*	幅 0.8	厚 0.8	-	翼（表面に金糸）上青削製翼 (座金具・柄) 残存	写真図版 6-31-309 20081642
図6-38-305 09001486	ST9143	木製品 担軸 軸棒	長 9.8*	幅 1.5	-	-	翼残存（表面に金糸）	写真図版 6-31-310 20081644

表6-3 9区出土遺物一覧

横列・番号 登録番号	出土位置	種別 器種	寸法 cm			色調	備考	写真図版 写真登録番号
			口径 / 長 底径 / 幅	高さ / 厚				
岡-38-306 09002933	ST9143	鉄製品 範尾	長 1.9+	幅 1.8	0.1	-	木質付着	写真図版 6-31-312 20102022
岡-38-307 09001727	ST9143	ガラス製品 玉	-	径 1.05	-	-	T字状の孔	写真図版 6-31-311 20094752
岡-38-308 09001700	ST9143	貝 シジミガイか	長 2.4+	幅 1.8+	-	-	紅少量残存	写真図版 6-31-314 20101992
岡-38-309 09001699	ST9143	貝 ツメタガイか	長 4.5+	幅 3.3+	厚 4.1+	-	-	写真図版 6-31-315 20101993
岡-38-310 09001701	ST9143	鉄製品 系切頭	長 11.7	幅 2.3	厚 0.6	-	布片付着	写真図版 6-31-313 20101994
岡-38-311 10000039	ST9143	白磁 小皿	長 7.5 × 3.4	幅 4.3 × 1.6	1.3	胎土：灰白	肥前 17c 末～18c	写真図版 6-31-308 20102056
岡-39-312 10000027	ST9145	陶器 磁付器・蓋	5.7	最大径 8.7	4.4	胎土：灰白 釉調：暗赤褐・明緑灰	肥前 伊万里周辺か 18c 前半～中盤 10000026 とセット	写真図版 6-31-307 20102046
岡-39-313 10000026	ST9145	陶器 磁付器・身	7.1	6.2	11.2	胎土：灰白 釉調：暗赤褐・明緑灰	肥前 伊万里周辺か 18c 前半～中盤 10000027 とセット	写真図版 6-31-307 20102046
岡-39-314 10000056	ST9146	陶器 擂鉢	22.3	7.6	7.3	胎土：赤褐色 釉調：灰褐色・褐灰	肥前 17c 後半　底部系切	写真図版 6-32-349 20102073
岡-39-315 10000062	ST9146	陶器 壺	18.8	15.3	29.5	釉調：暗褐	(17c 後半～) 18c 前半 内面格子(四)き具痕 底部に胎土痕 3箇所	写真図版 6-32-350 20102080
岡-39-316 10000020	ST9147	白磁 磁付器・蓋	6.8	最大径 8.8	3.4	胎土：灰白	18c 前半 10000021 とセット	写真図版 6-32-351 20102043
岡-39-317 10000021	ST9147	白磁 磁付器・身	8.5	6.1	12.4	胎土：灰白	18c 前半 10000020 とセット	写真図版 6-32-351 20102043
岡-39-318 10000002	ST9148	磁器 磁付器・蓋	8.1～8.2	最大径 9.5	2.3	胎土：白	肥前 明治以降 10000003 とセット	写真図版 6-32-352 20102024
岡-39-319 10000003	ST9148	磁器 磁付器・身	9.1	8.5	8.8	胎土：白	肥前 明治以降 底部に「特製」の刺印 10000002 とセット	写真図版 6-32-352 20102024
岡-39-320 09001489	SX9149	陶器 鉢	24.5	10.8	6.6	胎土：にぶい赤褐色 釉調：灰白・暗赤褐	肥前 二彩手	写真図版 6-32-345 20094819・4820
岡-39-321 09001488	SX9149	陶器 甕	22.8	16.7	37	釉調：暗褐	肥前 17c 後半	写真図版 6-32-346 20091676
岡-39-322 10000049	表探	陶器 蓋付碗・蓋	12.3*	最大径 14.2*	-	胎土：にぶい橙褐色 釉調：淡黄・黄褐	外面全体に刷毛目文様	写真図版 6-32-341 20102068
岡-39-323 10000051	表探	青磁 花瓶か	-	4.0*	-	胎土：灰白	-	写真図版 6-32-344 20102070
岡-39-324 10000053	検出面	染付磁器 碗	10.5	4.0	6.0	胎土：白	-	写真図版 6-32-347 20094737
岡-39-325 10000050	表探	陶器 蓋付碗・身	12.9*	7.7	10.5	胎土：にぶい橙褐色 釉調：淡黄・黄褐	外面全体に刷毛目文様	写真図版 6-32-342 20102069
岡-39-326 10000064	検出面	陶器 土瓶	-	6.9*	-	胎土：浅黄 釉調：灰白・オリーブ黄	底部凝付着	写真図版 6-32-348 20094736
岡-39-327 10000052	表探	染付磁器 組	11.4	4.8	2.8	胎土：白	-	写真図版 6-32-343 20102071
-	表探	残貨 削残	-	径 2.35	-	-	寛永通宝 新寛永 2.3g	写真図版 6-32-336 20080934
-	表探	残貨 削残	-	径 2.35	-	-	寛永通宝 新寛永 3.1g	写真図版 6-32-337 20080935
-	表探	残貨 削残	-	径 2.5	-	-	寛永通宝 新寛永 文政 2.8g	写真図版 6-32-339 20080938・939
-	表探	残貨 削残	-	径 2.65	-	-	文久永寶 3.1g	写真図版 6-32-338 20080936・937
-	表探	残貨 削残	-	径 2.4	-	-	元豊通寶か 1.2g	写真図版 6-32-340 20080942
岡-40-328 09001652	SX9001	残貨 削残	-	径 2.4	-	-	寛永通寶 2.6g 新寛永	写真図版 6-32-316 20080898
岡-40-329 09001653	SX9001	残貨 削残	-	径 2.3	-	-	寛永通寶 1.9g 新寛永	写真図版 6-32-317 20080899
岡-40-330 09001654	SX9001	残貨 削残	-	径 2.4	-	-	寛永通寶 3.2g 新寛永	写真図版 6-32-318 20080900

表6-3 9区出土遺物一覧

横列・番号 登録番号	出土位置	種別 器種	寸法 cm			色調	備考	写真図版 写真登録番号
			口径 / 段	底径 / 幅	高さ / 厚			
岡6-40-331 09001656	SX9001 周辺	残貨 銅錢	-	径 2.35	-	-	昭武通寶 2.8g	写真図版 6-32-319 20080902
岡6-40-332 09001657	SX9001 周辺	残貨 銅錢	-	径 2.3	-	-	寛永通寶 2.2g 新寛永	-
岡6-40-333 09001658	SX9001 周辺	残貨 銅錢	-	径 2.3	-	-	寛永通寶 1.4g 新寛永	-
岡6-40-334 09001659	SX9001 周辺	残貨 銅錢	-	径 2.35	-	-	寛永通寶 2.6g 新寛永	-
岡6-40-335 09001660	SX9001 周辺	残貨 銅錢	-	径 2.4	-	-	寛永通寶 3.1g 古寛永	写真図版 6-32-320 20080906
岡6-40-336 09001661	SX9001 周辺	残貨 銅錢	-	径 2.4	-	-	寛永通寶 2.6g 新寛永	写真図版 6-32-321 20080907
岡6-40-337 09001665	SX9001 西側	残貨 銅錢	-	径 2.3	-	-	寛永通寶 2.9g 新寛永	写真図版 6-32-322 20080911
岡6-40-338 09001666	SX9001 西側	残貨 銅錢	-	径 2.5	-	-	寛永通寶 3.1g 新寛永	写真図版 6-32-323 20080912
岡6-40-339 09001667	SX9001 西側	残貨 銅錢	-	径 2.5	-	-	寛永通寶 3.3g 新寛永	写真図版 6-32-324 20080913
岡6-40-340 09001668	SX9001 西側	残貨 銅錢	-	径 2.45	-	-	寛永通寶 2.6g 古寛永	写真図版 6-32-325 20080914
岡6-40-341 09001669	SX9001 西側	残貨 銅錢	-	径 2.7	-	-	文久永寶 4.0g	写真図版 6-32-326 20080915-0916
岡6-40-342 09001670	SX9001 西側	残貨 銅錢	-	径 2.5	-	-	寛永通寶 3.9g 新寛永 (文鏡)	写真図版 6-32-327 20080917-918
岡6-40-343 09001671	SX9001 西側	残貨 銅錢	-	径 2.45	-	-	寛永通寶 3.1g 古寛永	写真図版 6-32-328 20080919
岡6-40-344 09001672	SX9001 西側	残貨 銅錢	-	径 2.55	-	-	寛永通寶 3.4g 新寛永	写真図版 6-32-335 20080920
岡6-40-345 09001673	SX9001 西側	残貨 銅錢	-	径 2.3	-	-	寛永通寶 1.8g 新寛永 (元字鏡)	写真図版 6-32-329 20080921
岡6-40-346 09001674	SX9001 西側	残貨 銅錢	-	径 2.3	-	-	寛永通寶 2.5g 新寛永	写真図版 6-32-330 20080922
岡6-40-347 09001675	SX9001 西側	残貨 銅錢	-	径 2.5	-	-	寛永通寶 3.3g 古寛永	写真図版 6-32-331 20080923
岡6-40-348 09001676	SX9001 西側	残貨 銅錢	-	径 2.3	-	-	寛永通寶 2.8g 新寛永	写真図版 6-32-332 20080924
岡6-40-349 09001677	SX9001 西側	残貨 銅錢	-	径 2.45	-	-	寛永通寶 3.4g 新寛永	写真図版 6-32-333 20080925
岡6-40-350 09001678	SX9001 西側	残貨 銅錢	-	径 2.25	-	-	寛永通寶 2.5g 新寛永	写真図版 6-32-334 20080926

(補遺) 6区の集石および宝篋印塔について

東畠瀬遺跡で発見された集石・宝篋印塔について報告する。集石の中央部には板石が置かれ、その上に宝篋印塔がある(図6-42)。

宝篋印塔は、総高0.61mを測り、安山岩製。相輪は、断面円形で、宝珠は扁平で請花に花弁彫出を施し、伏鉢は方柱状、柄は円形、九輪は彫出しているが4つとやや形骸化した様相を示す。笠は、延作りで扁平、外反が顕著な鱗付の關飾突起を持つ。軒上3段、軒下2段で柄穴は円形である。軸には、何も刻まれない。基礎は上段2段である。このような相輪や笠は、吉野ヶ里町靈仙寺跡や糸島市夷窓寺無量院跡で類例が報告されているものも含め、分布が西九州に限られる特徴的なものである。この宝篋印塔は、全体の小型化、相輪九輪の形骸化、笠の扁平化、笠隅飾突起の外反という特徴から、15世紀後半～16世紀前半のものと考えられる。

なお、宝篋印塔笠の柄穴から銅錢が出土したが、これらの銅錢は全て近世以降のものであること、さらに集石の下からは近代に形成された面が確認されていることから、この集石は近代以降に現在の位置に置かれたと考えられる。

出土遺物(図6-41)

351～357は寛永通宝(新寛永)で、そのうち355と356は元字錢、357は小字錢である。



図6-41 6区集石および宝篋印塔出土遺物(1/2)

247.0m

246.0m

245.0m

1m

宝篋印塔南面

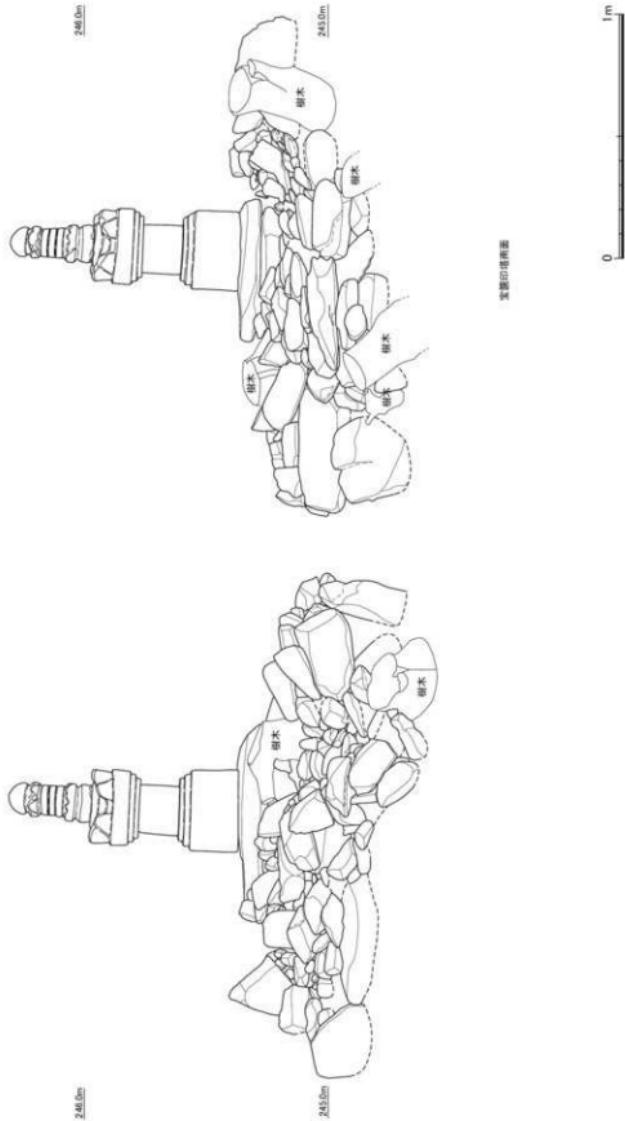


図6-42 6区集石および宝篋印塔（1/20）

第7章 自然科学分析

1 東畠瀬遺跡9区から出土した人骨について

川久保善智₁・澤田純明₂、大野憲五₃、竹下直美₃、隅康二₄、埴原恒彦₅

*1.佐賀大・医・解剖人類 2.聖マリアンナ医大・医・解剖 3.佐賀大・医・法医

4.佐賀大・医・口腔外科 5.北里大・医・解剖

1)はじめに

佐賀市富士町の東畠瀬遺跡9区は肥前の戦国武将神代勝利とその一族の墓所である。勝利の墓からは人骨は検出されなかったものの、江戸時代に肥前小城藩に仕えた神代家の歴代当主とその家族の他、宗源院の住職等が埋葬された江戸へ明治期の墓から土葬入骨21体、火葬入骨11体が検出された。本稿はそれらの人類学的報告である。頭蓋の計測値を表7-4、頭蓋小変異の出現状況を表7-5、四肢骨の計測値を表7-6に示す。骨の計測法はMartin and Saller (1957) と馬場 (1991) に、顔面平坦度計測はYamaguchi (1973) に従った。身長の推定には男性人骨に対して藤井の式 (1960) 、女性人骨に対して佐宗・埴原の式 (1998) を使用した。歯式は正面からみた状態を示している。歯式では萌出歯を略称で表しているが、その他の記号の意味は次の通りである。

○：歯槽解放（死後脱落） ×：歯槽閉鎖 △：不明（歯槽の欠損を除く） -：歯、歯槽とも欠損

その他、文中で使用した縫合の癒着程度、咬耗度の基準を以下に記す。

・縫合の癒着程度 (Broca)

0 全然癒合なし

1 ルーベでやっと癒合の存在がわかる

2 肉眼で分かる

3 破線状

4 消失

・咬耗度 (Martin)

0 無咬耗

1 エナメルのみ咬耗し、咬頭は明瞭であるもの

2 エナメル質が磨滅して各咬頭に孤立的に象牙質が現れるもの

3 咬合面全部の象牙質が現れるもの

4 咬耗が歯頸部に及ぶもの

2)各人骨について

【ST9101 神代家4代当主利尚の義母】

遺存状態：断片化した焼骨である。白色、灰白色、黒色の小片が混在しており、白色、灰白色のものには著しい変形やひび割れがみられる。骨片の部位は頭蓋や肩甲骨、大腿骨など全身にわたる。総重量は約223gである。

年齢推定：断片化が著しく、骨からの年齢推定は困難である。

性別判定：熱による変形や収縮を考慮しても大腿骨の骨幹は細く、骨頭も小さいので、女性の可能性がある。

【ST9102 神代家4代当主利尚】

遺存状態：断片化した焼骨である。灰白色と褐色のものがあり、灰白色のものには変形やひび割れが認められる。

頭蓋冠や頸骨、上顎骨、下顎骨などの頭骨片や尺骨、寛骨、大腿骨などの四肢骨片が認められるが、1cm²に満たない小片はほとんど含まれていないので、ある程度の大きさのものを選んで藏骨器に入れた可能性が高い。総重量

は約101gである。

年齢推定：部分的に残存する上顎や下顎では歯槽の吸収や閉鎖が認められ、頭蓋冠には発達したクモ膜顆粒小窓がみられることから、本人骨は熟年以上だった可能性が高い。

性別判定：大腿骨の粗線が発達しており、この点は男性的だが、焼成による変形が大きく、断定は困難である。

【ST9103 神代家4代当主利尚の妻】

遺存状態：断片化した焼骨である。白色、茶褐色、黒色の小片が混在しており、灰白色のものには変形やひび割れがみられる。頭蓋冠や頬骨、上顎骨、下顎骨などの頭骨片や大臼歯（象牙質のみ）、椎骨、脛骨など全身にわたる骨片が認められる。1 cm²に満たない小片がほとんど含まれていないので、ある程度の大きさのものを選んで截骨器に入れた可能性が高い。総重量は約62gである。

年齢推定：ラムダ縫合の内板側では一部が癒合しており、成人に達していた可能性が考えられる。下顎の切歯から犬歯までの歯槽が比較的よく保存されているが、著しい吸収や閉鎖は認められない。本人骨の年齢は壮年以降だが、老年には達していなかったと思われる。

性別判定：保存状態が悪く、性別を判定するのは困難である。

特記事項：この遺骨は神代家4代当主利尚の妻（1606–1654）のものとされている。生年と没年から計算される彼女の年齢は40代後半だが、これは人骨からの推定年齢と矛盾しない。

【ST9104 神代家7代当主利亮の次男 宮次郎】

遺存状態：上顎左第2乳白歯、下顎右乳犬歯、下顎左右第2乳白歯、下顎左右第1大臼歯の歯冠のみが遺存する。

-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	(dm2)	-	-	-
-	-	-	(dm2)	-	dc	-	-	-	-	-	(dm2)	-	-	-

年齢推定：歯冠のうち下顎の右乳犬歯には明瞭な咬耗が認められるのではすでに萌出していたと思われるが、第2乳白歯は未萌出か、または萌出して間もなくなった可能性が高い。下顎の第1大臼歯の歯冠がある程度形成されており、これらの所見を総合すると、本人骨の年齢は2~3歳だったと推定される。

性別判定：この年齢段階での性別判定は困難である。

特記事項：この遺骨は神代家7代当主利亮の次男、宮次郎（?-1726）のものとされている。

【ST9105 神代家6代当主利庸または7代当主利亮の娘 カウ】(写真15 上段)

遺存状態：保存状態は不良である。残存する骨片は大半が頭骨である。前頭骨や頭頂骨は比較的原形を保っており、下顎骨や左右の頬骨、鼻骨、上顎骨も部分的に残る。四肢骨は断片化が著しい。

M2	M1	P2	P1	C	I2	○		I1	I2	C	P1	P2	M1	M2
(M3)	M2	M1	P2	○	○	○		I1	I2	C	P1	P2	○	- (M3)

年齢推定：冠状縫合、矢状縫合、ラムダ縫合にはいずれも癒合がみられず、切歯縫合も比較的明瞭に認められる。下顎の第3大臼歯は根の大部分が形成されているが、未だ完成していない。以上の所見から、本人骨の年齢は10代後半と推定される。

性別判定：頭蓋が小さく華奢で女性的だが、全体的に保存状態が悪く、判別が難しい。

特記事項：この遺骨は於カウ（?-1714）のものとされている。於カウは「神代物部姓系譜」では6代利庸の子となっているが、「神代先祖帰月集」や「宗源院過去帳」では7代利亮の娘と書かれている。カウの生年を死亡推

定年齢から逆算すると1690年代中頃になる。これをもとに父親候補の2人との歳の差を計算すると、6代利庸とは約30年の開きがあるが、7代利亮との歳の差は10年以下しかないことが分かる。カウは6代利庸の子、7代利亮の妹だと考えた方が自然である。その他の特記事項として、上顎の第2大臼歯が両側とも矮小化していることが挙げられる。

【ST9106 神代家5代当主利実の妻】(写真1)

遺存状態：骨の保存状態は不良である。頭骨では前頭骨や蝶形骨の大部分とその周辺に欠損がみられる。四肢骨はいずれかの骨端を欠くものが多く、肋骨や椎骨の保存状態も悪い。

M2	M1	P2	P1	○	I2	×	×	○	C	×	-	-	-	-
×	×	×	×	×	C	×	×	×	C	P1	P2	M1	×	-

年齢推定：内板では矢状縫合とラムダ縫合の大部分が癒合・消失しており、外板でもこれらの縫合にはBrocaの2～3°に相当する癒合がみられる。口蓋では左の切歯縫合が若干認められるものの、正中口蓋縫合の口蓋部や横口蓋縫合の外側部の癒合がかなり進んでいる。上・下顎の歯槽には退縮が認められ、歯冠が残る上顎右の側切歯や第2大臼歯、下顎右犬歯には少なくともMartinの2°以上の咬耗がみられる。胸椎の椎体には骨棘の形成も認められる。以上の所見から、本人骨はかなり高齢だった可能性が高い。

性別判定：乳様突起はやや小さく、項面や外後頭隆起の発達は悪い。四肢骨も細く華奢である。以上、本人骨は女性と考えられる。

特記事項：この遺骨は神代家5代当主利実の妻（?-1698）のものとされている。

【ST9107 神代家6代当主利庸または7代当主利亮の子 鳩之助】(写真15下段1)

遺存状態：保存状態はやや不良である。頭蓋是比较的よく残っているが、側頭骨や後頭骨の鱗部などに劣化・欠損がみられる。四肢骨は左右の寛骨（腸骨、恥骨、坐骨が未癒合）や大腿骨、脛骨などが比較的よく残っている。その他、頸椎や胸椎、仙椎（未癒合）、肋骨片などが認められる。

dm2	dm1	dc	di2	il	di1	di2	dc	dm1	dm2
dm2	dm1	dc	di2	il	di1	di2	dc	dm1	dm2

年齢推定：歯の発達段階から、本人骨の年齢は3～4歳だったと推定される。

性別判定：この年齢段階での性別判定は困難である。

特記事項：この遺骨は鳩之助（?-1750）のものとされている。鳩之助は「神代物部姓系譜」と「神代先祖帰月集」では6代利庸の子（徵外末子）になっているが、「宗源院過去帳」では7代利亮の子と書かれている。鳩之助が生まれたときにはすでに利庸は亡くなってしまい、一方の利亮は60歳前後なので、利亮の末子だと考えるのが妥当だと思われる。

【ST9108 神代家5代当主利実】(写真2)

遺存状態：保存状態は不良である。頭蓋は顔面や左頭頂骨とその周辺が大きく欠損しており、全体的に劣化が進んでいる。椎骨や肋骨の状態も悪い。四肢骨については大腿骨と脛骨が骨幹を中心に遺存するが、他は断片化が著しい。

M3	M2	M1	○	○	○	-	-	-	-	M1	M2	○
-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	M2	-	-

年齢推定：上顎の第3大臼歯の萌出は完了しており、20歳以上の成人段階に達していたと考えられる。また、頭蓋冠の内板では冠状縫合、矢状縫合、ラムダ縫合がほぼ全域にわたって癒合していることから、本人骨はかなり高齢だった可能性が高い。

性別判定：骨の遺存状態が悪く、性別を判定するのは難しいが、外後頭隆起がやや発達している点は男性的である。

特記事項：本人骨は神代家5代利実（1626–1696）のものとされている。利実は70歳前後で亡くなったとされているが、咬耗は第1大臼歯がMartinの2°、第2、第3大臼歯が1°相当で、年齢に比して弱い。計測は出来なかったが、脳頭蓋は低頭、長頭性が強いようにみえる。

【ST9109 神代家7代当主利亮の妻】(写真3)

遺存状態：保存状態は全身にわたってやや不良である。頭蓋については頬上顎部や頭蓋冠の左側が広い範囲が欠損するが、頭蓋冠の右側や後頭部、頭蓋底が比較的よく残っている。四肢骨は骨幹を中心に遺存するが、いずれも劣化が進んでいる。

M2	M1	○	○	C	I2	○		○	I2	C	P1	P2	M1	M2	M3
M3	M2	M1	P2	P1	C	I2	I1	I1	I2	C	P1	P2	M1	M2	M3

年齢推定：下顎では第3大臼歯の萌出が完了しており、蝶後頭軟骨結合や四肢骨の骨端も完全に癒合していることから、20歳以上の成人段階に達していたと考えられる。頭蓋冠の内、外板では矢状縫合の大部分に癒合がみられるものの、冠状縫合やラムダ縫合の癒合はあまり進んでいない。また、口蓋の切歯縫合はまだ明瞭に残存しており、歯の咬耗が全体に弱く、椎骨や四肢骨に骨棘などの変形がみられないことから、本人骨の年齢は壮年と推定される。

性別判定：頭蓋は全体的に華奢であり、眉弓や眉間、乳様突起、外後頭隆起の発達が弱い。また、四肢骨も細く華奢なことから女性と考えられる。

特記事項：本人骨は神代家7代利亮（1680年代後半–1765）の一人目の妻のものとされている。利亮はこの一人目の妻が1729年に亡くなった後、二人目の妻（？–1767）を迎えていたので、一人目の妻は若いうちに亡くなつた可能性が高い。壮年という推定年齢はそれを裏付けるように思われる。

【ST9112 神代家9代当主利経】(写真4)

遺存状態：骨の保存状態は全体的に良好だが、四肢骨の骨端に若干の欠損がみられる。墓壙内には骨の他、少量の頭髪が残っていた。

M3	M2	M1	P2	P1	C	I2	I1	I1	I2	C	○	○	M1	M2	M3
M3	M2	M1	P2	P1	C	I2	I1	I1	I2	C	○	P2	M1	M2	M3

年齢推定：上・下顎とも第3大臼歯の萌出が完了しており、蝶後頭軟骨結合や四肢骨のそれぞれの骨端も完全に癒合していることから、20歳以上の成人段階に達していたと考えられる。頭髪は劣化が進んでいるが、色は黒く、白髪は認められない。頭蓋冠の縫合は内板では冠状縫合と矢状縫合がほとんど消滅し、ラムダ縫合も破線状にわずかに残る程度だが、外板では部分的に癒合にとどまる（Brocaの2°程度）。口蓋では左側のみ切歯縫合が残存し、正中口蓋縫合口蓋部の後半は癒合している。上・下顎の歯槽には若干の退縮がみられる。恥骨結合面の形状はToddのⅤである。肋軟骨には全体的に骨化がみられ、特に第1肋骨では骨化がかなり進んでいる。以上の所見から、この人骨は壮年後半から老年前半であったと推定される。

性別判定：眉弓や眉間の発達は弱く、頬骨弓も華奢だが、乳様突起はやや大きい。上腕骨の三角筋粗面や大腿骨の殿筋粗面や粗線など、筋付着部が発達している。大坐骨切痕は狭く、妊娠痕は認められない。以上の所見から、本人骨は男性と考えられる。

特記事項：この遺骨は神代家9代利経（?-1805）のものとされている。利経の歯は年齢の割に咬耗が弱い。また、複数の歯で咬合面の溝や隣接面歯頭部に軽度の齲歎が認められる。左右の大腿骨や脛骨、左の上腕骨や桡骨、尺骨からそれぞれ推定される身長を平均すると156.2cmとなる。江戸時代の男性の平均身長は157.1cmなので（平本1972）、利経の身長は当時としては平均的であったと思われる。

【ST9114 神代家6代当主利庸の妻】（写真5）

遺存状態：骨の保存状態はやや不良である。頭蓋は比較的良好に残っているが、右の頬骨弓や下顎枝、後頭骨の一部などに欠損がみられる。四肢骨では大腿骨がある程度原形をとどめているが、他は劣化・欠損がかなり進んでいる。椎骨や肋骨の保存状態も悪い。

△	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	△
△	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	△

年齢推定：蝶後頭軟骨結合や四肢骨のそれぞれの骨端が完全に癒合していることから、20歳以上の成人段階に達していたと考えられる。頭蓋冠の縫合は内板ではラムダ縫合が全長にわたって明瞭に認められるが、冠状縫合や矢状縫合は大部分が消失している。外板でもラムダ縫合の癒合はあまり進んでいないが、冠状縫合や矢状縫合ではBrocaの2~3°相当の癒合がみられる。上・下顎の歯槽ではおそらくすべての歯が生前に脱落しており、全体に著しい退縮がみられる。切歯縫合を除く口蓋の縫合は比較的明瞭に残っているが、総合的にみると本人骨はかなり高齢であった可能性が高い。老年後半か、老年に達していたと考えられる。

性別判定：眉弓や眉間、乳様突起の発達は弱く、頬骨弓は華奢である。また、寛骨の大坐骨切痕のなす角度が大きいことから、本人骨は女性と考えられる。

特記事項：神代家6代当主利庸の妻（?-1744）のものとされている。左右の上腕骨、大腿骨、脛骨と左の桡骨から推定される身長を平均すると145.5cmとなる。江戸時代の女性の平均身長は145.6cmなので（平本1972）、この個体の身長は当時としては平均的であったと思われる。その他、夫の利庸には少なくとも7代当主利亮を含む6人の子供がいたとされているが、妊娠・出産経験が多いほど深くなるといわれている骨盤の妊娠痕（Igarashi 1992）がこの個体にはほとんどみられない。

【ST9115 神代家6代当主利庸】（写真6）

遺存状態：骨の保存状態は良好でほぼ全身の骨が確認できる。骨の他、少量の頭髪が残存している。

M2	M1	P2	P1	C	I2	II	○	I2	C	P1	P2	M1	M2			
M3	×	M1	P2	○	C	I2	II	II	I2	C	P1	P2	M1	×	○	

年齢推定：下顎の第3大臼歯の萌出が完了しており、20歳以上の成人段階に達していたと考えられる。頭蓋冠の内板では冠状縫合、矢状縫合、ラムダ縫合のいずれもほぼ完全に癒合している。外板でも各縫合の癒合が進んでおり、鱗状縫合や冠状縫合の側頭部はほぼ消失し、矢状縫合やラムダ縫合も全域にわたって破線状に残るのみである。口蓋でも切歯縫合や横口蓋縫合が完全に消失している。肋骨の胸骨端では肋軟骨の骨化がかなり進んでおり（写真16-3・16-4）、胸骨では胸骨柄、胸骨体、剣状突起が一つに癒合している（写真17-5）。胸椎や腰椎には骨棘の形成がみられ、少なくとも第2と第3胸椎の椎間や第6から第11胸椎の椎間では骨棘が互いに癒合

している（写真16-5・16-6）。また、仙腸関節の癒合（写真17-4）や甲状軟骨、輪状軟骨の骨化（写真16-1・16-2）も認められる。上記の骨化現象は通常の加齢変化でも起こりうるが、本例の場合は症状が顕著であり、汎発性特発性骨増殖症（DISH）の可能性も考えられる。ただしDISHは高齢の男性に発症することが多い病気なので、何にせよ本人骨は老年に達していた可能性が高い。

性別判定：眉弓や眉間の隆起は強くないが頭蓋は全体的に大きく、頬骨弓は太く、乳様突起や外後頭隆起が発達している。四肢骨は太く頑丈で、上腕骨の三角筋粗面や大腿骨の粗線など、筋付着部がよく発達している。骨盤の恥骨下角や大坐骨切迹は狭い。以上の所見より、本人骨は男性と考えられる。

特記事項：この遺骨は神代家6代利庸（1662-1738）のものとされている。利庸は70代後半で亡くなったとされているが、これは骨から推定される年齢とも矛盾しない。ただし、歯の咬耗については最も進んでいる第2大臼歯でもMartinの2°と、この年齢にしては弱い。歯槽には退縮が若干みられるものの、状態は比較的良好である。齶歯によると思われる歯冠の欠損が上、下顎で合わせて5本認められる。左右の上腕骨と左の桡骨、大腿骨、脛骨からそれぞれ推定される身長を平均すると157.3cmとなる。江戸時代の男性の平均身長は157.1cmなので（平本1972）、利庸の身長は当時としては平均的であった。

【ST9117】（写真7）

遺存状態：全身にわたって保存状態はやや不良である。頭骨では頬上顎部や後頭鱗、右の頭頂骨やその周辺、両側の下頸枝などに欠損がみられる。椎骨や肋骨の保存状態は悪い。四肢骨は骨幹部を中心に遺存するが、いずれも劣化が進んでいる。

-	-	-	P2	P1	C	I2	○		I1	I2	C	×	×	×	M2	-
M3	×	M1	×	P1	C	I2	△		I1	I2	C	P1	P2	×	×	×

年齢推定：下顎では第3大臼歯の萌出が完了しており、蝶後頭軟骨結合や四肢骨の骨端も完全に癒合していることから、20歳以上の成人段階に達していたと考えられる。頭蓋冠の内板では冠状縫合、矢状縫合、ラムダ縫合がいずれもほぼ消失しており、外板でも癒合が進んでいる（Brocaの2°～3°）。口蓋では切歯縫合が消失し、正中口蓋縫合や横口蓋縫合も部分的に癒合が進んでいる。歯の咬耗はBrocaの1°～2°程度である。椎骨の保存状態は前述のとおり概して悪いが、椎体が原形を保つ胸椎では若干の骨棘形成が認められる。これらの所見から、本人骨の年齢は熟年以降であったと推定される。

性別判定：保存状態があまり良くないため、判定が難しい。頭骨では眉弓や眉間の発達が弱く、四肢骨では骨幹が細いといった女性的な特徴もみられるが、外後頭隆起や乳様突起、頬骨弓、下顎は発達しており、全体的には男性的である。

特記事項：下顎の右第1小白歯に齶歯によると思われる歯冠の欠損がみられる。また、大臼歯の咬合面にも軽度の齶歯が認められる。咬耗の程度はMartinの1°～2°であり、推定された年齢にしてはやや弱い。

【ST9118】

遺存状態：骨の保存状態は不良である。頭骨では前頭骨や頭頂骨からなる頭蓋冠の一部や、側頭骨、上顎骨、下顎の一部が遺存する。椎骨や肋骨は断片化が著しい。四肢骨は左右大腿骨の後面下部が一部残る。その他、墓壙内に少量の頭髪が残っていた。

年齢推定：頭蓋冠では冠状縫合や矢状縫合が内、外板とも完全に癒合・消失している。口蓋では切歯縫合が消失している。頭髪には黒髪に混じって白髪が認められる。これらの所見から、本人骨は熟年以降であった可能性が高い。

性別判定：保存状態が悪いので性別判定は難しいが、歯が比較的小さく、下顎のオトガイ部があまり発達していない点は女性的である。

【ST9119】

遺存状態：火葬骨だと思われるが、全体的に茶褐色～黒色を呈し、変形やひび割れがほとんどみられないことから、それほど高温には曝されていない可能性がある。前頭骨の眉間周辺、右の頸頂骨や側頭骨錐体部、後頭骨の一部などの頭骨片の他、椎骨や肋骨、長管骨の一部がそれぞれ一点ずつ認められる。総重量は約39gである。

年齢推定：頭蓋冠の骨は成人に比べて薄く、前頭縫合の大部分はすでに癒合・消失しているが、後頭骨の外側部と底部の間や椎骨が未だ癒合していないことから、本人骨の年齢は4～5歳程度であったと推定される。

性別判定：この年齢での性別の判定は困難である。

【ST9121】

遺存状態：骨の保存状態は不良である。大腿骨の骨幹（左右不明）を含む四肢骨と頭蓋冠の断片が遺存する。

年齢推定：頭蓋冠では冠状縫合が内板、外板とともに広範囲で癒合しており、また内板にはクモ膜顆粒小窓の発達がみられることから、本人骨はかなり高齢だった可能性がある。

性別判定：保存状態が悪く、性別の判定は難しいが、大腿骨は骨幹が太く、男性的である。

【ST9122】（写真8）

遺存状態：骨の保存状態は全体的にやや不良だが、頭蓋は左側の頸骨弓や側頭鱗、乳様突起、下顎体、両側の下顎枝などに欠損がみられるものの、その他は比較的良好残っている。四肢骨の大半は骨端が大きく欠損しており、椎骨や肋骨も断片化が著しい。

-	M2	○	P2	P1	C	I2	II		II	I2	C	P1	P2	M1	M2	M3
M3	M2	○	P2	△	C	I2	-	-	I2	C	P1	○	○	M2	M3	

年齢推定：上・下顎とも第3大臼歯は萌出が完了しており、Martinの2～3°に相当する咬耗がみられることがから、20歳以上の成人段階には十分達していたと考えられる。他の歯にも同程度の強い咬耗がみられる。頭蓋冠の内板では冠状縫合、矢状縫合、ラムダ縫合がほとんど癒合・消失している。外板でも癒合がかなり進行している（Brocaの2～3°相当）。また、内板ではクモ膜顆粒小窓が発達している。口蓋では切歯縫合が完全に消失し、正中口蓋縫合や横口蓋縫合でも大部分に癒合が認められる。上・下顎の歯槽では部分的に著しい退縮がみられる。これらの所見から、本人骨は熟年後半か、老年に達していた可能性が高い。

性別判定：前頭結節が発達し、側面からみた前頭骨の輪郭は鉛直に近いが、眉弓や眉間、頸骨弓、乳様突起、外後頭隆起はよく発達している。また、四肢骨でも撓骨粗面や大腿骨の殿筋粗面、粗線などの筋付着部が全体的によく発達しており、本人骨は男性と考えられる。

特記事項：前述の通り、この個体の四肢骨の筋付着部は全体的によく発達しており、脛骨には強い扁平性（横径の割に前後径が大きい）がみられる。また、この個体の鼻骨は非常に大きく、鼻骨最小幅が14.5mmと、一般的な北部九州の江戸～現代人（7mm前後）の倍以上の値を示す。

【ST9123】

遺存状態：骨の保存状態は不良である。頭蓋冠や側頭骨の錐体部、歯、四肢骨片などが認められる。歯牙について上顎の右第1小白歯、左右第1大臼歯、右第2大臼歯、下顎の左第1大臼歯が認められるが、いずれも歯根が欠

損している。

-	(M2)	(M1)	-	(P1)	-	-	-	-	-	-	(M1)	-	-
-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	(M1)	-	-

年齢推定：歯の形成段階から6～7歳と思われる。

性別判定：情報が少なく、性別判定は困難である。

特記事項：右第2大臼歯は矮小化している。

【ST9124】(写真9)

遺存状態：骨の保存状態はやや不良である。頭骨では頸上顎部や前頭部周辺、後頭骨、左の乳様突起や頸骨弓などに劣化・欠損がみられる。椎骨や肋骨も一部を除いて劣化が進んでおり、四肢骨も骨端を欠くものが多い。

M1	P2	P1		X	X		X	X	O	X	X				
O	M2	M1	P2	P1	O	I2	X	X	O	C	P1	P2	M1	M2	M3

年齢推定：下顎の第三大臼歯は萌出が完了しており、蝶後頭軟骨結合や四肢骨の骨端も完全に癒合していることから、20歳以上の成人段階に達していたと考えられる。頭蓋冠の縫合は内板では冠状縫合の一部に癒合がみられるものの、外板ではほとんど癒合が進んでいない。また、切歯縫合は消失しているが、正中口蓋縫合にはほとんど癒合がみられない。椎骨については観察できるものが限られるが、骨棘形成などの変形は認められない。上下顎とも歯槽の退縮や閉鎖が著しい。大臼歯にはMartinの2～3°に相当するかなり強い咬耗がみられる。これらの所見を総合すると、本人骨の年齢は壮年後半から熟年前半と思われる。

性別判定：前頭部は丸みを帯びるが、眉間はやや発達しており、乳様突起も大きい。また、四肢骨でも上腕骨の三角筋粗面や大腿骨の殿筋粗面や粗線などの筋付着部がよく発達していることから、本人骨は男性と考えられる。

特記事項：墓壙から銅製の絡子環が出土しているので、被葬者は曹洞宗の僧侶であった可能性がある。右脛骨最大長をもとに藤井の式（1960）で算出したこの個体の身長は158.2cmである。本例の埋葬時期は江戸から明治にかけてという他は詳細が不明だが、江戸時代の平均身長は157.1cm、近代（明治期）は155.3cmであり（平本1972）、この個体の身長は何れにしても平均的であったと思われる。

【ST9125】

遺存状態：焼骨である。前頭骨や頭頂骨、下顎骨、歯、頸椎が認められる。骨片には白色ないし灰白色を呈し、変形やひび割れが著しいものがあり、これらはかなりの高温を受けた可能性があるが、歯牙片については大部分が黒色を呈し、エナメル質が残るものもあることから、それほど高温には曝されなかつたと思われる。1cm²に満たない小片があまり含まれていないので、ある程度の大きさのものを選んで蔵骨器に入れた可能性が高い。総重量は約77gである。

-	-	M1?	P2?	-	-	-	-	-	-	-	M1?	-	-
-	M2	M1	-	-	-	-	-	-	-	-	M2	-	-

年齢推定：矢状縫合では内板がほとんど癒合している。下顎の歯槽は閉鎖や退縮が著しい。大臼歯にはMartinの2～3°に相当する咬耗がみられる。以上の所見から、熟年以降だと思われる。

性別判定：下顎は小さく、華奢であり、女性的にみえるが、歯槽の閉鎖や退縮、熱による収縮などの影響による可能性があり、断定できない。

特記事項：歯牙片のうち、下顎左側切歯だけは熱を受けた痕跡が無く、対応する歯槽も完全に閉じていることから、別個体のものが混入している可能性がある。

【ST9127】(写真 10)

遺存状態：骨の全体的な保存状態はやや不良である。頭骨は右側の頬骨弓や側頭鱗、乳様突起、下顎枝、後頭骨の頸平面などに欠損がみられるが、その他は比較的よく残っている。椎骨は第6～12胸椎が比較的よく残るが、その他は断片的である。四肢骨は左上腕骨と左右の大脛骨や脛骨がおおよそ原形をとどめているが、いずれも劣化が進んでいる。

○	M1	P2	P1	C	I2	○		H1	I2	C	P1	P2	M1	M2
△	×	M1	○	P1	C	I2	○	○	I2	C	P1	P2	×	×

年齢推定：蝶後頭軟骨結合や四肢骨の骨端が完全に癒合していることから、20歳以上の成人段階に達していたと考えられる。頭蓋冠の内板では縫合がかなり進んでおり、ラムダ縫合の下部がわずかに残るのみだが、外板では冠状縫合の側頭部に癒合がみられるものの、矢状縫合やラムダ縫合は全域にわたって比較的明瞭に認められる(Brocaの2°程度)。口蓋では切歯縫合や正中口蓋縫合口蓋部が癒合・消失している。上・下顎には歯槽の退縮がみられ、とくに大臼歯部において顕著である。第1肋骨はほぼ全体が骨化している。胸椎の椎体には骨棘の形成がみられる。以上の所見から、この人骨は少なくとも熟年には達していたと推定される。

性別判定：眉弓や眉間の発達はあまり良くないが、頬骨弓は太く、乳様突起や外後頭隆起が発達している。四肢骨でも上腕骨の三角筋粗面が発達していることから、本人骨は男性と考えられる。

特記事項：歯の咬耗は最も進んでいる第2大臼歯でもMartinの2°程度しかなく、熟年としては弱い。

【SX9128】

遺存状態：焼骨である。四肢骨の一部と思われる骨片が一点まとめられる。重量は約1gである。

年齢推定：情報が少なく、年齢推定は困難である。

性別判定：情報が少なく、性別判定は困難である。

【ST9130】(写真 11)

遺存状態：全体的な保存状態はやや良好である。頭骨は下顎枝にいくらか欠損がみられるものの、その他はほぼ完全に残る。四肢骨では骨端部の欠損が多くみられる。

○	M2	M1	P2	P1	○	○	○		○	I2	C	P1	○	M1	M2	○
M3	M2	M1	P2	×	○	○	○	H1	×	○	△	○	P2	M1	○	M3

年齢推定：上・下顎とも第3大臼歯の萌出は完了しており、蝶後頭軟骨結合や四肢骨の骨端も完全に癒合していることから、20歳以上の成人段階に達していたと考えられる。頭蓋冠の縫合は内板では冠状縫合と矢状縫合がほとんど癒合・消失しており、ラムダ縫合の一部がわずかに残る。一方、外板では冠状縫合に部分的な癒合が認められるものの、矢状縫合やラムダ縫合ではあまり進んでいない(Brocaの2°程度)。口蓋では切歯縫合が消失し、正中口蓋縫合口蓋部や横口蓋縫合が全域で癒合している。上・下顎の歯槽では退縮が進んでいる。第1、第2大臼歯の咬耗はとともにMartinの2°に相当する。第1肋軟骨ではかなり骨化が進んでおり、胸椎には骨棘の形成が認められる。以上の所見から、この人骨の年齢は熟年には達していたと推定される。

性別判定：眉弓や眉間、乳様突起が発達しており、頬骨弓も太い。四肢骨では殿筋粗面や大脛骨の粗線などの筋付

着部がやや発達している。また、大坐骨切痕は狭く、妊娠痕は認められない。以上、本例は男性と考えられる。

特記事項：頭骨や左の上腕骨、尺骨、桡骨、大腿骨、脛骨、腓骨がST9130の墓壙と切り合いがみられるST9131の墓壙内から検出された。これはST9131墓壙が掘られた際、先に埋葬されていたST9130人骨の一部が誤って掘りだされ、ST9131内に再び埋め戻されたものと考えられている。ST9130人骨とST9131人骨は色や骨質が異なり、容易に判別が可能であった。その他、左の第11胸椎と肋骨との間の韌帯（放射状肋骨頭韌帯）に著しい骨化がみられた（写真17-3）。

【ST9131 宗源院 17世住職】（写真12）

遺存状態：骨の遺存状態は非常に良好である。

M3	M2	M1	P2	P1	C	I2	II		I1	I2	C	P1	P2	M1	M2	M3
M3	M2	M1	P2	P1	C	I2	II		I1	I2	C	P1	P2	M1	M2	M3

年齢推定：上・下顎とも第3大臼歯の萌出はみられないが、蝶後頭軟骨結合や四肢骨の骨端が完全に癒合していることから、20歳以上の成人段階に達していたのは明らかである。頭蓋冠の縫合は内板では冠状縫合が消失し、矢状縫合やラムダ縫合もわずかに残る程度（Brocaの3°）であり、外板でも矢状縫合の全域と冠状縫合やラムダ縫合の一部が消失し、その他の部位でもBrocaの2～3°相当の癒合が認められる。口蓋でも横口蓋縫合や正中口蓋縫合口蓋部の癒合・消失がかなり進んでいる。肋軟骨には骨化がみられ、第1肋軟骨はほぼ全体が骨化している。甲状軟骨も側板全体が骨化しており、これらの所見はいずれも本人骨が高齢であったことを示している。しかし歯槽は比較的良好な状態であり、切歯縫合が一部残存しており、また椎骨では骨棘などの変形がそれほど進行していないことから、然後半から老年前期であったと推定される。

性別判定：眉弓や眉間の発達はよく、頬骨弓も太く、乳様突起の発達は中程度である。四肢骨では上腕骨の三角筋粗面や大腿骨の殿筋粗面や粗線などの筋附着部が発達している。大坐骨切痕は狭く、妊娠痕は認められない。以上の所見から、本人骨は男性と考えられる。

特記事項：この遺骨は宗源院17世住職（?-1901）のものとされている。歯の咬耗は年齢の割に弱く、現存する歯に明瞭な齲歯は認められない。この個体には上下顎の複数の歯にまたがる異常な摩耗が認められる（写真18-1・18-2）。上顎の右側では犬歯から第1大臼歯にかけて、上顎の左側では側切歯から第1大臼歯にかけて、頬・唇側面に溝状の摩耗が認められる。左右それぞれで溝が直線的に並んでいる。摩耗は後方の歯では歯頭部の高さにあり、前方（近心）では歯冠中央や咬合面にみられる。摩耗の深さがほとんどの歯で象牙質にまで達しており、特に左の側切歯や犬歯、第1小白歯のものが深い。この特殊な摩耗は左側の方が右に比べて強いので、右利きの人物が歯ブラシをするような動作で何かしらの道具を使って擦ったために形成されたように思える。下顎では上顎に比べて摩耗がみられる範囲は狭いが、頬・唇側面だけでなく咬合面にまで及んでおり、咬耗との境界が不明瞭になっている。何の目的で、どのような道具を使用したかなど不明な点は多いが、溝の表面が滑らかなことから、長期的な習慣によって形成されたように思われる。この住職が生きていた江戸末期から明治にかけては口腔ケアの様式が大きく変化した。江戸時代には口腔ケアの道具として一般的に房楊枝と塩または塚砂（房州砂、伊万里土など）に香りを付けた歯磨き粉が使われていたが、明治時代に入ると今日のような西洋式の歯磨きが徐々に普及していった（谷津1976、長谷川1993）。そのため、どのような道具を使用していたのかを特定するのは困難だが、何れにしても摩耗がここまで進むまで特定の行為を継続していた事は尋常ではない。

この個体には歯の異常摩耗の他にも、左右の前腕や下腿、左の大腿の骨に骨膜炎の痕跡が認められる（写真18-3・18-4・18-5・18-6）。これらの骨では骨幹がおよそ左右対称に肥厚している。また、左大腿骨の骨幹近位外側には外傷性骨化性筋炎を疑わせる異所性骨化が認められる（写真18-7）。その他、左第6肋骨には

骨折の痕が認められる。藤井の式（1960）を用いて左右の上腕骨、桡骨、脛骨、右尺骨、左大腿骨からそれぞれ推定した身長の平均は151.3cmであった。近代人（明治期）の平均身長は155.3cmであり（平本1972）、この個体は平均よりやや身長が低い。

【ST9134】

遺存状態：上顎右小白歯、上顎左第2大臼歯、下顎右第1、第2小白歯の4本が残るが、いずれも歯根が崩壊している。火葬か土葬かという判断は難しいが、これらの歯にはエナメル質が残っていることから、それほど高温に曝されてはいないと思われる。

-	-	-	P2	-	-	-	-	-	-	-	-	-	M2	-
-	-	-	P2?	P1?	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-

年齢推定：いずれの歯にもMartinの2°以上の咬耗がみられ、老年以降であった可能性が高い。

性別判定：保存状態が悪く情報も少ないため、性別の判定は困難である。

【ST9136 宗源院15世住職の妻】(写真13)

遺存状態：骨の保存状態は良好である。

M2	M1	P2	P1	C	I2	II		II	I2	C	P1	P2	M1	M2
M2	M1	P2	P1	C	I2	II		II	I2	C	P1	P2	M1	M2

年齢推定：蝶後頭軟骨結合や四肢骨の骨端が完全に癒合していることから、20歳以上の成人段階に達していたと考えられる。頭蓋冠の縫合は内板、外板とも癒合があり進んでいない。口蓋の縫合も明瞭に残る。上・下顎の歯槽に退縮はほとんどみられない。恥骨結合面の形状はToddのIII～IV（Ubelaker 1978）に当てはまる。椎骨の変形や肋軟骨の骨化はみられない。歯の咬耗は弱い（Martinの1°程度）。以上の所見から、この人骨は壯年前半であったと推定される。

性別判定：眉弓や眉間の発達が弱く、頬骨弓は華奢であり、乳様突起も小さい。また、寛骨の大坐骨切痕のなす角度は大きく、妊娠痕が認められるので、本人骨は女性と考えられる。

特記事項：この遺骨は宗源院15世住職の妻（?-1879）のものとされている。大臼歯の咬合面の溝には軽度の麟歯が認められる。左右の上腕骨、大腿骨、脛骨と左桡骨から推定される身長を平均すると145.7cmとなる。近代（明治期）の女性の平均身長は144.8cmなので（平本1972）、当時としては平均的な身長であった。

【ST9138】(写真14)

遺存状態：寛骨や仙骨、四肢骨の骨端部などに欠損がみられるが、全体的な保存状態は良好である。

M3	M2	M1	P2	P1	C	I2	II		II	I2	C	P1	P2	M1	M2	M3
M3	M2	M1	P2	P1	C	I2	II		II	I2	C	P1	P2	M1	M2	M3

年齢推定：上・下顎とも第3大臼歯の萌出が完了しており、蝶後頭軟骨結合や四肢骨のそれぞれの骨端も完全に癒合していることから、20歳以上の成人段階に達していたと考えられる。頭蓋冠の内板では冠状縫合の側頭部が消失しているものの、矢状縫合やラムダ縫合はまだあまり癒合が進んでいない。外板でも冠状縫合の側頭部では癒合が進んでいるが、矢状縫合やラムダ縫合にはほとんど癒合が認められない。歯槽には顕著な退縮は認められず、大臼歯の咬耗もBrocaの1°程度である。一方、口蓋の縫合は切歯縫合が消失し、正中口蓋縫合の口蓋骨部の大部分

が癒合している。恥骨結合面の形状はToddのVIIである（Ubelaker 1978）。以上の所見から、この人骨は壮年後半であったと推定される。

性別判定：眉弓や乳様突起、外後頭隆起が発達しており、頬骨弓も太い。四肢骨も全体的に太く、骨端がよく発達している。また、寛骨の保存状態はやや不良だが、残存部位で見る限り、大坐骨切痕は狭く、妊娠痕は認められない。本人骨は男性と考えられる。

特記事項：右上腕骨に顎上骨折によると思われる内反変形がみられる（写真17-2）。この骨折は4~11歳の男児に多くみられ、肘関節進展位で手を開いて倒れたような場合に起こりやすい。本例では完全に治癒しており、また、幼少年期に受傷したものだとすれば、骨折がある右の上腕骨の方が左より発達していることから、運動障害などの後遺症は軽微だったと考えられる。左上腕骨、右大腿骨、左右脛骨から藤井の式（1960）で推定される身長の平均は151.0cmである。埋葬時期の詳細は不明だが、江戸時代の平均身長は157.1cm、近代（明治期）は155.3cmであり（平本1972）、何れにしてもこの個体の身長は平均よりやや低い。

【ST9141】

遺存状態：焼骨である。骨は灰白色～白色を呈し、変形やひび割れが認められることから、少なくとも部分的にはかなりの高温で焼かれたものと考えられる。前頭骨や頭頂骨、後頭骨、上顎骨などの頭骨片の他、胸椎、肋骨、胸骨など上半身の骨に偏っている。1cm²に満たない小片があまり含まれていないので、ある程度の大きさのものを選んで蔵骨器に入れた可能性が高い。総重量は約84gである。

年齢推定：胸椎の椎体に骨棘の形成は認められないが、ラムダ縫合では内板が広い範囲で癒合しており、上顎骨では歯槽の閉鎖や退縮が著しいので、熟年以上だった可能性が高い。

性別判定：保存状態が悪く、性別判定は困難である。

【ST9143】（写真15下段2）

遺存状態：骨の保存状態はやや不良である。頭骨は顔面や頭蓋冠の前半の残りはよいものの、頭頂骨の後半から断片化している。体幹骨や四肢骨は原形を保っているものが多い。

dm2	dm1	dc	di2	○	di1	di2	○	dm1	dm2
dm2	dm1	dc	di2	di1	di1	di2	dc	dm1	dm2

年齢推定：歯の発達段階からこの個体は4歳程度だったと推定される。

性別判定：この年齢段階での性別判定は困難である。

【ST9144】（写真15下段3）

遺存状態：骨の保存状態はやや不良である。頭骨は顔面や頭蓋底は比較的よく残っているものの、頭蓋冠の大部分が断片化している。椎骨はよく残っているが、肋骨や四肢骨は骨端を欠くものが多い。

dc	di2	○	○	di2	○				
dm1	○	○	○	○	○	dc	dm1		

年齢推定：歯の発達段階からこの個体は1歳半から2歳程度だったと推定される。

性別判定：この年齢段階での性別判定は困難である。

【ST9145】

遺存状態：上顎左大臼歯（おそらく第1大臼歯）のみが遺存する。

年齢推定：歯冠にはMartinの2～3°に相当する咬耗がみられることから、熟年以上だった可能性がある。

性別判定：情報量が少なく、性別の判定は困難である。

【ST9146】

遺存状態：焼骨である。骨は断片化しており、白色ないし灰白色から黒褐色まで様々な色を呈する。一部には変形やひび割れが認められることから、少なくとも部分的にはかなりの高温で焼かれたものと考えられる。頭骨や椎骨、肋骨、四肢骨など断片的ながら、全身各部にわたる骨片が認められる。総重量は約978gと、この遺跡から出土した他の焼骨に比べると重いが、特に部位の重複はみられないで1個体分だと考えてよいと思われる。

年齢推定：頭頂骨の断片をみると、矢状縫合後半の内板側は完全に癒合・消失しており、外板でもBrocaの2°に相当する癒合が認められることから、成人には達していたと考えられる。

性別判定：焼骨でのいくらくか収縮している可能性があるにもかかわらず、橈骨や大腿骨、脛骨などの四肢骨の骨幹が太いので、本人骨は男性の可能性が高い。

【ST9147】

遺存状態：骨は断片化しており、白色ないし灰白色から黒色を呈する。変形やひび割れが著しいものがあり、部位によってはかなりの高温で焼かれたものと考えられる。骨片の大きさは様々で、前頭骨、側頭骨、頭頂骨、後頭骨、下顎骨、上顎骨、歯牙片などの頭骨片の他、椎骨、肋骨、四肢骨片なども認められる。総重量は約174gである。

年齢推定：ラムダ縫合では内板の癒合が認められ、上顎、下顎とも歯槽突起に吸収が認められるので、少なくとも熟年には達していたと思われる。

性別判定：熱で収縮しているにもかかわらず、全体的に大きく、後頭骨の筋付着部が非常に発達していることから、男性の可能性が高い。

【ST9148】

遺存状態：胎児または新生児の骨と思われる。骨は原形をある程度とどめているものの、白色ないし灰白色を呈しており、変形やひび割れもみられることから、かなりの高熱を受けている可能性がある。総重量は約48gしかないが、ほぼ全身の骨が含まれているように見える。

年齢推定：頭蓋冠や椎骨、四肢骨の骨端は何れもまだ癒合していない。周産期の人骨と比べ、大腿骨や脛骨のサイズが熱による収縮を考慮してもなお小さいことから、本人骨は胎児（未熟児）だと思われる。

性別判定：この年齢段階での性別判定は困難である。

3) 神代家人骨の頭蓋形態

東畠瀬遺跡9区から出土した神代家人骨の頭蓋形態の特徴を明らかにするため、保存状態が良い6代当主利庸(ST9115写真6)と9代当主利経(ST9112写真4)の頭蓋を計測し、関東、近畿、北部九州の江戸時代人や現代人、徳川將軍家、長岡藩主牧野家、福岡藩家老久世家のデータと比較した。

使用した比較資料の詳細を表7-1に示す。図7-1～7-4は頭蓋長幅示数、コルマン上顎示数、眼窓示数、鼻示数を構成する計測項目をそれぞれX軸とY軸にとった散布図である。

頭蓋最大長と最大幅(図7-1)では神代家の2個体は長頭傾向が強く、特に6代利庸は過長頭に分類された。

表7-1 比較資料

標本名	身分	データの計測者または参考文献
関東江戸 (池之端)	庶民	川久保
関東現代 (千葉大)	庶民	川久保
近畿江戸	庶民	長岡朋人、熊倉博雄 (2002) 旧吉原墓地 (大阪) から出土した近世人頭蓋の形態的特徴。 人類学雑誌 109: 85-100
近畿現代	庶民	宮本博人 (1924) 現代日本人骨の人類学的研究、人類学雑誌 39: 307-451
北部九州江戸 (天福寺)	庶民	川久保
北部九州現代 (九大)	庶民	川久保、重松
徳川家	將軍家	鈴木尚他 (1967) 増上寺徳川将軍と遺品・遺体、東京大学出版会
牧野家	越後長岡藩主	加藤征他 (1986) 長岡藩主牧野家墓所発掘調査報告書、東京都港区教育委員会
久世家	福岡藩家老	小野吉郎他 (1957) 久世家歴代の頭骨に就いて、人類学研究 4: 111-141
天德寺	武家	加藤征他 (1991) 江戸時代人骨の形質に関する人類学的研究。 平成2年度科学研究費補助金一般研究B研究成果報告
関東中世 (鎌倉材木座)	不明	鈴木尚他 (1956) 鎌倉材木座発見の中世遺跡とその人骨、日本人類学会編、岩波書店

一方、牧野家は短頭傾向が強く、神代家とは対照的であった。徳川家、久世家については重心が中頭に属するものの、徳川家の方がやや短頭側に位置している。これら的一族にはそれぞれに特徴的な分布がみられるが、いずれも重心は江戸庶民や現代人から大きく外れており、共通の方向性は認められなかった。各地域の江戸庶民と現代人の重心は地域ごとにまとまっているが、北部九州の江戸庶民と現代人は神代家ほどではないが、長頭側に位置した。頬骨弓幅と上顎高 (図7-2) では、久世家は頬骨弓幅のデータがないので比較できなかったが、徳川家、牧野家が全体的に狭上顎側に位置した。神代家の2個体も狭上顎傾向が強く、特に6代利庸は過狭上頭に分類された。これは徳川家慶 (12代) や家茂 (14代) といった後期の將軍に匹敵するレベルである。この傾向は鼻幅と鼻高の関係 (図7-3) においても認められた。一方、久世家の鼻幅や鼻高は江戸の庶民や現代人とあまり大きく違わなかった。眼窩幅と眼窓高 (図7-4) については、徳川家や牧野家の個体が眼窓の幅も高さも非常に大きな値を示したが、神代家2個体の眼窓サイズは江戸の庶民や現代人と大差がなかった。眼窓示数では久世家、牧野家の重心はやや高眼窓側に位置したが、神代家は徳川家とともに中眼窓に属した。

日本列島住民の頭蓋形態における時代変化については、関東地方の人骨を対象とした研究から、中世から現代にかけて短頭化や狹顎化が進行してきたことが指摘されている。一方、江戸時代の將軍家や大名家などの上層階級の人びとには、当時の庶民のみならず現代人よりもさらに狹顎化が著しい「貴族形質」と呼ばれる特徴がみられることが報告されている (鈴木1985)。神代家6代利庸と9代利経にみられる狹顎傾向は徳川將軍家のひととに匹敵するレベルに達していた。徳川將軍の狹顎傾向については、彼らの前に咬耗がほとんどみられないことから、咀嚼量の減少との関わりが示唆されている。利庸と利経の歯も年齢の割に咬耗の程度が弱く、咀嚼量が非常に少なかつたと可能性が高い。一方、神代家のもう一つの特徴である長頭性については、北部九州の江戸時代庶民や現代人も同様の傾向を示すことから、地域的な特徴が強く表れている可能性がある。

4) 東畠瀬遺跡9区人骨のエナメル質減形成について (写真17-1)

東畠瀬遺跡9区人骨群の発育期の健康状態を検討するため、エナメル質減形成の出現状況を調査した。エナメル質減形成とは、歯冠の形成期 (乳・幼児期) に何らかの障害的因素が作用することで発生したエナメル質の量的欠損で、多くの場合、歯冠をとりまくように横走する線状または小窓状の形成不全として認められる。減形成の原因として、全身的な代謝ストレス (栄養障害、疾患、内分泌障害など)、顔面部の局所的な外傷または炎症、および遺伝的因子が知られているが、減形成の出現状況から原因がこれらのどれなのかを推定することが可能である。

表7-2 エナメル質減形成の個体別出現状況

人骨番号	上顎中切歯	上顎犬歯	下顎中切歯	下顎犬歯
ST9117	y (1)	/	/	/
ST9109	/	n	/	y (2)
ST9112	y (1)	y (1)	n	y (1)
ST9115	n	n	n	n
ST9118	n	/	/	n
ST9122	y (1)	y (1)	/	/
ST9124	/	/	/	y (2)
ST9127	/	y (1)	/	y (2)
ST9130	/	/	n	y (1)
ST9131	y (3)	/	y (1)	y (1)
ST9136	y (3)	y (3)	y (2)	y (4)
ST9138	y (2)	/	n	y (1)

y 減形成が出現した歯（括弧内は減形成の数）

n 減形成がみられない歯

/ 歯が残存していない、もしくはエナメル質の表面が観察

表7-3 東烟瀬遺跡9区と江戸一橋遺跡の減形成出現率および出現率の差の検定結果

	東烟瀬遺跡9区	江戸一橋遺跡	有意水準
上顎中切歯	75.0% (6/8)	57.8% (26/45)	p=0.455
上顎犬歯	66.7% (4/6)	73.7% (42/57)	p=0.657
下顎中切歯	33.3% (2/6)	64.3% (18/28)	p=0.202
下顎犬歯	80.0% (8/10)	83.6% (46/55)	p=0.673

括弧内は減形成の出現した歯の数 / 観察した歯の数

(Goodman and Rose 1990)。いったん生じたエナメル質減形成は自然に修復されないため、歯冠形成期の成長障害を調査するストレス・マーカーとして有用である。

資料と方法

上・下顎の中切歯と犬歯を対象とし、原則として右側の歯を観察した。咬耗度がプロカの3度を超える歯と、歯石の付着が著しい歯は除外した。観察に際し、充分に明るい光源(LEDライト BF-425, Panasonic)を用い、肉眼で確認できる線状・溝状・小窓状の減形成をカウントした。観察者間誤差を防ぐため、減形成のデータ採取は同一人物(澤田)が行なった。

結果と考察

中切歯ないし犬歯を観察できた12個体中、10個体においていずれかの歯にエナメル質減形成が認められた(表7-2)。これらの減形成は同歯種の左右両側に対称的に出現しているものが多いことから、局所的な障害ではなく、何らかの全身的代謝ストレスによって生じたと考えられる。東烟瀬遺跡9区人骨群が乳・幼児期にストレスを受容しやすい環境にあったことが伺える。

日本の縄文時代から近代までの減形成出現状況を調査した山本(1988)は、江戸時代の府中一橋人骨群における減形成出現率が、各時代の集団のなかで最も高かったことを報告している。東烟瀬遺跡9区人骨群の減形成出現率を江戸一橋人骨群(澤田・平田2009)と比較検討したところ、上顎中切歯と下顎犬歯における減形成出現率は江戸一橋より高い値を示した。フィッシャーの直接確率法では、どの歯種においても両集団の間に有意差が検出されなかった(表7-3)。江戸一橋人骨群は比較的低い階層の人々で構成されており(森本ほか1985)、また、同人骨群の高い減形成出現率の理由として肉食忌避の思想による栄養的に乏しい食生活や、人口過密に由来する非衛生的で疾患にかかりやすい生活環境が想定されているが(山本1988)、武家・僧侶を主体とする東烟瀬遺跡9区人骨群の減形成出現率が高かったことは、当時の上流社会における生活環境を考える上で興味深い結果といえる。

謝辞

本分析の遂行にあたって便宜を図っていただいた全国神代ゆかりの会の方々、宗源院代表役員久世童龍氏、古川末由先生はじめ宗源院総代会の方々に謹んで感謝の意を表する。佐賀大学医学部救急医学講座中島厚土先生、同大歯科口腔外科学講座鎌木正紀氏には人骨の整理作業を通して多大な協力をいただいた。ここに感謝の意を表する。

文献

- Igarashi Y. (1992) Pregnancy Bony Imprint on Japanese Female Pelvis and Its Relation to Pregnancy Experience. *Journal of the Anthropological Society of Nippon*, 100 (3) : 311-319
- Goodman A.H. and Rose J.C. (1990) Assessment of systemic physiological perturbations from dental enamel hypoplasias and associated histological structures. *Yearbook of Physical Anthropology*, 33 : 59-110
- 佐宗栄子・猪俣恒彦 (1998) 日本女性の新しい身長推定式. *人類学雑誌*, 106 (1) : 55-66
- 澤田純明・平田和明 (2009) エナメル質減形成の出現状況の時代変化と形成年齢について. 第114回日本解剖学会・全国学術集会発表
鈴木 真 (1985) 骨は語る 德川将军・大名家の人ひと. 東京大学出版. 東京
- 細山季茂・吉野耕生 (1990) 白骨死体の鑑定. 令文社. 東京
- 長谷川正康 (1993) 術の風俗誌. 時空出版. 東京
- 馬場惣男 (1991) 人体計測法. *人類学講座別巻1－人体計測法*. 塩山閣. 東京
- 平木聰助 (1972) 瞬文時代から現代に至る関東地方人骨身長の時代的变化. *人類学雑誌*, 80 : 221-236
- 藤井 明 (1960) 四段長骨の長さと身長の関係について. 順天堂大学体育部紀要, 3 : 49-61
- Martin R. and Saller K. (1957) Lehrbuch der Anthropologie Band. I Gustav Fischer Verlag. Stuttgart
- 森本岩太郎・小片活彦・平木聰助・吉田俊郎 (1985) 人骨. 江戸：都立一橋高校地点発掘調査報告. 東京 : 522-546
- Yamaguchi T. (1973) Facial flatness measurements of the Ainu and Japanese crania. *Bulletin of the National Science Museum*, 16 : 161-171
- 谷津三雄 (1976) 両学史資料図鑑. 医歯薬出版社. 東京
- Ubelaker D. (1978) Human Skeletal Remains: Excavation, Analysis, Interpretation. Aldine, Chicago
- 山本美代子 (1988) 日本古人骨永久歯のエナメル質減形成. *人類学雑誌*, 96 : 417-433

表7-4 頭蓋計測値 (mm)

計測項目	ST9106	ST9108	ST9109	ST9112	ST9114	ST9115	ST9117	ST9122	ST9124	ST9127	ST9130	ST9131	ST9136	ST9138	
	5代 利差	5代 利差	7代 利差前値	9代 利差	6代 利差	6代 利差	♂?	♂?	♂?	♂?	♂?	♂?	17世 代歯差	15世 代歯差	♂?
1 脳頭顎最大長	-	(187)	168	179	170	193	178	190	(187)	183	181	180	177	184	
1d ナジオン脳頭顎長	-	-	166	177	170	191	176	189	(185)	178	177	177	175	180	
5 頭顎差長	-	-	95	99	93	100	99	104	101	102	101	96	95	100	
8 脳頭顎最大幅	-	-	(132)	132	133	133	-	144	145	142	134	135	139	133	
8/1 頭顎差幅示数	-	-	78.6	73.7	78.2	68.9	-	75.8	77.5	77.6	74.0	75.0	78.5	72.3	
9 最小頭頸幅	-	(103)	-	97	93	97	(100)	95	(96)	95	96	91	95	89	
10 最大頭頸幅	-	-	-	111	107	119	114	118	(118)	119	110	114	114	111	
11 内耳幅	115	-	(121)	123	120	120	(125)	126	-	(127)	125	(116)	123	128	
11b ラディカルラーレ幅	113	-	118	120	120	120	-	123	-	-	123	114	121	127	
12 最大頭頸幅	110	-	104	103	(103)	113	110	115	(110)	108	103	113	110	106	
17 パラオニ・ブレグマ高	-	(126)	131	132	130	134	135	140	143	139	131	135	134	135	
17/1 頭顎差高示数	-	67.4	78.0	73.7	76.5	69.4	75.8	73.7	76.5	76.0	72.4	75.0	75.7	73.4	
17/8 頭顎差高示数	-	99.2	100.0	97.7	100.8	-	97.2	98.6	97.9	97.8	100.0	96.4	101.5		
23 脳頭顎水平周	-	-	-	511	483	542	-	539	532	516	518	510	510	513	
24 横孤長	-	-	-	302	309	312	311	332	-	323	303	314	312	310	
25 正中位状孤長	-	-	354	378	-	398	366	404	392	375	372	378	371	378	
26 正中位深孤長	-	-	119	126	117	127	121	141	135	135	134	127	127	132	
27 正中位頭頸孤長	(132)	-	114	123	123	130	128	138	138	116	112	143	128	124	
28 正中位頭頸孤長	-	-	121	129	-	139	117	125	118	124	126	109	115	123	
29 正中位頭頸孤長	-	-	103	110	104	111	107	122	119	116	114	111	112	114	
30 正中位頭頸孤長	(118)	-	104	108	110	118	114	123	122	104	102	125	113	110	
31 正中位頭頸孤長	-	-	101	105	-	108	96	99	100	98	99	94	97	101	
40 頸長	-	-	-	100	-	100	-	(109)	-	93	(98)	98	92	100	
43 上部幅	-	-	-	101	100	107	(106)	107	-	104	109	102	101	(101)	
45 鞍骨上幅	-	-	-	126	(121)	128	-	(133)	-	-	135	126	127	133	
46 中頭幅	-	-	-	94	(87)	103	-	-	-	95	104	92	98	95	
48 上顎高	-	-	(69)	75	-	83	-	80	-	71	(72)	77	67	68	
48/45 コルマン上顎示数	-	-	-	59.5	-	64.8	-	60.2	-	-	53.3	61.1	52.8	51.1	
48/46 ウルヒヨウ上顎示数	-	-	-	79.8	-	80.6	-	-	-	74.7	69.2	83.7	68.4	71.6	
49a 頭顎差幅	-	-	16r	19	18	28	21	21	19	18	24	16	23	18	
51 頭顎幅	-	-	(41)r	41	42	44	43	43	(41)r	45	45	43	41	42	
51a 頭顎幅	-	-	39r	40	40	39	42	42	(39)r	43	39	42	36	40	
52 頭顎高	-	-	-	36	(39)	35	35	39	34	-	37	32	34	33	33
52/51 頭顎示数	-	-	-	87.8	83.3	79.5	81.4	79.1	-	82.2	71.1	79.1	80.5	78.6	
54 鼻幅	(25)	-	-	21	23	25	24	27	(25)	26	28	27	23	25	
55 鼻高	-	-	(49)	56	48	59	56	54	(59)	53	52	55	51	51	
54/55 鼻示数	-	-	-	37.5	47.9	42.4	42.9	50.0	45.5	49.1	53.8	49.1	45.1	49.0	
60 上顎横突起長	-	-	-	54	-	53	-	-	-	49	53	53	48	54	
61 上顎横突起幅	-	-	-	61	-	68	-	(65)	-	60	(68)	65	64	62	
61/60 上顎横突起示数	-	-	-	113.0	-	128.3	-	-	-	122.4	128.3	122.6	133.3	114.8	
63 下顎頭突起幅	-	-	-	113	-	122	-	-	-	-	-	113	(122)	(118)	
66 下顎頭幅	-	-	-	97	-	91	-	-	-	-	-	102	93	(98)	
69 オトガイ高	-	(30)	(38)	-	39	-	-	-	-	38	-	34	30	(31)	
69(3) 下顎厚	-	-	-	10	11	12	12	(14r)	12	13	13	11	14	13	
70 下顎柱高	-	-	-	55	(56)	63	-	-	-	59	(59)	50	60	60	
71 下顎枕幅	-	-	(36)r	32	-	36	-	-	-	34	29	32	35		
71/70 下顎枕示数	-	-	-	58.2	-	57.1	-	-	-	57.6	49.2	64.0	58.3		
額面平田度															
前頭骨張長	-	-	-	94.9	94.7	101.5	101.2	100.9	-	98.9	101.4	96.6	94.2	94.9	
前頭骨垂張長	-	-	-	15.6	17.3	17.4	16.3	20.5	-	15.6	16.1	15.1	17.4	15.1	
前頭骨平坦示数	-	-	-	16.4	18.3	17.1	16.1	20.3	-	15.8	15.9	15.6	18.5	15.9	
鼻骨骨張長	-	-	8.0	9.4	8.8	7.6	9.7	14.5	4.8	5.6	7.9	5.6	7.8	4.0	
鼻骨骨張長	-	-	1.8	3.4	0.9	1.2	2.8	5.5	1.2	1.8	2.5	1.5	1.1	2.0	
鼻骨平坦示数	-	-	22.5	36.2	10.2	15.8	28.9	37.9	25.0	32.1	31.6	26.8	14.1	50.0	
顎上顎部張長	-	-	-	94.9	-	105.0	-	(104.7)	-	(90.8)	101.7	93.9	97.4	(95.4)	
顎上顎部垂張長	-	-	-	26.5	-	26.4	-	(27.3)	-	20.1	23.3	22.8	23.6	(19.7)	
顎上顎部示数	-	-	-	27.9	-	25.1	-	26.1	-	22.1	22.9	24.3	24.2	20.6	

(1)推定値 (r)右側を注記

表7-5 頭蓋形態の変異

	S79106	S79108	S79109	S79112	S79114	S79115	S79117	S79118	S79122	S79124	S79127	S79129	S79131	S79136
	L	R	L	R	L	R	L	R	L	R	L	R	L	R
頭蓋骨合計	(+/-)	(+/-)	(+/-)	(+/-)	(+/-)	(+/-)	(+/-)	(+/-)	(+/-)	(+/-)	(+/-)	(+/-)	(+/-)	(+/-)
頭蓋骨神経筋	(+/-)	(+/-)	(+/-)	(+/-)	(+/-)	(+/-)	(+/-)	(+/-)	(+/-)	(+/-)	(+/-)	(+/-)	(+/-)	(+/-)
頭蓋骨L.R.	(+/-)	(+/-)	(+/-)	(+/-)	(+/-)	(+/-)	(+/-)	(+/-)	(+/-)	(+/-)	(+/-)	(+/-)	(+/-)	(+/-)
ラムダ骨	(+/-)	(+/-)	(+/-)	(+/-)	(+/-)	(+/-)	(+/-)	(+/-)	(+/-)	(+/-)	(+/-)	(+/-)	(+/-)	(+/-)
頭蓋骨長軸 (10 mm以上)	(-1)	(-1)	(+1)	(+1)	(-1)	(-1)	(-1)	(-1)	(-1)	(-1)	(-1)	(-1)	(-1)	(-1)
アストリック骨	(-1)	(-1)	(-1)	(-1)	(-1)	(-1)	(-1)	(-1)	(-1)	(-1)	(-1)	(-1)	(-1)	(-1)
後頭骨矢状骨	(-1)	(-1)	(-1)	(-1)	(-1)	(-1)	(-1)	(-1)	(-1)	(-1)	(-1)	(-1)	(-1)	(-1)
頭蓋骨側骨	(-1)	(-1)	(-1)	(-1)	(-1)	(-1)	(-1)	(-1)	(-1)	(-1)	(-1)	(-1)	(-1)	(-1)
頭蓋骨頂	(+)	(+/-)	(+/-)	(+/-)	(+/-)	(+/-)	(+/-)	(+/-)	(+/-)	(+/-)	(+/-)	(+/-)	(+/-)	(+/-)
前頭骨	(+/-)	(+/-)	(+/-)	(+/-)	(+/-)	(+/-)	(+/-)	(+/-)	(+/-)	(+/-)	(+/-)	(+/-)	(+/-)	(+/-)
前頭骨	(+/-)	(+/-)	(+/-)	(+/-)	(+/-)	(+/-)	(+/-)	(+/-)	(+/-)	(+/-)	(+/-)	(+/-)	(+/-)	(+/-)
側頭骨	(+/-)	(+/-)	(+/-)	(+/-)	(+/-)	(+/-)	(+/-)	(+/-)	(+/-)	(+/-)	(+/-)	(+/-)	(+/-)	(+/-)
下顎骨	(+/-)	(+/-)	(+/-)	(+/-)	(+/-)	(+/-)	(+/-)	(+/-)	(+/-)	(+/-)	(+/-)	(+/-)	(+/-)	(+/-)
アストリック骨	(-1)	(-1)	(-1)	(-1)	(-1)	(-1)	(-1)	(-1)	(-1)	(-1)	(-1)	(-1)	(-1)	(-1)
側頭骨合計	(+/-)	(+/-)	(+/-)	(+/-)	(+/-)	(+/-)	(+/-)	(+/-)	(+/-)	(+/-)	(+/-)	(+/-)	(+/-)	(+/-)
下顎骨長軸-2%	(+/-)	(+/-)	(+/-)	(+/-)	(+/-)	(+/-)	(+/-)	(+/-)	(+/-)	(+/-)	(+/-)	(+/-)	(+/-)	(+/-)
アストリック骨	(-1)	(-1)	(-1)	(-1)	(-1)	(-1)	(-1)	(-1)	(-1)	(-1)	(-1)	(-1)	(-1)	(-1)
側頭骨合計全	(-1)	(-1)	(-1)	(-1)	(-1)	(-1)	(-1)	(-1)	(-1)	(-1)	(-1)	(-1)	(-1)	(-1)
アストリック骨	(+/-)	(+/-)	(+/-)	(+/-)	(+/-)	(+/-)	(+/-)	(+/-)	(+/-)	(+/-)	(+/-)	(+/-)	(+/-)	(+/-)
翼板	(-1)	(-1)	(-1)	(-1)	(-1)	(-1)	(-1)	(-1)	(-1)	(-1)	(-1)	(-1)	(-1)	(-1)
内耳道蓋	(-1)	(-1)	(-1)	(-1)	(-1)	(-1)	(-1)	(-1)	(-1)	(-1)	(-1)	(-1)	(-1)	(-1)
外耳道骨	(-1)	(-1)	(-1)	(-1)	(-1)	(-1)	(-1)	(-1)	(-1)	(-1)	(-1)	(-1)	(-1)	(-1)
頭蓋骨矢状骨 (G. maxilla)	(+/-)	(+/-)	(+/-)	(+/-)	(+/-)	(+/-)	(+/-)	(+/-)	(+/-)	(+/-)	(+/-)	(+/-)	(+/-)	(+/-)
頭蓋骨L.R.-2%	(-1)	(-1)	(-1)	(-1)	(-1)	(-1)	(-1)	(-1)	(-1)	(-1)	(-1)	(-1)	(-1)	(-1)
下顎骨	(-1)	(-1)	(-1)	(-1)	(-1)	(-1)	(-1)	(-1)	(-1)	(-1)	(-1)	(-1)	(-1)	(-1)
矢状骨深部骨質	(+/-)	(+/-)	(+/-)	(+/-)	(+/-)	(+/-)	(+/-)	(+/-)	(+/-)	(+/-)	(+/-)	(+/-)	(+/-)	(+/-)

表7-6 四肢骨计测值 (mm)

[性别]	ST0106			ST0107			ST0115			ST0141			ST0147			ST0124			ST0150			ST0131		
	L	R	L	R	L	R	L	R	L	R	L	R	L	R	L	R	L	R	L	R	L	R	L	R
1 雄性人胚	-	-	148 (141)	-	-	-	(138)	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
4 女性多胎	69 (12)	70 (10)	-	-	10	-	-	-	12	-	-	-	(10)	-	(12)	(11)	12	13	10	11	12	12	(13)	-
5 中性多胎	-	-	13 (13)	-	-	-	-	-	-	-	-	-	(13)	-	(14)	(15)	12	11	9	11	11	11	(12)	-
4/5 中性多胎	-	-	69 (76.9)	-	-	-	83.3	-	-	-	-	-	(76.9)	-	(85.7)	(73.0)	100.0	118.2	111.1	110.0	109.1	108.3	-	-
6 中性同卵	(0.3)	-	36 (38)	-	-	-	36	-	-	-	-	-	(40)	-	(41)	(42)	38	39	32	34	38	41	-	-
1 上肢骨全长	-	-	289	-	-	-	289	283	-	-	-	-	-	-	-	(281)	280	(284)	(270)	270	(270)	284 *	-	
5 中性人胚	-	-	222 (220)	-	-	-	21 (21)	-	-	-	-	-	-	-	-	(21)	-	21	20	21	20	(21)	-	
6 中性后肢	-	-	15 (16)	-	-	-	14 (14)	-	-	-	-	-	-	-	-	(17)	-	16	17	16	15	17	(18)	
6/5 后肢骨全长	-	-	682 (72.7)	-	-	-	667 (66.7)	-	-	-	-	-	-	-	-	(81.0)	-	76.2	81.0	80.0	71.4	85.0	(86)	
7 胚胎小数	-	-	61 (61)	-	57 (55)	51	62	-	-	-	-	-	-	-	-	59	-	56	58	59	60	-	63	
1 雄性人胚	-	-	222	-	-	-	226	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	203	200	(203)	-	-	
3 女性多胎	36	-	36 (37)	-	38	35	-	-	-	-	-	-	44	-	-	-	39	-	38	40	41	44	-	-
4 女性多胎	17	-	14 (14)	-	15 (15)	13	-	-	-	-	-	-	15	15	-	-	17	17	14	15	14	16	-	-
5 女性多胎	10	-	11 (11)	-	11	11	-	-	-	-	-	-	16	16	-	-	17	17	10	10	11	12	-	-
5/4 后肢骨全长	56.8	-	76.6 (73.3)	-	76.6 (73.3)	-	11 (10)	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	80.0 (76.5)	71.4	66.7	78.6	73.0	
[平均]	后肢骨全长	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
1 阴性人胚	-	-	232	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
3 阴性后肢	-	-	38	-	-	-	35	35	-	-	-	-	38	-	-	-	34	-	13	14	36 *	45	35	37
11 阴性人胚	9	-	13 (13)	-	13 (13)	13	-	-	-	-	-	-	14	-	-	-	17	17	13	14	15	15	14	14
12 阴性后肢	13	-	15 (16)	-	15 (16)	16	-	-	-	-	-	-	15	15	-	-	17	17	13	14	15	15	14	14
11/12 阴性后肢	69.2	-	86.7 (81.3)	-	86.7 (86.7)	-	-	-	-	-	-	-	82.4	-	-	-	100.0 (100.0)	77.8 (83.3)	86.7	86.7	86.7	86.7	86.7	92.9
[平均]	阴性后肢	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
1 雄性人胚	-	-	412 (408)	(387)	420	-	-	-	-	-	-	-	39	-	-	-	34	-	-	-	-	-	-	-
6 雄性后肢	-	-	23 (21)	-	20 (20)	28	-	-	-	-	-	-	29	-	-	-	30 (29)	-	25	24	24	25	25	(25)
7 雄性骨全长	22 (22)	-	24 (22)	22 (22)	22 (22)	23	-	-	-	-	-	-	28	-	-	-	24 (23)	-	25	26	25	26	25	(25)
6/7 雄性后肢	104.6 (95.3)	-	120.8 (122.0)	110.9 (110.9)	96.9 (96.9)	110.7 (112.7)	-	-	-	-	-	-	103.6	-	-	-	125.0 (108.7)	(100.0)	104.3 (104.3)	109.1 (109.1)	96.2 (96.2)	103.9 (103.9)	100.0 (100.0)	-
8 雄性同卵	71 (70)	-	82 (83)	68 (68)	82 (82)	82 (82)	-	-	-	-	-	-	83	-	-	-	78 (76)	-	76	76	81	80	78	80
[平均]	雄性全长	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
1 雌性人胚	-	-	339 (338)	-	-	-	357	-	-	-	-	-	-	-	-	341	-	-	-	-	-	-	-	-
1a 雌性后肢	-	-	343 (344)	-	-	-	363	-	-	-	-	-	-	-	-	346	-	-	-	-	-	-	-	-
8 雌性后肢	23 (25)	-	27 (26)	-	-	-	27 (26)	-	-	-	-	-	-	-	-	32 (31)	-	-	-	-	-	-	-	-
9 雌性骨全长	49 (49)	49 (49)	50 (50)	49 (49)	49 (49)	50 (50)	-	-	-	-	-	-	50 (50)	-	-	-	51 (51)	-	50	50	50	50	50	50
9/8 雌性后肢	70.0 (76.0)	-	74.1 (71.4)	-	-	-	74.1 (71.4)	-	-	-	-	-	70.0 (76.0)	-	-	-	70 (71)	-	70 (73)	70 (73)	69.3 (70.3)	73.0 (73.0)	-	-
8a 雌性后肢	-	-	31 (31)	-	-	-	31 (31)	-	-	-	-	-	35	-	-	-	(28)	-	32	31	31	30	30	30
9a 雌性后肢	23	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	24	23	-	-	24 (23)	-	24	23	24	24	24	24
10b 后肢骨全长	71 (71)	-	74 (74)	-	-	-	74 (74)	-	-	-	-	-	73	-	-	-	79 (77)	77	75	77	77	77	77	77
10b 后肢	67	-	66 (71)	-	-	-	66 (70)	-	-	-	-	-	61	-	-	-	73 (80)	-	70	73	73	73	73	73
[平均]	后肢骨全长	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
1 雄性人胚	-	-	0 (14)	-	-	-	(16)	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
2 中性后肢	-	-	0 (9)	0 (9)	-	-	(11)	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
3 中性后肢	-	-	0 (9)	0 (9)	-	-	(11)	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
9/8 中性后肢	0 (9)	-	0 (9)	0 (9)	-	-	(11)	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
4 中性同卵	-	-	0 (9)	0 (9)	-	-	(14)	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-

注: *表示与表7-5、7-6、7-7的后肢骨全长有显著差异。

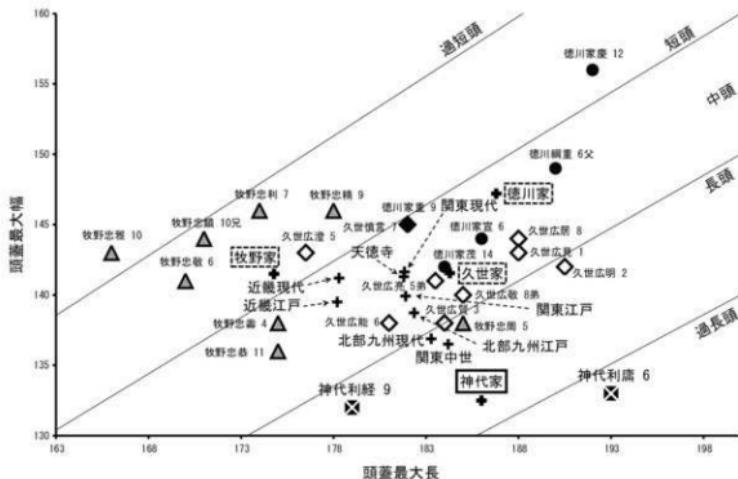


圖 7-1 頭蓋最大長と最大幅(頭蓋長幅指數)

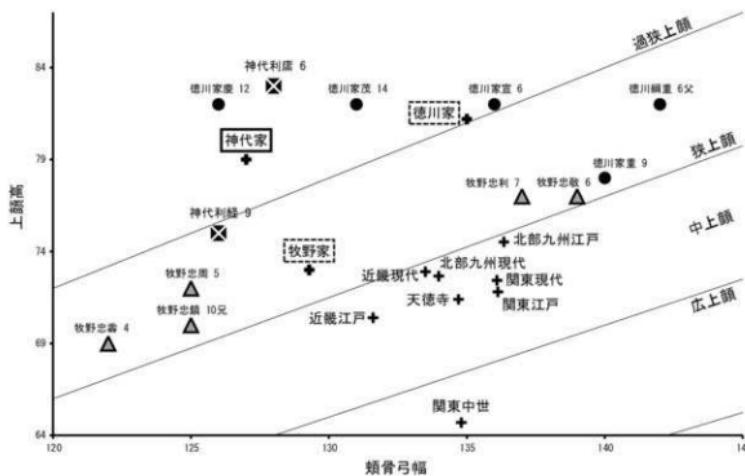


図7-2 鼻骨弓幅と上顎高(コルマン上顎示数)

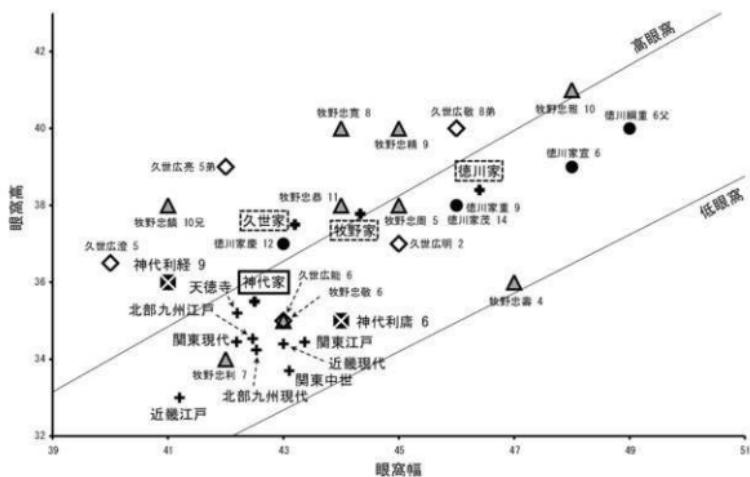
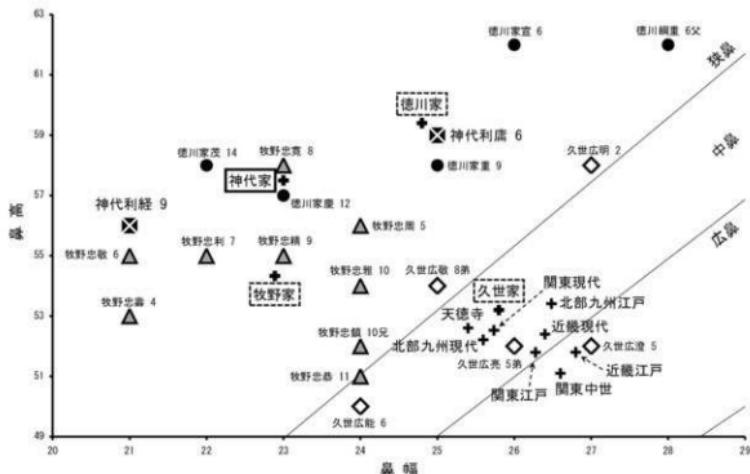


写真1 ST9106

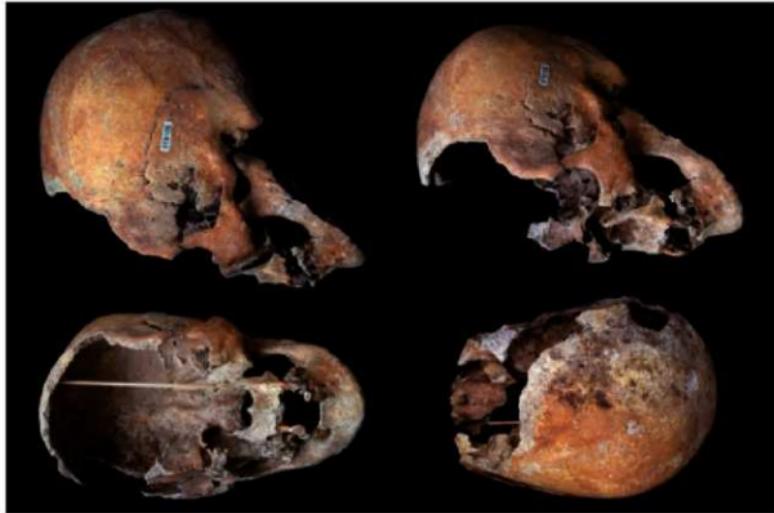
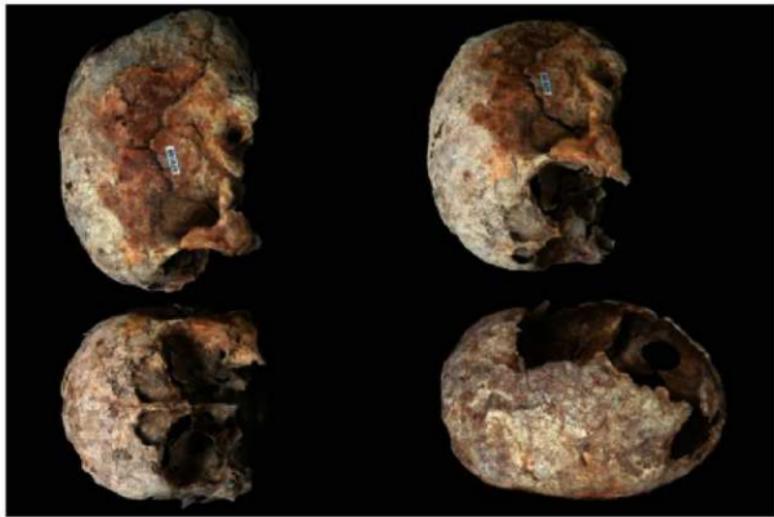


写真2 ST9108



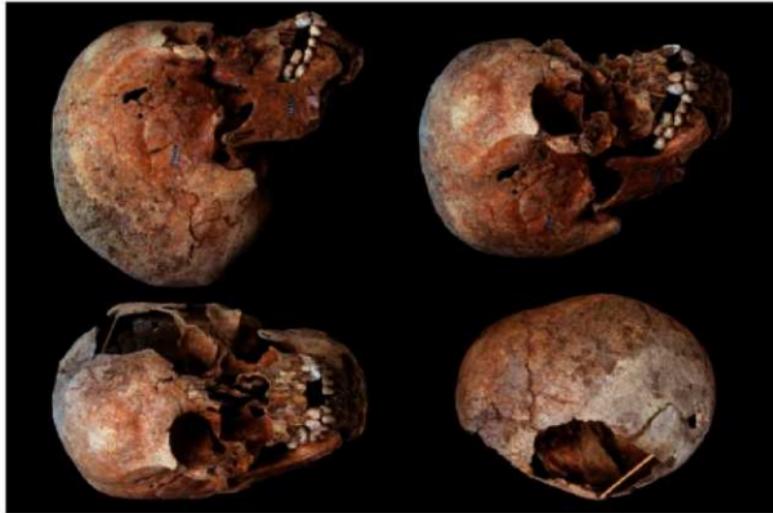


写真3 ST9109



写真4 ST9112

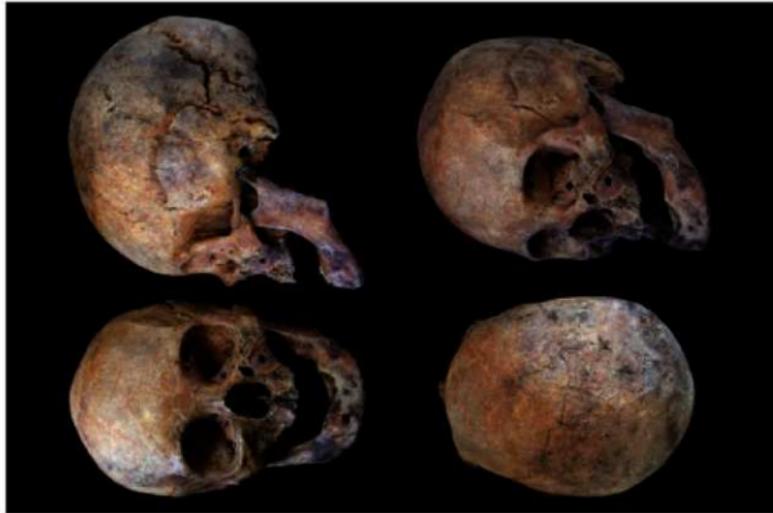


写真5 ST9114



写真6 ST9115

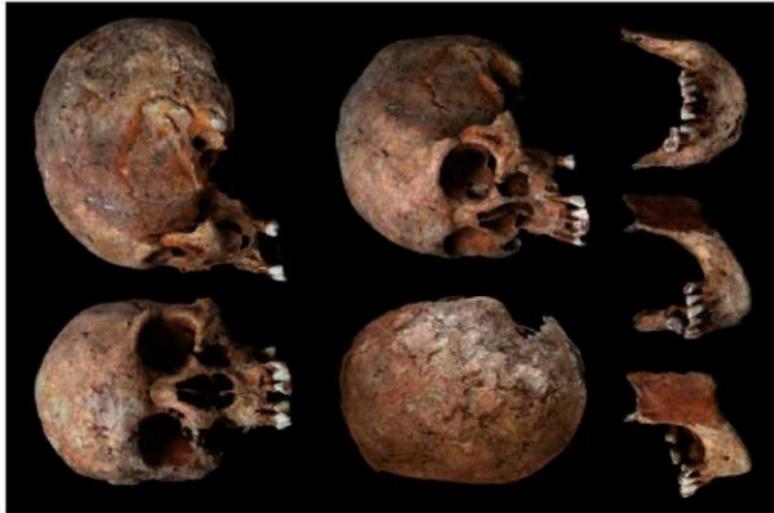


写真7 ST9117



写真8 ST9122

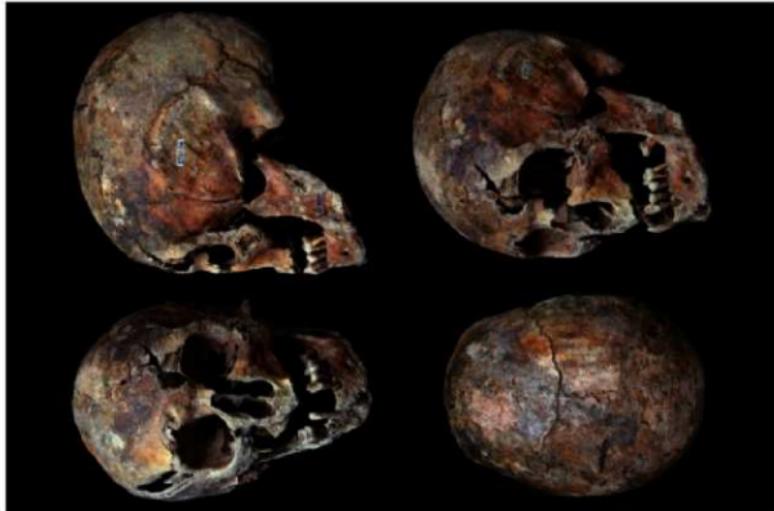


写真9 S79124

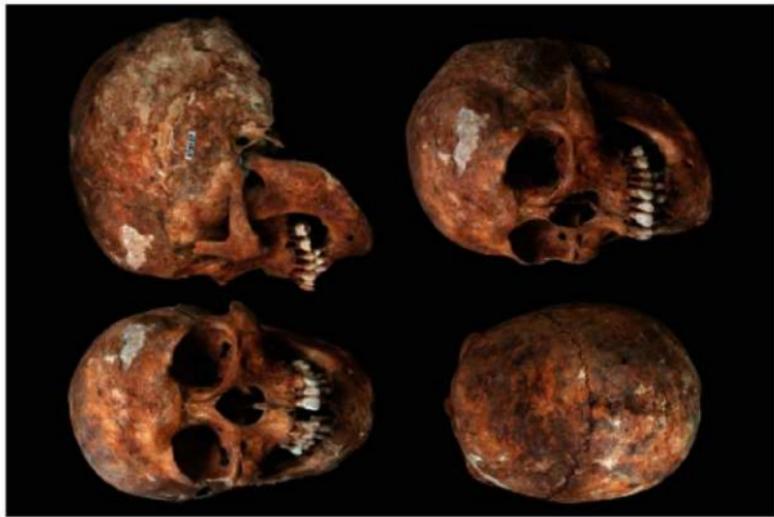


写真10 S79127

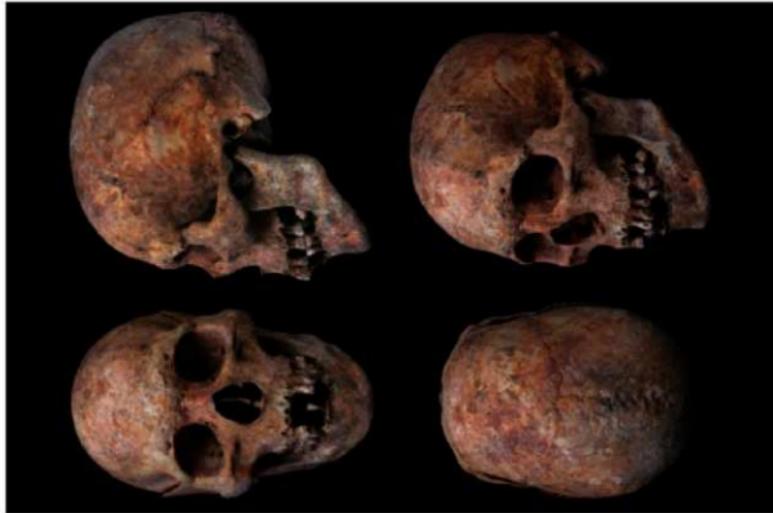


写真 11 S79130

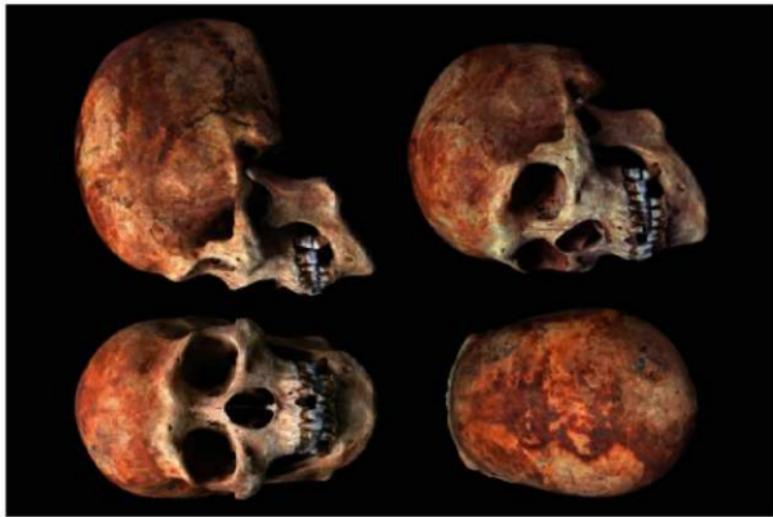


写真 12 S79131

写真 13 ST9136

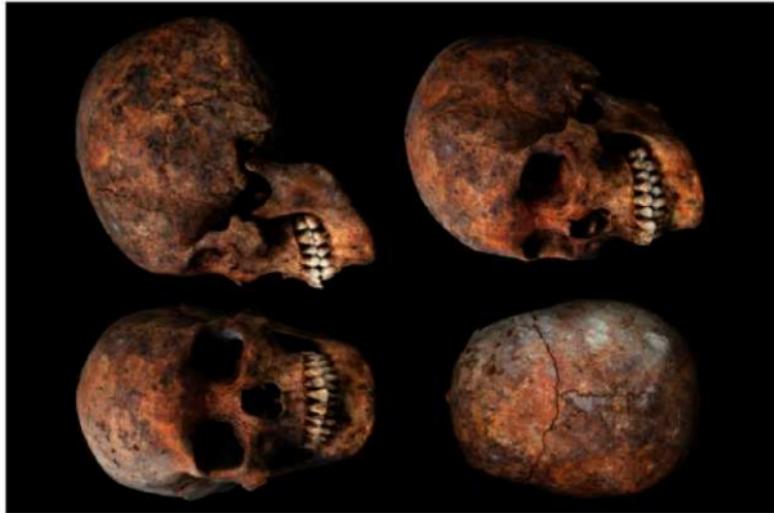


写真 14 ST9138

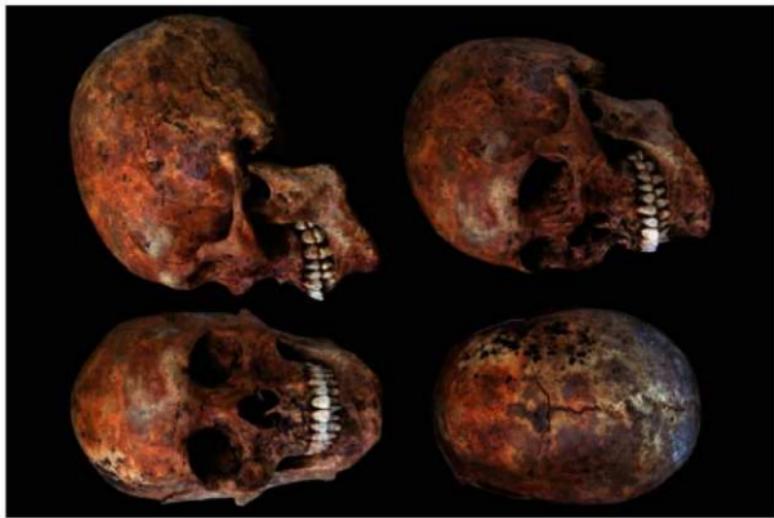




写真 15 上段 ST9105 下段：1.ST9107 2.ST9143 3.ST9144

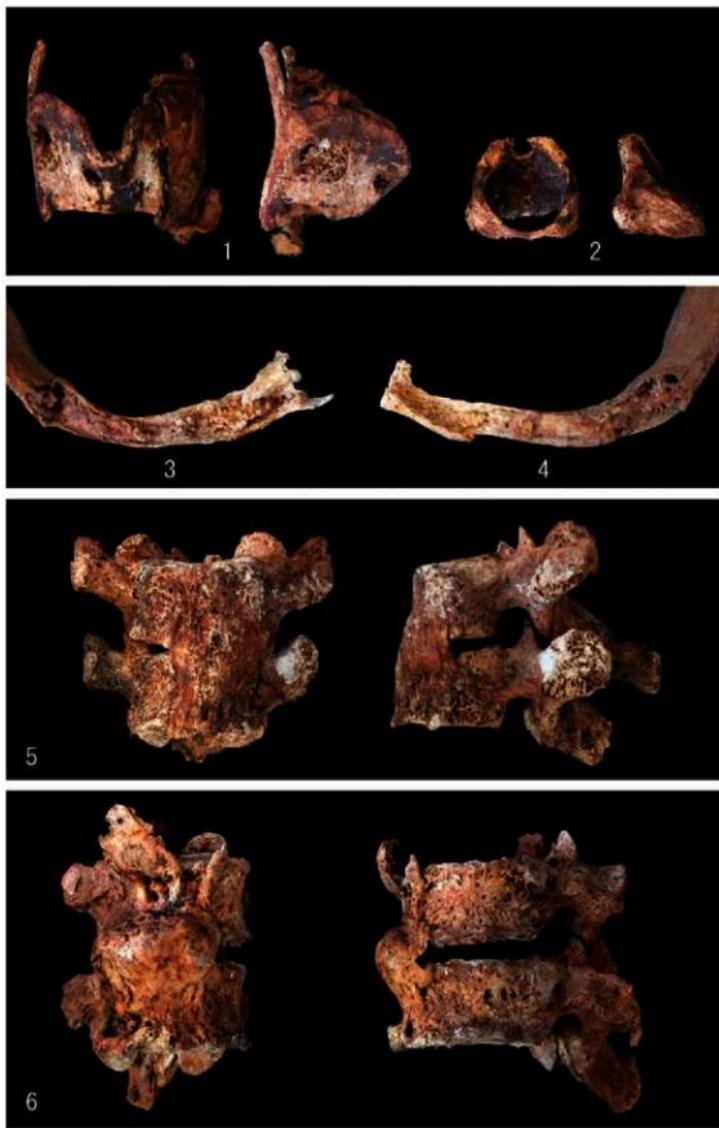


写真16 病変1



写真 17 病変 2



写真 18 病変 3

2 神代家墓所から出土した人骨資料の炭素・窒素同位体比と鉛濃度の分析

東京大学大学院新領域創成科学研究科

宋田 稔・内藤裕一・覚張隆史

1)はじめに

神代家墓所から出土した人骨資料について、残存するコラーゲンを抽出し、その炭素・窒素同位体比を測定し、当時の食生活について検討を行った。また、骨のハイドロキシアバタイトに含まれている鉛濃度を測定し、江戸時代に深刻な環境汚染が発生していた可能性が指摘されている鉛汚染について検討したので、現在までに得られている所見について報告する。

2) 資料と方法

資料は、川久保善智博士（佐賀大学）によって形態学的に部位同定された資料を提供頂いた（表7-7）。次の方法にしたがってコラーゲンを抽出し、炭素・窒素安定同位体比分析に供した(Yoneda et al. 2002)。約0.2~0.5 gの骨片を純水中で超音波洗浄した後、0.2mol/Lの水酸化ナトリウム溶液に12時間浸けて、フミン酸やフルボ酸などの土壌有機物を除去して、乾燥後に粉碎する。この粉末試料をセルロース膜に封入し、1 mol/Lの塩酸と穏やかに反応させて、骨の無機分画ハイドロキシアバタイトを溶解した。セルロース膜は、分子量14,000ダルトン以下の分子を透過する半透膜であり、コラーゲン（約30万ダルトン）は透過できないが、比較的小さな分子量を持つ土壌有機物は透過する。これによって、酸やアルカリに溶解しない土壌有機物（ヒューミン）もある程度除去することができる。次に、残存した有機物を純水中で90℃に加熱することでコラーゲンのみを熱変性によって可溶化し、外部から滲入した土壌有機物とコラーゲンを遠心分離によって分離した。このように得られた溶液をガラスフィルター（Wattman GF/F）でろ過した後に、凍結乾燥して、抽出物を「ゼラチン」と呼び、分析に供した。

上記の方法で抽出されたゼラチンから約0.25mgを分取して、炭素・窒素安定同位体比分析に供した。同位体比測定には、元素分析計（EA : Carlo Erba NA1500）で試料を燃焼し、生成された二酸化炭素および窒素を連続フロー型安定同位体比質量分析器（IRMS : Finnigan MAT 252）で測定するシステム（EA-IRMS）を使用した。通常の測定精度は炭素同位体比（ $\delta^{13}\text{C}$ 値）で0.1%程度、窒素同位体比（ $\delta^{15}\text{N}$ 値）で0.25%程度である。元素分析計では同時に炭素と窒素の含有量を測定しており、炭素と窒素の含有量、C/N比を基準として、抽出されたコラーゲンの保存状態と汚染状況を検討する。なお、安定同位体比は、それぞれの絶対値ではわずかな違いしかないので、国際的な標準物質との偏差を千分率（‰）として表記する。炭素ではペレムナイトの化石（PDB）を基準とし、窒素では大気中の窒素（AIR）を基準としている。

鉛分析は、0.1g程度の骨粉を採取し、硝酸で分解した。分解は、シリコン容器内に密閉した状態で、オープン内で140℃、3時間加熱することで行った。分解溶液を約1万倍に希釈して、結合誘導プラズマ質量分析装置（ICP-MS）で、鉛濃度を測定した。

3) 分析結果と考察

炭素・窒素同位体比の分析結果を表7-8に示す。抽出されたゼラチンに含まれている炭素と窒素の元素数の比（C/N比）をみると、ST9118とST9121、ST9144の3個体が高い値を示している。生体のコラーゲンが示すC/N比は2.9から3.6の範囲なので、この3個体のゼラチンは、土壌有機物などの汚染を受けているか、コラーゲン成分が変質している可能性が考えられるので、炭素・窒素同位体の分析結果を分析不能（ND）とした。残りの個体については、ゼラチンは保存状態の良好なコラーゲンから形成されており、生前の食生活が炭素・窒素同位体比に反

映していると期待できる。

図7-5には骨コラーゲンの炭素窒素同位体比と代表的な食物から構成された同位体比を比較した。比較のために示した食物の値は、食物中のタンパク質からコラーゲンへの濃縮（炭素4.5%、窒素3.5%）を補正している。神代家墓所から出土した人骨における炭素・窒素同位体の分布をみると、C₃植物と海産物の間で比較的直線的に分布していることが分かる。C₃植物にはイネ、麦類などが含まれる。また、淡水魚の影響も否定できないが、直線的な分布は同位体の特徴が大きく異なる2種の混合を示唆しており、ほとんどのタンパク質を海水魚から得た個体を想定しないと説明ができないため、C₃植物と海産物の組み合わせである可能性が高いと考えられる。

とくにST9143が高い窒素同位体比を示しているのは、母乳の摂取により母体よりも窒素同位体比が3%程度濃縮した影響であると考えられる。もう1個体の幼児、ST9107も比較的高い窒素同位体比を示しているが、成人で比較すると、神代家に属する7個体と、僧侶および妻の4個体の間では、炭素同位体比（t-test, p=0.35）も窒素同位体比（t-test, p=0.12）も有意差はない。性差について、神代家の男性3個体と女性4個体を比較したが、炭素同位体（t-test, p=0.14）でも、窒素同位体比（t-test, p=0.13）でも有意差は見られなかった。

神代家墓所から出土した人骨資料の炭素・窒素同位体比を他の近世人骨集団と比較した（図7-6）。本州の集団では、比較的炭素同位体比の高い東北の内陸部の集団（上野、荒谷）と、炭素が低い集団に大別できる。前者はアワ・ヒエなどのC₃植物に属する雑穀を利用していると考えられる。神代家集団は後者の中でも窒素が比較的高い傾向が認められる。これは、海産物を多く摂取した可能性を示唆すると考えられる。

次に、骨における鉛濃度の分析結果を表7-9に示す。有鉛ガソリンなどの影響をうけている現代人の骨中鉛濃度は9.8ppm程度、汚染がないと考えられる縄文時代では1ppm程度であり（Yoshinaga et al. 1998）、今回分析した個体はいずれも鉛濃度が非常に高いと言える。なかでも、ST9107やST9144はそれぞれ3727ppmと1628ppmと非常に高い鉛濃度を示しており、鉛中毒によって死亡した可能性を考慮する必要がある。この2個体がいずれも幼児（3～4歳と1.5～2歳）である点は興味深い。もう1個体の幼児であるST9143も356ppmと比較的高い鉛濃度を示している。その他に高い鉛濃度を示した個体は、ST9106（537ppm）、ST9109（315ppm）、ST9131（378ppm）の3個体が見られるが、前2者は神代家の女性で、後者は僧侶の男性である。江戸時代の鉛汚染源としては、おしろいがその候補にあげられるが、丸薬や塗料などにも含まれており、今回の分析結果はおしろいが主要な鉛汚染源のひとつであっても矛盾しないが、おしろい以外にも鉛の汚染源があったことを示唆している。

しかし、今回示された幼児骨の鉛濃度は、これまでに報告された江戸時代人骨よりも突出して高いものであり、周辺環境からの汚染などがなかったかをさらに検討する必要がある。また、佐賀藩庶民における人骨鉛濃度と比較することで、江戸時代の鉛汚染の実態に重要な知見を与えることが期待される。

謝辞

試料採取では佐賀大学医学部の川久保善智博士にお世話になった。鉛測定では、東京大学新領域創成科学研究所の吉永淳博士にお世話になった。炭素・窒素安定同位体比の測定には、国立環境研究所地球環境研究センターの向井人史博士のお世話になった。記して謝意を表する。

参考文献

- Yoneda, M., A. Tanaka, Y. Shibata, M. Morita, K. Uzawa, M. Hirota, and M. Uchida, (2002). Radiocarbon marine reservoir effect in human remains from the Kitakogane site, Hokkaido, Japan. *Journal of Archaeological Science*, 29 (5): 529-536
 Yoshinaga, J. T. Suzuki, M. Masatoshi (1989). Sex-related and age related variation in elemental concentrations of contemporary Japanese ribs. *Science of the Total Environment*, 79 : 209-221.

表7-7 分析資料

資料番号	部位	個体	性別	年齢
ST9105	頭蓋骨	6代利庸か7代利亮の娘：おカウ	女	10代後半
ST9106	肋骨	5代神代利実の妻	女	老年
ST9107	左中位肋骨	6代利庸か7代利亮の子：鳩之助	不明(男)	3~4歳
ST9108	左右不明尺骨	5代神代利実	男	老年
ST9109	右第一肋骨	7代神代利亮の妻	女	壮年
ST9112	肋骨	9代神代利経	男	壯~老年
ST9114	左上腕骨	6代神代利庸の妻	女	老年
ST9115	肋骨	6代神代利庸	男	老年
ST9117	肋骨	不明：ST9118の家族？	不明	老年~
ST9118	右大腿骨	不明：ST9117の家族？	女?	老年~
ST9121	四肢長骨	不明：僧侶？	男?	老年
ST9122	四肢長骨	不明：僧侶？	男	老年~
ST9124	右脛骨	不明：僧侶の可能性高	男	壯~老年
ST9127	肋骨	不明	男	老年
ST9130	肋骨	不明	男	老年
ST9131	右下位肋骨	宗源院17世住職	男	老年~
ST9136	肋骨	宗源院15世住職の妻	女	壮年
ST9138	肋骨	不明	男	壮年
ST9143	右肋骨	不明：おそらく神代家	不明	4歳
ST9144	左中位肋骨	不明：おそらく神代家	不明	1.5~2歳

表7-8 炭素・窒素同位体比

試料	mg	%C	%N	$\delta^{13}\text{C}$	$\delta^{15}\text{N}$	C/N
ST9105	0.241	43.1	15	-20.5	12.5	3.4
ST9106	0.252	44.2	15.8	-20.9	10.5	3.3
ST9107	0.246	43.7	15.9	-19.1	13.1	3.2
ST9108	0.251	44	14.6	-19.8	13	3.5
ST9109	0.23	44.7	15.5	-19.9	12.4	3.4
ST9112	0.225	44	16.1	-20.1	12.4	3.2
ST9114	0.244	43.9	15.3	-20.2	11.7	3.4
ST9115	0.237	43.6	15.8	-19.8	13	3.2
ST9117	0.251	44.1	15.1	-19.6	13.3	3.4
ST9118	0.27	41.6	10.2	ND	ND	4.8
ST9121	0.264	42.1	11.9	ND	ND	4.1
ST9122	0.254	43.9	15.3	-21.1	10.3	3.3
ST9124	0.244	43.9	14.3	-21.7	10.8	3.6
ST9127	0.264	43.7	15.6	-20.9	10	3.3
ST9130	0.222	43.5	15.8	-21.6	9.9	3.2
ST9131	0.257	44.2	15.6	-20.3	11.2	3.3
ST9136	0.285	44.2	16.3	-19.4	12.4	3.2
ST9138	0.249	44.1	15.7	-21.2	10.5	3.3
ST9143	0.268	44.4	15.6	-19	15.5	3.3
ST9144	0.293	42.9	13.7	ND	ND	3.7

表7-9 骨中鉛濃度の測量結果

個体番号	骨中濃度 (ppm)	注記
ST9105	194.8	6代利庸か 7代利亮の娘：おカウ
ST9106	537.5	5代神代利実の妻
ST9107	3,727.60	6代利庸か 7代利亮の子：鳩之助
ST9108	73.5	5代神代利実
ST9109	314.9	7代神代利亮の前妻
ST9112	14.8	9代神代利経
ST9114	13.5	6代神代利庸の妻
ST9115	53.4	6代神代利庸
ST9117	37.8	不明（神代家？）
ST9118	33.8	不明（神代家？）
ST9121	35.6	不明（僧侶？）
ST9122	92.7	不明（僧侶？）
ST9124	29.2	不明：（僧侶の可能性高）
ST9127	58.9	不明
ST9130	15.9	不明
ST9131	379.9	宗源院 17世住職
ST9136	103.2	宗源院 15世住職の妻
ST9138	30	不明
ST9143	355.9	幼児（おそらく神代家）
ST9144	1,628.90	乳児（おそらく神代家）

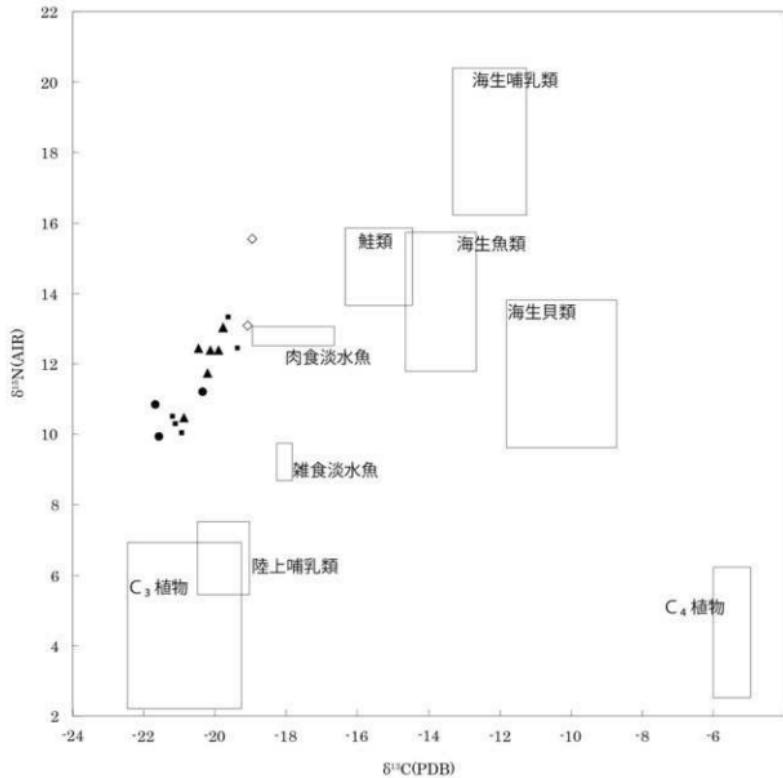


図 7-5 神代家墓所出土人骨と代表的な食料資源の炭素・窒素同位体比 (▲神代家、◇乳幼児、●配偶、■不明)

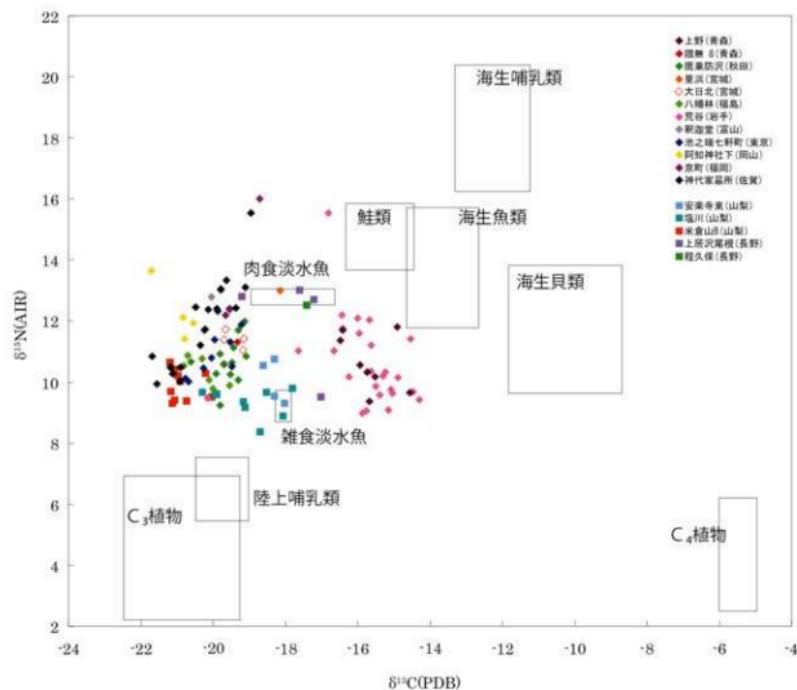


図7-6 神代家墓所出土人骨と他の近世集団における炭素・窒素同位体比の比較

3 東畠瀬遺跡9区（宗源院墓地）から出土したガラス玉の自然科学分析

新免歳靖 東京文化財研究所 文化遺産国際協力センター

1)はじめに

東畠瀬遺跡9区（宗源院墓地）の近世墓からは、水晶製またはガラス製と推測される玉類（数珠玉）が多数出土した。水晶製の玉とガラス製の玉を比較した場合、水晶製の方が価値は高く、ガラス玉はいわば水晶の模造品と位置づけられる。したがって、この両者の材質を明確にすることは被葬者の性格（社会的な地位や経済状態など）を考える上で重要な基礎情報となる。そこで、本調査では、これらの玉類の材質を特定するために比重測定と蛍光X線分析による科学分析を実施した。

一方、筆者は近世遺跡から出土したガラス製品を対象として科学分析を行い、国産や外国産といった生産地の同定、国産ガラス製造技術の変遷と伝播に関する情報を蓄積している（新免 2009、新免ら 2007・2009）。今回の玉類は出土遺構によって埋葬年代に差があるため、ガラス製品の場合は、資料の化学組成の年代的な推移を検証する上で適した資料となる。そこで、上記の調査でガラスと判明した資料の一部を用い、蛍光X線分析によって資料の化学組成を求めた。以下に報告する。

2)分析資料

分析資料は、宗源院墓地内のST9122、ST9138、ST9143の3墓址から出土した玉類79点である。分析にあたっては遺構番号に枝番号を付し、分析資料番号とした。

① ST9122 出土資料（分析資料番号：ST9122-01～12）

ST9122は土葬墓で、墓の埋葬年代については年代を示す遺物がなく不明である。本遺構から12点の玉が出土している。いずれも透明度が高く、表面状態も良いことから水晶製であると予想される。その中でもST9122-01は、直徑約2.1cmと本遺跡内で出土した玉の中では大型であり、銅製の垂下金具が付けられている。残る11点の内、ST9122-02が直徑約1.6cmと大型で、他は直徑約0.9～1cmと小型の玉である。

② ST9138 出土資料（分析資料番号：ST9138-01～66）

ST9138は土葬墓である。副葬品として銭（天保通宝、文久永宝）やキセルが出土している。文久永宝は文久3年（1863年）に鋳造が始まった銭であるため、埋葬年代の上限となる。本遺構からは66点の玉が出土している。いずれも表面が劣化し、表面が薄く曇るか、一部が白色の風化生成物に覆われている。そのため、これらの資料はガラス製と予想され、本来は無色透明の玉であった可能性が高い。資料中には、直徑約1.4～1.6cmのやや大型の玉が2点ある（01・02）。いずれもT字形の穴があけられており、親玉であったと考えられる。それ以外の玉は直徑約0.9～1cm程度で、64点が出土している。以下、前者を大玉、後者を小玉とする。

③ ST9143 出土資料（分析資料番号：ST9143-01）

ST9143は土葬墓である。副葬品には糸切鉄や二枚貝（紅入れ）などが出土している。あわせて17世紀末から18世紀前半の磁器小皿が出土しているため、年代的な基準となる。出土した玉類は直徑約1.1cm程度の玉1点である。本資料もST9138の玉と同様に、一部が風化生成物に覆われており、ガラス製と予想される。本資料は1点のみの出土であるが、T字形の穴があけられており、親玉であったと考えられる。そのため、墓中には残存しなかった有機質の玉（種子製、木製、動物骨製など）と合わせて数珠を形成していた可能性もある。

3)分析方法

比重測定

鉱物やガラスは、構成する物質によって比重値が変化するため、比重を測定することで大まかな種類を推定する

ことができる¹⁾。測定には卓上精密比重秤(Mettler 社製 AE160)を用い、「空气中重量／(空气中重量－水中重量)」の式から比重値を求めた(平均水温 25°C)。ただし、資料中の ST9122-01 は金具が付属し、玉のみの測定はできなかったため、比重測定は実施しなかった。

蛍光X線分析

蛍光X線分析は、資料にX線を照射し、発生する蛍光X線のエネルギーとその強度を測定し、資料を構成する元素の種類(定性分析)や含有量(定量分析)を調べる分析法である。まず全資料の非破壊定性分析を行い、検出元素の種類から材質分類を行った。その結果、ガラス製と判明した資料については一部を選択し、定量分析を行い、資料の化学組成を求めた。ただし、資料は表面が劣化し、風化物が生成しているものもあるため、本来の化学組成を把握することは困難である。そこで、表面の劣化層と風化生成物層をミニターで除去し、新鮮面(3 mm²程度の範囲)を検出した上で分析を行った。

定性分析にはエネルギー分散型蛍光X線分析装置(JEOL 製 JSX-3201M)を用いた。分析条件は、管電圧:50kV、管電流:3 mA、コリメーター径:φ 1 mm、試料室雰囲気:大気測定時間:180 秒である。

定量分析には微小部エネルギー分散型蛍光X線分析装置(SII・ナノテクノロジー社製 SEA5120S)を用いた。分析条件は、管電圧:15・45kV(マルチ分析)、管電流:8～150 μA、コリメーター径:φ 1.8 mm、試料室雰囲気:真空、測定時間:180 秒×2 回である。成分元素の定量は、主成分元素を中心とする 15 元素(Si・Ti・Al・Fe・Mg・Ca・Na・K・Pb・Mn・Co・Cu・Zn・Rb・Sr)の酸化物の和が 100 となるファンダメンタルパラメーター(FP)方式で行い、標準ガラス試料(STG-Na 8)を用いて規格化した。

4) 結果および考察

比重測定結果

比重測定の結果を表7-10に記す。ST9122 の 11 点の比重値は 2.63～2.65 であった。ST9138 の小玉 64 点は、2 点(08・29)が 3.54、3.55 とやや低い値を示した以外は、62 点が 3.57～3.60 にまとまった。一方、ST9138 の大玉 2 点(01・02)は 3.53、3.48 と小玉に比べると低い値を示した。ST9143 の 1 点(01)は 3.66 と全資料中最も高い値であった。

以上より、ST9122 の玉類は水晶製(石英・水晶)の比重は 2.7)であり、ST9138 と ST9143 の玉類は鉛ガラス製(鉛ガラスの比重は 3.4～4.3)と推定できる結果となった。

蛍光X線分析による定性分析結果

蛍光X線分析による定性分析の結果、各資料から検出された主要な元素を表7-11に記す。あわせて図7-7～7-9に各構造の代表資料の蛍光X線スペクトルを示す。

ST9122 の玉 12 点からは、Si(ケイ素)以外に特徴的なピークが検出されなかった(図7-7)²⁾。そのため、ケイ素を主成分とする水晶製の玉であると判断した。

ST9138 の玉 66 点、ST9143 の玉 1 点からは、Si、K(カリウム)、Pb(鉛)が検出されたため(図7-8・7-9)、カリウム鉛シリカガラス(以下、カリ鉛ガラス)である可能性が高い。ただし、本分析条件ではナトリウムなどの軽元素を検出できないため、より正確なガラス材質の分析は定量分析結果から判別することとしたい。

上記の 3 元素以外には、Ca(カルシウム)、Mn(マンガン)、Fe(鉄)、Cu(銅)などのピークが確認された。これらの元素はいずれも微量であることから、原料として加えられたものではなく、原料中に不純物として含まれていたか、埋没中に土壤から資料表面に沈着したと考えられる。その他の検出元素としては、Zn(亜鉛)が注目される。今回の分析では、ST9138 の資料全点から Zn が検出され(図7-8)、ST9143 の 1 点からは検出されな

かった（図7-9）。

以上の結果から蛍光X線分析によるガラス製品と水晶製品の分類結果は、肉眼観察や比重測定と整合性のあるものとなった。

表7-10 比重および蛍光X線分析による定性分析結果

分析No	比重	検出主要元素	材質	分析No	比重	検出主要元素	材質
ST9122-01	-	Si	水晶	ST9138-29	3.55	Si, K, Ca, Fe, Zn, Pb	カリ鉛ガラス
ST9122-02	2.65	Si	水晶	ST9138-30	3.59	Si, K, Ca, Fe, Zn, Pb	カリ鉛ガラス
ST9122-03	2.63	Si	水晶	ST9138-31	3.58	Si, K, Ca, Fe, Zn, Pb	カリ鉛ガラス
ST9122-04	2.63	Si	水晶	ST9138-32	3.59	Si, K, Ca, Fe, Zn, Pb	カリ鉛ガラス
ST9122-05	2.63	Si	水晶	ST9138-33	3.58	Si, K, Ca, Fe, Zn, Pb	カリ鉛ガラス
ST9122-06	2.63	Si	水晶	ST9138-34	3.59	Si, K, Ca, Fe, Cu, Zn, Pb	カリ鉛ガラス
ST9122-07	2.63	Si	水晶	ST9138-35	3.60	Si, K, Ca, Fe, Zn, Pb	カリ鉛ガラス
ST9122-08	2.63	Si	水晶	ST9138-36	3.58	Si, K, Ca, Fe, Zn, Pb	カリ鉛ガラス
ST9122-09	2.63	Si	水晶	ST9138-37	3.59	Si, K, Ca, Fe, Zn, Pb	カリ鉛ガラス
ST9122-10	2.63	Si	水晶	ST9138-38	3.58	Si, K, Ca, Ti, Fe, Zn, Pb	カリ鉛ガラス
ST9122-11	2.63	Si	水晶	ST9138-39	3.58	Si, K, Ca, Fe, Zn, Pb	カリ鉛ガラス
ST9122-12	2.63	Si	水晶	ST9138-40	3.58	Si, K, Ca, Mn, Fe, Zn, Pb	カリ鉛ガラス
				ST9138-41	3.58	Si, K, Ca, Fe, Zn, Pb	カリ鉛ガラス
ST9138-01	3.53	Si, K, Ca, Mn, Fe, Zn, Pb	カリ鉛ガラス	ST9138-42	3.58	Si, K, Ca, Mn, Fe, Zn, Pb	カリ鉛ガラス
ST9138-02	3.48	Si, K, Ca, Mn, Fe, Zn, Pb	カリ鉛ガラス	ST9138-43	3.58	Si, K, Ca, Fe, Zn, Pb	カリ鉛ガラス
ST9138-03	3.57	Si, K, Ca, Fe, Zn, Pb	カリ鉛ガラス	ST9138-44	3.58	Si, K, Ca, Fe, Zn, Pb	カリ鉛ガラス
ST9138-04	3.57	Si, K, Ca, Fe, Zn, Pb	カリ鉛ガラス	ST9138-45	3.59	Si, K, Ca, Fe, Zn, Pb	カリ鉛ガラス
ST9138-05	3.58	Si, K, Ca, Fe, Cu, Zn, Pb	カリ鉛ガラス	ST9138-46	3.58	Si, K, Ca, Mn, Fe, Cu, Zn, Pb	カリ鉛ガラス
ST9138-06	3.57	Si, K, Fe, Zn, Pb	カリ鉛ガラス	ST9138-47	3.58	Si, K, Ca, Fe, Zn, Pb	カリ鉛ガラス
ST9138-07	3.56	Si, K, Ca, Fe, Cu, Zn, Pb	カリ鉛ガラス	ST9138-48	3.58	Si, K, Ca, Mn, Fe, Zn, Pb	カリ鉛ガラス
ST9138-08	3.54	Si, K, Ca, Mn, Fe, Zn, Pb	カリ鉛ガラス	ST9138-49	3.59	Si, K, Ca, Mn, Fe, Zn, Pb	カリ鉛ガラス
ST9138-09	3.57	Si, K, Ca, Fe, Zn, Pb	カリ鉛ガラス	ST9138-50	3.59	Si, K, Ca, Fe, Zn, Pb	カリ鉛ガラス
ST9138-10	3.57	Si, K, Ca, Fe, Zn, Pb	カリ鉛ガラス	ST9138-51	3.60	Si, K, Ca, Fe, Zn, Pb	カリ鉛ガラス
ST9138-11	3.58	Si, K, Ca, Mn, Fe, Zn, Pb	カリ鉛ガラス	ST9138-52	3.60	Si, K, Ca, Fe, Zn, Pb	カリ鉛ガラス
ST9138-12	3.58	Si, K, Ca, Mn, Fe, Zn, Pb	カリ鉛ガラス	ST9138-53	3.59	Si, K, Ca, Fe, Zn, Pb	カリ鉛ガラス
ST9138-13	3.57	Si, K, Ca, Mn, Fe, Zn, Pb	カリ鉛ガラス	ST9138-54	3.59	Si, K, Ca, Fe, Zn, Pb	カリ鉛ガラス
ST9138-14	3.58	Si, K, Ca, Fe, Zn, Pb	カリ鉛ガラス	ST9138-55	3.59	Si, K, Ca, Fe, Zn, Pb	カリ鉛ガラス
ST9138-15	3.58	Si, K, Ca, Mn, Fe, Cu, Zn, Pb	カリ鉛ガラス	ST9138-56	3.59	Si, K, Ca, Fe, Cu, Zn, Pb	カリ鉛ガラス
ST9138-16	3.58	Si, K, Ca, Mn, Fe, Cu, Zn, Pb	カリ鉛ガラス	ST9138-57	3.59	Si, K, Ca, Fe, Zn, Pb	カリ鉛ガラス
ST9138-17	3.58	Si, K, Ca, Fe, Cu, Zn, Pb	カリ鉛ガラス	ST9138-58	3.58	Si, K, Ca, Fe, Zn, Pb	カリ鉛ガラス
ST9138-18	3.57	Si, K, Ca, Zn, Pb	カリ鉛ガラス	ST9138-59	3.60	Si, K, Ca, Fe, Zn, Pb	カリ鉛ガラス
ST9138-19	3.59	Si, K, Ca, Mn, Fe, Zn, Pb	カリ鉛ガラス	ST9138-60	3.60	Si, K, Ca, Fe, Zn, Pb	カリ鉛ガラス
ST9138-20	3.57	Si, K, Ca, Fe, Zn, Pb	カリ鉛ガラス	ST9138-61	3.59	Si, K, Ca, Fe, Zn, Pb	カリ鉛ガラス
ST9138-21	3.58	Si, K, Ca, Fe, Zn, Pb	カリ鉛ガラス	ST9138-62	3.60	Si, K, Ca, Fe, Zn, Pb	カリ鉛ガラス
ST9138-22	3.57	Si, K, Ca, Mn, Fe, Zn, Pb	カリ鉛ガラス	ST9138-63	3.59	Si, K, Ca, Fe, Cu, Zn, Pb	カリ鉛ガラス
ST9138-23	3.57	Si, K, Ca, Fe, Zn, Pb	カリ鉛ガラス	ST9138-64	3.59	Si, K, Ca, Fe, Zn, Pb	カリ鉛ガラス
ST9138-24	3.58	Si, K, Fe, Zn, Pb	カリ鉛ガラス	ST9138-65	3.60	Si, K, Ca, Fe, Cu, Zn, Pb	カリ鉛ガラス
ST9138-25	3.59	Si, K, Ca, Fe, Zn, Pb	カリ鉛ガラス	ST9138-66	3.60	Si, K, Ca, Fe, Zn, Pb	カリ鉛ガラス
ST9138-26	3.57	Si, K, Ca, Ti, Mn, Fe, Zn, Pb	カリ鉛ガラス				
ST9138-27	3.56	Si, K, Zn, Pb	カリ鉛ガラス				
ST9138-28	3.58	Si, K, Ca, Fe, Zn, Pb	カリ鉛ガラス				
				ST9143-01	3.66	Si, K, Ca, Fe, Pb	カリ鉛ガラス

* 下線がある元素は主要な成分と考えられるもの。

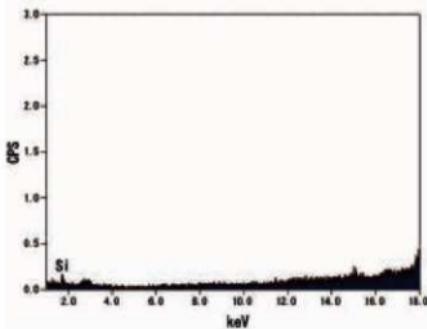


図7-7 ST9122-02(水晶製)の蛍光X線スペクトル

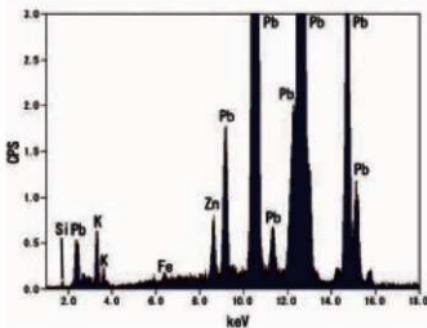


図7-8 ST9138-21(カリ鉛ガラス製)の蛍光X線スペクトル

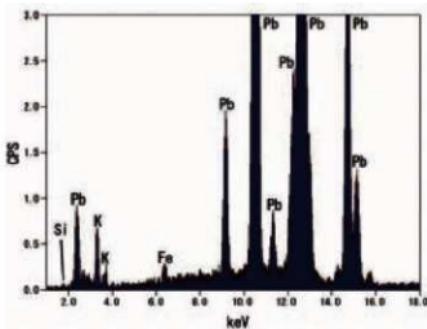


図7-9 ST9143-01(カリ鉛ガラス製)の蛍光X線スペクトル

蛍光X線分析による定量分析結果

定性分析によってガラス製品と明らかになったST9138とST9143出土資料について、化学組成を明らかにするために蛍光X線分析による定量分析を行った。選択した資料は、ST9138の中から大玉2点(01・02)と小玉3点(20・40・60)、ST9143の小玉1点(01)の合計6点である。

分析結果を表7-11に記す。本結果から、いずれもケイ素(SiO_2)、カリウム(K_2O)、鉛(PbO)を主成分とするカリ鉛ガラスであることが確実となった。日本における本格的かつ継続的なガラス生産は、江戸時代の長崎ではじまったと考えられている。近世日本で製造されたガラスは、中国宋代(960~1279年)に開発された金属鉛(Pb)、硝石(KNO_3)、石粉(SiO_2)の3種類の原料を混合して製造するカリ鉛ガラス($\text{K}_2\text{O}-\text{PbO}-\text{SiO}_2$ ガラス)の技術系譜を引くもので(棚橋1966)、近世を通じて多少の例外はあるものの、この1種類のガラスのみが製造され続けた。ガラスの製造は、遅くとも17世紀後半には長崎で行われており³⁾、18世紀以降、大阪、京都、江戸などにも技術が伝わったとされる。したがって、今回の分析資料は材質的に国産ガラスであり⁴⁾、遺跡の立地的に長崎に近いため長崎産ガラスの可能性もあると考えている。

表7-11 蛍光X線分析による定量分析結果(%)

	SiO_2	TiO_2	Al_2O_3	FeO	MgO	CaO	Na_2O	K_2O	PbO	MnO	Co_2O_3	CuO	ZnO	Rb_2O	SrO
ST9138-01	38.6	0.05	2.7	0.01	nd	0.08	nd	10.5	47.3	0.06	nd	0.02	0.41	0.13	0.10
ST9138-02	38.8	0.02	2.8	0.02	nd	0.12	nd	10.5	47.0	0.09	nd	0.02	0.29	0.13	0.10
ST9138-20	37.8	0.04	2.5	0.02	nd	0.08	nd	9.2	49.7	0.01	nd	0.01	0.45	0.14	0.09
ST9138-40	37.8	0.04	2.4	0.01	nd	0.07	nd	9.0	50.0	0.04	nd	0.01	0.43	0.15	0.09
ST9138-60	37.7	nd	2.4	0.01	nd	0.09	nd	9.2	49.8	0.04	nd	0.02	0.46	0.17	0.09
ST9143-01	36.6	0.01	2.4	0.02	nd	nd	0.05	9.4	51.1	0.01	nd	0.04	nd	0.13	0.11

nd:検出限界以下

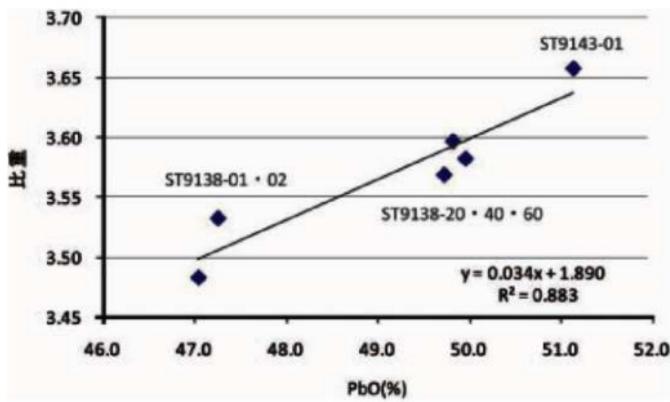


図7-10 比重値とPbOの分布図

他の含有元素を見ると、石粉 (SiO_2) に伴うと考えられるアルミニウム (Al_2O_3) が 2% 程度含まれる以外は、前述した亜鉛を除き、ほとんど含まないか、不純物程度の含有である。鉄、銅、マンガン、コバルトなどの着色元素の濃度も極めて低く、無色透明なガラスを製造するために精製された原料が使用されたと考えられる。

全体的な分析値を見ると、 SiO_2 が約 37 ~ 39%、 K_2O が約 9 ~ 11%、 PbO が約 47 ~ 51% にまとまり、比較的類似した組成を示している。そこで、個々の資料の特徴を把握するために、比重値と PbO 濃度で分布図を作成し、図 7-10 に示す。

本図から、比重値と PbO 濃度には強い正の相関関係があり、原料中の鉛分の増減によって比重値が変化することが認められた。また、ST9138 の大玉 (01・02)、同小玉 (20・40・60)、ST9143-01 の 3 グループに分かれた。特に、ST9138 の小玉 3 点は非常にまとまって分布しており、資料間の均質性が高く、同一工房で同時に製造されたと考えられる。また、大玉の 2 点も基本的に小玉と同一の工房で製造された可能性が高いが、 PbO 濃度で 3 % 近い開きがあり、これが玉の大きさによって微妙に原料調合を変えて製造された結果生じた差なのか、偶然生じた差なのかなどは判断がつかない。

いずれにせよ、個別にはまとまる傾向があるものの全体的には良く似ており、特に、ST9138 と ST9143 には年代的に 1 世紀以上の開きが存在するものの、ガラス玉の化学組成が類似している点は興味深い。

亜鉛の有無と製造年代について

前述したように、今回の分析では、ST9143-01 (17 世紀末から 18 世紀前半) からは亜鉛が検出されず、ST9138-01 ~ 66 (19 世紀中盤から後半) からは亜鉛が検出された。特に ST9138 の 66 点、全てから亜鉛が検出された点は特筆すべきで、意図的に加えられたものと判断できる。

近世ガラスの製造技術について記した 19 世紀前半の文献資料には、金属鉛を溶かす際に少量の亜鉛を加えるという記述がある（棚橋 1975・1983 など）。今回の分析では 19 世紀代の資料から亜鉛が検出されており、文献資料の記述を実証するデータといえる。文献に記載された添加量は、おおよそ鉛 100 に対して 3 度程度（濃度では約 1.5 ~ 2 %）である。表 7-11 の定量分析値を見ると、ST9138 の 6 点の亜鉛濃度 (ZnO) は 0.29 ~ 0.46%（平均値 0.41%）であり、一定量の亜鉛が加えられていたことがわかる。ただし、文献値とやや開きがあり、今後分析データを蓄積し検証する必要がある。

近世ガラスの科学分析において亜鉛が検出されることは珍しいことではないが、今回のように資料の年代差に応じて亜鉛の検出に差異が認められた点は重要な結果である。

5) おわりに

今回の分析では、東畠瀬遺跡 9 区（宗源院墓地）内の 3 墓址から出土した玉製品の科学分析を実施した。その結果、ST9122 から出土した玉製品は水晶製、ST9138 と ST9143 から出土した玉製品はカリ鉛ガラス製であることが明らかとなった。今後は、鉛同位体比測定を実施し、鉛原料の生産地に関する議論を行う予定である。また、長崎市内の遺跡や江戸遺跡から出土したガラス製品との比較を行い、製造地や製造年代に関する検討を行いたい。

注

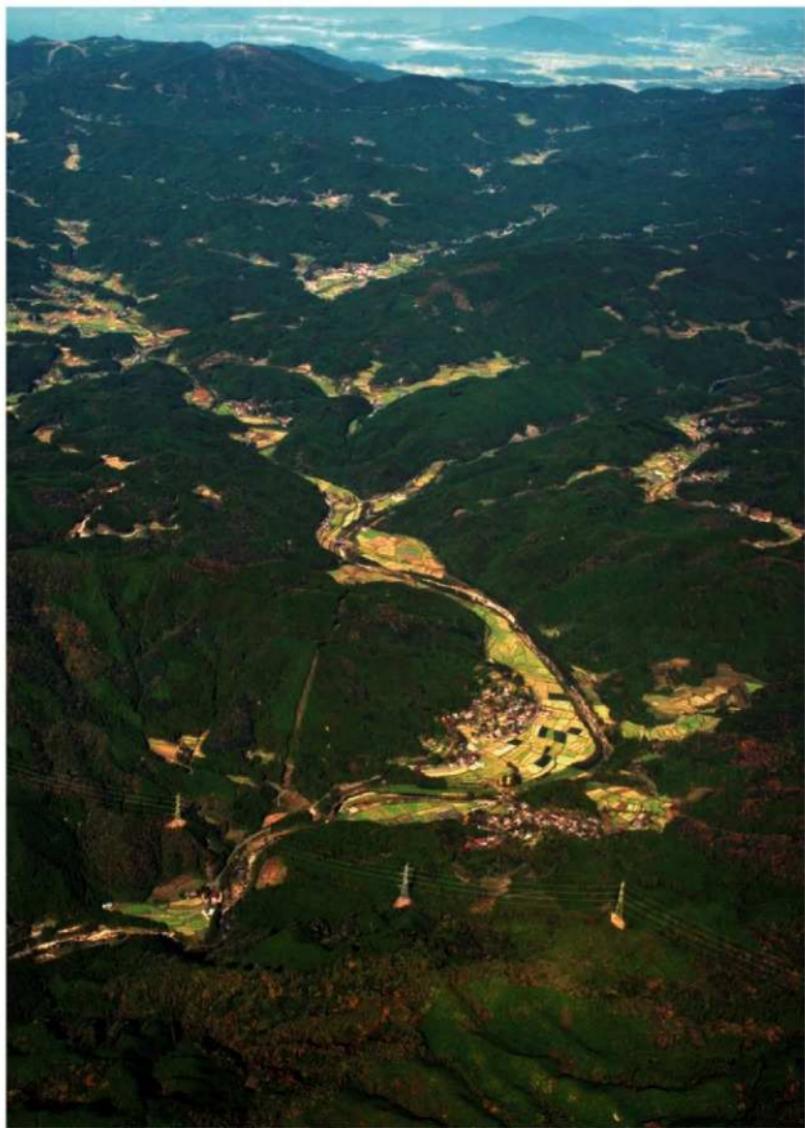
- 1) 特に近世の国産ガラスは製造時期によって比重値が変化することが明らかとなっており、おおよその製造年代を推定することが可能となっている（岡 1996）。しかし、今は紙面の都合から製造年代の推定は行わなかった。
- 2) 本図のケイ素のピークは非常に小さいが、これは大気条件下での分析のためである。蛍光 X 線分析では、原子番号が K (カリウム) 以下の元素は大気条件下では検出が難しく、試料室を真空にして分析する。今回の定性分析では、分析の迅速性を考慮し、大気化での分析をおこなった。
- 3) 長崎でガラス生産がいつ開始されたのかは明らかでない。延宝四年（1676）に脚注となった末次家の財産目録である「末次平蔵財産所御私帳」（元禄四年（1691））に「日本物ひいとろ鈎花人」という記載があり（「ひいとろ」とは「びいどろ」、すなわちガラスの古語である）、延宝四年の段階では国産ガラスの製造が始まっていたと考えられる。ただし、開始時期がどこまで遡るかは意見が分かれている。

4) ただし、当時の中国（明末～清）でもカリ鉛ガラスが製造されていたとされるが、中国のガラス製品の研究が進展しておらず、その詳細は不明である。現時点では国産与中国産のカリ鉛ガラスを化学組成によって分類することはできない。形状や色調などの特徴が有限な資料が、国産または中国産ガラスと同定できるにすぎない。今後、考古学的に中国産と明確な資料の分析結果を蓄積していく必要がある。今回の資料は、形状などから生産地は判断できないが、ごく普通の玉であり、わざわざ輸入していたとは考えにくく、国産品と考えている。

参考文献

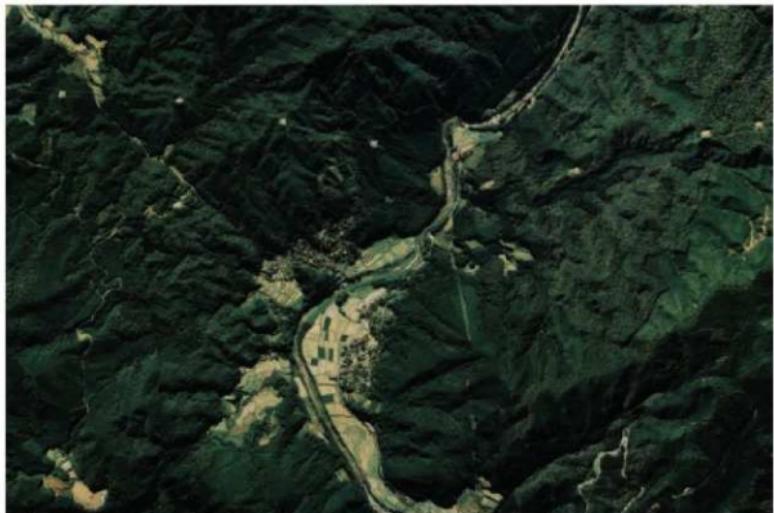
- 岡 泰正 1996 「ひいどろ・ぎやまん概説 年代基準を求める試みー」「ひいどろ・ぎやまん図譜」 池文社
櫻橋淳二 1975 「鉛丹ガラスと金屬鉛ガラス（二）」「松蔭女子学院大学・短期大学」研究紀要 第 17 号
櫻橋淳二 1983 「江戸時代におけるガラス技術の変遷と伝播」「松蔭女子学院大学・短期大学」研究紀要 第 25 号
新免歳靖・木下正史・永船正春 2007 「近世遺跡出土ガラス製品の自然科学的研究」「日本文化財学会第 24 回大会発表要旨集」 日本文化財科学会
新免歳靖 2009 「東京都文京区弓町道路 6 次調査出土の近世ガラス製品の材質調査」「東京都文京区弓町道路第 6 地点」 テイケイトレーナ埋蔵文化財事業部
新免歳靖・齋藤努 2010 「有珠 4 道跡から出土したガラス玉の自然科学分析」「北海道伊達市有珠 4 道路」伊達市噴火湾文化研究所

写真図版



嘉瀬川ダム予定地周辺（南東から）
(平成4年10月撮影 嘉瀬川ダム工事事務所提供)

写真図版3－1



畠瀬地区周辺（真俯瞰合成）（平成4年10月 嘉瀬川ダム工事事務所提供）



東畠瀬遺跡全景（南から）（平成4年10月 嘉瀬川ダム工事事務所提供）



7A 区（写真右）・7B 区（写真中央）・7C 区（写真左）（南東から）



7C 区 全景（東から）

写真図版 4-2



71区 調査区全景（北東から）



71区 調査区全景（西から）



71区 SK7018（西から）



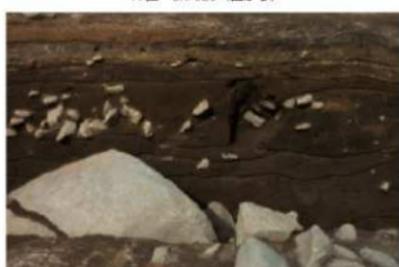
71区 SK7019（西から）



71区 SK7020（西から）



71区 トレンチ土層（西から）



71区 トレンチ土層（南西から）



71区 調査状況



7J区 調査区全景（南西から）



7J区 SK7022（西から）



7J区 SK7023（西から）



7J区 1トレンチ土層（北東から）



7J区 1トレンチ土層（東から）



7J区 2トレンチ土層（北から）



7J区 2トレンチ・南壁土層（北から）



7J区 調査状況

写真図版 4-4



7K区 調査区全景（北東から）



7K区 調査区全景（北東から）



7K区 調査区全景（北西から）



7K区 1トレンチ（東から）



7K区 1トレンチ（北から）



7K区 2トレンチ（南西から）



7K区 2トレンチ（北から）



7K区 調査状況



九区 調査区全景（北西から）



7L区・7J区（写真奥） 調査区全景（北西から）



九区 1トレンチ（北東から）



九区 1トレンチ土層（北東から）



7L区 2トレンチ（北から）



九区 2トレンチ土層（北東から）



7L区 3トレンチ（東から）



7L区 3トレンチ土層（東から）

写真図版 4-6



7M区 調査区全景（南東から）



7M区 調査区全景（北西から）



7M区 1トレンチ（南東から）



7M区 2トレンチ（西から）



7M区 2トレンチ土層 c~d 南側（東から）



7M区 2トレンチ土層 e~h 南側（南から）



7M区 3トレンチ（北から）



7M区 調査状況



写真図版 4-8





7区出土遺物 3

写真図版 4 – 10



7区出土遺物 4



7区出土遺物 5

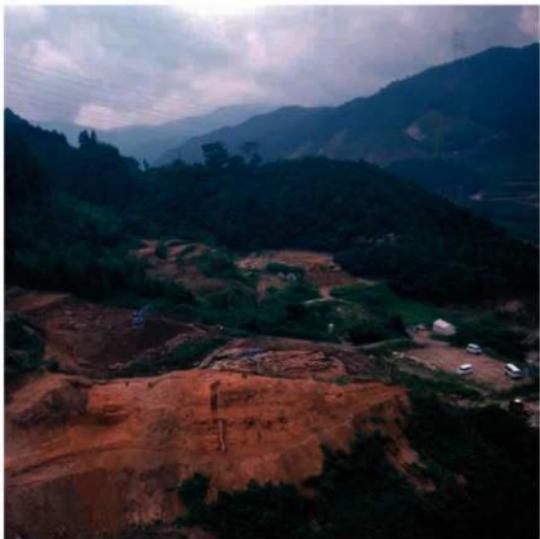
写真図版 4 - 12



7区出土遺物 6



写真図版 5-1



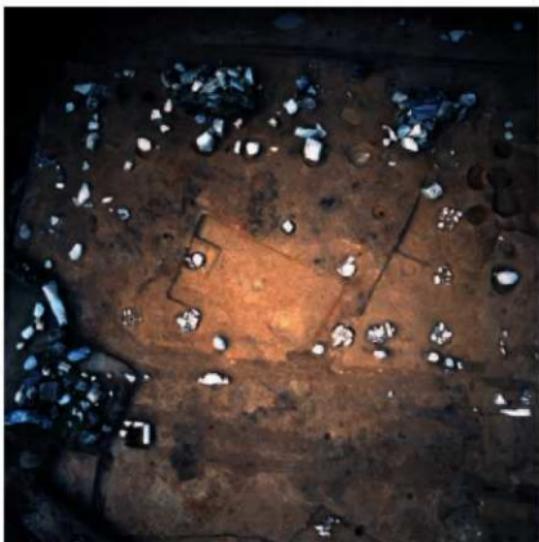
6G 区：遠景（北東から）



6G 区：第1面全景（東から）



6G 区第1面 SB6012 (上が西)



6G 区第1面 SB6013 (上が西)

写真図版 5-3



6G 区 第1面の出土遺物



6G 区 第2面全景 (南から)



6G 区 第2面全景 (上が南)

写真図版 5-5



6G 区第 2 面 庭園造構 (上が南)



6G 区第 2 面 SX6079 (北西から)



6G 区第 2 面 SG6060 (上が南)



6G 区第2面 烧土棲出状況（北から）



6G 区第2面 SX6016（南から）



6G 区第2面 SG6061（南西から）



6G 区第2面 SX6057（東から）



6G 区第2面 SX6065・6066・6067（東から）



6G 区第2面 SX6062（南西から）



6G 区第2面 遺物出土状況



6G 区第2面 SX6092（南東から）

写真図版 5-7



6G 区 第2面の出土遺物



6G 区 2-3面の出土遺物 1

写真図版 5-9



6G 区 2-3面の出土遺物 2



6G 区 2 – 3面の出土遺物 3

写真図版 5 – 11



6G 区 2 – 3面の出土遺物4



6G 区 第3面全景（東から）



6G 区第3面 SX6058周辺（上が南）

写真図版 5 – 13



6G 区第3面 SX6058 (東から)



6G 区第3面 SX6058 土層 (西から)



6G 区第3面 SX6063 (南から)



6G 区第3面 SX6063 拡大 (南から)



6G 区第3面 SX6064 (北から)



6G 区第3面 SX6078 (北西から)



6G 区第3面 SX6101 種子出土状況 (南から)



6G 区第3面 SX6102 土層 (西から)



6G 区第3面 SX6100 検出状況（北から）



6G 区第3面 SX6100 土層（西から）



6G 区第3面 SX6101・6102（南から）

写真図版 5 – 15



6G 区 第3面の出土遺物 1



6G 区 第3面の出土遺物 2



6G 区 第4面全景（上が西）



6G 区 第4面拡大（上が西）



6G 区第4面 完掘状況（北から）



6G 区第4面 SD6099（南東から）



6G 区第4面 SX6087（北から）



6G 区第4面 SX6088（東から）



6G 区第4面 SX6082 土層（東から）



6G 区第4面 SX6098（北東から）



6G 区第4面 SX6095・6096（東から）



6G 区第4面 SX6096 遺物出土状況（東から）

写真図版 5 – 19



6G 区 第4面の出土遺物 1



6G 区 第4面の出土遺物 2

写真図版 6-1



9区 全景（北西から）



9区 全景（北東から）



SX9001 正面（西から）



SX9001 左側面（北から）



SX9001 右側面（南から）



SX9001 右側面～後面（南東から）



SX9001 宝蓋印塔正面（西から）



SX9001 宝蓋印塔右側面（南から）

写真図版 6－3



SX9002（北から）



SX9003（北から）



SX9004（北から）



SX9005（北から）



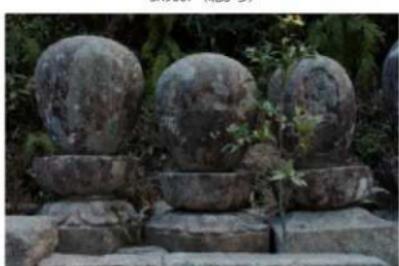
SX9006（北から）



SX9007（北から）



SX9008（北から）



SX9009（北から）



SX9010・SX9011・SX9012（北から）



SX9013（北から）



SX9014（北から）



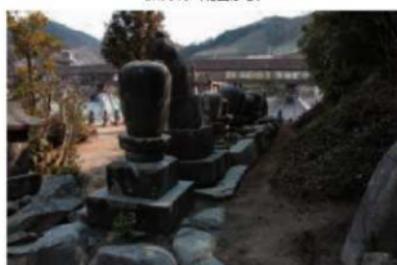
SX9015（北東から）



SX9016（北西から）



SX9002～SX9016（北西から）



SX9002～SX9016（南西から）



SX9002～SX9016（北東から）

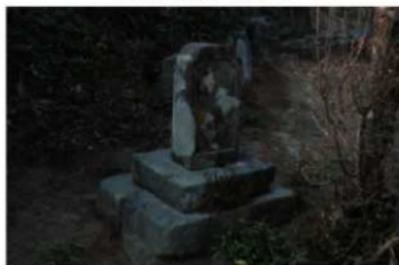
写真図版 6－5



SX9002～SX9016（南東から）



SX9017（北から）



SX9018（北東から）



SX9019 正面（北から）



SX9019 右側面（西から）



SX9020 正面（北西から）



SX9020 右側面（西から）



SX9021 正面（東から）



SX9021 右側面（北から）



SX9022（東から）



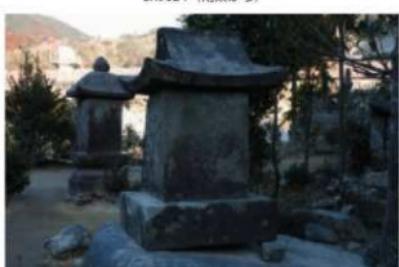
SX9023（南東から）



SX9024（南東から）



SX9025 正面（北東から）



SX9025 後面（西から）



SX9025 左側面（南から）



SX9026（北から）

写真図版 6－7



SX9027 正面（北から）



SX9027 右側面（西から）



SX9028 正面（東から）



SX9028 後面（北西から）



SX9029・SX9030（東から）



SX9031（北から）



SX9032（北から）



SX9032～SX9038（北東から）



SX9039（北から）



SX9040（南西から）



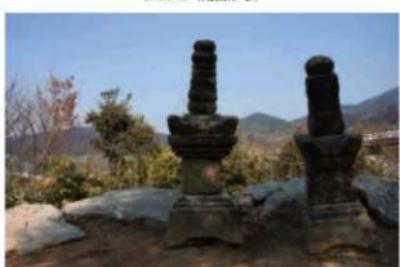
SX9041（南西から）



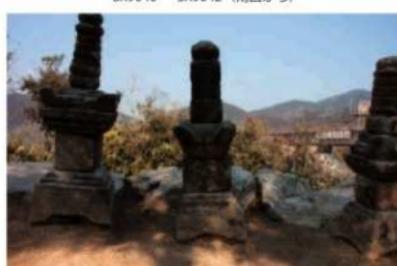
SX9042（南西から）



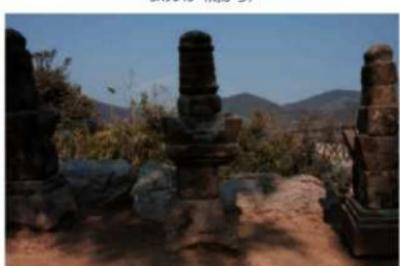
SX9040～SX9042（南西から）



SX9043（南から）



SX9044（南から）



SX9045（南から）

写真図版 6－9



SX9046（南から）



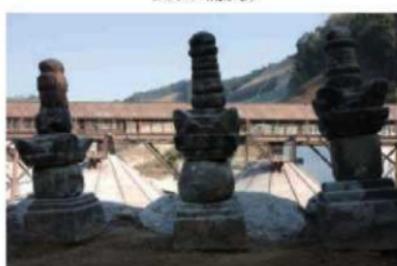
SX9047（南から）



SX9048（南から）



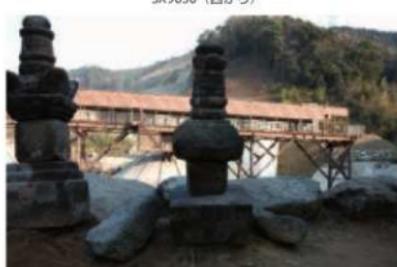
SX9049（南西から）



SX9050（西から）



SX9051（西から）



SX9052（西から）



SX9053（西から）



SX9054（西から）



SX9055（西から）



SX9056（西から）



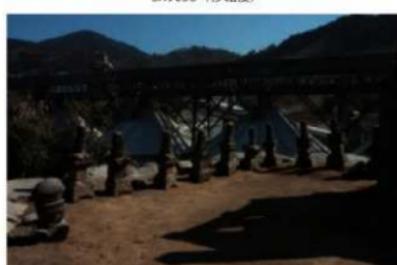
SX9057（移転後）



SX9058（移転後）



SX9059・SX9060（西から）



SX9051～SX9058（南西から）



SX9053～SX9055・SX9059・SX9060（北西から）

写真図版 6－11



石垣東面（南東から）



石垣東面（東から）



石垣東面（北から）



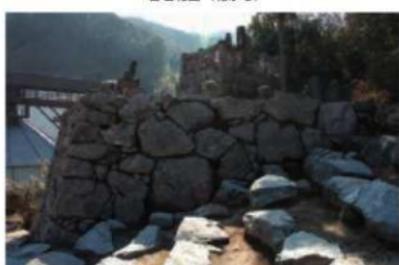
石垣北面（東から）



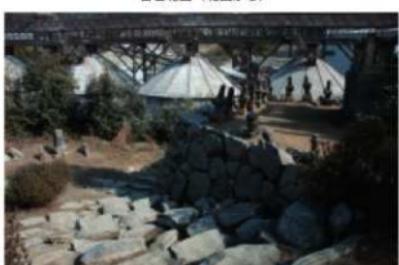
石垣北面（北から）



石垣北面（北西から）



石垣西面（北西から）



石垣西面周辺（西から）



調査区全景（西から）



調査区南西部（北から）



調査区東部（北西から）

写真図版 6 – 13



SX9001 基壇 3段目遺物出土状況（図 6-30- 2・10）（西から）



SX9001 基壇 3段目下部～4段目上部（北から）



SX9001 基壇 4段目（南から）



SX9001 基壇 4段目遺物出土状況（図 6-30-11）（東から）



SX9001 基壇 4段目遺物出土状況（図 6-30- 11）（南東から）



SX9001 基壇 4段目遺物出土状況（図 6-30-12）（南から）



SX9001 基壇 4段目遺物出土状況（図 6-30-13）（南から）



SX9001 基壇基底面遺物出土状況（図 6-30- 3）（北から）



SX9001 基底面（南から）



ST9101 貰出土状況（北から）



ST9101 錢出土状況（東から）



ST9102 捜出状況（南東から）



ST9102 貰内部（南東から）



ST9103 貰出土状況（南から）



ST9103 貰内部（東から）



ST9103 藏骨器内部（東から）

写真図版 6 – 15



ST9104 (東から)



ST9105 (東から)



ST9106 (東から)



ST9106 遺物・人骨出土状況 (北西から)



ST9106 完掘状況 (西から)



ST9107 (北から)



ST9107 遺物・人骨出土状況 (北東から)



ST9108 (南から)



ST9108 遺物・人骨出土状況（西から）



ST9108 完整状況（南から）



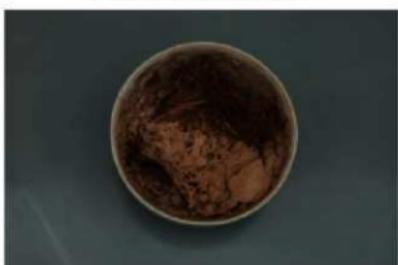
ST9109（北から）



ST9109 遺物・人骨出土状況（北から）



ST9110（北から）



ST9110 蔽骨器内部



ST9111（南から）



ST9112（南から）

写真図版 6-17



ST9112 要出土状況（南から）



ST9112 人骨出土状況（南から）



ST9114（西から）



ST9114 石蓋除去後（西から）



ST9114 人骨出土状況（西から）



ST9115（北から）



ST9115 石蓋除去後（北から）



ST9115 人骨出土状況（北から）



ST9115 完掘状況（北から）



ST9117（北から）



ST9117 遺物・人骨出土状況（北から）



ST9117 銭出土状況（北から）



ST9118（東から）



ST9118 人骨出土状況（東から）



ST9118 銭出土状況（東から）



ST9119（北から）

写真図版 6－19



ST9119 墓及び遺物出土状況（北から）



ST9121（北東から）



ST9121 人骨出土状況（東から）



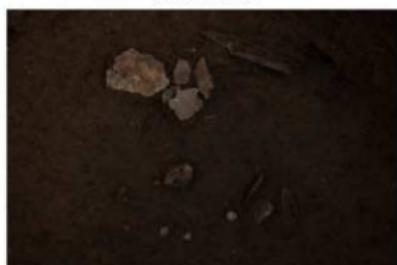
ST9122（北から）



ST9122（南から）



ST9123（北から）



ST9123 人骨出土状況（北から）



ST9124（北から）



ST9124 遺物・人骨出土状況（北から）



ST9124 遺物出土状況（東から）



ST9127 人骨出土状況（北から）



ST9130・ST9131（東から）



ST9130 人骨出土状況（北西から）



ST9131 遺物・人骨出土状況（西から）



ST9132（北東から）

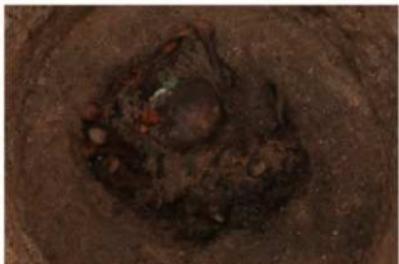


ST9134（南から）

写真図版 6－21



ST9135 (東から)



ST9136 遺物・人骨出土状況 (北西から)



ST9137 (北から)



ST9137 (北から)



ST9138 (東から)



ST9138 人骨出土状況 (東から)



ST9141 (西から)



ST9141 壺内部



ST9143 (北から)



ST9143 遺物・人骨出土状況 (西から)



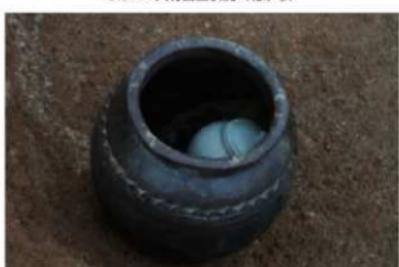
ST9144 (東から)



ST9144 人骨出土状況 (北から)



ST9145 · ST9146 出土状況 (北から)



ST9146 罐内部 (ST9147) (東から)



ST9146 罐内部 (ST9147 取上後)



ST9147 罐内部



SX9128 (西から)



SX9149 検出状況 (北東から)



SX9149 (北から)



SX9149 蔕内部



SX9149 出土遺物



SX9149 出土遺物



SX9149 出土遺物



SX9149 出土遺物 X線 CT スキャナによる断層像
(九州国立博物館提供)



1～5 トレンチ設定状況(南東から)



3～7 トレンチ設定状況(南東から)



調査状況

写真図版 6 – 25



9区遺物写真 1



9区遺物写真2

写真図版 6 – 27

61



62



63



65



64



75



66



67



68



69



70



71

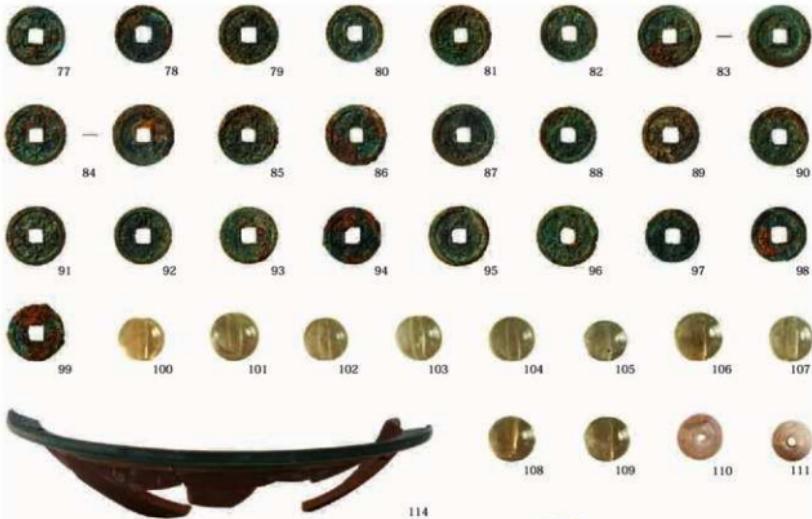


72



73

76
9区遺物写真 3



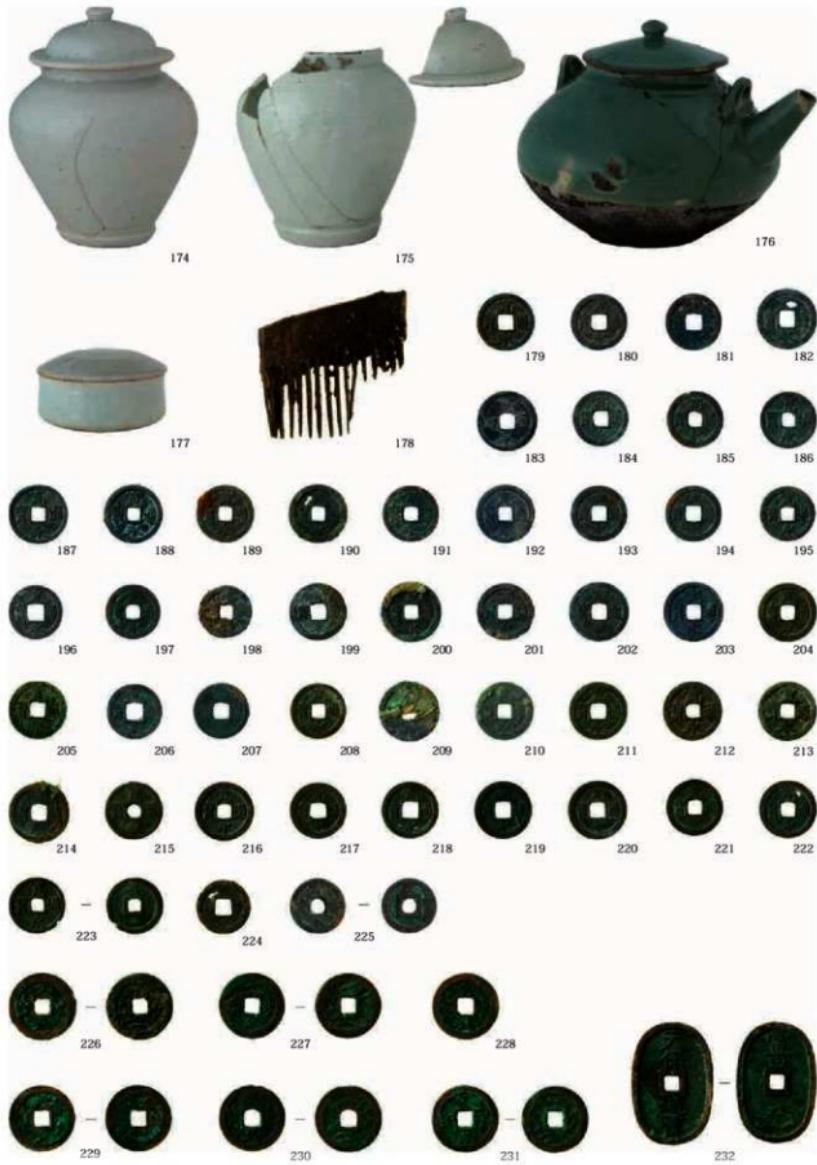
115
9区遺物写真4



写真図版 6 – 29



9区遺物写真 5



9区遺物写真 6

写真図版 6 – 31



9区遺物写真 7



9区遺物写真 8



6区 石塔調査前



6区 石塔調査後

報告書抄録

ふりがな	ひがしあたぜいせき 3						
書名	東烟瀬遺跡 3						
副書名	葛瀬川ダム建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書						
巻次	6						
シリーズ名	佐賀県文化財調査報告書						
シリーズ番号	第190集						
編著者名	浜谷裕・白木原宜・徳永貞紹・西野元勝・吉田大輔 川久保善智・澤田純明・大野憲五・竹下直美・廣康二・埴原恒彦・米田耕・内藤裕一・覺張隆史・新免歳靖						
発行機関	佐賀県教育委員会						
所在地	〒840-8570 佐賀市城内一丁目1番59号						
発行年月日	平成23(西暦2011)年3月31日						
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村 遺跡番号	北 緯 度数	東 緯 度数	調査期間	調査面積 m ²	調査原因
東烟瀬遺跡 6G・7・9区	佐賀市富士町大字閑屋	412045 0089 0091	33° 23' 31" 世界測地系 (33° 23' 43")	130° 13' 36" 世界測地系 (130° 13' 28")	20040726 ～ 20090520	19.600	葛瀬川ダム建設に 伴う事前調査
所収遺跡名	種 別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項		
東烟瀬遺跡 6G区 (宗源院跡)	寺院跡	近世	礎石建物 庭園造構 トイレ造構 石垣造構 石列 石垣	在地系土器 国産陶磁器 中国・朝鮮陶磁 青銅製品 鐵器	在地系土器 中国・朝鮮陶磁 青銅製品 鐵器	神代勝利の菩提寺 江戸時代の造構面 を4面確認	
7区	集落跡	中世 近世	掘立柱建物 棚列 土坑	在地系土器 中国・朝鮮陶磁 青銅製品 石製品 鐵質	在地系土器 中国・朝鮮陶磁 青銅製品 石製品 鐵質		
9区 (宗源院墓地)	墓地	近世 近代	近世墓 近代墓 埋納造構 石塔	在地系土器 国産陶磁 水晶製品 ガラス製品 青銅製品 鐵質 鐵製品 木製品 漆製品	在地系土器 国産陶磁 水晶製品 ガラス製品 青銅製品 鐵質 鐵製品 木製品 漆製品	小城支藩の神代家 一族の墓地 良好な近世人骨が 出土	

佐賀県文化財調査報告書第 190 集

東畠瀬遺跡 3

－唐瀬川ダム建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 6 －

平成 23 (2011) 年 3 月 31 日

発行 佐賀県教育委員会

〒 840-8570 佐賀県佐賀市城内 1 丁目 1 番 59 号

印刷 鹿島印刷株式会社

〒 849-1321 佐賀県鹿島市古桙甲 249 番地 3

